

第1章 概要

第1節 施設

第1 敷地及び建物

当がんセンターは、名古屋市千種区鹿子殿1番1号にあり、付近は住宅と公園からなる閑静な場所となっている。

敷地面積は49,788.56平方メートル、施設の建物面積は71,935.58平方メートルで、昭和63年度から平成7年度にかけて病院の全面改装工事を実施し、さらに平成9年度から着手した研究所の改装工事が平成14年1月に終了したことにより、一新した病院施設となっている。

1. 病院建物

病院建物は、病棟、特殊放射線・診療棟、国際医学交流センター・外来棟に区分され、この概要は次のとおりである。

病棟は、鉄骨鉄筋コンクリート造り地下1階地上9階建てで、地階及び1階はサービス部門及び管理部門、2階及び3階は検査部門及び管理部門、4階から9階までは病室となっている。

特殊放射線・診療棟は、鉄骨鉄筋コンクリート造り地下1階地上5階建てで、この建物は放射線診断・治療、手術及び臨床検査を主体とした部門で、地階、2階及び5階は放射線部門、4階は手術部門、3階は臨床検査部門、1階は中央滅菌材料部門となっている。

国際医学交流センター・外来棟は、鉄骨鉄筋コンクリート造り地下1階地上3階建てで、1階は400人収容のメインホール、大会議室、視聴覚室の3つの会議室とロビーからなる国際医学交流センターで、地階は薬剤部門及びカルテ・フィルム庫、2階及び

3階は外来部門となっている。

また、これらの建物の接点にアトリウム（吹き抜け空間）を設けて、安らぎの空間及び明るさの取り入れになる等の他にアトリウム内を横断する通路を設け、各部門と有機的な連携を図っている。

2. 研究所建物

研究所は、研究所棟本館、研究所棟北館、生物工学総合実験棟の3棟から構成され、その概要は次のとおりである。

研究所棟本館は、平成14年に地下1階、地上6階の建物として竣工し、疫学・予防部、中央実験室、発がん制御研究部、腫瘍ウイルス学部、腫瘍免疫学部、分子病態学部、腫瘍病理学部、分子腫瘍学部、遺伝子医療研究部の各研究室の他に、実験動物施設、RI実験施設、細胞調製施設、臨床研究室などの共同利用施設が設置されている。

研究所北館は、昭和58年に地下1階、地上3階の旧診療管理棟として竣工し、平成14年に研究所棟北館として改修工事が行われた。所長室、副所長室、疫学・予防部、研究経費管理室、図書室およびセミナー室などが設置されている。

生物工学総合実験棟は、昭和63年に竣工し、地下1階、地上3階の建物で組み換えDNA実験施設、RI実験施設、実験動物施設、中央管理室などが設置されている。

土地・建物一覽

(単位：平方メートル)

区 分	摘 要	19年度末	20年度末	21年度末
土 地		49,788.56	49,788.56	49,788.56
建 物		71,935.58	71,935.58	71,935.58
鉄骨鉄筋コンクリート造 病 棟	地下1階、地上9階、塔屋2階 (H4. 2. 29竣工)	55,253.90	55,253.90	55,253.90
特殊放射線・診療棟	地下1階、地上5階 (H3. 12. 20竣工)	12,274.96	12,274.96	12,274.96
国際医学交流センター・外来棟	地下1階、地上3階 (H5. 3. 18竣工)	7,203.43	7,203.43	7,203.43
研 究 所 棟 本 館	地下1階、地上6階 (H14. 1. 11竣工)	7,112.72	7,112.72	7,112.72
鉄 筋 コ ン ク リ ー ト 造 研 究 所 棟 北 館	地下1階、地上3階、塔屋1階 (S58.11.22竣工・H14年度改修)	16,467.60	16,467.60	16,467.60
生 物 工 学 総 合 実 験 棟	地下1階、地上3階、塔屋1階 (H63. 8. 31竣工)	3,244.43	3,244.43	3,244.43
立 体 駐 車 場	2層建 (H7. 6. 30竣工)	2,116.03	2,116.03	2,116.03
		6,526.47	6,526.47	6,526.47

区 分	摘 要	19年度末	20年度末	21年度末
危 険 物 倉 庫	地上1階	50.20	50.20	50.20
看 護 師 宿 舎	地上4階、塔屋1階、2棟	3,352.33	3,352.33	3,352.33
職 員 公 舎	地上3階、2棟	712.56	712.56	712.56
車 庫 ・ 保 安 公 舎	地上3階	313.92	313.92	313.92
ご み 集 積 場 棟	地上1階	101.99	101.99	101.99
そ の 他 建 物	保管庫	47.67	47.67	47.67
コ ン ク リ ー ト ブ ロ ッ ク 造	自転車置場（看護師宿舎）	24.00	24.00	24.00
軽 量 鉄 骨 造		190.08	190.08	190.08
作 業 事 務 所	地上2階	129.60	129.60	129.60
そ の 他 建 物	物置（職員公舎）等	60.48	60.48	60.48

第2 医療情報トータルシステム (ACCTIS)

このシステムはACCTIS (Aichi Cancer Center Total Information System) と称し、患者サービスの向上ならびに医療業務の合理化・省力化、医療の質的向上、研究・教育の支援等をめざして導入された。

平成4年の病棟の全面改築にあたり、大型コンピュータによるオーダーリングシステム、医事会計システムを中心とした電算システムの導入が計画され、病棟、外来棟の完成に合わせ順次導入された。

平成14年度の機器更新では、今までの大型コンピュータを核としたホスト/パソコン連携方式から、各部門が独自にシステムを持った分散型コンピュータシステムであるクライアント/サーバ方式に変更し、平成22年2月の機器更新を経て現在

まで稼働している。

クライアント/サーバ方式に変更後は、オーダーリングシステムと医事会計部門等の部門別システム (17システム) から構成されている。

オーダーリングシステムは、診療現場で発生する情報を診療現場で捉え、必要とする部門に伝達する。また、各部門別システムは、送られてきた情報をそれぞれの部門で蓄積、加工、利用すると同時に要求される情報 (検査結果等) を他部門に伝達する。

また、蓄積したデータ (診療情報データベース) は、患者の診療及び臨床研究に利用する。

主 な 機 器 構 成

(平成21年度末現在)

システム名	サーバ機種	台数	クライアント機種	延べ台数
オーダーリングシステム (本系)	RX300	1	D5280	281
〃 (中間)	RX300	1	E8280	125
〃 (テスト系)	RX100	1		
医事システム (本系)	RX300	1	D5280	43
〃 (プリンタサーバー)	RX100	2	E8280	1
物流システム	RX300	1	D5280	281
			E8280	125
検体検査システム (オーダ)	TX300	1	D5280	29
〃 (分析器)	RX200	1		
〃 (連携)	RX200	1		
放射線システム	RX300	1	D5280	30
〃 (連携)	RX300	1	E8280	11
病理システム	TX300	1	E8280	5
院内がん登録システム	TX200 S3	1	D5280	6
			E8280	2
給食システム	RX300	1	D5280	3
看護勤務管理システム	RX300	1	D5280	16
経営支援システム	TX300	1	D5280	3
			E8280	2
診療支援システム (データベース)	RX300	1	D5280	281
〃 (WEB系)	RX200	1	E8280	125
手術システム	TX200	1	D5280	7
			E8280	9
人事給与/服薬指導システム	RX300	1	D5280	5
病歴管理システム	RX300	1	D5280	64
			E8280	16
病診連携システム	RX300	1	D5280	1
表示システム (本系)	RX100	1	D5280	45
〃 (テスト系)	RX100	1	E8280	7
EFSシステム	TX200	1		
POSレジシステム	TX150	1		
			再来受付器	3
			POSレジ	2
			自動精算器	2
			オートエンボッサ	1
	合 計	27	合計 延べ台数 (実台数)	1016 (406)

第3 病床数

病床数500のうち、一般病床は4～8個あり1床室35、2床室2、4床室87、合計387床で、各病床はそれぞれカーテンで区切ることができる。

また、4、5、7、8、9階に特別病床（個室）86床を設け、この利用者からは室料差額を徴収している。このほかに特殊病床27床がある。

科 別 病 床

（平成21年度末現在）

西 病 棟				階	東 病 棟			
特別病床（混合）	25床	1床室	25室	9階	特別病床（混合）	25床	1床室	25室
A室	5				A室	5		
B室	2				B室	2		
C室	18				C室	18		
一般病床	49床	1床室	6室	8階	特別病床（混合）	30床	1床室	30室
泌尿器科		4床室	11室		B室	2		
放射線診断科					C室	28		
放射線治療科								
特別病床	1床							
D室	1							
一般病床	50床	1床室	6室	7階	一般病床	48床	1床室	6室
消化器内科		4床室	11室		消化器内科		4床室	11室
消化器外科					消化器外科			
					特別病床	2床		
					D室	2		
一般病床	48床	1床室	5室	6階	一般病床	49床	1床室	6室
血液・細胞療法科		4床室	11室		呼吸器内科		4床室	11室
薬物療法科					整形外科			
特殊病床	1床				特殊病床	1床		
バイオクリーン	1				感染	1		
一般病床	49床	1床室	6室	5階	一般病床	46床	1床室	10室
婦人科		4床室	11室		頭頸部外科		2床室	2室
乳腺科					放射線治療科		4床室	9室
放射線治療科					特殊病床	4床		
特別病床	1床				小線源	4		
D室	1							
一般病床	50床	1床室	6室	4階	特殊病床	21床	1床室	17室
胸部外科		4床室	11室		ICU	4	4床室	1室
呼吸器内科					HCU	15		
乳腺科					人工透析	1		
特別病床	2床				セミクリーン	1		
D室	2							
合計		特別病床	86床	1床室	148室			
		一般病床	387床	2床室	2室			
		特殊病床	27床	4床室	87室			
		計	500床	計	237室			

第4 備品・設備

平成21年度末における備品総額は、10,723,924,694円で、その主なものは次表のとおりである。

なお平成21年度には、放射線管理総合システム、FPD搭載C

ームX線テレビシステム、手術用顕微鏡などを整備した。

主な備品・設備一覧（1,000万円以上）

（平成21年度末現在）

品名	型	式	数量	備考
（病院関係）				
ハイパーサミア装置高周波発振器	山本ビニター	サーモトロン	1	放射線治療
遠隔操作式腔内治療装置	ニュークレトロン	マイクロセレクトロンHDRシステム	1	放射線治療
放射線治療位置決め装置	日本電気	特型	1	放射線治療
核磁気共鳴断層撮影装置	GEメディカルシステム	Signa HDxt 3.0T	1	放射線治療
放射線治療管理装置	日本電気	ACCR0S	1	放射線治療
小線源ニードルクリーンユニット	千代田テクノ	TH - 1400TM - 2	1	放射線治療
線源確認写真撮影装置	島津製作所	CH - 50(特)	1	放射線治療
リニアアクセラレーター	バリアンメディカルシステムズ	CLINAC2100Cトク	1	放射線治療
医療用リニアック	バリアンメディカルシステムズ	CLINAC - 21EX	1	放射線治療
前立腺がん密封小線源治療支援システム	バリアンメディカルシステムズ	VariSeed	1	放射線治療
医療用リニアアクセラレータ	トモセラピー	H I - ARTシステム	1	放射線治療
放射線治療位置決め装置	東芝メディカルシステムズ	LX - 40A	1	放射線治療
小線源確認写真撮影装置	島津製作所	Cvision PLUS	1	放射線治療
診断用X線装置	東芝メディカルシステムズ	KXO85	1	放射線診断
乳がん検診用画像処理装置	日本アビオニクス	MDR - 2	1	放射線診断
乳房X線撮影装置	GEメディカルシステム	セノグラフ2000D	1	放射線診断
コンピュータ画像読取記録装置	富士写真フィルム	FCR - 7000	1	放射線診断
超音波診断装置	日立メディコ	EUB - 8500(e - com)	1	放射線診断
X線撮影装置	東芝メディカルシステムズ	KXO - 80F	2	放射線診断
X線TV装置	東芝メディカルシステムズ	DBW - 220Aガタ	2	放射線診断
FPD搭載CームX線テレビシステム	東芝メディカルシステム	ULTIMAX-I	1	放射線診断
放射線管理総合システム	アロカ	MSR - 3000	1	放射線診断
全身用X線コンピューター断層撮影装置	東芝メディカルシステムズ	Aquilion Multi	1	放射線診断
血管連続撮影装置	東芝メディカルシステムズ	アンギシステム	1	放射線診断
コンピュータ画像読取記録装置	富士写真フィルム	FCR7000システム	1	放射線診断
乳房X線撮影装置	GEメディカルシステム	セノグラフMDR	1	放射線診断
フィルム保管棚	文祥堂	BSDエレコンパック	1	放射線診断
医用画像データ管理システム	富士写真フィルム	特型	1	放射線診断
デジタル画像処理装置	東芝メディカルシステムズ	DFP-2000A/AS	1	放射線診断
IVRアンギオシステム	東芝メディカルシステムズ	CAS-8000V	1	放射線診断
ガンマカメラ	GE横河メディカル	MillenniumVG	1	放射線診断
デジタル超音波診断装置	東芝メディカル	APLI0	1	放射線診断
全身用X線コンピューター断層撮影装置	東芝メディカルシステムズ	Aquilion32	1	放射線診断
血管造影検査治療システム	東芝メディカルシステムズ	AquilionLB/INFX-8000C	1	放射線診断
乳房組織診断装置	日立メディコ	マルチケアプラチナ	1	放射線診断
心音計ボリグラフシステム	フクダ電子	MIC9400	1	臨床検査
細筋自動解析分離装置	日本ベクトン・ディッキンソン	FACSTAR	1	臨床検査
自動免疫化学分析装置	デイド ベーリング	ネフェロメーター	1	臨床検査
自動分析装置	日ハイテクノロジーズ	7350ガタ	1	臨床検査
プレバート保存用移動棚	イトーキ	EMAガタイドウダナ	1	臨床検査
臓器保存用移動棚	イトーキ	RPGガタイドウダナ	1	臨床検査

品名	型	式	数量	備考
自動細菌検査装置	日本ビオメリュー	ATBソシステム	1	臨床検査
自動細胞解析分離装置	日本ベクトン・ディッキンソン	FACS Callbur	1	臨床検査
生化学自動分析装置	日立メディコ	7170S	1	臨床検査
マイクロダイセクションシステム	カールツァイス	PALM	1	臨床検査
遺伝子解析装置	アプライドバイオシステムズジャパン	7900HT-II	1	臨床検査
血液成分分離装置	フレゼニウス	AS. TEC204	1	臨床検査
細胞自動解析装置	ベクトン・ディッキンソン	FACS Canto II	1	臨床検査
バーチャル顕微鏡システム	日本Aperio	バーチャルスコوپシステム	1	臨床検査
超音波メス	パリーラブ	CUSA Excel	1	手術
術中超音波診断装置	東芝メディカルシステムズ	SSA-260A	1	手術
内視鏡下外科手術セット	スミス・アンド・ネフュー	特型	1	手術
多目的ポリグラフ	日本光電	RMC-1200	1	手術
手術室内 I T V システム	ソニー	特型	1	手術
集中患者監視システム	日本コーリン	CBM-3000CN特型	1	手術
手術画像記録システム	ナックイメージテクノロジー	特型	1	手術
手術用顕微鏡	カールツァイス	OPMI-NEURO	1	手術
手術用顕微鏡	カールツァイスメディック	OPMI Pentero	1	手術
超音波診断装置	アロカ	SSD-2000	2	診療
超音波診断装置	アロカ	SSD-270	1	診療
アルゴン色素レーザー装置	日本レーザー	クーバーレーザーソニック	1	診療
超音波内視鏡システム	オリンパス光学工業	EU-M20	1	診療
消化器及び呼吸器用 X線 TV	東芝メディカルシステムズ	DBW - 220A, PDS-5	1	診療
超音波ガストロスコープ	オリンパス光学工業	GF-UM2, EU-M2	1	診療
高輝度光源装置	オリンパス光学工業	特型	1	診療
アルゴンダイレーザー光凝固装置	エースクラップメディテック	MDS10	1	診療
酸化エチレンガス滅菌装置	サクラ精機	Σ I ER-B09W	1	診療
酸化エチレンガス滅菌装置	サクラ精機	Σ I ER-009W	1	診療
プラズマ滅菌器	ジョンソン・エンド・ジョンソン	ステラッド200X	1	診療
純粋製造装置	サクラ精機	SM-6RO	1	診療
高圧蒸気滅菌装置	サクラ精機	Σ II R-G12W	2	診療
高圧蒸気滅菌装置	サクラ精機	Σ III R-G12W	3	診療
高圧蒸気滅菌装置	サクラ精機	Σ III R-B09W	1	診療
自動カート洗浄装置	サクラ精機	CWR-2500W	1	診療
全自動ホルマシン滅菌装置	ドレーゲル	アゼプター8800ダイ1ドア	1	診療
ビデオシステム	ソニー	特型	1	診療
クラス100滅菌病室設備	東洋熱工業	LI-30	1	診療
クラス100滅菌病室設備システム	東洋熱工業	MIU-201	1	診療
オートスパイロメーター	ミナト医科学	システム9特型	1	診療
電子セクタ式超音波診断装置	横河メディカルシステム	77030A	1	診療
心電図自動解析装置	フクダ電子	FCP-800	1	診療
負荷心電図装置	フクダ電子	ML-8000	1	診療
モニタリングシステム	横河メディカルシステム	M1166A	1	診療
生体情報モニタリングシステム	フィリップスエレクトロニクスジャパン	MP50	1	診療
全自動錠剤分包機	トーショー	M-TOPRA-168-PC	1	診療
ラックン M G S システム	三田理化学工業	RDPA50F200-B100H	1	診療
薬剤保管払出用自動棚	セントラルユニ	VF-AAD	1	診療
レーザーメス装置	エスエルティジャパン	CL-50	1	診療
薬袋印字システム	トーショー	TYS-4BX2特型	1	診療
超音波内視鏡ビデオシステム	オリンパス光学工業	EU-M30	1	診療
超音波洗浄装置	フーメッド	ハイブリッド・ダブルドアー	1	診療
純水製造装置	日本ウォーターシステム	MC-4000C	1	診療

品名	型	式	数量	備考
内視鏡ビデオシステム	オリンパス光学工業	EVIS-240	1	診療
自動輸血検査システム	ダイアグノスティック	Auto Vue System	1	診療
医局システム机	イトーキ	特型	1	診療
内視鏡業務支援システム	オリンパス	Solemio ENDO Ver.3	1	診療
超音波診断装置(乳腺科)	ジーイー横河メディカルシステム	Voluson 730 Expert	1	診療
超音波内視鏡ビデオシステム	アロカ	SSD-ALPHA10	1	診療
カルテ保管庫	日本ファイリング	カルテ管理システム	1	管理
エコロラインシステム	ホバート	F5-1244UC	1	管理
医療廃棄物専用焼却炉	インシナー	HOS-5000G	1	管理
EOG殺菌乾燥燻蒸装置	日本リメイク	C X-3特型	1	管理
エレコンバック電動式移動柵	文祥堂	A4-5特型	1	管理
電話交換機	日立製作所	C X-90000-M1	1	管理
(研究所関係)				
がん研究情報解析システム	日本電気	Express5800/140Rb	1	
大会議室映像・光学・同時通訳システム	日本電気	特型	1	
視聴覚室・光学システム	日本電気	特型	1	
がん診療ネットワークシステム	インテック	特型	1	
超遠心機	ベックマンコールター	L8-70M	1	
超遠心機	日立工機	70P-72	2	
DNAシーケンサ	アプライドバイオシステムズジャパン	PRISM3100	1	
イメージングアナライザ	富士写真フイルム	BAS-2500Mac	1	
フローサイトメーター	日本ベクトン・ディッキンソン	FACS Calibur HG	1	
プロテイン・シーケンサー	アプライドバイオシステムズジャパン	473A	1	
超遠心機	ベックマンコールター	OptimaXL-90	1	
レーザー蛍光顕微鏡	オリンパス光学工業	GB200X-SP	1	
高圧蒸気滅菌装置	サクラ精機	FLC-009W	1	
高圧蒸気滅菌装置	サクラ精機	FRC-Y15A	1	
動物排水処理システム	壽化工機	SB10500	1	
顕微鏡画像解析装置	オリンパス光学工業	LSM-GB200	1	
純水製造システム	日本ミリポア	ミリRX45/ミリQ	1	
中央実験台等	イトーキ	特型	1	
RI管理システム	アロカ	特型	1	
動物飼育設備	ダイダン	特型	1	
共焦点顕微鏡	バイオラド	Radiance 2100/K2	1	
蛍光イメージアナライザ	アマシャム・ファルマシア	Fluorimager595	1	
細胞調整システム	日本エアテック	プレハブ式特型	1	
X線照射調整システム	日立メディコ	MBR-1520R3	1	
フローサイトメーター	日本ベクトン・ディッキンソン	FACS Calibur HG 4カラー	1	
生体分子間相互作用解析装置	ピアコア	Blacore X システム	1	
共焦点レーザー顕微鏡	カールツァイス	LSM510MATE-ACC	1	
X線照射装置	日立メディコ	日立メディコ・MBR-1520R3	1	
高速遺伝子多型解析装置	アプライドバイオシステムズジャパン	3130XI-Z30 ジェネティックアナライザ	1	

主 な 付 属 設 備

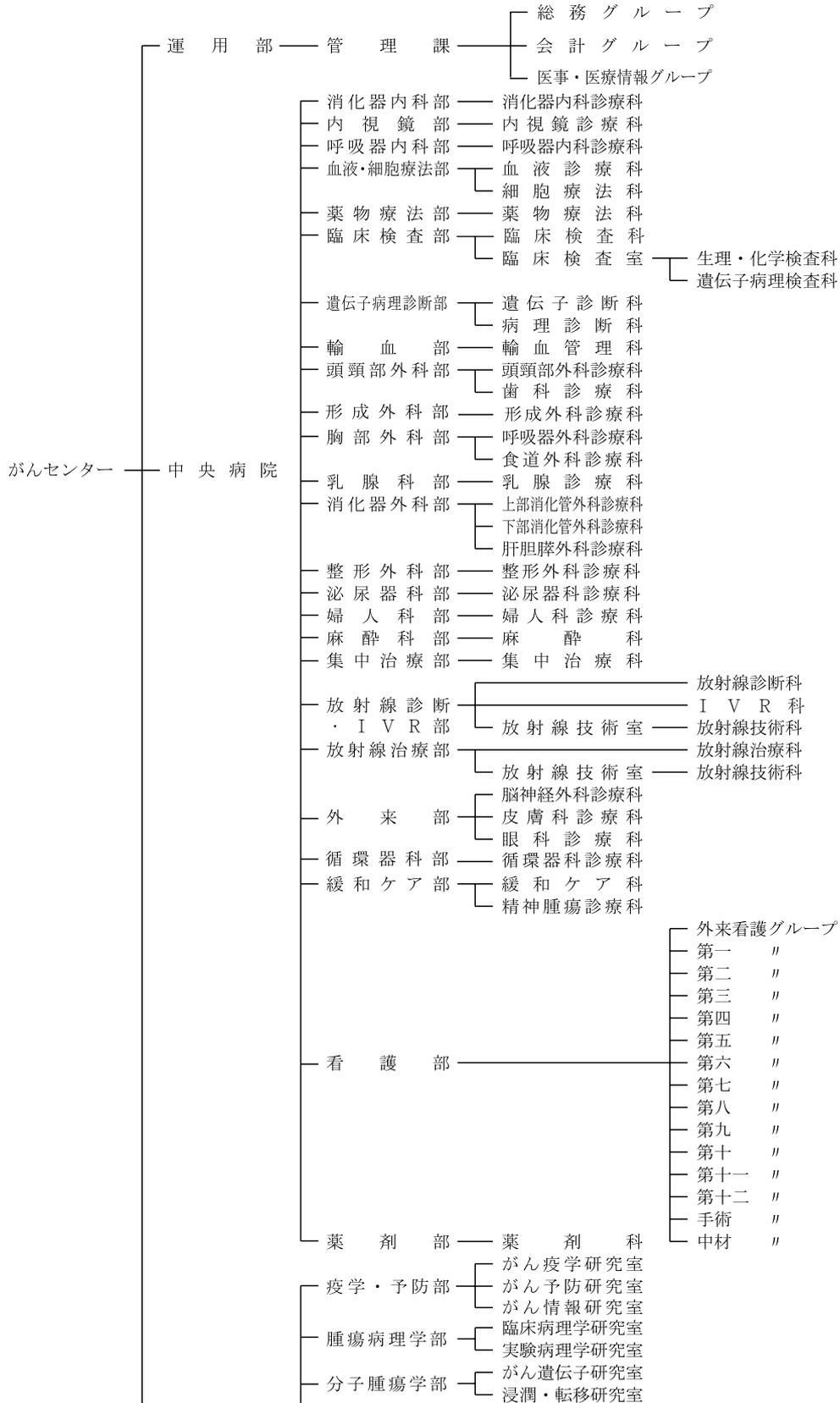
(平成21年度末現在)

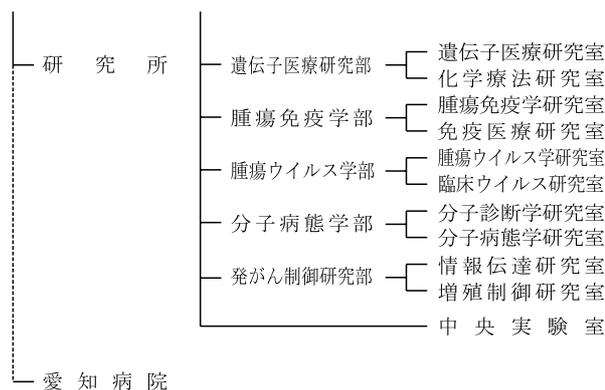
設 備 名	設 備 機 械	数 量	備 考
空 気 換 気 設 備	タ ー ボ 冷 凍 機	2	450冷凍トン
	"	1	高効率450冷凍トン
	二 重 効 用 吸 収 式 冷 凍 機	1	450冷凍トン
	ヒ ー ト ポ ン プ チ ラ ー	3	43.8冷凍トン
	パ ッ ケ ー ジ	12	
	ガ ス 焚 吸 収 式 冷 温 水 発 生 機	2	60冷凍トン
	直 焚 式 冷 温 水 発 生 機	3	200冷凍トン
	冷 却 塔	10	
	炉 筒 煙 管 ポ イ ラ ー	2	6,000kg/h
	小 型 貫 流 ポ イ ラ ー	3	2,000kg/h
	空 気 調 和 機	116	
	給 排 風 機	203	
	医 療 ガ ス 設 備	液 体 酸 素 貯 蔵 タ ン ク	1
真 空 ポ ン プ (吸 引 用)		4	3.7KW
液 体 窒 素 貯 蔵 タ ン ク		1	
純 生 空 気 用 混 合 器		1	
電 気 設 備	特 高 変 電 室	1	受電用変圧器 2台
	変 電 室	6	変圧器 47台
	発 電 機	1	ガスタービン 6.6KV 2000KVA
	"	1	コージネレーションガスエンジン 6.6KV 610KW
	"	1	ディーゼル 200V 305KVA
	"	1	ガスタービン 200V 500KVA
	発 電 シ ス テ ム 装 置	1	小水力 9KW
	電 話 交 換 機	1	内線 2,000回線
	昇 降 機	20	エレベーター18台、 エスカレーター2台
井 戸 設 備	地 下 水 膜 ろ 過 装 置	1	300トン

第2節 組織

第1 組織

運用部、病院及び研究所の3部門からなり、平成21年度における組織は次のとおりである。





第2 人事

平成21年度における主な役職名は次のとおりである。

主な役職者一覧

(平成22年3月31日現在)

役職名	氏名	備考	役職名	氏名	備考
総長	二村 雄次	(事務取扱)病院事業庁長	整形外科部長	杉浦 英志	
(運用部)			泌尿器科部長	林 宣男	
運用部長	中村 和重		婦人科部長	中西 透	
管理課長	安藤 正嗣		麻酔科部長	細田 蓮子	
(病院)			集中治療部長	波戸岡 俊三	
院長	篠田 雅幸		放射線診断・IVR部長	稲葉 吉隆	
副院長	森島 泰雄		放射線治療部長	古平 毅	
"	光富 徹哉		外来部長	堀尾 芳嗣	
"	兵藤 千草		循環器科部長	波多野 潔	
消化器内科部長	山雄 健次		緩和ケア部長	細田 蓮子	麻酔科部長(兼)
内視鏡部長	丹羽 康正		看護部長	兵藤 千草	副院長(兼)
呼吸器内科部長	樋田 豊明		薬剤部長	大石 和明	
血液・細胞療法部長	森島 泰雄	副院長(兼)	(研究所)		
薬物療法部長	室 圭		研究所長	田島 和雄	
臨床検査部長	谷田部 恭	遺伝子病理診断部長(兼)	副所長	瀬戸 加大	
遺伝子病理診断部長	谷田部 恭		疫学・予防部長	田中英夫	
輸血部長	森島 泰雄	副院長(兼)	腫瘍病理学部長	近藤 英作	
頭頸部外科部長	長谷川 泰久		分子腫瘍学部長	関戸 好孝	
胸部外科部長	光富 徹哉	副院長(兼)	遺伝子医療研究部長	瀬戸 加大	副所長(兼)
乳腺科部長	岩田 広治		腫瘍免疫学部長	葛島 清隆	
消化器外科部長	平井 孝		腫瘍ウイルス学部長	鶴見 達也	
			分子病態学部長	神奈木 玲児	
			発がん制御研究部長	稲垣 昌樹	

職員の年度別定員数及び現員数の変遷は次のとおりである。

職種別職員定員数

職 種	部 門 年 度	総 数			運 用 部			病 院			研 究 所		
		19	20	21	19	20	21	19	20	21	19	20	21
総 数		571	586	643	51	51	50	466	483	542	54	52	51
事 務		25	26	26	25	26	26	-	-	-	-	-	-
M S W		1	1	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-
医 師		97	97	100	1	1	1	66	66	69	30	30	30
研 究 員		12	12	12	-	-	-	-	-	-	12	12	12
診 療 放 射 線 技 師		21	22	22	-	-	-	21	22	22	-	-	-
薬 劑 師		14	13	14	1	-	-	13	13	14	-	-	-
検 査 技 師		28	29	29	-	-	-	28	29	29	-	-	-
理 学 療 法 士		-	-	2	-	-	-	-	-	2	-	-	-
看 護 師		327	343	397	-	-	-	327	343	397	-	-	-
看 護 助 手		11	10	9	-	-	-	11	10	9	-	-	-
給 食 関 係 職 員		19	20	19	19	20	19	-	-	-	-	-	-
病 歴 士		1	1	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-
保 安 関 係 職 員		3	2	2	3	2	2	-	-	-	-	-	-
研 究 助 手		12	10	9	-	-	-	-	-	-	12	10	9

職員現員数

(各年度3月31日現在)

区 分	19 年 度	20 年 度	21 年 度
総 数	563	582	610
指 定 職	1	0	0
行 政 職 (一)	59	55	52
医 療 職 (一)	72	75	74
医 療 職 (二)	65	67	69
医 療 職 (三)	317	335	371
研 究 職	49	50	44

第2章 管理業務

第1節 会計業務

第1 決算の概況

平成21年度の事業収益は148億9,959万円で、前年度(142億2,322万円)に比べ、6億7,637万円(4.8%)増加し、事業費用は143億4,831万円で、前年度(140億1,029万円)に比べ、3億3,802万円(2.4%)増加となっている。

平成21年度は5億5,128万円の利益が発生したが、前年度の純

利益(2億1,293万円)に比べ、3億3,835万円(258.9%)の増加となっている。

平成21年度末現在の累積欠損金は97億7,784万円で、前年度末(103億2,912万円)に比べ、5.3%の減少となっている。

損益計算書

科 目	平成19年度	平成20年度	平成21年度		
	金 額	金 額	金 額	前年度比	対前年度増減額
	円	円	円	%	円
事業収益	13,800,333,915	14,223,220,382	14,899,594,521	104.8	676,374,139
医業収益	12,236,610,523	12,665,131,090	13,422,350,973	106.0	757,219,883
うち一般会計負担金	1,336,461,000	1,306,908,000	1,230,942,000	94.2	△ 75,966,000
医業外収益	1,563,723,392	1,558,089,292	1,477,243,548	94.8	△ 80,845,744
うち一般会計負担金	1,356,896,000	1,372,826,000	1,291,682,000	94.1	△ 81,144,000
一般会計補助金	0	0	0	—	0
特別利益	0	0	0	—	0
事業費用	13,725,409,459	14,010,290,704	14,348,314,461	102.4	338,023,757
医業費用	13,073,080,998	13,363,272,357	13,767,121,694	103.0	403,849,337
医業外費用	652,328,461	647,018,347	581,192,767	89.8	△ 65,825,580
特別損失	0	0	0	—	0
当年度純利益(△純損失)	74,924,456	212,929,678	551,280,060	258.9	338,350,382

貸借対照表

科 目	平成19年度末	平成20年度末	平成21年度末		
	金 額	金 額	金 額	前年度比	対前年度増減額
	円	円	円	%	円
資産の部					
固定資産	16,989,802,652	16,552,875,420	16,098,600,005	97.3	△ 454,275,415
流動資産	3,886,127,128	3,462,382,416	2,975,099,337	85.9	△ 487,283,079
繰延勘定	257,118,978	231,793,849	216,813,273	93.5	△ 14,980,576
資産合計	21,133,048,758	20,247,051,685	19,290,512,615	95.3	△ 956,539,070
負債の部					
固定負債	0	0	0	—	0
流動負債	1,465,279,720	1,541,275,330	1,226,237,093	79.6	△ 315,038,237
負債合計	1,465,279,720	1,541,275,330	1,226,237,093	79.6	△ 315,038,237
資本の部					
資本金	30,784,200,675	30,572,584,958	30,350,729,106	99.3	△ 221,855,852
剰余金	7,325,616,494	7,662,309,850	7,841,384,809	102.3	179,074,959
欠損金	△ 10,542,048,131	△ 10,329,118,453	△ 9,777,838,393	94.7	551,280,060
病院間調整勘定	△ 7,900,000,000	△ 9,200,000,000	△ 10,350,000,000	112.5	△ 1,150,000,000
資本合計	19,667,769,038	18,705,776,355	18,064,275,522	96.6	△ 641,500,833
負債資本合計	21,133,048,758	20,247,051,685	19,290,512,615	95.3	△ 956,539,070

第2 資本的収入・支出の概況

平成21年度の資本的収入は33億7,680万円であり、前年度(19億9,888万円)に比較して13億7,792万円の増加となっている。

また、資本的支出は37億9,322万円であり、前年度(22億6,565万円)に比較して15億2,757万円の増加となっている。

資本的収入及び支出

科 目	平成19年度		平成20年度		平成21年度		
	金 額	比率	金 額	比率	金 額	比率	対前年度増減額
	円	%	円	%	円	%	円
資 本 的 収 入	830,388,320	100.0	1,998,880,000	100.0	3,376,795,144	100.0	1,377,915,144
企 業 債	525,400,000	63.3	1,689,700,000	84.5	3,174,410,000	94.0	1,484,710,000
他 会 計 負 担 金	302,974,000	36.5	307,626,000	15.4	197,915,000	5.9	△ 109,711,000
国 庫 支 出 金	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0
雑 収 入	2,014,320	0.2	1,554,000	0.1	4,470,144	0.1	2,916,144
資 本 的 支 出	1,148,619,357	100.0	2,265,652,455	100.0	3,793,220,095	100.0	1,527,567,640
建 設 改 良 費	10,342,500	0.9	2,310,000	0.1	6,300,000	0.2	3,990,000
資 産 購 入 費	465,882,123	40.6	362,026,738	16.0	390,654,243	10.3	28,627,505
企 業 債 償 還 金	672,394,734	58.5	1,901,315,717	83.9	3,396,265,852	89.5	1,494,950,135

第3 事業収益の概況

事業収益は、医業収益と医業外収益に分けられる。

度103.5、平成21年度109.7となっている。

医業収益の推移は、平成19年度を100とした場合、平成20年

医業外収益のほとんどは一般会計負担金である。

医 業 収 益

科 目	平成19年度			平成20年度			平成21年度		
	金 額	割合	指数	金 額	割合	指数	金 額	割合	指数
	円	%		円	%		円	%	
医 業 収 益	12,236,610,523	100.0	100.0	12,665,131,090	100.0	103.5	13,422,350,973	100.0	109.7
入 院 収 益	6,600,104,992	53.9	100.0	6,666,217,139	52.6	101.0	7,138,036,494	53.2	108.2
外 来 収 益	3,487,354,017	28.5	100.0	3,840,227,744	30.3	110.1	4,205,726,461	31.3	120.6
一 般 会 計 負 担 金	1,336,461,000	10.9	100.0	1,306,908,000	10.3	97.8	1,230,942,000	9.2	92.1
そ の 他 医 業 収 益	812,690,514	6.6	100.0	851,778,207	6.7	104.8	847,646,018	6.3	104.3

(注)「割合」当該年度の医業収益に対する割合。

「指数」収益ごとに平成19年度の金額を100とした割合の値。

診療報酬額診療行為別割合

区 分	外 来 患 者			入 院 患 者		
	19年度	20年度	21年度	19年度	20年度	21年度
総 数	% 1000.0	% 1000.0	% 1000.0	% 1000.0	% 1000.0	% 1000.0
基 本 診 療 科	36.4	32.3	45.5	441.9	202.8	207.5
投 薬 料	43.1	62.0	75.4	22.5	27.1	32.9
注 射 料	417.9	432.2	403.5	167.9	123.9	151.3
検 査 料	179.6	168.3	170.8	47.6	28.7	34.2
画 像 診 断 料	226.6	216.6	225.2	64.5	88.1	95.9
処 置 及 び 手 術 麻 酔 料	10.8	9.1	6.8	217.4	456.0	403.0
理 学 療 法 料	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.2
そ の 他	85.6	79.6	72.8	69.0	11.8	11.6
食 事 療 養 費				31.2	61.5	63.4

(注) 輸血料は注射料に含む。

第 4 事業費用の概況

事業費用は、医業費用と医業外費用に分けられる。

事業費用のほとんどは医業費用であり、その大部分は給与費

及び材料費である。医業費用の推移は、平成19年度を100とした平成20年度102.2、平成21年度105.3となっている。

医 業 費 用

科 目	平成19年度			平成20年度			平成21年度		
	金 額	割合	指数	金 額	割合	指数	金 額	割合	指数
医 業 費 用	円	%		円	%		円	%	
給 与 費	13,073,080,998	100.0	100.0	13,363,272,357	100.0	102.2	13,767,121,694	100.0	105.3
材 料 費	6,158,946,881	47.1	100.0	6,359,683,355	47.6	103.3	6,570,233,576	47.7	106.7
経 費	4,031,291,159	30.8	100.0	4,280,889,035	32.0	106.2	4,537,446,616	33.0	112.6
減 価 償 却 費	1,490,892,072	11.4	100.0	1,560,769,406	11.7	104.7	1,525,902,564	11.1	102.3
資 産 減 耗 費	1,057,296,647	8.1	100.0	800,000,513	6.0	75.7	802,613,043	5.8	75.9
研 究 研 修 費	36,983,385	0.3	100.0	10,197,753	0.1	27.6	6,616,711	0.0	17.9
	297,670,854	2.3	100.0	351,732,295	2.6	118.2	324,309,184	2.4	108.9

(注) 「割合」当該年度の医業収益に対する割合。

「指数」収益ごとに平成19年度の金額を100とした割合の値。

第5 経営分析

総収支比率は103.8%で、前年度（101.5%）に比べ2.3ポイント高くなっている。

また、医業収支比率は97.5%で前年度（94.8%）に比べ2.7ポイント高くなっている。

財 務 分 析 表

区 分		計 算 式	19年度	20年度	21年度
資 産 及 び 資 本 構 成 比 率	固定資産構成比率(%)	$\frac{\text{固定資産}}{\text{総資産}} \times 100$	80.4	81.8	83.5
	固定負債構成比率(%)	$\frac{\text{固定負債} + \text{借入資本金}}{\text{負債資本合計}} \times 100$	30.8	31.1	31.4
	自己資本構成比率(%)	$\frac{\text{自己資本} (= \text{自己資本金} + \text{剰余金} - \text{欠損金})}{\text{総資本} (= \text{負債} + \text{資本})} \times 100$	99.7	106.8	115.8
	固定資産対長期資本比率(%)	$\frac{\text{固定資産}}{\text{資本合計} + \text{固定負債}} \times 100$	86.4	88.5	89.1
	固定比率(%)	$\frac{\text{固定資産}}{\text{自己資本}} \times 100$	80.6	76.6	72.0
	流動比率(%)	$\frac{\text{流動資産}}{\text{流動負債}} \times 100$	265.2	224.6	242.6
回 転 率	自己資本回転率(回)	$\frac{\text{医業収益}}{(\text{期首自己資本} + \text{期末自己資本}) \times 1 / 2}$	0.59	0.59	0.61
	固定資産回転率(回)	$\frac{\text{医業収益}}{(\text{期首固定資産} + \text{期末固定資産}) \times 1 / 2}$	0.71	0.76	0.82
	減価償却率(%)	$\frac{\text{当年度減価償却費}}{\text{有形固定資産} + \text{無形固定資産} - \text{土地仮勘定} + \text{建設仮勘定} + \text{当年度減価償却費}} \times 100$	5.97	4.70	4.84
	流動資産回転率(回)	$\frac{\text{医業収益}}{(\text{期首流動資産} + \text{期末流動資産}) \times 1 / 2}$	3.26	3.45	4.17
	未収金回転率(回)	$\frac{\text{医業収益}}{(\text{期首未収金} + \text{期末未収金}) \times 1 / 2}$	8.14	7.75	7.70
損 益 関 係 比 率	総収支比率(%)	$\frac{\text{総収益} (= \text{医業収益} + \text{医業外収益} + \text{特別利益})}{\text{総費用} (= \text{医業費用} + \text{医業外費用} + \text{特別損失})} \times 100$	100.5	101.5	103.8
	経常収支比率(%)	$\frac{\text{経常収益} (= \text{医業収益} + \text{医業外収益})}{\text{経常費用} (= \text{医業費用} + \text{医業外費用})} \times 100$	100.5	101.5	103.8
	医業収支比率(%)	$\frac{\text{医業収益}}{\text{医業費用}} \times 100$	93.6	94.8	97.5

第2節 図書室等の業務

第1 図書室の業務

図書室は、毎年専門雑誌、専門図書等の整備を図っている。
 なお、図書室は管理規制に基づき、職員以外の者（悪性新生物

に関する調査研究をしようとする者）の利用にも供しており、
 蔵書状況は次表のとおりである。

図書蔵書状況（受入数－除籍累計＝総数）

年度	種類	総数	単行本		専門雑誌	
			洋	和	洋	和
40～18年度受入れ		61,170	10,992	13,020	27,827	9,331
19年度	〃	1,284	221	804	0	259
20年度	〃	2,574	163	1,259	415	737
21年度	〃	878	117	662	0	99
除籍累計		10,802	3,038	3,398	3,395	971
総数		55,104	8,455	12,347	24,847	9,455

第2 レジデント業務

当センターにおける診療業務を通じ、がん専門医を養成する（レジデント）制度」を昭和61年度から発足させた。
 ため、修得期間を2年とする「がんセンター病院診療嘱託員（レ

レジデント履修状況

区分	総数	消化器内科 コース	呼吸器内科 コース	腫瘍内科・ 血液内科 コース	頭頸部外科 コース	胸部外科・ 乳腺科 コース	消化器外科 コース	泌尿器・婦 人科・整形 外科・形成 外科コース	放射線診 断コース	放射線治 療コース	麻酔科 コース	遺伝子 病理診断 コース
61～16年度	462	57	47	14	59	76	85	32	63	27	2	—
17年度	32	5	1	2	3	6	4	3	2	2	—	4
18年度	19	2	1	2	2	3	2	1	1	1	—	4
19年度	17	2	—	—	3	4	2	1	2	2	—	1
20年度	39	5	1	5	4	7	5	3	2	4	—	3
21年度	44	4	—	5	6	9	6	2	4	4	—	4
総数	613	75	50	28	77	105	104	42	74	40	2	16

第3 リサーチレジデント業務

当センターにおける研究業務を通じ、がん専門職員を養成する（リサーチレジデント）制度」を平成13年度から発足させた。
 ため、修得期間を2年とする「がんセンター研究所研究嘱託

リサーチレジデント履修状況

区分	総数	疫学・予防 学コース	腫瘍病理学 コース	分子腫瘍学 コース	遺伝子医療 研究コース	腫瘍免疫学 コース	分子病態学 コース	腫瘍ウイル ス学コース	発がん制御 研究コース	臨床研究基 礎コース
13～16年度	24	—	2	2	2	3	4	5	3	3
17年度	9	1	1	—	1	1	—	2	1	2
18年度	5	1	—	—	—	1	—	1	1	1
19年度	5	—	1	—	—	—	1	1	1	1
20年度	15	1	3	2	2	1	2	2	2	—
21年度	11	1	1	—	2	1	1	2	3	—
総数	69	4	8	4	7	7	8	13	11	7

第4 医療技術者専門研修業務

がん専門職員の不足が、がん対策推進のあい路となっており、これを解消するため医療技術者の研修を実施することとし、昭和41年度から本格化した。研修の種類として当初、厚生省の委託を受けて行う委託研修、希望に応じて随時行う任意研修、当センターの計画に基づいて行う計画研修の3種類があっ

たが、委託研修が昭和52年で終了し、現在は、任意研修、計画研修の2本立てである。

なお、研修希望者は、国内に限らず、東南アジアを始め欧米各国に及んでいる。

研修実施状況

区 分		総数	41～ 8年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
総 数		4968	3603	113	130	106	143	138	164	164	147	124	135	107
委託 研修	総 数	496	496	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	医 師	169	169	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	診療放射線技師	114	114	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	臨床（衛生）検査技師	71	71	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	看護婦	142	142	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
計画 研修	総 数	213	194	2	2	2	2	0	2	2	2	1	3	2
	医 師	141	141	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	診療放射線技師	13	12	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
	臨床（衛生）検査技師	59	41	2	2	2	2	0	2	1	2	1	3	2
任意 研修	総 数	4252	2906	111	128	104	141	138	162	162	145	123	132	105
	医 師（病院）	1917	1487	46	55	38	51	49	49	42	26	26	48	42
	〃（研究所）	855	481	41	32	30	49	40	49	40	41	37	15	17
	診療放射線技師（病院）	93	82	-	1	-	-	1	1	2	3	3	-	1
	〃（研究所）	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	臨床（衛生）検査技師（病院）	366	283	2	1	1	12	6	10	19	13	9	10	5
	〃（研究所）	73	50	1	1	-	2	1	3	5	4	3	3	3
	看護婦	151	130	-	4	2	3	1	3	-	-	4	4	3
	研究員（病院）	20	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	〃（研究所）	86	86	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	その他（運用部）	5	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
〃（病院）	239	94	6	10	10	5	5	9	17	28	20	35	14	
〃（研究所）	446	187	15	24	23	19	35	38	37	30	21	17	20	

第5 知識普及業務

一般県民へのがんの予防啓発や知識の普及は、新聞・テレビ等報道機関に対し、取材協力や資料提供等により行うとともに、各種団体・個人からの依頼に基づき施設見学等を行っている。

一般県民を対象に「がんセンター公開講座」を開催しており、平成21年度は7月から10月までの間に「がん—予防から治療まで—」をメインテーマに国際医学交流センターにおいて3回開催し、延べ504名の受講者があった。

また、毎年9月のがん征圧月間にちなみ開催している「がん

征圧講演会」を、9月5日に同じく国際医学交流センターで講演「感染症とがん」の内容で行い138名の聴講者があった。

更に、9月開催の公開講座の際に「研究所研究内容のパネル展示」を開催し、研究所の活動内容の広報を行った。

この他、研究所として、8月21日に高校生を対象とした実験・体験コースを開催し、15名ががんの研究や基礎医学などの分野で用いられる重要な実験技術を体験した。

第6 がん患者登録及び追跡調査業務

当センターで受診した全てのがん患者の登録を行い、毎年12月に登録患者の追跡調査を行っている。

なお、平成20年までの年次別患者登録数及び平成21年12月の追跡調査結果のあらまは、次表のとおりである。

年次別・部位別がん患者数(男女計) 1964-2008

がんの部位 区分 (ICD10)	全部位 (C00~D09)	食道 がん (C15)	胃がん (C16)	結腸 がん (C18)	直腸 がん (C19~C21)	肝臓 がん (C22)	頭頸部 のがん (C00~C14 C30~C32)	肺がん (C33, C34)	乳房がん (C50)	子宮 がん (C53~C55 C58)	泌尿器 のがん (C60~C68)	甲状腺 がん (C73)	悪性リ ンパ腫 (C82, C84 C85, C96)	白血病 (C91~C95)	その他 のがん
昭和39年(1964)	65	2	18	0	2	0	11	5	10	10	2	0	0	0	5
昭和40年(1965)	1,437	43	506	20	58	16	109	99	167	245	19	13	4	19	119
昭和41年(1966)	1,606	51	549	28	68	20	145	101	207	257	19	19	6	17	119
昭和42年(1967)	1,525	40	525	32	62	25	136	114	156	263	24	13	4	12	119
昭和43年(1968)	1,485	36	448	25	49	23	125	115	191	291	23	21	9	20	109
昭和44年(1969)	1,571	42	488	20	68	21	131	120	203	286	19	22	9	10	132
昭和45年(1970)	1,567	48	437	36	62	27	124	124	222	287	21	20	7	23	129
昭和46年(1971)	1,639	45	438	32	59	37	149	125	228	303	21	30	10	12	150
昭和47年(1972)	1,659	46	427	40	70	30	155	152	242	297	20	19	6	17	138
昭和48年(1973)	1,497	41	390	32	73	28	116	132	191	284	12	26	14	13	145
昭和49年(1974)	1,364	54	348	36	61	9	113	121	224	222	14	25	6	9	122
昭和50年(1975)	1,427	38	375	42	65	13	100	133	214	243	9	28	5	19	143
昭和51年(1976)	1,326	39	352	32	92	25	66	119	202	236	12	18	11	2	120
昭和52年(1977)	1,286	37	327	49	85	14	62	111	201	215	8	20	7	15	135
昭和53年(1978)	1,391	53	345	42	74	15	69	133	231	212	15	24	8	9	161
昭和54年(1979)	1,358	36	336	53	49	28	82	132	241	197	12	21	34	9	128
昭和55年(1980)	1,377	45	334	55	71	23	68	136	289	164	15	26	31	15	105
昭和56年(1981)	1,363	43	326	48	73	32	48	143	302	162	16	22	29	11	108
昭和57年(1982)	1,332	34	295	49	69	26	68	151	316	170	9	14	27	13	91
昭和58年(1983)	1,405	49	297	76	85	25	72	154	300	161	12	19	34	13	108
昭和59年(1984)	1,362	41	306	72	67	27	63	139	331	134	6	15	29	16	116
昭和60年(1985)	1,482	35	297	77	77	37	86	157	364	140	12	19	50	3	128
昭和61年(1986)	1,396	37	311	54	74	43	67	134	326	149	8	22	52	6	113
昭和62年(1987)	1,384	34	268	68	74	34	74	156	337	139	14	20	38	10	118
昭和63年(1988)	1,421	39	275	105	57	28	81	167	348	147	6	18	40	11	99
平成元年(1989)	1,261	32	272	64	54	32	86	151	269	141	7	28	32	10	83
平成2年(1990)	1,280	39	246	82	72	45	96	125	243	151	8	30	39	7	97
平成3年(1991)	1,262	39	217	99	68	39	64	134	276	168	6	22	34	9	87
平成4年(1992)	1,344	46	224	84	64	32	94	169	275	175	8	38	30	6	99
平成5年(1993)	1,464	48	261	125	74	62	88	184	300	143	10	26	39	8	96
平成6年(1994)	1,469	62	264	100	84	42	94	180	298	152	24	23	45	3	98
平成7年(1995)	1,463	46	249	111	74	49	113	178	287	106	57	24	36	1	132
平成8年(1996)	1,462	51	202	96	66	49	124	200	290	106	74	29	32	7	136
平成9年(1997)	1,598	43	235	110	67	60	144	219	307	129	61	23	24	9	167
平成10年(1998)	1,684	56	250	120	68	67	134	246	296	144	68	30	31	11	163
平成11年(1999)	1,810	66	245	101	84	64	141	277	364	116	73	30	29	11	209
平成12年(2000)	1,812	65	252	113	63	55	168	275	309	136	74	27	38	13	224
平成13年(2001)	1,922	114	242	122	94	58	158	291	326	153	71	44	38	10	201
平成14年(2002)	2,049	106	257	134	110	61	198	314	314	141	88	44	40	10	232
平成15年(2003)	2,085	113	242	150	110	54	201	305	293	144	116	43	46	7	261
平成16年(2004)	2,162	130	270	131	108	61	203	297	295	174	115	52	41	7	278
平成17年(2005)	2,223	139	286	147	147	73	206	317	296	143	102	36	42	5	284
平成18年(2006)	2,192	146	304	144	155	55	193	307	285	117	156	43	53	5	229
平成19年(2007)	2,359	152	295	154	152	61	178	332	329	152	138	50	57	5	304
平成20年(2008)	2,079	103	283	135	130	28	124	262	339	148	132	46	44	3	302
合計	69,705	2,604	14,114	3,445	3,488	1,653	5,127	7,936	12,034	8,053	1,736	1,182	1,240	451	6,642

※平成8年までは、ICD9による集計

年次別・部位別がん患者割合(%) (男女計) 1964 — 2008

がんの部位 区分 (ICD10)	全部位 (C00~D09)	食道 がん (C15)	胃がん (C16)	結腸 がん (C18)	直腸 がん (C19~C21)	肝臓 がん (C22)	頭頸部 のがん (C00~C14 C30~C32)	肺がん (C33, C34)	乳房がん (C50)	子宮 がん (C53~C55 C58)	泌尿器 のがん (C60~C68)	甲状腺 がん (C73)	悪性リ ンパ腫 (C82, C84 C85, C96)	白血病 (C91~C95)	その他 のがん
昭和39年(1964)	100.0	3.1	27.7	0.0	3.1	0.0	16.9	7.7	15.4	15.4	3.1	0.0	0.0	0.0	7.7
昭和40年(1965)	100.0	3.0	35.2	1.4	4.0	1.1	7.6	6.9	11.6	17.1	1.3	0.9	0.3	1.3	8.3
昭和41年(1966)	100.0	3.2	34.2	1.7	4.2	1.2	9.0	6.3	12.9	16.0	1.2	1.2	0.4	1.1	7.4
昭和42年(1967)	100.0	2.6	34.4	2.1	4.1	1.6	8.9	7.5	10.2	17.2	1.6	0.9	0.3	0.8	7.8
昭和43年(1968)	100.0	2.4	30.2	1.7	3.3	1.6	8.4	7.7	12.9	19.6	1.6	1.4	0.6	1.3	7.3
昭和44年(1969)	100.0	2.7	31.1	1.3	4.3	1.3	8.4	7.6	12.9	18.2	1.2	1.4	0.6	0.6	8.4
昭和45年(1970)	100.0	3.1	27.9	2.3	4.0	1.7	7.9	7.9	14.2	18.3	1.3	1.3	0.4	1.5	8.2
昭和46年(1971)	100.0	2.7	26.7	2.0	3.6	2.3	9.1	7.6	13.9	18.5	1.3	1.8	0.6	0.7	9.2
昭和47年(1972)	100.0	2.8	25.7	2.4	4.2	1.8	9.3	9.2	14.6	17.9	1.2	1.2	0.4	1.0	8.3
昭和48年(1973)	100.0	2.7	26.1	2.1	4.9	1.9	7.7	8.8	12.8	19.0	0.8	1.7	0.9	0.9	9.7
昭和49年(1974)	100.0	4.0	25.5	2.6	4.5	0.7	8.3	8.9	16.4	16.3	1.0	1.8	0.4	0.7	8.9
昭和50年(1975)	100.0	2.7	26.3	2.9	4.6	0.9	7.0	9.3	15.0	17.0	0.6	2.0	0.4	1.3	10.0
昭和51年(1976)	100.0	2.9	26.6	2.4	6.9	1.9	5.0	9.0	15.2	17.8	0.9	1.4	0.8	0.2	9.0
昭和52年(1977)	100.0	2.9	25.4	3.8	6.6	1.1	4.8	8.6	15.6	16.7	0.6	1.6	0.5	1.2	10.5
昭和53年(1978)	100.0	3.8	24.8	3.0	5.3	1.1	5.0	9.6	16.6	15.2	1.1	1.7	0.6	0.6	11.6
昭和54年(1979)	100.0	2.7	24.7	3.9	3.6	2.1	6.0	9.7	17.8	14.5	0.9	1.5	2.5	0.7	9.4
昭和55年(1980)	100.0	3.3	24.3	4.0	5.1	1.7	4.9	9.9	21.0	11.9	1.1	1.9	2.2	1.1	7.6
昭和56年(1981)	100.0	3.2	23.9	3.5	5.4	2.3	3.5	10.5	22.2	11.9	1.2	1.6	2.1	0.8	7.9
昭和57年(1982)	100.0	2.6	22.1	3.7	5.2	2.0	5.1	11.3	23.7	12.8	0.7	1.0	2.0	1.0	6.8
昭和58年(1983)	100.0	3.5	21.1	5.4	6.0	1.8	5.1	11.0	21.4	11.5	0.9	1.3	2.4	0.9	7.7
昭和59年(1984)	100.0	3.0	22.5	5.3	4.9	2.0	4.6	10.2	24.3	9.8	0.5	1.1	2.1	1.2	8.5
昭和60年(1985)	100.0	2.4	20.0	5.2	5.2	2.5	5.8	10.6	24.6	9.4	0.8	1.3	3.4	0.2	8.6
昭和61年(1986)	100.0	2.6	22.3	3.9	5.3	3.1	4.8	9.6	23.3	10.7	0.6	1.6	3.7	0.4	8.1
昭和62年(1987)	100.0	2.5	19.4	4.9	5.4	2.5	5.4	11.3	24.3	10.0	1.0	1.4	2.7	0.7	8.5
昭和63年(1988)	100.0	2.7	19.4	7.4	4.0	2.0	5.7	11.7	24.5	10.3	0.4	1.3	2.8	0.8	7.0
平成元年(1989)	100.0	2.5	21.6	5.1	4.3	2.5	6.8	12.0	21.3	11.2	0.6	2.2	2.5	0.8	6.6
平成2年(1990)	100.0	3.1	19.2	6.4	5.6	3.5	7.5	9.8	19.0	11.8	0.6	2.3	3.1	0.5	7.6
平成3年(1991)	100.0	3.1	17.2	7.8	5.4	3.1	5.1	10.6	21.9	13.3	0.5	1.7	2.7	0.7	6.9
平成4年(1992)	100.0	3.4	16.7	6.2	4.8	2.4	7.0	12.6	20.5	13.0	0.6	2.8	2.2	0.4	7.4
平成5年(1993)	100.0	3.3	17.8	8.5	5.0	4.2	6.0	12.6	20.5	9.8	0.7	1.8	2.7	0.5	6.6
平成6年(1994)	100.0	4.2	18.0	6.8	5.7	2.9	6.4	12.2	20.3	10.3	1.6	1.6	3.1	0.2	6.7
平成7年(1995)	100.0	3.1	17.0	7.6	5.1	3.4	7.7	12.2	19.6	7.2	3.9	1.6	2.5	0.1	9.0
平成8年(1996)	100.0	3.5	13.8	6.6	4.5	3.3	8.5	13.7	19.8	7.2	5.1	2.0	2.2	0.5	9.3
平成9年(1997)	100.0	2.7	14.7	6.9	4.2	3.7	9.0	13.7	19.2	8.1	3.8	1.4	1.5	0.6	10.5
平成10年(1998)	100.0	3.3	14.8	7.	4.0	4.0	8.0	14.6	17.6	8.6	4.0	1.8	1.8	0.7	9.7
平成11年(1999)	100.0	3.7	13.5	5.6	4.6	3.5	7.8	15.3	20.1	6.4	4.0	1.7	1.6	0.6	11.6
平成12年(2000)	100.0	3.6	13.9	6.2	3.5	3.0	9.3	15.2	17.0	7.5	4.1	1.5	2.1	0.7	12.4
平成13年(2001)	100.0	5.9	12.6	6.3	4.9	3.0	8.2	15.1	17.0	8.0	3.7	2.3	2.0	0.5	10.5
平成14年(2002)	100.0	5.2	12.6	6.5	5.4	3.0	9.7	15.3	15.3	6.9	4.3	2.1	2.0	0.5	11.3
平成15年(2003)	100.0	5.4	11.5	7.2	5.3	2.6	9.6	14.6	14.1	6.9	5.6	2.1	2.2	0.3	12.5
平成16年(2004)	100.0	6.0	12.5	6.1	5.0	2.8	9.4	13.7	13.6	8.1	5.3	2.4	1.9	0.3	12.9
平成17年(2005)	100.0	6.3	12.9	6.6	6.6	3.3	9.3	14.3	13.3	6.4	4.6	1.6	1.9	0.2	12.8
平成18年(2006)	100.0	6.7	13.9	6.6	7.1	2.5	8.8	14.0	13.0	5.3	7.1	2.0	2.4	0.2	10.4
平成19年(2007)	100.0	6.4	12.5	6.5	6.4	2.6	7.5	14.1	13.9	6.4	5.8	2.1	2.4	0.2	12.9
平成20年(2008)	100.0	5.0	13.6	6.5	6.3	1.3	6.0	12.6	16.3	7.1	6.4	2.2	2.3	0.1	14.5
合計	100.0	3.7	20.2	4.9	5.0	2.4	7.4	11.4	17.3	11.6	2.5	1.7	1.8	0.6	9.5

※平成8年までは、ICD9による集計

登録(診断)年次別がん患者の生存数(男女計) 1964 — 2007

登録(診断)年	症例数	経過年数					
		1年経過	2年経過	3年経過	4年経過	5年経過	10年経過
昭和39年(1964)	65	38	33	31	26	23	15
昭和40年(1965)	1,437	801	637	572	541	508	414
昭和41年(1966)	1,606	965	764	673	640	613	507
昭和42年(1967)	1,525	915	708	619	576	551	443
昭和43年(1968)	1,485	940	746	662	617	582	472
昭和44年(1969)	1,571	981	788	697	630	593	502
昭和45年(1970)	1,567	1,019	803	724	671	629	536
昭和46年(1971)	1,639	1,049	850	768	701	642	535
昭和47年(1972)	1,659	1,104	907	820	753	713	593
昭和48年(1973)	1,497	1,010	844	748	707	667	561
昭和49年(1974)	1,364	948	769	684	638	597	497
昭和50年(1975)	1,427	963	776	704	659	634	553
昭和51年(1976)	1,326	924	755	673	636	602	503
昭和52年(1977)	1,286	908	736	677	630	599	521
昭和53年(1978)	1,391	979	811	742	689	654	550
昭和54年(1979)	1,358	985	822	749	701	669	574
昭和55年(1980)	1,377	1,005	843	775	720	684	582
昭和56年(1981)	1,363	1,016	856	775	737	692	582
昭和57年(1982)	1,332	986	845	763	726	698	564
昭和58年(1983)	1,405	1,048	882	798	734	700	593
昭和59年(1984)	1,362	1,035	873	792	741	709	602
昭和60年(1985)	1,482	1,177	1,007	905	841	810	696
昭和61年(1986)	1,396	1,094	946	857	808	771	648
昭和62年(1987)	1,384	1,100	948	862	787	749	631
昭和63年(1988)	1,421	1,140	991	904	856	829	712
平成元年(1989)	1,261	985	861	800	766	739	624
平成2年(1990)	1,280	1,041	898	839	796	761	661
平成3年(1991)	1,262	1,049	917	846	799	760	661
平成4年(1992)	1,344	1,099	955	887	849	815	698
平成5年(1993)	1,464	1,193	1,037	941	894	858	726
平成6年(1994)	1,469	1,206	1,075	993	930	894	767
平成7年(1995)	1,463	1,190	1,032	935	878	850	718
平成8年(1996)	1,462	1,201	1,054	947	907	859	729
平成9年(1997)	1,598	1,336	1,146	1,041	980	940	750
平成10年(1998)	1,684	1,367	1,198	1,096	1,031	980	768
平成11年(1999)	1,810	1,470	1,271	1,163	1,099	1,056	976
平成12年(2000)	1,812	1,492	1,294	1,195	1,118	1,054	969
平成13年(2001)	1,922	1,557	1,372	1,259	1,176	1,114	
平成14年(2002)	2,049	1,682	1,447	1,299	1,222	1,181	
平成15年(2003)	2,085	1,719	1,485	1,375	1,278	1,310	
平成16年(2004)	2,162	1,830	1,570	1,434	1,440	1,357	
平成17年(2005)	2,223	1,849	1,619	1,719	1,613		
平成18年(2006)	2,192	2,070	2,024	1,839			
平成19年(2007)	2,359	2,027	1,941				

登録(診断)年次別がん患者の実測生存率※ (%) (男女計) 1964 — 2007

※Kaplan-Meier法による

登録(診断)年	経過年数					
	1年経過	2年経過	3年経過	4年経過	5年経過	10年経過
昭和39年(1964)	58.5	50.8	47.7	40.0	35.4	23.1
昭和40年(1965)	55.7	44.3	39.8	37.6	35.4	28.8
昭和41年(1966)	60.1	47.6	41.9	39.9	38.2	31.6
昭和42年(1967)	60.0	46.4	40.6	37.8	36.1	29.0
昭和43年(1968)	63.3	50.2	44.6	41.5	39.2	31.8
昭和44年(1969)	62.4	50.2	44.4	40.1	37.7	32.0
昭和45年(1970)	65.0	51.2	46.2	42.8	40.1	34.2
昭和46年(1971)	64.0	51.9	46.9	42.8	39.2	32.6
昭和47年(1972)	66.5	54.7	49.4	45.4	43.0	35.7
昭和48年(1973)	67.5	56.4	50.0	47.2	44.6	37.5
昭和49年(1974)	69.5	56.4	50.1	46.8	43.8	36.4
昭和50年(1975)	67.5	54.4	49.3	46.2	44.4	38.8
昭和51年(1976)	69.7	56.9	50.8	48.0	45.4	37.9
昭和52年(1977)	70.6	57.2	52.6	49.0	46.6	40.5
昭和53年(1978)	70.4	58.3	53.3	49.5	47.0	39.5
昭和54年(1979)	72.5	60.5	55.2	51.6	49.3	42.3
昭和55年(1980)	73.0	61.2	56.3	52.3	49.7	42.3
昭和56年(1981)	74.5	62.8	56.9	54.1	50.8	42.7
昭和57年(1982)	74.0	63.4	57.3	54.5	52.4	42.3
昭和58年(1983)	74.6	62.8	56.8	52.2	49.8	42.2
昭和59年(1984)	76.0	64.1	58.1	54.4	52.1	44.2
昭和60年(1985)	79.4	67.9	61.1	56.7	54.7	47.0
昭和61年(1986)	78.4	67.8	61.4	57.9	55.2	46.4
昭和62年(1987)	79.5	68.5	62.3	56.9	54.1	45.6
昭和63年(1988)	80.2	69.7	63.6	60.2	58.3	50.1
平成元年(1989)	78.1	68.3	63.4	60.7	58.6	49.5
平成2年(1990)	81.3	70.2	65.5	62.2	59.5	51.6
平成3年(1991)	83.1	72.7	67.0	63.3	60.2	52.4
平成4年(1992)	81.8	71.1	66.0	63.2	60.6	51.9
平成5年(1993)	81.5	70.8	64.3	61.1	58.6	49.6
平成6年(1994)	82.1	73.2	67.6	63.3	60.9	52.2
平成7年(1995)	81.3	70.5	63.9	60.0	58.1	49.1
平成8年(1996)	82.1	72.1	64.8	62.0	58.8	49.9
平成9年(1997)	83.6	71.7	65.1	61.3	58.8	46.9
平成10年(1998)	81.2	71.1	65.1	61.2	58.2	45.6
平成11年(1999)	81.2	70.2	64.3	60.7	58.3	53.9
平成12年(2000)	82.3	71.4	65.9	61.7	58.2	53.5
平成13年(2001)	81.0	71.4	65.5	61.2	58.0	
平成14年(2002)	82.1	70.6	63.4	59.6	57.6	
平成15年(2003)	82.4	71.2	65.9	61.3	62.8	
平成16年(2004)	84.6	72.6	66.3	66.6	62.8	
平成17年(2005)	83.2	72.8	77.3	72.6		
平成18年(2006)	94.4	92.3	83.9			
平成19年(2007)	85.9	82.3				

第3章 病院業務

第1節 概要

当部門において、がんの診断及び診察を行うため、次の診療科を置き、業務を行っている。

<診療科目>消化器内科、呼吸器内科、血液内科、薬物療法内科、臨床検査科、病理診断科、循環器内科、頭頸部外科、形成外科、胸部外科、乳腺科、消化器外科、整形外科、泌尿器科、

皮膚科、婦人科、麻酔科、放射線診断科、放射線治療科、脳神経外科、眼科、歯科、緩和ケア内科 計23診療科

診断については、原則として総合診断方式、すなわち初診医師の指示により諸検査を行い、検査終了後関係医師団による総合診断を行い、その治療方針及び担当部を決定している。

第2節 診断、治療及び社会復帰業務

第1 外来患者状況

初診患者は、開院以来（昭和39年12月1日～平成22年3月31日）397,068人となり、性別比率は男37.4%、女62.6%、住所地別では、

愛知県77.1%（このうち名古屋市39.4%）、その他の府県22.9%となっている。

外 来 患 者 状 況

区 分	平成19年度	平成20年度	平成21年度	昭和39～平成21年度
初 診 患 者 数	7,723	6,697	6,193	398,094
外 来 患 者 延 数	152,829	153,514	154,001	5,280,176
実 外 来 診 療 日 数	245	243	242	12,431
1 日 平 均 患 者 数	623.8	631.7	636.4	404.9
平 均 通 院 回 数	19.8	22.9	24.9	13.2

初 診 患 者 数 （ 性 別 ）

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		昭和39～平成21年度	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
総 数	7,726	100.0	6,697	100.0	6,193	100.0	397,068	100.0
男	3,237	41.9	2,647	39.5	2,654	42.9	148,320	37.4
女	4,489	58.1	4,050	60.5	3,539	57.1	248,748	62.6

初 診 患 者 住 所 地 別 割 合

区 分	平成19年度	平成20年度	平成21年度	昭和39～平成21年度
総 数	100.0	100.0	100.0	100.0
愛 知 県	77.9	76.2	77.1	81.1
（ 名 古 屋 市 ）	(38.9)	(42.6)	(39.4)	(43.8)
（ そ の 他 ）	(38.9)	(33.6)	(37.7)	(37.3)
岐 阜 県	9.0	9.9	10.0	9.1
三 重 県	8.8	9.5	8.8	6.3
静 岡 県	0.5	0.6	0.6	1.0
そ の 他	3.8	3.8	3.5	2.5

第2 入院患者状況

入院患者は、開院以来（昭和39年12月21日～平成22年3月31日）168,314人となり、性別比率は男51.0%、女49.0%、

住所地別では、愛知県76.9%（このうち名古屋市39.4%）、その他の府県23.1%となっている。

入院患者状況

区 分		平成19年度	平成20年度	平成21年度	昭和39～平成21年度
入院患者数	総数	9,723	9,936	10,175	・
	繰越	404	375	375	・
	新入院	9,319	9,561	9,800	168,314
通院患者数	総数	9,348	9,561	9,800	167,939
	死亡	428	429	442	15,563
	その他	8,920	9,132	9,358	152,376
入院患者延数	159,642	152,710	154,884	5,942,346	
1日平均患者数	436.2	418.4	424.3	・	
平均在院日数	16.1	15.0	14.8	・	
病床利用率	93.0	88.5	89.7	・	
死亡	4.6	4.5	4.5	・	

新入院患者数（性別）

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		昭和39～平成21年度	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
総数	9,319	100.0	9,561	100.0	9,800	100.0	168,314	100.0
男	5,244	56.3	5,359	56.1	5,626	57.4	85,893	51.0
女	4,075	43.7	4,202	43.9	4,174	42.6	82,421	49.0

入院患者住所地別割合

区 分	平成19年度	平成20年度	平成21年度	昭和39～平成21年度
総数	100.0 %	100.0 %	100.0 %	100.0 %
愛知県	73.1	72.4	74.6	76.9
（名古屋市）	(32.3)	(32.8)	(33.4)	(39.4)
（その他）	(40.7)	(39.6)	(41.2)	(37.5)
岐阜県	12.8	12.6	11.2	10.6
三重県	9.9	10.5	10.1	7.9
静岡県	0.5	0.5	0.5	1.0
その他	3.7	4.0	3.6	3.6

第3 社会復帰業務

健康医療相談では、一般予防に関する資料を配布している。

また、術後患者の社会生活をサポートするために、専門の看護師がリマンマ・ストーマ相談を行っている。

平成6年度からは医療ソーシャルワーカーが配置され、患者・家族の経済的、心理的相談に対応している。

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	件数	1月平均	件数	1月平均	件数	1月平均
人工肛門(ストーマ)相談	135	11.3	185	15.4	200	16.7
乳腺(リマンマ)相談	26	2.2	15	1.3	360	30.0
乳腺看護相談	36	3.0	40	3.3	400	33.3
医療社会福祉相談	3,630	302.5	4,258	354.8	4,926	410.5
〔内訳 電話相談〕	〔1,567〕	〔130.5〕	〔1,310〕	〔109.2〕	〔1,505〕	〔125.4〕
〔面接相談〕	〔2,063〕	〔171.9〕	〔2,948〕	〔245.6〕	〔3,421〕	〔285.1〕

また、平成19年度からは相談支援室を開設、平成21年度からは乳腺科外来に乳がん認定看護師を配置し、手術前のオリエンテーションは認定看護師が主に担当するようになったため、乳腺看護相談件数が飛躍的に増加した。

毎週月曜日には、日本喉頭摘出者団体連合会愛友会による、喉頭がん術後患者のための発声訓練指導が行われ、約30名の患者が参加している。

第4 放射線診断及び治療業務

1. 診断業務

平成19年度を100とした場合、照射回数は20年度98.4、21年度99.5、アイソトープ検査件数は、20年度81.7、21年度75.8、

コンピュータ断層撮影件数は、20年度110.4、21年度116.2、超音波断層撮影件数は、20年度78.5、21年度66.3となっている。

放射線照射回数（診断）

直接撮影・方法別取扱件数

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	46,541	190.0	45,778	188.4	46,299	191.3
単 純 撮 影	40,230	164.2	39,820	163.9	40,378	166.9
造 影 撮 影	5,398	22.0	5,015	20.6	4,979	20.6
特 殊 撮 影	913	3.7	943	3.9	942	3.9

アイソトープ検査件数

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	1,630	6.7	1,332	5.5	1,234	5.1
シンチスキャン	1,332	5.4	1,030	4.2	934	3.9
センチネルリンパ	298	1.2	292	1.2	285	1.2
動態計測	0	0.0	10	0.0	15	0.1

コンピュータ断層撮影件数

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	40,061	163.5	44,214	182.0	46,548	192.3
単 純 撮 影	11,238	45.9	12,257	50.4	13,512	55.8
造 影 撮 影	28,823	117.6	31,957	131.5	33,036	136.5

超音波断層撮影件数

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	7,556	30.8	5,933	24.4	5,009	20.7
甲 状 腺	914	3.7	806	3.3	948	3.9
乳 腺	2,174	8.9	1,375	5.7	836	3.5
腹 部	2,255	9.2	1,674	6.9	1,721	7.1
そ の 他	2,213	9.0	2,078	8.6	1,504	6.2

2. 治療業務

平成19年度を100とした場合、照射総回数は20年度95.5、21年度105.6、となっている。

放射線照射回数（治療）

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		
	回 数	1日平均	回 数	1日平均	回 数	1日平均	
総 数	59,470	242.7	56,815	233.8	62,784	259.4	
放射性 物質	コバルト遠隔 大量照射	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	R A L S	81	0.3	79	0.3	85	0.4
	小線源	37	0.2	25	0.1	23	0.1
その他	リニアック	54,245	221.4	52,454	215.9	58,039	239.8
	C T	1,116	4.6	1,083	4.5	1,067	4.4
	M R I	3,675	15.0	2,948	12.1	3,377	14.0
	シミュレーター	316	1.3	226	0.9	193	0.8

第5 検査業務

一般臨床検査においては、平成19年度の総件数を100とした場合、20年度104.9、21年度109.1となっている。

一般臨床検査件数

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	2,680,799	10940.2	2,812,427	11573.8	2,923,804	12081.8
尿 検 査	26,262	107.2	29,086	119.7	27,821	115.0
糞 便 〃	1,454	5.9	1,227	5.0	720	3.0
血 液 学 的 〃	864,467	3528.4	900,392	3705.3	1,021,237	4220.0
生 化 学 的 〃	1,406,034	5738.9	1,480,405	6092.2	1,470,775	6077.6
細 菌 学 的 〃	11,978	48.9	15,077	62.0	15,065	62.3
血 清 学 的 〃	{ 168,121 (1,643)	{ 686.2 (6.7)	{ 181,853 (1,688)	{ 748.4 (6.9)	{ 190,445 (1,745)	{ 787.0 (7.2)
病 理 組 織 〃	8,424	34.4	8,384	34.5	8,379	34.6
癌 遺 伝 子 〃	1,193	4.9	1,324	5.4	1,547	6.4
細 胞 学 的 〃	9,682	39.5	8,619	35.5	7,568	31.3
その他 採血業務 治験処理等	178,967 3,777	730.5 15.4	181,894 3,705	748.5 15.2	176,977 3,270	731.3 13.5

(注) ()内はアイソトープ使用により実施した件数を再掲した。

機能検査件数

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	19,531	79.7	20,598	84.8	22,089	91.3
心 電 図 検 査	3,512	14.3	5,498	22.6	5,593	23.1
負 荷 心 電 図 〃	2,016	8.2	1,983	8.2	1,908	7.9
ト レ ッ ド ミ ル 〃	806	3.3	691	2.8	696	2.9
ホ ル タ ー 心 電 図 〃	390	1.6	419	1.7	359	1.5
心 臓 超 音 波 〃	1,958	8.0	2,062	8.5	1,951	8.1
肺 機 能 〃	6,443	26.3	6,611	27.2	6,645	27.5
ピロリ菌呼気試験 〃	78	0.3	67	0.3	84	0.3
聴 力 純 音 〃	35	0.1	79	0.3	119	0.5
眼 科 〃	0	0.0	0	0.0	0	0.0
乳 腺 超 音 波 〃	1,950	8.0	1,272	5.2	796	3.3
骨 塩 定 量 〃	2	0.0	3	0.0	0	0.0
そ の 他 〃	0	0.0	1	0.0	5	0.0
血 液 ガ ス 〃	2,341	9.6	1,912	7.9	3,933	16.3

内視鏡検査件数

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	9,212	37.6	8,834	36.4	8,740	36.1
上 部 消 化 管	5,188	21.2	5,012	20.6	4,779	19.7
下 部 消 化 管	2,617	10.7	2,537	10.4	2,717	11.2
気 管 支	228	0.9	165	0.7	151	0.6
膵胆管造影 (ERCP)	202	0.8	148	0.6	157	0.6
超音波内視鏡 (EUS)	734	3.0	687	2.8	664	2.7
超音波内視鏡下穿刺生検 (EUS-FBNAB)	243	1.0	285	1.2	272	1.1

内 視 鏡 治 療 件 数

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	701	2.9	842	3.5	905	3.7
食 道 E M R	49	0.2	44	0.2	44	0.2
胃 E M R	73	0.3	83	0.3	91	0.4
大腸EMR、ポリペク	299	1.2	315	1.3	355	1.5
食道狭窄拡張術	192	0.8	213	0.9	203	0.8
胆道ステント留置術	75	0.3	131	0.5	166	0.7
乳頭切開術、胆道碎石術	13	0.1	56	0.2	46	0.2

第 6 手術業務

部位別手術件数は、次表のとおりである。

手 術 件 数 (部 位 別)

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	件 数	1日平均	件 数	1日平均	件 数	1日平均
総 数	2,632	10.7	2,761	11.4	2,663	11.0
頭 頸 部 系	440	1.8	462	1.9	477	2.0
胸 部 系	804	3.3	786	3.2	766	3.2
消 化 器 系	793	3.2	805	3.3	703	2.9
婦 人 科 系	269	1.1	304	1.3	310	1.3
泌 尿 器 系	159	0.6	186	0.8	191	0.8
そ の 他	167	0.7	218	0.9	216	0.9

第 3 節 看護業務

病棟部門の勤務体制は、平成21年度から7対1看護の3交代制をとり、普通病棟では1看護単位当り、50床を担当するもの7単位、49床を担当するもの1単位、30床を担当するもの1単位、25床を担当するもの2単位からなり、特殊病棟では、ICU病棟の4床及びHCU等の病棟の17床を担当するもの1単位とな

っている。

その他外来診療を担当する外来部門、手術を担当する手術部門、衛生材料・器具等の滅菌業務を担当する中材部門がある。

看護力の配置状況は次表のとおりである。

看 護 体 制

区 分		平成19年度	平成20年度	平成21年度
看 護 単 位 数		15	15	15
配 置 状 況	総 数	338	353	406
	病 棟 部 門	286	290	343
	外 来	27	33	34
	手 術	22	27	26
	中 材	1	1	1
	そ の 他	2	2	2
職 種	総 数	338	353	406
	看 護 師	327	343	397
	看 護 助 手	11	10	9

第4節 薬剤業務

平成19年から平成21年までの薬剤業務の状況は次表のとおりである。

薬 剤 業 務

区 分			平成19年度		平成20年度		平成21年度		
			総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	
処方	枚数	総数	76,446	312.0	77,728	319.9	75,118	310.4	
		外来	10,638	43.4	11,213	46.1	9,211	38.1	
		入院	65,808	268.6	66,515	273.7	65,907	272.3	
	剤数	総数	139,363	568.8	138,711	570.8	135,593	560.3	
		外来	23,692	96.7	24,442	100.6	21,882	90.4	
		入院	115,671	472.1	114,269	470.2	113,711	469.9	
	延剤数	総数	1,440,644	5,880.2	1,435,099	5,905.8	1,374,632	5,680.3	
		外来	454,361	1,854.5	466,497	1,919.7	399,375	1,650.3	
		入院	986,283	4,025.6	968,602	3,986.0	975,257	4,030.0	
治験処方枚数*1			総数	868	3.5	954	3.9	836	3.5
			外来	796	3.2	816	3.4	779	3.2
			入院	72	0.3	138	0.6	57	0.2
注射	枚数 (患者人数)	総数	101,718	415.2	104,148	428.6	110,407	456.2	
		外来	20,008	81.7	21,485	88.4	22,239	91.9	
		入院	81,710	333.5	82,663	340.2	88,168	364.3	
	実枚数*2	総数	153,290	625.7	159,655	657.0	166,128	686.5	
		剤数	総数	493,797	2,015.5	494,874	2,036.5	519,211	2,145.5
			外来	56,380	230.1	64,337	264.8	68,023	281.1
	延本数	入院	437,417	1,785.4	430,537	1,771.8	451,188	1,864.4	
		総数	843,306	3,442.1	817,846	3,365.6	865,118	3,574.9	
		外来	176,773	721.5	183,996	757.2	194,264	802.7	
入院	総数	666,533	2,720.5	633,850	2,608.4	670,854	2,772.1		
	人数	3,710	15.1	2,605	10.7	1,912	7.9		
薬剤管理指導数			算定件数	5,102	20.8	3,002	12.4	2,018	8.3
外来抗痛剤 調製数*3	調製件数(患者数)	9,967	40.7	11,034	45.4	14,475	59.8		
	調製本数(剤数)	15,339	62.6	17,262	71.0	22,766	94.1		
外来抗痛剤 (治験) 調製数*4	調製件数(患者数)	418	1.7	712	2.9	1,315	5.4		
	調製本数(剤数)	551	2.2	1,123	4.6	1,706	7.0		
外来抗痛剤 (治験を含む) 調製数*5	調製件数(患者数)			50	0.3	2,351	9.7		
	調製本数(剤数)			115	0.7	3,286	13.6		
麻薬処方せん枚数			5,702	23.3	5,884	24.2	6,916	28.6	
麻薬注射せん枚数			11,676	47.7	12,345	50.8	13,232	54.7	
TDM実施件数*6					93	0.4	59	0.2	

*1 治験の処方せん枚数は、平成19年度から集計

*2 実枚数は、修正・削除分を加えた枚数(平成16年度から集計)

*3 外来抗痛剤調製数は、薬剤師が調製した分のみを計上

*4 外来抗痛剤調製数(治験)は、薬剤師が調製した分のみを計上(平成19年度から集計)

*5 入院抗痛剤調製数(治験を含む)は、薬剤師が調製した分のみを計上(平成20年度から集計)

*6 TDM実施件数は平成20年度から集計

第5節 給食業務

平成19年度から平成21年度までの患者給食の状況は、次表のとおりである。

患者給食実施状況

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		
	総 数	%	総 数	%	総 数	%	
入 院 患 者 延 数	159,642	・	152,710	・	154,884	・	
給 食 数 (配膳延人数)	総 数	125,075	100.0	111,096	100.0	115,668	100.0
	一 般 食	104,415	83.5	93,617	84.3	97,493	84.3
	特 別 食	20,660	16.5	17,479	15.7	18,175	15.7
給 食 率	・	78.3	・	72.7	・	74.7	

第6節 血液管理業務

平成19年度から平成21年度までの血液管理業務の状況は、次表のとおりである。

輸 血 状 況

1 血液使用量

(単位)

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	総 数	月 平 均	総 数	月 平 均	総 数	月 平 均
自 己 血 液	372	31.0	431	35.9	385	32.1
全 血 液	-	-	-	-	-	-
赤 血 球 製 剤	-	-	16	1.3	2	0.17
赤 血 球 濃 厚 液	3,564	297.0	4,908	409.0	5,578	464.8
凍 結 血 漿	995	82.9	754	62.8	934	77.8
血 小 板	12,995	1082.9	15,995	1332.9	16,565	1380.4
そ の 他	-	-	-	-	-	-

2 検査件数

(単位：件)

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	総 数	月 平 均	総 数	月 平 均	総 数	月 平 均
ク ロ ス マ ッ チ	2,250	187.5	2,903	241.9	3,425	285.4
血 液 型 (A B O)	3,151	262.6	3,309	275.8	3,314	276.2
R H 因 子	3,151	262.6	3,309	275.8	3,314	276.2
間 接 ク ー ム ス 試 験	7,677	639.8	8,827	735.6	9,616	801.3
抗 体 ス ク リ ー ニ ン グ	5,420	451.7	5,913	492.8	6,181	515.1
直 接 ク ー ム ス 試 験	9	0.75	12	1.0	17	1.4

(注) ・全血製剤は血液200mlを1単位、成分製剤は血液200mlを由来する成分を1単位とする。

・直接クーモス試験は平成9年度より、臨床検査部から血液管理部へ移管。

第4章 研究業務

第1節 概要

当がんセンターにおいては、がん患者の診断治療を行うのみならず、がんの研究機関としての研究業務も設置目的に含まれており、病院部門における臨床医学的研究と、研究部門における基礎医学的研究と相まって、当センターの機能を発

揮しているが、その研究体制は、研究所における人当研究、病院における課題別研究、病院及び研究所両部門による共同研究並びに受託研究の四つに大別され、各研究テーマの研究が実施されている。

第2節 研究業務

第1 研究所部門の研究業務

当部門における定型的な研究単位は部であり、その構成はおおむね部長1名、室長2名、研究員2名、研究助手1～2名であり、総計9部により研究所を構成している。

また、研究課題についても、これらの室ごとにそれぞれ研究テーマを受け持っているが、必ずしも独立して研究を行うのではなく、部門において相互に有機的な連携をはかり研究を行っており、また「部」においても他部と密接な連携を保ち

研究業務を実施している。

これらの研究に要する経費には、人当研究費が当てられ、その研究課題は次表のとおりである。

また、文部科学省の委託による研究も実施している。

なお、これらの研究の成果を全国あるいは地方の各学会等に発表した件数は19年度415件、20年度217件、21年度233件となっている。

研究所における部別研究課題

(平成21年度)

部 名	研 究 課 題
研 究 所 長	アジア太平洋地域におけるがんの民族疫学研究
疫 学 ・ 予 防 部	1 がん統計情報の構築に必要な地域がん登録の精度向上を目指した記述疫学研究 2 がんの環境要因、宿主要因、および両者の交互作用を解明するための病院疫学研究 3 「健康日本21あいち」に基づく愛知県民のためのがん予防啓発技術の開発研究と評価 4 がん治療の長期予後（効果）に影響する要因の分析
腫 瘍 病 理 学 部	1 人体剖検例の病理組織学的研究 2 制がん医療の基盤材料となる機能性ペプチドの開発 3 難治性がんに対する抗腫瘍ペプチドを応用した新規治療学的アプローチ 4 固形癌細胞膜表面レセプターを介する増殖制御機構の解析 5 ヒトおよび動物癌転移の分子病理学的研究 6 消化器がん発生の実験的研究
分 子 腫 瘍 学 部	1 肺癌の発症・進展機序の解明と分子標的療法の探索 2 中皮腫の発がん機序の解明と細胞生物学的研究 3 消化器がんの発症におけるエピジェネティクス関与の解明
遺 伝 子 医 療 研 究 部	1 造血器腫瘍発症機構の分子生物的研究及び診断治療への応用 2 造血器細胞の分化、増殖に関与する遺伝子の血清学的、分子生物学的研究
腫 瘍 免 疫 学 部	1 腫瘍抗原の免疫学的、分子生物学的検索 2 免疫診断及び免疫治療の前臨床的及び臨床的研究
腫 瘍 ウ イ ル ス 学 部	1 ヒトがんウイルスの増殖と宿主細胞応答の解析 2 抗腫瘍ウイルス療法の開発 3 ヒトサイトメガウイルスの弱毒ウイルスワクチン株の作成
分 子 病 態 学 部	1 癌の浸潤・転移及び腫瘍血管新生における細胞間識別・接着機構とその動態の研究 2 悪性細胞における異常糖鎖の発現調節機構の研究 3 細胞接着分子セレクチン、CD44、シグレクおよびその特異的リガンドの研究 4 グルコサミノグリカンおよびスフィンゴ脂質と癌の進展に関する分子生物学的研究
発 がん 制 御 研 究 部	1 中間径フィラメント関連蛋白質を介した発がんの基礎研究 2 プロテインキナーゼを介した発がんの基礎研究 3 ノックアウトマウスの手法を用いた細胞増殖・細胞分化の二律背反に関する研究
中 央 実 験 部	1 食道がん、頭頸部腫瘍の分子遺伝子学的研究

第2 病院部門の研究業務

病院における研究は、診断、治療を通じての臨床研究であることはいうまでもないが、課題別研究の形式をとっているので、その課題に関係する医師群等によって行われている。

これらの研究には、課題別研究費が充てられるが、その研究

課題は次表のとおりである。

また、これらの研究の成果は愛知県がんセンターとしての全国あるいは地方の各学会に発表しているが、その件数は、19年度628件、20年度679件、21年度778件となっている。

病院部門における研究課題

(平成21年度)

	研 究 課 題	研 究 員
1	がん治療におけるインターベンショナル・ラジオロジーの応用についての研究	稲葉 吉隆 ほか8名
2	治療感受性と再発リスクによる乳癌術後補助療法の選択に関する研究	岩田 広治 ほか3名
3	臨床検査における各種癌診断手法の開発	谷田部 恭 ほか10名
4	骨軟部肉腫の進行例に対する治療法の研究	杉浦 英志 ほか2名
5	局所前立腺がんに対する放射線治療の臨床的研究	林 宣男 ほか2名
6	病理細胞診断における分子腫瘍診断法の研究	谷田部 恭 ほか4名
7	食道癌に対する術前化学療法についての臨床試験	室 圭 ほか5名
8	悪性リンパ腫の大量化学療法	森島 泰雄 ほか5名
9	非小細胞肺癌の分子生物学的解析と臨床的意義	光富 徹哉 ほか5名
10	頭頸部局所進行癌に対するSTS併用CDDP選択動注併用放射線治療の研究	古平 毅 ほか3名

第3 病院・研究所両部門間共同の研究業務

病院、研究所両部門が共同して行う当研究は、共同研究員によって行われるが、その研究課題は次表のとおりである。

1. 病院・研究所両部門による共同研究課題

(平成21年度)

	研 究 課 題	研 究 員
1	非小細胞肺癌におけるEGFR遺伝子変異と効果・予防についての検討	樋田 豊明 ほか6名
2	消化器癌に対する超音波内視鏡下生検法の有用性の検討	山雄 健次 ほか10名
3	機能の温存を目指す頭頸部癌の外科治療	長谷川 泰久 ほか3名

2. プロジェクト研究課題

(平成21年度)

	研 究 課 題	研 究 員
1	TNFAIP3によるB細胞性腫瘍抑制機構の解明	本間 圭一郎 ほか4名
2	加齢性EBV関連B細胞性リンパ増殖異常症の臨床病理学的及び分子生物学的解析	山本 一仁 ほか2名
3	悪性中皮腫移植マウスモデルでのTGF- β 阻害剤による腫瘍増殖抑制効果	藤井 万紀子 ほか9名

第4 受託研究

当センターでは、薬事法に基づく医薬品の製造販売承認申請等の際に必要なとされる資料の収集のために行われる臨床試験（治験等）を受託している。

受託は「愛知県がんセンター中央病院受託研究取扱要綱」に基づいて実施している。

受託状況は次表のとおりである。

表中委託者（医薬品製造販売業者等）数は延数ではなく実数で、昭和59年度から平成21年度までの延受託件数は1,781件である。

年 度	19年度	20年度	21年度	59～21年度
受 託 件 数	90	126	153	1,781
委 託 者 数	29	34	37	・

第5 特許の状況

当センターでは県民の健康の推進、医療の向上等を目的とした知的財産創造の主要な担い手として、「愛知県試験研究機関の知的財産戦略推進方針」に基づき、優れた知的財産の創出を推進してきた。

特許の状況は以下のとおりであり、平成16年度からは外国出願も行っている。

また、企業への技術移転にも努めており、7件の実施許諾契約をしている。

区 分		平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
発 明 件 数		7	13	5	4	6
登 録 件 数	年 度 当 初	5	3	1	3	6
	新 規	0	1	2	3	3
	権 利 消 滅	2	3	0	0	0
	年 度 末	3	1	3	6	9
実 施 許 諾 件 数	年 度 当 初	1	1	3	6	6
	新 規	1	2	4	0	2
	満 了 ・ 解 約	1	0	1	0	1
	年 度 末	1	3	6	6	7

(注) 出願件数には外国出願、国際（PCT）出願を含む。

第6 科学研究費補助金獲得状況

平成19年度から平成21年度までの科学研究費補助金の獲得状況は、次表のとおりである。

年 度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
件 数	103	119	136

(注) 分担金の配分を受けた研究分担者も含む。

第7 民間企業等との共同研究

当センターが、「愛知県がんセンター共同研究取扱規程」に おりである。
基づいて民間等と行っている共同研究の実施状況は、次表のと

年 度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
件 数	32件	28件	24件

第5章 国際交流業務

昭和39年の開院以来、愛知県がんセンターで築かれたがんの診断・治療、研究に関する実績は、国内はもとより国際的にも高く評価されている。さらに積極的にこれらの成果を世界に伝え、また、外国の情報を収集するために、さまざまな形で医学

の国際交流を進めている。

因みに、平成21年度におけるがんの診断、治療に係る国際協力活動は、受入8件、派遣51件、合計59件であり、次のとおりである。

がんの診断、治療等に係る国際協力活動状況一覧表

1 受入状況

目的	国名等	部署等	期間	備考
研修	中国	消化器内科部	21.7.13～21.7.17	
研修	中国	消化器内科部	21.7.13～21.9.5	
研修	チリ、中国、ホンジュラス、ジャマイカ、ベトナム、ウルグアイ、スリランカ	疫学・予防部	21.9.8	JICA 中部国際センター 平成21年度 生活習慣病予防対策研修
研修	インド	消化器内科部	21.10.22～21.11.1	
共同研究	インドネシア、中国、韓国、台湾、フィリピン	疫学・予防部	21.11.10～21.11.15	第3次対がん総合戦略研究事業 「日中両国を含む東アジア諸国におけるがん対策の質向上と標準化を目指した調査研究」班
共同研究	韓国	疫学・予防部	21.12.2～21.12.5	第3次対がん総合戦略研究事業 「日中両国を含む東アジア諸国におけるがん対策の質向上と標準化を目指した調査研究」班
研修	韓国	消化器内科部	22.1.18～22.1.29	
共同研究	インドネシア、中国、韓国、台湾、フィリピン、ネパール	疫学・予防部	21.3.17～21.3.19	第3次対がん総合戦略研究事業 「日中両国を含む東アジア諸国におけるがん対策の質向上と標準化を目指した調査研究」班

2 派遣状況

目的	派遣者	派遣先	期間	備考
研究発表	疫学・予防部 室長 松尾 恵太郎 疫学・予防部 主任研究員 細野 覚代 疫学・予防部 リサーチレジデント 尾瀬 功	アメリカ デンバー	21.4.17～ 21.4.23	第100回米国癌学会総会(AACR)
研究発表	分子腫瘍学部 室長 近藤 豊	アメリカ デンバー	21.4.18～ 21.4.22	100th American Association of Cancer Research
研究発表	分子腫瘍学部 部長 関戸 好孝	イタリア ローマ	21.4.20～ 21.4.25	The Hippo Tumor Suppressor Pathway : A Brain Storming Workshop
情報交換	研究所長 田島 和雄	デンマーク オルフス ノルウェー オスロ	21.4.25～ 21.4.30	北欧先住民民族のがんの疫学研究
共同研究	研究所長 田島 和雄	中国 南京	21.5.8～ 21.5.12	日中韓三国共同研究打ち合わせ会議
研究発表	消化器内科部 医長 澤木 明	アメリカ フロリダ州オーランド	21.5.27～ 21.6.3	米国臨床腫瘍学会
会議出席	薬物療法部 部長 室 圭	アメリカ シカゴ	21.5.28～ 21.6.4	2009 ASCO Meeting
研究発表	薬物療法部 レジデント 設楽 紘平			
研究発表	疫学・予防部 部長 田中英夫	アメリカ ニューオリンズ	21.5.31～ 21.6.7	International Association for Cryptologic Research2009
研究発表	消化器外科部 医長 佐野 力	韓国 ソウル	21.6.14～ 21.6.28	Asan Medical Center Ulsan University Medical School
会議出席	薬物療法部 部長 室 圭	ハンガリー ブダペスト	21.6.18～ 21.6.22	LEAD Summit VII

目的	派遣者	派遣先	期間	備考
情報収集	外来部 部長 堀尾 芳嗣	中国 香港	21.6.23～ 21.6.26	BAY43-9006/ Investigators' Meeting
招請講演	遺伝子医療研究部 部長 瀬戸 加大	ブラジル サルバドール市	21.6.29～ 21.7.7	14th International Conference on Human Retrovirology (国際HTLV-1会議)
共同研究	遺伝子医療研究部 部長 瀬戸 加大	韓国 ソウル	21.8.7～ 21.8.9	共同研究での論文作成のための議論
情報交換	研究所長 田島 和雄	ネパール カトマンズ・チトワン・ポカラ	21.8.7～ 21.8.13	中央アジアのがん罹患状況とがん対策の実態把握
情報収集 研究打合	疫学・予防部 部長 田中英夫			コイララ記念がんセンター病院
研究発表	分子腫瘍学部 室長 近藤 豊	シンガポール	21.8.24～ 21.8.25	4th Asian Epigenomics Meeting "Epigenetics in Development and Disease Conference"
会議出席	薬物療法部 部長 室 圭	台湾 台北	21.8.26～ 21.8.28	A S I A C R C & N E T advisory board meeting
共同研究	研究所長 田島 和雄	韓国 ソウル	21.9.13～ 21.9.15	日中韓三国共同研究打ち合わせ会議
研究発表	薬物療法部 レジデント 横田 知哉	ドイツ ベルリン	21.9.19～ 21.9.26	E C C O 15-34 E S M O Multidisciplinary Congress
研究発表	消化器内科部 医長 原 和生 消化器内科部 医長 肱岡 範	台湾 台北市	21.9.27～ 21.9.30	アジア太平洋消化器病学会
情報収集	総長 二村 雄次	フランス パリ	21.9.29～ 21.10.2	第111回フランス外科学会 名誉会員就任
研究発表	薬物療法部 レジデント 設楽 紘平	アメリカ フィラデルフィア	21.9.29～ 21.10.5	The 2009 Gastrointestinal Oncology Conference
研究発表	消化器内科部 部長 山雄 健次 消化器内科部 医長 今村 秀道 消化器内科部 レジデント 松本 和也	韓国 ソウル	21.10.8～ 21.10.12	S G I 2009
共同研究	研究所長 田島 和雄	中国 江蘇省・山東省	21.10.9～ 21.10.12	日中韓三国共同研究打ち合わせ会議
研究発表	消化器内科部 医長 澤木 明	中国 広州	21.10.9～ 21.10.12	国際医薬・製薬科学シンポジウム
研究発表	疫学・予防部 主任研究員 川瀬 孝和	アメリカ サンディエゴ	21.10.12～ 21.10.18	Advance in Breast Cancer Res. Conference
研究発表	遺伝子医療研究部 部長 瀬戸 加大	アメリカ オハイオ州コロンバス市	21.10.13～ 21.10.18	第24回国際比較白血病および類縁疾患学会
研究発表	消化器内科部 医長 肱岡 範	アメリカ カリフォルニア州 サンディエゴ	21.10.24～ 21.10.26	米国消化器病学会
研究発表	疫学・予防部 主任研究員 川瀬 孝和	アメリカ サンフランシスコ	21.11.2～ 21.11.7	米国適合性学会
研究発表	消化器外科部 医長 清水 泰博	アメリカ ハワイ	21.11.2～ 21.11.8	40th Anniversary Meeting of American Pancreatic Association and Japan Pancreas Society
会議出席	薬物療法部 部長 室 圭	フィリピン セブ	21.11.3～ 21.11.7	Investigator Meeting

目的	派遣者	派遣先	期間	備考
研究発表	消化器内科部 部長 山 雄 健 次 消化器内科部 医長 水 野 伸 匡 消化器内科部 医長 脇 岡 範 消化器内科部 医長 今 村 秀 道 消化器内科部 シニアレジデント 小 林 佑 次 消化器内科部 レジデント 松 本 和 也 消化器内科部 レジデント 鈴 木 晴 久	アメリカ ハワイ州 ホノルル	21.11.4～ 21.11.6	自己免疫性膵炎に関するコンセンサスマーケティング、米国膵臓学会/日本膵臓学会合同会議
研究発表	薬物療法部 医長 高 張 大 亮	中国 南京	21.11.5～ 21.11.7	中日胃癌学会
研究発表	消化器内科部 部長 山 雄 健 次 消化器内科部 レジデント 小 林 佑 次	中国 上海	21.11.13～ 21.11.15	上海新華医院学会
研究発表	研究所長 田 島 和 雄	エクアドル マンタ	21.11.18～ 21.11.24	第3回エクアドル癌学会への招待(特別講演)
研究発表	内視鏡部 医長 田 近 正 洋 消化器内科部 医長 近 藤 真 也	イギリス ロンドン	21.11.20～ 21.11.25	欧州消化器病学会
研究発表	遺伝子医療研究部 部長 瀬 戸 加 大	アメリカ ニューオリンズ	21.12.3～ 21.12.10	第51回アメリカ血液学会
研究発表	疫学・予防部 主任研究員 川 瀬 孝 和	アメリカ ニューオリンズ	21.12.4～ 21.12.10	第51回アメリカ血液学会
情報収集 研究打合	疫学・予防部 室長 松 尾 恵 太 郎	アメリカ ワシントン・テキサス州	21.12.4～ 21.12.11	アメリカ国立がんセンター アメリカがん学会がん予防会議
会議出席 研究発表	薬物療法部 部長 室 圭	台湾 台北	21.12.12～ 21.12.13	第2回日台腫瘍内科国際シンポジウム
研究発表	研究所長 田 島 和 雄	タイ ビツアヌローク	22.1.7～ 22.1.21	第15回チャールズ・ハイデルベルグ国際がん研究シンポジウム(招待講演)
会議出席	薬物療法部 レジデント 横 田 知 哉	スペイン マドリード	22.1.11～ 22.1.14	Investigator Meeting
研究発表	分子腫瘍学部 室長 近 藤 豊	プエルトリコ	22.1.20～ 22.1.23	An AACR Special Conference on Cancer Epigenetics, 2010
会議出席 研究発表	薬物療法部 部長 室 圭 薬物療法部 医長 高 張 大 亮 薬物療法部 レジデント 設 楽 紘 平	アメリカ サンフランシスコ	22.1.21～ 22.1.26	2010 ASCO-GI
研修	疫学・予防部 室長 松 尾 恵 太 郎	フランス リヨン	22.1.25～ 22.3.31	UICC YY Fellowship
研究発表	総長 部長 二 村 雄 次	イタリア マドンナ・ディ・カムピリオ	22.1.26～ 22.2.1	イギリス消化器外科学会主催 国際肝胆膵外科学会
研究発表	遺伝子医療研究部 瀬 戸 加 大	アメリカ ハワイ州マウイ島	22.1.27～ 22.2.1	T細胞性リンパ腫会議
研究発表	研究所長 主任研究員 田 島 和 雄	アメリカ ハワイ島	22.2.5～ 22.2.9	第8回日米癌合同会議
研究発表	疫学・予防部 室長 細 野 覚 代	アメリカ ワイコロア	22.2.5～ 22.2.11	第8回日米癌合同会議
研究発表	分子腫瘍学部 室長 近 藤 豊	名古屋	22.3.6	The 15th Aichi International Cancer Symposium
研究発表	分子腫瘍学部 近 藤 豊	札幌	3.12～ 22. 3.13	Sapporo Cancer Epigenetics Workshop of the A3 Foresight Program and the First Sapporo International Seminar on Cancer Epigenetics

第6章 部門紹介

第1節 病院

消化器内科部

消化器疾患（食道、胃、十二指腸、大腸、肝臓、胆嚢・胆管、膵臓）のがんの診断と治療を中心に、(1) 安全かつ質の高い医療を提供すること、(2) 患者さんの負担を軽減すること、(3) 知りえた情報は患者さんと医療スタッフが共有し治療を行うこと、を目標に行っています。

平成21年度入院患者数（のべ人数）の疾患別内訳は、食道がん183例、胃がん（GIST含む）236例、肝がん19例、大腸がん48例、胆道がん102例、膵がん304例などでした。とくに食道がんと膵がんに関しては来院され、入院加療をされる患者さんは中部地方では最も多い施設の一つです。

内視鏡的診断と治療に関しても高いレベルの技術を提供させていただいています。とくに内視鏡を用いた食道・胃・大腸などの消化管がんの内視鏡的切除術、閉塞性黄疸に対する内視鏡的ドレナージ術と超音波内視鏡を用いた胆・膵がんの正確な診断と治療を得意としています。平成21年度の検査実績は、上部消化管内視鏡検査4779件、下部消化管内視鏡検査2717件、内視鏡的膵管胆管造影検査371件（うち胆道ドレナージ214回）、超音波内視鏡検査934件（うち超音波内視鏡下生検299回）でした。

消化器がんに対する内視鏡的治療の診療実績は、内視鏡部部門紹介を参照して下さい。

移転あるいは手術不能な進行がんにおいては常に患者さんのQOLを考慮し、化学療法や放射線治療を行っています。また、全国のがんセンターと協力して抗がん剤の臨床試験を積極的に推進し、一般診療では使用できない新規抗がん剤や既存の抗がん剤を組み合わせる治療を提供しております。平成21年度化学療法、放射線療法実績（年間入院患者数（のべ人数））は、胃がん112例、食道がん114例、大腸がん14例、膵がん130例、胆道がん43例、肝がん4例でした。

若手がん研究者の育成をめざしてレジデント、数多くの国内・国外からの研修、見学を受け入れています。本年度はレジデント4名、海外からはエジプトから1名の研修医を受け入れました。さらに国内・国外（韓国、中国、インド）から6名の短期見学者を受け入れました。また、研究の成果は学会発表120件（国内90件、国外24件）、論文投稿66件（和文40件、英文26件）などを通じ積極的に公表しています。

内視鏡部

当部は2005年4月に開設されました。内視鏡検査・内視鏡治療の高度専門化に伴い、消化器内科部のスタッフの一部を内視鏡検査・治療の専任とし、この分野のさらなる発展を目的として立ち上げられました。専任スタッフは3人ですが、消化器内科部のスタッフの6人は内視鏡部も兼任しており、実際の検査・治療は消化器内科部・内視鏡部が一体となって行っています。

当部の目標は、苦痛のない正確な診断と安全確実な内視鏡治療です。食道癌・胃癌・大腸癌などの消化管の癌の早期発見はもちろん、色素を散布した内視鏡検査や拡大内視鏡・超音波内視鏡などを用いて癌の広がりや深さの診断を精密に行います。

NBI(narrow band image)やFICE(Flexible spectral Imaging Color Enhancement)などの新しい画像強調診断法を積極的に取り入れています。また苦痛のないように鎮静剤や経鼻内視鏡用の極細径内視鏡を適宜使用して行います。消化管の癌の内視鏡切除は、外科手術にくらべて体に大変やさしい治療法です。この方法を行う場合には、その適応・方法・合併症などを十分説明し、ご理解いただいた上で行います。なお、胆膵疾患の内視鏡診断（内視鏡的胆膵管造影、超音波内視鏡検査、超音波内視鏡下穿刺生検）・内視鏡治療（乳頭切開、乳頭切除、胆管ドレナージ）は消化器内科スタッフが中心となり行っています。

診療実績は、昨年1年間の食道・胃・大腸の内視鏡検査数と内視鏡治療数は、上部消化管内視鏡検査4,777件、下部消化管内視鏡検査2,685件、食道癌内視鏡切除45件、胃癌内視鏡切除92件、大腸癌・ポリープ内視鏡切除342件、内視鏡的消化管狭窄拡張術188件などとなっています。検査数・治療件数いずれの数字も年々増加傾向にあります。食道癌の内視鏡切除は、以前は年間20例未満でしたが、最近顕著な増加がみられています。胃癌に対する内視鏡切除は、2003年より新しい方法として内視鏡的粘膜下層剝離術（ESD）を導入して適応が広がり、その数も増加しています。本法は食道や大腸でも適応されてきており、内視鏡切除の適応がますます広がってきております。

研究面では胃MALTリンパ腫に対するヘリコバクターピロリ除菌療法は、日本で最も多くの症例に行っています。また、除菌療法の効果とMALTリンパ腫に特有な染色体異常との関係を世界に先駆けて解明しました。拡大内視鏡とNBI、FICEといった新しい画像強調法を併用して術前の癌の範囲診断と深達度診断を正確に行い、病理像との対比をしています。

呼吸器内科部

呼吸器内科部では、肺がん、胸膜中皮腫をはじめとした呼吸器腫瘍の診断と内科的治療を担当している。肺がんは増加の一端をたどっており、現在の年間死亡数は7万人以上に上り、2015年には10万人を越えることが予測されている。

診断に関しては、診断に難渋する診断困難例の紹介が多いのも当科の特色と考えられるが、診断困難例に対しては、超音波気管支鏡による診断に加え、放射線診断部とCTガイド下生検検査を行い診断を確定する場合、食道に接した腫瘍の診断には消化器内科部で食道からの超音波ガイド下生検を行い診断を確定する場合など、病院各部との密接な連携が構築できている。

肺がんの治療は、外科手術、抗がん剤による化学療法、放射線療法が3本柱とされているが、内科的治療としての化学療法の占める割合が大きくなっている。その理由は早い時期より肺がんは転移をすることが多く、全身療法としての化学療法が多くの症例に必要なためである。放射線治療が適応になる場合には放射線治療部と、手術に関しては胸部外科部と密接に連携をとり、最善の治療を目指した集学的治療を行っている。進行肺がんに対する標準的治療法は十分確立されたものではないが、呼吸器内科部では厚生労働省肺がん研究班(JCOG)や西日本がん

研究機構(WJOG)のメンバーとして治療法の開発を目指した臨床研究を行っている。がん薬物療法専門医による専門性の高い、繊細で患者さん本位の医療が行えるように心がけ、エビデンスに基づいた標準的治療を迅速かつ確実に提供するとともに、抗がん剤の臨床治験では、有望な分子標的薬や新規抗がん剤をいち早く患者さんに提供している。

基礎研究面では、肺がんの発生や増殖のメカニズムについて急速に知見が蓄積されつつあり、がん細胞の増殖を抑える分子標的薬による新しい治療法も開発されている。呼吸器内科部では、患者さんに最新で最良の治療を提供するとともに、新しい薬剤の肺がん治療への応用について研究所と共同研究し、基礎研究で得られた成果をいち早く臨床に還元していきたいと考えている。

血液・細胞療法部

血液・細胞療法部は、当センター設立当初より開設されていた血液化学療法部が、平成15年4月1日の組織改編により名称が変更された部門であり、悪性リンパ腫、白血病、骨髄腫などの造血器腫瘍に対する化学療法、抗体療法などの薬物療法と、自家もしくは同種造血幹細胞移植併用の大量化学療法などの細胞療法を専門とする診療科である。化学療法、新薬治験から移植まで全ての治療法に対応している。外来診療は新患、再来ともに毎日行っており、入院治療は6西病棟を中心に、癌の化学療法、移植療法、疼痛治療に精通した看護スタッフとともに行っている。化学療法（特に、初発例の化学療法）、抗体療法は、最近ではできる限り外来治療で実施することを原則としている。

基本方針として、医学的に十分な根拠（エビデンス）と各種ガイドライン・臨床実績に基づいた最適で最新の治療法を治療方針（Decision Tree）としてまとめ、どの患者さんにも、症例・病状に対応したきめ細かい適切な治療を、個々の医師の判断のみでなく診療科として責任を持って提供できるようにしている。

Japan Clinical Oncology Group (JCOG)、厚生労働科学研究造血細胞移植研究班、日本骨髄バンク、Japan Adult Leukemia Study Group (JALSG)などに積極的に参加し、わが国における造血器腫瘍の診断・治験・臨床研究の推進に主導的な役割を担うとともに、臨床検査/遺伝子病理診断部、研究所の腫瘍免疫学部、遺伝子医療研究部、疫学・予防部と三位一体となりトランスレーショナルリサーチを推進している。

薬物療法部

近年のがん治療における薬物療法（抗がん剤治療）の進歩は著しく、がん薬物療法の専門家（腫瘍内科医）が化学療法を実践していくことの必要性が叫ばれている。私どもは3名のスタッフと5名のレジデントの計8名という少ないスタッフ数ではあるが、がん薬物療法の専門家として少数精鋭で積極的に治療を行っている。

診療領域は、食道癌、胃癌、大腸癌といった消化管がんの化学療法、化学放射線療法を中心に、その他、原発不明癌、頭頸部癌、胚細胞腫瘍などの固形癌に対する化学療法を行っている。最近では新薬の第I相試験に力を入れている。外来診療は新患、再来ともに毎日行っており、入院治療は4階西と6階西病棟を中心に行っている。最近の抗がん剤治療は外来治療が主となっているが、入院での治療に関しては、癌の化学療法・疼痛治療・

緩和医療に精通した薬剤部や看護スタッフ、MSWらと共に診療に当たっている。

当科で行う薬物療法はエビデンスおよび最新の知見に基づいて治療を行っており、がん専門病院として他科（消化器外科、胸部外科、消化器内科、放射線診断・IVR部、放射線治療部、病理部）と緊密な連絡をとり、総合的な医療を提供している。基本的に確立された標準的薬物療法を行っているが、さらに優れた治療法の開発を目指した臨床研究（JCOGの公的臨床試験やWJOGの臨床試験、企業主導の治験、院内あるいは専門施設での自主研究など）にも積極的に取り組んでいる。また標準的治療が確立されていないがん種や一般的な治療が無効になってしまった場合には、新規抗がん剤や分子標的薬剤などの臨床試験を行い、新しい治療法や新薬の開発に努めている。

当科は抗がん剤治療を提供するとともに、院内での外来化学療法、入院化学療法が安全かつ適正に遂行されるために主導的な役割を担っており、化学療法チームを組織している。県のがん診療連携拠点病院として、特にがん薬物療法の地域のリーダーとして新たな治療開発とともに均てん化に取り組んでいる。

臨床検査部

臨床検査部は、がんセンターの基本理念及び臨床検査部の理念に基づき、がん専門病院の診療を支える精度の高い検査結果を提供すると共に、診察前検査に対応した迅速検査報告体制をとっています。また、時間外緊急検査には夜間の宿直体制、休診日の日直体制で対応しています。

部は2科8部門から構成され、血液検査部門では一般的血液検査である血球数算定検査、凝固検査、骨髄検査の他に、白血病や悪性リンパ腫を対象としたフローサイトメトリーによる細胞表面抗原解析を行っており、診断や残存腫瘍の検出に役立っています。また、骨髄移植や末梢血幹細胞移植のためのCD34陽性細胞の測定も行っており、その役割は重いと認識しています。

生化学・血清検査部門では、生化学的あるいは免疫学的手法による各種分析装置を使用し、血中の各種物質を精度よく迅速に測定しています。これらの結果により患者さんや疾患の状態を把握することができ、診断、治療、経過観察に役立っています。特に腫瘍マーカー検査は、がん細胞と直接関連する分子を測定し、がんの診断、進展状況や治療効果の判定に不可欠となっています。

一般検査部門では、尿を材料とした尿一般検査(蛋白質、糖、潜血など)や尿沈渣(尿中の細胞成分や固形成分を調べる)、便の潜血検査、や胸水・腹水などの穿刺液などの検査を行っています。

生理検査部門では、主に手術前やがんの化学治療前後の心肺機能評価を目的とした心電図、運動負荷試験検査、心臓超音波検査、肺機能検査を実施しています。また乳腺超音波検査・聴力検査・ピロリ菌呼気試験なども行っています。

病理検査部門では、生検組織・手術摘出臓器の病理組織標本の作製と術中迅速病理検査を行っています。原発不明がんや転移性がんの鑑別、がん関連遺伝子産物や関連ウイルスの検索、悪性リンパ腫などに対する免疫組織学的検索など、診断から治療方針の決定に重要な役割を果たしています。

遺伝子検査部門では、遺伝子を用いて腫瘍における遺伝子変異による診断を行っています。また、新しい治療薬である分子標的薬の治療感受性予測の検査をはじめとした有用な遺伝子診

断項目の拡充を図っています。

細胞診検査部門では、尿、子宮腔頸部および内膜材料を対象とした通常の細胞診の他に、手術中の胸腔あるいは腹腔洗浄液の迅速検査、超音波内視鏡下での穿刺吸引材料の迅速検査の実施で診療支援を行っています。また穿刺吸引細胞診の実施時にはベッドサイドに技師が赴き標本を作製し、質の高い標本作りに努力し診断精度向上に貢献しています。細菌検査部門では、抗がん剤投与や骨髄移植などで免疫機能の低下した患者さんの感染症に特に眼を向けて検査を行っています。また、院内感染対策チームの一員として、検出菌情報、耐性菌情報を提供し、アウトブレイク（集団発生）を防ぐための一翼を担っています。

遺伝子病理診断部

遺伝子病理診断部は、外来・入院部門を持たない特殊な診療科です。そのため、患者さんとは直接接する機会はありませんが、診断に関わる重要な三つの診断業務（病理組織診断、細胞診、遺伝子診断）を行っています。その内容は、生検で腫瘍の性質を判断し臨床医師に伝え、治療が効果的に行われているかを第三者的な目で判断する重要な役割を果たします。

この重要な業務について、中央病院のみならず、愛知病院、尾張診療所も含めた、愛知県がんセンター全体の病理診断を担い、安全、的確で迅速な診断を遂行することを通じて医療の質を高めることを目標としています。

1. 病理組織診断

平成21年は、中央病院約7958件、愛知病院2766件の病理診断を行っています。そのほとんどが腫瘍性疾患であり、件数が同等の一般病院とくらべて作業量はその数倍にのぼります。術中迅速検査数が多いのも特徴であり、年間述べ2108件・一日平均延べ9～10件をこなしています。また、細分化、専門家が進む各科の要求に対応するため、外部エキスパートの応援も含め、高度で専門化された病理診断を遂行しています。このほか、免疫組織学的解析も開発当初より積極的に取り入れ、原発不明がんや転移性腫瘍の診断、造血器腫瘍の診断、腫瘍の悪性度診断に役立っています。核酸抽出が容易な固定包埋方法の開発や穿刺細胞診からのセルフブロック標本の作成も平行して行っています。

2. 細胞診

平成21年には、中央病院約6922件、愛知病院約1480件の細胞診のうち、診断医に回る件数は半数以上であり、さらにその約半数近くが偽陽性以上を占めます。すなわち全体としておよそ1/4の症例が偽陽性もしくは陽性であり、がんセンターの特徴を良く表わしています。特に乳腺腫瘍の細胞診は年約1000件前後を占めるとともに、手術適応、術式決定について重要な情報を提供しています。細胞診は簡便で、迅速な診断法であり、必要な場合には検体採取当日の報告も積極的に行っています。さらに、内視鏡室やエコー室に直接出向いて細胞量のチェックや細かい臨床情報交換を通じて、診断精度を上げる試みも行っています。

3. 遺伝子診断

当部の特徴の一つとして、院内で多数の遺伝子解析を施行していることを挙げるができます。国内でも高い水準を誇り、肉腫の診断はもとより、分子標的療法の効果予測（肺癌におけるEGFR-TKIs、大腸癌におけるセツキシマブ、乳癌・胃癌におけるトラツズマブなど）を中心に行っています。これらの結果に

ついて年間1800件のレポートを提出しています。この実績から、多数の見学者や研修者を受け入れると同時に、これらの結果をもとにした研究成果は海外でも高く評価されています。

頭頸部外科部

頭頸部外科という診療科は、最近、全国的に増加してきた呼称ですが、多くの場合、耳鼻咽喉科・頭頸部外科というように用いられ方をしております。従いまして、私どもの領域は従来の耳鼻咽喉科とはほぼ同義であります。眼科領域、脳神経外科領域および脊椎を除く頭部、頸部臓器の腫瘍性疾患を扱っております。主に鼻、副鼻腔、口腔、咽頭、喉頭、唾液腺、甲状腺、頸部食道の腫瘍性疾患の治療にあたります。頸部については、甲状腺、頸部食道までを守備範囲としておりますので、一部、乳腺・内分泌外科および消化器外科ないし胸部外科の領域とも重なりますが、当院におきましては甲状腺腫瘍、頸部食道癌は当科で治療を行っております。

当科の人員構成は部長の長谷川をはじめ、医長の寺田、花井、小澤、さらにレジデントが21年度は4名在籍しており、総勢8人で日々の診療にあたっております。長谷川は部長として科全体を統括し、入院患者の主治医は部長と医長の4人がレジデントと共に担当しています。外来は火曜日を除く、月、水、木、金の週4日です。

頭頸部癌の治療については、歴史的に拡大手術による治療成績の向上の時代を経て、今日では、根治性を損なわない縮小手術、機能温存手術、また、化学療法および放射線治療による臓器温存治療へと治療戦略がシフトしてきております。私どもは頭頸部外科であり、外科的治療が私どもの仕事で最も大きなウェイトを占める部分ではありますが、積極的に化学療法を取り入れ、当院の放射線治療部と協力し、放射線治療を取り入れ可能な限り臓器温存、ないし手術が必要な場合でも縮小、機能温存手術に努めております。常に、治療を受ける方の根治性と生活の質を念頭において日々の診療を行っております。平成21年度は他科の手術に協力した例を含め、約500例の手術を行いました。

研究面では、頭頸部領域における厚生省班研究に積極的に参加し、臨床試験も数々手がけております。当科におけるオリジナルの研究としましては、薬物療法バイオマーカーの研究、口腔癌におけるセンチネルリンパ節ナビゲーション手術の研究、頭頸部がんの分子病因解析、機能的再建などが主なテーマであります。また、これらにとどまらず、日々の臨床をテーマにした研究も行い、全国学会等で積極的に発表、論文の投稿を行っております。平成21年度の業績は学会および研究会発表が31件、論文が欧文6篇と邦文8篇の14編でありました。

今後も患者さまの利益につながるよう、臨床、研究ともに日々努力を続けていきたいと思っております。

輸血部

愛知県赤十字血液センターから供給される輸血用血液製剤主に赤血球製剤、血小板製剤、血漿製剤の確保から保存、支給までを一元的に管理している。輸血の検査項目としては血液型検査、赤血球製剤を輸血する場合の交差適合試験、赤血球がすでに不完全抗体で感作されているか否かを確かめる直接抗グロブリン試験、赤血球に対する抗体スクリーニング（間接抗グロブリン

試験)などで、人による過誤を減らすため自動輸血検査装置を用い、より安全性の高い輸血検査を実施している。

血液のがんなどに有効な治療法として末梢血幹細胞移植が行われるようになってきた。これは従来、血液幹細胞として骨髄から採取されてきたが、末梢血にも流れていることが明らかになり、血球成分採血装置を用いて腕の静脈から採取する方法である。その採取、分離、保存を血液・細胞療法部とともに実施している。

また、愛知県赤十字血液センターの協力を得て、輸血に関する情報の収集や輸血副作用の原因究明などを行っている。年に6回、輸血委員会を開催し輸血事故防止や適正な輸血について話し合いの場を設けている。平成13年度から臨床検査部と協力して24時間体制で時間外の緊急輸血に対応している。

形成外科部

形成外科は、身体外表の形状変化に対して、外科手技によって機能・形態を正常に近づけることにより、個人が社会に適応することを目的としています。

たとえば、舌痛により舌の大部分を切除された場合でも、大腿部や腹部の皮膚を含めた組織（遊離皮弁）を移植することにより、残った舌の動きを妨げず、食事や会話をするのが可能になります。また、乳房再建では、一人一人の希望に合わせた再建をこころがけ、乳癌術後の生活の質がなるべく保たれるよう手術を行っています。

当院の特徴として、他科と共同で手術を行うことが多く、口腔癌や咽頭癌切除後や乳房切除後、四肢・体幹の腫瘍切除後に、体のさまざまな部位から皮膚・皮下組織、筋肉、骨、腸などを移植する再建手術を行っています。

I) マイクロサージャリー（顕微鏡下手術）を用いた再建

舌癌の手術では、舌の半分が大部分を切除されてしまうことがあります。大腿部や腹部の皮膚を含めた組織（皮弁）を移植することにより、残った舌の動きを妨げず、食事や会話することが可能になります。大腿部や腹部などの頸部からはなれた部位から移植する場合、皮弁が口やのどで生着するためには、顕微鏡下の血管吻合術が必要となります。2009年4月～2010年3月の1年間に91件のマイクロサージャリーを用いた再建を行いました。

II) 乳房再建

乳癌手術後の乳房再建は、主に2通りの再建方法があります。腹部や背部の皮膚や皮下脂肪等の自家組織を用いる方法と、インプラントによる人工物を用いた方法です。それぞれ特徴があり、患者さんの希望や適応に添った方法が選択されています。当科では平成21年度39件の乳房再建関連手術をおこないました。

III) 瘢痕や変形に対する治療、創治癒遅延に対する治療

手術後の傷跡や変形が気になる方の修正や傷跡がケロイド状になった方の治療なども行っています。また、褥瘡に関しても、コメディカルスタッフと共同で治療に関わっています。

IV) リンパ浮腫の治療

現在、月に一回ほどリンパ浮腫外来の診察を担当させていただいています。

今後、他のリンパ浮腫外来を担当している先生がたと相談し、外科的治療の適応のある患者さんの治療にも関わって行きたい

と思っています。

本年度よりレジデント1名が新たに加わり、スタッフ1名、レジデント2名の体制で診療に当たっています。今後さらに臨床に即した研究を行い、よりよい再建手術が行えるよう研鑽して参りたいと思っています。

胸部外科部

胸腔内臓器の悪性腫瘍の診療、すなわち原発性肺癌、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、および食道癌の外科治療を中心に、薬物療法や緩和医療まで担当している。スタッフは光富徹哉（部長、副院長兼務）、波戸岡俊三（集中治療室部長）、安部哲也、伊藤志門、福井高幸の計5名である。呼吸器外科を光富、伊藤、福井、波戸岡で、食道外科を波戸岡、安部で担当している。これにシニアレジデントとして片山達也（呼吸器）、斎藤卓也（食道）の2名と、福本紘一、厚田幸子、小野里良一、丹羽由紀子の4名がレジデントとして診療を行った。さらに、九州大学から須田健一、群馬大学から富沢健二の2名が当科にて肺癌の分子生物学的な基礎研究を行っている。

日本の癌死亡原因の1位は肺癌であり、これを反映して当科の肺癌手術症例は増加傾向にある。平成10年に初めて100例を超えた切除症例数は、平成19年には200例を突破したが、平成21年は195例であった。なお、呼吸器外科全体の手術は283例であった。1982-2002年の肺癌切除症例においてステージごとの5年生存率はIA、IB、IIA、IIB、IIIAでそれぞれ、83,66,65,45,32%で、1999年の全国集計13010例の83,66,61,47,33%と比して遜色ない成績を誇っている。一方、食道外科においても切除数は増加の一途をたどっており、平成21年の切除症例数は58例であった。治療成績は、当初15.5%であった5年生存率は3倍以上の伸びを示し1998年-2002年の全症例の5年生存率は53%となっている。

肺癌も食道癌も代表的な難治癌であり、新たな治療戦略を構築していく必要がある。このためには多施設共同で臨床試験を行っていくことが必須であり、われわれはJCOG（日本臨床腫瘍研究グループ）やWJOG（西日本がん研究機構）などの日本代表するがん臨床研究グループの中核的メンバーとして活動している。本年度には、当院が中心となって実施したWJOG臨床試験の結果を論文発表し、(Lancet Oncology) 肺癌化学療法の治療方針の変革に寄与している。

他癌種と同様に肺癌に対しても分子標的薬がつつぎと臨床応用されつつある。ゲフィチニブ（イレッサ）やエルロチニブ（タルセバ）は上皮成長因子受容体(EGFR)のチロシンキナーゼに対する選択的阻害剤で、EGFR遺伝子の突然変異を有する患者（肺癌の一部）に劇的な効果を示す。われわれは遺伝子病理診断部とともにこの発見の重要性にいち早く注目し、EGFRの遺伝子変異のゲフィチニブの効果予測因子としての意義を追試して専門誌に発表するとともにEGFR遺伝子検査を実地臨床へ取り込んだ。本年度は、エルロチニブの中枢神経系に対する良好な抗腫瘍効果に実臨床で着目し、論文発表を通じて世界に発信した。また、EML4-ALK遺伝子異常に対する治験への参加など、遺伝子情報などががんの個性を明らかにし、投与に適切な患者さんを選択することで、最小の負担で最大の効果が得られる医療を提供できると考えている。

乳腺科部

平成21年度は岩田広治、山下山年成(6月退職)、藤田崇史、林裕倫、安藤由明のスタッフ5名(6月から4人)と、堀尾、波戸、豊島、山田のレジデント4名の体制で診療にあたった。乳腺科の特徴は外来診療がメインであり、手術や全身状態の悪い方の入院など特殊な場合を除き、化学療法などもすべて外来で行っている。一日の外来患者数が100人を超える日も多く、多くの紹介患者を含め新患患者が1日30人を超えることも稀にある。乳腺科は、乳癌の診断から手術、薬物療法、再発治療まで、トータルに乳癌診療を担当している。

診断では、山下、安藤がマンモグラフィ読影資格のA判定をもち読影を担当、また超音波検査も検査技師あるいは乳腺科スタッフ(藤田、林)が毎日午後に行っている。マンモグラフィ検診の普及に伴い、非触知病変の確定診断の重要性が増してきた【ステレオガイド下マンモトーム生検:82例、超音波ガイド下マンモトーム生検:182例】。非触知乳がんの低侵襲な診断(細胞診、マンモトーム生検)に努めることにより、平成21年は乳癌手術患者の約17.5%が非浸潤癌であった。

手術は、平成21年の乳癌手術患者数が394人と年間の乳癌手術患者数が400名を若干下回り(スタッフが6月から1名減により)、温存率は48.4%であった。センチネルリンパ節生検は1999年からの独自の検討が評価され、先進医療の承認をいただき現在実施している。平成21年は、これによる腋窩リンパ節郭清省略が温存術群では81%、乳房切除群でも60%になっている。また平成21年は乳房再建手術が開始2年目で15例に1期再建手術が行われた。

薬物療法に関しては、術前療法症例が年々増加している。平成21年度の術前化学療法は香港との共同試験であるOOTR03試験へ登録し、術前ホルモン療法は閉経前患者への治験(Zoladex+TAM vs Zoladex + ANA)と、閉経後の方はC-SPOR-06(NEOS)試験へ登録した。術後薬物療法に関しては世界的なエビデンスに基づき当院の独自の治療指針を作成し、地域の先生方の好評を得ている。再発治療では、様々な関連科(整形外科、放射線治療部、放射線診断部、脳外科、循環器科など)と密な連携を保ちながら、co-medicalとも連携し、チームアプローチを実践している。平成21年度は乳癌看護認定看護師2名の活動が本格化して、外来と入院での継続したチーム医療がよりスムーズに行え、毎週開催される再発カンファレンスは入院早期からの方針決定の場として定着した。術前、術後、再発治療を通じ、日本あるいは世界との共同試験として、多数の治験、臨床試験に参加している。

このような日常業務で忙しい毎日であるが、乳癌学会をはじめとする各種関連学会にはスタッフ、レジデント共に積極的に発表し高い評価を得ている。また、地域の活性化のために、TBCRGという東海地区の臨床試験グループを立ち上げ、事務局を当院において臨床試験を行ない、平成21年12月にアメリカの学会でTBCRG03試験の結果を発表した。

消化器外科部

消化器外科部では、腹腔内消化管及び肝胆膵領域の悪性腫瘍を診療対象としています。平成21年度のスタッフは胃癌を中心とする上部消化管グループ(伊藤誠二、三澤一成、伊藤友一)、

下部消化管グループ(平井孝・消化器外科部長、金光幸秀、小森康司)、肝胆膵グループ(清水泰博、佐野力、千田嘉毅)で、さらにシニアレジデント2名(中村一郎、榑原巧)とジュニアレジデント4名(金城和寿、志村正博、松井聡、森本守)が加わり、診療・研究にあたりました。平成21年度も院内では消化器内科、内視鏡部、放射線診断部、薬物療法部と、また院外では診療所、他病院の医師との連絡を密にし、紹介された時はなるべく早く手術となる様にし、治療後は報告を速やかに行い、化学療法などの次のステップに移行できるように努力しています。

診療面では手術枠の有効利用に努め、1年間に715件の手術を行いました。前年度(796件)の9%減であり、21年度の病院全体(2200件)の33%にあたります。愛知県がんセンターでの治療を希望される方をなるべく待たせない努力をしています。また、病院全体として浸透してきているチームケア、クリニカルパスの充実を図り、合併症や医療過誤のおきにくいシステム作りに努めています。

研究面においては、学会発表50件、論文発表15編(うち英文5編)でした。

胃グループでは年間約250例の胃癌初回手術を行っています。近年は低侵襲手術である腹腔鏡下手術が増加、平成20年度は約70例の腹腔鏡下胃切除術を行いました。ガイドラインに準じた治療を原則とし、同時にJCOGを始めとする多施設共同臨床試験に積極的に参加し、手術や化学療法のエビデンス作りにも取り組んでいます。またがんセンター研究所との微小転移の共同研究、工学系研究室との画像手術支援の共同研究などにも力を入れていきます。

大腸グループは年間360例の手術を行いました。早期癌に対しては経肛門手術(TEM)や腹腔鏡下手術などの低侵襲化手術を行っています。また、進行癌には従来より3群郭清を標準とし、手術の精度を高めたことにより、合併症を低下させつつ、10年単位でステージ別の5年生存率が改善しています。また、臨床試験は結果が臨床へ必ずフィードバックできるJCOG多施設共同試験を筆頭に、精度の高い研究に参画しています。再発癌に対しても手術、放射線治療(放射線治療部との連携)、化学療法(腫瘍内科医との連携)を選択肢とした集学的治療を工夫し治療率を高める努力を続けています。

肝胆膵グループは平成21年度も含め年間約150例の手術を行っています。大腸癌肝転移治療切除238例の5年生存率54%、10年生存率38%は極めて良好です。肝局所外科治療における重要な指標である残肝再発率は28%であり、他施設の報告40-60%を下回り、国立がんセンターの32%より良好です。膵癌も正確な術前診断、的確な手術適応の決定と術式選択により良好な成績を上げており、術後3年、5年生存率は36%、23%であり、日本膵臓学会膵癌登録(2003年)の5年生存率9.7%に比べて極めて良好です。また、膵癌や胆道癌では他施設共同研究に参加して、術後補助化学療法のRCTを施行中です。

整形外科部

整形外科部は外来部整形外科から平成15年6月より整形外科部として新設され、現在常勤2名のスタッフと1名のレジデントで臨床および研究を行っている。平成21年度の実績については、外来患者数は年間で7,377人であり、その内新患患者は191人で、

約60%が紹介患者であった。再来患者は3,185人、入院患者の依頼診察は646人、リハビリテーション依頼診察3,355人であった。これらの患者のほとんどが原発性骨軟部腫瘍あるいは癌の骨転移患者である。平成21年度の手術件数は年間131件であり、その内骨悪性腫瘍広範切除術9件、骨良性腫瘍切除術11件、軟部悪性腫瘍広範切除術31件、軟部良性腫瘍切除術40件、その他40件であった。原発性骨悪性腫瘍の5年生存率は67.3%、原発性軟部悪性腫瘍の5年生存率は79.2%とその予後は海外データと比較しても良好な成績である。しかしながら初診時転移を呈していた症例では予後は厳しく、このような症例に対しては末梢血幹細胞移植を併用した超大量化学療法や分子標的治療としての臨床試験を行っている。骨肉腫の治療に関しては名大プロトコルに基づく抗がん剤治療を手術と併用することで、初診時に遠隔転移がない症例の5年生存率が約90%、無病生存率が約70%、患肢温存率85%である。切除後の再建には顕微鏡を使つての自家複合組織移植術や、罹患骨を再利用する温熱処理骨移植というユニークな手術を行っており、これらの成果を学会で報告している。また、転移性軟部腫瘍又は骨腫瘍患者を対象とした治療や骨肉腫やユウイング肉腫に対する臨床試験も積極的に行っている。なお、当科外来で圧倒的に多いのは、患者の7割を占める骨転移であるが、骨転移患者の治療の第一選択は手術ではなく放射線治療や薬物治療であり、各科と連携しながらそれらの治療法向上に力を入れている。このうち脊椎への転移では、脊髄に一定量以上の照射ができないことから、脊髄には照射せず周囲の骨だけに照射する脊髄打ち抜き照射法を放射線治療部と共同で行っている。研究面においては、研究所と協力して、文部科学省科学研究費基盤研究「骨肉腫転移阻止の為の血管新生抑制剤と抗体投与による併用療法の開発」についての基礎的研究を行っており、今後の臨床にフィードバックしていきたいと考えている。

泌尿器科部

泌尿器科は、スタッフ3名で診療を行っている。平成21年度の手術件数は187例で、76例の全身麻酔手術、111例の腰椎麻酔手術を行った。全身麻酔手術の内訳は、根治的前立腺全摘術が50件、根治的腎摘術が11件、腎尿管摘出術が7例、根治的膀胱全摘術が6件、腎部分切除術が1例、副腎摘出術が1例であった。腰椎麻酔手術では、経尿道膀胱腫瘍切除術が46例、小線源治療が22例、男性のステントカテーテル交換が18例、前立腺 Saturation biopsy が10例、尿管鏡検査が7例、高位精巣摘出術が4例、その他（膀胱ランダム生検、除室術、尿道切開術、経尿道的凝固止血術）が4例であった。手術件数から明らかなように、愛知県がんセンター中央病院泌尿器科の診療の特徴は、最近急増している前立腺がんと膀胱がんが中心となっていることである。

前立腺がんに関しては、手術治療以外の根治治療として、放射線治療部と協力し、トモセラピーによる強度変調放射線治療（IMRT）で総照射量78グレイを照射している。手術治療（平成16年度は32件、平成17年度は47件、平成18年度は38件、平成19年度は48件、平成20年度は45件、平成21年度は50件、）も放射線治療（平成16年度は79件、平成18年度は71件、平成18年度は81件、平成19年度は76件、平成20年度は65件、平成21年度は65件）も

最近では症例数が安定している。また、根治的前立腺全摘術後の局所再発に対しても、三次元照射法による放射線治療を第一選択として行っている。前立腺癌の新しい治療法として、平成18年度6月からI-125シード線源を使用する小線源療法を開始し、月2例のペースで行っている。現在、前立腺がんに対する全ての保険適応の治療が愛知県がんセンター中央病院で可能である。

膀胱がんに関しては、表在性であれば経尿道膀胱腫瘍切除術を、浸潤性であれば根治的膀胱全摘術を基本的に行っている。表在性膀胱がんは、術後再発の頻度が高いので、抗癌剤（マイトマイシンC）やBCGの膀胱内注入療法を再発予防の目的で施行している。また、膀胱全摘術後の尿路変更も自然排尿型回腸新膀胱造設術、回腸導管造設術および尿管皮膚瘻造設術を適応基準を決めて選択している。

研究面では、前立腺がんに関しては、名古屋市立大学大学院実験病態病理学教室と前立腺がんに関与する癌遺伝子や癌抑制遺伝子について共同研究している。

婦人科部

婦人科部では女性性器に発生する悪性腫瘍の診断・治療を行っており、主に取り扱う疾患は子宮頸がん・子宮体がん・卵巣がん、平成21年度の初回治療症例数は各々171例・53例・35例で、これ以外に外陰がんや膣がん3例を治療した。この様に当院には国内有数の婦人科悪性腫瘍の症例数があり、現在東海地方の中核病院である。部内では手術や化学療法を中心に行い、放射線治療は放射線治療部と連携して行っている。子宮頸がんに対する主な手術は子宮頸部円錐切除と広汎子宮全摘術で、子宮体がんには主に準広汎子宮全摘術、卵巣癌には卵巣癌根治手術を行っており、昨年手術施行数は子宮頸部円錐切除術が117例、広汎子宮全摘術が70例、準広汎子宮全摘術が44例、卵巣癌根治手術が44例であった。他に良性～境界悪性卵巣腫瘍に対する付属器摘出術3例、初期の子宮がんや子宮肉腫に対する腹式子宮全摘術9例、子宮頸部異型上皮や初期子宮頸がんに対する腔式子宮全摘術4例、外陰がんに対する外陰腫瘍切除1例、腹腔内再発に対する再発腫瘍切除を1例、再発腫瘍に対する骨盤内蔵全摘術を1例施行している。放射線治療は、子宮頸がんの中でも進行症例や手術により子宮外病変が確認された症例に対し行っている。放射線治療時にはその効果を高めるために積極的に化学療法を併用し、進行癌の治療成績向上に努めている。化学療法は、主に子宮体がんや卵巣がんの手術後追加治療として使用し、進行症例に対する手術前化学療法も積極的に行っている。再発症例の場合には疾病の治療が難しいため、十分な説明と同意を得た上で延命を目的とした化学療法も行っている。診療にあたり、看護師や薬剤師など他のスタッフと連携し、また十分な説明機会を設けるなどして、患者さんとの意志の疎通がはかれる様努力している。現在婦人科部のスタッフは4名のみで、国内の他がん専門施設に比べ非常に少数であるため、日常診療以外の研究活動がなかなかできない状況である。それでも平成21年度の当院からの学会報告を6件、論文報告3件を行い、また日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）や婦人科悪性腫瘍化学療法研究機構（JGOG）などの主催する臨床試験や新規薬剤の治験に積極的に参加している。

麻酔科部

愛知県がんセンター麻酔科部平成21年度の常勤麻酔科医は4名で、定員に対し1名減のため苦しい運営となっている。しかし名古屋大学の麻酔科をはじめ、非常勤医の応援を得て、手術件数増という病院組織目標達成にむけて努力している。

麻酔科部長：細田蓮子・麻酔指導医、日本麻酔科学会代議員、ペインクリニック専門医、緩和医療学会暫定指導医

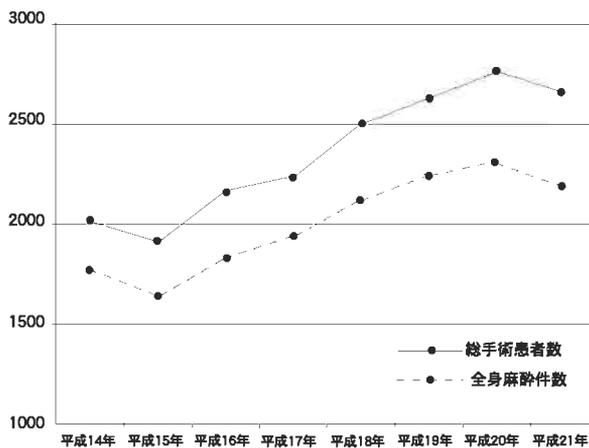
麻酔科医長：伊藤直哉・麻酔専門医

麻酔科医長：西良雅夫・麻酔専門医

麻酔科医長：仲田純也・麻酔専門医

平成21年度活動業務

手術総件数：2663件(前年度2761件)、全身麻酔：2188件(前年度2309件)、長時間麻酔：235件、緊急手術：84件であった。



平成21年度 麻酔科管理麻酔法別統計

全身麻酔（吸入）	835例
全身麻酔（TIVA）	57例
全身麻酔（吸入）＋硬・脊・伝麻	1258例
全身麻酔（TIVA）＋硬・脊・伝麻	43例
脊髄くも膜下硬膜外併用麻酔（CSEA）	0例
硬膜外麻酔	2例
脊髄くも膜下麻酔	3例
伝達麻酔	0例
その他	6例
合計	2204例

就任当初から、右肩上がりに手術件数を延ばしてきたが、21年度は手術件数が少し減少した。外科系ベテラン医師の世代交代もあり、総患者数減という残念な結果の反映だが、麻酔科としては初心を忘れずマンパワーを充実させ、安心安全の手術室運営、麻酔管理の達成を目指している。

麻酔法はレミフェンタニルという超短時間作用性のオピオイドによる鎮痛主体の管理にシフトしているため、術中覚醒に配慮し、BIS(脳の催眠レベルを測定する装置)を全室導入した。又、循環管理では侵襲的に心機能（心拍出量）を連続的に測定出来るピジレオを導入した。また、術中に使用する筋弛緩薬を確実に拮抗する新薬スガマデックスも早速に採用した。当がんセン

ターは頭頸部がん症例が各施設から集まっていた、気道確保の難しいことが多いので、挿管困難への対策として、エアウェイスコープ、エアトラック、ビデオ喉頭鏡、トラキライト、ファイバースコープ、緊急気管穿刺セットを充実させた。手術が決まった患者さんには必ず麻酔科医が訪問し、病歴、既往歴、合併症についても十分に把握して、安全な麻酔法を実施している。

新オーダーリングシステムへの移行は22年2月に実施された。患者、認証、術中管理、手技、薬品、消耗備品入力など看護部門に初めてPCを導入したが、皆の努力により円滑にスタートできた。事前の打ち合わせで想定されるトラブルをうまく回避できたことが成功の秘訣であった。

<今後の方針について>

電子カルテ導入に向け、手術室ではフィルムレスへの対応、電子麻酔記録の導入、医事物流への情報移行など議論を重ね、実施してゆかなければならないことが積み重ねられている。平成3年に新手術室が作られてから20年近くとなり、将来構想を立てなおす時期と思われる。

集中治療部

集中治療部は、平成21年4月から診療科として開設されました。内科系、外科系を問わず呼吸、循環、代謝そのほかの重篤な急性機能不全の患者を24時間体制で管理し、より効果的な治療を行うことを目的としています。

つぎの患者を集中治療管理の対象としています。1. 集中管理を必要とする術後患者、2. 大量化学療法、骨髄移植を受けクリーンルームでの管理を要する患者、3. 心タンポナーデなどのoncologic emergencyの患者、4. 一般病棟で急変し全身管理を必要とする患者。

病床は、ICU（集中治療室）4床、HCU（高度治療室）17床からなっています。ICUは術後回復室を高度にしたもので、主に全身麻酔による外科手術後の患者が、容態が安定するまで使われます。2：1看護体制（1名の看護師が2名の患者を担当）となっています。HCUはICUと一般病棟の中間の病床で、4：1看護（1名の看護師が4名の患者を担当）の体制で一般病棟へ移動するまでの病床として利用されています。

運営診療形式は、各診療科が独自に利用する主治医制をとっています。

集中治療認定看護師1名が中心となり、院内研修会、勉強会を開催しています。より安全で高度な周術期管理を行える体制を順次整えているところです。

放射線診断・IVR部

平成18年に放射線診断部から、放射線診断・IVR部へと部署名が変更になりました。以前から力を入れてきたIVRの名前を全面に押し出し、その活動内容が分かりやすくなっております。

メンバーは部長以下5名のスタッフと4名のレジデントの計9名です。全体に若い年齢層ながら、一般臨床ほか、学会・研究会臨床試験に力をいれるとともに、放射線科領域とは離れた消化器癌の化学療法にも深く関わって活発な活動を行っています。

画像診断部門では、まずCT装置は8列と32列のMDCTが稼働しており、年間14,000件以上の検査と読影が行われています。特にMDCTで得られるデータはMPR像や3D画像へと応用され、臨床的にも有用である事から、その需要は年々のびています。MRは3T装置が1台稼働しています。近年のMRではCT同様にポ

リウムデータが得られるようになり、病変部の詳細な観察が可能となっています。しかし、機器の発達もたらした大量のデータを効率よく処理し、臨床の場へと還元するにはモニター診断やフィルムレス化といった環境の設備が必須ですが、残念ながら当院は遅れており、今後、早急に進めていく必要があります。

PET検査は、がんの存在診断のみならず、治療効果の診断にも有用とされ、がん診療には欠かせないものとなっています。PET装置は当院にはないものの、同じ敷地内に建設された東名古屋画像診断クリニックの協力により、PETを含めた診療が身近なものとなりました。また、近年、メタストロンやゼパリンといった、放射性物質を用いた治療薬が発売され、ゼパリンを用いた悪性リンパ腫の治療は当部も協力して行われています。

IVR部門では、FOLFOX、FOLFIRI療法といった、大腸癌に対する全身化学療法が多く行われている事や、外来での抗がん治療、また終末期の在宅医療が普及してきたことにより、中心静脈ポートの需要が年々増加し、数年前まで年間150件程度でしたが、現在は400件を超えるようになってきました。また、平成21年度は、先進医療として腎悪性腫瘍、胸部悪性腫瘍、骨悪性腫瘍に対するラジオ波凝固療法、骨脆弱性疾患に対する経皮的椎体形成術に取り組みました。

放射線治療部

当科では1960年代に愛知がんセンター名誉総長高橋信二先生が開発された当時としては画期的な「高精度放射線治療」である原体照射法を当初より臨床応用し、以来頭頸部がん・婦人科がん・前立腺がん・肺がん・食道がんに優れた治療効果と安全性を報告してきた。近年治療技術や計画コンピュータの革新的な進歩により三次元放射線治療や定位放射線治療、強度変調放射線治療などの高精度放射線治療は急速に臨床に浸透しているが、これら最先端放射線治療の基礎は当院で長い実績をもつ原体照射法に端を発しているといっても過言でない。

現在当院では外部照射装置(リニアック 2台、トモセラピー 1台)、小線源治療 (RALS セレクトロン1台、密封小線源治療；イリジウム、ゴールドグリーン、ヨード)を主たる治療手法として年間1000名程度の新規患者治療を行っており、全国でも有数の治療件数を誇っている。また頭頸部がん・子宮がんに代表される根治的な放射線治療を行う患者は当科で化学療法を含む包括的治療を行っている。

高精度治療の代表的手法である強度変調放射線治療は「究極の放射線治療」と呼ばれ複雑な形状の病変にたいして正確な放射線投与が可能になると同時に、周辺的正常組織の放射線をきわめて少なくすることを可能にする。トモセラピーは強度変調放射線治療の専用機であり、ライナックでの強度変調放射線治療に比し効率よい運用が可能であるだけでなく治療精度が優れていると考えられている。トモセラピーはCT撮影装置を内蔵しており、治療毎に正確な位置確認を行うだけでなく、経過中の病変や臓器の移動形状の変化を確認しこの画像情報を元に線量分布の確認修正を可能にする優れた特徴を持っている。トモセラピーは現在主に頭頸部がん・前立腺がんの強度変調放射線治療を中心に行っており、将来肺定位照射への応用、婦人科がんへの強度変調放射線治療の適応を検討している。

当科の特徴として頭頸部癌の症例が豊富なことがあげられる。強度変調放射線治療だけでなく、動注療法、小線源治療など様々な治療手技をもちい機能温存を重視した個別化治療による個々の治療に対応している。頭頸部がんは発声、嚥下、呼吸などの重要な機能を担当する臓器であることに加え、形態を温存して治療することが美容的、精神的に満足度の高い治療ができる利点がある。昨今患者さんからのニーズの大きいいわゆる低侵襲治療の代表的治療の一つである。

トップレベルのがん専門病院に要求される 品質のがん治療の基盤治療の一つとして当科の放射線治療は大きく貢献している。

品質な集学的治療に重要な役割を果たすのみならず、がん治療に本質的な役割を担う緩和治療の根幹を支える重要な役割も担っている。今後も当科の放射線治療は当院の日常臨床および新しい治療開発に大きく貢献していくと思われる。

外来部

外来部は、病院の基本理念、基本方針に基づいて、初診患者さんや再診患者さんが外来診療に満足していただけるようにすること、かかりつけ医や地域の病院と当院の各診療科との医療連携がスムーズに行えるように院内外の調整を行うことが重要と考えています。また、がん診療も入院から外来に軸足を移してきており、外来で精密検査や化学療法などを受ける患者さんが増えているため、各診療科間の横断的で効率的な診療を行えるようにすることも重要です。

外来部所属の診療科としては、脳神経外科、皮膚科、眼科の3科です。当院のがん治療を安全かつ円滑に進めるために必要不可欠の診療科であるために外来部として統括され、名古屋大学から脳神経外科：夏目医師（月）、本村医師（水）、皮膚科：横田医師（水）、眼科：立川医師（第1・3・5金）、西口医師（第2・4金）が代務医師として外来診療を行っています。常勤医師ではないので、当院では手術などの治療は行っておりませんが、名古屋大学や名古屋医療センターなどと連携をとっています。

外来化学療法センターは、平成17年12月に29床で開設し、平成18年9月からは全診療科共通の点滴当番医制を導入、専任看護師、受付クラークも配置し、薬剤部の抗がん剤ミキシングの協力も得てほぼフルに稼働しています。一日の外来化学療法件数も約60-120となり、ベッドが3-4回転する日も多くあります。外来治験治療数も増加し、場所も手狭になってきています。安全で効率のよい外来化学療法を行うため、平成24年度には新外来化学療法センターの運営開始計画が立ち上がってきており、さらなる充実化が期待されています。

外来診療の大きな課題として診察待ち時間があります。平成19年にセカンドオピニオン外来を設置し、通常診療と分けることでセカンドオピニオン患者の待ち時間の短縮と時間的に余裕のあるセカンドオピニオンを受けていただくようになりました。再来診察も予約制が浸透してきています。再診患者の当日予約は10%未満になりました。しかしながら、がん患者の診療はなかなか時間通りの診察は難しい側面があります。初診患者も事前に医療連携室で予約がとれ、受診時間の予定がたつようにはしましたが、今後は紹介医に予約制の案内をさらに広げ、システムの簡略化もはかり、多くの初診患者の方が予約制度を利用できるようにすることを目指しています。

平成21年8月には日本医療機能評価機構による審査もあり、備品の整備(視野計の更新など)を行い、外来診療での中待ち合いの使用方法も見直しを行いました。平成22年2月15日より新しいオーダーリングシステムが稼働し、外来での患者呼び出しシステムも番号呼び出しとなりました。今後は電子カルテ導入に向けての種々の調整・整備及び業務電子化に対応することがさらに重要になってくると思われます。

循環器科部

循環器科部は平成21年4月に開設されました。循環器疾患一般の診療を行っております。循環器疾患には、心筋梗塞、心室細動など短時間で生命を奪ってしまう疾患があるため、常に、すばやく正確な判断が要求される仕事です。

当センターでは、次のような循環器科の業務を行っております。

1) がん治療前の循環器チェック

循環器疾患には、悪性腫瘍(以下がんと表現します)がほとんどありません。しかし、がんも循環器疾患も比較的高齢者に多く発症しますので、循環器疾患を持ってみえるがん患者さんは少なくありません。がん治療前に循環器チェックを行っておりますが、このチェックで循環器疾患が初めて見つかる方もおみえになります。

2) 循環器疾患を合併してみえるがん患者さんの循環器治療

手術療法、化学(薬物)療法、放射線療法、内視鏡治療などの多くのがん治療は心臓に負担をかけます。循環器疾患を合併してみえる場合、がん治療が安全に行なえるようがん治療に合った循環器治療を行ないます。

3) がん治療により誘発される循環器疾患の予防と治療

がん治療自体が心筋梗塞、狭心症、心不全などの循環器疾患の原因となることがあります。また、心毒性をもった抗がん剤による心筋障害が発生することもあります。これに対し、循環器科は、がん治療中に循環器疾患が発生しないように予防処置を講じます。循環器疾患が発生した場合には、治療を迅速に行ないます。

4) その他

転移性心膜炎の診断、人工ペースメーカが植え込みされている患者さんの放射線検査および放射線治療時の循環器的な診療支援。

これら雑多な診療内容ですが、がん診療の主科と連携しながら循環器診療を行っております。

スタッフは部長の波多野潔1名のみです。循環器専門医で狭心症や心筋梗塞などの虚血性心疾患、不整脈、人工ペースメーカ、高血圧症などの一般的な循環器疾患の多数の臨床研究および臨床経験がありますので循環器診療の知識と経験は豊富です。

がんセンター着任後は、がん患者さんに対する循環器診療を行っております。抗がん剤の心毒性や自律神経障害、悪性心膜炎に関する治療、研究などががん治療に伴う循環器診療を行ってきました。特殊な診療分野ですので解明されていない事象が多く、難しい舵取りが要求されます。しかしながら、赴任後10年以上のベテランです。蓄積した貴重な経験が、最良のがん患者さんのための循環器診療に導いてくれているものと自負しております。

緩和ケア部

2001年の緩和ケアチーム発足、2003年の緩和ケア部設立に続き、2008年7月1日からは細田蓮子麻酔科部長が緩和ケア部部長を兼務して新しい体制の下、緩和ケア部は充実した緩和ケアを提供し続けている。高度医療機関として、診療、研究、教育の三領域別に本年度の活動を大まかに報告する。

1 診療活動

緩和ケア部長は、全体統括、並びにがん性疼痛(特に神経障害性疼痛)および身体症状コントロールを図るための薬物療法、神経ブロックなどの治療、助言を行っている。また、ペインクリニック外来(毎週水曜)では、がん患者の痛みについて木村智政非常勤医師が相談にのっている。一方、こころの痛みについては、精神腫瘍診療科小森康永医師が入院緩和ケアを提供すると共に、外来でも危機介入とフォローアップを続けている。緩和ケアチームは、適切な緩和ケアが迅速に実施できるように病院全体で取り組むことを目的に組織されているが、本チームにも医師、看護師、薬剤師ほか、がん治療に関する専門的な力を発揮すべく多職種のメンバーが参加している。実際、がん看護専門看護師、各認定看護師を中心に、患者情報を的確に把握し、医師と薬剤部、MSW、病棟リンクナース、リハビリ、口腔ケア、また院内サポートチームとの連携により、迅速かつ専門的な緩和ケアの提供が可能になっている。緩和ケアチームへの相談はフリーアクセスであり、毎週水曜16時には、部長以下全メンバーで症例検討を続けている。平成21年度の依頼件数は、疼痛および身体症状に関する専門・認定看護師への依頼は95件であり、精神腫瘍医への入院初診依頼件数は281件であった。

2 研究活動

がん患者が入院から退院後まで円滑な医療の継続が出来る地域連携体制構築を目指し、細田らは在宅緩和医療アンケートを実施し、その結果を生かした地域緩和ケアネットワークを構築中である。また、サイコオンコロジーにおける患者の時間感覚をテーマに小森がモノグラフを執筆中である。

3 教育活動

本院へは看護師、薬剤師、精神科医など緩和ケアの研修に多くの専門家が短期、長期にわたり訪れるため、ベッドサイドでの教育も充実しているが、緩和ケア普及のための研修会や研究会のサポートも継続している。たとえば、2007年がん対策推進基本計画で、「すべてのがん診療に携わる医師が研修等により、緩和ケアについての基本的な知識を習得する」ことが目標として掲げられ、健康局長通知「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会の開催指針」が出されたことより、本年度も平成22年2月に2日間にわたり第二回緩和ケア研修会を主催し、受講者に厚労省からの修了証書を交付した(企画責任者は細田蓮子、伊藤志門医師/胸部外科)。また、各領域の第一線で活躍する講師を迎えて毎回開催される「名古屋がん疼痛緩和フォーラム」(本年度は7月)は、近隣の医療関係者に大変好評であった。さらに、毎月第一木曜の緩和ケア勉強会では、チームメンバーがテキストに沿って各専門領域を講義し、日勤後の看護師が多く熱心に参加している。アンチキャンサーリーグ(<http://www.pref.aichi.jp/cancer-center/200/235/index.html>)はHP上において患者体験など貴重な医療情報を提供している。

看護部

今年度のビッグイベントは、「7：1看護の導入」と「病院機能評価受審」であった。この2点を含め看護部の2009年度の目標を設定した。

看護部目標

1. がん看護の実践力向上のため、教育体制を整備する
2. チーム活動を発展させて、他部門との連携を強化する
3. 職員間の協力のもと、「7：1看護」を定着させる
4. 病院機能評価受審の中、看護周辺業務を中心に業務改善をすすめる

まず、「7：1看護」について紹介する。本来は忙しい医療現場に対して、手厚い看護の実践を目指して打ち出されたはずが、診療報酬の獲得のみが先行して、必要数の看護師の確保が困難な状況を生み出している。たくさんの新規採用者が入職してくれたので、人数上はその条件が整ったが、当院は特定機能病院ではないために、「看護必要度」という看護の煩雑さを評価する指標を毎日全患者を対象に行う作業が必要となった。ようやく諸条件が整い、7月から算定された。毎日、看護必要度は大丈夫か？人員等の諸条件は満たされているか？のチェックを行い、中途退職者にドキドキしながらも、診療報酬に貢献した。今まで人員不足を理由に十分に行えていなかった患者さんとの関りの時間が確保できた半面、所属の三分之一を新人看護師が占めることになり、いかに短期間で戦力とするかが大きな課題となった。これと関連する目標が1である。

すでに看護師の院内教育計画は実施されていたが、時代の要請としては、実力を兼ね備えたジェネラリストナースと、特定分野で力を発揮するスペシャリストナースのいずれかである。看護部は「クリニカルラダー」という臨床実践能力の段階表を用いて、各自が自分のレベルを知り、目標管理を実施している。このクリニカルラダーのレベルⅢ・レベルⅣの看護師をいかに効率よく育成していくかが、当院の看護部の看護レベルを維持する鍵であると考え、今年度3コースであるが、「がん看護ジェネラリストナース育成プログラム」を立ち上げた。プログラムの企画運営はその分野の認定看護師が行うこととし、愛知病院の協力を得て、累計213名の看護師が受講できた。今まで曖昧だった知識を確固たるものにできた、自信のなかった技術が確実に習得できた等、手応えが得られた。

2のチーム医療に関しては、病院機能評価受審もあり、各チーム活動はかなり活発に行われたと感じている。今年度の特に注目すべきは、退院調整会議の実施であると思う。準備、日程調整等実施にあたっては容易ではないが、開業医、訪問看護ステーションの看護師、ケアマネージャーに来ていただき、当方も主治医、看護師長、受け持ち看護師、MSW、薬剤師、理学療法士、患者、家族の参加による会議が開かれたことは、画期的なことと評価する。

病院機能評価において、「抗がん剤のミキシング」業務が指摘事項となった。人員の問題がその原因である。次年度の人員増で解決するとなると、看護部としては今までミキシングに要していた時間を、「化学療法看護」にあてることが可能となったことを意味する。看護周辺業務の業務改善と共に考えると、看護

師の免許にかけて引き受ける業務（業務拡大）と看護師免許がなくてもできる看護行為の委譲（業務縮小）の両面を常に意識して、「がん看護」は何をすることかを整理し、追求していきたいと思う。

最後に今年度の看護部のがん看護のスペシャリストの数を掲載する。がん診療連携拠点病院として、目指すは「がん看護の均てん化」に他ならない。その推進者である。

がん看護専門看護師：3名 精神看護専門看護師：1名
がん化学療法看護認定看護師：3名（以下認定看護師略）
がん性疼痛看護：2名 緩和ケア：2名 皮膚・排泄ケア：2名
乳がん看護：2名 摂食・嚥下障害看護：1名 感染管理：1名
集中ケア：1名とがん専門病院としての役割が果たせる人材が揃っている。

薬剤部

薬剤部は14名の薬剤師を中心として、次のような理念、目標を掲げ、日々の業務に努めている。

薬剤部の理念

- 1 最良の心あるがん医療の一翼を担います。
- 2 良質で安全な医療の一翼を担います。

薬剤部の目標

- 1 安心できるお薬を、患者さんにお届けします。
- 2 わかりやすいお薬の説明に努めます。
- 3 薬剤師としての専門性を発揮し、知識・技術の向上に努めます。
- 4 チーム医療の一員として他職種と協力して、より良い医療を目指します。

薬剤部の業務は、調剤、注射薬・消毒薬の供給、抗がん剤の調製、製剤、治験（臨床試験）、医薬品情報の提供（DI）、服薬指導など多岐に渡っており、安全で質の高い薬物療法の一翼を担っている。

がんの薬物療法の進歩は著しく、分子標的薬を始めとする新薬も次々と開発され、使用されている。それに伴い、業務の内容も以前とは様変わりしており、従来、入院で行われていたがんの化学療法も、主として外来で行われるようになってきた。抗がん剤は、正確で厳密な調製が要求される一方、治療内容も多剤併用の持続点滴療法の普及などにより、調製作業も複雑になってきている。

重要性がますます大きくなってきている緩和医療においても、オピオイドの種類が増え、麻薬の管理業務も煩雑になってきている。緩和ケアチームとの連携、疼痛コントロールの助言など服薬指導の内容も変化してきている。

また、医薬品の開発、先端医療の一端を担う承認前の医薬品の臨床試験（治験）の件数も増加の一途をたどり、新薬承認後の市販後臨床試験、適応拡大のための多施設との共同医師主導治験も行っている。

第2節 研究所

疫学・予防部

疫学・予防部の主要な研究目的をまとめると、第一に、県下のがん流行の実態把握、第二に、発がんに関する危険・防御要因の探索、第三に、がん予防に役立つ情報に基づいた予防的介入による効果評価など、愛知県民・国民のがん予防対策に役立つ総合的な情報を構築していくことである。平成21年度は研究員5名、研究技師2名、リサーチレジデント1名、大学院生2名、研究・研修生7名、それに約20名の非常勤研究補助者らに助けられ、さらに競争資金としての文部科学省や厚生労働省の研究補助を得て、国・内外の共同研究者らと共に、国際学術誌に原著論文50編を出版し、国・内外の学術会議では41課題を報告できた。それらに関連した主な研究内容をまとめると以下ようになる。

第一に、件のがん対策の策定に不可欠ながんの統計情報をえるため、健康福祉部が健康増進推進事業の一環として実施している「地域がん登録」の精度向上を目指し、疫学研究の側面から技術的支援を継続実施している。そして、全国9ヶ所の地域がん登録データと米国SEERプログラムデータを用いて、タバコ消費量の変化と肺がんの組織型別罹患率の変化との関連を明らかにした。

第二に、愛知県民の生活習慣を多面的に観察し、疫学研究手法を用いながら県民を対象とした主要な発がん関連要因を探索していく世界に例のない大規模な病院疫学研究を1988年から展開しており、平成20年までに健康調査票から得られた14万人以上（県民の2%）の newcomer 患者資料を用い、県民のがん予防に役立つ情報提供に努めている。さらに、がんの要因としての生活習慣の影響を左右する個々人の特性、つまり遺伝子多型に焦点を当てた分子疫学研究を展開し、遺伝子型の特性を考慮した生活習慣曝露の発がん影響を再評価し、個々人の遺伝子体質を考慮したがんのテーラーメイド予防に役立つ情報を構築してきた。これらの情報は、がんセンターのホームページを通じて国民にわかりやすい形に編集し発信している。

第三に、当疫学・予防部は健康福祉部の事業としての「健康日本21あいち」に基づく健康推進事業に参画し、社会医学的側面からがん予防研究に取り組んでいる。例えば、昭和61年から開始されたB型肝炎ウイルス（HBV）母子感染予防事業によって、どれだけのHBVの水平感染が予防できるかを推進するために、日本の一般人口におけるHBVの水平感染率の推計（2005年の16歳から64歳におけるHBVの水平（不顕性）感染者数）を行った。

腫瘍病理学部

腫瘍病理学部は、21年11月の部長新任とともに研究内容が部分的に更新された。研究の基本方針として、がんセンター中央病院の依頼を受けて実施している病理解剖に基づく人体病理学的研究（※臨床的に特に重要な病理解剖症例については、臨床病理検討会（CPC）で討議され、当がんセンターの医療水準向上の一端を担っている）およびヒト悪性腫瘍の病理組織学を基盤とする組織学的・分子生物学的解析の総合は従来と変わらず骨子としているが、新たにこれら基礎病理学研究成果を生かすという視点に立った先進分子治療学の技術研究・診断学的研究を併せて力を入れて推進中である。主な研究課題とその成果

を以下に要約する。（詳細は研究抄録の部を参照されたい。）

（1）新規がん細胞選択的透過性ペプチドの開発とそのユテイリテの研究：我が国の制がん医療における先進医療技術の新しいレパートリーを創出することを目的として、人工配列ランダムペプチドライブラリーをソースに応用し、がん細胞膜透過能を発揮する新規ペプチドの開発研究を行っている。さらにこれを基盤材料とした細胞内分子輸送システムや分子標的治療システム、疾患診断用イメージングシステムの構築を目指した研究を進めている。

現在までペプチドライブラリーを用いた各種がん細胞透過アッセイの実施により、発生由来の異なる約10種類のヒト悪性腫瘍細胞に対して選択的勾配を示して高透過能を発揮する新規配列をコードする細胞膜透過ペプチドを得ている。現在これらの応用系を研究中である。

本研究課題は科学技術振興機構（JST）重点地域研究開発推進プログラム（育成研究）採択課題として実施中である。

（2）a）胃がんの微小転移に対する遺伝子診断法と治療法の開発：腹腔洗浄液中遊離がん細胞に対する高感度検出のための25Kチップを用いた新規マーカーの網羅的探索を行い、新しい遺伝子マーカーを4個同定し、個々の遺伝子の予後予測マーカーとしての有用性を評価すると同時にMultiple marker PCRの有用性を明らかにした。一方、新規治療法に関してはこれまでに構築したマンノース被覆リポソームを用いたドラッグデリバリーシステムがマウスmφのみならず健常人末梢血のmφ、胃癌患者の腹腔mφ及び患者切除大網を用いたヒトex vivoモデルでも乳斑に選択的に抗癌剤を送達できることを明らかにした。b）頭頸部扁平上皮癌、胃癌、大腸癌等の消化器がんに対する新しい分子標的治療法に関する研究-がん幹細胞を標的とする治療法に関する基礎的検討：大腸がんおよび頭頸部がん由来の複数のがん幹細胞様細胞を作成、それらのEGFR標的薬（Gefitinib, Cetuximab）に対する感受性、抵抗性とその機構を検討し、一部のがん幹細胞様細胞がEGFR標的薬に対し著効性を示すことを見だし、がん幹細胞を標的とする新しい治療法の可能性を示唆した。

（3）ヘリコバクター・ピロリ感染と胃がん：当部で開発されたスナネズミ腺胃化学発がんモデルにより、ピロリ菌には直接的な胃発がん作用はなく、強力な胃がん発生促進作用を示すことを明らかにした。また、食塩とピロリ菌による胃発がん促進作用の相乗効果を示し、その機構として食塩によるⅢ型粘液（抗ピロリ菌作用）の減少とⅡ型粘液（ピロリ菌の棲息域）の増加による炎症の亢進が重要であることを報告した。さらに、除菌による胃発がんの抑制、天然成分由来のNF-κB阻害剤やリグナン類の抗炎症効果による胃炎の軽減と発がんの抑制等を実験的に証明してきた。

分子腫瘍学部

分子腫瘍学部ではがんに対する新たな予防、診断、治療への展開を目的とした前臨床的研究を進めている。特に、肺がん、中皮腫、消化器がん（大腸がん、肝がん、GIST）、脳腫瘍を主たる研究対象とし、中央病院各科や他大学・研究機関との共同研究を通じその原因遺伝子の探索研究や悪性形質獲得に関する解析研究を行っている。

平成21年度は科学技術振興調整費：重要課題解決型研究の国

内共同研究「アスベスト関連疾患への総括的取り組み」（川崎医科大学研究代表）の4年次であり、当部は“細胞株モデルによる中皮腫細胞特性検討”を担当し悪性中皮腫の研究を推進した。肝腫瘍、大腸がん、GIST、脳腫瘍、肺がん、および骨髄異型性症候群におけるエピジェネティクス解析研究や、肺がんの神経内分泌分化の研究、microRNAの解析研究も進んだ。

平成21年度は常勤スタッフとしては関戸好孝部長、長田啓隆室長、近藤豊室長、村上秀樹主任研究員、藤井万紀子主任研究員と技師1名および嘱託技師1名を含めた計7名の体制であった。また、名古屋大学大学院医学系研究科細胞工学講座（連携大学院）の教官として関戸（教授）、長田（准教授）が担当した。リサーチレジデントとして川田滋久（2年次）および細胞工学講座（名古屋大学連携大学院）の大学院生として新城恵子（2年次）が参加し、任意研修生としては名大、名市大等から5名が参加し、熱心に研究活動を行った。

遺伝子医療研究部

遺伝子医療研究部は「造血器腫瘍発症機構の分子生物学的研究及び診断治療への応用」と「造血器細胞の分化・増殖に関与する遺伝子の血清学的、分子生物学的研究」をテーマに研究をつづけている。

HTLV1ウイルスが関与する成人T細胞性白血病リンパ腫(ATLL)のリンパ腫型には特徴的なゲノム異常があることを報告していたが(Oshiro et al, Blood, 2006)、HTLV1ウイルスが関与しない末梢性T細胞リンパ腫(PTCL-U)のなかに、臨床病態学的には区別つかない疾患群があることを報告した。

また、当研究グループが発見した眼付属器粘膜関連リンパ組織(MALT)リンパ腫のゲノム異常6q23領域の責任遺伝子TNFAIP3/A20について解析を進めている。同遺伝子欠失はDLBCLのABC型やマントル細胞リンパ腫など、病型を超えて高頻度に認められ、その責任遺伝子も同一であることを証明した。そこで、本遺伝子を中心に、腫瘍化に協調的に働く遺伝子の探索を始めている。染色体転座関連遺伝子と協調する遺伝子群の単離解析も同様の方法で進めている。

NK/T細胞性リンパ腫のうち、節外性NK/T細胞リンパ腫、鼻型(ENKTL)について発現解析を中心に発生母細胞の検討をした。また、アレイCGH解析も同時に行い、ゲノム異常と遺伝子発現解析の結果を相関させ、腫瘍化や病態形成に重要な遺伝子の探索を行いつつある。

小児リンパ性白血病の原因として最も多い染色体転座t(12;21)はTEL-AML1を形成する。これまで、機能的にはB細胞の分化を阻害することを明らかにしてきた。マイクロアレイ解析によりTEL-AML1によってB細胞で発現の変化する遺伝子を抽出した。このように抽出した遺伝子がTEL-AML1の機能発現にどのように寄与するのかをshRNAを用いた遺伝子発現抑制の手法で検討しつつある。また、転写因子ERGは白血病の一部のタイプで予後と密接な関係が報告されているもののその造血系における機能は不明であった。今回、その機能の一端を明らかにした。

腫瘍免疫学部

腫瘍免疫学部では、生体の免疫応答を利用したがんの治療・予防に関する基礎、前臨床および臨床研究を行なっている。平

成21年度の活動は以下の通りである。

HLA-A24拘束性細胞傷害性Tリンパ球(CTL)クローン16F3は、膵がん細胞に発現する標的抗原ピューロマイシン感受性アミノペプチダーゼ(PSA)を認識するが、同抗原を発現する正常細胞は認識しない。このような違いの理由として、オートファゴソームの本エピトープ生成への関与を検討した。オートファジー関連遺伝子(atg)に対するsiRNAを導入し、atgの発現を抑制した細胞において、明らかにエピトープの提示が低下したことから、PSAは、オートファジー経路を介して処理を受けた後、がん細胞においてのみ提示されていることが明らかとなった。T細胞が正常細胞とがん細胞を識別する新たなメカニズムと考えられ、がん免疫療法の新たなターゲットに関する概念を提案することができた。

担がん患者のリンパ球を自己のがん細胞株で刺激することで得られるCTLは、CTL標的抗原の同定に必須である。細胞株を樹立しにくい肺がんなどではCTL標的抗原の同定を困難にしている。他者から樹立されたがん細胞株に単一のHLAを発現させることで、この問題の克服を試みた。非小細胞肺がん患者から樹立された β 2m欠損肺がん細胞株C831Lに、 β 2mとHLA-24の重鎖をグリシン-セリンのリンカーで共有結合させた“単鎖HLA”および共刺激分子としてCD86をレンチウイルスベクターで導入した。この細胞を抗原提示細胞として用いて、HLA-A24陽性成人のナイーブCD8+T細胞を刺激したところ、HLA-A24拘束性にC831L細胞を認識するT細胞株を樹立した。今後は、化学療法や放射線療法に抵抗性のいわゆる“がん幹細胞”に対する免疫治療の研究に繋げてゆく予定である。

同種造血細胞移植におけるアロ免疫反応は移植片対宿主病や移植片対白血病効果の誘導に関与している。HLA不一致移植においては主に不一致HLAに対するアロ免疫反応が働くと考えられる。今年度は、不一致HLAクラスIIを直接認識するCD8陽性のCTLの意義を検討した。HapMap LCLを用い、ゲノムワイド関連解析法により抗原の同定を試みたところ、当該CTLに傷害を受けるLCLはドナー→患者方向に不一致であったHLA-DRB1*0803(または*0802)を直接認識していた。当該アロ反応性のT細胞は、ドナー体内において感作されていた可能性がある。

大学等の研究者と共に、がんワクチン免疫モニタリング委員会を開催し、ワクチン抗原に対する抗体価の陰性・陽性カットオフ値と、抗体価を定義した。さらに、定義した抗体価の陰性・陽性カットオフ値および抗体価が参加各施設において再現性を持って測定されることを確認するために、ELISAワークショップを開催し、本方法が優れて再現性のあること、さらに実施場所や実験者を変更してもデータのブレが少ないこと(頑健性)を確認した。これらの活動は、免疫療法の質の向上に貢献すると考えられる。

腫瘍ウイルス学部

ヒトがんのおよそ15%がウイルスによる発がんであると推計され、ウイルス発がんは重要な研究領域となっている。現在、ヒトがんウイルスは7種類同定されている。腫瘍ウイルス学部ではヒトがんウイルスであるEpstein-Barrウイルス(EBV)を主な研究対象としている。EBVはパーキットリンパ腫、上咽頭がんと深く関わりがあることが1960年代から知られていたが、最

近多くのがん（胃がん、ホジキン病、T細胞リンパ腫、臓器移植後リンパ腫等）に感染していることが明らかとなっている。EBV増殖機構、感染とがん発症の分子機構についての解析を通して、EBV感染症の制御を目標として研究を行なっている。EBV陽性がん細胞の大部分は潜伏感染状態にあり、ウイルスの産生はないが、一部のがん細胞は溶解感染を誘発し、IL6,IL10などのサイトカインを発現させ、潜伏感染状態にあるがん細胞の増殖を促進させている。従って潜伏感染状態と同様、溶解感染状態のウイルス増殖機構の解明はEBV陽性がんを制御する上で重要である。

平成21年度において我々は感染中期や後期においてEBV溶解感染のトリガーでありウイルスDNA複製のori結合タンパクでもあるBZLF1が、がん抑制遺伝子p53とCul2/Cul5 E3-ligase複合体の結合を仲介し、活性化p53のユビキチン依存的分解を促進することを明らかにした(Sato et al., *Virology*. 2009. ; Sato et al., *PLoS Pathog.* 2009)。また感染初期には不活性型p53にBZLF1が相互作用することにより転写活性を持つように機能変換し、ウイルス増殖に寄与していることを見つけた (Sato et al. *Cell Cycle*. 2009)。

転写補助因子TORC2がカルシニューリンによって活性化され、CREBおよびBZLF1と結合することでEBVの溶解感染を促進していることを示した(Murata et al., *J.Biol.Chem.* 2009)。またBZLF1はSUMO化をうけ、それによりHDAC3と相互作用し転写活性が抑制されることを見いだした (Murata et al. *J.Biol.Chem.* 2010)。

理化学研究所および東北大学との共同研究よりウイルスDNAポリメラーゼ付随タンパクであるBMRF1の結晶化に成功し、その構造を明らかにした (Murayama et al. *J.Biol.Chem.* 2009)。さらにBMRF1はがBZLF1の転写コファクターとしても機能することを見いだした(Nakayama et al. *J.Biol.Chem.* 2009)。

さらにEBV溶解感染を誘導した細胞では、RPA2などの相同組換え因子が活性化し、ウイルスDNA複製の場に集積している様子を観察している(Kudoh et al., *J Virol.* 2009)。この他、EBウイルスゲノムの組み換え/性状解析のシステムを構築した。このシステムにより、ウイルスのコードするプロテインキナーゼであるBGLF4について解析し、さらに新規リン酸化ターゲットを同定した(Murata et al., *Virology*. 2009; Iwahori et al., *J.Biol.Chem.* 2009)。

分子病態学部

分子病態学部は細胞のホーミングや血管外脱出に関与する接着分子を主な研究対象として、癌の進展・転移におけるこれらの分子の役割を研究している。特に癌細胞表面の糖鎖は、古く単クローン抗体を用いた研究成果から癌に特有な変化を起こす事が知られ、癌に選択的に出現する一部の糖鎖は腫瘍マーカー検査に広く応用され日常診療で利用されている。しかし、癌という病気の進展における異常糖鎖の機能的意義については、長い間研究が進まなかった。糖鎖の研究法が特殊であることに加えて、糖鎖が蛋白質のように一分子が一遺伝子によってコードされているのではなくて、一分子の糖鎖が多数の遺伝子の共同作用によって合成発現されることが研究を困難とする最も大きい原因となっていた。ヒト全ゲノムが解読されてはじめて糖鎖発現の調節機構や生理機能の研究が充分に行えるようになった。この意味で糖鎖研究はポストゲノム時代に大きく発展する研究

分野であるとされる。分子病態学部では、接着分子の中でも特に糖鎖および糖鎖を特異的に認識する接着分子に注目して研究を進めている。

癌化に伴って細胞表層の糖鎖変化をもたらす機構として、我々は糖鎖合成遺伝子のエピジェネティック・サイレンシングが大きな役割を演じていると考えている。これにより、正常上皮細胞で合成されていた正常糖鎖が消退し、それと交替して不完全な構造を有する異常糖鎖が発現する。こうした現象は発がんの早期から観察される。一方、進行期の癌細胞においてはさらに多様な遺伝子変化が蓄積し、これにより異常糖鎖の発現がさらに促進される。我々は進行期の癌細胞において糖鎖変化を誘導する機構のひとつとして、進行がんで亢進する転写因子である低酸素誘導因子(hypoxia inducible factor)の機能に注目している(Kannagi, R., Sakuma, K. *et al.*, *Cancer Sci.*, 101:586-593, 2010)。本年度は、エピジェネティック・サイレンシングに関しては大腸癌における硫酸基トランスポーターの役割を解明し、これが糖鎖変化に関与するとともに細胞の増殖亢進と連動していることを明らかにした(Yusa, A. *et al.*, *Cancer Res.* 70:4064-4073, 2010)。また、進行期における低酸素誘導因子の意義に関しては、低酸素誘導因子の機能亢進が糖脂質の糖鎖構造のみならず、脂質(セラミド)組成に対しても大きな影響を与えることを明らかにした(Yin, J. *et al.*, *FEBS Lett.* 584:1872-1878, 2010)。

発がん制御研究部

多くの抗がん剤や放射線によるがん治療は、がん細胞のDNAに障害を与えることで細胞死を引き起こすことを目的としています。しかし、細胞にはDNA障害に回答して細胞増殖を一時停止させ、損傷DNAを修復する機構「DNAダメージチェックポイント(チェックポイント)」が備わっています。損傷DNAが修復されたがん細胞は再び増殖を繰り返すことから、がんの放射線療法や化学療法においてチェックポイントは障壁になると考えられており、発がん制御研究部では、チェックポイントを標的とした抗がん剤の併用療法の可能性について検討しています。私たちは最近、チェックポイントシグナルの中核的シグナルとして機能しているChk1(チェックポイントキナーゼ1)の新しい制御の仕組みをいくつか明らかにしています。これらの研究をさらに推し進めて、チェックポイントにおけるChk1機能制御の分子基盤を明らかにすることで抗がん剤開発に貢献しようと考えています。さらに私たちはがんの発生母地となる上皮細胞が発がんに伴って間葉系細胞様の特性の一部を示す分子機序についても研究を進めております。

中央実験室

中央実験室では現在、研究員1名、技師2名、再任用職員1名、臨時雇用職員1名のスタッフで、研究所全体の研究活動や臨床研究を円滑に進めるのに必要な種々のサービス業務を行うとともに、研究員が独自の研究も行っている。

研究所全体の研究活動における共通業務では、1. 共同利用機器の整備と維持管理、2. RI 実験施設の維持管理、3. セキュリティシステムの維持管理、4. 名簿・連絡先の作成、5. 見学者の案内、6. 動物管理委員会による実験動物飼育施設の維持管理の補助業務、など、広範囲に及ぶ。実験動物飼育施設の

維持作業は、器具の洗浄、えさの滅菌など実務を業者に委託している。中央実験室では、その管理及び動物管理委員会と協力して動物飼育室の円滑な利用を推進している。共同利用機器の中で、DNA シーケンサーは、研究者から依頼されたサンプルをまとめて運転し、そのDNA 塩基配列を決定している。本年度は約15,000 サンプルになり、増加傾向が続いている。本年度はIn Vivo イメージング装置が導入され、生体中の遺伝子発現やタンパク質の発現を観察出来るようになった。本機器を始め共同機器の利用を円滑に行うために、テクニカルセミナーを随時開催し、毎回多数の参加があり、好評を得ている。

中央実験室は「ミトコンドリアDNA の多型と食道がん発がんリスク」と言うテーマで研究を行っている。ミトコンドリアでは酸化リン酸化によりATP を産生しているが、その副産物として、電子が漏れることにより活性酸素が発生する。酸化リン酸化に関するタンパク質の多型や変異によって、活性酸素の発生量は異なると考えられることから、これらのタンパク質の一部をコードしているmtDNA の多型によって活性酸素の量や、mtDNA および核ゲノムへの変異の入り易さが異なる可能性が考えられる。このことを明らかにするため、食道がん患者および非がん患者のmtDNA のD-loop 領域の多型を網羅的に調べ、食道がん発がんとの関連を解析することを計画した。現在、それぞれの症例のD-loop 領域の塩基配列を決定するため、市販のリシーケンシングプライマーを用い、D-loop 領域全域を増幅し、塩基配列を決定している。今後、食道がん症例、非がん患者由来のDNA を用い、それぞれの多型の位置、種類、数を決定した後、食道がん発がんへの関連性を解析する。

研 究 編

第 1 部 研究抄録関係

1. 病院における研究（課題別研究費）

<研究課題1>

がん治療におけるインターベンショナル・ラジオロジーの応用についての研究

Clinical evaluation of interventional radiology in oncology

<研究者氏名> 放射線診断・IVR部 稲葉 吉隆

共同研究者 山浦 秀和、佐藤 洋造、加藤 弥菜
金本 高明、友澤 裕樹、坂根 誠
北角 淳、鈴木梨津子

【背景と目的】

腹部大動脈周囲リンパ節腫大をはじめとする後腹膜腫瘍性病変は体表から離れた深部に存在するため、超音波装置での視認が困難であることが多く、その場合には病理組織診断のための生検（組織採取）は外科的に開腹下または腹腔鏡下に施行されることが一般的であった。

一方、インターベンショナル・ラジオロジー（IVR）による画像誘導下で行われる経皮的生検は、超音波装置での視認が困難な場合はCTガイドを用いることが多く、CTガイド下針生検として肺生検などで汎用されている。さらに、CTと血管造影装置（X線透視）が合体したIVR-CTやCT透視の開発にとともに、CTガイド下針生検の実行性、安全性は向上し、その適応範囲も広がっている。当院では後腹膜腫瘍性病変に対しても、IVR-CTによるCT透視を用いたCTガイド下針生検を導入し、平成20年度の本研究報告でも2007年までの成績をもとにその実行性を報告した。今回は2009年までの症例を追加し、網羅的にその有効性を検証した。

本研究は、平成20年度に引き続いて後腹膜腫瘍性病変に対するCTガイド下針生検の臨床的有効性を後方視的に評価しようとするものである。

【研究計画】

IVR-CT装置にCT透視機能が導入された1998年4月から2009年6月までの間に、以下の適格条件を満たす症例に対して施行された後腹膜腫瘍性病変に対するCTガイド下針生検について、その安全性と臨床的有効性を評価する。

適格条件：①画像的に確認される後腹膜腫瘍性病変を有し、その確定診断がなされていない症例。②予めCTにて安全な穿刺経路が確認できる病変である。③他に生検可能な病変がない。④出血傾向がない。抗血栓剤をしている場合は一定期間休薬している。⑤患者本人から文書による同意が得られている。

【研究方法】

対象症例は74症例で、男性44例、女性30例、平均年齢は59.7

歳（18～80歳）であった。病変の存在部位は、腹部大動脈周囲49例、下大静脈背側7例、大腰筋腹側6例、腸骨領域4例、仙骨前面3例、その他の後腹膜領域5例で、生検の標的病変の長径は平均5.4cm（1.5～12.5cm）、CT上での穿刺皮膚から標的病変までの距離は平均8.6cm（3.5～11.5cm）であった。

全例局所麻酔下に、9例でTandem法、65例で間欠的CT透視法により経皮的生検を行った。使用した生検針は、Fine-Core半自動生検針（18G：50例）、Biopsy生検針+MAGNUM自動生検装置（18G：23例、20G：1例）であった。生検は入院処置として行い、検体採取後速やかにCTを撮影して合併症の有無を確認し、追加処置が不要であれば病室で少なくとも12時間の経過観察を行った。

以上の後腹膜腫瘍性病変に対するCTガイド下針生検について実行性と安全性、有効性を評価した。

【研究結果】

穿刺回数は平均2.0回（1～4回）で、全例で検体採取は可能であったが、病理診断を得られたものは74例中70例（94.6%）であった。病理診断が得られなかった4例中3例は病変組織が少なく診断に至らず、1例は検体不良とされた。その病変の大きさは平均4.1cmで、病変までの穿刺経路長は平均10.2cmであった。病理診断可能であった70例中63例が病理組織学的に悪性と診断され、7例が良性とされた。悪性とされた63例中、悪性リンパ腫45例、リンパ節転移9例、脂肪肉腫、横紋筋肉腫、悪性神経鞘腫、原始神経外胚葉性腫瘍等の原発性悪性腫瘍9例であった。一方、良性とされた7例は、神経鞘腫4例、非悪性リンパ節腫大2例、血管筋脂肪腫1例であった。悪性リンパ腫は45例のうち43例（95.5%）でサブタイプまで診断可能であった。

合併症は7例（9.5%）でみられ、穿刺経路の大腰筋内部または周囲に軽度血腫が5例、穿刺部の疼痛が2例であった。血腫を生じた5例での穿刺回数は平均2.2回で、いずれも無症状であったが、生検直後のCTで確認された。穿刺痛の2例の穿刺回数は平均1.5回であった。7例ともに経過観察のみで改善し、重篤なものは認めなかった。

【結論】

後腹膜病変に対するCTガイド下針生検の実行性は高く、診断に際し有用であった。また、安全性も十分に許容されるものであった。CTガイド下針生検は経皮的に低侵襲で施行可能であり、従来開腹下または腹腔鏡下に施行されることの多かった後腹膜病変に対しても十分対応可能であり臨床的に有用であると考えられた。とくに悪性リンパ腫に関して、95.5%の症例でそのサブタイプまでの診断が可能であり、治療方針の決定に際しての重要な情報が得られた。

<研究課題2>

治療感受性と再発リスクによる乳癌術後補助療法の選択に関する研究

The selection of adjuvant therapy based on sensitivity of treatment and recurrence risk for breast cancer

<研究者氏名> 乳腺科部 岩田 広治

共同研究者 藤田 崇史、林 裕倫、安藤 由明

1年間の総括

この1年間にも乳癌の術前後薬物療法に関する膨大な情報が世界中から流入し、我々が参加している国内・国外の臨床試験も多方面にわたって進行したが、大きな方向性の変更はない1年であった。

1：術後内分泌療法に関する研究

報告：閉経後乳癌患者ではアロマターゼ阻害剤の5年間投与が標準治療と位置づけられるが、現在の課題は投与期間である。本年、当院でのretrospectiveな解析を行ったところ、ホルモン感受性乳癌の全再発の内、術後5年以降の再発が全体の23%にも達することが判明した。5年以降の長期内分泌療法によって、再発が減少できるかは極めて重要な課題である。これを検証する臨床試験が世界中で行われ、当院ではアナストロゾールの5年と10年を比較するN-SAS-BC05試験（日本）に参加し7例の登録を行ってきた。

2：術後化学療法に関する研究

報告：術後薬物療法における抗癌剤の位置づけが、再考される時代になってきた。大規模臨床試験のアーカイブマテリアルを用いた解析で、ホルモン高感受性乳癌に対する抗癌剤の意義が見直されてきた。当院でも本年度から化学療法の必要性を判断する指標としてKi67indexを遺伝子病理部の協力で全例に測定を開始した。評価は来年度に出せる見込みである。

3：術後分子標的治療に関する研究

報告：HER2陽性乳癌に対する術後Trastuzumab投与が日本でも標準治療として確立した。しかし実際の患者では、その適応に苦慮することもある。そこで本年、特に腫瘍径の小さな腫瘍に対する投与の妥当性に関して当院でのデータでretrospectiveな解析を行った。結果として0.5cm以上の腫瘍ではtrastuzumab投与を推奨する結果を得た。さらに、高齢者HER2陽性乳癌患者における化学療法を省略したTrastuzumab単独治療の意義を検証するN-SAS-BC07試験が本年度から始まった。術後TykerbやBevasizumabの効果を検証する世界共同試験は、当院からも多くの患者を登録して現在経過観察中である。

4：術前化学内分泌療法に関する研究

報告：この分野の臨床試験は世界の中でも特に日本で積極的に行われている。本年度はHER2陽性患者を対象にしたrandomized phase II試験（医師主導治験）の結果が発表された。また当院からも多くの登録を行った国際共同試験（OOTR003）は登録を終了して、現在解析中である。閉経前ホルモン陽性乳癌を対象にした術前ホルモン療法の結果が公表され、術前での腫瘍縮小効果はZoladex + アナストロゾール群がZoladex + TAM群に比較して有意に良好であった。閉経後ホルモン感受性乳癌では術前ホルモン療法の効果で術後の抗がん剤の必要性を検証する、第III

相多施設共同比較試験（N-SAS-BC06、NEOS study）が開始から2年が経過した。当院からの登録数は日本トップである。

5：術後ゾメダ投与に関する研究

報告：ホルモン感受性乳癌に対して内分泌療法にゾメダ（骨転移治療薬）を6カ月に一度投与することの有効性を検証したABC12の結果が報告され、ゾメダを投与することで遠隔再発（骨転移に限らず）や局所再発が減少することが示された。

<研究課題3>

臨床検査における各種癌診断手法の開発

Investigation for methods of cancer diagnosis in clinical laboratories

<研究者氏名> 臨床検査部 谷田部 恭

共同研究者 小池 考一、水谷 和子、遠山由美子
岡田 恭孝、鈴木 和夫、山田智恵子
所 嘉朗、板倉 英二、前田 孝子
柴田 典子

がん診断技術の進歩はがん診療の発展に大きく貢献してきた。臨床検査の分野でも、次々と新しい検査法が開発され臨床の場に提供されている。当臨床検査部でも各分野での新しい検査法の開発や先進的技術の導入、改良および評価などを試みており、以下各部門別に本年度に得られた成果および研究経過を報告する。

生化学部門では、院内測定の要望があった血中薬物濃度測定として、タクロリムス血中濃度を検討し導入することとした。また、以前から院内で対応していたジゴキシシン血中濃度については測定方法変更を検討することで、より迅速な結果報告を可能とした。今後も臨床側からの要望に対処できるよう、また高い貢献度が望める検査項目、検査法の導入など、有用な情報を提供できるよう引き続き検討していく予定である。

血清検査部門では、引き続き放射線同位元素を用いた分析法（RIA法）から化学発光酵素免疫法などの放射線同位元素に依らない測定法（Non RIA法）に変更すべく検討を行ってきた。その結果、甲状腺サイログロブリン測定では測定値に影響を及ぼす物質のため正確に測定できない検体があることが判明し、Non RIA法に変更出来なかった。その影響を回避する方法等引き続き検討する予定である。また甲状腺機能検査（TSH・FT4・FT3）の測定方法について検討し、迅速な結果報告を可能とした。さらに院内測定の要望があったPIVKA-IIについても導入を検討した。

血液検査部門では、フローサイトメトリー（FCM）法によるcyclin D1の検出について検討した。悪性リンパ腫のうち、マンツル細胞リンパ腫（MCL）は、中悪性度群に属するため速やかな確定診断が必要である。日常のFCM検査では、表面免疫グロブリンの偏った発現に加え、CD5+、CD10-、CD23-の表現型がMCLを示唆する所見と考えているが、CD5陽性びまん性大細胞型Bリンパ腫を鑑別する有効な所見は見出していない。そこで、MCLの確定診断に必須のcyclin D1陽性所見をFCM法にて検出できないかMCLの白血化症例と正常群とを対比して検討した。その結果、Cyclin D1を検出するための手技を設定することができた。今後

は症例を重ね、微量のMCL細胞も検出できるよう染色および測定条件を詰めていく予定である。

生理検査では、心臓の形態と心電図波形の関係について検討した。2009年1月から12月までに心電図と心エコーをほぼ同時に記録した70歳代の男性で、身長が160~169cm・BMIが21~22.9で刺激伝導異常が無い16名を対象とした。測定項目は心エコーから拡張末期の左室内径・中隔径・後壁径を、心電図からはRV5・SV1・RI・RIIの波高を求め相関を計算した。

結果は①後壁が厚くなるとRV5/SV1は小さくなった。(r=-0.5 P<0.05 両側) ②左室径が大きくなるとSV1+RV5は大きくなる傾向を示した。(r=0.43 P<0.1 両側) 左室肥大の判定基準にSV1+RV5は従来から使われている指標であり当然の結果であるが、RV5/SV1が左室後壁の厚さの指標になり得る可能性が得られた。今回は対象が限定的であったため、対象を広げ引き続き検討を行っていく。

病理検査部門では、通常のHE染色に加え、癌の確定、補助診断に必要な不可欠な免疫染色を平行して毎日行っている。この免疫染色を、より診断に有効な情報とするために、新しい抗体を検討、選択するとともに、新しいシステムを用いて感度を上げる事を検討した。また新規に、前立腺癌に対しAMACR、乳癌にBeta-catenin(ウサギ単クローン)、悪性リンパ腫にCD3εなどの抗体を導入するために、検討し変更するなど診断に有用な染色法の確立に努めた。さらに、脱灰方法を、分子の発現をよく保持するEDTA脱灰法に変更し、免疫染色も適応できるようにした。またHE染色の根幹をなすヘマトキシリン染色液の染色条件は精度管理により安定させるとともに、平行して順次改良も行なっている。

細胞診検査部門では、体腔液細胞診の精度管理向上を目的に通常のパパニコロウ染色およびメイ・ギムザ染色による細胞診判定と免疫組織学的染色による染色結果との比較について検討した。検討材料は本年度実施した体腔液300例の内、免疫染色施行した27例(腹水11例、胸水14例、心嚢液2例)を対象とした。免疫染色はCDX2、p63、ER、TTF-1、WT-1、HNF-1β、AE1/AE3/MNF116の7種の抗体を使用した。CDX2施行例は8例(腹水7例、胸水1例)、p63施行例は8例(胸水7例、心嚢液1例)、ER施行例は1例(腹水)、TTF-1施行例は7例(全て胸水)、WT-1施行例は5例(腹水3例、胸水2例)、HNF-1β施行例は3例(全て腹水)、AE1/AE3、MNF116は各1例(腹水)であった。細胞診判定が偽陽性で免疫により異型細胞の存在の裏付けがなされた症例は4例あり、その標本を再検討した。異型細胞数が少なかった症例を除き、一例は扁平上皮癌、一例は腺癌であったが、どちらも核異型が軽度で通常の染色方法では判定困難とせざるを得ない症例であった。また今年度から婦人科領域で漿液性腺癌と明細胞性腺癌の鑑別のためにWT1、HNF-1βの免疫を行い検討した。文献上、漿液性腺癌はWT1陽性、明細胞性腺癌はHNF-1β陽性(どちらも核)となっている。今回の検討ではWT1に関しては組織型と相関が認められた。しかしHNF-1βに関しては染色態度が曖昧であり、染色方法の検討などが今後の課題となった。また細胞診の判定で悪性とした一症例で扁平上皮癌を推定したもののp63陰性、WT1陽性を示し、中皮腫を疑う症例が一例あった。推定組織型が免疫により覆された例であり形態検査を補うため免疫染色が有効であった症例と考えられる。

遺伝子検査部門では、肺がんの原因遺伝子の1つであるEML4-ALKキメラ遺伝子の検出方法について検討を行った。EML4-ALKキメラ遺伝子による肺がんは若年者、非喫煙者に多く、これに対する分子標的薬も開発されているため、キメラ遺伝子の検出意義は大きい。まず、2001-2002年の肺がん手術症例を対象としてRT-PCR法による検出を試みた。その結果、約3%の症例でキメラ遺伝子が確認され、また、他の報告と同様に全例腺癌であり、EGFR、KRAS遺伝子変異との重複も認められなかった。次に、RT-PCR法にてキメラ遺伝子が確認された症例についてFISH(fluorescence in site hybridization)法によるALK遺伝子の遺伝子再構成を検査したところ、全例、再構成が確認された。同時に免疫組織化学法にてALK遺伝子産物の染色を行ったところ、RT-PCR法、FISH法の結果と良く相関する結果が得られた。しかし、陽性率から考えると、全例にRT-PCR法、あるいはFISH法等を実施するのは効率的ではない。そこで、EGFR、KRAS遺伝子変異のない腺癌についてまず免疫組織化学法を実施し、その陽性症例についてRT-PCR法あるいはFISH法にて確認する方法を無駄なく効率的に検査する方法として考え、日常検査に取り入れている。また、胸水、生検材料等、限られた検体しかない場合、どのような方法で検査することが有用であるかは今後の検討課題である。

細菌検査部門では、血液培養検査が抗がん剤治療などによる易感染状態の患者にとって、予後が大きく左右される重要な検査である。検査件数は平成19年度1580件、20年度2254件、21年度2349件と増加している。陽性率は、14.7%、14.2%、13.2%である。陽性検体の検出時間は、6時間で5%、12時間で25%、24時間で65%であった。検出時間が短い菌種は腸内細菌、最も長い菌種は酵母であった。検出時間が4日以上の検体は、菌種の差もあるが、抗生剤の影響による延長や皮膚の常在菌によるコンタミネーションである可能性も考えられる。平成22年2月のオーダリングシステムの更新時に血液培養の陽性結果速報を採用した。24時間リアルタイムに病棟のプリンターに出力するため、患者の状態にあわせてすぐに処置できるようになった。今後は、塗抹検査結果の迅速な対応が可能となるように、引き続き検討する予定である。

以上臨床検査部の各部門で取り組んだ課題の報告とする。

<研究課題> 4

骨軟部肉腫進行例に対する治療法の研究

A clinical trial of novel therapy for cases with advanced musculoskeletal sarcomas.

<研究者氏名> 整形外科部 杉浦 英志

共同研究者 山田 健志

【目的】

進行性の骨軟部肉腫症例に対しては有効な標準的治療がないのが現状である。今回腫瘍の進行の為に手術療法が困難な症例あるいは再発性の腫瘍に対してカルボプラチン、エトポシドに

肺炎が1例であった。保存的治療で対応可能であった。

[結果]

- 1) 201例の局所前立腺癌に対して、内分泌療法併用放射線治療（三次元原体照射）を行い、5年非再発率は76.6%であった。
- 2) Stage、Gleason score、診断時PSA値、放射線治療開始時PSA値、年齢、Neoadjuvant内分泌治療期間などの因子の中で、Neoadjuvant内分泌治療期間のみに有意差を認めた（P=0.039）。長期内分泌治療（180日を超える）の群が、再発率が低かった。
- 3) 重篤な有害事象はみられず、保存的治療で対応可能であった。

<研究課題> 6

病理細胞診断における分子腫瘍診断法の研究

Development of molecular analysis on cancer diagnosis

<研究者氏名> 遺伝子病理診断部 谷田部 恭

共同研究者 細田 和貴、佐々木英一、菅野雅人
長坂 暢

[研究成果]

近年の分子生物学の飛躍的な発達により、がんの発生・悪性度の評価・薬剤応答性などの知見が蓄積され、それは現在も増えつつある。これら情報の一都は実臨床に直結しており、その応用により適切な診断・治療に結びつくものも多い。そこで、これらの知見を検証した上で、実際の病理診断、細胞診断に導入、応用することを目標に掲げた。その際に、診断に用いられる臨床検体は、生検検体などの小さな組織を利用しなければならなかったり、正常細胞が多数混じているなどの問題点も多い。そこで、それらの点を踏まえた新たなアッセイ系の確立を検討した。

本年度は、現在診断に欠かせなくなっている免疫組織化学的な各種分子の検出について再検討を行った。すくなくならぬ病理組織診断では免疫組織学的な検索を必要とし、その結果によって診断が導かれることも少なくない。これまでの抗原を認識する一次抗体は、複数のエピトープを認識するポリクローナル抗体と、特異性の高い単一の抗原を認識するモノクローナル抗体の2つがある。ウサギを免疫原種としたポリクローナル抗体は、抗体親和性がマウスモノクローナル抗体に比べて10-100倍高く、免疫染色の一次抗体としては適している。しかしながら、ポリクローナル抗体の特性でもある免疫原性の高いエピトープを認識するため、他の構造類似の抗原との結合する可能性が高くなり、特異性という点で劣る。近年、これらの点を補うウサギモノクローナル抗体が開発され、市販されるようになった。そこで、これらのウサギモノクローナル抗体の特性、感度について検討した。

検討したラビットモノクローナル抗体は、表1にまとめた。結論としては、以下の様にまとめられる。

- 一般的にラビット・モノクローナル抗体は感度、特異性において優れている。
- しかしながら、昔から評価の高いマウス・モノクローナル

抗体に及ばない場合も少なくない。

- 私たちの施設でラビット・モノクローナル抗体に変えた抗原として、cyclin D1, synaptophysin, chromogranin A, Ki-67がある。

Name	Clone	Results
Beta-catenin、	Clone E247	Equivalent
Calponin-1、	Clone EP798Y	Replaced
E-Cadherin	Clone EP700Y	Equivalent
CD3epsilon	Clone EP449E	Less
Keratin 5	Clone EP1601Y	Equivalent
Prostate Specific Antigen	Clone EP1588Y	Replaced
Cyclin D1	EPR22411HC	Replaced
CDX2	Clone EPR2764Y	Equivalent
Estrogen Receptor	Clone SP1	Equivalent
Ki-67	Clone SP6)	Replaced
CD8	Clone SP16	Less
ALK	Clone SP8	Less
Progesterone Receptor	Clone SP2	Equivalent

<研究課題> 7

食道癌に対する術前化学療法についての臨床試験

Clinical trial of preoperative chemotherapy for esophageal cancer

<研究者氏名> 薬物療法部 室 圭

共同研究者 宇良 敬、篠田 雅幸、波戸岡俊三
田近 正洋、河合 宏紀

[研究目的]

根治切除可能な、胸部食道癌を対象とし、術前補助化学療法としてのDocetaxel/Cisplatin/5-FU療法の有用性評価のための第Ⅰ相試験の準備として、同療法の安全性を評価する。

[研究計画]

根治切除可能な、胸部食道癌を対象とし、術前補助化学療法としてのDocetaxel/Cisplatin/5-FU療法の有用性評価のための第Ⅱ相試験の準備として、同療法の安全性を評価する。Primary endpointは治療完遂割合。secondary endpointsは治療関連死割合、1年生存割合、術前化学療法の奏効割合、有害事象発生割合、重篤な有害事象発生割合、入院期間とする。治療計画は、登録後1週以内にDCF療法を4週毎に2 コース施行する。DCF療法終了後4週以降に手術を施行する。DCF療法の用量は、Docetaxel 70mg/m² 第1日目、Cisplatin 80mg/m² 第1日目、5-FU 800mg/m² 第1~5日目とする。予定登録数は24例。登録期間は1.5年。登録終了後1年を追跡期間とし、総研究期間2.5年である。

[結果]

本試験は28例の登録が終了した。3例登録時に化学療法実施中に血清クレアチニン値上昇がみられ、周術期の腎機能保全に努めるべく改訂を行った。症例の年齢中央値59歳、PS0/1：11/17例、

臨床病期Ⅱ/Ⅲ/Ⅳ：11/13/4例であった。2コースの術前化学療法は25例で行われ、効果不良で2例が1コースのみで終了となり、有害事象による患者希望中止で1例が1コースのみで終了となった。化学療法によるGr3以上の有害事象は、好中球減少Gr3/4：82%、感染Gr3：4%、食欲低下Gr3：14%であった。減量は11例で、G-CSF製剤投与は11例で行われた。根治切除が26例でなされ、1例は口側断端陽性のため非根治切除となった。1例は術中に観転移を認め試験開腹に終わった。周術期合併症に重篤なものはなかった。本試験の結果は、2009年食道学会、癌治療学会、2010年ASCO G1 meeting、ACOS meetingで発表された。

<研究課題> 8

悪性リンパ腫に対する大量化学療法
High dose chemotherapy of malignant lymphoma

<研究者氏名> 血液・細胞療法部 森島 泰雄

共同研究者 山本 一仁、田地 浩史、大木 康人

A) 未治療マンツル細胞リンパ腫 (MCL) に対して、rituximab併用寛解導入療法 (R-high-CHOP/CHASER) + 自家末梢血幹細胞移植併用大量化学療法 (LEED療法) の臨床第Ⅱ相試験をJCOG0406試験の研究代表者施設として実施している。このプロトコルの症例選択基準は(1)組織学的に核cyclin D1陽性マンツル細胞リンパ腫、(2)年齢が20歳以上65歳以下、(3)ECOG PS 0-2で十分な臓器機能を有し、(4)臨床病期Ⅲ期、Ⅳ期などで、主要評価項目は、2年無増悪生存割合。副次的評価項目は、(1) 無増悪生存期間、(2) 全生存期間、(3) R-high-CHOP/CHASER/LEED療法全体のCR及び全奏効割合 (ORR)、(4) R-high-CHOP/CHASERのCR及びORR、(5)有害事象発現割合、(6)二次がん発生割合である。必要症例数は、閾値2年無増悪生存割合を30%、期待2年無増悪生存割合を50%とし、予定登録数は45例とした。平成20年7月にJCOG参加予定46施設が参加して、スタートアップミーティングを開催し、本臨床研究につき周知した。その後、平成22年10月現在までに28例が登録され、予定された症例集積ペースをやや上回って臨床試験が進捗している。有害事象報告が2件 (網膜炎、呼吸不全 (因果関係なし)) が報告された。予定症例 (45症例) 登録終了まで今後2年間 (平成23年度中) を要すると予測される。

B) 初発進行期かつ国際予後指標 (IPI) 高リスク群びまん性大細胞型B細胞リンパ腫 (DLBCL) を対象として、rituximab併用寛解導入化学療法 + 自家末梢血幹細胞移植併用大量化学療法 (LEED療法) を標準的治療として確立するため、導入化学療法であるR-biweekly CHOP療法 (A群) とR-biweekly CHOP/CHASER療法 (B群) のランダム化第Ⅱ相試験を計画し、研究代表者ならびに研究事務局として実施している (JCOG0908試験)。このプロトコルは症例選択基準は(1) CD20陽性のDLBCLと診断され、(2)年齢調節国際リスク分類 (IPI) でH-I群、もしくはH群と判定され、(3)臨床病期Ⅱ bulky, Ⅲ, Ⅳ期、(4)年齢が20歳以上65歳以下などである。方法は、step Iの導入化学療法として、無作為化割付後、R-biweekly CHOP療法を6コース (A群) もしく

はR-biweekly CHOP/CHASERを各3コースの計6コース (B群) を実施し、PR, CR症例に対しStepⅡとして自家末梢血幹細胞移植併用の大量化学療法 (LEED療法) を実施する。主要評価項目は、登録時からの2年無増悪生存割合とする。副次的評価項目は、(1)step I終了後の完全奏効割合 (CR)、(2)stepⅡ終了後の (CR+CRu)、(3)登録時からの2年全生存割合、(4)5年無増悪生存割合、(5)5年全生存割合、(6)治療の安全性とする。病理中央診断などによる不適格例を計10%弱と見込んで目標症例数は両群合わせて70例とした。平成22年度8月にはスタートアップミーティングが参加予定全46施設医師・コーディネータの参加を得て実施され、症例登録が開始された。平成22年10月現在4症例の登録があった。目標症例数は70例としており、この症例数を集積するために、これまでにJCOG-LSGでおこなった臨床研究の症例数の推計から3年 (平成24年度内登録終了) が必要であると見込まれる。

<研究課題> 9

非小細胞肺癌の分子生物学的解析とその臨床的意義

Molecular biologic analysis of non-small cell lung cancer and its clinical implications

<研究者氏名> 胸部外科部 光富 徹哉

共同研究者 伊藤 志門、福井 高幸、波戸岡俊三
安部 哲也、谷田部 恭

【背景】

肺発癌における上皮成長因子受容体 (EGFR)、ヒトEGF受容体2 (HER2) の重要性は論を待たないが、近年の米国からの大規模解析により、HER4遺伝子変異が肺癌に存在すること、変異はキナーゼ (K) ドメインおよび細胞外ドメインの一部であるFurin like (F) ドメインに集中していることが報告された。今回われわれは、本邦肺癌切除例におけるHER4の発現と変異について解析した。

【対象・方法】

対象は、当院で肺切除術を施行した原発性肺癌60例。男性 / 女性：38 / 22、年齢中央値は67歳 (38-85)、腺癌 / 非腺癌：43 / 17、病理病期Ⅰ / Ⅱ / Ⅲ / Ⅳ：28 / 9 / 21 / 2。18s rRNAを内部コントロールとしてHER4発現量をReal time PCRにて解析した。正常肺組織の発現量と比較して高発現群と低発現群に分類し、各種臨床因子 (年齢、性別、喫煙、病理病期、腫瘍径、組織型、EGFR変異)、予後とHER4発現量との関連を検討した。また、HER4のFドメイン、Kドメインについて、RT-PCRとダイレクトシーケンスが可能であった臨床例59例と17細胞株で遺伝子変異解析をおこなった。

【結果】

HER4の高 / 低発現群は16 / 44であった。HER4発現と各種臨床因子との解析結果を表に示す。B.I (喫煙指数) 400未満の症例で、HER4発現量が多い傾向にあった (p=0.088)。その他、各種臨床因子や予後との有意な関連は認められなかった。HER4遺伝子変異

解析では、Fドメイン、Kドメインに変異を認めなかったが、臨床例1例において、Kドメインに多型(Q793Q)を同定した。

【結論】

日本人原発性肺癌において、HER4発現と各種臨床因子、予後の明らかな関連は認めなかった。HER4遺伝子変異解析ではFドメイン、Kドメインに変異を認めなかった。

	HER4高発現群	HER4低発現群	ρ 値
年齢 67歳 \geq	44%	52%	0.559
性別 男性	50%	70%	0.142
喫煙 B.I. 400<	56%	32%	0.088
腫瘍径 3cm \geq	44%	64%	0.167
組織型 腺癌	69%	73%	0.762
病理病期 I・II期	81%	57%	0.130
EGFR遺伝子変異 あり	38%	25%	0.369

<研究課題> 10

頭頸部局所進行癌に対するSTS併用CDDP選択動注併用放射線治療の研究

Super-selective intra-arterial CDDP with STS infusion combined with radiotherapy on locally advanced head and neck cancer

<研究者氏名> 放射線治療部 古平 毅

共同研究者 古谷 和久、立花 弘之、富田 夏夫

はじめに

近年、頭頸部進行癌に対する全身投与の化学療法と放射線治療の併用による化学放射線療法の有効性が確認されつつある。しかし同じ扁平上皮癌であっても亜部位により、その感受性は大きく異なる。上咽頭癌、中咽頭癌は放射線や抗がん剤の感受性は良好であるのに対し、声門癌、舌癌に代表される口腔癌、上顎癌の感受性は乏しい。

1992年より放射線治療部では浅側頭動脈からの動注併用放射線治療を口腔癌、上顎癌を中心に行ってきた。2002年10月より、より高い抗腫瘍効果を目指し、動注薬剤としてCBDCAからSTSを併用したCDDPに変更した。本研究では遡及的に治療成績を分析し、特にSTS併用CDDPの有用性について検証した。

動注併用放射線治療の治療成績

放射線治療部では放射線治療単独では制御不能と思われる進行口腔癌、上顎癌を主な動注療法の対象とし、1992年からCBDCAの持続動注併用放射線治療を始めたが、1997年より遠隔転移、頸部リンパ節の制御を目指し、全身化学療法の併用を始めた。全身化学療法は5FU(700mg/m²/日、5日間)/nedaplatin(120mg/m²)を用い、2回の施行を基本とし、動注療法は後半の放射線治療時に施行した。より高い局所制御率の改善を目指し2002年の秋からCDDPの中和剤であるSTSを併用したCDDPに動注薬剤を変更した。具体的には選択的動注の場合はCDDP20mg/m²、複数の栄養動脈から栄養されている場合は外頸動脈からの動注

とし、その場合はCDDP30-50mg/m²を5時間で投与した。高齢者やPS不良例については全身化学療法の併用は施行しなかったが、可能な症例は5FU(700mg/m²/日、5日間)/CDDP(75mg/m²)を2回施行する方法を基本とした。

最も症例数の多いIII期、IV期口腔癌134例全体での3年生存率は53.9%、III期62.9%、IV期45.3%であった。多変量解析による総生存率に關する因子として有意な因子としては年齢(65歳未満)、動注薬剤としてSTS併用のCDDP、選択的動注であった。口腔癌の中で最も症例数の多い舌癌(88例)に限れば、動注薬剤としてSTS併用のCDDP、選択的動注、全身化学療法の併用が有意な因子であった。今回の我々の治療成績は文献上報告された手術成績と遜色のないものであった。

まとめ

今回の我々の結果は進行口腔癌の治療選択枝の一つとして動注療法が提示できるようになったことを示すものと考えている。特に2002年から開始したSTS併用CDDP動注療法の治療成績は良好であった。今後は多施設による臨床試験により、この治療法の有効性と問題点を明らかにして行きたいと考えている。

2. 研究所における研究（人当研究費）

所長室

研究課題

(主題) アジア太平洋地域におけるがんの民族疫学研究
(副題) 日・中・韓三国で増加するがんの環境・宿主要因に関する国際共同研究

<研究者氏名>

田島和雄、松尾恵太郎、川瀬和孝、伊藤秀美、田中英夫、高長明¹⁾、Ahn Y-O²⁾、Yoo K-Y³⁾、Cao Jie⁴⁾

<目的・概要・進捗状況>

日・中・韓三国で増加している大腸がんと乳がんの予防を目指した要因探索のための三国合作による疫学研究を文部科学省科研費「がん特定領域研究」の計画研究として、十年計画で実施している。平成12～16年度は主に大腸がんを対象に三国共同研究を実施してきた。さらに、平成17～21年度は大腸がんと同様に乳がんにも焦点を当てた研究を展開してきた。研究対象地域を韓国のソウル市周辺、日本の愛知県、中国の江蘇省南京市、重慶市（大腸がんのみ）、本溪市（胃がんと大腸がん）に絞り込み、ほぼ共通の研究方法に基づき、5カ所で大腸がんと乳がんの環境・宿主要因に関する比較疫学的研究を実施してきた。

今年度は乳がんの三国における一般的な増加要因（早い初潮、遅い閉経、未婚・未産・未授乳など）が明らかになった。また、食生活要因として大豆製品や葉酸の摂取量が少ないこと、FGFR2の過剰発現を示す遺伝子型を有する集団では乳がんの危険度が高くなり、その傾向は肥満傾向（BMI>25）や月経早期開始（12歳以下）など乳がんの高危険群でより著明（3～5倍）になった。

<今後の方針>

今年度で本研究は終了することになるが、乳がん、および大腸がんの主要な生活習慣要因や遺伝子型との関連性について総合的にまとめ、民族疫学的視点から北東アジア三国における乳がんと大腸がんの予防対策の策定に寄与するための情報構築を図り、三国でがん予防を目指した生活指導用のガイドラインやリーフレットの作成を試みてきた。日本では「がん予防への案内」を作成し、すでに10万人以上の愛知県民に配布しており、ホームページなどでも内容を公開している。韓国の共同研究者は大腸がん予防のための食生活指導を目指し、本研究結果をまとめた一般国民向けの本「抗がん食生活計画」を韓国語で発刊した。中国でも「乳がん、大腸がんの予防指針」の作成準備に取りかかっている。このように、本研究を通じて日本、韓国、中国の三国で増加してきた大腸がんや乳がんの予防対策に資する情報を構築してきた。今後も本研究成果を実際の予防活動に役立つよう、韓国や中国の共同研究者と協力しながら前向きに対処していく。

疫学・予防部

<研究課題> 1

(主題) がん統計情報の構築に必要な地域がん登録の精度向上を目指した記述疫学研究
(副題) 地域がん登録データを用いた男性乳がんの罹患の動向－女性乳がんと比較して－: Monitoring of Cancer Incidence in Japan (MCII) 2004

<研究者氏名>

伊藤秀美、松尾恵太郎、味木和喜子¹⁾、祖父江友孝¹⁾、田中英夫、The Japan Cancer Surveillance Group

<目的・概要・進捗状況>

男性乳がんは稀であることから、女性乳がんと比較して記述されることが多い。

本研究では、The Japan Cancer Surveillance Groupが全国集計のために31地域がん登録から収集されたデータベース（MCIIデータベース）より、1993年から2004年に診断された男女の乳がん症例を抽出し、性、診断時年齢、進行度、悪性度などを男女別に比較集計した。世界人口で調整した男女の乳がん年齢調整罹患率のトレンドについては、joinpoint解析を用いて評価した。

1993年から2004年に診断された上皮内および浸潤乳がん症例は、合計177,401例で、MCIIに参加している31地域がん登録管轄地域住民は712,504,896人年だった。男性乳がん症例は全体の0.74%の1308例だった。男性の平均診断時年齢は男性平均診断時年齢、67.3歳（SE, 0.34）と、女性の57.3歳（SE, 0.03）と高かった。男性乳がんの人口10万人あたりの年齢調整罹患率は0.21（SE, 0.001）と、女性（31.38, SE, 0.008）に比べて100倍以上低かった。進行度や悪性度に関しては、男女ともに類似していた。1993年から2004年の年齢調整罹患率は、男性では期間を通じて変化がなかったのに対し、女性では期間を通じて増加傾向にあった。（年齢調整罹患率の年間変化率：男性、1.48%（95%信頼区間、0.76% - 3.77%、女性、2.95%（2.66% to 3.25%））。

<今後の方向>

男性乳がんの死亡の動向についても検討する。進行度、悪性度に関して、不明割合が高かったので、multiple imputationという方法で、不明データを補完し、同様の検討を行う。さらに、age-period-cohort modelを使い、男性乳がん罹患・死亡の動向について、詳細に検討を進める。

1)国立がん研究センターがん対策情報センター がん情報・統計部

<研究課題> 2-1

(主題) がんの環境要因、宿主要因、および両者の交互作用を

解明するための病院疫学研究

(副題) 大腸がんリスクに対する8q24遺伝子座の影響に関して

<研究者氏名>

松尾忠太郎、鈴木勇史、伊藤秀美、細野覚代、川瀬孝和、渡邊美貴、設楽紘平¹⁾、小森康司²⁾、金光幸秀²⁾、平井孝²⁾、谷田部恭³⁾、田中英夫、田島和雄⁴⁾

<目的・概要・進捗状況>

他人種を対象にした全ゲノム関連解析研究により、染色体8q24遺伝子座と大腸がんを始めとする様々ながんのリスクとの関連が報告されている。しかしながら、この遺伝子座の影響が生活習慣要因とどうか変わっているのか、また日本人ではどうかなのか、ということに関しては明らかではなかった。

我々は、愛知県がんセンター中央病院で実施されている大規模病院疫学研究プログラムに参加した、481名の大腸がん患者と、性・年齢を適合させた962名の非がん対照者に対して、症例対照研究を実施した。対象遺伝子座は8q24上のrs6983267とrs10090154とし、TaqMan法を用いて遺伝子型を決定した。また、交絡要因は質問票調査に基づいて、性、年齢、飲酒状況、葉酸摂取、大腸がん家族歴等を対象とした。

Rs6983267は、統計学的に有意な関連をしめした。アリル毎のオッズ比は1.22 (95%信頼区間: 1.04-1.44, p-trend=0.014)で、交絡因子の調整後も統計学的優位性に変化は認められなかった。各種交絡要因との間の交互作用の検討を行ったが、明確なものは認められなかった。Rs10090154に関しては、遺伝子多型単独、交互作用のいずれにおいても統計学的に有意な関連は認めなかった。

日本人集団においても、rs6983267が独立したリスク要因であることが検証された。

<今後の方向>

今後、全ゲノム関連解析で報告された領域に関して、他がんを含めた包括的な検討を行う必要がある。

1) 薬物療法部、2) 消化器外科、3) 遺伝子病理診断部、4) 研究所長

<研究課題> 2-2

(主 題) がんの環境要因、宿主要因、および両者の交互作用を解明するための病院疫学研究
(副 題) 日本人女性における食事からのカルシウム、ビタミンD摂取と子宮頸癌リスクとの関連

<研究者氏名>

細野覚代、松尾忠太郎、鈴木勇史、川瀬孝和、広瀬かおり、梶山広明²⁾、中西透³⁾、浜島信之⁴⁾、吉川史隆²⁾、田島和雄⁵⁾、田中英夫

<目的・概要・進捗状況>

近年子宮頸癌とhuman papillomavirus (HPV)感染との強い関連

が明らかにされている。しかし、HPVに感染しても子宮頸癌に進展することは稀であり、喫煙など生活習慣に関するco-factorについても検討されている。また、これまでに様々な癌腫でカルシウム (Ca)とビタミンD (VD)の摂取に関する疫学研究が行われている。

今回は愛知県がんセンター病院疫学研究システム (HERPACC)のデータを使って症例対照研究を行い、食習慣や食事からのCaとVDの摂取量と子宮頸癌リスクとの関連について検討した。

愛知県がんセンターを受診した子宮頸癌405例 (浸潤癌333例、上皮内癌72例)と年齢・閉経状況を1:5適合させた非がん対照2025例を検討した。自己記入式の半定量食物頻度摂取票をもとに、エネルギー調整後摂取量とそのCaとVDの摂取量と四分位数を計算した。条件付きロジスティック回帰分析を用いて喫煙等交絡因子調整オッズ比 (OR)と95%信頼区間 (95%CI)を調べた。

CaやVDを多く含む8食品の摂取頻度と子宮頸癌リスクの間には負の相関が認められた。多変量解析で、Ca摂取が最も少ないグループに対してもっとも多いグループは OR=0.78 (95%CI: 0.57-1.08) (trend P=0.013)であった。VDに関する同様の解析ではOR=0.61 (95%CI: 0.43-0.88) (trend P=0.006)と統計学的に有意な負の関連を示した。喫煙習慣、飲酒習慣、組織型による層別化解析では、CaとVDの負の関連は非喫煙者、非飲酒者、扁平上皮癌においてのみ認められた。浸潤癌のみの解析ではほぼ同様の結果であったが、上皮内癌では予防効果を認めなかった。

以上の結果より食事によるCaとVD摂取は子宮頸癌、とくに浸潤癌に対して予防的な効果を持つ可能性が示された。

<今後の方向>

子宮頸癌の予防に関するエビデンスを集積するため、今後もさまざまな生活習慣や遺伝的要因に関する研究を実施していく。

1)愛知県衛生研究所、2)名古屋大学大学院産婦人科学、3)愛知県がんセンター中央病院婦人科、4)名大・予防医学、5)研究所長

<研究課題> 3

(主 題) 「健康日本21あいち」に基づく愛知県民のためのがん予防啓発技術の開発研究と評価
(副 題) 一般健常者集団におけるB型肝炎ウイルス水平感染率の推進

<研究者氏名>

田中英夫、細野覚代

<目的・概要・進捗状況>

B型肝炎ウイルス (HBV) ワクチンのuniversal vaccinationを日本で導入することで、将来どれだけのHBVの水平感染が予防できるか、また、どれだけのB型慢性肝疾患の発生を抑えられるかを推定するためには、重要なパラメーターの1つとして、日本の一般人口におけるHBVの水平感染率を推計する必要がある。そこで、①1992年~93年の大阪での複数回献血者におけるHBs抗原およびHCV抗体陽転事例を含むコホート集団185,554人の集計結果、②1992年~97年の大阪での複数回献血者448,020人にお

けるHCV新規感染率を推計したコホートの集計結果、③2003年～07年の急性B型肝炎の年齢別報告数、から1990年代の5歳年齢階級別HBV水平感染率を推計した。次に、日本の一般健常者集団におけるHBV保有率は年々減少していることから、1990年代と2000年代のHBV保有率の差を考慮した出生年代効果を想定した。これらの方法により、2005年の16歳から64歳におけるHBVの水平（不顕性）感染者数を、8,409人と推計した。また、出生年代効果の強弱等の仮定を変えることで感度分析を行ったところ、この推計人数幅は6,396人から15,552人の間となった。

<今後の方向>

今回得られた推計値をパラメーターの1つとして、B型慢性肝疾患の予防効果に関する現行のB型肝炎母子感染予防事業とuniversal vaccinationの違いを推計し、今後のHBV感染予防事業のあり方を検討する。

<研究課題> 4

- (主題) がん治療の長期予後(効果)に影響する要因の分析
(副題) 非血縁者間骨髄移植における許容可能な遺伝子型HLA型不適合組合せの検討

<研究者氏名>

川瀬孝和、松尾恵太郎、森島泰雄¹⁾

<目的・概要・進捗状況>

近年日本骨髄バンクを介した非血縁者間骨髄移植(UR-BMT)の解析により、HLA遺伝子型不適合組合せと急性GVHDのリスク及び予後の関連を報告した(Blood 2007)。この報告で重症急性GVHD発症リスクを有意に上昇させる16のHLA不適合組合せ(高リスク不適合組合せ)が明らかとなった。さらに、これらの不適合を幾つ有するかは重症急性GVHDの発症・移植予後に相関し、HLA一部不一致ドナー選択の際の重要な情報となっている。この解析では高リスク不適合組合せ以外の不適合組合せの中に統計解析上の制限により、許容不可能組合せが残存する可能性を残していた。ここでは、許容可能な不適合組合せを検討することを目的に解析を行った。方法は、JMDPを介したUR-BMT5210例を多変量解析の手法を用い、高リスク不適合組合せ群を基準とし、HLA一致群および各不適合組合せの重度急性GVHD発症リスク(Hazard ratio (HR))および95%信頼区間(95%CI)を算出した。さらに、HLA一致群と各不適合組合せのHR、95%CIを比較検討し、許容可能なHLA不適合組合せを検討する事を試みた。その結果、HLA-A座ではHLA一致群がHR=0.38(95%CI: 0.28-0.52)あるのに対し、A2402_2420(ドナーがHLA-A*2402、患者がHLA-A*2420を持つ不適合組合せ)でHR=0.32(95%CI: 0.16-0.66)(P=0.002)、A2601_2602でHR=0.36(95%CI: 0.14-0.89)(P=0.028)と、許容可能な不適合組合せの候補となり得る組合せが2組存在した。HLA-B, C, DRB1, DQB1, DPB1座でも同様に検討した結果、同様の組合せが計23組存在した。今回の解析で許容可能な不適合組合せを提示し得る事が示唆された。

<今後の方向>

本解析結果をもとに、移植予後に関する解析も合わせて検討し、許容可能な遺伝子型HLA不適合組合せに対するコンセンサスを形成し、HLA一部不一致ドナー選択のアルゴリズムを再構築することにより、移植適合ドナーを拡大させる事ができると考えられた。

1) 愛知県がんセンター中央病院血液細胞療法部

腫瘍病理学部

<研究課題> 1

(主題) 人体剖検例の病理組織学的研究

<研究者氏名>

近藤英作、中西速夫

<目的・概要・進捗状況>

本年度(平成21年4月～平成22年3月)は11体の病理解剖を行い、開所以来の総剖検数を2,604体とした。これらの症例は組織検査後、病理診断・解剖所見を付して担当医に報告されると同時に、日本病理学会の剖検輯報に掲載される。学問的に貴重な症例、臨床的(診断並びに治療)に重要で検討を要する症例に関しては、担当医との意見の交換は勿論であるが、適時行われるCPC(臨床病理検討会)に提出し相互討議を深め、当がんセンターの医療水準の向上の一役を担ってきた。本年度は消化器内科の肺がんおよび胸部外科の肺がん2症例についてCPCを計2回開催した。

<今後の方向>

がんの診断技術、制がん手段(手術・照射・制がん剤・免疫療法)の進歩によって、根治例の増加は勿論、非根治例でも長期間寛解をもたらす機会が開かれつつある。悪性リンパ腫等に対する幹細胞移植を組み合わせた超大量化学療法や分子標的治療、食道がん、脳転移巣への分割照射の治療効果などがその代表で、剖検時腫瘍の顕著な縮小、癒痕治療を認めることが少なくない。しかし一方で感染症をはじめ出血、血栓症などの合併症が死因となる例も決して稀ではない。かかる症例を疾患の自然史的立場から系統的な病理学的検討を行い、良好な予後に導く要因を引き出すのが今後の重要な課題である。また近年増加傾向にある臨床試験(治験)が行われている症例や医療事故が疑われる症例の剖検については臨床側との密接な協力、また第3者機関へのコンサルテーション等により積極的に症例報告、情報開示を行ってゆくことが大切である。

<研究課題> 2

(主題) 制がん医療の基盤材料となる機能性ペプチドの開発
(副題) がん細胞高透過性膜透過ペプチドの分離と制がんに向けたユーティリティの開発

<研究者氏名>

近藤英作、松井誠¹⁾、斎藤典子、中西速夫

<目的・概要・進捗状況>

ペプチドは生分解性を持ち“からだにやさしい”バイオツールである。近年この点に注目して、ペプチドは高血圧や高血糖・高脂血症改善の健康食品、抗菌ペプチド、がんワクチン療法への応用など国民の健康生活の様々な分野に登場し始めている。一方、先進医療の領域では肺がんにおけるgefitinib（イレッサ）、白血病・肉腫におけるimatinib（グリベック）などの分子標的薬が活躍しているが、製薬企業による巨額の資本投資の必要性や100万分の1といわれるスクリーニング効率と労力、さらには耐性変異腫瘍の出現など幾つかの大きな解決課題が立ちだかっている。またこの様な先進医療によっても一部のがんは現行の医療技術を以てなお治療困難である。われわれはこれらの現状に鑑み、我が国の制がん医療における先進医療の新しいレパートリーを創出する創薬展開としてランダムペプチドライブラリーをソースとして、がん細胞膜透過能を発揮する新規ペプチドを開発し、これを基盤材料とした細胞内分子輸送システムや分子標的治療システム、疾患診断用イメージングシステムの構築を目指す。

現在までペプチドライブラリーを用いた各種がん細胞透過アッセイの実施により、発生由来の異なる約10種類のヒト悪性腫瘍細胞に対して選択的勾配を示して高透過能を発揮する新規配列をコードする細胞膜透過ペプチドを得た（特許申請）。さらにこれらの中の代表的ペプチド2種類を用いて、癌抑制遺伝子p16INK4aの機能を代償する配列を融合した抗腫瘍ペプチドをデザインし、白血病や大腸癌細胞を対象とした具体的な腫瘍増殖抑制システムを検討中である。

<今後の方向>

われわれの分離・同定した新規膜透過ペプチドは、現在タンパク分子デリバリーに世界的に最も汎用されている膜透過ペプチドTAT(HIV-1由来)に優る透過性能を示すことが判明したので、今後はこれらペプチドを用いた具体的ながん医療への応用技術の開発研究を進めたいと考えている。

1) リサーチレジデント

<研究課題> 3

(主題) 難治性がんに対する抗腫瘍ペプチドを応用した新規治療学的アプローチ

(副題) 分子標的薬耐性難治性肺がんに対する新規制がんペプチド療法の研究

<研究者氏名>

富田勇樹¹⁾、斎藤典子、中西速夫、近藤英作

<目的・概要・進捗状況>

肺がんにおける先進医療の領域ではgefitinib（イレッサ）、erlotinib（タルセバ）などの分子標的薬がベッドサイドに登場し

活躍しているが、近年、感染症における菌交代現象に似て、このような分子標的薬による耐性クローン腫瘍の出現が新たに克服を要する大きな課題として浮上している。同問題への対処として製薬系企業ですすでに耐性変異型遺伝子産物に対する結合親和性を向上させた既薬剤のバリエーションの開発が急ピッチで進められているが、治療学的いたちごっこ感は否めない。このような現状に鑑みて、われわれは疾患の克服に貢献する新たな経路・新たなツールを用いた治療アプローチの研究を大変重要と考え、肺がん細胞透過能をもつ抗腫瘍ペプチドによる増殖抑制システムの検討を行っている。数種類のがん細胞増殖抑制あるいはアポトーシス誘導能をもつ機能性ペプチドをEGFR感受性変異および耐性変異細胞株にチャレンジした結果、Cell cycle inhibitorとしての機能を発揮する膜透過性抗腫瘍ペプチドがいずれの細胞系にも最も有効な増殖抑制効果を発揮した。この結果に基づいて、現在標的肺がん細胞側の反応分子機構や細胞学的特徴およびユーティリティに関する詳細な検討を進めている。

<今後の方向>

各種の高悪性度肺がん細胞において、どのようなデザインの抗腫瘍ペプチドが最も有効であるかの検討、またin vivo tumor modelマウスにおける実効性の検討、さらに機能増強を企図したペプチドの修飾改良などを行っていく予定である。

1) 研修生

<研究課題> 4

(主題) 固形癌細胞膜表面レセプターを介する増殖制御機構の解析

(副題) がん細胞膜上に恒常的に発現するウイルスレセプターのがん増殖制御における役割の解析

<研究者氏名>

松井誠¹⁾、斎藤典子、中西速夫、近藤英作

<目的・概要・進捗状況>

遺伝子治療に应用されているアデノウイルスなど組み換えウイルスの治療適用や効果は、標的とする腫瘍細胞側の感受性に大きく左右される。感受性の重要な指標となるのは、これらウイルスに対する細胞膜表面ウイルスレセプターの発現であり、非発現細胞は基本的に組み換えウイルスに対する有意な感染性（感受性）を持たないためウイルス遺伝子治療の適用外と考えられる。一方、多種類のヒトがん細胞で、増殖時ウイルス非存在下に恒常的なウイルスレセプター遺伝子の有意な発現が維持されている現象が認められる。われわれは、このような現象に対してウイルスレセプター分子の中からCXADR (Coxsackievirus Adenovirus receptor; CAR)を選び、その恒常的発現ががん細胞の生物学的動態にいかなる役割を担っているのかを検討している。まず、発現の特徴を洗い出すために、約30種類のヒト悪性腫瘍細胞株についてqPCR法を用いてCARの発現を解析したところ、固形癌で高発現、血球系腫瘍では発現が極めて低いことが判明した。さらにCARを標的とするsiRNA導入による機能的ノックダウンを

行ったところ、有為なCAR発現を維持し増殖を示していた数種類のがん細胞群で、増殖能の顕著な低下やアポトーシスが認められた。現在、この増殖抑制の分子機序を詳細に検討中である。

<今後の方向>

in vitroアッセイでの結果の再現性を確認したのち、次段階としてCARが固形癌の増殖進展に必要な分子であることをin vivo 担癌モデルマウスで検証していきたい。

1) リサーチレジデント

<研究課題> 5

(主題) ヒトおよび動物癌転移の分子病理学的研究

(副題) 胃癌・大腸癌の微小転移に対する遺伝子診断法および治療法の開発

<研究者氏名>

中西速夫, 伊藤誠¹⁾, 三澤一成¹⁾, 伊藤友一¹⁾, 平井孝¹⁾, 金光幸秀¹⁾, 近藤英作

<目的・概要・進捗状況>

胃癌の術後再発の半数以上は腹膜再発である。この腹膜再発は腹腔内の遊離癌細胞あるいは目に見えない微小転移によるものと考えられることから、微小転移に対する高感度な診断法と効果的な治療法の組み合わせにより再発の予防と生存率の大幅な改善が期待できる。我々はこれまでに微小転移の検出法として定量RT-PCR法を用いた腹腔洗浄液中CEA mRNAの定量法を確立し、術後の腹膜再発のリスクを評価するための優れた診断法であることを高度先進医療による前向き研究で明らかにしてきた。一方、GFP遺伝子導入ヒト胃癌の腹膜微小転移モデルを用いて、微小転移は進行した転移に比較して各種抗癌剤（殊にパクリタキセルの腹腔内投与）に対する化学療法感受性が高いことを明らかにしてきた。以上の知見から遺伝子診断により微小転移の発見と術後の腹腔内化学療法による腹膜再発予防戦略を提唱している。実際に、定量PCR法陽性症例に対し化学療法（経口S-1）を施行する臨床第2相試験を消化器外科と共同で実施し、再発ハイリスク患者に対してS-1による治療のみでは腹膜再発抑制には不十分であることを明らかにした。微小転移に対する新しい診断・治療法のさらなる改善をはかるため、本年度は、1) CEAを補完できる新しいマーカー遺伝子を見出すために25Kチップを用いた網羅的探索を行い、新規診断遺伝子マーカーを4個同定し、個々の遺伝子の予後予測マーカーとしての有用性を評価した。2) さらに60個の遺伝子セットからなる診断用オリゴマイクロアレーを企業との共同研究により作成し、再発予測アルゴリズムを構築し、それを用いた前向き研究を開始した。一方、新規治療法に関しては1) 近年、保険適応になった経口抗がん剤（S-1）に比べ、パクリタキセル（PTX）の腹腔内投与が腹膜播種抑制により効果的であることをGFP導入微小腹膜転移モデルを用いた動物実験により明らかにしてきた。しかし、PTXにも抵抗性を示す胃癌細胞が存在し、これに対しBevacizumab（抗VEGF抗体）に有為な抗腫瘍効果と生存延長効果があり、

特に微小転移に対して強く認められ、これが血管新生阻害効果によることを明らかにした。2) 糖鎖の機能を利用しマクロファージ（mφ）をcellular vehicleとし、腹膜初期転移巣（大網乳斑）に選択的に抗癌剤を送達できるドラッグデリバリーシステム（マンノース被覆リポソーム）を構築してきた。今年度は従来のマウスmφのみならず健常人末梢血のmφ、胃癌患者の腹腔mφ及び患者切除大網を用いたex vivoモデルを用いてヒト由来細胞でも乳斑に選択的に抗癌剤を送達できることを明らかにした。

<今後の方向>

現状のCEA単独のRT-PCRに代わるより高い診断精度を有する遺伝子診断法として1) CEAを補完できる新規遺伝子を含む5-6個の遺伝子を組み合わせたmultiple RT-PCR, 2) 搭載した千個程度の遺伝子のうち、数十個の遺伝子を用いた再発予測アルゴリズムにより高率に再発予測が可能な診断用腹腔洗浄液DNAチップ、を確立することにより新しい微小転移診断法の開発を試みる。一方、上に記した腹膜転移の分子メカニズムに基づいた新しい治療法に関する基礎的研究、前臨床試験をさらに進め、遺伝子診断法陽性症例に対する上述の各種治療の有用性に関する第1-2, 3相臨床試験をめざして研究を進めて行く予定である。

1)愛知県がんセンター中央病院・消化器外科,

<研究課題> 6

(主題) ヒトおよび動物癌転移の分子病理学的研究

(副題) 頭頸部扁平上皮癌、胃癌、大腸癌等の消化器がんに対する新しい分子標的治療法に関する研究-がん幹細胞を標的とする治療法に関する基礎的検討

<研究者氏名>

中西速夫, 松井誠, 大島由起子¹⁾, 棚真一郎¹⁾, 伊藤誠²⁾, 平井孝²⁾, 金光幸秀²⁾, 長谷川泰久³⁾, 近藤英作

<目的・概要・進捗状況>

根治可能ながん治療法としてがん幹細胞を標的とする分子標的治療法の研究が注目されている。Cetuximabなど種々のEGFR標的薬は大腸がん(CRC)、肺がん、頭頸部扁平上皮がん(HNSCC)において一般臨床に使用され、有意な生存延長効果が示されているが、耐性の獲得は避けられず、その克服が臨床で大きな課題となっている。我々は、耐性克服のためのアプローチとしてがん幹細胞を標的とする分子標的治療法の開発を目指している。そのためにがん幹細胞様形質を有する種々の消化器がん細胞株を確立し、それらのがん幹細胞様細胞のEGFR標的薬(Gefitinib, Cetuximab)に対する感受性とその機構の検討を行っている。これまでにCRC株ならびにHNSCC株など複数のがん幹細胞様細胞を作成している。大腸癌がん細胞株COLM-5は変異や増幅はないがEGFRを高発現し、Gefitinib、Cetuximabは本細胞に対し強い抗腫瘍効果、転移抑制効果を示した。本細胞からsortingしたCD133(+)細胞はCD133(-)細胞に比べ、spheroid形成能やNOD/Scidマウス皮下腫瘍形成率が高く、がん幹細胞様形質を

示した。両細胞のGefitinib感受性を検討したところ、Gefitinib感受性はCD133(-)細胞に比べ、CD133(+)細胞の方が有意に高かった。一方、頭頸部がん細胞株UMSCC81Bは低分化型SCCの組織像を呈し、角化型のUMSCC6細胞株に比べ、Vimentin+/Podoplanin+/ALDH+/Nanog+などを高発現し、またNOD/Scidマウス造腫瘍能、分化能などEMT/がん幹細胞様形質を示した。UMSCC81B細胞とUMSCC6細胞のGefitinib感受性を検討したところ、UMSCC81B細胞、中でもがん幹細胞様形質を有するサブセットはUMSCC6細胞に比べGefitinib抵抗性であった。

以上のことより、大腸がんではがん幹細胞様形質を示すCD133(+)サブセットはGefitinib高感受性であるのに対して、頭頸部SCCではがん幹細胞様形質を示す細胞は逆にGefitinib抵抗性であることが明らかになり、同じEGFR標的薬が適応となるがんでも、腫瘍によりがん幹細胞増殖シグナル経路が異なる可能性が示唆された。Gefitinib高感受性のがん幹細胞様細胞では治療に匹敵する顕著な抗腫瘍効果がみられ、耐性克服のための治療戦略としてがん幹細胞を標的とする治療法の可能性が示唆された。

<今後の方向>

大腸がんのCD133+がん幹細胞様細胞株のGefitinib感受性ならびにPodoplanin+頭頸部がん細胞株のGefitinib抵抗性の分子機構としてEGFRの発現制御が関連している可能性が示唆されている。EGFRなどHER familyならびに下流のシグナルの解析を行いこの制御機構を明らかにし、Gefitinib抵抗性株の新しい分子標的を探索する。

また上記細胞から分子標的治療に対する各種耐性株を作成し、耐性機構についてもがん幹細胞との関連から明らかにしてゆく予定である。

1)研修生、2)愛知県がんセンター中央病院・消化器外科、3)愛知県がんセンター中央病院・頭頸部外科

<研究課題> 7

(主題) 消化器がん発生の実験的研究

(副題) *Helicobacter pylori*感染スナネズミ胃発がんモデルを用いた非ステロイド性抗炎症薬による胃がん予防効果の検討

<研究者氏名>

豊田武士、塚本徹哉¹⁾、高須伸二²⁾、時亮³⁾、齋藤典子、齋藤亜弓、立松正衛⁴⁾

<目的・概要・進捗状況>

非ステロイド性抗炎症薬 (NSAIDs) は炎症抑制作用だけでなく、さまざまな腫瘍に抗腫瘍効果を発揮し、がんの化学予防に寄与し得る可能性が近年報告されている。今回我々は、*Helicobacter pylori* (*H. pylori*) 感染スナネズミモデルを用いて、世界的に汎用されるNSAIDsの一つであるアスピリンによる慢性胃炎・胃がん抑制効果を検討した。

6週齢雄SPFスナネズミに*H. pylori*を胃内接種し、感染後2週よりアスピリンを400ppmの濃度で混餌投与した。また、*N*-methyl-

N-nitrosourea (MNU) を10ppmの濃度で2週目から20週間飲水投与した。52週目に解剖し、胃がんの発生率および胃炎の程度を検索した。

その結果、胃がん発生率は対照群53.7% (29/54) に対し、400ppmアスピリン投与群では22.6% (7/31) と有意 ($P < 0.01$) に低下した。400ppmアスピリンを混餌投与した群の胃粘膜では、好中球浸潤および異所性増殖性腺管が幽門腺で、好中球・単核細胞浸潤が胃底腺で、対照群と比較して有意に抑制された。また、アスピリンは幽門腺粘膜におけるシクロオキシゲナーゼ-2 (COX-2) のmRNA発現を有意に低下させた。以上の結果から、アスピリンは*H. pylori*感染スナネズミにおける慢性胃炎および胃発がんを抑制することが明らかとなり、胃粘膜のCOX発現阻害を主眼とした化学予防法が効果的である可能性が示された。

<今後の方向>

胃がん予防には除菌治療が有効とされているが、萎縮性胃炎の進行した高リスク群では除菌による予防効果は限定的である。今後、アスピリンをはじめとするNSAIDsによる除菌後胃がんの予防可能性について検討を加えていく必要がある。

1)藤田保健衛生大学、2)国立がんセンター研究所、3)リサーチレジデント、4)日本バイオアッセイ研究センター

分子腫瘍学部

<研究課題> 1

(主題) 肺癌の発症・進展機序の解明と分子標的療法の探索
(副題) 肺癌の転移関連遺伝子CLCP1の機能解析

<研究者氏名>

長田啓隆、有馬千夏¹⁾、立松義朗、谷田部恭²⁾、藤井万紀子、村上秀樹、近藤豊、柳澤望¹⁾、関戸好孝、高橋隆¹⁾

<目的・概要・進捗状況>

我々は以前に肺癌細胞株から高転移性亜株LNM35を樹立し、このLNM35で高発現している新規遺伝子CLCP1 (CUB, LCCL, coagulation factor V/VIII-homology domains protein)を同定し報告した。その後の機能解析からCLCP1が細胞運動能を促進する作用を持つこと、Semaphorin4Bをリガンドとすること等を報告している。本年度は更にCLCP1の機能解析を進め、CLCP1高発現が癌の進展に果たす役割を検討した。

CLCP1に対するshort hairpin-RNA発現ベクターを作成し、LNM35細胞へ導入しLNM35細胞のCLCP1ノックダウン株を作成した。このノックダウン株をヌードマウスに移植したところ、腫瘍増殖・血行性転移・リンパ行性転移の低下を認め、CLCP1が造腫瘍能・転移能に関与することが示唆された。この分子機構を解明するために、LNM35とCLCP1ノックダウン株との間で、Microarrayを用いた網羅的遺伝子発現解析を行った。するとCLCP1ノックダウンによりIL1, IL18等のサイトカインの発現低下が誘導された。Pathway解析でも、やはりCLCP1がIL1のacute response pathwayに関与する事が判明した。また更に癌細胞周期・

細胞運動のネットワークとの関連も示唆された。このような遺伝子発現profileの差異は、LNM35とその親株との遺伝子発現profileの差異とオーバーラップしており、高転移性亜株が樹立されるうえで、CLCP1が重要な機能を果たしている可能性を示唆している。

<今後の方向>

CLCP1が関与するシグナルが示唆されたので、更にこれらのシグナルに関わる分子群とCLCP1との相互作用を検討し、CLCP1の機能解析を進める。これらの所見から、肺癌の治療戦略に応用できる、CLCP1シグナルを標的とする肺癌治療法を検討していく。

1) 名大・院医・分子腫瘍、2) 中央病院・遺伝子病理

<研究課題> 2

(主題) 中皮腫の発がん機序の解明と細胞生物学的研究

(副題) 中皮腫におけるNF2 (マーリン) -Hippo経路異常の解析

<研究者氏名>

村上秀樹、水野鉄也^{1,2)}、藤井万紀子、石黒太志^{1,2)}、近藤豊、長田啓隆、関戸好孝

<目的・概要・進捗状況>

悪性中皮腫はアスベスト曝露によって引き起こされる極めて予後不良の腫瘍である。他のコモンな腫瘍に比べて、そのゲノム異常の解析は極めて遅れており新規の分子診断法や分子標的治療法の開発への大きな障壁となっている。悪性中皮腫は神経線維腫症II型の原因遺伝子であるNF2遺伝子の不活性化が40-50%に検出されるが残りの半数の腫瘍ではなぜNF2遺伝子異常が検出されないかについて詳細は明らかではない。

悪性中皮腫における染色体・遺伝子異常を明らかにするために、当部で樹立した14株の悪性中皮腫細胞株を用いて高密度アレイCGH解析を行った。複数の細胞株においてホモザイガス欠失が検出される領域として、既知の9p21.3(p16Ink4/p14Arf)、22q12.2(NF2)領域に加え、新たに13q12.11領域を明らかにした。13q12.11領域に存在する遺伝子LATS2に注目し、悪性中皮腫細胞株20株における遺伝子解析を行ったところ、7細胞株において不活性型の遺伝子変異が検出された。

LATS2は腫瘍抑制シグナル伝達経路Hippo経路の構成分子であり、この経路はNF2遺伝子産物マーリンにより活性化されることから、中皮腫においてはNF2(マーリン)-Hippo経路が高頻度(75%)に破綻していることが明らかとなった。LATS2はがん遺伝子として働くYAPをリン酸化することにより、YAPの転写コアクチベーターとしての活性を抑制し、YAPにより誘導される遺伝子発現を制御する。悪性中皮腫の組織標本を検討したところ70-80%においてYAPの恒常的な活性化(低リン酸化および細胞核内集積)が認められ、さらに中皮腫細胞株を用いたin vitroの検討では転写因子TEADと協調してCyclin D1などの細胞増殖に係る遺伝子を過剰発現させることが明らかとなった。一方、

NF2 (マーリン) -Hippo経路が不活性化している中皮腫細胞株2株を用いてYAPをshort hairpin RNAを用いたRNAiでノックダウンしたところ、細胞増殖能の低下が観察された。これらの結果は、NF2(マーリン)-Hippo経路がYAPの恒常的な活性化を引き起こし、機能的に中皮腫の異常増殖に関与していることが明らかとなった。

<今後の方向>

本年度の結果により、1) 悪性中皮腫においてNF2(マーリン)-Hippoシグナル伝達系が高頻度に不活性化し、その結果YAPが恒常的に活性化されて細胞の異常増殖・浸潤が引き起こされていること、2) YAPの活性化を制御する分子の開発が悪性中皮腫に対する新たな分子標的治療につながる可能性があること、が強く示唆された。特に中皮腫においてYAPによって発現の制御される遺伝子群を同定し、さらにYAPによる転写活性機構を詳細に検討することが、今後の新たな分子標的治療の開発に有力な足がかりとなることが強く示唆された。

1) 研修生、2) 名大・胸外

<研究課題> 3

(主題) 消化器がんの発症におけるエピジェネティクス関与の解明

<研究者氏名>

岡本泰幸¹⁾、近藤 豊

<目的・概要・進捗状況>

【背景】肝細胞がんは、B型、C型肝炎ウイルス感染後の慢性肝炎を母地として発生する。慢性感染の経過中にDNAメチル化をはじめとするエピジェネティックな変化が蓄積することが知られているがその機序は明らかではない。今回B型、C型肝炎ウイルス(HBV、HCV)感染後の、DNAメチル化異常の誘導機序とその意義について明らかにすることを目的として、ヒト肝細胞置換uPA/SCIDマウスモデルを構築し、B型、C型肝炎ウイルスの感染後のDNAメチル化異常の解析を行った。【目的・方法】ヒト肝細胞置換uPA/SCIDマウスにHBVもしくはHCVを感染後(HBV感染マウス9匹、HCV感染マウス9匹)、経時的にMethylated CpG Island amplification- microarray (MCAM)法による、プロモータ領域のDNAメチル化異常を網羅的に解析した。またマウスモデルに観察されたDNAメチル化プロファイルと、実際の肝細胞がん症例でのDNAメチル化異常の相関を検討するため、肝細胞がんの臨床検体(HBV17例、HCV19例)を網羅的に解析した。【結果】ヒト肝細胞置換uPA/SCIDマウスを網羅的に解析した結果、HCV感染マウスでは、HBV感染マウスに比較し、多くの遺伝子でプロモータ領域の異常メチル化を認めた(337遺伝子vs 157遺伝子, P=0.024)。また、HBV感染マウスにおけるDNAメチル化標的遺伝子の多くは、HCV感染マウスのDNAメチル化標的遺伝子に含まれた。総ゲノムのDNAメチル化を反映するLINE1のメチル化レベルは、一般にがん組織で低下することが知られているが、HCV感染マウスではHBV感染マウスに比較しLINE1のメチル化の有意な低下を認めた(53.0% vs 57.2%, P<0.001)。ヒト肝細胞キ

メラマウスでDNAメチル化標的遺伝子の多くは、肝細胞がんにおいても同様にDNAメチル化の標的遺伝子であった。【結語】HCV感染はHBV感染に比較し、DNAメチル化をより強く誘導することが示唆された。一部のDNAメチル化標的遺伝子がHCV感染とHBV感染で一致しており、共通の機序がメチル化誘導に関わっていると推測された。これらのDNAメチル化誘導に関わる機序は、肝細胞がんの有効な治療標的として期待できる。

＜今後の方向＞

本モデルを用いて、ウイルスの感染によるエピジェネティクス異常の誘導機序について明らかにすることを試みる。

1) 研修生

遺伝子医療研究部

＜研究課題＞ 1-1

（主題）造血器腫瘍発症機構の分子生物学的研究及び診断治療への応用

（副題）Array CGHによるT細胞性リンパ腫の疾患特徴的ゲノム構造異常/標的遺伝子の探索

＜研究者氏名＞

中川雅夫, 海野 啓¹⁾, 中村栄男²⁾, 塚崎邦弘³⁾, 宇都宮興⁴⁾, 大島孝一⁵⁾, 瀬戸加大

【目的・概要・進捗状況】

我々は、造血器腫瘍におけるゲノム構造変化を全ゲノムにわたって均等に配置された2304個の人工ヒトDNAを貼り付けたスライドガラスを作成し、Comparative genomic hybridization (CGH)をする方法=Array CGH法を確立した。これを用いて約300例近くのB細胞リンパ腫をこれまでに解析し、ゲノム異常を詳細に明らかにしてきた。一方、T細胞性リンパ腫は全世界的にもいまだゲノム異常解析が不十分で、特徴的なゲノム異常は全く分かっていない。その原因の一端は臨床・病理・ゲノム異常に相関する疾患分類がいまだ十分でない点にある。Peripheral T-cell lymphoma, unspecified (PTCL-U)は新WHO分類で提唱されているどのT細胞性リンパ腫病型にも分類し得ない症例を扱う疾患単位で、複数の疾患を含んでいる可能性がある。再分類に関して様々な検討されているがいまだ結論は出ていない。本研究では網羅的、かつ高精度にゲノム異常を解析できるアレイCGH法でPTCL-U 51症例のゲノム異常を検討した。その結果、ゲノム異常や病理所見・予後に関して均一な新規サブグループを見出す事に世界で初めて成功した。さらにこの新規サブグループは別のPTCLであるリンパ腫型ATLLと高度に類似したゲノム異常様式を持つことはじめて明らかにした。一方、同じくATLLの中でも異なる臨床サブグループである急性型ATLLは、リンパ腫型ATLLとは全く異なるゲノム異常様式を持つことも明らかにした。また、リンパ腫型ATLLはさまざまに付加的なゲノム異常を持つ腫瘍クローンが存在し、その一部のみが末梢血へ流出している可能性を見出している。このことは急性型・リンパ腫型という臨床サ

ブグループ分類を、分子病態解析から再検討するための基礎となるものであり、さらに検討を進める。

【今後の方向】

ゲノム異常領域に発現解析を組み合わせ、パイオインフォマティクス解析で新規PTCL-Uサブグループおよびリンパ腫型ATLLの病態に深く関わる候補遺伝子群を明らかにする。急性型ATLLとリンパ腫型ATLLをアレイCGHおよび発現解析により比較し、その分子病態の差異を明らかにするとともに、分類に有用な臨床的マーカーを検索する。

1)リサーチレジデント, 2)名古屋大学医学部附属病院・病理部, 3)長崎大学医学部・原爆後障害医, 4)慈愛会今村病院分院, 5)久留米大学医学部・病理学教室

＜研究課題＞ 1-2

（主題）造血器腫瘍発症機構の分子生物学的研究及び診断治療への応用

（副題）IgH転座関連B細胞リンパ腫がん遺伝子Bcl2, Myc, Ccnd1の機能的協調の検討

＜研究者氏名＞

中川雅夫, 都築 忍, 田口 修¹⁾, 瀬戸加大

【目的・概要・進捗状況】

がんは複数の遺伝子異常が積み重なった結果起こるため、これらの協調作用の検討は腫瘍形成機序の解明に必須である。協調作用をもつ遺伝子異常の組み合わせを同定する方法としては、少数の限られた遺伝子をectopicにマウスのprimary細胞に導入してin vitroで形質転換能を確認するという方法がある。ヒトB細胞リンパ腫において、BCL2、MYC、CCND1は最も頻度高く見られる遺伝子異常である。とくにIgH染色体転座の相手遺伝子として頻度が高く、B細胞リンパ腫の病態形成に深く関わっている。BCL2、MYCあるいはMYC、CCND1の2遺伝子間協調作用は、これまでマウスモデルを用いた限定的な方法でいくつか報告されてきた。これらの結果から、実際の腫瘍形成プロセスには3つ目あるいはそれ以上の遺伝子異常の付加が必要であることが示唆されている。しかし、これまで腫瘍形成における3遺伝子間での機能的協調については全く分かっていなかった。今回我々はBcl2、Myc、Ccnd1の3遺伝子が協調的に作用し、マウスprimary B細胞をin vitroで形質転換できることを発見した。さらに、in vivoモデルを用いて、この3遺伝子協調作用が腫瘍の悪性度に寄与することを見出した。

【今後の方向】

Bcl2、Myc、Ccnd1の3遺伝子協調作用は重要な新発見であり、さらに確認実験を行い、深く検討する。Bcl2、Myc、Ccnd1以外のヒトB細胞リンパ腫がん遺伝子候補も、このような協調作用にかかわりうるのか検討する。

1)分子病態学部

〈研究課題〉 1-3

(主 題) 造血器腫瘍発症機構の分子生物学的研究及び診断治療への応用

(副 題) リンパ腫形成における癌関連遺伝子のスクリーニング

〈研究者氏名〉

本間圭一郎, 瀬戸加大

[目的・概要・進捗状況]

我々は、過去に行ったリンパ腫のアレイCGH解析のデータから、Activated B cell like (ABC) typeのびまん性大細胞型B細胞リンパ腫(DLBCL)とマントル細胞リンパ腫(MCL)に高頻度にA20の欠失が認められること、A20がNF- κ B抑制を介した癌抑制遺伝子として機能することを明らかにした。しかし、我々の検討では、EBウイルス感染不死化B細胞(LCL)のA20を、ノックダウンすることでコロニー形成能の亢進は認められたが、2週間以降のコロニーの維持は出来なかった。また、A20ノックダウンLCLのヌードマウスへの造腫瘍性も認められなかった。臨床検体でもA20に異常を有する胃MALTリンパ腫が、H.pylori除菌により寛解することからも、A20の異常だけでは腫瘍細胞の維持ができないと考えられた。NF- κ Bを標的にした治療は、期待されたような臨床成績が得られておらず、相互作用を示す別のシグナル経路の阻害も必要と考えられる。このことから、腫瘍形成においてNF- κ Bと相互作用を示すがん関連遺伝子の同定を試みることにした。まず着目したのはMAPK-JNK, p38カスケードで、このシグナル経路の活性化を検出する実験系を構築し、cDNAライブラリーによるスクリーニングを開始している。予備実験の結果、TBK1が抽出された。これは、すでにリンパ腫においてよく知られた遺伝子であるが、実験系は機能することが確認できた。

[今後の方向]

スクリーニングにより、癌関連遺伝子を抽出する。その中から、治療標的分子として有望なものを選択する。

〈研究課題〉 1-4

(主 題) 造血器腫瘍発症機構の分子生物学的研究及び診断治療への応用

(副 題) 遺伝子発現プロファイルおよびアレイCGHを用いた、節外性NK/T細胞癌、鼻型の病因遺伝子の同定

〈研究者氏名〉

加留部謙之輔, 中川雅夫, 瀬戸加大

[目的・概要・進捗状況]

節外性NK/T細胞リンパ腫、鼻型(ENKTL)は、欧米よりもアジアに頻度が高い悪性リンパ腫であり、日本から発信する研究が重要と考えられる。しかし、その頻度の低さと検体の取りにくさから、その病態の解明は、他のリンパ腫、特にB細胞リンパ腫に比べ進んでいない。ENKTLの癌化に関わる遺伝子を同定するため、アレイCGHによるゲノム解析および遺伝子発現プロファイルを用いて以下のス

テップで研究を行った。

1.ENKTLの正常対応細胞の同定

病因遺伝子の同定のため、正常細胞とENKTLで発現が異なる遺伝子を抽出する必要があるが、ENKTLの正常対応細胞は明らかではない。そのため、まず正常対応細胞を同定するため、ENKTLの細胞株4個、臨床検体11例および正常対応細胞の候補となる正常リンパ球サブセットとして、CD4+/8+T細胞、CD16+CD56dim NK細胞、CD16-CD56bright NK細胞、 γ δ T細胞の遺伝子発現プロファイルを解析した。その結果、NK細胞および γ δ T細胞、つまりinnate immunityに与するリンパ球がENKTLに最も近い性質を示し、正常対応細胞であると考えられた。

2.ENKTLの遺伝子発現プロファイルおよびゲノム異常

オリゴアレイCGHを用いて、ENKTLのゲノム異常の解析を行った。その結果、6q16-24の領域において、最も高頻度な欠失が認められた。この部位にはPRDM1、A20、FOXO3、ATG5、LACE1、HACE1はじめ複数のがん関連遺伝子が認められた。この中でどの遺伝子の欠失がよりがん化を促進しているのかを探るために、ENKTLの細胞株に対してそれぞれの遺伝子を導入し、細胞の状態に変化があるかを検討した。その結果、PRDM1、FOXO3において著明な増殖抑制効果が認められた一方で、A20、BACH2においては同様の効果は認められなかった。この機能的スクリーニングを通じて、6q欠失領域におけるより重要ながん抑制遺伝子の抽出を試みている。

[今後の方向]

以上の結果から、遺伝子発現プロファイルは正常対応細胞の同定に有用であり、したがって腫瘍の再分類にも有用である可能性がある。機能的スクリーニングにより6q欠失領域におけるがん抑制遺伝子を同定できれば、遺伝子変異を含めより詳細な検討を行っていく予定である。

〈研究課題〉 2-1

(主 題) 造血器細胞の分化・増殖に関与する遺伝子の血清学的、分子生物学的研究

(副 題) TEL-AML 1型B細胞性白血病の発症機構解析、および白血病関連遺伝子ERGの機能解析

〈研究者氏名〉

都築忍, 瀬戸加大

[目的・概要・進捗状況]

TEL-AML 1は染色体転座t(12;21)に伴って形成される異常融合遺伝子で、小児リンパ性白血病の原因として最も多いことが知られている。TEL-AML 1の機能として、B細胞の分化を特にプロB細胞レベルで著しく阻害する作用があること、B細胞の自己複製能を亢進させることによりB細胞を増殖優位にする機能があることを見出し、更にマイクロアレイ解析によりTEL-AML 1によってB細胞で発現の変化する遺伝子を抽出した。現在、こうして抽出した遺伝子がTEL-AML 1の機能発現にどのように寄与するのかをshRNAの手法で検討中である。

一方、転写因子ERGは、白血病の一部のタイプで予後と密接な関係が報告されているものの、その造血系における機能は不明であった。今回、骨髄移植アッセイおよびshRNAによるノックダウン実験によって、ERGには白血病を引き起こす機能があり、かつ白血病の維持に必須であることが判明した。

[今後の方向]

TEL-AML1によって発現が変化する遺伝子の生物学的意義についてshRNAの手法を用いて解析し、さらに各遺伝子がすでに成立した白血病においても重要な役割を果たすかどうかを解析する。また、ERGを標的とした新規治療法の開発をめざす。

腫瘍免疫学部

<研究課題> 1-1

(主題) 腫瘍抗原の免疫学的、分子生物学的検索

(副題) オートファジーを介して腫がん細胞表面に提示されるCTLエピトープの解析

<研究者氏名>

岡村文子、烏飼宏基、赤塚美樹、葛島清隆

[目的・概要・進捗状況]

HLA-A24拘束性細胞傷害性Tリンパ球(CTL)クローン16F3は、HLA-A24を発現するK562細胞と腫がん細胞株を認識し、HLA-A24陽性の繊維芽細胞、上皮細胞、Bリンパ芽球などの正常細胞は認識しない。標的抗原のビューロマイシン感受性アミノペプチダーゼ(PSA)はユビキタスな発現であるにも関わらず、このような認識の違いがあるため本エピトープの生成機構を詳細に検討した。

細胞表面のHLAに結合しているペプチドを酸処理により剥離した後、種々の抗原提示阻害剤を作用させたがん細胞を一定時間培養した。その後、16F3と短時間共培養して、CTLが分泌するIFN- γ をsecretion assayなどを用いて調べた。

通常のMHCクラスI経路を阻止するプロテアソーム阻害剤ラクタシステンや、細胞内蛋白質輸送阻害剤プレフェルディンAによりエピトープ生成は抑制された。驚くべきことに、HLAクラスIIの抗原提示阻害剤であるクロロキンによっても、エピトープ生成が低下した。すなわち本エピトープはCTLの認識する抗原にもかかわらず、クラスII抗原様に、エンドソーム・リソソーム系を介して生成されていることが示唆された。

エンドソームが関与するクラスIの抗原提示ができないようなHLAクラスI変異体を2種類作製し、これらの変異体によってエピトープが提示できるかどうか調べたところ、本エピトープは変異体によって提示できること、またエンドソームを介するリサイクリング阻害剤プリマキンによってエピトープ生成が阻害されなかったことから、エンドソームの関与は否定できると考えられた。

次に、リソソームに合流するオートファゴソームの関与を推定し検討した結果、マクロオートファジー阻害剤である3-メチルアデニンによってエピトープの提示阻害が見られた。さらに、

複数のオートファジー関連遺伝子(atg)に対するsiRNAを導入し、atgの発現を抑制した細胞において、明らかにエピトープの提示が低下した。

[今後の方向]

ユビキタスに発現しているPSAは、オートファジー経路を介して処理を受けた後、がん細胞においてのみ提示されていることが明らかとなった。T細胞が正常細胞とがん細胞を識別する新たなメカニズムと考えられ、がん免疫療法の新たなターゲットに関する概念を提案した。今後、新たなオートファジー依存性エピトープペプチドを探索するために、siRNAによりオートファジー機能を低下させた腫がん細胞と通常の腫がん細胞からHLAに結合しているペプチドを精製し、マスマスペクトロメトリーにて比較解析する予定である。

<研究課題> 1-2

(主題) 腫瘍抗原の免疫学的、分子生物学的検索

(副題) 肺がん特異的CTLを誘導するための人工抗原提示細胞システムの構築

<研究者氏名>

渡邊友紀子、岡村文子、葛島清隆

[目的・概要・進捗状況]

担がん患者のリンパ球を自己のがん細胞株で刺激することで得られるCTLは、CTL標的抗原の同定に必須である。細胞株を樹立しにくい肺がんなどではCTL標的抗原の同定を困難にしている。他の患者から樹立された癌細胞株を抗原提示細胞として使用すると、一致していないHLAに対する強いアロ反応がCTLの誘導を阻害する。

昨年度は、HLAを表面に発現していないK562細胞(慢性骨髄性白血病細胞)に、単独のHLAとCD86および4-1BBLを導入し、CTL誘導能の高い人工抗原提示細胞(aAPC)システムを構築した。今年度は、肺がん細胞株と同様の遺伝子操作によってaAPC作製し、CTL誘導能の検討を行った。

非小細胞肺がん患者から樹立された細胞株C831Lは、 β 2m遺伝子変異のために、細胞表面にHLA class I分子を発現していない。これらの細胞株に β 2m 遺伝子を導入することで内因性のHLA class Iを細胞表面に復元することが可能である(Baba et al., Cancer Science 2007)。一種類のHLAを発現させる目的で、 β 2mとHLA-24の重鎖をグリシン-セリンのリンカーで共有結合させた“単鎖HLA”をレンチウイルスベクターで導入した。この細胞表面には、内因性のHLA-A2分子は発現していないことをフローサイトメーターで確認した。共刺激分子としてCD86を導入した。この細胞をaAPCとして用いて、HLA-A24陽性成人のナイーブCD8+T細胞を刺激してT細胞株を樹立した。特異性はインターフェロン(IFN) γ キャッチ法にて確認した。樹立したT細胞株はHLA-A24と β 2mを導入したC831L細胞を認識してIFN γ を産生したが、HLA-A24陽性の繊維芽細胞やEBV陽性Bリンパ芽球などの正常細胞は認識しなかった。C831L細胞をbFGFやEGFなどの増殖因子存在下に無血清培地で培養すると、がん幹

細胞様の球状体(sphere)を形成しながら増殖した。

[今後の方向]

化学療法や放射線療法に抵抗性のいわゆる“がん幹細胞”の残存が、がん治療後の局所再発と遠隔転移の要因である、という説が現在有力である。今年度に樹立した肺がん由来の人工抗原提示細胞を、無血清条件で培養した際に形成された球状体(sphere)は、“がん幹細胞”を含んでいる可能性がある。これらの“がん幹細胞”に対するHLA class-I拘束性のCTLクローンを樹立するとともに、同じ細胞からcDNAライブラリーを作製し、発現クローニング法によりCTLクローンが認識する抗原を同定する。

<研究課題> 2-1

(主題) 免疫診断及び免疫治療の前臨床的及び臨床的研究

(副題) HLA一座不一致同種間骨髄移植患者より樹立したHLA-class IIを直接認識するCD8+CTLクローンの意義

<研究者氏名>

島飼宏基、赤塚美樹、柳澤真弓¹⁾、今橋伸彦²⁾、宮村耕一²⁾、森島泰雄、小寺良尚³⁾、葛島清隆

[目的・概要・進捗状況]

同種造血細胞移植におけるアロ免疫反応は移植片対宿主病(GVHD)や移植片対白血病(GVL)効果の誘導に関与している。造血細胞特異的マイナー組織適合抗原(mHAg)はGVHDを惹起することなくGVLを誘導しうる抗原として注目されているが、HLA不一致移植においては主に不一致HLAに対するアロ免疫反応が働くと考えられる。今回我々は移植後の患者末梢血より不一致HLAクラスIIを直接認識するCD8陽性のCTLを誘導し、その意義を検討したので報告する。

[方法] 同胞ドナーよりHLAクラスII一座不一致(DRB1*1502→DRB1*0803)の同種骨髄移植を受けた患者の移植後207日目の末梢血単核球(PBMC)を移植前の患者末梢血PBMCで刺激しCTL株を誘導後、限界希釈法にてCTLクローンを得た。クローンはCD8陽性で移植前の患者血液細胞を強く傷害したが、皮膚線維芽細胞は傷害しなかったため、このクローンの認識する抗原の同定に進んだ。

[結果] 得られたクローン1H8はCD8陽性であったため、パネルB-LCLに対する傷害パターンからHLA-A*2402が拘束HLA分子と推測した。そこでHLA-A*2402を導入したHapMap LCLを用い、我々が新規に開発したゲノムワイド関連解析法により抗原の同定を試みたところ6番染色体のHLAクラスIIを含む巨大な不平衡ブロックの領域が特定された。しかし、この領域に存在するHLA以外の遺伝子上には傷害パターンと一致するSNPは存在しなかった。そこで各パネルLCLのクラスIIをタイピングしたところ1H8に傷害を受けるLCLは全てドナー→患者方向に不一致であったHLA-DRB1*0803(または*0802)が陽性であった。抗体を用いたブロッピング実験、HLA-DRB1*0803導入ドナーLCLに対する傷害性などから1H8は不一致クラスIIを直接認識していると考えられた。1H8の組織特異性を再度確認するために皮膚線維芽細胞をIFN-

γ とTNF- α で処理し、HLA-DRB1*0803の発現を検討したところ細胞表面上にわずかに検出されるのみであり、実際1H8の傷害も受けなかった。一方で、1H8はHLA-DRB1*0803を発現している造血細胞とともに白血球細胞のCD34陽性分画も傷害した。また1H8のT細胞受容体 β 鎖CDR3領域特異的なPCRを行った結果、このクローンは移植後患者末梢血中に検出されるとともに移植前のドナー末梢血中でも強く検出された。

[結論] HLAクラスIIを直接認識するCD8+CTLクローンがHLA不一致移植において移植前患者末梢血中にすでに存在しており、移植後GVL効果に関与しうる可能性が示唆された。本クローンが移植前のドナー末梢血中でも強く検出されたことから、当該アロ反応性のT細胞が何らかの外來性抗原でドナー体内において既に感作されていた可能性がある。

[今後の方向]

限界希釈法によってこのCTLの前駆体頻度を検討するとともに、他のクラスIIにおいても同様の事象が起こりうるか検討する。さらにCD8+CTLがクラスII分子を直接認識する機序も検討する。

1)一宮市立市民病院・血液内科、2)名古屋第一赤十字病院・血液内科、3)愛知医科大学・造血細胞移植振興寄附講座

<研究課題> 2-2

(主題) 免疫診断及び免疫治療の前臨床的及び臨床的研究

(副題) がんワクチン療法における免疫モニタリング方法の開発

<研究者氏名>

渡邊友紀子、葛島清隆

[目的・概要・進捗状況]

文部科学省と厚生労働省が共同で策定した「第3次対がん10か年総合戦略」では、基礎研究の成果を予防・診断・治療へ応用するがんトランスレーショナル・リサーチの推進が「重点的に研究を推進する分野」の柱の一つとして掲げられた。これまで蓄積されたがん免疫療法や分子標的治療法に関する優れた基礎研究の成果を、適切な支援体制のもとで研究課題の進捗状況や達成の可能性を把握しつつ、次世代の革新的な治療法につなげるためのトランスレーショナル・リサーチを推進し、我が国発の有効な治療法の開発につなげることを目的としている。

このため、愛知県がんセンター腫瘍免疫学部は、中核機関の国立大学法人三重大学はじめ、国立大学法人北海道大学、国立大学法人岡山大学、学校法人産業医科大学、国立大学法人九州大学と共同で新規抗原蛋白デリバリーシステムによる多価性がんワクチンの臨床研究を進めてきた。特に臨床試験での免疫反応評価のためのNY-ESO-1抗原に対する免疫モニタリング標準化を行った。

近々に予定されているNY-ESO-1ワクチン治験では、免疫応答のモニタリングとして抗体測定が採用されている。特にフェーズ1では、推奨用量の選択にELISA法による抗体免疫反応性の評価を用いるが、NY-ESO-1発現腫瘍担癌患者の30-40%で液性

免疫応答が自発誘導されているため、抗体を定量的に測定する必要があります。本学部が開催した免疫モニタリング委員会での検討の上、抗体価の陰性・陽性カットオフ値は；健康成人血漿（400倍希釈）数十検体のELISA吸光度の平均プラス1.465標準偏差、抗体価上昇は；検体の吸光度が陰性・陽性カットオフ値を下回る1段階前の希釈倍、とそれぞれ定義した。

さらに、定義した抗体価の陰性・陽性カットオフ値および抗体価が参加各施設において再現性を持って測定されることを確認するために、ELISAワークショップを開催した。すなわち、参加各施設に同一検体と試薬を配布し、別途配布した「ELISAワークショップ手順書」に基づいて実験を行った。結果まとめて評価したところ、本方法が優れて再現性のあること、さらに実施場所や実験者を変更してもデータのブレが少ないこと（頑健性）を確認した。がんワクチンの臨床試験を実施する上で、信頼性の高い免疫モニタリング法を確立することは重要である。腫瘍免疫学部では、全国的にも例の無い「免疫モニタリングワークショップ」を主催し、免疫療法の質の向上に貢献した。

[今後の方向]

NY-ESO-1ワクチン治験において、免疫モニタリングを実施する。

腫瘍ウイルス学部

<研究課題>

- (主題) ヒトがんウイルスの増殖と宿主細胞応答の解析
- (副題) EBウイルス再活性化を制御する細胞性因子の網羅的解析

<研究者氏名>

村田貴之, 鶴見達也

[目的・概要・進捗状況]

EBウイルスは多くの健常成人のBリンパ球などに潜伏感染しており、刺激により再活性化し、溶解感染に至る。再活性化の機序を明らかにすることはウイルス拡散の防止にもつながり、意義深い。EBウイルスの再活性化には前初期遺伝子のひとつであるBZLF1が必要かつ十分であることが知られている。BZLF1はウイルスのコードするb-Zip型転写因子であり、ウイルスの初期遺伝子の転写を活性化することでウイルスの再活性化を強力に促進する。

今回、EBウイルスの再活性化メカニズムについてより詳細かつ網羅的に解析するため、cDNAライブラリを用いたスクリーニングを遂行し、BZLF1のプロモーターを活性化する宿主因子の探索を行った。これまでに2万個以上のクローンを精査し、11のヒットを得た。ヒットにはMEF2BやKlf4、いくつかのb-Zip型転写因子が含まれていた。これらの因子、もしくはその類縁の因子がBZLF1の転写を活性化することがすでに報告されていたことから、本スクリーニングの信頼性の高さが示された。他にはHypoxia-Inducible Factor (HIF)-2aがBZLF1プロモーターを活性化する因子として同定された。興味深い新規の知見であったため、

この因子に着目して詳細な解析を行った。結果、低酸素様状況においてEBウイルス再活性化が促進されること、HIF-1 aよりHIF-2 aの方が効果が高いらしいことを明らかにし、またさらにBZLF1プロモーター上にHIFの結合サイトを同定した。以上から低酸素状況がEBウイルス再活性化を促進することが明らかになった。

[今後の方向]

今回の研究では、EBウイルス再活性化においてMEF2D、Sp1、b-Zip型転写因子の重要性を再確認した上、HIF-2aの重要性についてはじめて明らかにした。今後はより詳細な研究を遂行することで、EBウイルス再活性化メカニズムの包括的解明を目指す。

<研究課題>

- (主題) ヒトがんウイルスの増殖と宿主細胞応答の解析
- (副題) EBウイルスBZLF1 遺伝子産物の精製

<研究者氏名>

中洲 章、鶴見 達也

<目的・概要・進捗状況>

EBウイルスのBZLF1 遺伝子産物 (pBZLF1) は、EBウイルスの潜伏感染状態からウイルス産生サイクルへの再活性化を誘発する転写制御因子であると共に、ウイルス産生サイクルで機能する複製開始点に結合する事からDNA複製への関与が示唆されている。ここではpBZLF1の生化学的な機能を調べるために精製を試みている。

昆虫細胞を用いた大量産生系で発現させたpBZLF1は不可逆的に凝集体を作りやすく、カラムクロマトグラフィーで単一のピークを形成しない事からタンパクが正しい高次構造を取っていない事が示唆された。そこでEBウイルスが潜伏感染しているマームセット由来のB95-8細胞からの精製を試みた。薬剤を用いて再活性化したB95-8細胞から高塩濃度の条件下で界面活性剤によりpBZLF1を抽出し、ハイドロフォビックカラムクロマトグラフィーで分画する事により低塩濃度 (0.1M NaCl) でも可溶化しているpBZLF1 標品を得る条件を設定した。しかし低塩濃度でシヨ糖密度勾配遠心を行うと大部分のpBZLF1は高分子量の分画に広く分布した。この事はpBZLF1は他のタンパクと複合体を形成している事を示し、このタンパクを精製するためには高塩濃度の条件下で分画を行える段階が必要となる。イオン交換カラムで部分精製した後に、高塩濃度(1.5M-2M NaCl)の条件下でシヨ糖密度勾配遠心、ヒドロキシアパタイトクロマトグラフィーを用いてさらに精製を進め、その後0.3MのNaClの条件下でヘパリンセファロースに吸着することによりpBZLF1が主成分になった標品が得られる条件を設定した。しかしながら使用していたヒドロキシアパタイトが製造中止となり他社の製品を用いなければならなくなり、この段階のプロトコールを見直す必要がでてきた。

<今後の方向>

現在までのところ非常に回収率が低く (<1%) ばらつきがあるので安定して回収できるように改善する。新しいヒドロキシアパタイトについては以前のものよりもより強固にpBZLF1に結合する傾向がみらるのでその対策を検討する。また現在3リットルの細胞培養液から精製を始めているがpBZLF1の量はかなり少ない事が示唆されてきたのでスケールアップしてさらなる精製を試みる。

<研究課題>

(主題) ヒトがんウイルスの増殖と宿主細胞応答の解析

(副題) EBウイルス潜伏感染機構解明に向けたEBNA1蛋白質結合細胞性因子の解析

<研究者氏名>

神田 輝、小布施 力史¹⁾、大川克也²⁾、鶴見達也

[目的・概要・進捗状況]

細胞に潜伏感染しているEBウイルスエピソード(2本鎖環状DNA)は、ウイルス蛋白質EBNA1を介して宿主細胞染色体に付着して複製・分配される。そこでEBNA1蛋白質の宿主染色体付着の分子メカニズムの詳細を明らかにすることを目的として、潜伏感染細胞内においてEBNA1蛋白質と相互作用する細胞性因子の同定を試みた。

エピトープタグ付加EBNA1蛋白質発現Bリンパ芽球様細胞株(lymphoblastoid cell line, LCL)の細胞抽出液を抗エピトープタグ抗体で免疫沈降して、共沈殿蛋白質バンドを質量分析により解析した。その結果、主要な共沈殿蛋白質バンドはEBNA1結合因子として既に報告されているp32/TAP/gC1q-Rであった。ショットガンMS法でも、p32由来のペプチド断片は、抗HA抗体ビーズ、抗FLAG抗体ビーズによる免疫沈降物において共通して高いスコアで同定された。p32と相互作用する領域を欠失したEBNA1変異体は、宿主染色体への付着が見られなかった。一方で、p32蛋白質は、EBV潜伏感染の有無に関わりなく、主にミトコンドリアに、一部核内に斑状に局在したが、分裂期染色体上への局在は限定的であった。

[今後の方向]

EBV潜伏感染細胞中の主要なEBNA1蛋白質結合因子としてp32が再発見されたが、EBNA1蛋白質の染色体局在のためのターゲット分子である可能性は否定的である。一方でp32はEBNA1蛋白質が宿主染色体上へ局在するための介添え因子である可能性が示唆された。

1)北海道大学・先端生命科学研究院、2)協和発酵キリン(株)

<研究課題>

(主題) 抗癌ウイルス療法の開発

(副題) がん抗原発現リンパ芽球様細胞株を用いたがん抗原特異的細胞傷害性T細胞誘導の試み

<研究者氏名>

神田 輝、葛島清隆、安川正貴¹⁾、鶴見達也

[目的・概要・進捗状況]

EBウイルスを末梢血Bリンパ球に試験管内感染させることで樹立できるLCLは、抗原提示細胞として有用であることが知られている。そこで様々ながん細胞において高発現しているがん抗原であるWT1抗原(ウィルムス腫瘍原因遺伝子産物)を発現するLCLを樹立し、このWT1発現LCLを用いたWT1抗原特異的細胞性免疫誘導の可能性を検討した。樹立したLCLにおけるWT1発現レベルは、WT1高発現細胞である白血病細胞株K562に比べて有意に高かった。またWT1発現LCLは、WT1抗原特異的細胞傷害性T細胞(CTL)との共培養により細胞溶解を起こしたことから、実際にWT1抗原を提示していることが実証された。

[今後の方向]

WT1抗原特異的CTLの体外増幅やWT1特異的細胞性免疫のモニタリングにおけるWT1発現LCLの有用性を検証する。

1)愛媛大学・生体統御内科学

<研究課題>

(主題) ヒトサイトメガロウイルスの弱毒ウイルスワクチン株の作成

(副題) ヒトサイトメガロウイルスの後期遺伝子発現に必要なウイルス転写因子の同定とそれを利用したreplication incompetentなウイルス株の作成

<研究者氏名>

磯村寛樹、鶴見達也

[目的・概要・進捗状況]

私達はヒトサイトメガロウイルス(HCMV)の弱毒ウイルスワクチン株を作成し、造血幹細胞移植後のHCMV感染症の根絶を目指している。ヘルペスウイルスの構造蛋白をコードする後期遺伝子はウイルスDNA複製依存的に発現し、ウイルスDNA複製を阻害すると発現しないことが知られているが、その理由は全くわかっていない。

私達はこれまでにヒトサイトメガロウイルス(HCMV)のウイルスDNA複製付随因子であるUL44蛋白がウイルスDNA複製とは独立して、後期遺伝子の効率的な転写に必要であることを報告した(Isomura et al., J. Virol., 2007, 2008)。一方、マウスヘルペスウイルス 68のORFs 18, 24あるいは34を欠損した組換えウイルスではウイルスDNA複製は野生型と同じように進行するにも関わらず、後期遺伝子の転写やウイルス増殖が認められないことが報告された(Sun and colleagues, J. Virol., 2006, 2007, 2009)。

そこで今回、それらの蛋白のHCMVのホモログであるUL79, 87, あるいは95を欠損した組換えHCMV BAC DNAを作成し、さらに組換えレトロウイルス(Dr. Nolan及びDr. Kleimの許可のもとレトロウイルスベクター及びパッケージング細胞を赤塚先生より分与)を用いて、それぞれの遺伝子のC端にmcherryを

融合させた蛋白を恒常的に発現するそれぞれのヒト繊維芽(HFF)細胞を作製して、組換えHCMVを分離した。同時に、UL87のC端にMycエピトープを持ち、UL95のNあるいはC端にHAエピトープをもつ組換えHCMVを作成して、それらの蛋白の感染細胞での挙動を解析した。

その結果、(1)UL79, 87, あるいは95を欠損した組換えHCMVをHFF細胞に感染させると、ウイルスDNA複製はそれぞれの欠損蛋白を発現する補充HFF細胞に感染させた場合と同様に認められたにもかかわらず、後期遺伝子の発現はHFF細胞では認められず、欠損蛋白を発現する補充HFF細胞でのみ認められた。その結果、HFF細胞ではウイルス増殖が全く認められなかった。(2) UL79, 87, 及び95 mcherry融合蛋白はそれぞれのORFを欠損した組換えHCMV感染後、UL44蛋白と共局在した。(3)エピトープタグを持つ組換えHCMVの解析から、UL87およびUL95蛋白とUL44蛋白はウイルスDNA複製前から共局在すると考えられた。

以上のことから、今回作成したUL79, 87, あるいは95を欠損した組換えHCMVはヒトの体内では増殖することができず、有力な弱毒ウイルスワクチン株の候補であると考えられた。また、現在、ウイルスDNA複製に必須なUL44蛋白がウイルスDNA複製依存的に発現する後期遺伝子発現の“タイムキーパー”の役割を果たしている可能性について検討している。

[今後の方向]

今回作成した組換えウイルスはヒトの体内でも増殖しないと考えられ、有力なワクチン株の候補である。今後はUL44蛋白のウイルスDNA複製および転写に及ぼす役割を合わせて解析することで、これらのワクチン株がどうして増殖できないのか、その理由を明らかにしたい。

分子病態学部

<研究課題> 1

- (主題) 癌の浸潤・転移および腫瘍血管新生における細胞間識別・接着機構とその動態の研究
(副題) ジシアリルルイス a を発現するN-グリカンの厳密な枝特異性—shRNAを用いた証明

<研究者氏名>

林 啓智¹⁾、近藤幸子²⁾、矢木宏和²⁾、宮崎敏子²⁾、高橋禮子³⁾、加藤晃一³⁾、神奈木玲児

<目的・概要・進捗状況>

シアリルルイス a 糖鎖が消化器癌に発現し、セレクチンを介した癌細胞の血管内皮細胞への接着を媒介することは良く知られている。我々は以前に、シアリルルイス a 糖鎖の類縁糖鎖であるジシアリルルイス a 糖鎖が消化器官の正常上皮細胞に強く発現し、発がん初期にその発現が消退する傾向を示すことを明らかにした。今回、 $\alpha 2\rightarrow 6$ シアル酸転移酵素遺伝子を培養大腸癌細胞SW1083に導入してジシアリルルイス a 陽性細胞を作成し、発現するN-グリカン糖鎖の構造解析を行った。多次元HPLCおよび質量分析の結果から、N-グリカン中のジシアリルルイス a

糖鎖は、ほとんど全てがトリアンテナ (3分枝) あるいはテトラアンテナ (4分枝) 構造の複合型N-グリカンに結合しており、しかもそのうちGal $\beta 1\rightarrow 3$ GlcNAc $\beta 1\rightarrow 4$ Man $\alpha 1\rightarrow 3$ Man分枝に限定して発現していることが明らかとなった。バイアンテナ (2分枝) 構造の複合型N-グリカンに結合するジシアリルルイス a 糖鎖は見いだされなかった。このことから、Gal $\beta 1\rightarrow 3$ GlcNAc $\beta 1\rightarrow 4$ Man $\alpha 1\rightarrow 3$ Man分枝を合成するGlcNAc転移酵素GnT-IVbが、N-グリカン中のジシアリルルイス a 糖鎖の発現に影響を与えることが示唆された。そこでレンチウイルスベクターを用いてGnT-IVb遺伝子(MGAT4B)のshRNAを細胞に導入したところ、N-グリカン中のジシアリルルイス a 糖鎖の発現が著明に低下することが観察された。これらの結果から、N-グリカン中のジシアリルルイス a 糖鎖の発現はGal $\beta 1\rightarrow 3$ GlcNAc $\beta 1\rightarrow 4$ Man $\alpha 1\rightarrow 3$ Man分枝に対して極めて高い枝特異性を持っており、糖転移酵素GnT-IVbがその発現に大きく影響すること結論できた。

<今後の方向>

これまでN-グリカンの癌性変化としては、癌化に伴って増加を示すことから、Gal $\beta 1\rightarrow 3$ GlcNAc $\beta 1\rightarrow 6$ Man $\alpha 1\rightarrow 6$ Man分枝を合成するGnT-Vが研究者の注目を集めてきた。しかし今回の結果から、Gal $\beta 1\rightarrow 3$ GlcNAc $\beta 1\rightarrow 4$ Man $\alpha 1\rightarrow 3$ Man分枝を合成するGnT-IVbも腫瘍関連性糖鎖の発現に関与することが明らかになった。今後、GnT-IVbの発現がどのような臨床的意義を有するかを患者材料などの解析を通じて明らかにする必要がある。

1)リサーチレジデント、2)研修生、3)名市大院薬

<研究課題> 2

- (主題) 悪性細胞における異常糖鎖の発現調節機構の研究
(副題) MAPK経路を介した転移促進糖鎖性接着分子の発現亢進機構

<研究者氏名>

佐久間圭一朗、神奈木玲児

<目的・概要・進捗状況>

シアリルルイスX(sLe^x)とシアリルルイスA(sLe^a)は癌細胞に発現する糖鎖性接着分子で、血管内皮細胞のE-セレクチンと接着することで血管新生や癌細胞の血管外脱出を媒介し、血行性転移を促進する。臨床においては腫瘍マーカーとして大腸癌をはじめとする多くの癌で測定されている。これらの糖鎖は、その機能的な重要性から、診断のみでなく治療標的としても大きな意義を持つと考えられる。しかし、これらの糖鎖の癌細胞における発現機構は、現状では十分解明されていない。

Epithelial-to-mesenchymal transition (EMT:上皮間葉転換)は上皮細胞が間葉系細胞の性質を獲得する現象であり、正常発生や癌など多くの生体現象に関与すると言われている。EMTを経た癌細胞は浸潤転移能が亢進することがin vitroの系で数多く観察されていることから、sLe^xとsLe^aの発現にEMTと同様の機序が働いている可能性が考えられる。本研究ではEGFとbFGFを用いて大腸癌株化細胞にEMT様変化を誘導し、sLe^xとsLe^aの発現変化

およびその機序を研究した。

HT29とDLD-1をEGF/bFGF存在下で培養すると、EMTに特徴的な変化を示した。すなわち、線維芽細胞用の形態変化、E-カドヘリンの遺伝子レベルでの発現抑制、浸潤能の亢進などが観察された。これらの細胞ではsLe^xとsLe^aの発現が強く誘導され、E-セレクトインとの接着能が著明に亢進した。この糖鎖発現亢進の原因の一つとして、シアル酸転移酵素やフコース転移酵素のいくつかで、c-MycやElk1によると思われる転写レベルでの発現上昇が観察された。これらの細胞にMEK1/2阻害剤を添加したところ、sLe^xとsLe^aの発現がほぼ完全に阻害された。一方、mTOR阻害剤では、少なくともこれらの細胞では、sLe^xとsLe^aの発現は抑制できなかった。このことから、sLe^xとsLe^aの発現には主にMAPK経路が関与していることが示唆された。大腸癌の数割はKRASあるいはBRAFに活性型変異を持つことが知られている。HT29とDLD-1もそれぞれBRAFとKRASに変異を持ち、EGF/bFGF非刺激下でもsLe^xとsLe^aを発現する。しかし興味深いことに、全ての細胞がsLe^xとsLe^aを発現するわけではなく、発現が高い細胞と極めて低い細胞が混在する。このことは、BRAFやKRASの変異だけではsLe^xとsLe^aの発現には不十分であることを意味しており、sLe^xとsLe^aの発現細胞と非発現細胞の違いを現在検証中である。一方、EGF/bFGFで刺激したHT29およびDLD-1細胞では、IL-1 α 、VEGFの発現上昇が見られた。これらの分子によって癌細胞の近くに血管内皮細胞をリクルートすると同時にE-セレクトインの発現を誘導し、血行性転移の開始に有利な環境が形成されることが予想される。

<今後の方向>

以上の結果から、MAPK経路が大腸癌の血行性転移において重要な役割を果たす可能性が示され、MEK阻害剤による抗転移効果が期待される。

<研究課題> 3

(主題) 細胞接着分子セレクトイン・CD44およびその特異的リガンドの研究

(副題) 大腸癌におけるシアリルルイスX糖鎖の発現誘導機構の解析

<研究者氏名>

佐佐木希子¹⁾、木村尚子²⁾、宮崎敬子²⁾、後藤嘉子、井澤峯子、近藤 豊³⁾、関戸好孝³⁾、神奈木玲児

<目的・概要・進捗状況>

腫瘍マーカーとして臨床応用されているシアリルルイスX糖鎖は、がんで著明に増加しており、正常上皮細胞には微量にしか存在しない。一方、正常上皮ではシアリルルイスX糖鎖がさらに硫酸化されたシアリル6-スルホルイスX糖鎖が多量に発現している。この現象は、正常上皮細胞で種々の生理機能を持つ複雑な糖鎖を合成する遺伝子がエピジェネティックな遺伝子制御によって抑制され、単純な基幹構造ががんで多量に蓄積するためと考えられている。このがん特有の糖鎖変化を生じる分子制御機構の解明を目的として研究を行った。

これまで大腸がん組織20症例を用いてシアリル6-スルホルイスX糖鎖の生合成に関与する12種類の遺伝子について定量RT-PCR法によって解析した。その結果、硫酸トランスポーター*DTDST*遺伝子の発現が顕著に低下していた。*DTDST*遺伝子を培養大腸がん細胞で発現させたところ、がん細胞表面のシアリルルイスX糖鎖は減少し、代わりにシアリル6-スルホルイスX糖鎖が増加した。大腸がん細胞株を用いた実験から、*DTDST*遺伝子の抑制は、DNAメチル化阻害剤である5-アザ-2-デオキシシチジンで処理しても変化は見られず、ヒストン脱アセチル化阻害剤であるブチレート処理によってのみ発現が誘導された。

この結果から、*DTDST*遺伝子は、主にヒストン修飾による発現制御を受けていると考えられたため、顕著な*DTDST*遺伝子の発現抑制が起きているHT29細胞と*DTDST*遺伝子を発現しているCaCo2細胞を用いて*DTDST*遺伝子のプロモーター領域のヒストン修飾についてクロマチン免疫沈降法(ChIP)を用いて解析した。遺伝子の発現抑制に関与すると考えられているH3K9me3、H3K27me3、H4K20me3は、HT29細胞で検出された。またCaCo2細胞ではH3K27me3のシグナルが低いのに対して、HT29細胞ではH3K27me3のシグナルが強かった。ヒストンメチル化が*DTDST*遺伝子の抑制的な制御機構に関与していること確かめるために、部位特異的に作用するヒストンメチル化阻害剤(DZNep, Chaetocin)で処理し、*DTDST*遺伝子の発現へ及ぼす影響を解析したところ、DZNep処理において*DTDST*遺伝子の発現が増加した。以上の結果から*DTDST*遺伝子の発現抑制にはH3K27me3が関与していることが示唆された。

<今後の方向>

今後、*DTDST*遺伝子の発現抑制にH3K27me3がどのような機構を介して関与しているかを明らかにすべきである。

リサーチレジデント、²⁾研修生、³⁾分子腫瘍学部

<研究課題> 4-1

(主題) グリコサミノグリカンおよびスフィンゴ脂質と癌の進展に関する分子生物学的研究

(副題) 神経芽細胞腫SH-SY5Y細胞に分化を誘導する生理活性脂質セラミドの発現機構の解明

<研究者氏名>

京ヶ島守、田中広治^{1,2)}、萩原和美^{2,3)}、小泉恵子²⁾、村上真史³⁾、村手 隆^{2,3)}、神奈木玲児

<目的・概要・進捗状況>

スフィンゴ脂質セラミド(Cer)は、脂肪酸と長鎖塩基(スフィンゴシン)からなり、糖脂質やスフィンゴリン脂質の構成成分として存在する他、遊離の形で存在する。この遊離型のCerは細胞に分化やアポトーシスを誘導する事が報告されている。

ヒト神経芽細胞腫SH-SY5Y細胞は、血清存在下で盛んに増殖するが、全トランスレチノイン酸(ATRA)が添加されると細胞の増殖は抑制され、神経突起の発現(分化)が認められた。この時Cerを質量分析計にて測定したところ、未添加時に比べそ

の増加が認められ、その主体はd18:1-C24:1という分子種であった。

このCer増加機構を解明するため、Cer産生に関与するスフィンゴ脂質代謝酵素群の遺伝子発現や酵素活性を調べた。Cerの主要産生経路であるセリンパルミトイル転移酵素、各種セラミド合成酵素、酸性及び中性スフィンゴミエリナーゼには変化が見られず、CMH合成酵素及び分解酵素にも変化は認められなかった。次にセラミダーゼ(CDase)の発現を調べた。本細胞ではATRA未添加時において、アルカリ性CDaseは発現しておらず、中性、及び酸性CDaseが発現している事が判明した。ATRA添加により中性CDaseの発現低下とその酵素活性の低下が見られた。そこで、ATRA添加に伴うCerの上昇はこの中性CDaseの発現低下によるものか、また、その結果として細胞分化が誘導されるかを確認するため、shRNAによる中性CDaseノックダウン細胞を作製した。この細胞はATRA未添加にもかかわらず、対照と比べ増殖が抑制され、神経突起の発現が認められた。

<今後の方向>

ATRA添加により、中性CDaseの発現が抑制されその結果産生されたCerが細胞分化を誘導した事が示唆された。今後はこのノックダウン細胞に実際に、ATRA添加時で見られたセラミド分子種が増加しているかを確認する必要がある。最近になって酸性CDaseの過剰発現が癌細胞の増殖転移を促進するという報告がなされてきている。我々のケースは中性CDaseであるが、この発現抑制が分化を促進し増殖を抑制したことから、酸性CDaseの報告にあるように、悪性度の高い癌においては中性CDaseの発現も高い可能性がある。神経芽細胞腫に限らず他の悪性腫瘍についても、中性CDaseの発現を調べる必要がある。このものの発現を抑える事により、新規な抗がん剤の開発につながる可能性も生じてきたと考えている。

1)名市大院薬、2)研修生、3)名大医・保健

<研究課題> 4-2

(主題) グリコサミノグリカンおよびスフィンゴ脂質と癌の進展に関する分子生物学的研究

(副題) 癌細胞における異常ヘパラン硫酸の発現とその生物学的、臨床的意義

<研究者氏名>

藤井正宏^{1,2,3)}、遊佐亜希子⁴⁾、宮浦修一⁵⁾、谷田部恭⁶⁾、岩田広治⁷⁾、小田高司^{2,3)}、京ヶ島守、神奈木玲児

<目的・概要・進捗状況>

ヘパラン硫酸プロテオグリカン(HSPG)は、通常その存在様式からパルカンに代表されるマトリックス型、シンデカンやグリピカンに代表される細胞表層に存在する膜結合型に分類される。またHSPGを構成する糖鎖はヘパラン硫酸グリコサミノグリカン(HSGAG)と呼ばれ、大変複雑に硫酸化されている。こうした特異な陰性荷電糖鎖ドメインは線維芽細胞増殖因子(FGF)や血管内皮増殖因子(VEGF)等に結合能を有し、増殖因子シグナルをより効率よく増幅し細胞に伝達するとされてきた。

モノクローナル抗体JM403はHSGAG中わずか0.7-4%にしか存在しないとされていた陽性荷電を持つGlcA-GlcNH₃⁺を認識する。我々はこの抗体を用い免疫組織学的に乳癌におけるGlcA-GlcNH₃⁺の発現を調べたところ、驚いた事に症例の約60%で細胞質に陽性シグナルが認められた。その発現率は核分裂指数と強い相関を示したことから(p=0.0018)、この糖鎖ドメインは細胞増殖に関与しているのではないかと考え、Ki67ラベリングインデックスとの相関を調べた。その結果、非浸潤癌では(26例)強い相関(p<0.005)が認められたものの、浸潤癌(55例)では統計的に有意な相関は認められた(p<0.05)ものの、その程度は強いものではなかった。

正常小腸増殖帯におけるJM403抗原とKi67タンパク質(核内タンパク質)発現につき比較検討した。予想された様にJM403抗原は細胞質に検出されたが、Ki67抗原が増殖帯に限定して発現しているのに対し、JM403抗原は増殖帯とそれよりやや分化の進んだと思われる細胞の細胞質においても見出された。こうした結果は、JM403抗原糖鎖GlcA-GlcNH₃⁺の細胞質発現は細胞増殖のバイオマーカーとなりうる可能性を示すとともに、Ki67蛋白質発現と一部性格の異なった情報を提供するものと考えられた

<今後の方向>

陽性荷電を帯びたHSGAG、GlcA-GlcNH₃⁺は細胞質で発現し、細胞増殖に関与する可能性が示されたが、細胞分裂時に核内で発現するKi67タンパク質とは異なった性格を持つ事が判明した。今後はこの糖鎖を発現していると考えられるHSPGのコアタンパク質の解明とその極在を解明するとともに、糖鎖も含めた分子の機能解析を行う。またバイオマーカーとしての応用を視野に入れ、さらに症例を増やして検討し、このものの持つ臨床的意義を明らかとする。

1)研修生、2)名大医、3)愛知病院乳腺科、4)リサーチレジデント、5)生化学バイオビジネス、6)中央病院臨床検査、7)中央病院乳腺科

発がん制御研究部

<研究課題> 1-1

(主題) 中間径フィラメント関連蛋白質を介した発がんの基礎研究

(副題) がん細胞骨格異常の分子機構

<研究者氏名>

井澤一郎、林裕子、稲垣昌樹

<目的・概要・進捗状況>

がんは、がん細胞が多細胞社会の秩序を乱す現象としてとらえることができる。この多細胞社会の秩序は、いろいろな仕組みで形成・保持されているが、その重要なもののひとつが細胞極性制御機構である。細胞極性の乱れは、細胞の形や運動性に関与する細胞骨格や細胞接着機構に異常な変化をもたらし、が

んがその周囲に浸潤したり、他臓器に遠隔転移する一因となる。LAP (leucine-rich repeats and PDZ) 蛋白質ファミリーは、細胞極性形成に重要な役割を果たしている分子群で、Densin-180、ERBIN、Scribbleなどの分子が属している。私共は、がんの浸潤・転移の分子メカニズムを明らかにするため、このLAP蛋白質ファミリーを研究している。私共は、Densin-180のPDZドメインと結合しうる蛋白質としてアルマジロ蛋白質のp120カテニン・サブファミリーに属するデルタ・カテニンを世界に先駆けて同定した。そして、Densin-180は、デルタ・カテニン及びN-カドヘリンと複合体を形成しており、海馬神経細胞初代培養の神経シナプスでデルタ・カテニン及びN-カドヘリンと共局在することを見出した。さらに、ERBINのPDZドメインと結合する蛋白質として、デルタ・カテニンに高い相同性をもつアルマジロ蛋白質であるp0071蛋白質を同定した。MDCK細胞においてERBINはp0071と共に細胞間接着部位に存在し、低分子量G蛋白質Rhoファミリーのドミナントアクティブ型を発現させると、ERBINが細胞間接着部位に濃縮することを世界に先駆けて報告した。これらの結果は、LAP蛋白質が細胞間接着を介して、細胞極性の制御に関与していることを示唆する。また、私共は、ERBINのシステイン14及び16がパルミトイル化されていることを見出し、ERBINの形質膜局在化には、システイン14及び16のパルミトイル化が必要であることを報告した。最近さらに、がん抑制遺伝子と考えられているScribbleと結合する分子をスクリーニングし、ERBINと結合する蛋白質として同定したp0071が、Scribbleとも結合しうることを見出した。Scribbleとp0071も、上皮細胞の細胞間接着部位 (adherens junction) で共局在していた。

[今後の方向]

最近、がんとの関連が注目されている上皮間葉転換 (Epithelial to Mesenchymal Transition; EMT) における細胞極性制御機構の役割についても検討していく予定である。がん細胞の浸潤・転移に関与する新しい分子メカニズムを明らかにし、がんの浸潤・転移を防ぐ薬剤の開発に寄与したいと考えている。

<研究課題> 1-2

(主題) 中間径フィラメント関連蛋白質を介した発がんの基礎研究

(副題) 新規ケラチン結合蛋白質であるトリコブレインとアルバトロスの機能解析

<研究者氏名>

猪子誠人、大室有紀¹⁾、松山誠¹⁾、衣斐美歩²⁾、白水崇²⁾、林裕子、米村重信³⁾、清野透⁴⁾、稲垣昌樹

[目的・概要・進捗状況]

正常分化上皮細胞の特徴は、はっきりした極性や細胞間接着などに見られ、またこのような分化と増殖は背反関係にある。一方がんではこれらの分化の特徴がしばしば消失し、また無秩序な増殖が起こる。ケラチンは分化上皮細胞に特異的に発現する細胞骨格蛋白質であるにも関わらず、がんと関わりの深い上皮分化制御についての研究は立ち遅れていた。私どもは、ケラ

チン結合蛋白質アルバトロスとトリコブレインの解析を通じてケラチンおよびこれらの分子が上皮細胞の分化制御に関わるという新知見を増やしつつあり、この2つの分子をそのアミノ酸配列からTPHD (トリコヒアリン・プレクチン類似ドメイン) 分子群と名付けた。TPHD分子群の特徴は、分化状態では主に細胞間接着部位に、そして増殖中は主に中心体に局在を変えることである。このことは、TPHD分子群が分化と増殖の両方の分子メカニズムに関わるまったく新しいbi-player分子であることを示唆している。そこで、これらの分子と細胞分化および増殖制御との関わりをそれぞれ分子レベルで目指す。さらにその解析結果を統合していくことで、細胞分化と増殖の二律背反を分子レベルで理解し、がん化に関わる新たなメカニズムの解明を目指す。本年は、特にトリコブレインとアルバトロスの中心体機能の解析に焦点を置いた。

トリコブレインの細胞内局在については、分化した上皮細胞ではケラチンフィラメント上と細胞間接着部位にあるが、増殖中の細胞では中心体、詳細には中心小体にもあることを見出した。また種々のマーカー染色と蛍光顕微鏡観察により、中心小体内での位置関係も示し得た。母中心小体は、機能的にはその付属器への微小管の係留と増殖休止期における一次線毛形成が知られている。一次線毛は、細胞のアンテナとして腫瘍を含む多くの疾患と関わる構造物である。まず、微小管係留との関連について検討した。RNA干渉法によりトリコブレインをHeLa細胞でノックダウンし、免疫染色と微小管再生実験を行ったところ、母中心小体付属器へのナイニンの局在化障害とそれによる微小管係留の障害が確認された。トリコブレインとナイニンの結合は、イーストハイブリッド法、免疫沈降法およびin vitro結合実験により示された。また、このトリコブレインの局在化はOdf2に依存することと、これらが複合体を形成することを同様に確認した。

トリコブレインと一次線毛形成との関連については以下のような結果を得た。血清飢餓による増殖停止で一次線毛が形成されるとRPE1細胞ではトリコブレインの母中心小体での局在が減弱した。同状態でトリコブレインを強制発現すると、一次線毛形成が抑えられた。そこで増殖状態でトリコブレインノックダウンを行ったところ、一次線毛形成が見られた。同時に細胞周期の停止を認めた。この時オーロラAキナーゼの活性化の指標であるT288のリン酸化が減弱した。この一次線毛形成はオーロラAノックダウンでも見られた。さらに、トリコブレインとオーロラAキナーゼの直接結合をin vitroで確認し、in vitro キナーゼアッセイではトリコブレインがオーロラAキナーゼを直接活性化することが明らかになった。また、この一次線毛形成がOdf2依存的事であることをトリコブレインとOdf2のダブルノックダウンにより確認した。

アルバトロスについては細胞間接着部位で細胞間接着装置複合体および極性の制御をする一方で、中心体では紡錘体形成にも必要となる微小管の重合核を制御する可能性が示唆された。これは、主にはノックダウン実験と蛋白質結合実験の結果による。さらに、アルバトロスが細胞間接着装置を制御する新たな分子メカニズムとして、イーストハイブリッド法によりARFIP2を結合蛋白質の候補として得た。既知の知見も合わせると、この結合はアルバトロス-Par3による細胞間接着制御機構の詳細をさら

【今後の方向】

オーロラAキナーゼの多様な機能は活性化因子の多様性に依存しており、細胞分裂に伴う紡錘体形成のための中心体成熟に加え、非対称分裂や一次線毛形成抑制等、様々な分化・増殖制御との関連が示されつつある。よって、オーロラAキナーゼに対するトリコプレインの機能相違点を明らかにしていくことで、特異性の高いがん関連増殖機構を新たに示せる可能性がある。アルマトロスについては増殖状態で中心体に局在し、微小管構築を介した重要な細胞増殖機能と関与する可能性があり、ノックダウンと蛋白質結合実験で検討していく予定である。また、分化上皮細胞の細胞間接着部位ではアルマトロスによる細胞極性制御の一端を既に明らかにしており、今回の結果も考慮して同様の解析を進める。トリコプレインについても同様に検討中である。そして、最終的にはTPHD分子群およびケラチンによる背反的な上皮細胞分化増殖制御機構の解明をめざす。

- 1) 財団法人がん研究振興財団リサーチレジデント、2) リサーチレジデント、3) 理研 発生・再生科学総合研究センター、4) 国立がんセンター

<研究課題> 2

(主題) プロテインキナーゼを介した発がんの基礎研究
(副題) Chk1の新規リン酸化反応の生理的な役割

<研究者氏名>

笠原広介、後藤英仁¹⁾、榎本将人^{1,2)}、李萍³⁾、友野靖子⁴⁾、清野透⁵⁾、稲垣昌樹¹⁾

【目的・概要・進行状況】

細胞には、紫外線 (UV) や放射線などのDNAの損傷が生じた際やDNAの複製阻止が引き起こされた際、そのDNA異常を監視し修復するチェックポイント機構が存在する。このチェックポイント機構の中心分子として、ATR (ATM- and Rad3-relate) からチェックポイントキナーゼ1 (Chk1)に至るプロテインキナーゼカスケードがその中心的な役割を担っている。種々のDNA損傷によって活性化されたATRは、Chk1のSer317およびSer345をリン酸化し、その後、Chk1は活性化する。活性化したChk1は、Cdc25AのSer76をリン酸化することで、Cdc25Aのユビキチン化および分解反応を制御している。このCdc25Aの分解により、サイクリン依存性キナーゼは活性化できず、細胞周期の進行は停止すると考えられている。しかし、DNA障害チェックポイントの際に、Chk1は、Ser317/345以外の部位もリン酸化されているが、その意義については未解明な点が多い。

我々は、DNA障害チェックポイントの際に引き起こされるChk1のSer296のリン酸化反応について検討を加えた。阻害剤等を用いた解析から、このSer296のリン酸化反応は、ATRによるChk1のSer317/345のリン酸化反応依存性に引き起こされるものの、ATRではなくChk1そのものがそのリン酸化反応を遂行していることが明らかになった。次に、このSer296の自己リン酸化反応依存性に結合する蛋白質を検索したところ、14-3-3 γ が特異的に結合することが明らかになった。これら結合の生理的意義を

解析するため、Ser296をアラニンに置換したChk1変異体を内在性のChk1と置換したり、14-3-3 γ をノックダウンしたりした際のチェックポイント機能について検討を加えた。その結果、このような処理をした細胞では、紫外線照射後においても、Cdc25Aのユビキチン化および分解が抑制され、かつ、細胞周期の停止機構に障害が認められた。そこで、14-3-3 γ とChk1のリン酸化Ser296との結合が、Cdc25Aのリン酸化反応に及ぼす影響について検討を加えた。その結果、(Cdc25Aと14-3-3の結合に必要な) Cdc25AのThr507はChk1のリン酸化Ser296および14-3-3 γ 非依存性にリン酸化されるのに対して、(Cdc25Aのユビキチン化反応を制御している)Ser76のリン酸化反応はこれら2つの因子に依存性に引き起こされることが判明した。さらに、Chk1とCdc25Aは、14-3-3 γ を介して複合体を形成していることが判明した。

以上の結果から、DNA障害チェックポイントの際に引き起こされるChk1の自己リン酸化反応は、1) Chk1/14-3-3 γ /Cdc25Aによる3者複合体の形成、2) その複合体形成によって誘導される (Chk1による) Cdc25AのSer76のリン酸化反応、および、2) このリン酸化反応によって惹起されるCdc25Aのユビキチン化 (分解) 反応を調節していることが明らかになった。

【今後の方向】

細胞のDNAが障害を受けても、DNA障害チェックポイントがうまく働かずに、DNA障害が蓄積する場合が存在する (チェックポイント寛容)。このような細胞の多くは、分裂しなくなった (細胞老化)、細胞死 (アポトーシス) を引き起こしたりして、個体レベルで大きな影響を与えないようになっていく。しかしながら、これら細胞の一部は無限の増殖能を獲得し、がん化していくと考えられている。今回、見出したChk1の自己リン酸化反応を介したチェックポイント機構は、がんにおけるチェックポイント寛容の際に異常を生じていると考えられるが、その詳細については今後の研究課題といえる。

- 1) 名大・医・細胞腫瘍 (兼任)、2) 研修生、3) リサーチレジデント、4) 重井医学研・分子細胞生物、5) 国立がんセンター・研・ウイルス

<研究課題> 4

(主題) ノックアウトマウス的手法を用いた細胞増殖・細胞分化の二律背反に関する研究

<研究者氏名>

松山誠¹⁾、小堀恭子、稲垣昌樹

【目的・概要・進捗状況】

中間径フィラメントは、細胞骨格を形成する主要成分の一つである。主に中間径フィラメントとして機能しているタンパク質として、間葉系細胞・がん細胞においてビメンチンがある。中間径フィラメント構成タンパク質の基本構造は、ヘッド・ロッド・テイルの3ドメインで構成される。プロテインキナーゼによる中間径フィラメントの編成制御は、ヘッドドメインのリ

ン酸化を通じて行われる。これまで本研究室において、*in vitro*、*in vivo*における解析から、細胞周期特異的にリン酸化される部位が同定されている。それらのリン酸化部位がリン酸化されなくなるような変異を導入したピメンチンを培養細胞に導入すると、細胞分裂終了後の娘細胞間に、断裂されていない中間径フィラメントによる架橋が観察されたという報告がある。このことは、細胞周期特異的なリン酸化反応が中間径フィラメントの娘細胞への均等分配に必要であることを示唆している。しかし、マウスなどを用いた個体レベルにおいて、それらのリン酸化シグナルの生理的な機能は、ほとんど解明されていない。そこで我々は、ピメンチンの細胞周期特異的なリン酸化部位に変異を導入したマウスの作製・解析を行っている。

はじめに、細胞周期に依存したリン酸化部位をアラニンに置換したピメンチンのcDNAと、マウスゲノムの情報を用いて、ターゲティングベクターの作製を行った。そのベクターとエレクトロポレーション法を用いて、ピメンチンの遺伝子変異ES細胞の樹立した。マイクロインジェクション法を用いて、マウス胚へ遺伝子変異ES細胞の顕微注入を行い、数匹のキメラマウスが誕生した。作製したキメラマウスを野生型のマウスと交配して、ヘテロ変異マウスを作製する事に成功した。

[今後の方向]

現在、ヘテロ変異マウス同士を交配して、ホモ変異マウスを作製し、発生過程や成獣における表現型の解析を行っている。これまでの解析の結果、ピメンチン点変異マウスは、生存率の低下や生殖機能に異常が認められるようである。今後、これらの点において、詳細な検討を行う予定である。また、ピメンチンは間葉系の細胞やがん化した細胞で発現するため、ピメンチンの変異マウスでは、様々な組織において、細胞のがん化や細胞周期の異常がないか検討を行う。

将来、ピメンチン点変異マウスを解析することにより、組織あるいは発生段階特異的な中間径フィラメントの機能が明らかになると予想される。また、中間径フィラメント構成タンパクの点突然変異に起因する様々な疾患との関連づけができると期待でき、発がんの分子機構のメカニズムの一端が明らかになると確信する。

1)財団法人がん研究振興財団リサーチレジデント

中央実験室

<研究課題>

(主題) 食道がん、頭頸部腫瘍の分子遺伝学的研究

(副題) ミトコンドリアDNAの多型と食道がん発がんリスク

<研究者氏名>

組本博司、松尾恵太郎¹⁾、田中英夫¹⁾、田島和雄²⁾

<目的・概要・進捗状況>

ミトコンドリアゲノムDNA (mtDNA)は核ゲノムDNA と比べ、一般に変異が生じやすいといわれている。また最近では老化や

がん化に伴ってmtDNAに変異を生じることが報告されている。我々は、食道がんについて高頻度にmtDNAの変異が蓄積していることを以前明らかにした。もともと食道は、喫煙・飲酒の影響を直接受ける器官であり、これらの生活習慣によって発がんリスクも上昇することが示されている。そこで、本研究の目的は、食道がんの発がんリスクに関わるミトコンドリアゲノムDNAの多型を探索することである。また、mtDNAの多型の数が食道がん発がんリスクに関わっている可能性も考えられる。そこで、mtDNAの多型の数と食道がん発がんリスクの関連も解析する。

本研究には、HERPACC (the Hospital based Epidemiologic Research Program at the Aichi Cancer Center) のデータベースより食道がん患者185例、食道がん患者に性、および年齢を一致させた非がん患者対照185例を用いた。書面による同意を得た後、自記式質問票により喫煙、飲酒習慣を含む生活習慣に関する情報を得た。さらに、7mlの血液の提供を受け、DNAを抽出した。

mtDNAのD-loop領域は、複製、転写をコントロールする領域であり、多型、変異が多数見つかっている領域でもある。市販のリシーケンシングプライマーセットを用い、増幅を確認したところ、9セットのうち4セットでのみ増幅が見られた。増幅産物の塩基配列を決定したところ、増幅可能であった4プライマーセットによりD-loop領域全域をカバーしていることが明らかとなった。現在、これらのプライマーによる、食道がん患者および、非がん患者由来のDNAの塩基配列を決定している。

<今後の方向>

今後これらの解析した塩基配列と、mtDNAの基準配列であるrCRSと比較することによって、D-loop領域の多型を網羅的に検出する。これらの結果を用いて食道がんにリスクを与える多型の探索や、多型の数と食道がんリスクとの関連、さらに飲酒・喫煙のリスクを修飾する多型の探索を行う。また、核だけでなくミトコンドリアでも働いていることが明らかとなっている修復遺伝子、hOGG-1の多型(Ser326Cys)をそれぞれのサンプルについて解析し、mtDNAの変異と喫煙・飲酒に関連があるかどうか解析する。さらに、これらの解析によって、mtDNAの変異と飲酒・喫煙習慣との関連を明らかにし、食道がんにおけるmtDNAの変異がどのような過程で生じるかを考察する。

1)疫学・予防部、2)研究所長

3. 病院及び研究所における共同研究（共同研究費）

<研究課題> 1

非小細胞肺癌におけるEGFR遺伝子変異と効果・予後についての検討

Clinical outcomes of advanced non-small cell lung cancer patients screened for epidermal growth factor receptor gene mutations

<研究者氏名> 呼吸器内科部 樋田 豊明

共同研究者 吉田 公秀、堀尾 芳嗣、清水 淳市
朴 将哲、小川 紫都、谷田部 恭

【背景と目的】

ゲフィチニブ投与の指標としてEGFR遺伝子変異をスクリーニングした症例において、ゲフィチニブおよび細胞障害性抗癌剤投与についての臨床的意義をレトロスペクティブに検討した。

【対象と方法】

2004年11月から2006年12月までに当院呼吸器内科において変異検索が行われた切除または根治照射不能IIIB/IV期非小細胞肺癌101例について、レトロスペクティブに検討した。

【結果と考察】

変異陽性群 (n = 49)では腺癌/非腺癌:48/1、男/女:16/33、年齢中央値61歳(42~84)、喫煙歴有/無:17/32、PS0または1/2/3/4:43/2/3/1、臨床病期IIIB/IV:7/42、前治療なし/胸膜癒着術/骨放射線/脳放射線:36/4/5/4であった。変異陰性群 (n = 52)では腺癌/非腺癌:48/4、男/女:38/14、年齢中央値63歳(30~79)、喫煙歴有/無:41/11、PS0または1/2/3/4:40/7/3/2、臨床病期IIIB/IV:17/35、前治療なし/胸膜癒着術/骨放射線/脳放射線:35/7/8/2であった。両群の背景因子において性、喫煙、臨床病期において有意差がみられた(それぞれ $P < 0.0001$ 、 $P < 0.0001$ 、 $P = 0.03$)。1st line 細胞傷害性抗癌剤は、変異陽性群、陰性群それぞれプラチナ+新規抗癌剤:22例(88%)、41例(82%)、新規抗癌剤単剤:3例(12%)、9例(18%)、2nd line細胞傷害性抗癌剤は、変異陽性群、陰性群それぞれプラチナ+新規抗癌剤:17例(85%)、18例(65%)、新規抗癌剤単剤:3例(15%)、11例(38%)に投与された。EGFR変異陽性群での1st line/2nd lineにおけるゲフィチニブ投与の奏効率、病勢制御率はそれぞれ87.5%/80%、87.5%/86.7%を示し、ほぼ同程度であった。1st line 細胞傷害性抗癌剤感受性は、EGFR変異陽性群と陰性群において奏効率では有意差を認めず(32% vs 28%)、病勢制御率では有意に陽性群が高かった(88% vs 60%、 $P = 0.0132$)。2nd line 細胞傷害性抗癌剤感受性は、EGFR変異陽性群と陰性群において奏効率(20% vs 6.9%)、病勢制御率(60% vs 48.3%)ともに有意差はみられなかった。EGFR変異陽性群でのゲフィチニブと細胞傷害性抗癌剤投与のPFSは、1st line、2nd lineいずれもゲフィチニブ投与において有意な延長がみられた(1st line 中央値6.9ヶ月 vs 5.1ヶ月、Log-rank $P = 0.0041$; 2nd line 中央値6.5ヶ月 vs 4.0ヶ月、Log-rank $P = 0.0048$)。細胞傷害性抗癌剤化学

療法におけるEGFR変異陽性群と陰性群のPFSは1st line(中央値5.1ヶ月 vs 4.4ヶ月)、2nd line(中央値4.0ヶ月 vs 2.6ヶ月)ともに有意差はみられなかった。EGFR変異陽性群では陰性群より生存期間の有意な延長がみられた(中央値24.3ヶ月 vs 12.6ヶ月、Log-rank $P = 0.0026$)。この理由としてゲフィチニブによる効果が示唆された。多変量解析ではPSとEGFR変異が有意な予後因子であった。

<研究課題> 2

消化器癌に対する超音波内視鏡下生検法の有用性の検討

The usefulness of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration for gastrointestinal diseases.

<研究者氏名> 消化器外科部 山雄 健次

共同研究者 水野 伸匡、原 和生、澤木 明
脇岡 範、丹羽 康正、田近 正洋、
河合 宏紀、谷田部 恭、細田 和貴
越川 卓

【はじめに】

超音波内視鏡下穿刺吸引法(EUS-FNA)は、1990年初頭に臨床応用が開始された生検方法であり、開腹下生検法やUS/CTガイド下穿刺吸引法と比較して診断能のや侵襲性の両面からも高く評価されており、近年では本邦においてもEUS-FNAが消化器領域のみならず、縦隔・肺疾患、血液疾患などに広くも実施されるようになってきた。また、本年4月には検査料51,400円で保険収載され正式の診断技術として認められた。当科では1997年に本手技を開始して以来2000件以上と国内で最多の実施数を誇り、またEUSガイド下治療においても多数行っている。昨年度実績について報告する。

【1.当科における検査実績の年次別推移】

EUS-FNAの実施件数は1997年度の71件に始まり2001年までは二桁で推移したが、2002年106件と三桁になり、更に2007年240例と二百台に到達し、2009年には299件に達した。その主な対象病変は脾臓を含む脾病変が第一位を占め、その他には消化管粘膜下腫瘍、消化器癌のリンパ節転移、などがその主なものであった。しかし、呼吸器内科からの肺癌の縦隔リンパ節転移診断や血液・細胞療法部からの悪性リンパ腫等の診断依頼も最近増加傾向にある。本法は消化管壁内、および消化管から7.8cm以内の壁外病変であればほぼ安全、かつ確実に組織採取が可能である。

【2.昨年度の主な研究】

1. 自己免疫性脾炎においてコルチコステロイド投与は脾管上皮のCFTR局在の是正と腺房細胞の再生を促すか否かを検討。(Gastroenterology. 2010; 138:1988-1996)

自己免疫性膵炎21症例に対してステロイド治療前後で外分泌機能および組織学的変化を見たもので、治療前後の組織採取にはEUSガイド下にtrucut needleを利用し7例に十分な組織採取が可能であった。膵外分泌機能の改善が組織学的に炎症の消褪、膵腺房細胞の再生、膵管上皮細胞におけるCFTRの局在の正常化によることを確認し、報告した。

- 膵癌に対するEUS-FNAの合併症として偽性脾動脈瘤が発生し胃に穿破した1例。(Endoscopy. 2010;42 Suppl 2:E27-8)

化学療法のために組織学的根拠を得ようとしたEUS-FNAを実施した手術不能膵癌の1例に急性膵炎が惹起され、偽性動脈瘤を発生した。動脈瘤は胃に穿破し大量消化管出血を起こしたがIVRによる脾動脈コイルリングにて止血し得たことを報告した。

- 胃膵吻合を実施した患者さんにEUSガイドにランデブー法を用い吻合部狭窄を内視鏡的に治療した1例。(Dig Endosc. 2009;21:201-4)

胃膵吻合術後の患者が吻合部狭窄を来し膵炎を頻回に合併していた。胃内から吻合部にガイドワイヤーを挿入しステント挿入を試みるも不成功に終わった。CTでは主膵管の拡張所見が見られていた。超音波内視鏡ガイドに拡張した主膵管に針を穿刺し膵管像を得た後に、ガイドワイヤーを針に通して主膵管内に挿入し、狭窄していた吻合部から胃内に誘導し得た。超音波内視鏡を通常の内視鏡に変え、その鉗子孔からスネアにてガイドワイヤーを保持し、ガイドワイヤーに沿わせてステントを逆行性に吻合部から主膵管内に挿入し得たものである。

- 手術不能膵癌患者のEUS-FNA組織標本におけるジェムザール感受性関連遺伝子のmRNA発現量の検討。(J Exp Clin Cancer Res. 2009;28:83)

手術不能膵癌35例を対象にジェムザールを使用し比較的長期生存の得られた患者さん(効果群)とそうでない患者さん(非効果群)に分け、EUS-FNAにて採取された膵癌組織におけるジェムザール感受性、抵抗性遺伝子のmRNA発現量をFocused DNA arrayを用いて測定し、比較検討した。効果群では非効果群に比しdCKが有意に高発現していることが判明した。今後、EUS-FNA組織検体による抗癌剤感受性試験への応用が可能であることが証明された。

- EUSガイド下トュルーカット生検を用いた自己免疫性膵炎の組織学的診断_EUS-FNAとの比較。(J Gastroenterol. 2009;44:742-50)

自己免疫性膵炎確診8例を含む14例に対して通常のEUS-FNAとtrucut針を使用した生検組織を比較し、自己免疫性膵炎の診断能におけるtrucut針の有用性を検討した。膵癌はEUS-FNA施行群とtrucut biopsy群の全例で正診を得た。自己免疫性膵炎の診断は感度、特異度、正診率はEUS-FNAで33%、100%、88%、trucut biopsyでは100%、71%、76%であり、自己免疫性膵炎の診断を確実にを行うためにはtrucut biopsyが必要と結論した。

- 原因不明の腹腔内リンパ節腫大に対してEUS-FNAの有用性の検討。(J Gastroenterol. 2009;44:562-7)

原因不明の腹腔内リンパ節腫大57例に対して22ゲージ針にてEUS-FNAを行い有用性を検討した。検体採取率は93%、

感度94%、特異度100%、正診率96%と高い診断能を得た。また、悪性リンパ腫のサブタイプの診断能は83%であった。重篤な合併症は道めなかった。

<研究課題> 3

機能の温存を目指す頭頸部癌の外科治療

Organ preservation surgery for head and neck cancer

<研究者氏名> 頭頸部外科 長谷川泰久

共同研究者 平川 仁、花井 信弘、小澤泰次郎

副題：頭頸部癌に対する計画的頸部郭清術の検討

計画的頸部郭清術(planned neck dissection、以下、PND)は放射線療法を主体とした臓器温存治療の際、頸部転移リンパ節に対する外科治療をあらかじめ組み合わせることによって制御することを目的とした方法である。

CRTの進歩：局所制御率の向上

臓器温存治療としてのCRTの進歩によって、PNDのあり方が見直されるようになってきた。

臓器温存治療は、かつては放射線単独療法であったが、導入化学療法+放射線療法で局所制御率の向上をもたらし、同時併用化学放射線療法(concurrent chemoradiotherapy、以下、CCRT)でより高い局所制御率を達成した。また放射線治療技術・精度の向上、支持療法の進歩もあり、治療の強度が以前に比べ増している。

頸部郭清後の病理学的転移の頻度は減少し、それまでPNDを行っていたような全症例に、頸部郭清術をおこなうことが疑問視されるようになってきた。現在多くの報告では、PNDの果たす役割の減少、その概念の旧式化を指摘している。

しかし頸部郭清の果たす役割が重要であるという事実を見失わないようにしなければならない。治療強度が劣る場合、頸部制御に対するCRTの効果は不足する。海外での報告を参考に頸部郭清を省略したり郭清範囲を縮小したりする場合には、この点に注意して適応を検討する必要がある。

画像診断技術の進歩：PNDの省略

PET-CTに代表される診断ツールの進歩により、CRT後の頸部病変の診断精度が向上したことによってもPNDの要否が議論的となった。

PETは高い陰性適中度が望め、頸部郭清の要否についての有用な情報をもたらすが、不要な郭清を極力省略したい立場からは、偽陽性が問題となる。CRT終了から少なくとも10週以降、出来れば12週後にPET-CTを行うことによって、偽陽性が減少することが示されており、適切な時期に検査を施行する必要がある。従来のPND施行の至適時期が6-8週とされていたことと比較し、PET-CTにて郭清の要否を判断する方法をとった場合、NDの施行は従来理想的とされていた時期よりも遅くなり、組織の癒着化が進行する。

また画像診断によるCRは絶対的なものでなく、PNDを省略した場合、慎重な経過観察が必要である。

長期合併症

CCRTはその高い治療効果と引き換えに、強い有害事象を引き起こし得る。

2008年、MachtayらによるRTOGの3つの臨床試験における晩期障害の解析からCCRT後の有害事象、具体的には遷延する嚥下障害、経管栄養への依存が問題となることが明らかとなった。多変量解析の結果で、これらの晩期障害と化学放射線療法後の頸部郭清術の相関が認められたことも重要である。

これは可能な限り頸部郭清の施行を避ける、或いは範囲を縮小するという考え方を支持する結果である。

この長期合併症（晩期障害）の点で本邦ではどうであろうか？治療強度の差異も影響すると思われるが、十分な報告があるとは言い難い。

4. プロジェクト研究（共同研究費）

<研究課題> 1

TNFAIP3によるB細胞性腫瘍抑制機構の解明

Identification of tumor suppressive effect of TNFAIP3 in lymphomagenesis.

<研究者氏名> 遺伝子医療研究部 本間 圭一郎

共同研究者 瀬戸 加大、都築 忍、森島 泰雄
山本 一仁

研究実績の概要

我々は、MALTリンパ腫のゲノム解析の結果から、TNFAIP3がMALT1遺伝子転座陰性例で高頻度に欠失が見いだされることを明らかにした。しかし、TNFAIP3(A20)の腫瘍形成における役割については、ほとんど検討されていなかった。このため、リンパ腫におけるA20と腫瘍形成の関係を明らかにすることを本プロジェクトの目標とした。

I. リンパ腫各組織型におけるA20欠失の頻度について

悪性リンパ腫各組織型のA20遺伝子座を含む領域のゲノム欠失の頻度をアレイCGHによって検討した。その結果びまん性大細胞型B細胞リンパ腫 (DLBCL)、マントル細胞リンパ (MCL)、濾胞性リンパ腫といったB細胞リンパ腫に多く、T/NKリンパ腫ではA20遺伝子座の欠失は低頻度であった。興味深いことにDLBCLの中では、ABC DLBCLにA20の欠失が多く、FLではgradeIIIやt(14;18)陰性例でA20の欠失を高頻度に認めた。これらABC DLBCLやt(14;18)陰性FLは、NF- κ Bの恒常的活性化が認められ、腫瘍化機構との関連が想定されている型であり、NF- κ B活性を制御するA20の欠失はこうした腫瘍化機構に関与している可能性が示唆された。

II. A20遺伝子変異およびプロモーター領域DNAメチル化

A20欠失を高頻度に認めたABC DLBCLおよびMCLについて、遺伝子変異およびプロモーター領域のメチル化について検討した。その結果、ABC DLBCLの53%、MCLの16%に遺伝子変異が認められた。プロモーターメチル化はABC DLBCLの41%、MCLの37%に認められた。以上の結果から、遺伝子欠失に加え、遺伝子変異やプロモーターメチル化がA20遺伝子の不活化に関与していることが明らかにされた。

III. A20の腫瘍抑制機構

A20欠失を有するリンパ腫細胞株にA20を遺伝子導入して、その腫瘍化抑制機構を検討した。A20欠失を有するOCI-LY8およびJeko-1、さらにA20欠失を有さないRaji3つのリンパ腫細胞株で検討した。A20欠失を有する細胞株では、A20遺伝子導入によりNF- κ B活性の抑制および細胞死が誘導された。一方RajiではNF- κ B活性には変化がなく、細胞死の誘導も起こらなかった。これらのことから、A20はNF- κ Bの制御を介して腫瘍形成を抑制するがん抑制遺伝子として機能していることが示唆された。

次に、EBウイルス不死化B細胞(LCL)に対しA20をノックダウンすることで、増殖への影響をコロニーアッセイで評価した。A20ノックダウンによってLCLのコロニー形成能の亢進が認められ、この効果はNF- κ B阻害剤の使用によって消失した。

以上の結果から本プロジェクトにおいて、A20がABC DLBCL、MCLをはじめとする一部のB細胞リンパ腫型において、重要ながん抑制遺伝子として機能していることが明らかにされた。また、A20の腫瘍抑制機能の一部はNF- κ B活性制御を介していることが推測された。

今後は、がん抑制遺伝子として機能するうえでもっとも重要なTNFAIP3の基質を明らかにすることで、新たな分子標的療法の標的となる分子の検索など、臨床応用可能な知見の集積を行う予定である。

<研究課題> 2

加齢性EBV関連B細胞性リンパ増殖異常症の臨床病理学的及び分子生物学的解析

Clinicopathological and molecular analysis for Epstein-Barr virus positive diffuse large B-cell lymphoma of the elderly

<研究者氏名> 血液細胞療法部 山本 一仁

共同研究者 森島 泰雄、加藤 春美

我々は、免疫不全関連リンパ腫と類似したEpstein-Barr virus(EBV)陽性のlymphoproliferative disorder(LPD)が、健康人にも発生し、患者の殆どが高齢者であることに注目しage-related (senile) EBV-associated B-cell LPD (加齢性EBV関連B細胞性リンパ増殖異常症)という疾患概念を提唱し(Oyama T et al. Am J Surg Pathol 27: 16, 2003)、2008年WHO分類改訂版(第4版)では、EBV-positive diffuse large B-cell lymphoma (DLBCL) of the elderly(synonyms: age-related EBV+LPD)として、DLBCLの新たな亜分類として取り入れられた。このEBV陽性LPD/DLBCLがEBV陰性DLBCLとは異なる疾患群である可能性が示唆されており、これをゲノム、遺伝子発現(mRNA)のレベルで分子生物学的に解析するためEBV陽性LPD/DLBCL 3例およびEBV陰性DLBCL 8例の検体を用いてexpression array (Agilent technology)を用いて予備的な検討おこなった。

Unsupervised analysisではEBV陽性LPD/DLBCL、EBV陰性DLBCLでは2つの疾患は、分離されなかった。標準化後、t検定の上位300、600、1000プローブを用いたsupervised analysisではEBV陽性LPD/DLBCL、EBV陰性DLBCLは2つのclusteringに分かれた。EBV陽性LPD/DLBCL、EBV陰性DLBCLの上位300プローブに付記されているGene ontologyを抽出すると、EBV陽性LPD/DLBCLでは免疫反応・炎症反応に関する遺伝子群が有意にみとめられました。このうち、PD-L1、SLAMF1は免疫不全およびリンパ腫に関わる報告がなされている。また、GESAの結

果では、機能グループとして、JAK1に関わる遺伝子群が抽出された。

<研究課題> 3

悪性中皮腫移植マウスモデルでのTGF- β 阻害剤による腫瘍増殖抑制効果

Effect of TGF- β inhibitor on Malignant Mesothelioma tumor growth in mouse model

<研究者氏名> 分子腫瘍学部 藤井万紀子

共同研究者 樋田 豊明、谷田部 恭、中西 速夫
近藤 英作、関戸 好孝、松平 康枝
村上 秀樹、近藤 豊、長田 啓隆

[背景]

悪性胸膜中皮腫はアスベスト暴露がその主な原因と考えられている疾患であり、近年本邦においてその罹患患者数の増加が認められている。悪性胸膜中皮腫の細胞動態や性質を把握することは、将来的に有効となる治療に結びつける研究を行うためにも重要である。我々は悪性中皮腫に対するTGF- β の作用について分析を試み、阻害剤の有効性について検討を行った。

[結果]

TGF- β は正常中皮由来細胞株MeT-5Aの足場非依存的コロニー形成能を促進し、線維芽細胞様反応を引き起こすことがわかった。また悪性中皮腫患者由来の組織においてリン酸化Smad2の核内染色が認められることから、悪性中皮腫細胞の増殖にはTGF- β シグナルが関与していることが示唆された。悪性中皮腫細胞株を胸腔内に移植したマウスに、TGF- β I型受容体阻害剤であるSD-208を経口投与したところ、有意にマウスの生存期間を延ばすことができた。従ってTGF- β I型受容体阻害剤が悪性中皮腫治療に有効ではないかと考えられた。

そこでTGF- β による悪性中皮腫細胞の増殖促進にはどのようなメカニズムが関与しているかを調べた。癌抑制遺伝子であるNF2は、Mst、Latsなどを含むHippo pathwayを活性化し、oncogeneであるYAPをリン酸化し核外に留めておく。悪性中皮腫では、このpathwayが不活化しているものが多く、脱リン酸化されたYAPが常時核内に留まっている。そこにTGF- β の刺激が入ると、Smad3が核内に入り、YAPと複合体を形成してプロモーターに結合し、細胞外マトリックス形成タンパク質であるCTGF (connective tissue growth factor) 遺伝子の転写を促進することがわかった。

更に悪性中皮腫の増殖に対するCTGFの役割を調べた。レンチウイルスベクターを用いてNCI-H290の内在性のCTGFをノックダウンしたところ、3日後の細胞数は低下し、足場非依存的細胞増殖で、コロニーの大きさ、数ともに低下を認めた。NCI-H290細胞にCTGF遺伝子を組み込んだレンチウイルスに感染させた2週間培養し、focus assayを行ったところ、コントロールに比べてCTGFを過剰発現させたものは、ギムザ染色で強く染色された。更に、マウスに移植した悪性中皮腫細胞の組織を調べたところ、

CTGFを強く発現しているものでは細胞周囲を膠原線維が大量に取り囲んでいることがわかった。

[結論]

悪性中皮腫細胞においてTGF- β シグナル細胞増殖促進作用を持つ。その一つの経路としてTGF- β と悪性中皮腫で破綻をきたすHippo pathwayによるCTGFの発現調節が示唆された。以上のことから、TGF- β 阻害剤が悪性中皮腫の治療に役立つ可能性があると考えられる。

第 2 部 研究発表関係

1. 学会における研究発表テーマ調べ (総長)

総長

- 001 *Nimura Y*: Hilar cholangiocarcinoma: Where is the limit of resection? Alpine Liver&Pancreatic Surgery Meeting, 2010, (Madonna di Campiglio, Italy), [Lecture]
- 002 *Nimura Y*: Hepatocellular cancer with bile duct invasion. Alpine Liver&Pancreatic Surgery Meeting, 2010, (Madonna di Campiglio, Italy), [Lecture]
- 003 *Nimura Y*: Portal tumor thrombectomy in left hepatectomy for hilar cholangiocarcinoma. Alpine Liver&Pancreatic Surgery Meeting, 2010, (Madonna di Campiglio, Italy), [DVD Presentation]
- 004 *Nimura Y*: Update of pancreatic cancer treatment in Japan. 第109回日本外科学会定期学術集, 2009, (福岡), [国際シンポジウム]
- 005 二村雄次: 胆道外科—ゼロからの出発. 平成21年度兵庫医科大学第一外科同窓会, 2009, (大阪), [特別講演]
- 006 二村雄次: がん外科医になった柔道家の話. 名古屋ウエストライオンズクラブ例会, 2009, (名古屋), [講演]
- 007 二村雄次: 梶谷流名古屋道場の軌跡. 平成21年度癌研外科同門会, 2009, (東京), [講演]
- 008 二村雄次: 胆道外科の温故知新. 第50回東海肝臓外科懇談会記念大会, 2009, (名古屋), [講演]
- 009 二村雄次: 医療崩壊とがん医療. 紋別市保健・医療・福祉連携市民フォーラム, 2010, (紋別市), [講演]

2. 学会等における研究発表テーマ調べ (病院)

消化器内科部

- 001 *Fuse N, Fukuda H, Yamada Y, Sawaki A, Koizumi W, Suzuki Y, Yamaguchi K, Takiuchi H, Ohtsu A, Boku N*: Updated results of randomized phase III study of 5-fluorouracil (5-FU) alone versus combination of irinotecan and cisplatin (CP) versus S-1 alone in advanced gastric cancer (JCOG 9912). 2009 ASCO Annual Meeting, 2009.(Orlando),[ポスター]
- 002 *Bang Y, Chung H, Xu J, Lordick F, Sawaki A, Lipatov O, Al-Sakaff N, See C, Rueschoff J, Van Cutsem E*: Pathological features of advanced gastric cancer (GC): Relationship to human epidermal growth factor receptor 2 (HER2) positivity in the global screening programme of the ToGA trial. 2009 ASCO Annual Meeting, 2009.(Orlando),[ポスター]
- 003 *Van Cutsem E, Kang Y, Chung H, Shen L, Sawaki A, Lordick F, Hill J, Lehle M, Feyereislova A, Bang Y*: Efficacy results from the ToGA trial: A phase III study of trastuzumab added to standard chemotherapy (CT) in first-line human epidermal growth factor receptor 2 (HER2)-positive advanced gastric cancer (GC)..2009 ASCO Annual Meeting,2009.(Orlando),[口演]
- 004 *Imamura H, Irisawa A, Hernandez L, Hikichi T, Shibukawa G, Takagi T, Wakatsuki T, Takahashi Y, Sato A, Sato M, Ikeda T, Ikeda R, Obara K, Ohira H*: Long Duration of Patency with Intra-biliary Plastic Stent Placement for Malignant Biliary Stricture : A Pilot Study, 69(5). ASGE,2009.(Chicago),[ポスター]
- 005 *Sawaki A, Yamaguchi K, Nabeya Y, Sakai Y, Osanai H, Denda T, Furue H, Kurihara M*: 5-FU/l-LV (RPMI) versus S-1 as first-line therapy in patients with advanced gastric cancer: a randomized phase III non-inferiority trial. (ISO-5FU10 Study Group trial) .The 34th ESMO,2009.(Berlin),[ポスター]
- 006 *Hara K*: EUS-CDS.APDW(Asian Pacific Digestive Week) 2009,2009.(Taipei),[口演]
- 007 *Yamao K*: EUS-FNA.APDW(Asian Pacific Digestive Week)2009,2009.(Taipei),[シンポジウム]
- 008 *Hijioka S*: EUS-guided FNA for the diagnosis of gallbladder mass lesions. APDW(Asian Pacific Digestive Week) 2009,2009.(Taipei),[ポスター]
- 009 *Yamao K*: EUS guided extrahepatic biliary drainage.SGI 2009,2009.(Seoul),[口演]
- 010 *Sawaki A*: Significance of Chemoradiation for Locally Advanced Pancreatic Cancer.2009 年度EPS国際医薬・製薬理科学シンポジウム,2009.(Guangzhou/広州),[特別講演]
- 011 *Sawaki A*: Imatinib plus best supportive care in GIST patients with resistance or intolerance to both imatinib and sunitinib.GOLS meeting,2009.(Vienna),[特別講演]
- 012 *Hijioka S*: EUS-FNA with adjuvant of immunohistochemical stain for the diagnosis of Schwannoma. American College of Gastroenterology,2009.(San Diego),[ポスター]
- 013 *Kobayashi Y, Hara K, Yamao K*: A case of pancreatic neuroendocrine tumor (NET) with morphology, diagnosed by EUS-FNA.40th Anniversary Joint Meeting of APA and JPS,2009.(Honolulu),[ポスター]
- 014 *Mizuno N, Hosoda W, Bahatia V, Hara K, Sawaki A, Hijioka S, Imamura H, Ko S.B.H, Yatabe Y, Goto H, Yamao K*: Histological Diagnosis of Autoimmune Pancreatitis Using EUS-Guided Trucut Biopsy: A Comparison Study With EUS-FNA.40th Anniversary Joint Meeting of APA and JPS,2009.(Honolulu),[口演]
- 015 *Mizuno N*: Role of IgG4 immunostaining: on resection specimens and core biopsies.AIP Consensus Meeting, 2009.(Honolulu),[口演]
- 016 *Matsumoto K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Imamura H, Kobayashi Y,Suzuki H, Yamao K*: Pre-operative diagnosis of synchronous pseudopapillary neoplasms (SPNs) of the pancreas. 40th Anniversary Joint Meeting of APA and JPS,2009.(Honolulu),[ポスター]
- 017 *Hijioka S*: The efficacy of whole body FDG-PET for autoimmune pancreatitis and its associated extra-pancreatic autoimmune lesions.40th Anniversary Joint Meeting of APA and JPS,2009.(Honolulu),[ポスター]
- 018 *Suzuki H, Yamao K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Imamura H, Nakamura T, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Kobayashi Y, Matsumoto K, Saeki A, Akabane A, Sano T, Simizu Y, Yatabe Y, Hosoda K*: Solid-pseudopapillary tumor of the pancreas in a young male.40th Anniversary Joint Meeting of APA and JPS,2009.(Honolulu),[ポスター]
- 019 *Imamura H, Yamakita K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Kondo S, Nakamura T, Tajika M, Kawai H, Kobayashi Y, Matsumoto K, Saeki A, Akabane A, Suzuki H, Hosoda K, Yatabe Y, Yamao K*: Analysis of point mutation in pancreatic mass lesions using endoscopic ultrasonography-guided fine needle aspiration. 40th Anniversary Joint Meeting of APA and JPS,2009.(Honolulu),[ポスター]
- 020 *Suzuki H, Yamao K, Kobayashi Y*: Endoscopic diagnosis and treatment for early gastric cancer.2nd Xin Hua Hospital didesstion forum & China and Japan Endoscopy New Technologies Seminar,2009.(Shanghai),[口演]
- 021 *Tajika M, Nakamura T, Bhatia V, Kawai H, Kondo S, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Imamura H, Matsumoto K, Kobayashi Y, Saeki A, Suzuki H, Akabane A, Yamao K, Nakamura S, Yokoi T, Yatabe Y, Seto M*: Long-term follow-up outcome of API2-malt positive gastric malt lymphoma. GASTRO 2009 UEGW / WCOG,2009.(London),[口演]
- 022 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 山村義孝, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 安藤公隆, 二村雄次, 山雄健次: 膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) の癌予測モデルの作成. 第

- 109回日本外科学会,2009.(福岡),[シンポジウム]
- 023 松本和也, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 澤井勇悟, 小林佑次, 杉森聖司, 山北圭介, 坪井順哉, 鏡味良豊, 谷田部恭, 横井太紀雄, 山雄健次:悪性リンパ腫との鑑別を要する胃病変を認めた伝染性単核球症の1例.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[一般演題 (ポスター)]
- 024 杉森聖司, 岡本泰幸, 澤木 明:転移あるいは切除不能なGISTに対するイマチニブによる治療と新たな治療標的の模索.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[ワークショップ]
- 025 田近正洋, 中村常哉, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原和生, 高木忠之, 澤井勇悟, 小林佑次, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 坪井順哉, 山雄健次:家族性大腸腺腫症に対する大腸全摘後のJ-pouch内に発生した腺癌3例の検討.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[ポスター]
- 026 田近正洋, 坪井順哉, 中村常哉, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 高木忠之, 澤井勇悟, 小林佑次, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 谷田部恭, 山雄健次:診断に難渋した食道壁内偽憩室症の1例.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[ポスター]
- 027 原 和生:緩和医療としてのEUS-CDSの検討.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[口演]
- 028 山雄健次:膵胆道その他.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[座長 (口演)]
- 029 原 和生:緩和医療としての超音波内視鏡下胆道十二指腸吻合術 (EUS-Choledochoduodenostomy : EUS-CDS) の検討.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[口演]
- 030 澤木 明:GIST.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[座長 (口演)]
- 031 小林佑次, 原 和生, 山雄健次:T1 膵癌の臨床的検討.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[口演]
- 032 山雄健次:膵癌に対するInterventional EUS (超音波内視鏡を用いた診断と治療) .第9回北九州膵研究会,2009.(小倉),[特別講演]
- 033 松本和也, 中村常哉, 瀬戸加大:胃MALT腫除菌療法後の経過および予後の検討.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[パネルディスカッション]
- 034 田近正洋, 中村常哉, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡 原 和生, 高木忠之, 小林祐次, 澤井勇悟, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 坪井順哉, 山雄健次:内視鏡治療後に抗利尿ホルモン分泌異常症候群 (SIADH)を発生した2例.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[一般演題 (ポスター)]
- 035 小林祐次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 高木忠之, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 澤井勇悟, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 坪井順哉, 清水泰博, 山雄健次:超音波内視鏡下胆管空腸吻合術 (EUS-CDS)が患者のQOLに大きく貢献した1例.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[口演]
- 036 山北圭介, 原 和生, 山雄健次:超音波内視鏡下胆管十二指腸吻合術 (EUS-CDS)に対する当院での取り組み.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[ビデオシンポジウム]
- 037 原 和生, 山雄健次, 後藤秀実:超音波内視鏡下胆道十二指腸吻合術 (EUS-Choledochoduodenostomy:EUS-CDS)の検討.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[シンポジウム]
- 038 山雄健次:胆道高齢者.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[座長 (口演)]
- 039 小林佑次, 原 和生, 山雄健次:超音波内視鏡下胆管十二指腸吻合術が患者のQOLに大きく貢献した1例.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[ポスター]
- 040 今村秀道, 入澤篤志, 大平弘正:悪性胆道狭窄に対するチューブステントを用いた経乳頭的ステンティングの工夫 -胆管内留置法の試み.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[シンポジウム]
- 041 原 和生:悪性下部胆管狭窄に対するEUS-CDSの検討.第77回日本消化器内視鏡学会総会・附置研究会,2009.(名古屋),[パネルディスカッション]
- 042 小林佑次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 高木忠之, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 澤井勇悟, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 坪井順哉, 清水泰博, 山雄健次:膵内分分泌腫瘍 (NET)の治療方針決定における超音波内視鏡下穿刺吸引法 (EUS-FNA)の臨床的意義.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[口演]
- 043 高木忠之, 清水泰博, 山雄健次:EUSを用いた膵癌の診断と治療における新展開.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[シンポジウム]
- 044 脇岡 範:眼窩炎症性偽腫瘍を先行発症した自己免疫性膵炎の1例.第110回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(三重),[口演]
- 045 鈴木晴久, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 赤羽麻奈, 佐伯 哲, 谷田部 恭, 細田和貴, 佐野 力, 清水泰博:若年男性に認めたSolid-pseudopapillary tumorの1例.第110回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(三重),[口演]
- 046 松本和也, 澤木 明, 山雄健次:当院における消化管間質腫瘍 (GIST) に対するスニチニブによる治療経験.第110回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(三重),[シンポジウム]
- 047 小林佑次, 原 和生, 山雄健次:EUS-FNAにより診断が可能であった腫瘍径5mmの膵内分分泌腫瘍の1例.第110回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(三重),[口演]
- 048 近藤真也, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 今村秀道, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 山雄健次:Scirrhoustypの浸潤を来した0-IIc 様高分化腺癌の1例.第110回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(三重),[口演]
- 049 佐伯 哲, 原 和生, 山雄健次, 中村常哉, 澤木 明, 田近正洋, 水野伸匡, 河合宏紀, 今村秀道, 脇岡 範, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 清水泰博:膵頭十二指腸切除術を施行した膵粘液性嚢胞腺腫 (Mucinous Cystadenoma) の1例.第110回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(三重),[口演]
- 050 山雄健次:EUS-FNAによる膵腫瘍の診断-その功罪-.第204

- 回札幌胆膵疾患研究会,2009.(札幌),[特別講演]
- 051 山雄健次:膵のう胞性腫瘍の診断と治療-特にIPMNとMCNについて-第51回奈良県消化器内視鏡研究会,2009.(奈良),[特別講演]
- 052 河合宏紀, 中村常哉, 田近正洋, 近藤真也, 澤木 明, 小林佑次, 松本和也, 赤羽麻奈, 佐伯 哲, 山雄健次:Third line chemotherapy としてのCetuximab+Irinotecan療法が奏効した大腸癌の一例.第208回日本内科学会東海地方会,2009.(名古屋),[口演]
- 053 山雄健次:当院における最近の消化器癌診療の実際-内視鏡診断・治療から化学療法まで.第12回千種区消化器懇話会,2009.(名古屋),[特別講演]
- 054 山雄健次:悪性胆道狭窄に対する新しい内視鏡的ドレナージ法.第4回神戸消化器クラスター研究会,2009.(神戸),[特別講演]
- 055 松本和也:EUS-ENAにより診断が可能であった腫瘍径5mmの膵内分泌腫瘍の1例.第10回臨床消化器病研究会,2009.(東京),[口演]
- 056 原 和生:T1膵癌の検討.第40回日本膵臓学会大会,2009.(東京),[ワークショップ]
- 057 澤木 明, 清水泰博, 水野伸匡, 原 和生, 高木忠之, 佐野 力, 山雄健次:門脈浸潤陽性あるいは神経叢浸潤陽性の局所進行膵癌に対する治療選択.第40回日本膵臓学会大会,2009.(東京),[パネルディスカッション]
- 058 水野伸匡, 原 和生, 高木忠之, 山雄健次:自己免疫性膵炎(AIP)診断基準2006の再評価とEUS下 trucut生検(EUS-TCB)の役割「自己免疫性膵炎診断基準2006の再評価～診断基準の国際化にむけて～」.第40回日本膵臓学会大会,2009.(東京),[口演]
- 059 水野伸匡, 洪 繁, 山雄健次, 後藤秀実:膵炎のステロイド治療による膵組織再生と血球系幹細胞マーカーCD133の発現「慢性膵炎の基礎研究における最近の進歩 - 新しい診断と治療法の開発にむけての展望 -」.第40回日本膵臓学会大会,2009.(東京),[口演]
- 060 真口宏介, 柳澤昭夫, 丹野誠志, 山口武人, 水野伸匡, 羽鳥 隆, 土井隆一郎, 飛田浩輔, 小林 剛, 花田敬士, 貞苅良彦:分枝型IPMNの自然経過を明らかにする。「IPMN / MCN / SCN 国際診療ガイドライン改訂に向けて 嚢胞性膵腫瘍委員会の活動報告」.第40回日本膵臓学会大会,2009.(東京),[口演]
- 061 山雄健次:膵、胆道がんの化学療法.第15回広島薬物療法研究会,2009.(広島),[特別講演]
- 062 山雄健次:胆道癌治療の最前線.第14回福岡胆道・膵臓癌化学療法研究会,2009.(福岡),[特別講演]
- 063 山雄健次:膵癌の診断・治療-update-.京都府立医科大学研究開発センター第10回学術講演会,2009.(京都),[講演]
- 064 松本和也, 原 和生, 澤木 明, 水野伸匡, 脇岡 範, 今村秀道, 小林佑次, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 二村雄次, 細田和貴, 谷田部恭, 山雄健次:膵内に多発し、EUS-FNAにて術前に診断し得たSolid-pseudopapillary neoplasm(SPN)の1例.第51回日本消化器画像診断研究会,2009.(仙台),[口演]
- 065 脇岡 範:胆嚢病変に対するEUS-FNAの検討.第45回日本胆道学会学術集会,2009.(千葉),[口演]
- 066 松本和也, 原 和生, 澤木 明, 水野伸匡, 脇岡 範, 今村秀道, 小林佑次, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 山浦秀和, 山雄健次:ランデブー法による超音波内視鏡ガイド下胆膵ドレナージの1例.第45回日本胆道学会学術集会,2009.(千葉),[口演]
- 067 小林佑次, 原 和生, 山雄健次:超音波内視鏡下胆管十二指腸吻合術(EUS-CDS)により著しく患者のQOLに貢献した1例.第45回日本胆道学会学術集会,2009.(千葉),[ポスター]
- 068 原 和生:悪性中・下部胆管狭窄に対する超音波内視鏡下胆道十二指腸吻合術(EUS-guided Choledochoduodenostomy: EUS-CDS)の検討.第45回日本胆道学会学術集会,2009.(千葉),[パネルディスカッション]
- 069 近藤真也, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 今村秀道, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 篠田雅幸, 波戸岡俊三, 安部哲也, 齊藤卓也, 丹羽由紀子, 山雄健次:0-IIc+"0-Is"型を呈したBarrett 食道腺癌の1例.第101回東海食道疾患症例検討会,2009.(名古屋),[口演]
- 070 澤木 明:GIST内科治療の最新知見JDDW 2009,2009.(京都),[ランチョンセミナー]
- 071 小林佑次, 中村常哉, 山雄健次:血清 REG4 の早期胃癌に対する臨床的有用性の検討.JDDW 2009,2009.(京都),[シンポジウム]
- 072 水野伸匡, 洪 繁, 山雄健次:自己免疫性膵炎(AIP)のステロイド治療による膵外分泌機能回復と膵幹/前駆細胞の同定。「自己免疫性膵炎関連疾患の病因病態」.JDDW 2009,2009.(京都),[口演]
- 073 洪 繁, 水野伸匡, 後藤秀実:自己免疫性膵炎の消化機能障害とその対策「膵・胆道疾患における消化吸収障害とその対策」.JDDW 2009,2009.(京都),[口演]
- 074 水野伸匡:胆膵症例2.JDDW 2009,2009.(京都),[司会]
- 075 原 和生:悪性中・下部胆管狭窄に対する超音波内視鏡下胆道十二指腸吻合術(EUS-guided Choledochoduodenostomy:EUS-CDS)の検討.JDDW 2009,2009.(京都),[ワークショップ]
- 076 松本和也, 田近正洋, 中村常哉:胃MALTリンパ腫に対する除菌療法による内視鏡所見の変化JDDW 2009,2009.(京都),[パネルディスカッション]
- 077 坪井順哉, 田近正洋, 中村常哉, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 高木忠之, 澤井勇悟, 小林佑次, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 小森康司, 山雄健次:生検組織による胃癌の深達度診断の有用性の新たな試み.第78回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(京都),[ポスター]
- 078 水野伸匡, 福富 晃, 山雄健次, 谷合 央, 竹綱正典, 南部静洋, 奥坂拓志, 古瀬純司, 宮崎 勝, 二村雄次:シンポジウム19「膵癌胆道癌治療の新たな展開」胆道癌化学療法での減黄処置の影響について-ゲムシタピン第II相臨床試験における検討.第47回日本癌治療学会学術集会,2009.(横浜),[シンポジウム]
- 079 澤木 明, 小室 泰司, 佐藤 太郎, 浜本 康夫, 朴 成和, 宮

- 田 佳典, 瀧内 比呂也, 山口 研成, 佐々木 康綱, 仁科 智裕, 佐藤 温, 馬場 英司, 田村 孝雄, 齋藤 博, 島 清彦, 大津 敦:HER2陽性進行・転移性胃癌の一次治療におけるトラスツマブの第Ⅲ相臨床試験.第47回日本癌治療学会,2009.(横浜),[特別講演]
- 080 澤木 明:耐性GISTに対するステント治療の位置づけ.第47回日本癌治療学会,2009.(横浜),[ランチョンセミナー]
- 081 山雄健次:EUS/EUS-FNAによる膵腫瘍(P-NETを含めて)の診断.第4回神経内分泌腫瘍における診断と治療について,2009.(東京),[特別講演]
- 082 山雄健次:膵疾患における超音波内視鏡検査を用いた診断と治療.第104回備後内視鏡研究会,2009.(福山),[特別講演]
- 083 山雄健次:消化器癌に対する愛知県がんセンター中央病院の最近の取り組み.第3回愛知臨床内科マスター会,2009.(名古屋),[特別講演]
- 084 脇岡 範:ステロイド投与前後の経時的FDG-PETを用いた自己免疫性膵炎と膵癌との早期鑑別に関する検討.消化器病・内視鏡学会合同九州地方会,2009.(熊本),[シンポジウム]
- 085 脇岡 範:膵4.消化器病・内視鏡学会合同九州地方会,2009.(熊本),[座長]
- 086 脇岡 範:Interventional EUSの有用性と偶発症.消化器病・内視鏡学会合同九州地方会,2009.(熊本),[ワークショップ]
- 087 山雄健次:膵癌の診療?最近の話題.日本消化器病学会四国支部第16回教育講演会,2009.(松山),[教育講演]
- 088 山雄健次:膵IPMNの臨床.第135回日本臨床細胞学会東海連合会例会,2009.(名古屋),[特別講演]
- 089 鈴木晴久, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 丹羽康正, 田近正洋, 清水泰博, 佐々木恵子, 細田和貴, 谷田部 恭:膵内分泌腫瘍に対する超音波内視鏡下穿刺吸引法(EUS-FNA)の臨床的有用性の検討.第111回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(名古屋),[シンポジウム]
- 090 松本和也, 原 和生, 澤木 明, 水野伸匡, 脇岡 範, 今村秀道, 小林佑次, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 二村雄次, 細田和貴, 谷田部 恭, 山雄健次:膵内に多発し、EUS-FNAにて術前に診断し得たSolid-pseudopapillary neoplasm(SPN)の1例.第111回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(名古屋),[口演]
- 091 今村秀道, 原 和生, 澤木 明, 水野伸匡, 脇岡 範, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 丹羽康正, 山雄健次:当院におけるtherapeutic EUSの現況.第111回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(名古屋),[シンポジウム]
- 092 小林佑次, 原 和生, 山雄健次:EUS-FNAにて術前診断が可能であった?胞変性を伴う膵内分泌腫瘍の一例.第52回日本消化器内視鏡学会東海支部会,2009.(名古屋),[口演]
- 093 近藤真也, 田近正洋, 丹羽康正:大腸ESDにおけるB-knifeの有用性についての検討.第52回日本消化器内視鏡学会東海地方会,2009.(名古屋),[シンポジウム]
- 094 佐伯 哲, 丹羽康正, 田近正洋, 澤木 明, 水野伸匡, 原和生, 河合宏紀, 脇岡 範, 今村秀道, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 山雄健次:超音波内視鏡吸引生検(EUS-FNA)にて確診を得た胃粘膜下腫瘍様胃癌の1例.第52回日本消化器内視鏡学会東海地方会,2009.(名古屋),[口演]
- 095 山雄健次:超音波内視鏡下穿刺吸引生検法を用いた消化器疾患の診断.平成21年度がん診療連携拠点病院臨床検査技師研究会,2009.(名古屋),[特別講演]
- 096 松本和也:超音波内視鏡下穿刺吸引法(EUS-FNA)の有用性の検討.東京医大第4内科,2010.(東京),[特別講演]
- 097 脇岡 範:EUS-FNAにて診断しえた後腹膜神経鞘腫の2例.超音波学会中部地方会,2010.(金沢),[口演]
- 098 小林佑次, 原 和生, 山雄健次:囊胞変性を伴ったanaplastic carcinomaの1例.第52回日本消化器画像診断研究会,2010.(東京),[口演]

内視鏡部

- 001 Niwa Y, Goto H: Endoscopic mucosal dissection-endoscopic submucosal dissection.Minimally Invasive Surgery Congress 2009,2009.(Cyprus),[講演]
- 002 Niwa Y: Endoscopic submucosal resection .第5回ハセテッペ大学消化器病学会,2009.(Ankara),[live demonstration]
- 003 Suzuki H, Yamao K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Imamura H, Nakamura T, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Kobayashi Y, Matsumoto K, Saeki A, Akabane A, Sano T, Simizu Y, Yatake Y, Hosoda K: Solid-pseudopapillary tumor of the pancreas in a young male.40th Anniversary Joint Meeting of APA and JPS,2009.(Honolulu),[ポスター]
- 004 Niwa Y: 胃癌の診断と内視鏡的治療.日中胃癌研究会, 2009.(Nanjing),[講演]
- 005 Imamura H, Yamakita K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Kondo S, Nakamura T, Tajika M, Kawai H, Kobayashi Y, Matsumoto K, Saeki A, Akabane A, Suzuki H, Hosoda K, Yatabe Y, Yamao K: Analysis of point mutation in pancreatic mass lesions using endoscopic ultrasonography-guided fine needle aspiration.40th Anniversary Joint Meeting of APA and JPS,2009.(Honolulu),[ポスター]
- 006 Tajika M, Nakamura T, Bhatia V, Kawai H, Kondo S, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Imamura H, Matsumoto K, Kobayashi Y, Saeki A, Suzuki H, Akabane A, Yamao K, Nakamura S, Yokoi T, Yatabe Y, Seto M: Long-term follow-up outcome of API2-malt positive gastric malt lymphoma.GASTRO 2009 UEGW / WCOG,2009.(London),[口演]
- 007 松本和也, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 澤井勇悟, 小林佑次, 杉森聖司, 山北圭介, 坪井順哉, 鏡味良豊, 谷田部 恭, 横井太紀雄, 山雄健次:悪性リンパ腫との鑑別を要する胃病変を認めた伝染性単核球症の1例.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[一般演題(ポスター)]
- 008 田近正洋, 中村常哉, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原和生, 高木忠之, 澤井勇悟, 小林佑次, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 坪井順哉, 山雄健次:家族性大腸腺腫症

- に対する大腸全摘後のJ-pouch内に発生した腺癌3例の検討.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[ポスター]
- 009 田近正洋, 坪井順哉, 中村常哉, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 高木忠之, 澤井勇悟, 小林佑次, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 谷田部 恭, 山雄健次:診断に難渋した食道壁内偽憩室症の1例.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[ポスター]
- 010 丹羽康正:小腸診断 2.第95回日本消化器病学会総会,2009.(札幌),[口演 司会]
- 011 松本和也, 中村常哉, 瀬戸加大:胃MALT腫除菌療法後の経過および予後の検討.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[パネルディスカッション]
- 012 田近正洋, 中村常哉, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡 原 和生, 高木忠之, 小林佑次, 澤井勇悟, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 坪井順哉, 山雄健次:内視鏡治療後に抗利尿ホルモン分泌異常症候群 (SIADH)を発生した2例.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[一般演題 (ポスター)]
- 013 小林佑次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 高木忠之, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 澤井勇悟, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 坪井順哉, 清水泰博, 山雄健次:超音波内視鏡下胆管空腸吻合術 (EUS-CDS)が患者のQOLに大きく貢献した1例.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[口演]
- 014 河合宏紀, 中村常哉, 田近正洋:十二指腸カルチノイドに対する内視鏡治療の適応についての検討.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[ワークショップ]
- 015 小林佑次, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 高木忠之, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 澤井勇悟, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 坪井順哉, 清水泰博, 山雄健次:膵内分泌腫瘍 (NET)の治療方針決定における超音波内視鏡下穿刺吸引法 (EUS-FNA)の臨床的意義.第77回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(名古屋),[口演]
- 016 井上晴洋, 丹羽康正:内視鏡による病理学的検索.第77回日本消化器内視鏡学会総会 ワークショップ1,2009.(名古屋),[司会]
- 017 鈴木晴久, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 赤羽麻奈, 佐伯 哲, 谷田部 恭, 細田和貴, 佐野 力, 清水泰博:若年男性に認めたSolid-pseudopapillary tumorの1例.第110回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(三重),[口演]
- 018 近藤真也, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 今村秀道, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 山雄健次:Scirrhoustype の浸潤を来した O-IIc 様高分化腺癌の1例.第110回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(三重),[口演]
- 019 佐伯 哲, 原 和生, 山雄健次, 中村常哉, 澤木 明, 田近正洋, 水野伸匡, 河合宏紀, 今村秀道, 脇岡 範, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 清水泰博:膵頭十二指腸切除術を施行した膵粘液性嚢胞腺腫 (Mucinous Cystadenoma) の1例.第110回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(三重),[口演]
- 020 田近正洋:大腸2.第110回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(三重),[座長]
- 021 河合宏紀, 中村常哉, 田近正洋, 近藤真也, 澤木 明, 小林佑次, 松本和也, 赤羽麻奈, 佐伯 哲, 山雄健次:Third line chemotherapy としてのCetuximab+Irinotecan療法が奏効した大腸癌の一例.第208回日本内科学会東海地方会,2009.(名古屋),[口演]
- 022 田近正洋:消化器6.第208回日本内科学会東海地方会,2009.(名古屋),[座長]
- 023 田近正洋:H.pylori 感染と胃がん.平成21年度愛知県がんセンター公開講座,2009.(名古屋),[講演]
- 024 近藤真也, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 今村秀道, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 篠田雅幸, 波戸岡俊三, 安部哲也, 齊藤卓也, 丹羽由紀子, 山雄健次:0-IIc+ 0-Is”型を呈したBarrett 食道腺癌の1例.第101回東海食道疾患症例検討会,2009.(名古屋),[口演]
- 025 小林佑次, 中村常哉, 山雄健次:血清 REG4 の早期胃癌に対する臨床的有用性の検討.JDDW 2009,2009.(京都),[シンポジウム]
- 026 丹羽康正:消化管疾患、診断・治療の進歩.第78回日本消化器内視鏡学会総会 サテライトシンポジウム,2009.(京都),[口演]
- 027 河合宏紀, 中村常哉, 山本一仁: 十二指腸 follicular lymphoma に対する rituximab 単独及び併用療法の効果.第51回日本消化器病学会大会,2009.(京都),[ワークショップ]
- 028 丹羽康正, 井上晴洋, 浜谷茂治:超・拡大内視鏡の最前線.第78回日本消化器内視鏡学会総会 シンポジウム13,2009.(京都),[司会]
- 029 丹羽康正, 宮原良二, 後藤秀実:共焦点内視鏡を用いた表在型食道癌の診断.第78回日本消化器内視鏡学会総会 シンポジウム13,2009.(京都),[講演]
- 030 松本和也, 田近正洋, 中村常哉:胃MALTリンパ腫に対する除菌療法による内視鏡所見の変化.JDDW 2009,2009.(京都),[パネルディスカッション]
- 031 田近正洋, 中村常哉, 小森康司:家族性大腸腺腫に対する大腸切除術後の残存腸管における腺腫再発に関する検討.第51回日本消化器病学会総会,2009.(京都),[シンポジウム]
- 032 坪井順哉, 田近正洋, 中村常哉, 河合宏紀, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 高木忠之, 澤井勇悟, 小林佑次, 松本和也, 杉森聖司, 山北圭介, 小森康司, 山雄健次:生検組織による胃癌の深達度診断の有用性の新たな試み.第78回日本消化器内視鏡学会総会,2009.(京都),[ポスター]
- 033 河合宏紀:粘膜下腫瘍様胃癌の1例.第496回東海胃腸疾患研究会,2009.(名古屋),[口演]
- 034 丹羽康正, 宮原良二, 後藤秀実:共焦点内視鏡を用いた消化管粘膜の超拡大観察.第30回日本レーザー医学会総会 オーガナイズドシンポジウム,2009.(東京),[口演]
- 035 鈴木晴久, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 丹羽康正, 田近正洋, 清水泰博, 佐々木恵子, 細田和貴, 谷田部 恭:膵内分泌腫瘍に対する超音波内視鏡下穿刺吸引法 (EUS-FNA)の臨床的有用性の検討.第111回日本消化器病学会東海支部

- 例会,2009.(名古屋),[シンポジウム]
- 036 今村秀道, 原 和生, 澤木 明, 水野伸匡, 脇岡 範, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 丹羽康正, 山雄健次:当院における therapeutic EUS の現況.第111回日本消化器病学会東海支部例会,2009.(名古屋),[シンポジウム]
- 037 近藤真也, 田近正洋, 丹羽康正:大腸 ESD における B-knife の有用性についての検討.第52回日本消化器内視鏡学会東海地方会,2009.(名古屋),[シンポジウム]
- 038 佐伯 哲, 丹羽康正, 田近正洋, 澤木 明, 水野伸匡, 原和生, 河合宏紀, 脇岡 範, 今村秀道, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 山雄健次:超音波内視鏡吸引生検 (EUS-FNA) にて確診を得た胃粘膜下腫瘍様胃癌の1例.第52回日本消化器内視鏡学会東海地方会,2009.(名古屋),[口演]
- 039 田近正洋:大腸がんの内視鏡診断と内視鏡治療.第20回日本消化器内視鏡学会東海セミナー,2010.(名古屋),[講演]
- 040 丹羽康正:小腸の内視鏡検査の最新の進歩.第23回日本消化器内視鏡学会九州セミナー,2010.(福岡),[講演]
- 041 丹羽康正:胃炎・消化性潰瘍の内視鏡診断と共焦点内視鏡による超拡大観察.第19回日本消化器内視鏡学会中国セミナー,2010.(下関),[講演]
- 042 岩切龍一, 丹羽康正:小腸基礎 2.第6回日本消化管学会総会学術集會,2010.(福岡),[司会]
- 043 河合宏紀, 丹羽康正, 山本一仁: 十二指腸 follicular lymphoma に対して化学療法および経過観察を行った12例.第6回日本消化管学会総会学術集會,2010.(福岡),[ワークショップ]
- 呼吸器内科部
- 001 *Satouchi M, Yamamoto N, Chiba Y, Kudoh S, Hida T, Kubo A, Seto T, Nishimura M, Nakagawa K, Fukuoka M* : Randomized, phase III study of Mitomycin/vindesine/cisplatin(MVP) versus weekly irinotecan/carboplatin (IC) or weekly paclitaxel/carboplatin(PC) with concurrent thoracic radiotherapy (TRT) for unresectable stage III non-small cell lung cancer(NSCLC) :WJTOGO105 . 2009 ASCO Annual Meeting, (2009), (オランダ) [口演]
- 002 *Nishio M, Horai T, Kunitoh H, Ichinose Y, Nishiwaki Y, Hida T, Yamamoto N, Kawahara M, Saijo N, Fukuoka M* :Radomized, open-label, multicenter phase II study of bevacizumab in combination with carboplatin and paclitaxel in chemotherapy-naive Japanese patients with advanced or recurrent nonsquamous non-small cell lung cancer (NSCLC) :JO19907. 2009 ASCO Annual Meeting, (2009), (オランダ) [ポスター]
- 003 *Asahina H, Kunitoh H, Ichinose Y, Horai T, Nishiwaki Y, Hida T, Yamamoto N, Kawahara M, Saijo N, Fukuoka M* : Phase II study comparing paclitaxel-carboplatin alone with paclitaxel-carboplatin plus bevacizumab in previously untreated Japanese patients with advanced -stage non- squamous non -small-cell lung cancer (NSCLC). 13th World Conference on Lung Cancer. (2009), (San Francisco) [口演]
- 004 *Takeda K, Yamamoto N, Satouchi M, Chiba Y, Kudoh S, Hida T, Kubo A, Nishimura T, Sawa T, Yokota S, Seto T, Nishimura Y, Nakagawa K, Fukuoka M* :Randomized, phase III study of mitomycin / vindesine / cisplatin (MVP) versus weekly irinotecan / carboplatin (IC) or weekly paclitaxel / carboplatin (PC) with concurrent thoracic radiotherapy (TRT) for unresectable stage III non-small-cell lung cancer (NSCLC). 13th World Conference on Lung Cancer. (2009), (San Francisco) [口演]
- 005 *Katayama T, Shimizu J, Fukui T, Ito S, Hatooka S, Hida T, Yatabe Y, Mitsudomi T*:Erlotinib response of brain and/or leptomeningeal metastases in patients with lung adenocarcinoma who showed initial good response to gefitinib. 13th World Conference on Lung Cancer.(2009), (San Francisco) [ポスター]
- 006 *Tamiya M, Hida T, Horai T, Yamamoto N, Kobayashi K, Hirashima T*: Phase I trial of intravenous ASA404 administered in combination with paclitaxel and carboplatin in Japanese patients with non-small cell lung cancer (NSCLC). 13th World Conference on Lung Cancer. (2009),(San Francisco) [ポスター]
- 007 杉尾賢二, 平島智徳, 樋田豊明, 荻原弘一, 砂長則明, 井上 彰, 朝比奈肇, 森田智視, 光富徹哉, 福岡正博, 貫和敏博, 安元公正, *I-CAMP Study group* :EGFR遺伝子変異陽性NSCLC症例に対するゲフィチニブ治療の第II相試験統合解析 (I-CAMP) .第49回日本呼吸器学会, (2009), (東京) [ポスターディスカッション]
- 008 武田晃司, 樋田豊明, 根来俊一, 一瀬幸人, 工藤新三, 佐々木治一郎, 菓子井達彦, 澤 祥幸, 斉藤 博, 千場 博, 佐藤滋樹, 清水英治, 安藤昌彦, 中川和彦, 福岡正博:未治療進行非小細胞肺癌(NSCLC)に対する標準化学療法+逐次ゲフィチニブ投与と標準化学療法単独のランダム化第III相比較試験 (WJTOGO203) . 第49回日本呼吸器学会, (2009),(東京) [ポスターディスカッション]
- 009 田島 健, 大橋里奈, 関戸好孝, 樋田豊明, 南方邦彦, 八戸敏史, 高橋和久:中皮腫におけるオステオポンチが誘導するヒアルロン酸への接着増強による多剤耐性. 第49回日本呼吸器学会, (2009), (東京) [ポスター]
- 010 堀尾芳嗣, 清水淳市, 朴 智栄, 朴 将哲, 小川紫都, 吉田公秀, 樋田豊明, 関戸好孝:肺癌細胞株におけるトポイソメラーゼII阻害剤アムルピシンの感受性とRanBP2とトポイソメラーゼII遺伝子発現. 第49回日本呼吸器学会, (2009),(東京) [ポスター]
- 011 清水淳市, 福井高幸, 千種智之, 雨森貞子, 前田孝子, 朴 智栄, 朴 将哲, 小川紫都, 堀尾芳嗣, 吉田公秀, 樋田豊明:がん専門病院における結核感染症の検討. 第49回日本呼吸器学会, (2009), (東京) [ポスター]
- 012 長田啓隆, 立松義朗, 谷田部恭, 有馬千夏, 藤井万紀子, 村上秀樹, 近藤 豊, 堀尾芳嗣, 柳沢 聖, 関戸好孝, 高橋 隆:肺癌の転移関連遺伝子CLCP1の機能解析(Roles of

- CLCP1 gene in lung cancer progression). 第68回日本癌学会, (2009),(横浜) [口演]
- 013 岡阪敏樹, 松尾恵太郎, 伊藤秀美, 川瀬孝和, 細野覚代, 谷田部恭, 樋田豊明, 光富徹哉, 横井香平, 田島和雄, 田中英夫: 大規模ゲノム関連研究で発見されたTERT遺伝子多型と肺がんリスクの関係. 第68回日本癌学会, (2009),(横浜) [ポスター]
- 014 朴 智栄, 松尾恵太郎, 鈴木勇史, 川瀬孝和, 細野覚代, 伊藤秀美, 樋田豊明, 谷田部恭, 光富徹哉, 田島和雄, 田中英夫: アセトアルデヒド脱水素酵素遺伝子欠損型でより強くなる喫煙の肺がんリスクの影響. 第68回日本癌学会, (横浜) [ポスター]
- 015 室 圭, 宇良 敬, 高張大亮, 横田知哉, 設楽紘平, 柴田剛志, 堀尾芳嗣, 今泉 文, 深谷幸代, 大石和明: 次代の外来化療センターのあり方とは? 安全で快適な実地臨床、治験実施に向けて. 第47回日本癌治療学会, (2009),(横浜) [口演]
- 016 清水淳市, 朴 将哲, 小川紫都, 堀尾芳嗣, 吉田公秀, 樋田豊明: 原発性肺癌における硬膜内脊髄転移の検討. 第50回日本肺癌学会総会, (2009),(東京) [ポスター]
- 017 堀尾芳嗣, 樋田豊明, 國頭英夫, 宝来 威, 一瀬幸人, 西脇 裕, 山本信之, 河原正明, 西條長宏, 福岡正博: 進行非扁平上皮・非小細胞肺癌に対するCBDCA+PTX±ベバシズマブの無作為化比較第Ⅱ相試験. 第50回日本肺癌学会総会, (2009),(東京) [シンポジウム]
- 018 清水淳市, 朴 将哲, 小川紫都, 堀尾芳嗣, 吉田公秀, 樋田豊明: 原発性肺癌における硬膜内脊髄転移の検討. 第50回日本肺癌学会総会, (2009),(東京) [ポスター]
- 019 吉田公秀, 谷田部恭, 朴 将哲, 小川紫都, 清水淳市, 堀尾芳嗣, 樋田豊明: 非小細胞肺癌に対するエルロチニブ投与例の検討. 第50回日本肺癌学会総会, (2009),(東京) [ポスター]
- 020 伊藤志門, 小川紫都, 厚田幸子, 小野里良一, 丹羽由紀子, 福本紘一, 斎藤卓也, 片山達也, 福井高幸, 安部哲也, 波戸岡俊三, 樋田豊明, 光富徹哉: 限局型小細胞肺癌に対する治療戦略 外科治療の役割. 第50回日本肺癌学会総会, (2009),(東京) [ワークショップ]
- 021 堀尾芳嗣, 小川紫都, 朴 将哲, 清水淳市, 吉田公秀, 谷田部恭, 樋田豊明: 1次治療でゲフィチニブを投与した再生不良性貧血合併EGFR変異陽性限局型小細胞肺癌の1例. 第8回日本臨床腫瘍学会学術集会, (2010),(東京) [ポスター]
- 022 村上晴泰, 山本信之, 國頭英夫, 宝来 威, 一瀬幸人, 西脇 裕, 樋田豊明, 河原正明, 西條長宏, 福岡正博: 進行・再発非小細胞肺癌(扁平上皮癌を除く)の初回治療例に対するCBDCA+PTX±ベバシズマブの国内多施設共同無作為化比較第Ⅱ相試験. 第8回日本臨床腫瘍学会学術集会, (2010),(東京) [プレナリー]
- 023 北川智余恵, 坂 英雄, 小暮啓人, 澤 祥幸, 石黒 崇, 吉田 勉, 樋田豊明, 吉田公秀, 堀尾芳嗣, 齋藤 博, 奥野元保, 高橋孝輔, 進藤 丈, 大野 康, 杉浦孝彦: 切除不能Ⅲ期非小細胞肺癌同時化学 放射線療法時の治療逸脱が生存に及ぼす影響 第比較試験(WJTOGO105) サブ解析結果. 第96回日本肺癌学会中部支部会, (2010) (名古屋) [口演]
- 024 樋田豊明, 朴 将哲, 清水淳市, 堀尾芳嗣, 吉田公秀, 谷田部恭, 清水泰博: 集学的治療施行し長期生存中の非小細胞肺癌の1例. 第96回日本肺癌学会中部支部会, (2010) (名古屋) [口演]

血液・細胞療法部

- 001 *Yasuo Morishima, Takakazu Kawase, Satoko Morishima, Mari Malkki, Stephen R Spellman, Andrea Velardi, and Effie W Petersdorf*: Impact of Donor-Recipient Ethnicity On Risk of Acute Graft-Versus-Host Disease, Leukemia Relapse and Survival in Hematopoietic Stem Cell Transplantation From HLA-Compatible Unrelated Donors. A Report From the International Histocompatibility Workshop Group. The 51st American Society of Hematology Annual Meeting 2009年12月 ニューオーリンズ 米国 [口演]
- 002 *Dai Chihara, Yasuhiro Oki, Shouji Ine, Hiroshi Onoda, Harumi Kato, Hirofumi Taji, Yoshitoyo Kagami, Kazuhito Yamamoto, and Yasuo Morishima*: Gastric Diffuse Large B-Cell Lymphoma: Analyses of Prognostic Factors and Value of Pretreatment FDG-PET Scan. The 51st American Society of Hematology Annual Meeting 2009年12月 ニューオーリンズ 米国 [ポスター]
- 003 *Akiyoshi Takami, J. Luis Espinoza, Makoto Onizuka, Takakazu Kawase, Takamasa Katagiri, Shigeki Ohtake, Yasuo Morishima, Takahiro Fukuda, Yoshihisa Kadera, and Shinji Nakao*: Significant Impact of IL-17A Gene Polymorphism On Transplant Outcomes After HLA-Fully-Matched Unrelated Bone Marrow Transplantation. The 51st American Society of Hematology Annual Meeting 2009年12月 ニューオーリンズ 米国 [ポスター]
- 004 *Satoshi Takahashi, Jun Ooi, Nobuhiro Tsukada, Seiko Kato, Aki Sato, Toshiro Kawakita, Yasuyuki Nagata, Maki Monna-Ooiwa, Arinobu Tojo, Takuhiro Yamaguchi, Satoko Morishima, Yasuo Morishima, and Shigetaka Asano*: The Impact of HLA Haplotype Matching for Mismatched Cord Blood Transplantation. The 51st American Society of Hematology Annual Meeting 2009年12月 ニューオーリンズ 米国 [ポスター]
- 005 *Naoko Asano, Jun-Ichi Tamaru, Fumihiko Ishida, Tadashi Yoshino, Yoshitoyo Kagami, Yasuo Morishima, Masao Seto, Tomohiro Kinoshita, and Shigeo Nakamura*: Cytotoxic Molecule (CM)-Positive Classical Hodgkin Lymphoma: a Clinicopathologic Study in Comparison with Nodal Peripheral T-Cell Lymphoma of Not Otherwise Specified Type Possessing CM Expression. The 51st American Society of Hematology Annual Meeting 2009年12月 ニューオーリンズ 米国 [ポスター]
- 006 *Yasuo Morishima*: Unrelated Hematopoietic Stem Cell

- Transplantation and Bank. The 20th Regional Congress of the International Society of Blood Transfusion, Asia. 2009.11. Nagoya Japan [口演]
- 007 鏡味良豊、加藤春美、シバスダラム カルナン、中村栄男、森島泰雄、瀬戸加大：びまん性大細胞Bリンパ腫由来、CD40ligand + IL-4依存性増殖細胞の樹立。第49回 日本リンパ網内系学会総会 2009.7.兵庫県淡路島 [ポスター]
- 008 岡本晃直、入山智沙子、鈴木達也、尾山卓、笠井雅信、内田俊樹、森島泰雄、小椋美知則：CHOP療法が無効で、CHASE療法にて完全 解後、auto-PBSCT併用大量化学 (LEED) 療法施行後、7.5年間の長期 解を維持している肝脾 γ δ 型T細胞リンパ腫の一例。第49回 日本リンパ網内系学会総会 2009.7.兵庫県淡路島 [ポスター]
- 009 山本一仁、岡田昌也、坂巻 壽、小林幸夫、安藤 潔、中川靖章、大西一功、谷脇雅史、宇都宮 興、上田亨司、大野竜三：ダサニチブの慢性期慢性骨髄性白血病に対する1日用量100mg投与の臨床第II相試験の長期投与成績。Phase II Study of Dasatinib 100mg Daily Administration in Chronic Phase CML -Long Term Results-第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [口演]
- 010 千原 大、大木康弘、山本一仁、加藤春美、井根省二、田地浩史、鏡味良豊、谷田部 恭、中村栄男、森島泰雄：愛知県がんセンターでのPTCLの予後因子解析。Analysis of prognostic factors in periphaeral T-cell lymphoma. 第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [口演]
- 011 森島聡子、山本一仁、中村栄男、永井宏和、森谷鈴子、宮村耕一、伊藤雅文、木下朝博、杉浦 勇、三原英嗣、津下圭太郎、宮内英征、鏡味良豊、葛島清隆、森島泰雄：加齢性EBV関連リンパ増殖性疾患の発症に関与する免疫学的な病態の解明。Immunological analysis of age-related EBV-associated B-cell lymphoproliferative disorders. 第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [口演]
- 012 川瀬孝和、柏瀬貢一、松尾恵太郎、猪子英俊、佐治博夫、小川誠司、加藤俊一、笹月健彦、小寺良尚、森島泰雄：非血縁者間骨髄移植における許容可能な遺伝子型HLA型不適合組合せの検討。Permissive mismatch combinations in unrelated hematopoietic stem cell transplantation. 第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [口演]
- 013 石川裕一、清井 仁、宮村耕一、中野祐往、北村邦朗、河野彰夫、杉浦 勇、横澤敏也、花村明利、山本一仁、飯田浩充、恵美宣彦、鈴木律朗、大西一功、直江知樹：Imatinibトラフ血中濃度はin vitro BCR/ABLキラーゼ阻害効果を反映し治療効果と相関する。Imatinib trough level reflects BCR/ABL inhibitory activity and is associated with clinical response. 第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [口演]
- 014 安部明弘、南 陽介、鎌塚八千代、野村由佳、早川文彦、尾関和貴、平賀潤二、梶口智弘、山本一仁、北村邦朗、宮村耕一、勝見 章、清井 仁、直江知樹：慢性骨髄性白血病のイマチニブ治療後早期における造血幹細胞分画でのBCR-ABL陽性細胞の減少。Reduction of BCR-ABL positive cells in HSC at early phase after imatinib therapy of CML. 第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [口演]
- 015 石澤賢一、坂巻 壽、谷脇雅史、藤澤 信、森島泰雄、飛内賢正、岡田昌也、安藤 潔、薄井紀子、宮脇修一、宇都宮 興、魚嶋伸彦、永井 正、直江知樹、泉二登志子、陣内逸郎、谷本光音、宮崎泰司、大西一功、飯田真介、岡本真一郎、芹生 卓、大野竜三：ダサニチブの慢性骨髄性白血病及びPh+ALLに対する臨床第I/2相試験の2年追跡成績。Phase1/2 study of Dasatinib in Patients with CML and Ph+ALL -2 year update-第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [口演]
- 016 鳥飼宏基、柳沢真弓、今橋伸彦、高橋利忠、宮村耕一、森島泰雄、小寺良尚、赤塚美樹：HLAクラスII不適合骨髄移植患者より樹立した不一致クラスII拘束性アロCD8+CTLクローンの解析。Clinical significance of a CD8+CTL clone recognizing mismatched HLA class II. 第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [口演]
- 017 田地浩史、鏡味良豊、山本一仁、大木康弘、井根省二、千原 大、小野田 宏、中村正直、谷田部恭 森島泰雄：Bortezomib が著効した進行期小腸MALT症例。Bortezomib effective case for advanced stage of intestinal MALT 第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [ポスター]
- 018 鏡味良豊、シバスダラム カルナン、加藤春美、大城一都、中川 綾、森島泰雄、瀬戸加大：IL-4存在下で樹立したATL腫瘍細胞株の性状。Establishment of IL-4 dependent ATL cell line. 第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [ポスター]
- 019 Akiyoshi Takami, J.Luis Espinoza, Takakazu Katagiri, Makoto Onizuka, Hiroshi Sao, Hideki Akiyama, Koichi Miyamura, Shinichiro Okamoto, Masami Inoue, Shigeki Ohtake, Takahiro Fukuda, Yasuo Morishima, Yoshihisa Kadera, Shinji Nakao : Significant impact of IL-17A polymorphism in transplant outcomes after matched unrelated BMT. 第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [ポスター]
- 020 大橋一輝、石澤賢一、飛内賢正、谷脇雅史、森島泰雄、岡田昌也、宮脇修一、魚嶋伸彦、直江知樹、泉二登志子、藤澤 信、安藤 潔、薄井紀子、宇都宮 興、永井 正、谷本光音、宮崎泰司、岡本真一郎、芹生 卓、坂巻 壽、大野竜三：ダサニチブ投与患者におけるリンパ球数増加とその臨床的特徴。Clinical features of Dasatinib-induced large granular lymphocytosis. 第71回 日本血液学会学術集会 2009.10.京都 [ポスター]
- 021 田地浩史、近藤英生、鏡味良豊、加藤春美、小野田 浩、千原 大、井根省二、大木康弘、山本一仁、森島泰雄：難治性悪性リンパ腫に対するフルダラビン・シクロホスファミドを用いた骨髄非破壊的移植10例の成績。Blood and Marrow Transplantation after Fludarabine and Cyclophosphamide as Nonmyeloablative Conditioning in 10 Adults with Advanced Lymphoma. 第32回 日本造血細胞移植学会総会 2010.02. 浜松 [ワークショップ]
- 022 小野田 浩、千原 大、井根省二、加藤春美、大木康弘、田地浩史、山本一仁、鏡味良豊、森島泰雄：びまん性大細胞型リンパ腫の自家移植成績～upfront,relapse/refractory移

- 殖でのRituximab併用の影響～. Clinical Outcome of Autologous Transplantation for Upfront, Relapse/Refractory DLBCL Treated Chemotherapy with or without Rituximab. 第32回 日本造血細胞移植学会総会 2010.02. 浜松 [ワークショップ]
- 023 赤塚美樹、鳥飼宏基、柳沢真弓、今橋伸彦、宮村耕一、森島泰雄、小寺良尚、葛島清隆：骨髄移植患者からのHLA-class II を直接認識するCD8+CTLクローンの樹立. Generation of CTL Clone from Patients Receiving HLA Class II Mismatched Transplantation. 第32回 日本造血細胞移植学会総会 2010.02. 浜松 [ポスター]
- 024 渡辺慶介、西脇聡史、稲本賢弘、佐尾 浩、坂巻 壽、黒川峰夫、福田隆浩、小川啓恭、森島泰雄、熱田由子、宮村耕一：成人Ph(-)ALLに対する第一 解期での血縁者間と非血縁者間同種造血幹細胞移植では生存率は同等であるがリスク因子は異なる. 第8回 日本臨床腫瘍学会学術集会 2010.03. 東京 [口演]

薬物療法部

- 001 *Shitara K, Matsuo K, Takahari D, Yokota T, Ura T, Muro K*: Neutropenia as a prognostic factor in metastatic colorectal cancer patients undergoing chemotherapy with first-line FOLFOX. ASCO, 2009, (Orlando, USA), [Poster]
- 002 *Yokota T*: Frequency of KRAS/BRAF mutations as predictive markers for Cetuximab in Japanese colorectal cancer patients. ECC15/34th ESMO Multidisciplinary Congress, 2009, (Berlin), [Poster]
- 003 *Shitara K*: Effect of genetic polymorphisms of thymidylate synthase (TS) and methylenetetrahydrofolate reductase (MTHFR) along with folate intake on clinical outcome of gastric cancer patients treated with fluorouracil-based chemotherapy. The 2009 Gastrointestinal Oncology Conference (ISGIO), 2009, (Philadelphia), [Oral]
- 004 *Muro K*: Is it possible definitive chemoradiotherapy gets to be a standard of care for esophageal cancer in Japan? 2nd Japan-Taiwan Joint Symposium on Medical Oncology, 2009, (Taipei), [Oral]
- 005 *Shitara K, Matsuo K, Yokota T, Takahari D, Shibata T, Ura T, Muro K, Inaba Y, Yamaura H, Satoh Y, Najima M*: Prognostic factors for metastatic colorectal cancer patients undergoing irinotecan-based second-line chemotherapy. 2010 Gastrointestinal Cancers Symposium, 2010, (Orlando), [Poster]
- 006 *Shitara K, Matsuo K, Takahari D, Yokota T, Shibata T, Ura T, Sawaki A, Kawai H, Ito S, Muro K*: Effects of genetic polymorphisms of thymidylate synthase (TS) and methylenetetrahydrofolate reductase (MTHFR) along with folate intake on clinical outcome of patients with gastric cancer treated with fluorouracil-based chemotherapy. 2010 Gastrointestinal Cancers Symposium, 2010, (Orlando), [Poster]
- 007 *Takahari D, Hamaguchi T, Yoshimura K, Ito S, Katai H, Fuse N, Kinoshita T, Hironaka S, Terashima M, Goto M*: Feasibility study of adjuvant therapy with s-1 plus CDDP in gastric cancer. 2010 Gastrointestinal Cancers Symposium, 2010, (Orlando), [Poster]
- 008 *Muro K, Doi T, Boku N, Kato K, Komatsu Y, Yamaguchi K, Hamamoto Y, Sato A, Koizumi W, Mizunuma N*: Final results of bevacizumab (BV) plus capecitabine plus oxaliplatin (XELOX) as first-line therapy in Japanese patients (pts) with metastatic colorectal cancer (MCRC). 2010 Gastrointestinal Cancers Symposium, 2010, (Orlando), [Poster]
- 009 *Ura T, Nagase M, Fujii H, Hironaka S, Hatooka S, Hosoya Y, Yokota T, Shitara K, Takahari D, Muro K, Shinoda M*: Feasibility study of preoperative docetaxel (D), cisplatin (C), and fluorouracil (F) in esophageal cancer. 2010 Gastrointestinal Cancers Symposium, 2010, (Orlando), [Poster]
- 010 *Takahari D*: Updated Results in The Treatment of Metastatic Gastric Cancer. 中日胃癌学会, 2009, (南京), [Oral]
- 011 *Yokota T*: KRAS/BRAF mutation and PTEN/pAkt expression as predictive markers for cetuximab in Japanese colorectal cancer patients. The 15th Aichi International Cancer Symposium, 2010, (Nagoya), [Oral]
- 012 *Shitara K, Yokota T, Takahari D, Ura T, Inaba Y, Yamaura H, Sato Y, Najima M, Kawai H, Tajika M, Sawaki A, Yatabe Y, Utsunomiya S, Muro K*: Phase II Study of Irinotecan plus Cetuximab for Pretreated Metastatic Colorectal Cancer with KRAS wild type. 第8回日本臨床腫瘍学会学術集会, 2010, (東京), [プレナリーセッション]
- 013 室 圭：大腸がん化学療法の最近の話題. 日本消化器病学会東海支部第110回例会 第21回教育講演会, 2009, (津), [講演]
- 014 室 圭：食道癌に対する根治的化学放射線療法後の晩期合併症とその対策. 第63回日本食道学会学術集会, 2009, (横浜), [司会]
- 015 宇良 敬：進行食道癌に対する術前DCF療法の安全性を確認する臨床第2相試験. 第63回 日本食道学会学術集会, 2009, (横浜), [口演]
- 016 宇良 敬：胚細胞腫脳転移症例の検討 第245回日本泌尿器科学会東海地方会, 2009, (名古屋), [口演]
- 017 室 圭：大腸癌治療ガイドラインに則した全身全身化学療法の実践 - 実地臨床での応用と課題 -. 第64回日本消化器外科学会, 2009, (大阪), [ランチョンセミナー]
- 018 室 圭：大腸癌化学療法におけるセツキシマブの位置づけ. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009, (横浜), [シンポジウム]
- 019 室 圭：セツキシマブの皮膚症状対策と地域連携. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009, (横浜), [ワークショップ]
- 020 室 圭：次代の外来化療センターのあり方とは? 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009, (横浜), [口演]
- 021 室 圭：大腸癌口演. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009, (横浜), [座長]
- 022 室 圭：Young Dr's seminar 大腸がん化学療法治療最前線.

- 第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[座長]
- 023 宇良 敬：進行食道癌に対する術前DCF療法の安全性を確認する臨床第2相試験。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜) [口演]
- 024 宇良 敬：ペバシズマブの導入（2007年）後、大腸癌脳転移出現の頻度と時期の動向について。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[口演]
- 025 宇良 敬：50例のセツキシマブ投与例から学ぶ、低Mg血症の推移と対策についての検討。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[優秀演題 口演]
- 026 宇良 敬：胃癌二次治療移行を検討する際にPS2であるとき、念頭におくべきこと。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[口演]
- 027 宇良 敬：補助化学療法歴が術後再発食道癌症例の有効性に及ぼす影響についての検討。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[口演]
- 031 高張大亮：高齢者進行・再発大腸癌に対するTS-1+bevacizumab 併用療法臨床第II相試験（BASIC）。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[口演]
- 029 高張大亮：oxaliplatin休止後を含めたFOLFOX+bevacizumab 療法のTTFとPFSについて。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[口演]
- 030 横田知哉：大腸低分化型腺癌/印環細胞癌はFOLFOX/FOLFIRI療法に抵抗性か？ 第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[口演]
- 031 横田知哉：進行・再発大腸癌におけるCycleave PCR法による<I>KRAS</I>測定系の検討。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[口演]
- 032 横田知哉：わが国の大腸癌患者におけるセツキシマブの効果予測因子としての<I>KRAS</I>/<I>BRAF</I>変異。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[優秀演題 口演]
- 033 設楽紘平：KRAS Wild Typeの大腸癌患者に対するCetuximab+Irinotecan併用両方の第II相試験。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[シンポジウム]
- 034 設楽紘平：全身状態不良例に対する化学療法（特に消化器癌に関して）。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[ワークショップ]
- 035 設楽紘平：FOLFOX(+bevacizumab)後の大腸癌に対するIrinotecan両方の予後予測。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[口演]
- 036 設楽紘平：胃癌化学療法症例における効果予測因子としてのMTHFR,TS遺伝子多型。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[口演]
- 037 柴田剛志：初回治療にてFOLFOX+cetuximab併用療法を施行した大腸癌の2例。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[ポスター]
- 038 宇良 敬：消化器がん治療における分子標的薬。第18回日本病院薬剤師東海ブロック学術大会、2009、(岐阜) [ランチョンセミナー]
- 039 宇良 敬：大腸癌肝転移RCT-この臨床試験をどうする-。第34回リザーバー研究会、2009、(名古屋)、[シンポジウム]
- 040 設楽紘平、高張大亮、横田知哉、柴田剛志、宇良敬、澤木明、河合宏紀、伊藤誠二、室 圭：経口摂取不能胃癌における化学療法の効果。第82回日本胃癌学会総会、2010、(新潟)、[口演]
- 041 高張大亮、濱口哲弥、吉村健一、片井均、伊藤誠二、布施望、木下平、広中秀一、寺島雅典、後藤昌弘、谷川允彦、長井雄志、白尾国昭、笹子三津留：胃癌術後補助化学療法としてのS-1+CDDP併用両方のfeasibility試験。第82回日本胃癌学会総会、2010、(新潟)、[口演]
- 042 室 圭 他：胃癌治療ガイドライン 第82回日本胃癌学会総会、2010、(新潟)、[コンセンサスミーティング]
- 043 設楽紘平、松尾恵太郎、波戸岡俊三、宇良敬、高張大亮、横田知哉、柴田剛志、安部哲也、河合宏紀、田近正洋、篠田雅幸、室 圭：食道扁平上皮癌の治療効果と予後に関する喫煙歴の影響の検討。第8回日本臨床腫瘍学会学術集会、2010、(東京)、[口演]
- 044 設楽紘平、松尾恵太郎、横田知哉、高張大亮、柴田剛志、宇良敬、澤木明、河合宏紀、伊藤誠二、田中英夫、室 圭：胃癌化学療法症例における推定葉酸摂取量とMTHFR,TS遺伝子多型の検討。第8回日本臨床腫瘍学会学術集会、2010、(東京)、[口演]
- 045 宇良敬、長瀬道隆、藤井博文、広中秀一、室 圭、横田知哉、設楽紘平、高張大亮：進行食道癌に対する術前Docetaxel, Cisplatin, 5-FU併用療法の安全性を確認する臨床第2相試験。第8回日本臨床腫瘍学会学術集会、2010、(東京)、[口演]
- 046 横田知哉、柴田典子、酒井優、宇良敬、高張大亮、設楽紘平、柴田剛志、室 圭、谷田部恭：わが国の大腸癌患者におけるセツキシマブの効果予測因子としてのKRAS/BRAF変異PTEN/p-AKT発現。第8回日本臨床腫瘍学会学術集会、2010、(東京)、[口演]
- 047 濱口哲弥、高張大亮、吉村健一、宇良敬、室圭、中島貴子、嶋田安博、布施望、大津敦、広中秀一、朴成和、後藤昌弘、瀧内比呂也、白尾国昭、笹子三津留：胃癌術後補助化学療法としてのS-1+CDDP併用療法のfeasibility試験。第8回日本臨床腫瘍学会学術集会、2010、(東京)、[口演]
- 048 室 圭：下部消化管腫瘍(2)。第8回日本臨床腫瘍学会学術集会、2010、(東京)、[司会]
- 049 室 圭：消化器癌における化学療法と症状管理。第8回日本臨床腫瘍学会学術集会、2010、(東京)、[ランチョンセミナー司会]
- 050 室 圭：食道癌。第8回日本臨床腫瘍学会学術集会、2010、(東京)、[教育セミナー講演]

臨床検査部・遺伝子病理診断部

- 001 所 嘉朗：悪性リンパ腫の診断・治療戦略のためのアプローチ 検体の取り扱いおよび処理方法について。第48回中部医学検査学会、2009、(三島)、講演
- 002 所 嘉朗：術中迅速病理診断における迅速組織標本作製技術と応用 肝・脾・胆道系を含む消化器。日本臨床衛生検査技師会検査研究部門研修会、2009、(富山)、講演

- 003 玉腰利長、尾関順子、奥村寿崇、宮下拓也、鈴木 緑、小林雅子、所 嘉朗、佐々木英一、細田和貴、北村淳子、越川 卓、谷田部恭：ベセスダシステム2001の評価と検討。第29回日本臨床細胞学会東海連合会総会ならびに学術集会、2010、(岐阜)、口演
- 004 尾関順子、玉腰利長、奥村寿崇、宮下拓也、鈴木 緑、小林雅子、所 嘉朗、佐々木英一、細田和貴、北村淳子、越川 卓、谷田部恭：乳腺穿刺吸引細胞診における偽陰性症例についての検討。第29回日本臨床細胞学会東海連合会総会ならびに学術集会、2010、(岐阜)、口演
- 005 所 嘉朗：悪性リンパ腫をめぐる検査医学 悪性リンパ腫の細胞診。第49回日本臨床検査医学会 東海・北陸支部総会、2010、(名古屋)、講演
- 006 所 嘉朗：各県病理検査研究班活動の紹介と今後の展望。平成21年度静岡県臨床衛生検査技師会病理検査・細胞検査合同研修会、2010、(浜松)、講演
- 007 所 嘉朗：母子で知っておきたい女性のがん 子宮頸部の病変。朝日 健康の知恵袋フォーラム、2010、(名古屋)、講演
- 008 岡田恭孝：シンポジウム：悪性リンパ腫をめぐる検査医学、「入門フローサイトメトリー法、表面抗原解析の基礎と実際」、第49回日本臨床検査医学会 東海北陸支部総会、2010、(名古屋)、[口演]
- 009 小井手佳代子、柴田典子、水谷和子、山田智恵子、桑原正喜、小池考一、谷田部恭：「血清 p 5 3 抗体の有用性の検討」、第48回中部医学検査学会、2009、(三島)、口演
- 010 羽佐田香代、小井手佳代子、小林雅子、瀧美ふき子、遠山由美子、水谷和子、桑原正喜、谷田部恭：LDLコレステロール測定試薬の比較検討、第10回愛知県医学検査学会、2009、(津島)、[口演]
- 011 谷田部恭：Case Reviewによる肺腺癌の遺伝子異常と形態像。日本病理学会総会、2009、(京都) [ワークショップ]
- 012 谷田部恭：分子生物学の細胞診への応用。第58回細胞検査士ワークショップ、2009、(名古屋) [ワークショップ]
- 013 Yatabe Y：. Morphological and Biological Characteristics of Lung Adenocarcinomas Harboring EGFR, KRAS, BRAF, HER2, and EML4-ALK Gene Alterations. The 49th Annual Meeting of the Japanese Respiratory Society, (東京) [シンポジウム]
- 014 谷田部恭：肺腺癌におけるEGFR遺伝子変異、KRAS変異、ALK-EML4転座。第50回日本臨床細胞学会総会、2009、(東京) [シンポジウム]
- 015 Yatabe Y：MEET THE EXPERT, An Emerging Concept of Lung Adenocarcinoma: What can we learn from EGFR, KRAS, BRAF, HER2 and EML4-ALK gene alterations? The 13th World Conference on Lung Cancer. 2009, (San Francisco, USA) [シンポジウム]
- 016 Yatabe Y：TTF-1 Positive Metastatic Cervical Cancer. The Third Korean-Japanese Joint Slide Conference of Lung Pathology. 2009, (Nagoya) [ワークショップ]
- 017 谷田部恭：遺伝子変異と関連した肺腺癌の前癌病変、異型腺腫様過形成の生物学的相違。第55回日本病理学会秋季特別総会、2009、(東京) [シンポジウム]
- 018 谷田部恭：生検で腺癌と扁平上皮癌が鑑別できない本当のわけ。第50回日本肺癌総会、2009、(東京) [教育講演]
- 019 谷田部恭：篠井・河合賞受賞講演 Genetic changes at steps of ADC progression. 第50回日本肺癌総会、2009、(東京) [ワークショップ]
- 020 谷田部恭：がんの病理診断。がん専門医臨床研修モデル事業がん専門医・研修医講演会、2009、(和歌山) [ワークショップ]
- 021 杉浦英志、佐々木英一、山田健志、神山圭史、谷田部恭：左側胸部軟部腫瘍の1例。第67回東海骨軟部腫瘍研究会、2009年、名古屋、[口演]
- 022 細田和貴、奥村寿崇、玉腰利長、尾関順子、所嘉朗、立松明子、北村淳子、佐々木英一、越川卓、谷田部恭：子宮頸部、内膜細胞診で認められ、診断の困難であった腹膜中皮腫の一例。日本臨床細胞学会東海連合会第133回例会、2009、名古屋
- 023 細田和貴、山雄健次、越川卓、谷田部恭：脾粘液性嚢胞腫瘍の病理と細胞診。日本臨床細胞学会東海連合会第134回例会、2009、名古屋

頭頸部外科

- 001 長谷川泰久、花井信広、小澤泰次郎、寺田聡広、丸尾貴志、三上慎司、川北大介、後藤満雄：中下咽頭癌における5-FUとシスプラチン併用療法の効果予測バイオマーカーの検討。第33回日本頭頸部癌学会、2009、(札幌)、[口演]
- 002 花井信広、長谷川泰久、寺田聡広、小澤泰次郎、平川仁、川北大介、丸尾貴志、三上慎司：中・下咽頭癌における計画的頸部郭清術の検討。第33回日本頭頸部癌学会、2009、(札幌)、[口演]
- 003 平川仁、寺田聡広、花井信広、小澤泰次郎、川北大介、丸尾貴志、三上慎司、神山圭史、兵藤伊久夫、古平毅、長谷川泰久：口腔癌における術後合併症の検討。第33回日本頭頸部癌学会、2009、(札幌)、[口演]
- 004 小澤泰次郎、長谷川泰久、寺田聡広、花井信広、平川仁、川北大介、丸尾貴志、三上慎司：肝転移に手発見された甲状腺オカルト濾胞癌の1例。第33回日本頭頸部癌学会、2009、(札幌)、[ポスター]
- 005 吉野邦俊、林隆一、川端一嘉、長谷川泰久、藤本保志、永原國彦、松浦一登、朝陰孝宏、門田伸也：下咽頭癌の喉頭温存手術による喉頭切除範囲と術後機能。第33回日本頭頸部癌学会、2009、(札幌)、[口演]
- 006 欄真一郎、伊地知圭、中西速夫、松井誠、小川徹也、長谷川泰久、牟田上信悟：頭頸部扁平上皮癌におけるGemcitabineの感受性とEGFRの発現量の検討。第33回日本頭頸部癌学会、2009、(札幌)、[口演]
- 007 伊地知圭、足立誠、欄真一郎、長谷川泰久、小川徹也、村上信五：頭頸部癌細胞株による5-FU耐性機序の検討。第33回日本頭頸部癌学会、2009、(札幌)、[口演]
- 008 長谷川泰久：甲状腺癌の診断と進行癌の治療。大府市・東浦

- 町学術講演会, 2009, (大府), [講演]
- 009 長谷川泰久: Set back法による舌根再建術. 第46回頭頸部癌治療カンファレンス, 2009, (東京), [講演]
- 010 花井信広, 兵藤伊久夫, 齋藤清, 小澤泰次郎, 平川仁, 丸尾貴志, 川北大介, 神山圭史, 立花栄二, 長谷川泰久: 重粒子線治療後再発に対する頭蓋底外科手術を行った1例. 第21回日本頭蓋底外科学会, 2009, (博多), [口演]
- 011 長谷川泰久: 下咽頭癌の手術—音声機能再建術—. 第8回兵庫頭頸部腫瘍研究会, 2009, (神戸), [講演]
- 012 長谷川泰久: 喉頭・下咽頭がんの機能温存治療. 愛知県健耳鼻咽喉科医会東西三河地区研修会, 2009, (岡崎), [口演]
- 013 川北大介, 花井信広, 寺田聡広, 小澤泰次郎, 平川仁, 丸尾貴志, 三上慎司, 鈴木淳志, 宮崎拓也, 長谷川泰久: オトガイ下皮弁の適応の検討. 第138回東海地方部会連合講演会, 2009, (名古屋), [口演]
- 014 宮崎拓也, 小澤泰次郎, 寺田聡広, 花井信広, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 鈴木淳志, 長谷川泰久: 頸部食道癌の検討. 第138回東海地方部会連合講演会, 2009, (名古屋), [口演]
- 015 足立誠, 伊地知圭, 長谷川泰久, 小川徹也, 太田伸介, 光藤健司, 藤内祝: Dysregulation of MLH1 in head and neck Squamous cell carcinoma cells correlates to cisplatin resistance. (MLH1は頭頸部癌におけるシスプラチン感受性因子となりうる). 第68回日本癌学会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 016 伊地知圭, 足立誠, 欄真一郎, 長谷川泰久, 小川徹也, 光藤健司, 藤内祝: Analsis of the mechanism for acquired 5-Fu resistance in head and neck carcinoma cells.(頭頸部癌細胞株による5-FU獲得耐性機序の検討). 第68回日本癌学会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 017 村田彰吾, 足立誠, 伊地知圭, 長谷川泰久, 小川徹也, 古瀬智理, 鳥越総一郎, 太田信介, 光藤健司, 藤内祝: 抗癌剤耐性頭頸部癌細胞株におけるシクロオキゲナーゼ-2阻害剤エトドラクの抗癌剤感受性増強作用の検討. 第68回日本癌学会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 018 花井信広: 甲状腺進行癌の喉頭切除と再建. 第42回日本甲状腺外科学会学術集会, 2009, (名古屋), [シンポジウム]
- 019 花井信広, 長谷川泰久: 甲状腺外科に必要な手術手技. a.頸部リンパ節, ルビエールリンパ節郭清 b.上皮小体温存・移植のテクニック. 第42回日本甲状腺外科学会学術集会, 2009, (名古屋), [ビデオ口演]
- 020 丸尾貴志, 花井信広, 寺田聡広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 三上慎司, 鈴木淳志, 宮崎拓也, 長谷川泰久: 下咽頭がんに対する導入化学療法の検討. 第8回東海頭頸部癌化学療法研究会, (2009), (名古屋), [口演]
- 021 鈴木淳志, 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 宮崎拓也, 長谷川泰久: CDDPを併用した術後放射線化学療法の検討. 第8回東海頭頸部癌化学療法研究会, 2009, (名古屋), [口演]
- 022 花井信広, 寺田聡広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 長谷川泰久: 頭頸部がんにおけるS-1の感受性試験. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 023 川北大介, 長谷川泰久, 寺田聡広, 兵藤伊久夫, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川仁, 丸尾貴志, 三上慎司, 神山圭史, 宮崎拓也, 鈴木淳志: 頭頸部粘膜悪性黒色腫の臨床的検討. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 024 小澤泰次郎: 下咽頭喉頭部分切除後の喉頭機能と合併症について. 第2回喉頭機能温存治療研究会, 2009, (東京), [口演]
- 025 長谷川泰久, 甲能直幸: Japan Sentinel Node in head and neck cancer Study Group(JSNSG): 頭頸部がんセンチネルリンパ節生検術についての多施設における実態調査. 第11回Sentinel Node Navigation Surgery研究会学術集会, 2009, (東京), [口演]
- 026 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 宮崎拓也, 鈴木淳志, 長谷川泰久: 口腔癌センチネルリンパ節生検後の経過観察. 第11回Sentinel Node Navigation Surgery研究会学術集会2009, (東京), [口演]
- 027 長谷川泰久: 頸部郭清術の分類と名称に関する案—平易かつ互換性のある分類を目指して—. 頸部郭清術講習会, 2009, (東京), [口演]
- 028 三上慎司, 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 鈴木敦志, 宮崎拓也, 長谷川泰久: Harmonic FOCUSを使用した頭頸部外科手術. 第27回東海頭頸部腫瘍研究会, 2010, (名古屋), [口演]
- 029 川北大介, 花井信広, 寺田聡広, 小澤泰次郎, 平川仁, 丸尾貴志, 三上慎司, 鈴木淳志, 宮崎拓也, 長谷川泰久: オトガイ下皮弁の適応の検討. 第20回日本頭頸部外科学会総会, 2010, (東京), [口演]
- 030 宮崎拓也, 小澤泰次郎, 寺田聡広, 花井信広, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 鈴木淳志, 長谷川泰久: 切除可能頸部食道癌に対する治療成績とその検討. 第20回日本頭頸部外科学会総会, 2010, (東京), [口演]
- 031 丸尾貴志, 鈴木敦志, 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 三上慎司, 宮崎拓也, 長谷川泰久: CHEP後の嚥下検討. 第33回日本嚥下医学会, 2010, (久留米), [口演]

形成外科部

- 001 兵藤伊久夫, 栗田智之, 櫻井浩之, 中川雅裕, 橋川和信, 木俣敬裕: 頭頸部癌患者術後の機能評価. 第52回日本形成外科学会総会, 2009, (横浜), [シンポ]
- 002 兵藤伊久夫, 神山圭史, 長谷川泰久, 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 鳥居修平: 頸部郭清既施行例における移植床血管の検討. 第52回日本形成外科学会総会, 2009, (横浜), [口演]
- 003 神山圭史, 兵藤伊久夫, 長谷川泰久, 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 鳥居修平: 筋体温存腹直筋皮弁を用いた頭頸部再建. 第52回日本形成外科学会総会, 2009, (横浜), [口演]
- 004 神山圭史, 兵藤伊久夫, 杉浦英志, 山田健志: 左肩甲骨骨肉腫の1例. 第21回骨軟部腫瘍治療法検討会, 2009, (名古屋), [口演]
- 005 兵藤伊久夫, 神山圭史, 長谷川泰久, 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 鳥居修平: 上顎部分切除術における遊離皮弁

- による再建の検討, 第33回日本頭頸部癌学会, 2009, (札幌), [口演]
- 006 神山圭史、兵藤伊久夫、長谷川泰久、寺田聡広、花井信広、小澤泰次郎、鳥居修平：当院における咽喉食摘後遊離空腸再建のクリニカルパス導入, 第33回日本頭頸部癌学会, 2009, (札幌), [口演]
- 007 *Ikuo HYODO, Keishi KOYAMA, Yasuhisa HASEGAWA, Shuhei TORII* : Microvascular anastomoses after previous neck dissection, 5th. Congress of the World Society for Reconstructive Microsurgery, 2009, (沖縄), [口演]
- 008 *Keishi Kohyama, Hyodo Ikuo, Yasuhisa Hasegawa, Akihiro Terada, Nobuhiro Hanai, Taijro Ozawa, Shuhei Torii* : Reconstruction of head and neck with muscle-sparing rectus abdominis myocutaneous flaps, 5th. Congress of the World Society for Reconstructive Microsurgery, 2009, (沖縄), [口演]
- 009 神山圭史、兵藤伊久夫、杉浦英志、山田健志、亀井謙、鳥居修平：前腕部軟部腫瘍切除後の広範囲軟部組織欠損に対する遊離前外側大腿皮弁による再建, 第42回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 010 神山圭史、兵藤伊久夫、杉浦英志、山田健志、亀井謙、鳥居修平：前腕部広範囲切除後の軟部組織欠損に対する遊離前外側大腿皮弁による再建, 第44回日本形成外科学会中部支部学術集会, 2009, (名古屋), [口演]
- 011 兵藤伊久夫、神山圭史、杉浦英志、山田健志、高橋満、亀井謙：加温処理骨と遊離腓骨皮弁併用再建の長期経過例, 第72回東海マイクロサージャリー研究会, 2009, (名古屋), [口演]
- 012 神山圭史、兵藤伊久夫、杉浦英志、山田健志：後骨間神経麻痺を生じた肘部軟部腫瘍の1例, 第217回整形外科集談会東海地方会, 2009, (名古屋), [口演]
- 013 *Keishi Kohyama, Osamu Taguchi, Hideshi Sugiura, Kenji Yamada, Yuzuru Kamei* : The tumor suppressive effect of anti-interleukin2 monoclonal antibody in a murine osteosarcoma model, 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 014 兵藤伊久夫、神山圭史、長谷川泰久、寺田聡広、花井信広、小澤泰次郎、亀井謙：当院における頭頸部再建後の再開創例, 第36回日本マイクロサージャリー学会学術集会, 2009, (徳島), [口演]
- 015 神山圭史、兵藤伊久夫、杉浦英志、山田健志、亀井謙：加温処理骨と遊離腓骨皮弁併用による再建の長期経過観察, 第36回日本マイクロサージャリー学会学術集会, 2009, (徳島), [口演]
- 016 兵藤伊久夫、神山圭史、亀井謙：当院における下顎再建の検討, 第54回日本形成外科学会中部支部 東海地方会, 2009, (名古屋), [口演]
- 017 神山圭史、兵藤伊久夫、杉浦英志、山田健志、中島浩敦：有茎前外側大腿皮弁により会陰・下腹部再建を行った類上皮肉腫の1例, 第218回日本整形外科学会集談会東海地方会, 2009, (名古屋), [口演]
- 018 兵藤伊久夫、神山圭史、亀井謙：腹直筋皮弁による頭頸部再建, 第15回形成外科手術手技研究会, 2010, (長崎), [シンポ]
- 019 神山圭史、兵藤伊久夫、林裕倫、岩田広治、亀井謙：遊離腹直筋皮弁におけるMDCTの有用性, 第55回日本形成外科学会中部支部 東海地方会, 2010, (岐阜), [口演]
- 020 神山圭史、山田健志、杉浦英志：腫瘍用人工関節感染に対してsalvage手術を施行した1例, 第219回日本整形外科学会集談会東海地方会, 2010, (名古屋), [口演]

胸部外科部

- 001 *Mitsudomi T* : Pharmacogenomic approaches in Japan. 4th IASLC/ASCO/ESMO International Conference on Targeted Therapies in Lung Cancer, 2009, (Saint Paul de Vence, France), [Symposium]
- 002 *Mitsudomi T* : Translational research on EGFR in lung cancer. 11th Meeting of Chinese Lung Cancer, 2009, (天津), [Symposium]
- 003 *Mitsudomi T* : Discussant at the session B9: Markers and sensitivity and resistance to EGFR agents. 13th World Conference of Lung Cancer, 2009, (San Francisco), [oral session]
- 004 *Mitsudomi T, Gazdar A, Yatabe T* : EGFR and KRAS mutations in lung adenocarcinoma: Two contrasting and mutually exclusive mechanisms for pathogenesis. 13th World Conference of Lung Cancer, 2009, (San Francisco), [Minisymposium]
- 005 *Mitsudomi T* : Discussant for PRS.1 presented by Dr. Soh: Mutations and copy number gains of KRAS gene correlate with biological activity of ras and clinical outcome in lung adenocarcinoma. 13th World Conference of Lung Cancer, 2009, (San Francisco), [Presidential symposium]
- 006 *Mitsudomi T, Tada H, Katakami N, Nishimura Y, Kurata T, Tanaka N, Semba H, Matsui K, Nakagawa K* : Phase III study of concurrent chemotherapy and radiotherapy followed by surgery vs chemotherapy followed by surgery for stage IIIA (N2) non-small cell lung cancer: Results of prematurely terminated trial, WJTOG9903. 13th World Conference of Lung Cancer, 2009, (San Francisco), [Poster Discussion]
- 007 *Mitsudomi T* : Novel therapeutic targets in lung cancer. Third Asian Pacific Conference Perspectives in Lung Cancer, 2009, (Bangkok), [Symposium]
- 008 *Mitsudomi T* : EGFR mutation testing...its practice and clinical significance. Abbot meeting on Understanding Biomarkers for personalized cancer therapy, 2009, (Seoul), [Symposium]
- 009 *Mitsudomi T* : Personalized therapy of lung cancer...EGFR mutations and beyond. The 19th Hiroshima Cancer Seminar - The 3rd three universities' consortium International Symposium, 2009, (Hiroshima), [Symposium]
- 010 *Mitsudomi T* : Biology of Lung Adenocarcinoma. 14th Congress of the APSR and 3d Joint Congress of the APSR/ACCP, 2009, (Seoul), [Symposium]
- 011 *Mitsudomi T* : individualized treatment of lung cancer. 14th

- Congress of the APSR and 3d Joint Congress of the APSR/ACCP, 2009, (Seoul), [Symposium]
- 012 **Mitsudomi T**: Asian evolution in advanced NSCLC treatment. Update in lung and liver cancer 2009, 2009, (Chiangmai, Thailand), [Symposium]
- 013 **Mitsudomi T**: Predictive and prognostic markers in the treatment of NSCLC. The 8th Asia Pacific Oncology Summit, 2010, (Tokyo), [Symposium]
- 014 **Fukui T, Katayama T, Ito S, Mitsudomi T**: Clinicopathological Features of Small-sized Non-small Cell Lung Cancer with Mediastinal Lymph Node Metastasis. World Conference on Lung Cancer 2009 (San Francisco), [Poster]
- 015 **Katayama T, Junichi Shimizu J, Fukui T, Ito S, Hatooka S, Yatabe Y, Hida T, Mitsudomi T**: Effect of erlotinib for gefitinib-resistant metastasis to the central nervous system in non-small cell lung cancer patient. 13th World Conference on Lung Cancer, 2009, (San Francisco), [poster]
- 016 **Suda K, Onozato R, Kosaka T, Yatabe Y, Mitsudomi T**: Analyses of clinical or biological factors for predicting benefit of gefitinib in patients with recurrent non-small cell lung cancer with EGFR mutation after pulmonary resection. 13th World Conference on Lung Cancer, 2009, (San Francisco), [poster]
- 017 **光富徹哉**: EGFR遺伝子変異検査の意義と解釈. 伊勢・松阪分子標的治療研究会, 2009, (伊勢), [特別講演]
- 018 **光富徹哉**: 手術 vs 非手術 - 最新のエビデンスから-. 第17回 日本外科学会生涯教育セミナー, 2009, (名古屋), [特別講演]
- 019 **光富徹哉**: 新しい肺癌病期分類の妥当性の検討. 第26回 日本呼吸器外科学会総会, 2009, (北九州), [シンポジウム]
- 020 **光富徹哉**: 分子標的治療の現状と課題 肺がん. 第19回 がん臨床研究フォーラム, 2009, (東京), [ワークショップ]
- 021 **光富徹哉**: EGFR-TKI治療の最適化を目指して. Tarceva Excellence Meeting in Yamagata, 2009, (山形), [特別講演]
- 022 **光富徹哉**: 肺癌 phenotype と genotype -Translational Research の現状-. 第49回 日本呼吸器学会学術講演会, 2009, (東京), [教育講演]
- 023 **光富徹哉**: EGFR遺伝子変異とEGFRチロシンキナーゼ阻害剤. 第7回抗悪性腫瘍薬開発フォーラム, 2009, (東京), [特別講演]
- 024 **光富徹哉**: 転移性脳腫瘍としての肺癌. 第43回群馬脳腫瘍研究会, 2009, (前橋), [特別講演]
- 025 **光富徹哉**: 分子標的治療薬による癌治療の現状と将来 - 肺癌を中心に-. 第40回栃木県癌治療懇話会, 2009, (宇都宮), [特別講演]
- 026 **光富徹哉**: EGFR遺伝子変異最近の話題. 多摩Lung Cancer Workshop, 2009, (武蔵野市), [特別講演]
- 027 **光富徹哉**: 肺癌の分子標的治療 最近のエビデンスから. 第23回京滋肺癌研究会, 2009, (京都), [特別講演]
- 028 **光富徹哉**: EGFR-TKI治療の最適化をめざして. 帝京がんセミナー 第6回化学療法室セミナー, 2009, (東京), [特別講演]
- 029 **光富徹哉**: 肺腺がんのシグナル依存と分子標的治療. 第82回 日本生化学会大会, 2009, (神戸), [シンポジウム]
- 030 **光富徹哉**: EGFR-TKI治療の最適化をめざして. Tarceva Excellence Meeting in Kitakyushu, 2009, (小倉), [特別講演]
- 031 **光富徹哉**: 21世紀の肺がん治療 あなたの大切な人が肺がんといわれたら. 済生会福岡総合病院創立90周年記念市民公開講座, 2009, (福岡), [特別講演]
- 032 **光富徹哉**: 新TNM分類と日本肺癌学会取扱規約. 第50回日本肺癌学会総会, 2009, (東京), [シンポジウム]
- 033 **光富徹哉, 谷田部恭, 萩原弘一, 弦間昭彦, 西尾和人, 秋田弘俊, 中川和彦**, 日本肺癌学会EGFR解説作成委員: 肺癌患者におけるEGFR遺伝子変異検査の解説. 第50回日本肺癌学会総会, 2009, (東京), [教育講演]
- 034 **光富徹哉, 谷田部恭**: 愛知県がんセンターでの診断・治療の経験. 肺癌学会サテライトシンポジウム ALK肺がんの診断と治療, 2009, (東京), [シンポジウム]
- 035 **光富徹哉**: 肺癌のgenotypeに基づく分子標的治療. 第12回金沢呼吸器疾患講演会, 2009, (金沢), [特別講演]
- 036 **光富徹哉**: EGFRのガイドライン. 日本がん分子標的治療学会 第6回トランスレーショナルリサーチワークショップ 「がん分子標的治療予測のためのバイオマーカー開発」, 2010, (東京), [シンポジウム]
- 037 **光富徹哉**: EGFRチロシンキナーゼ阻害剤による肺癌の個別化治療. 第24回札幌冬季がんセミナー いまがんを考える - 診断学の進歩によるがん治療の新展開 -, 2010, (札幌), [シンポジウム]
- 038 **光富徹哉**: EGFR-TKI治療の最適化を目指して. 第5回腫瘍分子標的治療セミナー, 2010, (徳島), [特別講演]
- 039 **光富徹哉**: 非小細胞肺癌におけるEGFR遺伝子変異と分子標的治療. 第23回関越DIP研究会, 2010, (東京), [特別講演]
- 040 **光富徹哉**: 非小細胞肺癌におけるEGFR遺伝子変異と分子標的治療. 第28回熊本肺がん研究会学術講演会, 2010, (熊本), [特別講演]
- 041 **光富徹哉**: Oncogene addiction と肺がん治療. Chugai Lung Cancer Symposium in Osaka 2010, 2010, (大阪), [特別講演]
- 042 **波戸岡俊三, 安部哲也, 齋藤卓也, 片山達也, 小林 零, 福本紘一, 福井高幸, 伊藤志門, 光富徹哉, 篠田雅幸**: 食道癌周術期管理のUp to dateと術後合併症第63回日本食道学会総会, 2009, (横浜), [一般口演]
- 043 **波戸岡俊三, 安部哲也, 齋藤卓也, 福井高幸, 伊藤志門, 松尾恵太郎, 光富徹哉, 篠田雅幸**: cStage II・III(non-T4)食道癌における傾向スコア (Propensity score) を用いた解析第64回日本消化器外科学会総会, 2009, (大阪), [一般口演]
- 044 **波戸岡俊三, 安部哲也, 齋藤卓也, 丹羽由紀子, 片山達也, 福本紘一, 厚田幸子, 福井高幸, 伊藤志門, 光富徹哉, 篠田雅幸**: 私の食道癌手術手技?こだわりのポイント-第71回日本臨床外科学会総会, 2009, (京都), [一般口演]
- 045 **安部哲也, 深谷昌秀, 小田高司, 西尾秀樹, 江畑智希, 横山幸浩, 伊神 剛, 菅原 元, 上原圭介, 柳野正人**: 食道切除後縦隔経路胃管再建時における経腸栄養チューブ挿入方法の工夫. 第109回日本外科学会学術総会, 2009, (福岡), [口演]
- 046 **安部哲也, 波戸岡俊三, 齋藤卓也, 丹羽由紀子, 福井高幸,**

- 伊藤志門、深谷昌秀、光富徹哉、篠田雅幸: Barrett食道腺癌治療例の臨床病理学的検討. 第63回日本食道学会学術総会, 2009,(東京),[ポスター]
- 047 安部哲也、波戸岡俊三、齊藤卓也、丹羽由紀子、福井高幸、伊藤志門、光富徹哉、篠田雅幸: 治療切除可能食道癌における化学放射線療法後CR予測因子に対する臨床病理学的検討. 第64回日本消化器外科学会学術集会, 2009,(大阪), [ワークショップ]
- 048 安部哲也、波戸岡俊三、齊藤卓也、丹羽由紀子、福井高幸、伊藤志門、深谷昌秀、光富徹哉、篠田雅幸: 食道切除胃管再建時における経腸栄養チューブ挿入方法の工夫. 第71回日本臨床外科学会学術集会, 2009,(京都), [ビデオフォーラム]
- 049 伊藤志門、波戸岡俊三、福井高幸、片山達也、齋藤卓也、小林零、福本絃一、光富徹哉: pN2症例の検討. 第109回日本外科学会学術総会, 2009,(福岡), [示説]
- 050 伊藤志門、小川 紫都、厚田 幸子、小野里良一、丹羽由紀子、福本 絃一、齊藤 卓也、片山 達也、福井 高幸、安部 哲也、波戸岡俊三、樋田 豊明、光富 徹哉: 限局型小細胞肺癌に対する治療戦略 ~外科治療の役割~第50回日本肺癌学会総会, 2009,(東京), [ワークショップ]
- 051 伊藤志門、光富徹哉、篠田雅幸: 肺がん領域における地域連携パス. 第10回日本クリニカルパス学会学術集会, 2009,(岐阜), [パネルディスカッション]
- 052 福井高幸、福本絃一、小林零、齊藤卓也、片山達也、波戸岡俊三、光富徹哉: 縦隔リンパ節転移陽性で長期生存を得た非小細胞肺癌切除例の検討. 第25回日本呼吸器外科学会, 2009,(北九州), [示説]
- 053 福井高幸、厚田幸子、丹羽由紀子、小野里良一、福本絃一、齊藤卓也、片山達也、伊藤志門、安部哲也、波戸岡俊三、光富徹哉: 非小細胞肺癌の術前リンパ節転移診断に有用な因子. 第62回日本胸部外科学会総会, 2009,(横浜), [示説]
- 054 福井高幸、厚田幸子、丹羽由紀子、小野里良一、福本絃一、齊藤卓也、片山達也、伊藤志門、安部哲也、波戸岡俊三、光富徹哉: 腺癌と扁平上皮癌の予後および臨床病理学的相違. 第50回日本肺癌学会総会, 2009,(東京), [示説]
- 055 片山 達也、須田健一、福本絃一、小野里良一、小林零、齊藤卓也、福井 高幸、伊藤 志門、波戸岡俊三、谷田部恭、光富徹哉: 非小細胞肺癌術後再発症例の無再発生存期間と再発後生存期間に影響を及ぼす因子. 第25回日本呼吸器外科学会総会, 2009,(北九州), [口演]
- 056 片山達也、村上功、富沢健二、須田健一、小野里良一、福井高幸、伊藤志門、安部哲也、波戸岡俊三、谷田部恭、光富徹哉: EGFR-TKI獲得耐性症例の剖検検体における遺伝子異常のheterogeneity. 第50回日本肺癌学会総会, 2009, [口演]
- 057 齊藤卓也、波戸岡俊三、安部哲也、福本絃一、小林 零、片山達也、福井高幸、伊藤志門、光富徹哉、篠田雅幸: 食道がん周術期におけるGFO療法と術後CRP値の検討 (GFO療法は術後CRP値を下げるか?). 第109回日本外科学会学術集会, 2009,(福岡), [口演]
- 058 齊藤卓也、波戸岡俊三、安部哲也、福井高幸、伊藤志門、光富徹哉、篠田雅幸: 臨床プロセスチャートを併用した食道癌周術期クリニカルパス. 第52回関西胸部外科学会学術集会, 2009,(岡山), [口演]
- 059 齊藤卓也、安部哲也、伊藤志門、波戸岡俊三、丹羽由紀子、福本絃一、福井高幸、光富徹哉、篠田雅幸: 当院における胸部食道癌手術症例におけるDPCの現状と周術期クリニカルパスの導入2009,(東京), [ワークショップ]
- 060 齊藤卓也、波戸岡俊三、安部哲也、丹羽由紀子、福本絃一、片山達也、福井高幸、伊藤志門、光富徹哉、篠田雅幸: 終末期胸部食道がん患者の生命予後推定. 第64回日本消化器外科学会学術集会, 2009,(大阪), [口演]
- 061 齊藤卓也、波戸岡俊三、安部哲也、丹羽由紀子、福本絃一、片山達也、福井高幸、伊藤志門、光富徹哉、篠田雅幸: 食道がん周術期において、GFO (Glutamine Fiber Oligosaccharide) 療法は手術侵襲を軽減するか?. 第71回日本臨床外科学会学術集会, 2009,(京都), [口演]
- 062 齊藤卓也、波戸岡俊三、安部哲也、丹羽由紀子、福本絃一、片山達也、福井高幸、伊藤志門、光富徹哉、篠田雅幸: 食道癌術後縫合不全で難渋した1例. 第2回食道困難症例検討会, 2009,(横浜), [口演]
- 063 齊藤卓也、安部哲也、波戸岡俊三、丹羽由紀子、福本絃一、片山達也、福井高幸、伊藤志門、光富徹哉、篠田雅幸: 臨床プロセスチャートを併用した食道癌周術期クリニカルパス. 第111回日本消化器病学会東海支部例会, 2009,(名古屋), [口演]
- 064 福本絃一、伊藤志門、厚田幸子、丹羽由紀子、小野里良一、齊藤卓也、片山達也、福井高幸、安部哲也、波戸岡俊三、光富徹哉: 術前Hb値は予後因子となりうるか. 第26回呼吸器外科学会総会, 2009 (北九州), [示説]
- 065 福本絃一、波戸岡俊三、伊藤志門、厚田幸子、丹羽由紀子、小野里良一、齊藤卓也、片山達也、福井高幸、安部哲也、光富徹哉: 間質性肺炎合併肺癌手術症例および術後急性増悪症例の検討. 第50回日本肺癌学会総会,(東京), [示説]
- 066 福本絃一、伊藤志門、厚田幸子、丹羽由紀子、小野里良一、齊藤卓也、片山達也、福井高幸、安部哲也、波戸岡俊三、光富徹哉: 開胸時に臍胸を併発していた原発性肺癌の手術例. 第96回中部肺癌学会, (名古屋), [口演]
- 067 厚田幸子、伊藤志門、小野里良一、丹羽由紀子、福本絃一、齊藤卓也、片山達也、福井高幸、安部哲也、波戸岡俊三、光富徹哉: 気管支形成術の検討. 第22回中部肺癌手術研究会, 2009,(名古屋), [口演]
- 068 厚田幸子、伊藤志門、小野里良一、丹羽由紀子、福本絃一、齊藤卓也、片山達也、福井高幸、安部哲也、波戸岡俊三、光富徹哉: 原発不明肺癌にゲフィチニブが著効した1例. 第95回中部肺癌学会, 2009,(四日市), [口演]
- 069 厚田幸子、伊藤志門、小野里良一、丹羽由紀子、福本絃一、齊藤卓也、片山達也、福井高幸、安部哲也、波戸岡俊三、光富徹哉: 気管支形成術の安全性と根治性の検討. 第50回日本肺癌学会総会, 2009,(東京), [示説]
- 070 小野里良一、福井高幸、須田健一、富沢健二、厚田幸子、丹羽由紀子、福本絃一、齊藤卓也、片山達也、伊藤志門、安部哲也、波戸岡俊三、光富徹哉: 1cm以下小型肺癌切除症例の画像所見と臨床的特徴. 第50回日本肺癌学会総会,

- 2009, (東京), [示説]
- 071 丹羽由紀子、安部哲也、波戸岡俊三、齋藤卓也、厚田幸子、小野里良一、福本紘一、片山達也、福井高幸、伊藤志門、光富徹哉、篠田雅幸：食道癌手術に経鼻胃管留置は必要か？. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009, (京都), [口演]
- 072 丹羽由紀子：80歳以上の高齢者開腹手術180例の検討. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009, (大阪), [口演]
- 073 丹羽由紀子、福井高幸、福本紘一、厚田幸子、小野里良一、片山達也、齋藤卓也、伊藤志門、安部哲也、波戸岡俊三、光富徹哉：肺癌の大腸転移の一例. 第33回愛知臨床外科学会, 2009, (愛知), [口演]
- 074 須田健一、小野里良一、福本紘一、齋藤卓也、小林零、片山達也、福井高幸、伊藤志門、安部哲也、波戸岡俊三、高坂貴行、谷田部恭、光富徹哉：“喫煙歴別にみた” 肺腺癌の生物学的臨床的多様性. 第109回日本外科学会定期学術総会, 2009, (福岡), [口演]
- 075 Suda K, Onozato R, Tomizawa K, Kosaka T, Yatabe Y, Mitsudomi T: Analyses of SLC34A2-ROS fusion gene in surgically resected Japanese non-small cell lung cancer patients. 第68回日本癌学会総会, 2009, (横浜), [示説]
- 076 須田健一、小野里良一、富沢健二、高坂貴行、谷田部恭、光富徹哉：EGFR遺伝子変異のない非小細胞肺癌患者におけるゲフィチニブ治療の意義. 第50回日本肺癌学会総会, 2009, (東京), [口演]

乳腺科部

- 001 Barrios C, Liu M-C, Lee SC, Vanlemmens L, Ferrero J-M, Tabei T, Pivot X, Iwata H, Aogi K, Brickman MJ, Zhang K, Kern K, Martin M : phase III randomized trial of sunitinib (SU) vs capecitabine in patients (pts) with previously treated HER2-negative advanced breast cancer (ABC). 32th San Antonio Breast Cancer Symposium, (2009), (San Antonio, USA), [poster]
- 002 Hayashi T, Fujita T, Mase T, Nakano S, Wada M, Kashizuka T, Sugiura H, Mizuno T, Iwata H : Phase II Clinical Study of Protection of Nail Change and Skin Toxicity by using a Frozen Glove in Japanese Patients with Early Breast Cancer treated by Docetaxel and Cyclophosphamide (TC) [TBCRG-]. 32th San Antonio Breast Cancer Symposium, (2009), (San Antonio, USA), [poster]
- 003 Iwata H, Ohno S, Rai Y, Yamamoto N, Yoshida M, Iwase H, Lindemann J, Macpherson M, Noguchi S, Pritchard K I : COMPARISON OF TWO PHASE II TRIALS EVALUATING THREE DOSING REGIMENS OF FULVESTRANT IN JAPANESE VS NON-JAPANESE POSTMENOPAUSAL WOMEN WITH ADVANCED BREAST CANCER (FINDER1 AND FINDER2). 7th European Breast Cancer Conference, (2010), (Barcelona, Spain), [poster]
- 004 Fujita T, Hayashi H, Ando N, Horio A, Hato Y, Toyoshima T, Yamada M, Iwata H : Evaluation of ultrasonographic-guided vacuum assisted core needle breast biopsy in 893 Japanese women. 7th Biennial Meeting of the Asian Breast Cancer Society, (2009), (Korea), [poster]
- 005 Horio A : It is Necessary to Perform the Sentinel Lymph Node Biopsy for Breast Cancer Patients with Ductal Carcinoma In Site (DCIS) Diagnosed by Stereotactic Vacuum-assisted Breast Biopsy?. Global Breast Cancer Conference, (2009), (Korea), [poster discussion]
- 006 岩田広治：HER2陽性乳がんの更なる個別化に向けて. 第109回日本外科学会総会, (2009), (福岡), [パネルディスカッション]
- 007 岩田広治：地域連携バス「乳がん」全県下統一バス作成に向けての取り組み. 第14回愛知クリニカルバス研究会, (2009), (名古屋), [パネルディスカッション]
- 008 岩田広治：Next Step for HER2 Positive Breast Cancer - Part 1-. 第17回日本乳癌学会総会, (2009), (東京), [モーニングセミナー]
- 009 岩田広治：Next Step for HER2 Positive Breast Cancer - Part 2-. 第17回日本乳癌学会総会, (2009), (東京), [ランチョンセミナー]
- 010 岩田広治：術前ホルモン療法の新展開. 第10回最新情報カンファランス, (2009), (金沢), [スポンサードシンポジウム]
- 011 岩田広治：抗HER2治療実践のポイント. 第6回日本乳癌学会中部地方会, (2009),
- 012 岩田広治：乳癌の臨床とcancer stem cell がん細胞の気持ちになって考えよう. 第47回日本癌治療学会学術集会, (2009), (横浜), [乳腺教育セッション]
- 013 岩田広治：ホルモン受容体陽性乳癌における化学療法の現状と展望. 第47回日本癌治療学会学術集会, (2009), (横浜), [ランチョンセミナー]
- 014 岩田広治：ラパニチブの現状と今後の課題. 第47回日本癌治療学会学術集会, (2009), (横浜), [パネルディスカッション]
- 015 岩田広治：Oncotype DX:JBCRG多施設共同試験による日本人での有用性検証試験結果. 第47回日本癌治療学会学術集会, (2009), (横浜), [イブニングセミナー]
- 016 岩田広治：分子標的薬が乳がんに与えたインパクト. 第47回日本癌治療学会学術集会, (2009), (横浜), [シンポジウム]
- 017 岩田広治、中村清吾、戸井雅和、大野真司、田中完児、渡辺亨、遠藤登喜子、大内憲明、福田護：乳癌検診受診率向上のためのピンクリボンイベントの効果. 第18回日本乳癌検診学会総会, (2009), (札幌), [パネルディスカッション]
- 018 岩田広治：乳癌抗体療法の展望. 第6回日本乳癌学会関東地方会, (2009), (大宮), [教育講演]
- 019 豊島千絵子、穂積康夫、佐藤政広、大澤英之、尾本和、竹原めぐみ、塩澤幹雄、吉澤浩次、水沼洋文、小倉重人、黒住昌史：線維腺腫から発生したDCISの一例. 第17回日本乳癌学会学術総会, (2009), (東京), [ポスター討論]
- 020 豊島千絵子、山田舞、波戸ゆかり、堀尾章代、林裕倫、藤田崇史、安藤由明、岩田広治：シリコン注入豊胸術後乳癌にセンチネルリンパ節生検が有用であった2例. 第6回日本乳癌学会中部地方会, (2009), (浜松), [ポスター討論]

- 021 堀尾章代：当院における新しい吸引式針生検装置 (VACORA) の使用経験. 第109回日本外科学会,(2009), (福岡), [ハイブリッドポスター]
- 022 堀尾章代：術前化学療法後に再発した28例の臨床病理学的因子の検討. 第17回日本乳癌学会学術総会,(2009),(東京), [示説討論]
- 023 堀尾章代：術前化学療法にてpCRに至ったが再発した症例の検討. 第6回日本乳癌学会中部地方会,(2009),(浜松), [口論]
- 024 林裕倫、堀尾章代、波戸ゆかり、豊島千絵子、山田舞、藤田崇史、安藤由明、山下年成、岩田広治：HER2陽性進行再発乳癌に対するラパチニブ投与後のハーセプチン再投与症例の検討. 第17回日本乳癌学会総会,(2009),(東京), [ポスター]
- 025 藤田崇史、山下年成、林裕倫、安藤由明、都築則正、堀尾章代、波戸ゆかり、岩田広治：当院に超音波ガイド下マンモトーム生検の検討. 第22回日本乳腺甲状腺超音波診断会議,(2009),(東京),(口演)
- 026 藤田崇史、山下年成、林裕倫、角田伸行、都築則正、堀尾章代、波戸ゆかり、岩田広治：腫瘍像非形成性病変に対する超音波ガイド下マンモトーム生検の有用性の検討. 第109回日本外科学会総会,(2009),(福岡), [ポスター]
- 027 藤田崇史、山下年成、安藤由明、林裕倫、都築則正、堀尾章代、波戸ゆかり、岩田広治：乳癌術後患者における肺孤立性腫瘍に対する鑑別診断. 第17回日本乳癌学会総会,(2009),(東京), [シンポジウム]
- 028 藤田崇史、林裕倫、安藤由明、堀尾章代、波戸ゆかり、豊島千絵子、山田舞、岩田広治：腫瘍非触知乳頭分泌症に対する乳管造影併用マンモトーム生検の有用性. 第19回日本乳癌検診学会総会,(2009),(札幌), [口演]
- 029 藤田崇史、林裕倫、安藤由明、堀尾章代、波戸ゆかり、豊島千絵子、山田舞、岩田広治：当院における炎症性乳癌の診断と治療成績. 第71回日本臨床外科学会総会,(2009),(京都), [ワークショップ]
- 030 藤田崇史、林裕倫、安藤由明、堀尾章代、波戸ゆかり、豊島千絵子、山田舞、岩田広治：Triple negative DCISの検討. 第16回乳腺疾患研究会,(2010),(福岡), [口演]

消化器外科部

- 001 Kinoshita T, Uesaka K, Shimizu Y, Sakamoto H, Kimura W, Sunada S, Imaizumi T, Ozawa I, Okamoto A, Oda T : Effects of adjuvant intra-operative radiation therapy after curative resection in pancreatic cancer patients: Results of a randomized study by 11 institutions in Japan. American Society of Clinical Oncology 2009,2009. (Orlando, Florida) [示説].
- 002 Mori K, Kito M, Kitasaka T, Misawa K, Fujiwara M : Patient-specific laparoscopic surgery planning system based on virtual pneumoperitoneum technique.Computer Assited Radiology and Surgery (CARS)2009,2009. (Berlin) [口演].
- 003 Matsumoto K, Yamao K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K,

- Hijioka K, Imamura H, Kobayashi Y, himizu Y, Hosoda K, Yatabe Y : PRE-OPERATIVE DIAGNOSIS OF SYNCHRONOUS PSEUDOPAPILLARY NEOPLASM(SPNS) OF THE PANCREAS. American Pancreatic Association and Japan Pancreas Society 40th Anniversary Meeting, 2009. (Honolulu) [示説].
- 004 Kobayashi Y, Yamao K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Hijioka S, Imamura H, Matsumoto K, Shimizu Y, Yatabe Y : A CASE OF PANCREATIC NEUROENDOCRINE TUMOR (NET) WITH ATYPICAL LOOKING WHICH DIAGNOSED BY EUS-FNA. American Pancreatic Association and Japan Pancreas Society 40th Anniversary Meeting, 2009. (Honolulu) [示説].
- 005 Shimizu Y, Sano T, Senda Y, Ando M, Mizuno M, Hara K, Yamao K, : A NOMOGRAM FOR PREDICTING THE PROBABILITY OF CARCINOMA IN PATIENTS WITH INTRADUCTAL PAPILLARY MUCINOUS NNEOPLASM. American Pancreatic Association and Japan Pancreas Society 40th Anniversary Meeting, 2009. (Honolulu) [示説].
- 006 Suzuki H, Yamao K, Sawaki A, Mizuno N, HaraK, Hijioka S, Imamura H, Nakamura T, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Kobayahi Y, Matsumoto K, Sawaki A, Akabane A, Sano T, Shimizu Y,Yatabe Y,Hosoda K : SOLID-PSEUDOPAPILLARY TUMOR OF THE PANCREAS IN A YOUNG MALE. American Pancreatic Association and Japan Pancreas Society 40th Anniversary Meeting, 2009. (Honolulu) [示説].
- 007 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 山村義孝, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 安藤公隆, 二村雄次, 山雄健次：膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) の癌予測モデルの作成. 第109回日本外科学会定期学術集会, 2009. (福岡) [シンポジウム].
- 008 平井孝, 金光幸秀, 小森康司, 清水泰博, 佐野 力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 山村義孝, 加藤知行：当院における結腸癌術後遠隔治療成績の改善 手術手技の関わり. 第109回日本外科学会定期学術集会, 2009. (福岡) [一般演題].
- 009 小森康司, 平井 孝, 金光幸秀, 加藤知行, 清水泰博, 佐野 力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 山村義孝：直腸pMP癌の原発巣腫瘍浸潤様式からみた側方リンパ節郭清の適応について. 第109回日本外科学会定期学術集会, 2009. (福岡) [一般演題].
- 010 栗田 啓, 野崎功雄, 藤谷恒明, 福島紀雄, 後藤田直人, 塚原康生, 伊藤誠二, 大下裕夫, 新海 哲, 若尾文彦：胃癌手術のクリニカルパス 全国統一パスの試み. 第109回日本外科学会, 2009. (福岡) [示説].
- 011 伊藤誠二, 笹子三津留, 円谷 彰, 古河 洋, 福島紀雅, 藤谷和正, 種村廣巳, 川島吉之, 佐野 武, 田中洋一, 梨本篤, 中村健一, 山本精一郎, 福田治彦：高度リンパ節転移を伴う進行胃癌に対する術前化学療法+外科切除の治療開発 JCOG臨床試験を通じた標準治療の確立. 第109回日本外科学会総会, 2009. (福岡) [ワークショップ].
- 012 伊藤友一, 小池聖彦, 岩田直樹, 武藤俊博, 中山吾郎, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公：食道切除縦隔内胃管再建術を施

- 行した食道癌症例に対する術後上部消化管内視鏡検査に関する検討. 第109回日本外科学会定期学術集会, 2009. (福岡) [示説].
- 013 田中千恵, 小寺泰弘, 伊藤友一, 中山吾郎, 小池聖彦, 藤原道隆, 中尾昭公: 老化マウスにおける粘膜創傷治癒過程での好中球の影響. 第109回日本外科学会定期学術集会, 2009. (福岡) [示説].
- 014 藤原道隆, 渡邊卓哉, 坂口正道, 藤本英雄, 伊藤友一, 中山吾郎, 小池聖彦, 小寺泰弘, 中尾昭公: 腹腔鏡下手術における第1トロッカー挿入のオプティカル法のバーチャル訓練システム. 第109回日本外科学会定期学術集会, 2009. (福岡) [示説].
- 015 八幡和憲, 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 山村義孝, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 二村雄次: 広範な主膵管進展で膵全摘を施行した膵体部IPMNの1例. 第277回東海外科学会, 2009. (名古屋) [口演].
- 016 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 山村義孝, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 二村雄次: 胆嚢癌と胆管癌を併存した膵胆管合流異常の1例. 第277回東海外科学会, 2009. (名古屋) [口演].
- 017 榊原 巧, 平井 孝, 八幡和憲, 舎人 誠, 安藤公隆, 中村一郎, 三澤一成, 千田嘉毅, 小森康司, 伊藤誠二, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 山村義孝: 直腸癌低位前方切除後の縫合不全高危険群の検討. 第277回東海外科学会, 2009. (名古屋) [口演].
- 018 佐野 力, 清水泰博, 安藤公隆, 千田嘉毅, 三澤一成, 小森康司, 伊藤誠二, 金光幸秀, 平井 孝, 山村義孝, 二村雄次, 山雄健次: 切迫破裂の症状で発症し大動脈周囲リンパ節転移を伴った肝細胞癌の1切除例. 第95回日本消化器病学会総会, 2009. (札幌) [示説].
- 019 佐野 力, 清水泰博, 安藤公隆, 千田嘉毅, 三澤一成, 小森康司, 伊藤誠二, 金光幸秀, 平井 孝, 山村義孝, 二村雄次, 山雄健次: 食道浸潤胃癌を並存し、著明に嚢胞変性した膵内分泌細胞癌の1切除例. 第95回日本消化器病学会総会, 2009. (札幌) [示説].
- 020 高木忠之, 清水泰博, 山雄健次: EUSを用いた膵癌の診断と治療における新展開. 第77回日本消化器内視鏡学会総会, 2009. (名古屋) [シンポジウム].
- 021 清水泰博, 金光幸秀, 加藤知行, 佐野 力, 小森康司, 千田嘉毅, 安藤公隆, 二村雄次: 大腸癌肝転移切除後患者を対象としたフルオロウラシル/ルイコポリンとオキサリプラチン併用補助化学療法(mFOLFOX6) vs. 手術単独によるランダム化II/III相試験(JCOG0603). 第21回日本肝胆膵外科学会・学術集会, 2009. (名古屋) [シンポジウム].
- 022 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 小森康司, 安藤公隆, 二村雄次: 魅力ある肝胆膵外科専門医とは—英国の制度との比較. 第21回日本肝胆膵外科学会・学術集会, 2009. (名古屋) [特別企画].
- 023 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 小森康司, 二村雄次, 山雄健次: 初回手術から8年の経過観察後に二期的膵全摘を施行した主膵管型IPMNの1例. 第21回日本肝胆膵外科学会・学術集会, 2009. (名古屋) [特別企画].
- 024 佐野 力, 清水泰博, 安藤公隆, 千田嘉毅, 三澤一成, 小森康司, 伊藤誠二, 金光幸秀, 平井 孝, 山村義孝, 二村雄次: 地域がんセンターにおける膵頭部癌に対する外科治療成績. 第21回日本肝胆膵外科学会・学術集会, 2009. (名古屋) [示説].
- 025 金光幸秀, 平井 孝, 小森康司: 下部直腸癌に対する(超)低位前方切除術の実際. 第21回東海大腸手術手技研究会, 2009. (名古屋市) [口演].
- 026 岩田直樹, 小池聖彦, 武藤俊博, 伊藤友一, 中山吾郎, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公: 上腸間膜静脈閉塞のある患者に食道癌根治術を施行した1例. 第63回日本食道学会学術集会, 2009. (横浜) [口演].
- 027 武藤俊博, 小池聖彦, 岩田直樹, 伊藤友一, 中山吾郎, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公: 化学療法により手術可能となった食道腺癌の1例. 第63回日本食道学会学術集会, 2009. (横浜) [口演].
- 028 佐野 力, 清水泰博, 安藤公隆, 千田嘉毅, 稲葉吉隆, 二村雄次: 右房内腫瘍塞栓を伴う肝細胞癌に対し肝動注後に切除し得た1例. 第45回日本肝臓研究会, 2009. (福岡) [口演].
- 029 小森康司, 金光幸秀, 榊原 巧, 加藤知行, 平井 孝: 外科切除症例における大腸肝頭腺癌の臨床病理学的検討. 第71回大腸癌研究会, 2009. (大宮市) [示説].
- 030 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 二村雄次: 膵IPMN由来浸潤癌と通常型膵管癌の臨床病理学的比較検討. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [示説].
- 031 金光幸秀, 加藤知行, 清水泰博, 島田安博, 森谷亘皓, 中村健一, 福田治彦: 大腸癌肝転移切除後患者に対する化学療法併用vs. 手術単独のランダム化比較試験(JCOG0603). 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [口演].
- 032 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 安藤公隆, 二村雄次: 主膵管内進展を示した膵腺房細胞癌の3例. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [示説].
- 033 佐野 力, 清水泰博, 安藤公隆, 千田嘉毅, 三澤一成, 小森康司, 伊藤誠二, 金光幸秀, 平井 孝, 二村雄次: TS1膵癌の臨床病理学的検討. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [示説].
- 034 中村一郎, 伊藤誠二, 三澤一成, 小森康司, 金光幸秀, 平井 孝, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 山村義孝: 高度食道浸潤胃癌症例の検討. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [口演].
- 035 小森康司, 平井 孝, 金光幸秀, 加藤知行, 清水泰博, 佐野 力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 山村義孝: 大腸中分化型腺癌への対応 分化度(構造異型)別スコア計算による大腸pMP癌の検討. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [ワークショップ].
- 036 榊原 巧, 平井 孝, 三澤一成, 千田嘉毅, 小森康司, 伊藤誠二, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 山村義孝: 下行結腸癌に対する至適切切除範囲およびリンパ節郭清範囲の検討. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [示説].
- 037 小寺泰弘, 伊藤誠二, 石山聡樹, 木下敬史, 望月能成, 中山吾

- 郎, 小池聖彦, 藤原道隆, 中尾昭公: 新規抗癌剤の時代にP1,CY1症例に対する「根治」手術は成り立つか. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [シンポジウム].
- 038 田中千恵, 藤原道隆, 森 健策, 鬼頭正和, 岩田直樹, 伊藤友一, 中山吾郎, 小池聖彦, 小寺泰弘, 中尾昭公: 3次元仮想腹腔内画像を利用した個別シミュレーションによる左側結腸癌手術. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [示説].
- 039 武藤俊博, 小池聖彦, 伊藤友一, 中山吾郎, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公: 胸部食道癌根治手術症例における気管分岐下リンパ節転移症例の検討. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [示説].
- 040 小池聖彦, 伊藤友一, 中山吾郎, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公: 食道癌手術における郭清リンパ節個数と予後の検討. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [示説].
- 041 藤原道隆, 小寺泰弘, 岩田直樹, 渡邊卓哉, 田中千恵, 伊藤友一, 中山吾郎, 小池聖彦, 中尾昭公: 当科、関連施設における腹腔鏡下幽門側胃切除術の規格化、普及法. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [ビデオ].
- 042 渡邊卓哉, 藤原道隆, 坂口正道, 荒田純平, 伊藤友一, 中山吾郎, 小池聖彦: 腹腔鏡下手術トロッカー挿入シミュレータ開発のための腹壁穿刺力測定. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [示説].
- 043 岩田直樹, 藤原道隆, 渡邊卓哉, 田中千恵, 伊藤友一, 中山吾郎, 小池聖彦, 小寺泰弘, 中尾昭公: 新しい内視鏡下手術用バーチャル・リアリティ・シミュレーターLaparoscopy VRの使用経験. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [示説].
- 044 小林大介, 小寺泰弘, 藤原道隆, 小池聖彦, 中山吾郎, 伊藤友一, 中尾昭公: 残胃癌の臨床病理学的検討とその治療方針について. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [口演].
- 045 八幡和憲, 伊藤誠二, 三澤一成, 千田嘉毅, 小森康司, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝, 山村義孝: 胃癌治療切除後の再発時期別における検討. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [口演].
- 046 中山吾郎, 藤原道隆, 小寺泰弘, 小池聖彦, 伊藤友一, 田中千恵, 中尾昭公: 当科における潰瘍性大腸炎に対する腹腔鏡下大腸全摘術の工夫と有用性に関する検討. 第64回日本消化器外科学会総会, 2009. (大阪市) [示説].
- 047 松井 聡, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 二村雄次: 術後6年目に腹腔播種再発を切除した巨大脾腫瘍の1例. 第32回愛知臨床外科学会, 2009. (名古屋市) [口演].
- 048 金城和寿, 平井 孝, 金光幸秀, 小森康司, 榊原 巧, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 松井 聡, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 中村一郎, 森本 守: 局所進行盲腸癌の一切除例. 第32回愛知臨床外科学会, 2009. (名古屋市) [口演].
- 049 澤木 明, 清水泰博, 水野伸匡, 原 和生, 高木忠之, 佐野 力, 山雄健次: 門脈浸潤陽性あるいは神経浸潤陽性の局所進行脾臓に対する治療選択. 第40回日本脾臓学会大会, 2009. (東京都) [パネルディスカッション].
- 050 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 二村雄次, 水野伸匡, 原 和生, 高木忠之, 山雄健次: 脾内分泌腫瘍の手術成績の検討と治療方針. 第40回日本脾臓学会大会, 2009. (東京都) [口演].
- 051 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 安藤公隆, 山雄健次, 水野伸匡, 原 和生, 二村雄次: 脾全摘を施行したIPMNの4例. 第40回日本脾臓学会大会, 2009. (東京都) [示説].
- 052 佐野 力, 清水泰博, 安藤公隆, 千田嘉毅, 二村雄次, 山雄健次: 脾体尾部癌の外科治療成績. 第40回日本脾臓学会大会, 2009. (東京都) [ポスター].
- 053 三澤一成, 伊藤誠二, 伊藤友一, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公: 消化器外科用CADにおける現状と問題点 臨床医の立場から. 第28回日本医用画像工学会大会, 2009. (名古屋市) [シンポジウム].
- 054 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 小森康司, 山雄健次, 水野伸匡, 原 和生, 二村雄次: 胆管非拡張型膵胆管合流異常に合併した胆道癌の1例. 第45回日本胆道学会学術集会, 2009. (東京都) [示説].
- 055 小林佑次, 原 和生, 水野伸匡, 澤木 明, 肘岡 範, 今村秀道, 松本和也, 清水泰博, 山雄健次: 超音波内視鏡下胆管空腸吻合術(EUS-CDS)により著しくQOLの改善がみられた脾臓癌の1例. 第45回日本胆道学会学術集会, 2009. (東京都) [示説].
- 056 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 小森康司, 山雄健次, 水野伸匡, 原 和生, 二村雄次: 胆管非拡張型膵胆管合流異常に合併した胆道癌の1例. 第45回日本胆道学会学術集会, 2009. (浦安市) [示説].
- 057 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 小森康司, 山雄健次, 原 和生, 二村雄次: 大腸癌術後再発に対し脾頭十二指腸切除、再々発に対し肝右葉・尾状葉切除、胆道再建を施行した1例. 第45回日本胆道学会学術集会, 2009. (浦安市) [示説].
- 058 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 安藤公隆, 二村雄次: 胆管癌が否定できず切除を行った良性胆管狭窄の一例. 第45回日本胆道学会学術集会, 2009. (浦安市) [示説].
- 059 肘岡 範, 今村秀道, 原 和生, 水野伸匡, 澤木 明, 小林佑次, 松本和也, 鈴木晴久, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 山雄健次: 胆嚢病変に対するEUS-FNAの検討. 第45回日本胆道学会学術集会, 2009. (浦安市) [示説].
- 060 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 安藤公隆, 松井 聡, 二村雄次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 山雄健次: IPMN由来と考えられた粘液癌の1例. 第65回東海胆道研究会, 2009. (名古屋市) [口演].
- 061 中西速夫, 松井 誠, 伊藤友一, 池原 譲: がん幹細胞様形質を有するCD133陽性低分化型大腸がん細胞株のgefitinib感受性 (Gefitinib sensitivity of CD133-positive colonic cancer cell line with cancer stem like characteristics). 第68回日本癌学会総会, 2009. (横浜市) [オーラルセッション].
- 062 志村正博, 小森康司, 金光幸秀, 清水泰博, 佐野 力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 伊藤友一, 榊原 巧, 中村一郎, 森本 守, 松井 聡, 金城和寿, 平井 孝: 術前mFOLFOX6が著効し、R0手術が可能となった直腸癌の1例. 第278回東

- 海外科学会, 2009. (浜松市) [口演].
- 063 伊藤誠二, 伊藤友一, 小寺泰弘, 中西遠夫: マイクロアレーを用いた胃癌腹膜再発予測に有用な新しい遺伝子マーカー. 第68回日本癌学会, 2009. (横浜市) [口演].
- 064 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 室 圭, 平井 孝, 二村雄次: 3次治療のセツキシマブが著効して肝静脈再建を伴う再肝切除を行った1例. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009. (京都市) [ポスター].
- 065 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 山浦秀和, 稲葉吉隆, 平井 孝, 二村雄次, 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 山浦秀和, 稲葉吉隆, 平井 孝, 二村雄次: 大腸癌多発肝転移に対し肝動注化学療法施行開始7年3月後に肝転移巣切除を行った1例. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009. (京都市) [ポスター].
- 066 中村一郎, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 金光幸秀, 小森康司, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 平井 孝: 80歳以上胃癌患者における術前身体状態と術後合併症との関連性. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009. (京都市) [一般演題].
- 067 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 千田嘉毅, 小森康司, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝, 望月能成, 山村義孝: 胃癌術後補助化学療法としてのS-1単独療法の治療完遂率に關与する因子. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009. (横浜市) [口演].
- 068 設案鉾平, 松尾恵太郎, 横田知哉, 高張大亮, 宇良 敬, 澤木 明, 河合宏紀, 伊藤誠二, 室 圭: 胃癌化学療法症例における効果予測因子としてのMTHFR, TS遺伝子多型. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009. (横浜市) [口演].
- 069 宇良 敬, 室 圭, 高張大亮, 横田知哉, 設案鉾平, 中村常哉, 澤木 明, 田近正洋, 河合宏紀, 伊藤誠二: 胃癌二次治療移行を検討する際にPS2であるとき、念頭におくべきこと. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009. (横浜市) [口演].
- 070 小森康司, 金光幸秀, 榊原 巧, 平井 孝, 加藤知行: 大腸癌術後吻合部再発巣の病理組織学的検討. 第64回日本大腸肛門病学会, 2009. (福岡市) [口演].
- 071 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 二村雄次: 脾印環細胞癌の1例. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [示説].
- 072 木下 平, 上坂克彦, 清水泰博, 坂本裕彦, 木村 理, 砂田洋司, 今泉俊秀, 尾澤 巖, 岡本篤武, 小田竜也: 脾癌治療切除後の補助療法としての術中放射線治療(IORT)の意義を問う. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [サージカルフォーラム].
- 073 松井 聡, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 平井 孝, 二村雄次: 術前化学療法後に切除した大腸癌肝転移の治療成績. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [口演].
- 074 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 安藤公隆, 平井 孝, 金光幸秀, 伊藤誠二, 小森康司, 三澤一成, 伊藤友一, 二村雄次, 山雄健次: 分枝型IPMNの手術適応一癌予測モデルによる治療方針の決定. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [パネルディスカッション].
- 075 千田嘉毅, 清水泰博, 佐野 力, 金光幸秀, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 松井 聡, 平井 孝, 二村雄次: 胆嚢摘出後に判明した胆嚢癌の追加切除に関する検討. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [口演].
- 076 佐野 力, 清水宏明, 小西 大, 片寄 友: この症例をどうする?-胆道-. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [パネルディスカッション].
- 077 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 小森康司, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 金光幸秀, 平井 孝, 二村雄次: 若年男性に発生し著明な石灰化を伴った脾solid-pseudopapillary tumorの1切除例. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [示説].
- 078 佐野 力, 清水泰博, 千田嘉毅, 小森康司, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 金光幸秀, 平井 孝, 二村雄次: 十二指腸・横行結腸浸潤を伴った胆のう癌の1切除例. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [示説].
- 079 伊藤友一, 伊藤誠二, 三澤一成, 中村一郎, 森本 守, 榊原 巧, 千田嘉毅, 小森康司, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝, 山村義孝: 胃切除術後全国標準クリニカルパス導入による周術期管理についての検討. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [口演].
- 080 中村一郎, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 森本 守, 松井 聡, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 榊原 巧, 金城和寿, 小森康司, 金光幸秀, 平井 孝, 山村義孝: 非治療因子をもつ食道浸潤胃癌における原発巣切除の位置付け. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [口演].
- 081 小森康司, 金光幸秀, 榊原 巧, 清水泰博, 佐野 力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 伊藤友一, 中村一郎, 加藤知行, 平井 孝: 性差別にみた直腸癌拡大手術(周囲臓器合併切除)の病理組織学的検討. 第71回日本臨床外科学会, 2009. (京都市) [口演].
- 082 金城和寿, 小森康司, 金光幸秀, 清水泰博, 佐野 力, 伊藤誠二, 千田嘉毅, 三澤一成, 伊藤友一, 中村一郎, 榊原 巧, 平井 孝: 巨大虫垂粘液嚢胞腺癌の1例. 第71回日本臨床外科学会, 2009. (京都市) [口演].
- 083 榊原 巧, 金城和寿, 志村正博, 森本 守, 松井 聡, 中村一郎, 伊藤友一, 三澤一成, 千田嘉毅, 小森康司, 伊藤誠二, 金光幸秀, 佐野 力, 清水泰博, 平井 孝: 直腸癌低位前方切除後の縫合不全危険因子の検討(Covering stomaの有無に分けて). 第71回日本臨床外科学会, 2009. (京都市) [口演].
- 084 三澤一成, 伊藤誠二, 金光幸秀, 伊藤友一, 中村一郎, 森本 守, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公, 林雄一郎, 森 健策: 画像処理システム(NewVES)を用いた消化器外科手術支援. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [ワークショップ].
- 085 小林大介, 小池聖彦, 伊藤友一, 中山吾郎, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公: 頸部食道癌肉腫の4例. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [口演].
- 086 森本 守, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 中村一郎, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 榊原 巧, 小森康司, 金光幸秀, 平井 孝, 望月能成, 山村義孝: 胃切除Roux-Y再建後輸入脚症候群の8例. 第71回日本臨床外科学会, 2009. (京都市) [口演].

- 087 中村一郎, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 森本 守, 松井 聰, 千田嘉毅, 佐野 力, 清水泰博, 榊原 巧, 金城和寿, 小森康司, 金光幸秀, 平井 孝, 山村義孝: 非治療因子をもつ食道浸潤胃癌における原発巣切除の位置付け. 第71回日本臨床外科学会総会, 2009. (京都市) [サージカルフォーラム].
- 088 江種友彦, 小田昌宏, 北坂孝幸, 森 健策, 三澤一成, 藤原道隆: 血管情報に基づく腹部動脈への血管名自動対応付け手法. 第18回日本コンピュータ外科学会, 2009. (東京都) [口演].
- 089 小森康司, 金光幸秀, 榊原 巧, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 平井 孝: 横行結腸癌に対する手術成績および手術手技. 第22回東海大腸外科治療研究会, 2009. (名古屋) [ビデオシンポジウム].
- 090 松井 聰, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 小森康司, 二村雄次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 山雄健次: 初回手術4年後に局所再発を切除したIPMN由来浸潤癌の1例. 第111回日本消化器病学会東海支部第111回例会, 2009. (名古屋) [口演].
- 091 小森康司, 金光幸秀, 榊原 巧, 清水泰博, 佐野 力, 千田嘉毅, 平井 孝: 大腸pMP癌の病理組織学的検討—腫瘍浸潤様式とリンパ節転移の関係について—. 第111回日本消化器病学会東海支部例会, 2009. (名古屋) [口演].
- 092 小森康司, 金光幸秀, 榊原 巧, 平井 孝: 大腸pMPがんの病理組織学的検討—腫瘍浸潤様式とリンパ節転移の関係について—. 第6回日本消化管学会総会学術集会, 2010. (福岡) [口演].
- 093 小森康司, 金光幸秀, 榊原 巧, 加藤知行, 平井 孝: 当院における小腸癌手術症例の検討. 第72回大腸癌研究会, 2010. (久留米) [示説].
- 094 小田昌宏, 森 浩起, 江種友彦, 北坂孝幸, 三澤一成, 森 健策: CT画像に基づく腹腔鏡下手術シミュレーターによる手術計画立案支援. 第4回Open MRI研究会, 2010. (福岡) [口演].
- 095 三澤一成, 伊藤誠二, 伊藤友一, 中村一郎, 澤木 明: 胃GISTの再発リスクに基づく術後フォローアップに関する検討. 第82回日本胃癌学会総会, 2010. (新潟) [コンセンサスミーティング].
- 096 中西遠夫, 松井 誠, 伊藤誠二, 村上弘城: Paclitaxel抵抗性胃がん腹膜転移モデルの作成と感受性予測マーカーの探索. 第82回日本胃癌学会総会, 2010. (新潟) [示説].
- 097 野崎功雄, 黒瀬水紀, 栗田 啓, 後藤田直人, 藤谷恒明, 福島紀雄, 藤田淳也, 伊藤誠二, 大下裕夫: 多施設共同研究による胃癌手術パスの作成—全摘と幽切のパス統合は可能か?—. 第82回日本胃癌学会総会, 2010. (新潟) [企画演題].
- 098 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 中村一郎, 望月能成, 小寺泰弘, 山村義孝: 当院における胃開腹手術症例の現況と最近の変化. 第82回日本胃癌学会総会, 2010. (新潟) [パネルディスカッション].
- 099 高張大亮, 濱口哲弥, 吉村健一, 片井 均, 伊藤誠二, 布施望, 木下 平, 広中秀一, 寺島雅典, 後藤昌弘, 谷川允彦, 長井裕志, 白尾国昭, 笹子三津留: 胃癌術後補助化学療法としてのS-1+CDDP併用療法のfeasibility試験. 第82回日本胃癌学会総会, 2010. (新潟) [ワークショップ].
- 100 設楽紘平, 高張大亮, 横田知哉, 柴田剛志, 宇良 圭, 澤木明, 河合宏紀, 伊藤誠二, 室 圭: 経口摂取不能胃癌における化学療法の効果. 第82回日本胃癌学会総会, 2010. (新潟) [ワークショップ].
- 101 中村一郎, 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一: 減量手術の臨床的意義. 第82回日本胃癌学会総会, 2010. (新潟) [口演].
- 102 伊藤誠二, 三澤一成, 伊藤友一, 中村一郎, 丹羽康正, 田近正洋: 胃癌ESD後切除症例のリンパ節転移. 第82回日本胃癌学会総会, 2010. (新潟) [示説].
- 103 長 晴彦, 小寺泰弘, 吉川貴己, 石山聡治, 木下敬史, 伊藤誠二, 望月能成, 越川克己, 伊藤浩明, 円谷 彰, 中尾昭公: Stage IV胃癌切除症例を対象としたTS-1+CDDP併用療法の認容性試験 (CCOG0703). 第82回日本胃癌学会総会, 2010. (新潟) [示説].

整形外科部

- 001 杉浦英志: 肺癌骨転移患者の生命予後と予後因子. 多地点合同メディカルカンファレンス, 2009. (名古屋) [口演]
- 002 山田健志: 腫瘍? 非腫瘍? 鑑別に迷った症例の小経験. 名大合同カンファレンス, 2009. (名古屋) [口演]
- 003 杉浦英志: 日常診察における軟部腫瘍診断のポイント. 名大合同カンファレンス, 2009. (名古屋) [口演]
- 004 和佐潤志, 西田佳弘, 杉浦英志, 中島浩敦, 山田芳久, 筑紫聡, 細野幸三, 紫藤洋二, 石黒直樹: MPNSTの治療成績と予後因子について. 第82回日本整形外科学会学術総会, 2009. (福岡) [口演]
- 005 西田佳弘, 筑紫聡, 杉浦英志, 中島浩敦, 山田芳久, 石黒直樹: 骨盤発生悪性骨腫瘍に対する治療および予後に関する因子. 第82回日本整形外科学会学術総会, 2009. (福岡) [口演]
- 006 杉浦英志: 泌尿器がん骨転移における整形外科の役割—癌骨転移の診断と治療—. 泌尿器癌骨転移講演会, 2009. (名古屋) [口演]
- 007 山田健志: 整形外科からみた乳癌骨転移. 名古屋乳癌骨転移セミナー, 2009. (名古屋) [口演]
- 008 生越章, 藤原康弘, 安藤正志, 川井章, 杉浦英志, 尾崎敏文, 横山良平, 比留間徹, 石井猛, 森岡秀夫: 再発あるいは治療抵抗性のc-kitあるいはPDGFR陽性肉腫に対するイマチニブの第II相試験—医師主導型治験の多施設共同研究—. 第42回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会, 2009. (横浜) [口演]
- 009 杉浦英志, 山田健志, 立花弘之, 不破信和, 和佐潤志: 転移性脊椎腫瘍治療における問題点—脊椎打ち抜き原照射法を中心に—. 第42回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会, 2009. (横浜) [ポスター]
- 010 山田健志, 杉浦英志: 再発小円形細胞肉腫に対する塩酸イリノテカン+シスプラチン併用化学療法. 第42回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会, 2009. (横浜) [ポスター]

- 011 片桐浩久、高橋満、高木辰哉、村田秀樹、杉浦英志、西田佳弘、山田芳久：傍骨性骨肉腫に対する加温処理骨を用いた手術。第42回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会、2009、(横浜)、[ポスター]
- 012 中島浩教、吉田雅博、二村尚久、杉浦英志、山田健志：腹壁再建を要した腹壁原発軟部肉腫の4例。第42回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会、2009、(横浜)、[ポスター]
- 013 神山圭史、兵藤伊久夫、杉浦英志、山田健志、亀井謙、鳥居修平：前腕部軟部腫瘍切除後の広範囲軟部組織欠損に対する遊離前外側大腿皮弁による再建。第42回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会、2009、(横浜)、[ポスター]
- 014 和佐潤志、西田佳弘、筑紫聡、紫藤洋二、杉浦英志、中島浩教、山田芳久、石黒直樹：神経線維腫症1型に発症したMPNST症例の診療経過に関する検討。第42回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会、2009、(横浜)、[ポスター]
- 015 山田健志、杉浦英志：外陰部皮下原発PNETの鼠径部リンパ節転移。日本ユウイング肉腫研究グループ研究会、2009、(東京)、[口演]
- 016 神山圭史、兵藤伊久夫、山田健志、杉浦英志：後骨間神経麻痺を生じた肘部軟部腫瘍の1例。第217回整形外科集談会東海地方会、2009、(名古屋)、[口演]
- 017 神山圭史、杉浦英志、田口修、亀井謙：マウスの骨肉腫移植モデルにおける抗IL-2単抗体投与による転移抑制効果。第68回日本癌学会学術総会、2009、(横浜)、[ポスター]
- 018 杉浦英志：がん医療におけるリハビリテーションの動向と実際。平成21年度愛知県がん専門研修会、2009、(名古屋)、[口演]
- 019 山田健志：ユウイング肉腫ファミリー腫瘍に対する集学的治療の現状と課題。第47回日本癌治療学会学術集会、2009、(横浜)、[パネルディスカッション]
- 020 杉浦英志：日常診療における軟部腫瘍診断のポイント。第8回鶴舞整形外科症例検討会—合同カンファレンスAnnual Meeting—、2009、(名古屋)、[口演]
- 021 杉浦英志：Bone Metastasis Forum 2009。2009、(名古屋)、[コメンテーター]
- 022 神山圭史、兵藤伊久夫、山田健志、杉浦英志、中島浩教：有茎前外側大腿皮弁により会陰・下腹部再建を行った類上皮膚腫の1例。第218回整形外科集談会東海地方会、2009、(名古屋)、[口演]
- 023 杉浦英志、山田健志、神山圭史、佐々木英一、谷田部恭：左側胸部軟部腫瘍の1例。第67回東海骨軟部腫瘍研究会、2009、(名古屋)、[口演]
- 024 神山圭史、山田健志、杉浦英志：腫瘍用人工関節感染に対してsalvage手術を施行した1例。第219回整形外科集談会東海地方会、2010、(名古屋)、[口演]
- 025 山田健志：58-Year-Old Female, Dedifferentiated liposarcoma of proximal thigh developed in recurrent well-differentiated liposarcoma。第22回骨軟部肉腫外科研究会、2010、(東京)、[口演]
- 026 濱田俊介、笠井健広、北村伸二、安藤智洋、佐藤公治：AO-C typeの上腕骨顆部骨折に対するanatomical LCPを用いた治療経験。第113回中部日本整形外科災害外科学会、2009、(神戸)、[口演]
- 027 濱田俊介、樋口善俊、笠井健広、岸田俊一、片山良仁、深谷泰士、北村伸二、安藤智洋、佐藤公治、竹上靖彦：骨膜下膿瘍を伴った乳児の急性胫骨骨髓炎の1症例。第216回整形外科集談会東海地方会、2009、(名古屋)、[口演]
- 028 濱田俊介、北村伸二、安藤智洋、佐藤公治、山崎隆志、佐藤茂、村上元昭、竹上靖彦：2病院整形外科間での医師人事交流経験。第45回日本赤十字社医学会総会、2009、(前橋)、[口演]
- 029 濱田俊介、深谷泰士、大羽宏樹、森田修蔵、樋口善俊、笠井健広、岸田俊一、片山良仁、北村伸二、安藤智洋、佐藤公治：大腿骨顆上骨折に対する当院での手術治療成績の検討。第1回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会(JOSKAS2009)、2009、(札幌)、[口演]
- 030 濱田俊介、北村伸二、樋口善俊、笠井健広、岸田俊一、竹上靖彦、片山良仁、深谷泰士、安藤智洋、佐藤公治：安定型大腿骨転子部骨折に対してCHSを施行し術後に回旋変形を呈した5症例の検討。第47回東海整形外科外傷研究会、2009、(名古屋)、[口演]

泌尿器科部

- 001 小倉友二、臨田利明、田丸裕巳、林 宣男：2008年愛知県がんセンター中央病院泌尿器科入院手術統計。第45回三重泌尿器科医会、2009、(津) [口演]
- 002 荒瀬栄樹、石井健一郎、小倉友二、有馬公伸、杉村芳樹：ビスフェノールA経胎盤暴露によりマウス泌尿生殖洞で発現変動する性分化関連遺伝子群の同定。第18回泌尿器科分子・細胞研究会、2009、(鹿児島) [口演]
- 003 臨田利明、田丸裕巳、小倉友二、林 宣男：愛知県がんセンター中央病院における根治的前立腺全摘術300例の治療成績の検討。第97回日本泌尿器科学会総会、2009、(岡山) [示説]
- 004 荒瀬栄樹、石井健一郎、小倉友二、有馬公伸、杉村芳樹：ビスフェノールA経胎盤暴露によりマウス泌尿生殖洞で発現変動する性分化関連遺伝子群の同定。第97回日本泌尿器科学会総会、2009、(岡山) [示説]
- 005 小倉友二、臨田利明、田丸裕巳、林 宣男：前立腺全摘術後再発に対する救済放射線療法についての検討。第46回三重泌尿器科医会、2009、(津) [口演]
- 006 田丸裕巳、小倉友二、臨田利明、林 宣男：当院における腎細胞癌手術症例の治療成績。第59回日本泌尿器科学会中部総会、2009、(金沢) [示説]
- 007 田丸裕巳、小倉友二、臨田利明、林 宣男：術後リンパ浮腫をきたし改善を認めた2例。第3回がんのリンパ浮腫研究会、2009、(津) [口演]
- 008 長谷川嘉弘、山田泰司、曾我倫久人、木瀬英明、有馬公伸、杉村芳樹、小倉友二、臨田利明、林 宣男：局所進行前立腺癌(Stage C)に対する手術療法の臨床的検討。第25回前立腺癌シンポジウム、2009、(東京) [口演]

婦人科部

- 001 牧野弘, 吉田憲生, 水野美香, 伊藤則雄, 中西透:再発卵巣癌に対する手術療法に関する検討. 第61回日本産科婦人科学会学術講演会, 2009, (京都), [ポスター]
- 002 中西透, 丹羽慶光, 水野美香, 伊藤則雄:原発性卵巣癌乳房転移の2例. 第125回東海産科婦人科学会, 2009, (岐阜), [口演]
- 003 勝俣範之, 青木大輔, 中西透, 紀川純三, 藤原恵一, 竹原和宏, 上浦祥司, 日浦昌道, 波多江正紀, 杉山徹, 落合和徳, 野田起一郎:再発卵巣癌に対する塩酸ノゲテカン(トポテカン)の後期第II相臨床試験. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 004 水野美香, 吉田憲生, 伊藤則雄, 中西透:子宮頸部円錐切除術の治療としての有用性と問題点. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 005 牧野弘, 吉田憲生, 水野美香, 伊藤則雄, 中西透:子宮頸癌FIGO Ia1期治療の検討. 第47回日本癌治療学会学術集会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 006 中西透, 丹羽慶光, 水野美香, 伊藤則雄:広汎子宮全摘術時の卵巣温存と移動固定の考察. 第126回東海産科婦人科学会, 2010, (名古屋), [口演]

麻酔科部

- 001 細田蓮子:がんの痛みのメカニズムと治療. 新臨床腫瘍学セミナー, 2009, (名古屋), [講演]
- 002 細田蓮子, 向井未年子, 新田都子, 段浩美, 稲葉吉隆, 佐藤洋造, 鳥居圭:硬膜外ポート埋め込み下に肋骨転移に対しPRFA(経皮的ラジオ波凝固療法)を行った1例. 第20回日本ペインクリニック学会東海地方会, 2009, (名古屋), [発表] [口演]
- 003 細田蓮子, 向井未年子, 新田都子, 新貝夫弥子, 段浩美, 立松三千子:在宅緩和医療実施状況(名古屋市病診連携医療機関5年間の比較), 第14回日本緩和医療学会学術大会, 2009, (大阪), [ポスター]
- 004 細田蓮子:緩和ケアにおける地域連携~広島県緩和ケア支援センターの取り組み. 第7回名古屋がん疼痛緩和フォーラム, 2009, (名古屋), [発表]
- 005 細田蓮子:ペインクリニック・がん性疼痛. 日本麻酔科学会第6回学術集会, 2009, (神戸), [ポスター]
- 006 細田蓮子:フェンタニル持続静注から経皮吸収材へ短時間・2段階減量を用いた移行法. 第2回名古屋緩和ケア講演会~フェンタニル注射発売記念~, 2009, (名古屋), [特別講演]
- 007 細田蓮子:緩和ケアにおけるがん疼痛治療について. 名古屋市医師会千種区学術講演会, 2009, (名古屋), [講演]
- 008 仲田純也, 細田蓮子, 西良雅夫:麻酔導入時におけるレミフェンタニルボラス投与の試み. 第29回日本臨床麻酔学会, 2009, (浜松), [ポスター]
- 009 細田蓮子:がん診療に携わる医師に対する緩和ケア基本研修会. 開催にあたってがんセンター主催, 2009, (名古屋), [講演]

- 010 細田蓮子:末期がん患者に対する緩和医療について. 中日病院緩和研修会, 2009, (名古屋), [講演]

放射線診断・IVR部

- 001 Tomita Y, Inaba Y, Fujimoto H, Oya M, Shinohara N, Uemura H, Kanayama H, Tobisu K, Naito S, Akaza H, : A Phase II Study of Axitinib(AG-013736) in Japanese Patients with Cytokine-refractory Metastatic Renal Cell Cancer:Results from an Interim Analysis. 8th International Kidney Cancer Symposium, 2009, (Chicago), [Poster]
- 002 Arai Y, Watanabe H, Sato Y, Sone M, Onaya H, Sakamoto N, Takahashi M, Osuga K : Tumor response criteria to transarterial chemoembolization(TACE) for hepatocellular carcinoma(HCC) inter-and intra -observer reproducibility of modified EASL (European Association for the Study of the Liver) and RECIST (response evaluation criterion in solid tumors) ver 1.1 from the dataset of JIVROSG(Japan Interventional Radiology in Oncology Study Group)0401. Cardiovascular and Interventional Radiological Society of Europe, 2009, (Lisbon), [Poster]
- 003 稲葉吉隆:リザーバー肝動注療法におけるカテーテル留置技術. 第68回日本医学放射線学会総会, 2009, (横浜), [講演]
- 004 金本高明, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 佐藤洋造, 名嶋弥菜, 友澤裕樹, 坂根誠:中心静脈ポートシステム合併症の画像所見について. 第68回日本医学放射線学会総会, 2009, (横浜), [口演]
- 005 友澤裕樹, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 佐藤洋造, 名嶋弥菜, 金本高明, 坂根誠:当院における経皮経肝門脈塞栓術 (PTPE) の検討. 第68回日本医学放射線学会総会, 2009, (横浜), [口演]
- 006 坂根誠, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 佐藤洋造, 名嶋弥菜, 金本高明, 友澤裕樹:腹部血管IVRにおける3D-D SA・3D-C TAによる血管イメージの比較検討. 第68回日本医学放射線学会総会, 2009, (横浜), [口演]
- 007 稲葉吉隆:進行肝細胞癌に対する肝動注化学療法の実際. 第14回多地点合同メディカル・カンファレンス, 2009, (名古屋), [口演]
- 008 佐藤洋造, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 名嶋弥菜, 金本高明, 友澤裕樹, 坂根誠, 片山達也, 篠田雅幸:食道癌術後症例に対しPTEGを施行した1例. 第8回日本PTEG研究会, 2009, (福岡), [口演]
- 009 坂根誠, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 佐藤洋造, 名嶋弥菜, 金本高明, 友澤裕樹, 北角淳, 寺倉梨津子, 佐野力:右心房・下大静脈腫瘍栓を伴う進行肝細胞癌に対しシスプラチン肝動注療法で組織学的完全奏効を得た1例. 日本IVR学会第25回中部地方会, 2009, (静岡), [口演]
- 010 金本高明, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 佐藤洋造, 名嶋弥菜, 友澤裕樹, 坂根誠, 北角淳, 寺倉梨津子:Orca CV Kit留置後カテーテルキンクを生じた3例. 日本IVR学会第25回中部地方会, 2009, (静岡), [口演]

- 011 稲葉吉隆：転移性肝癌に対する治療戦略。第9回関西肝血流動態イメージ研究会，2009,(大阪)，[特別講演]
- 012 稲葉吉隆：癌診療におけるIVR。烏居薬品研修会，2009,(名古屋)，[講演]
- 013 佐藤洋造，稲葉吉隆，山浦秀和，名嶋弥菜，金本高明，友澤裕樹，坂根誠：消化管ステント治療におけるEBM。第27回日本Metallic Stents & Grafts研究会，2009,(大阪)，[口演]
- 014 名嶋弥菜，稲葉吉隆，山浦秀和，佐藤洋造，金本高明，友澤裕樹，坂根誠：食道癌化学放射線療法後の食道ステント留置に関する検討。第38回日本IVR学会，2009,(大阪)，[口演]
- 015 金本高明，佐藤洋造，稲葉吉隆，山浦秀和，名嶋弥菜，友澤裕樹，坂根誠：Coaxial Reserver Systemを用いた肝動注化学療法の使用経験について。第38回日本IVR学会，2009,(大阪)，[口演]
- 016 稲葉吉隆：大静脈ステント。第38回日本IVR学会，2009,(大阪)，[セミナー講師]
- 017 佐藤洋造：消化管ステント。第38回日本IVR学会，2009,(大阪)，[セミナー講師]
- 018 設楽耕平，横田知哉，高張大亮，宇良敬，佐藤洋造，山浦秀和，稲葉吉隆，名嶋弥菜，河合宏紀，田近正洋，澤木明，宇都宮節夫，谷田部恭，室圭：KRAS Wild Typeの大腸癌患者に対するCetuximab+Irinotecan併用療法の第II相試験。第47回日本癌治療学会，2009,(横浜)，[シンポジウム]
- 019 佐藤洋造，稲葉吉隆，山浦秀和，名嶋弥菜，金本高明，宇良敬，室圭：肝転移を主病巣とする進行・再発大腸癌に対する治療戦略。第47回日本癌治療学会，2009,(横浜)，[ワークショップ]
- 020 宇良敬，室圭，高張大亮，横田知哉，設楽耕平，稲葉吉隆，山浦秀和，佐藤洋造，名嶋弥菜，金本高明，古谷和久：ペバシズマブの導入(2007年)後、大腸癌脳転移出現の頻度と時期の動向について。第47回日本癌治療学会，2009,(横浜)，[口演]
- 021 宇良敬，室圭，高張大亮，横田知哉，設楽耕平，稲葉吉隆，山浦秀和，佐藤洋造，名嶋弥菜，金本高明：50例のセツキシマブ投与剤から学ぶ、低Mg血症の推移と対策についての検討。第47回日本癌治療学会，2009,(横浜)，[口演]
- 022 室圭，佐藤洋造，坪井賢治，横山裕之，柴田佳久，近藤健，佐藤幹則，渡辺正一，坂本英至，鈴木達也：新規分子標的治療薬セツキシマブのチーム医療—愛知県での取り組み—。第47回日本癌治療学会，2009,(横浜)，[口演]
- 023 稲葉吉隆：がん診療におけるIVR。第4回北陸IVR研究会，2009,(金沢)，[特別講演]
- 024 稲葉吉隆，山浦秀和，佐藤洋造，名嶋弥菜，金本高明，友澤裕樹，坂根誠，北角淳，寺倉梨津子：大腸癌肺転移に伴う気管支狭窄に対するステント治療を行った1例。第33回東海IVR懇話会，2009,(名古屋)，[カンファレンス]
- 025 山口裕美子，丹羽沙津木，笹川良子，福嶋敬子，大木美穂，佐野悦子，坂田正治，稲葉吉隆，山浦秀和，佐藤洋造：ダブルリザーバーの刺し間違いにおける症例検討。第34回リザーバー研究会，2009,(名古屋)，[ポスター]
- 026 名嶋弥菜，稲葉吉隆，山浦秀和，佐藤洋造，金本高明，友澤裕樹，坂根誠，北角淳，寺倉梨津子：当院における肝細胞癌に対するシスプラチン動注療法の治療成績。第34回リザーバー研究会，2009,(名古屋)，[口演]
- 027 佐藤洋造，池田公史，奥坂拓志，上野秀樹，竹内義人，仲地耕平，佐竹光夫，稲葉吉隆，荒井保明：進行肝細胞癌に対するFMP動注療法の第I/II相試験—第II相部分の結果—。第34回リザーバー研究会，2009,(名古屋)，[口演]
- 028 佐藤洋造，山浦秀和，名嶋弥菜，金本高明，友澤裕樹，坂根誠，北角淳，寺倉梨津子，稲葉吉隆：複数の肝動脈を有する症例に対しての、転移右肝動脈への一本化における考案。第34回リザーバー研究会，2009,(名古屋)，[口演]
- 029 北角淳，金本高明，佐藤洋造，友澤裕樹，名嶋弥菜，友澤裕樹，坂根誠，寺倉梨津子：Coaxial Reservoir Systemを用いた肝動注化学療法の使用経験について。第34回リザーバー研究会，2009,(名古屋)，[口演]
- 030 友澤裕樹，稲葉吉隆，山浦秀和，佐藤洋造，名嶋弥菜，金本高明，坂根誠，北角淳，寺倉梨津子：当院におけるCVポートトラブル症例におけるフェローチェックについての検討。第34回リザーバー研究会，2009,(名古屋)，[口演]
- 031 金本高明，佐藤洋造，稲葉吉隆，山浦秀和，名嶋弥菜，友澤裕樹，坂根誠，北角淳，寺倉梨津子：中心静脈ポート留置後に生じたカテーテルキンクについての検討。第34回リザーバー研究会，2009,(名古屋)，[口演]
- 032 坂根誠，稲葉吉隆，山浦秀和，佐藤洋造，名嶋弥菜，金本高明，友澤裕樹，北角淳，寺倉梨津子：当院における中心静脈ポート抜去例の検討。第34回リザーバー研究会，2009,(名古屋)，[口演]
- 033 生口俊浩，井上大作，井谷史嗣，浅海信也，遠藤久之，荒井保明，稲葉吉隆，金澤右：高度に進行した大腸癌切除不能肝転移患者3人へのFOLFOX前の肝動注化学療法。第34回リザーバー研究会，2009,(名古屋)，[口演]
- 034 西尾福英之，田中利洋，穴井洋，末吉智，新嶺剛，朴成和，對馬隆浩，稲葉吉隆，山浦秀和，佐藤洋造，松岡正樹，大辻俊雄，阪口浩，荒井保明，吉川公彦：標準的化学療法不能後の大腸癌肝転移に対する5FU肝動注の評価—多施設共同後ろ向き研究—。第34回リザーバー研究会，2009,(名古屋)，[口演]
- 035 佐藤洋造，山浦秀和，名嶋弥菜，金本高明，友澤裕樹，坂根誠，北角淳，寺倉梨津子，稲葉吉隆，設楽耕平：PSEにより全身化学療法可能となった再発大腸癌の1例。日本IVR学会第28回中部・第27回関西合同地方会，2010,(名古屋)，[口演]
- 036 金本高明，山浦秀和，佐藤洋造，名嶋弥菜，友澤裕樹，坂根誠，北角淳，寺倉梨津子，稲葉吉隆：腎壊抜去目的の腎機能廃絶術を施行した2例。日本IVR学会第28回中部・第27回関西合同地方会，2010,(名古屋)，[口演]
- 037 佐藤洋造：肝動注2。日本IVR学会第28回中部・第27回関西合同地方会，2010,(名古屋)，[座長]
- 038 山浦秀和，佐藤洋造，名嶋弥菜，金本高明，友澤裕樹，坂根誠，北角淳，寺倉梨津子，稲葉吉隆：右肝門索を伴う肝切除症例。日本医学放射線学会第147回中部地方会，(名古屋)

- 屋), [口演]
- 039 寺倉梨津子, 佐藤洋造, 山浦秀和, 名嶋弥菜, 金本高明, 友澤裕樹, 坂根誠, 北角淳, 稲葉吉隆: 嚢胞変性を伴う肺内分泌腫瘍の検討. 日本医学放射線学会第147回中部地方会, (名古屋), [口演]
- 040 北角淳, 佐藤洋造, 山浦秀和, 名嶋弥菜, 金本高明, 友澤裕樹, 坂根誠, 寺倉梨津子, 稲葉吉隆: 術前診断に苦しめた肺気管支嚢胞の1例日本医学放射線学会第147回中部地方会, (名古屋), [口演]
- 041 設楽紘平, 横田知哉, 高張大亮, 宇良敬, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 佐藤洋造, 名嶋弥菜, 河合宏紀, 田近正洋, 澤木明, 谷田部恭, 宇都宮節夫, 室圭: KRAS Wild Typeの既治療大腸癌患者に対するCetuximab+Irinotecan併用療法の第II相試験. 第8回日本臨床腫瘍学会, (東京), [口演]
- 042 佐藤洋造, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 名嶋弥菜, 金本高明, 宇良敬, 室圭: 大腸癌巨大卵巣転移に対する症状緩和目的の卵巣動脈化学塞栓療法. 第8回日本臨床腫瘍学会, (東京), [ポスター]
- 043 鈴木達也, 坂本英至, 佐藤洋造, 坪井賢治, 横山裕之, 柴田佳久, 近藤建, 佐藤幹則, 渡辺正一, 小椋美知則, 長谷川洋, 室圭: 愛知県がん診療連携拠点病院による多施設共同診療マニュアルの作成 セツキシマブのチーム医療システム構築を通じて. 第8回日本臨床腫瘍学会, (東京), [ポスター]
- 044 佐藤洋造: ポート管理のこころ放射線科医の立場から. 第2回京都西部化学療法研究会, (京都), [特別講演]

放射線治療部

- 001 Kodaira T, Toita T, Uno T, Shinoda A, Tomita N, Tsujii K, Teshima T, Mitsumori M, and Japanese Patterns of Care Study Working Subgroup of Cervical Cancer: Japanese Patterns of Care Study of definitive radiotherapy for cervical carcinoma among three surveys. 51th Annual meeting of the American Society for Therapeutic Radiation and Oncology, 2009, Chicago, [口演]
- 002 Nishimura Y, Tsujino K, Satouchi M, Tanaka M, Kodaira T, Kokubo M, Fukuda H, Yamamoto N, Nakagawa K, Fukuoka M: Phase III Study of Mitomycin/vindesine/cisplatin (MVP) versus Weekly Irinotecan/carboplatin (IC) or Weekly Paclitaxel/carboplatin (PC) with Concurrent Thoracic Radiotherapy (TRT) for Unresectable Stage III Non-small-cell Lung Cancer (WJTOG0105); Special Reference on Delivery of TRT. 51th Annual meeting of the American Society for Therapeutic Radiation and Oncology, 2009, Chicago, [口演]
- 003 Niibe Y, Ariga T, Kazumoto T, Nishimura T, Kodaira T, Eto H, Suzuki O, Kinoshita R, Tsujino K, Hayakawa K: High-dose rate intracavitary brachytherapy combined with external beam radiation therapy for under aged 40 years patients with invasive cervical carcinoma: clinical outcomes in 120

- patients in a Japanese multi-institutional study of JASTRO. 51th Annual meeting of the American Society for Therapeutic Radiation and Oncology, 2009, Chicago, [口演]
- 004 Kodaira T, Shikama N, Kagami Y, Ishikura S, Hiraoka M: Accelerated Fractionation versus Conventional Fractionation Radiation Therapy for Glottic Cancer of T1-2N0M0 Phase III Study: Japan Clinical Oncology Group Study (JCOG 0701). 27th Annual meeting of Korean Society for Therapeutic Radiology and Oncology, 2009, Korea, [口演]
- 005 Kodaira T: The reports of Aichi Cancer Center and Japanese experiences of Helical Tomotherapy. Tomotherapy Asia-Pacific Users Meeting, 2009, Taiwan, [口演]
- 006 立花 弘之, 富田 夏夫, 中原 理絵, 井口 治男, 溝口 信貴, 高田 彰憲, 古平 毅: 転移性骨腫瘍に対する Tomotherapy HiART system を用いた IMRT の経験. 第68回日本医学放射線学会総会, 2009, (横浜), [口演]
- 007 古平 毅: 教育講演16 治療3 頭頸部腫瘍 喉頭・副鼻腔. 第68回日本医学放射線学会総会, 2009, (横浜), [教育講演]
- 008 富田 夏夫, 古平 毅, 立花 弘之, 中原 理絵, 井口 治男, 溝口 信貴, 高田 彰憲: 限局性 MALT リンパ腫に対する放射線治療の治療成績. 第68回日本医学放射線学会総会, 2009, (横浜), [口演]
- 009 中村 達也, 新城秀典, 供田 卓也, 横内順一, 不破 信和, 古平 毅, 波戸岡俊三, 篠田雅幸: cT1-3N0M0 食道癌手術症例95例から検討した至適照射野について. 第68回日本医学放射線学会総会, 2009, (横浜), [口演]
- 010 古平 毅: 体にやさしい癌治療 トモセラピーを用いた高精度放射線治療. 福井済生会病院放射線治療センター開設記念講演, 2009, (福井), [講演]
- 011 古平 毅, 古谷 和久, 立花 弘之, 中原 理絵: 強度変調放射線治療(IMRT)の中長期成績 Tomotherapy を用いた強度変調放射線治療の治療成績と展望. 第33回日本頭頸部腫瘍学会, 2009, (札幌), [シンポジウム]
- 012 立花 弘之, 古谷 和久, 中原 理絵, 古平 毅: 再発頭頸部癌に対する反復CDDP動注化学療法. 第33回日本頭頸部腫瘍学会, 2009, (札幌), [口演]
- 013 中村 達也, 不破 信和, 高田 彰憲, 供田 卓也, 高山香名子, 横内順一, 古平 毅: 上咽頭癌局所再発例に対する化学放射線療法. 第33回日本頭頸部腫瘍学会, 2009/6/10-12, (札幌), [口演]
- 014 平川仁, 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 神山圭史, 兵藤伊久夫, 古平 毅, 長谷川泰久: 口腔癌における術後合併症の検討. 第33回日本頭頸部腫瘍学会, 2009, (札幌), [口演]
- 015 古平 毅, 室 圭, 篠田 雅幸, 波戸岡 俊三: 頸部食道癌に対してのトモセラピーを用いた強度変調放射線治療の応用. 第63回日本食道学会, 2009 (横浜), [口演]
- 016 中村 達也, 不破 信和, 古平 毅, 波戸岡俊三, 篠田雅幸: cT1-3N0M0 食道癌手術症例95例から検討した至適照射野について. 第63回日本食道学会, 2009, (横浜), [口演]
- 017 古平 毅 古谷 和久 立花 弘之 富田 夏夫 中原 理絵 溝口 信貴 野村 基雄 後藤 容子: 頸部食道癌

- に対してのトモセラピーを用いた強度変調放射線治療の応用. 日本医学放射線学会第145回中部地方会, 2009, (浜松), [口演]
- 018 立花 弘之、古谷 和久、富田 夏夫、中原 理絵、溝口 信貴、野村 基雄、後藤 容子、古平 毅: 転移性骨腫瘍に対するTomoTherapy Hi-Art systemを用いた IMRTの経験. 日本医学放射線学会第145回中部地方会, 2009, (浜松), [口演]
- 019 富田夏夫、古平 毅、古谷 和久、立花 弘之、中原 理絵、溝口 信貴、野村 基雄、後藤 容子: 限局型小細胞肺癌において線量分割と総線量が治療成績に与える影響について. 日本医学放射線学会第145回中部地方会, 2009, (浜松), [口演]
- 020 新部 譲 戸板 孝文 榎本 智子 西村 哲夫 古平 毅 江藤 英博 鈴木 修 木下 留美子 山下 英臣、辻野 佳世子 大西 洋 兼安 祐子 武本 充広 山内 智香子 早川 和重: 若年者子宮頸癌の放射線治療成績 日本放射線腫瘍学会研究課題全国調査. 第46回日本婦人科腫瘍学会学術集会, 2009, (新潟), [口演]
- 021 古平 毅: 「ターゲットの標準化を目指して」喉頭癌. 第20回日本高精度放射線外部照射研究会, 2009, (仙台), [シンポジウム]
- 022 古谷 和久、溝口 信貴、中原 理絵、後藤容子、野村 基雄、富田 夏夫、立花 弘之、古平 毅: トモセラピーによる頭頸部扁平上皮癌に対する強度変調放射線治療後の再発形式についての検討. 第20回日本高精度放射線外部照射研究会, 2009, (仙台), [口演]
- 023 戸板孝文、兼安祐子、宇野隆、吉村亮一、大野達也、古平毅、古谷和久、石倉聡、平岡真寛: 子宮頸癌におけるターゲットの標準化を目指して: CTV コントラリングのコンセンサスマニュアル作成. 第20回日本高精度放射線外部照射研究会, 2009, (仙台), [口演]
- 024 戸板孝文、兼安祐子、宇野隆、吉村亮一、大野達也、古平毅、古谷和久、石倉聡、平岡真寛: 子宮頸癌の骨盤リンパ節領域CTV contouring. 第20回日本高精度放射線外部照射研究会, 2009, (仙台), [口演]
- 025 古平 毅、戸板 孝文、宇野 隆、篠田 充巧、富田 夏夫、辻井 克友、稲岡 美穂、手島 昭樹、光森通英: JPCS子宮頸癌小作業部会: Patterns of Care Studyからみた我が国の放射線治療の現状 JPCSからみた子宮頸癌非手術症例の診療構造の推移. 第22回日本放射線腫瘍学会, 2009, (京都), [シンポジウム]
- 026 古谷 和久、溝口 信貴、中原 理絵、後藤容子、野村 基雄、富田 夏夫、立花 弘之、古平 毅: 頭頸部扁平上皮癌に対する強度変調放射線治療 (IMRT) 後の再発形式の検討. 第22回日本放射線腫瘍学会, 2009, (京都), [口演]
- 027 富田夏夫、古平毅、古谷和久、立花弘之、中原理絵、溝口信貴、野村基雄、後藤容子: 限局型小細胞肺癌に対する放射線化学療法において放射線治療法が治療成績に与える影響. 第22回日本放射線腫瘍学会, 2009, (京都), [口演]
- 028 溝口信貴、古平毅、古谷和久、立花弘之、富田夏夫、中原理絵、野村基雄、後藤容子: 頭頸部癌に對するトモセラピーを用いたIMRT経過中の線量分布変化に対する臨床的検討. 第22回日本放射線腫瘍学会, 2009, (京都), [口演]
- 029 後藤 容子、野村 基雄、溝口 信貴、中原 理絵、富田 夏夫、立花 弘之、古谷 和久、古平 毅: Helical Tomotherapyを用いた上咽頭癌局所再発症例に対しての再照射例の検討. 第22回日本放射線腫瘍学会, 2009, (京都), [口演]
- 030 野村基雄、鎌田実、小島博之、林謙治、香西雅介、古平毅、澤田敏: 胸部食道癌化学放射線治療後における心筋へのFDG-PET集積の経時的変化に関する検討. 第22回日本放射線腫瘍学会, 2009, (京都), [口演]
- 031 井口 治男、西村哲夫、古平 毅、古谷 和久、立花 弘之、富田 夏夫、中原 理絵、溝口 信貴: 頭頸部癌化学放射線療法後の計画的頸部廓清術の週及の検討. 第22回日本放射線腫瘍学会, 2009, (京都), [口演]
- 032 香西雅介、鎌田実、小島博之、野村基雄、林謙治: 食道がん化学療法後の救済手術例の検討. 第22回日本放射線腫瘍学会, 2009, (京都), [口演]
- 033 林謙治、鎌田実、小島博之、野村基雄: 当院におけるIVB期食道がんの治療成績. 第22回日本放射線腫瘍学会, 2009, (京都), [口演]
- 034 古平 毅: 肺がんに対する放射線治療の現状と展望. 第4回トヨタ・安城肺がんセミナー, 2009, (豊田), [口演]
- 035 古平 毅: 頭頸部腫瘍(2) 気管・食道浸潤への対応放射線治療医からの提言 臓器温存、機能温存治療にむけての挑戦. 第47回癌治療学会, 2009, (横浜), [シンポジウム]
- 036 宇良敬、室圭、高張大亮、横田知哉、設楽紘平、稲葉吉隆、山浦秀和、佐藤洋造、名嶋弥菜、金本高明、古谷和久: ベバシズマブの導入(2007年)後、大腸癌脳転移出現の頻度と時期の動向について. 第47回癌治療学会, 2009, (横浜), [口演]
- 037 小倉 友二、田丸 裕巳、脇田 利明、林 宣男、富田 夏夫、立花 弘之、古谷 和久、古平 毅: 前立腺全摘除術後再発に対する救済放射線療法についての検討. 第47回癌治療学会, 2009, (横浜), [口演]
- 038 清水 秀年、今村 浩志、中島 地康、久保田 隆士、大崎 光、中山 雅詞、吉本 学、河合 稔: 当院におけるTomoTherapy Hi-Art SystemのMonthly QA. 第二回中部放射線医療技術学術大会, 2009, (大垣), [口演]
- 039 古平 毅: 頭頸部癌に對しての強度変調放射線治療の実践と展望. 神戸大学がんプロフェッショナル養成プラン, 2009, (神戸), [講演]
- 040 後藤容子、野村 基雄、溝口 信貴、中原 理絵、富田 夏夫、立花 弘之、古谷 和久、古平 毅: Helical Tomotherapyを用いた上咽頭癌局所再発症例に対しての再照射例の検討. 第27回東海頭頸部腫瘍研究会, 2010, (名古屋), [座長]
- 041 溝口 信貴、後藤容子、野村 基雄、中原 理絵、富田 夏夫、立花 弘之、古谷 和久、古平 毅: 頭頸部癌に對するTomoTherapyを用いたIMRTに伴う高線量域の出現と関連因子の検討. 第21回日本高精度放射線外部照射研究会, 2010, (熊本), [口演]
- 042 後藤容子、野村 基雄、溝口 信貴、中原 理絵、富田

- 夏夫、立花 弘之、古谷 和久、古平 毅：Helical Tomotherapyを用いた上咽頭癌局所再発症例に対しての再照射例の検討。第21回日本高精度放射線外部照射研究会, 2010, (熊本), [口演]
- 043 清水秀年、立花 弘之、久保田 隆士、大崎光、梶原和則、加藤金雄、中島地康、河合稔、中山雅詞、吉本学、古平 毅：TomoTherapy Planning Stationにおける計画パラメータの特性。第21回日本高精度放射線外部照射研究会, 2010, (熊本), [口演]
- 044 古平 毅：癌放射線治療総論。第一回熊本がん化学療法・放射線療法セミナー, 2010, (熊本), [口演]
- 045 古平 毅、後藤容子、野村 基雄、溝口 信貴、中原 理絵、富田 夏夫、立花 弘之、古谷 和久：Helical Tomotherapyによる上咽頭癌のIMRTの治療成績の検討。日本医学放射線学会第146回中部地方会, 2010, (名古屋), [口演]
- 046 立花 弘之、後藤容子、野村 基雄、溝口 信貴、中原 理絵、富田 夏夫、古谷 和久、古平 毅：前立腺癌L-125組織内照射における早期死亡例の経験。日本医学放射線学会第146回中部地方会, 2010, (名古屋), [口演]
- 047 富田夏夫 古平毅 古谷和久 立花弘之 中原理絵 溝口 信貴 野村 基雄 後藤容子 不破信和 有地淑子：上咽頭癌のリンパ節転移に関連する因子：頸部予防的照射野縮小への試み。日本医学放射線学会第146回中部地方会, 2010, (名古屋), [口演]
- 048 溝口 信貴、後藤容子、野村 基雄、中原 理絵、富田 夏夫、立花 弘之、古谷 和久、古平 毅：頭頸部癌に対するTomoTherapyを用いたIMRTに伴う高線量域の出現と関連因子の検討。日本医学放射線学会第146回中部地方会, 2010, (名古屋), [口演]
- 049 野村 基雄、後藤容子、溝口 信貴、中原 理絵、富田 夏夫、立花 弘之、古谷 和久、古平 毅：食道癌放射線治療患者におけるDVH解析からみた放射線肺炎の予後因子の検討。日本医学放射線学会第146回中部地方会, 2010, (名古屋) [口演]
- 050 後藤容子、野村 基雄、溝口 信貴、中原 理絵、富田 夏夫、立花 弘之、古谷 和久、古平 毅：Helical Tomotherapyを用いた上咽頭癌局所再発症例に対しての再照射例の検討。日本医学放射線学会第146回中部地方会, 2010, (名古屋), [口演]

外来部

- 001 堀尾芳嗣、清水淳市、朴智栄、朴将哲、小川紫都、吉田公秀、樋田豊明、関戸好孝：肺癌細胞株におけるトポイソメラーゼII阻害剤アムルピシンの感受性とRanBP2とトポイソメラーゼII遺伝子発現。第49回日本呼吸器学会, 2009 (東京), [ポスター]
- 002 清水淳市、福井高幸、千種智之、雨森貞子、前田孝子、朴智栄、朴将哲、小川紫都、堀尾芳嗣、吉田公秀、樋田豊明：がん専門病院における結核感染症の検討。第49回日本呼吸器学会,

2009 (東京), [ポスター]

- 003 長田啓隆、立松義朗、谷田部恭、有馬千夏、藤井万紀子、村上秀樹、近藤豊、堀尾芳嗣、柳澤聖、関戸好孝、高橋隆：肺癌の転移関連遺伝子CLCP1の機能解析(Roles of CLCP1 gene in lung cancer progression)。第68回日本癌学会, 2009 (横浜), [口演]
- 004 室圭、宇良敬、高張大亮、横田知哉、設楽紘平、柴田剛志、堀尾芳嗣、今泉文、深谷幸代、大石和明：次代の外来化療センターのあり方とは？安全で快適な実地臨床、治験実施に向けて。第47回日本癌治療学会, 2009 (横浜) [口演]
- 005 堀尾芳嗣、樋田豊明、國頭英夫、宝来威、一瀬幸人、西脇裕、山本信之、河原正明、西條長宏、福岡正博：分子標的治療の基礎と臨床 Star Trials from Japan 3 進行非扁平上皮・非小細胞肺癌に対するCBDCA+PTX±ベバシズマブの無作為化比較第II相試験。第50回日本肺癌学会, 2009 (東京) [口演]
- 006 清水淳市、朴将哲、小川紫都、堀尾芳嗣、吉田公秀、樋田豊明：原発性肺癌における硬膜内脊髄転移の検討。第50回日本肺癌学会, 2009 (東京) [ポスター]
- 007 吉田公秀、谷田部恭、朴将哲、小川紫都、清水淳市、堀尾芳嗣、樋田豊明：非小細胞肺癌に対するエルロチニブ投与例の検討。第50回日本肺癌学会, 2009 (東京) [ポスター]
- 008 堀尾芳嗣、小川紫都、朴将哲、清水淳市、吉田公秀、谷田部恭、樋田豊明：1次治療でゲフィチニブを投与した再生不良性貧血合併EGFR変異陽性限局型小細胞肺癌の1例。第8回日本臨床腫瘍学会学術集会。2010 (東京), [ポスター]
- 009 北川智余恵、坂英雄、小暮啓人、澤幸幸、石黒崇、吉田勉、樋田豊明、吉田公秀、堀尾芳嗣、斎藤博、奥野元保、高橋孝輔、進藤文、大野康、杉浦孝彦：切除不能III期非小細胞肺癌同時化学放射線療法時の治療逸脱が生存に及ぼす影響 第III相比較試験(WJTOG0105)サブ解析結果。第96回日本癌学会中部支部会, 2010 (名古屋), [口演]

緩和ケア部

- 001 Yasunaga K：Narrative Ansätze in der Therapie depressiver KlientInnen, 20 Jahre IST – Jubiläumfachtagung. Störungsspezifisches Wissen – Nutzen für die systemische Therapie, 2009, (Wien), [講演]
- 002 小森康永：緩和ケアチームの実際と精神腫瘍学。新臨床腫瘍学セミナー, 2009, (名古屋), [講演]
- 003 小森康永：安城更生病院緩和ケア研修会精神腫瘍学担当, 2009, (安城), [講演]
- 004 小森康永：精神腫瘍学。第7回名古屋がん疼痛緩和フォーラム, 2009, (名古屋), [講演]
- 005 小森康永：乳がん患者とのコミュニケーション。2009, (京都), [講演]
- 006 小森康永：正常反応と適応障害の鑑別について。愛知県精神腫瘍学研修, 2009, (名古屋), [講演]
- 007 小森康永：半田市市民病院緩和ケア研修会精神腫瘍学担当, 2009, (半田), [講演]
- 008 小森康永：ナラティブな緩和ケア。家族療法ワークショップ・

- イン・鳥取,2009,(鳥取),[講演]
- 009 小森康永:名古屋記念病院緩和ケア研修会精神腫瘍学担当,2009,(名古屋),[講演]
- 010 小森康永:ナラティブな緩和ケア.グリーン・カウンセリング・センター講義,2009,(東京),[講演]
- 011 小森康永:がんと緩和時間.愛知医科大学精神科,2009,(名古屋),[講演]
- 012 小森康永:愛知県がんセンター中央病院緩和ケア研修会精神腫瘍学担当,2009,(名古屋),[講演]
- 013 小森康永:もしも「うつ病」が話したら.愛知県厚生連病院ソーシャルワーカー勉強会,2009,(知多),[講演]
- 014 小森康永:サイコオンコロジーへの取り組み.2009,[講演]

看護部

- 001 青山寿昭:食道癌術後の反回神経麻痺による嚥下障害への関わり.日本嚥下障害臨床研究会,2009,(札幌),[口演]
- 002 新貝夫弥子:乳がん化学療法のレジメンによる体重増加と体水分貯留の関係性.第17回日本乳癌学会学術集会,2009,(東京),[口演]
- 003 山口裕美子、丹羽沙津木、笹川良子、福岡敬子、大本美穂、佐野悦子、坂田正治、稲葉吉隆、山浦秀和、佐藤洋造:ダブルリザーバーの刺し間違いにおける症例検討.第34回リザーバー研究会,2009,(名古屋),[口演]
- 004 福岡勉:食道癌周手術期クリニカルパス改訂の考察.日本クリニカルパス学会,2009,(岐阜),[口演]
- 005 黒河瑞江、小原真紀子、戸崎加奈江、中島貴子:エルロニチブ(タルセバ?)内服治療に伴う皮膚障害と看護支援.平成21年度愛知県看護研究会,2009,(名古屋),[口演]
- 006 田中裕子、伊藤環、野口見知子、浦田真里子、清島いつき、折笠康栄、松尾憲太郎:シバリング予防についての補液加湿の有効性に関する検討.日本手術看護学会東海地区第51回地区学会,2009,(名古屋),[口演]
- 007 藤田仁美、高木礼子、山口由果:当院女性職員の乳がん検診受診の実態調査.第19回日本乳がん検診学会,2009,(札幌),[口演]
- 008 辻元伸江:入院中のがん患者せん妄に関する患者・家族、スタッフの介入の有効性.第14回日本緩和医療学会学術大会,2009,(大阪),[示説]
- 009 野中瞳、榊原由美子、兵藤伊久夫、神山圭史:上皮増殖因子受容体チロキシンキナーゼ阻害剤が仙骨部褥瘡の治癒遅延に影響したと考えられる一症例.第11回日本褥瘡学会学術集会,2009,(大阪),[示説]
- 010 高木礼子、小森康永、堀尾章代、岩田広治:乳がん術後患者に対するグループ療法のこころみ.第6回日本乳癌学会中部地方会,2009,(浜松),[口演]
- 011 小原真紀子:他施設共同によるcetuximab投与の看護介入の検討.第47回日本癌治療学会学術集会,2009,(横浜),[口演]
- 012 齋藤和佐:手術室看護師の同伴入室が患者に与える影響.第23回日本手術看護学会年次大会,2009,(千葉),[口演]
- 013 古田洋子、小澤洋子、佐野雄三:転倒防止の取り組み〜クリニカルパスの改善による転倒低減〜.医療の質・安全学会第4回学術集会,2009,(東京),[示説]
- 014 千代松佑子:正中創離開により器具貼用と創傷処置に難渋した一症例.第27回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会,2010,(京都),[示説]
- 015 中山衣代:内視鏡処置具の安全な廃棄方法について-結紮バンドを使用して-.第21回愛知県消化器内視鏡懇話会,2010,(名古屋),[口演]
- 016 小原真紀子:他施設共同によるセツキシマブ投与マニュアルの作成.第24回日本がん看護学会学術集会,2010,(静岡),[示説]
- 017 西尾里美:脳転移をきたした肺がん患者の苦痛・苦悩とその対処.第24回日本がん看護学会学術集会,2010,(静岡),[口演]
- 018 堀田枝里:がん専門病院の一般病棟における退院調整の現状と今後の課題.第24回日本がん看護学会学術集会,2010,(静岡),[示説]
- 019 林千春:化学療法を受けるがん患者に対する看護の実践状況と関連要因.第24回日本がん看護学会学術集会,2010,(静岡),[示説]
- 020 久保知、柴田亜弥子、若杉和子:上咽頭癌の化学療法併用強度変調放射線治療に伴う放射線皮膚炎の予防への皮膚ケア介入.第24回日本がん看護学会学術集会,2010,(静岡),[示説]
- 021 新貝夫弥子ほか:乳がん化学療法のレジメンによる体重増加と体水分貯留.第24回日本がん看護学会学術集会,2010,(静岡),[口演]
- 022 野中瞳:当院におけるイレオストミーのケア・管理について考える.日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会,2010,(京都),[示説]
- 023 兵藤千草:症状マネジメントにおける看護の役割.がん看護セミナー,2009,(名古屋),[講演 座長]
- 024 兵藤千草:地域の求められるがん看護.第11回日本看護医療学会学術集会,2009,(三重),[シンポジウム シンポジスト]
- 025 兵藤千草:がん専門病院における外来看護の組織的戦略への提言.第10回国際がん看護セミナー,2009,(東京),[シンポジウム シンポジスト]
- 026 兵藤千草:がんと向き合う.第3回名古屋商工会議所例会,2010,(名古屋),[講演 講師]
- 027 兵藤千草:がん化学療法における看護師の役割.第4回ナーススキルアップセミナー,2010,(名古屋),[講演 司会]
- 028 兵藤千草:がん患者の心の持ち方を支えるコツ.第24回日本がん看護学会学術集会,2010,(静岡),[教育講演 司会]
- 029 向井未年子:がん看護のコラボレーション.第2回三重がん看護フォーラム,2009,(三重),[講演 座長]
- 030 向井未年子:がん看護領域における疼痛緩和の普及と発展.第11回日本看護医療学会学術集会,2009,(三重),[講演 座長]
- 031 向井未年子:コンサルテーション論.愛知県立大学看護実践センター認定看護師教育課程,2009,(名古屋),[講義]

- 講師]
- 032 向井未年子：がん看護。愛知医科大学看護学部特別講義，2009,(名古屋)，[講義 講師]
- 033 向井未年子：看護調整機能論。名市大大学院講義，2009,(名古屋)，[講義 講師]
- 034 向井未年子：臨床がん看護学。名大大学院講義，2009,(名古屋)，[講義 講師]
- 035 向井未年子：コンサルテーション論。愛知県立大学大学院，2009,(名古屋)，[講義 講師]
- 036 向井未年子：現場で考える臨床倫理。愛知県済生会病院，2009,(名古屋)，[講義 講師]
- 037 高木仁美：いのちの授業。第33回日本死の臨床研究会年次大会，2009,(名古屋)，[講演 座長]
- 038 瀬古志桜：乳がん手術後のドレーン管理と退院指導。第6回乳がん学会中部地方会看護セミナー，2009,(静岡)，[講演 座長]
- 039 新田都子：緩和ケアチームにおける看護の役割と専門性。愛知県立大学看護学部，2009,(名古屋)，[講義 講師]
- 040 新田都子：痛みに対する看護。愛知総合看護専門学校，2009,(名古屋)，[特別講義 講師]
- 041 新田都子：がん性疼痛の看護。東海地方准看護師のつどい，2009,(名古屋)，[講師 講師]
- 042 川瀬洋子：スピリチュアルケアとは。愛知県看護協会，2010,(名古屋)，[講義 講師]
- 043 榊原由美子：東海地区ダンサック学術イレオストミーセミナー，2009,(名古屋)，[講演 講師]
- 044 榊原由美子：平成21年度研修会 ストーマケアの実際。愛知県看護協会，2009,(名古屋)，[講義 講師]
- 045 小島 瞳：ストーマって何？。市民公開講座，2009,(名古屋)，[講演 講師]
- 046 小島 瞳：褥瘡に関する最新情報と最近のケアについて。済生会講演会，2009,(名古屋)，[講演 講師]
- 047 小原真紀子：肺がん治療に伴う様々な症状。愛知県がんセンター公開講座，2009,(名古屋)，[講演 講師]
- 048 小原真紀子：アービタックスCo-medical Seminar。東三河地区化学療法セミナー，2009,(知立市)，[講演 講師]
- 049 小原真紀子：造血幹細胞移植の看護。豊田厚生病院，2009,(豊田市)，[講演 講師]
- 050 小原真紀子：がん化学療法看護。名鉄病院，2009,(名古屋)，[講演 講師]
- 051 小原真紀子：がん化学療法看護研修会。名古屋医療センター，2010,(名古屋)，[講演 講師]
- 052 戸崎加奈江：血液領域での分子標的薬副作用管理における看護師の役割。第5回がん医療従事者の育成に関する研究会，2009,(名古屋)，[講演 講師]
- 053 戸崎加奈江：特別講義「がん化学療法時の看護」。愛知県立総合看護専門学校，2009,(名古屋)，[講演 講師]
- 054 戸崎加奈江：大腸がんにおける看護師の役割。第8回福岡外来化学療法研究会，2009,(福岡)，[講演 講師]
- 055 戸崎加奈江：造血器腫瘍患者の化学療法と看護の「事例から学ぶ造血器腫瘍患者への看護の実際」。日本看護協会，2009,(神戸)，[講演 講師]
- 056 戸崎加奈江：大腸がんの薬物療法・最新の治療動向「皮膚障害」。第1回中外がん看護eセミナー，2009,(東京)，[講演 講師]
- 057 戸崎加奈江：チームで取り組む肺がん治療「がん治療における看護師の役割～愛知県がんセンター中央病院の場合～」。帝京がんセミナー第6回化学療法室セミナー，2009,(東京)，[講演 講師]
- 058 戸崎加奈江：アービタックスR投与における看護師の役割～Practice Manual for Cetuximab v1.1より～。徳島大腸癌治療セミナー，2009,(徳島)，[講演 講師]
- 059 戸崎加奈江：がん化学療法における看護師の役割。第4回 Nurse Skill Up Seminar，2010,(名古屋)，[講演 講師]
- 060 戸崎加奈江：平成21年度がん化学療法看護研修会。名古屋医療センター，2010,(名古屋)，[講演 講師]
- 061 宇佐美秀子：内視鏡看護について。愛知県立大学看護学部，2009,(名古屋)，[講義 講師]
- 062 段 浩美：がん医療のサービスと社会的支援。愛知県立大学看護実践センター認定看護師教育課程，2009,(名古屋)，[講義 講師]
- 063 段 弘美：緩和医療 がん性疼痛看護概論。愛知県立大学看護実践センター認定看護師教育課程，2009,(名古屋)，[講義 講師]
- 064 濱口由美子：平成22年度訪問看護職員養成講習会，2010,(名古屋)，[講義 講師]

薬剤部

- 001 大石和明：「CPT-11とUGT1A1－基礎から臨床応用まで」。第19回日本医療薬学会，2009,(長崎)，[座長]
- 002 立松三千子,金正煥,近藤勝弘,山岡智恵,前島光廣,佐藤由美子,水野靖也,後藤厚司,澤田一美,大石和明,細田蓮子：都道府県がん診療連携拠点病院における薬剤部と保険薬局との地域連携の試み(第2報)。第3回緩和医療薬学会年会，2009,(横浜)，[示説]
- 003 水野靖也,中川千玲,木野淑子,伊藤宏佳,立松三千子,大石和明：より安全なオピオイドローテーションの実践。第3回緩和医療薬学会年会，2009,(横浜)，[示説]
- 004 立松三千子：「癌化学療法の薬剤師の取り組み」。静岡県病院薬剤師会・西部支部東ブロック会，2009,(掛川)，[口演]
- 005 大石和明：「麻薬・向精神薬の取扱いと管理」。第2回・第3回がん専門薬剤師研修，2009,(名古屋)，[口演]
- 006 水野靖也：「オピオイドローテーション」。第2回・第3回がん専門薬剤師研修，2009,(名古屋)，[口演]
- 007 立松三千子：「緩和ケアにおける薬剤師の役割－愛知県がんセンター中央病院における取り組み－」。岐阜県病院薬剤師会東濃ブロック会，2009,(瑞浪)，[口演]
- 008 水野靖也：「がん性疼痛に関する臨床薬理」。愛知県立大学認定看護師教育課程，2009,(名古屋)，[口演]
- 009 立松三千子：「がん治療における薬剤師の役割－愛知県がんセンター中央病院の場合－」。帝京がんセンター 第6回

化学療法室セミナー, 2009, (東京), [口演]

010 木野 淑子：「ステント適正使用の為にチーム医療座談会」2009, (名古屋), [座談会]

011 立松三千子：「がん治療における薬剤師の役割－愛知県がんセンター中央病院での取り組み－」. 東海がんプロフェッショナル養成プラン 平成21年度薬剤師セミナー, 2010, (名古屋), [口演]

3. 学会等における研究発表テーマ調べ (研究所)

所長室

- 001 **田島和雄:** 乳癌の予防は可能か —疫学からみたriskと予防— 乳がんに対する予防医療. 第19回日本乳癌検診学会総会, 2009, (札幌) [シンポジウム]
- 002 **Tajima K:** The role of cancer research in cancer control program. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜) [パネリスト]
- 003 **Tajima K:** Recent activities of cancer control program in Japan and Asian Pacific Region. 20th Asia Pacific Cancer Conference, 2009, (つくば) [特別講演]
- 004 **Tajima K:** Sufficient folate intake and possible risk reduction of colorectal and breast cancer in Asia. The 15th Charies Heidelberger International Symposium in Cancer Research, 2010, (Phitsanulok, Thailand) [シンポジウム]
- 005 **Tajima K:** Promotion of Cancer Control Program and Cancer Information Network in Japan. 3rd National congress of Oncology, 2009, (Manta, Ecuador) [特別講演]
- 006 **Tajima K:** Risk Factors of Cancer and Its Prevention Strategies in Japan. 3rd National Congress of Oncology, 2009, (Manta, Ecuador) [特別講演]

疫学・予防部

- 001 **Tanaka H, Ito H, Ioka A, Shibata A, Naito M, Fujita M, Suyama A, Soda M, Sugiyama H, Mor V, Matsuo K:** Cigarette Smoking and Changes in the Japanese Male Lung Cancer Incidence by Histological Type from 1975 to 2003. 31st Annual Scientific Congress and Meeting of the International IACR, 2009, (New Orleans), [口演]
- 002 **Hosono S, Matsuo K, Kajiyama H, Hirose K, Suzuki T, Kawase T, Kidokoro K, Nakanishi T, Hamajima N, Kikkawa F, Tajima T, Tanaka H:** The inverse association between dietary calcium and vitamin D intake and cervical cancer risk among Japanese women. AACR 100th Annual Meeting 2009, 2009, (Denver), [ポスター]
- 003 **Matsuo K, Hiraki A, Suzuki T, Kawase T, Watanabe M, Hamajima N, Tajima T, Tanaka T:** Prostate stem cell antigen(PSCA)gene polymorphisms associate with the risk of stomach cancer in Japanese. AACR 100th Annual Meeting 2009, 2009, (Denver), [ポスター]
- 004 **Kanda J, Matsuo K, Kawase K, Suzuki T, Ichinohe T, Seto M, Morishima Y, Tajima T, Tanaka H:** Effect of alcohol intake and smoking on malignant lymphoma risk in Japanese: A hospital-based case-control study at Aishi Cancer Center. AACR 100th Annual Meeting 2009, 2009, (Denver), [ポスター]
- 005 **Oze I, Hiraki A, Suzuki T, Hatoooka S, Yatabe Y, Hasegawa Y,**

Shinoda M, Kawase T, Tajima T, Tanaka H, Matsuo K: The magnitude of alcohol dehydrogenase (ADH) and aldehyde dehydrogenase (ALDH) polymorphisms effect, and alcohol drinking are different between esophageal cancer and head and neck cancer. AACR 100th Annual Meeting 2009, 2009, (Denver), [ポスター]

- 006 **Kawase T, Matsuo K, Hirose K, Ito H, Hosono S, Watanabe M, Iwata H, Tajima K, Tanaka H:** Six polymorphisms identified by genome wide association studies and risk of breast cancer among Japanese women. ADVANCES IN BREAST CANCER RESEARCH, 2009, (San Diego), [ポスター]
- 007 **Kawase T, Matsuo K, Morishima Y on behalf of the IHWG:** Universally significant HLA-C mismatched epitopes responsible for immunological events after unrelated donor transplantation. The American Society for Histocompatibility and Immunogenetics 35th Annual Meeting, 2009, (San Francisco)
- 008 **Kawase T, Matsuo K, Nakamura T, Kanda J, Ito H, Hosono S, Watanabe M, Yatabe Y, Morishima Y, Tajima K, Seto M, Nakamura S, Tanaka H:** Alcohol drinking, smoking, past history of gastroduodenal ulcer, height, and risk of API2-MALT1 fusion positive and negative gastric MALT lymphoma among Japanese. 51st ASH Annual Meeting and Exposition, 2009, (New Orleans), [ポスター]
- 009 **Okasaka T, Matsuo K, Ito H, Hosono S, Kawase T, Tanaka H, Yokoi K, Tajima K:** The Association of soy consumption and lung cancer among Japanese women: Analyses stratified by smoking status and reproductive factors. AACR Frontiers in Cancer Prevention Research 2009, 2009, (Houston), [ポスター]
- 010 **Matsuo K, Ito H, Hosono S, Watanabe M, Kawase T, Suzuki T, Hisai T, Yatabe Y, Tanaka H, Tajima K:** Association between CYP7A1 loci and the risk of proximal colon cancer in the Japanese. AACR Frontiers in Cancer Prevention Research 2009, 2009, (Houston), [ポスター]
- 011 **Oze I, Matsuo K, Suzuki T, Kawase T, Hosono S, Ito H, Watanabe M, Tajima K, Tanaka H:** Facial flushing after alcohol consumption was not a risk factor for upper aerodigestive tract cancer. 20th Asia Pacific Cancer Conference, 2009, (Tsukuba), [ポスター]
- 012 **Tanaka H:** Current status of population-based cancer registries in Japan. 20th Asia Pacific Cancer Conference, 2009, (Tsukuba),
- 013 **Matsuo K, Shitara K, Hatoooka S, Ura T, Takahari D, Yokota T, Abe T, Kawai H, Tajima M, Nakamura T, Shinoda M, Tajima K, Muro K, Tanaka H:** Heavy Tobacco Smoking is Associated with Poor Prognosis in Japanese Patients with Esophageal Cancer. 20th Asia Pacific Cancer Conference, 2009, (Tsukuba), [ポスター]
- 014 **Matsuo K:** Evaluation of lifestyle on cancer risk by molecular epidemiologic approach. The Joint Scientific Meeting of the International Epidemiological Association Western Pacific

- Region and the Japan Epidemiological Association, 2010, (Saitama), [口演]
- 015 **Matsuo, K., Kanda, J., Suzuki, T., Hosono, S., Kawase, T., Ito, H., Tajima, K., Tanaka H.:** Association between obesity and the risk of malignant lymphoma in Japanese: A case-control study. The Joint Scientific Meeting of the International Epidemiological Association Western Pacific Region and the Japan Epidemiological Association, 2010, (Saitama), [ポスター]
- 016 **Ito H, Matsuo K, Hosono S, Watanabe M, Kawase T, Suzuki T, Hirai T, Yatabe Y, Tanaka H, Tajima K.:** Association between CYP7A1 loci and the risk of proximal colorectal cancer in Japanese. The Joint Scientific Meeting of the International Epidemiological Association Western Pacific Region and the Japan Epidemiological Association, 2010, (Saitama), [口演]
- 017 **Oze I, Matsuo K, Suzuki T, Kawase T, Hosono S, Ito H, Watanabe M, Tajima K, Tanaka H.:** Facial flushing after alcohol consumption is less useful to predict upper aerodigestive tract cancer risk than ALDH2 polymorphism. The Joint Scientific Meeting of the International Epidemiological Association Western Pacific Region and the Japan Epidemiological Association, 2010, (Saitama), [口演]
- 018 **Watanabe M, Tateishi T, Suzuki T, Matsuo K, Kawase T, Hosono S, Ito H, Tanaka H.:** Correlation between Dietary Intake of Docosahexaenoic Acid (DHA) and Compositions of Fatty Acids in Plasma and Erythrocyte Membranes: an Intervention Study. The Joint Scientific Meeting of the International Epidemiological Association Western Pacific Region and the Japan Epidemiological Association, 2010, (Saitama), [ポスター]
- 019 **Tanaka H.:** Changing impact of hepatitis B and C virus infection for development of primary liver cancer in Japanese population. International symposium on hepatocellular carcinoma, 2010, (Kagoshima), [招請講演]
- 020 **Tanaka H.:** Attributions of alcohol drinking to cancer incidence / mortality in the Japanese population. Cancer Biology, Epidemiology, and Policy Making for Tobacco and Alcohol Control, 2010, (Nagoya), [招請講演]
- 021 **Matsuo K.:** Molecular epidemiological studies of breast cancer: Implication for prevention. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [口演]
- 022 **Ito H, Weitzen S.:** Use of Breast Cancer Screening Services by Health Insurance Coverage and Income Level among Women Aged 40-64. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [ポスター]
- 023 **川瀬孝和, 松尾恵太郎, 鈴木勇史, 細野覚代, 渡邊美貴, 田島和雄, 田中英夫, 広瀬かおる, 岩田広治:** ビタミンD, カルシウム摂取と乳がん発症との関連. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [口演]
- 024 **細野覚代, 松尾恵太郎, 川瀬孝和, 鈴木勇史, 伊藤秀美, 田島和雄, 田中英夫, 広瀬かおる, 中西透:** 日本人における食物摂取, 栄養素摂取と子宮頸癌リスクとの関連. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [口演]
- 025 **佐藤文仁, 松尾恵太郎, 鈴木勇史, 川瀬孝和, 渡邊美貴, 田島和雄, 田中英夫:** 日本人における頭頸部・食道がんに対するブラッシング習慣のがん予防効果の検討. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [ポスター]
- 026 **尾瀬功, 松尾恵太郎, 鈴木勇史, 川瀬孝和, 田中英夫, 田島和雄:** アルコール脱水素酵素遺伝子ADH4,ADH7の遺伝子多型と上気道・消化管がんの危険性. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [シンポジウム]
- 027 **尾瀬功, 松尾恵太郎, 鈴木勇史, 川瀬孝和, 伊藤秀美, 細野覚代, 渡邊美貴, 波戸岡俊三, 長谷川泰久, 篠田雅幸, 田島和雄, 田中英夫:** 日本人におけるアルコール脱水素酵素遺伝子多型の上気道・消化管がんに与える影響. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 028 **伊藤秀美, 松尾恵太郎, Vincent Mor, 柴田亜希子, 藤田学, 西 信雄, 早田みどり, 祖父江友孝, 田中英夫:** 日米のフィルタータバコ消費量の増加と肺腺癌罹患率の増加との関連. 第68回 日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 029 **広瀬かおる, 松尾恵太郎, 鈴木勇史, 渡邊美貴, 田中英夫, 田島和雄:** 日本人閉経後女性における生殖歴関連要因および身体要因と血清ホルモンレベルとの関連. 第68回 日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 030 **川瀬孝和, 松尾恵太郎, 広瀬かおる, 伊藤秀美, 細野覚代, 岩田広治, 田中英夫, 田島和雄:** 日本人女性における飲酒と乳がん発症との関連. 第68回 日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 031 **細野覚代, 松尾恵太郎, 広瀬かおる, 伊藤秀美, 川瀬孝和, 鈴木勇史, 中西 透, 田島和雄, 田中英夫:** 日本人女性におけるBody Mass Indexの変化と子宮内膜癌リスクについての検討. 第68回 日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 032 **佐藤文仁, 尾瀬 功, 松尾恵太郎, 鈴木勇史, 山本憲幸, 川瀬孝和, 渡邊美貴, 波戸岡俊三, 長谷川泰久, 篠田雅幸, 上田 実, 田島和雄, 田中英夫:** 上部気道・消化器がんと歯磨き回数との関係. 第68回 日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 033 **岡阪敏樹, 松尾恵太郎, 伊藤秀美, 鈴木勇史, 川瀬孝和, 細野覚代, 谷田部恭, 樋田豊明, 光富徹哉, 横井香平, 田島和雄, 田中英夫:** 大規模ゲノム関連研究で発見されたTERT遺伝子多型と肺がんリスクの関係. 第68回 日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 034 **伊藤秀美:** 愛知県がん登録における標準データベースシステムによる遡り調査, 登録票画像化の実例の紹介. 地域がん登録全国協議会 第18回総会研究会, 2009, (新潟), [シンポジウム]
- 035 **湯浅保仁, 長崎弘美, 秋山好光, 小島一幸, 松尾恵太郎, 今井一枝, 中地敦:** 胃がんのエビジェネティック疫学. 第68回 日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [シンポジウム]
- 036 **平川聡史, 松尾恵太郎, 東川晃一郎, 鎌田伸之:** 皮膚悪性腫瘍のリンパ行生転移機構: がん組織におけるリンパ管新生の役割. 第68回 日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口

演]

- 037 朴智栄, 松尾恵太郎, 鈴木勇史, 川瀬孝和, 細野覚代, 伊藤秀美, 樋田豊明, 谷田部恭, 光富徹哉, 田島和雄, 田中英夫: アセトアルデヒド脱水素酵素遺伝子欠損型でより強くなる喫煙の肺がんリスクの影響. 第68回 日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 038 有馬千夏, 冨田秀太, 竹内俊幸, 島田友香子, 松尾恵太郎, 光富徹哉, 谷田部恭, 高橋隆: 肺腺癌の術後予後の高精度予測を可能とする発現シグネチャーの同定. 第68回 日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 039 菱田朝陽, 松尾恵太郎, 内藤真理子, 若井建志, 田島和雄, 浜島信之: 日本人におけるRUNX3遺伝子多型とピロリ菌感染, 胃粘膜萎縮, 胃がん発生リスク. 第68回 日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 040 川瀬孝和, 柏瀬賢一, 松尾恵太郎, 猪子英俊, 佐治博夫, 小川誠司, 加藤俊一, 笹月健彦, 小寺良尚, 森島泰雄, 日本骨髓バンク: 非血縁者間骨髓移植における許容可能な遺伝子型HLA型不適合組合せの検討. 第71回日本血液学会学術集会, 2009, (京都), [口演]
- 041 Oze I, Matsuo K, Suzuki T, Kawase T, Hosono S, Ito H, Watanabe M, Tajima K, Tanaka H.: Facial flushing and ALDH2 Glu504Lys polymorphism after alcohol consumption for the risk of upper aerodigestive tract cancer risk in a Japanese population. 第2回NAGOYAグローバルリトリート, 2010, (東浦), [ポスター]

腫瘍病理学部

- 001 Nakanishi H, Matsui M.: High gefitinib sensitivity of EGFR overexpressing, HER3-deficient and metastatic poorly-differentiated new human colonic cancer cell line. AACR 100th Annual Meeting 2009, 2009, (Denver), [ポスター]
- 002 中西速夫, 松井誠, 池原誠, 立松正衛: HER3低発現低分化型大腸癌細胞のGefitinib, Cetuximab 感受性機構の解析. 第98回日本病理学会総会, 2009, (京都), [口演]
- 003 松井誠, 中西速夫, 大島由記子, 立松正衛: Lapatinibを用いた胃癌肝転移由来HER2過剰発現胃癌に対する分子標的治療の前臨床的検討. 第98回日本病理学会総会, 2009, (京都), [ポスター]
- 004 中西速夫, 松井誠, 池原誠, 立松正衛: HER3の著明な発現低下を認める低分化型大腸癌細胞株のGefitinib感受性機構の解析. 第18回日本がん転移学会学術集会・総会, 2009, (旭川), [ポスター]
- 005 中西速夫, 松井誠, 伊藤友一, 池原誠: がん幹細胞様形式を有するCD133陽性低分化型大腸がん細胞株のgefitinib感受性. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 006 松井誠, 清水佳隆, 池原誠, 小島直也, 佐藤雄一郎, 中西速夫: オリゴマンノース被覆リポソームは胃癌患者腹腔内マクロファージによって腹膜微小転移巣に効果的に輸送される. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 007 尾崎秀徳, 安藤秀信, 佐藤隆, 松崎秀樹, 平林淳, 中西速

- 夫, 池原誠, 成松久: 胃がん細胞株および腹腔洗浄液からのシリアルTnキャリアタンパク質の同定. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 008 大島由記子, 中西速夫, 松井誠, 小寺泰弘, 中尾昭公: Lapatinibを用いた胃癌肝転移由来HER2過剰発現胃癌に対する分子標的治療の前臨床的検討. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 009 伊藤誠二, 伊藤友一, 小寺泰弘, 中西速夫: マイクロアレを用いた胃癌腹膜再発予測に有用な新しい遺伝子マーカー. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 010 北島正一郎, 太田充彦, 福山隆一, 松井誠, 中西速夫: EMT様変化を伴う苦口腔扁平上皮がんのEGFR標的薬感受性の検討. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 011 豊田武士, 塚本徹哉, 高須伸二, 時亮, 齋藤典子, 齋藤亜弓, 立松正衛: ヘリコバクター・ピロリ感染スナネズミ胃癌に対するNF- κ B阻害剤(CAPE)およびアスピリンの抑制効果. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [示説]
- 012 高須伸二, 塚本徹哉, 豊田武士, 時亮, 平田暁大, 山本昌美, 立松正衛, 田口修: 骨髓移植マウスにおける*Helicobacter*感染およびMNU誘発胃癌と骨髓由来細胞の関与. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [示説]
- 013 立松正衛, 塚本徹哉, 豊田武士: *Helicobacter pylori*感染スナネズミ腺胃化学発癌モデルからヒト胃癌の予防へ. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [シンポジウム]
- 014 塚本徹哉, 時亮, 豊田武士, 高須伸二, 齋藤典子, 齋藤亜弓, 山本昌美, 平田暁大, 立松正衛, 田中卓二: Cyclooxygenase-2阻害剤EtodolacによるDSS誘発Minマウス大腸腫瘍の抑制効果. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [示説]
- 015 時亮, 塚本徹哉, 豊田武士, 高須伸二, 齋藤典子, 齋藤亜弓, 立松正衛: Angiotensin II受容体拮抗薬Losartanの大腸癌予防効果に関する研究. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [示説]
- 016 関孝弘, 塚本徹哉, 豊田武士, 方軍, 前田浩: フェノール化合物キノロールの炎症性腸疾患に対する抑制効果. がん予防大会2009愛知, 2009, (名古屋), [示説]
- 017 豊田武士, 高須伸二, 時亮, 立松正衛, 塚本徹哉: *Helicobacter pylori*感染スナネズミにおけるNF- κ B阻害剤caffeic acid phenethyl ester (CAPE)の抗炎症および腫瘍抑制効果. 第24回発癌病理研究会, 2009, (七尾), [口演]
- 018 Keun Hur, 丹羽透, 豊田武士, 塚本徹哉, 立松正衛, 牛島俊和: Various inducers of gastritis and their potential to induce DNA methylation. 第24回発癌病理研究会, 2009, (七尾), [口演]
- 019 豊田武士, 高須伸二, 時亮, 齋藤典子, 齋藤亜弓, 立松正衛, 塚本徹哉: NF- κ B阻害剤caffeic acid phenethyl ester (CAPE)による*Helicobacter pylori*感染スナネズミ胃癌の抑制効果. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [示説]
- 020 時亮, 豊田武士, 高須伸二, 齋藤典子, 齋藤亜弓, 立松正衛, 塚本徹哉: アンジオテンシンII受容体拮抗剤ロサルタ

- ンによるマウス大腸癌の予防効果. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 021 丹羽透, 豊田武士, 塚本徹哉, 森明子, 立松正衛, 牛島俊和: *Helicobacter pylori*は炎症により胃粘膜にDNAメチル化異常を誘発する. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 022 近藤真也, 豊田武士, 安藤貴文, 後藤秀実, 立松正衛, 塚本徹哉: *N*-methyl-*N'*-nitro-*N*-nitrosoguanidine誘発ラット胃発癌過程の内視鏡による経時的観察. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [示説]
- 023 高須伸二, 豊田武士, 時亮, 平田暁大, 山本昌美, 田口修, 立松正衛, 塚本徹哉: *Helicobacter*感染マウス胃癌における骨髓由来細胞の関与. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [示説]
- 024 曹雪源, *Suo Jian, Wang Quan, Zhang Yang*, 豊田武士, 立松正衛, 塚本徹哉: スナネズミにおけるグリチルリチン酸の*H. pylori*感染胃炎への抑制効果. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [示説]
- 025 齋藤亜弓, 田近正洋, 中村常哉, 横井太紀雄, 近藤真也, 時亮, 豊田武士, 齋藤典子, 立松正衛, 塚本徹哉: 早期胃癌発生進展における胃型・腸型形質発現の変化. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [示説]
- 026 齋藤典子, 豊田武士, 山本昌美, 高須伸二, 時亮, 齋藤亜弓, 立松正衛, 塚本徹哉: *N*-methyl-*N*-nitrosourea投与マウス腺胃における*H. pylori*感染と高食塩食による遺伝子発現誘導. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [示説]
- 027 塚本徹哉, 時亮, 豊田武士, 高須伸二, 齋藤典子, 齋藤亜弓, 日下部守昭, 田中卓二, 立松正衛: DSS誘発Minマウス大腸腫瘍のCyclooxygenase-2阻害剤Etodolacによる抑制効果. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [示説]
- 028 豊田武士, 高須伸二, 時亮, 齋藤典子, 齋藤亜弓, 立松正衛, 塚本徹哉: NF- κ B阻害剤を用いたヘリコバクター・ピロリ感染スナネズミ慢性胃炎および胃癌の抑制. 第20回日本消化器癌発生学会総会, 2009, (広島), [口演]
- 029 高須伸二, 豊田武士, 時亮, 田口修, 立松正衛, 塚本徹哉: マウス*H. pylori*感染およびMNU誘発胃腫瘍における骨髓由来細胞の関与. 第20回日本消化器癌発生学会総会, 2009, (広島), [口演]
- 030 中西速夫, 松井誠, 伊藤誠二, 村上弘城: Paclitaxel抵抗性胃がん腹膜転移モデルの作成と感受性予測マーカーの探索. 第82回日本胃癌学会総会, 2010, (新潟), [ポスター]
- 031 豊田武士, 高須伸二, 時亮, 立松正衛, 齋藤典子, 齋藤亜弓, 山本昌美, 塚本徹哉: NF- κ B阻害剤caffeyl acid phenethyl ester (CAPE)の*Helicobacter pylori*感染スナネズミにおける慢性胃炎・胃発癌抑制効果. 第26回日本毒性病理学会, 2010, (金沢), [示説]
- 032 塚本徹哉, 時亮, 齋藤亜弓, 豊田武士, 高須伸二, 齋藤典子, 山本昌美, 田中卓二, 立松正衛: Cyclooxygenase-2阻害剤EtodolacによるDSS誘発Minマウス大腸腫瘍修飾効果. 第26回日本毒性病理学会, 2010, (金沢), [示説]
- 033 高須伸二, 豊田武士, 時亮, 田口修, 立松正衛, 塚本徹哉: *H. pylori*関連胃発がんにおける骨髓由来細胞の関与. 第26

回日本毒性病理学会, 2010, (金沢), [示説]

- 034 時亮, 豊田武士, 高須伸二, 齋藤典子, 齋藤亜弓, 立松正衛, 塚本徹哉: Angiotensin II受容体拮抗剤Losartanによるマウス大腸癌の予防効果. 第26回日本毒性病理学会, 2010, (金沢), [示説]

分子腫瘍学部

- 001 *Sekido Y*: YAP is involved in mesothelioma cell development and negatively regulated by Merlin. The Hippo Tumor Suppressor Pathway: A Brainstorming Workshop, 2009, (Roma), [口演]
- 002 *Kondo Y*: "Epigenetics in Development and Disease Conference" Role of histone H3 lysine 27 tri-methylation in human brain tumor-propagating cells. The 4th Asian Epigenomics Meeting, 2009, (Singapore), [シンポジウム]
- 003 *Shinjo K, Kondo Y, An B, Okamoto Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Sekido Y*: Integrated epigenetic and genetic analysis reveals the characteristic profile in malignant pleural mesothelioma and lung adenocarcinoma. The 4th Asian Epigenomics Meeting, 2009, (Singapore), [ポスター]
- 004 *Kondo Y, An B, Shinjo K, Okamoto Y, Yokoyama H, Yamao K, Hirai T, Yatabe Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Issa JPJ, Sekido Y*: Comprehensive methylation analysis reveals characteristic methylation profiling of CpG island methylator phenotype-negative colorectal cancers in distal colon. 100th AACR Annual Meeting, 2009, (Denver), [ポスター]
- 005 *Nishikawa E, Osada H, Tatematsu Y, Tomida S, Arima C, Taguchi A, Shimada Y, Yanagisawa K, Takahashi T*: miR-375 induced by ASH1 plays a role in neuroendocrine differentiation in lung cancers. 100th AACR Annual Meeting, 2009, (Denver), [ポスター]
- 006 *Okamoto Y, Kondo Y, Sawaki A, Shinjo K, An B, Yokoyama H, Fujii M, Murakami H, Osada H, Sekido Y*: Silencing of tumor suppressor genes by DNA methylation affects the prognosis of gastrointestinal stromal tumor (GIST). 100th AACR Annual Meeting, 2009, (Denver), [ポスター]
- 007 *Shinjo K, Kondo Y, Goto Y, Yokoyama T, An B, Okamoto Y, Yokoyama H, Fujii M, Murakami H, Osada H, Sekido Y*: Genomewide analysis of non-small cell lung cancer reveals high frequency of DNA methylation in adenocarcinoma without epidermal growth factor receptor mutation. 100th AACR Annual Meeting, 2009, (Denver), [ポスター]
- 008 *Kondo Y*: "DNA Methylation & Chromatin Remodeling in Cancer" Role of DNA methylation and histone modifications in human neoplasia. The 18th CRI Cancer Symposium. 2009. Symposium, 2009, (Seoul), [シンポジウム]
- 009 *Fujii M, Murakami H, Taniguchi T, Kawaguchi K, Kawata S, Kondo Y, Osada H, Sekido Y*: The role of TGF- β signaling in growth of human malignant mesothelioma cells. FASEB

- Summer Research Conferences; The TGF- β Superfamily, 2009, (Arizona), [ポスター]
- 010 *Natsume A, Ito M, Yokoyama H, Shinjo K, Okamoto Y, Issa JPJ, Sekido Y, Kondo Y*: Epigenetic plasticity regulated by Polycomb Repressive Complex-mediated histone H3 lysine 27 trimethylation as a mediator of adaptation to the microenvironment in human glioblastoma. An AACR Special Conference on Cancer Epigenetics, 2010, (San Juan, Puerto Rico), [ポスター]
- 011 *Okamoto Y, Shinjo K, An B, Yokoyama H, Fujii M, Murakami H, Osada H, Tanaka T, Mizokami M, Kataoka H, Joh T, Sekido Y, Kondo Y*: Epigenomic analysis in mice with humanized liver after hepatitis virus infection. An AACR Special Conference in Cancer Research Cancer Epigenetics, 2010, (San Juan, Puerto Rico), [口演]
- 012 *Shinjo K, Okamoto Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Sekido Y, Kondo Y*: Significance of CpG island methylator phenotype in human lung cancers. An AACR Special Conference on Cancer Epigenetics, 2010, (San Juan, Puerto Rico), [ポスター]
- 013 *Kondo Y, Sekido Y*: “New Molecular Target Therapy and Signal Transduction” Targeting Epigenetic Plasticity as a Novel Treatment for Human Neoplasia. The 15th Aichi International Cancer Symposium, 2010, (Nagoya), [シンポジウム]
- 014 関戸好孝: 中皮腫細胞の分子生物学的特性. 第98回日本病理学会, 2009, (京都), [シンポジウム]
- 015 田島健, 大橋里奈, 関戸好孝, 樋田豊明, 南方邦彦, 八戸敏史, 高橋和久: 中皮腫におけるオステオポンチンが誘導するヒアルロン酸への接着増強による多剤耐性. 第49回日本呼吸器学会学術講演会, 2009, (東京), [ポスター]
- 016 堀尾芳嗣, 清水淳市, 朴智栄, 朴将哲, 小川紫都, 吉田公秀, 樋田豊明, 関戸好孝: 肺癌細胞株におけるトポイソメラーゼII阻害剤アムルピシンの感受性とRanBP2とトポイソメラーゼII遺伝子発現. 第49回日本呼吸器学会学術講演会, 2009, (東京), [ポスター]
- 017 藤井万紀子: 悪性中皮腫細胞の増殖におけるTGF- β , Smadシグナル伝達系の役割. 第82回日本組織培養学会, 2009, (栃木), [口演]
- 018 岡本泰幸, 近藤豊, 新城恵子, 安炳九, 藤井万紀子, 村上秀樹, 長田啓隆, 関戸好孝: Gastrointestinal stromal tumorにおけるDNAメチル化解析. 第3回日本エピジェネティクス研究会, 2009, (東京), [ポスター]
- 019 近藤豊: がん細胞におけるエピジェネティクス異常の解析とその臨床応用. 第10回東海難治性血液腫瘍研究会, 2009, (名古屋), [招請講演]
- 020 新城恵子, 近藤豊, 安炳九, 岡本泰幸, 藤井万紀子, 村上秀樹, 長田啓隆, 関戸好孝: 胸部悪性腫瘍におけるジェネティック, エピジェネティックな異常の解析とその臨床応用. 第10回文部科学省特定領域研究「がん」5領域 若手研究者ワークショップ, 2009, (蓼科), [ポスター]
- 021 川田滋久, 村上秀樹, 川口晃司, 谷口哲郎, 藤井万紀子, 近藤豊, 長田啓隆, 関戸好孝: 悪性中皮腫細胞株における hairy enhancer of split 1 (HES1)の解析. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 022 村上秀樹, 谷口哲郎, 川田滋久, 川口晃司, 藤井万紀子, 近藤豊, 長田啓隆, 関戸好孝: 悪性中皮腫におけるSWH経路の不活化. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 023 新城恵子, 後藤康洋, 近藤豊, 安炳九, 岡本泰幸, 藤井万紀子, 村上秀樹, 長田啓隆, 関戸好孝: 悪性胸膜中皮腫における特異的なエピジェネティクスプロファイル. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 024 *Fujii M, Murakami H, Taniguchi T, Kawaguchi K, Kawata S, Kondo Y, Osada H, Sekido Y*: The role of TGF- β signaling in growth of human malignant mesothelioma cells, 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 025 近藤豊: ChiP-chip法をはじめとした網羅的エピジェネティクス解析法のがん研究への応用. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [招請講演]
- 026 岡本泰幸, 近藤豊, 新城恵子, 藤井万紀子, 村上秀樹, 長田啓隆, 溝上雅史, 片岡洋望, 城卓志, 関戸好孝: ヒト肝細胞キメラマウスを用いた肝細胞癌におけるDNAメチル化異常の解析. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [シンポジウム]
- 027 長田啓隆, 立松義朗, 谷田部恭, 有馬千夏, 藤井万紀子, 村上秀樹, 近藤豊, 堀尾芳嗣, 柳澤聖, 関戸好孝, 高橋隆: 肺癌の転移関連遺伝子CLCP1の機能解析. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 028 鈴木元, *Qin Miao Huang*, 富田秀太, 増田雄司, 神谷研二, 長田啓隆, 高橋隆: 遺伝子プロファイリングによって明らかとなった肺癌関連ゲノムインスタビリティー遺伝子. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 029 夏目敦至, 伊藤元一, 結城加奈子, 加藤典文, 竹内一郎, 若林俊彦, 関戸好孝, 近藤豊: ポリコームタンパク群を標的とした脳腫瘍幹細胞に対するエピジェネティクス治療の開発. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 030 柳澤聖, 小西裕之, 有馬千夏, 長田啓隆, 高橋隆: 新規肺癌転移関連遺伝子CIMによる細胞ストレス応答の制御. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 031 赤塚慎也, 山下依子, 蔭麗, 大原浩貴, 泉谷昌志, 阿部浩一郎, 中釜奇, 村上秀樹, 関戸好孝, 新井恵史, 金井弥栄, 種野興夫, 豊園伸哉: 鉄ニトリロ酢酸誘発ラット腎癌に見られる高度の染色体不安定性. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 032 田島健, 関戸好孝, 八戸敏史, 佐谷秀行, 高橋和久: 中皮腫におけるオステオポンチンが誘導するヒアルロン酸への接着増強による多剤耐性. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 033 近藤豊: 「消化器癌におけるエピジェネティクス」 がん細胞を制御するDNAメチル化とヒストン修飾の網羅的解析. 第17回日本消化器関連学会, 2009, (京都), [招請講演]
- 034 近藤豊: エピジェネティクス異常をターゲットとした新しいがん治療戦略. 第9回血液腫瘍学術講演会, 2009, (浜松), [招請講演]

- 035 長田啓隆, 立松義朗, 谷田部恭, 有馬千夏, 藤井万紀子, 村上秀樹, 近藤豊, 堀尾芳嗣, 柳澤聖, 関戸好孝, 高橋隆: 肺癌の転移関連遺伝子CLCP1の機能解析. 第32回日本分子生物学会年会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 036 近藤豊: がん細胞の可塑性を標的とした新規エピジェネティクス治療法の開発. 平成21年度 文部科学省科学研究費補助金がん研究に係わる特定領域研究 がん特定研究5領域合同シンポジウム, 2010, (東京), [シンポジウム]037 新城恵子, 後藤康洋, 近藤豊, 安柄九, 岡本泰幸, 藤井万紀子, 村上秀樹, 長田啓隆, 関戸好孝: Epigenetic profiles distinguish malignant pleural mesothelioma from lung adenocarcinoma. 第2回NAGOYAグローバルリトリート, 2010, (大府), [ポスター]
- 038 岡本泰幸, 新城恵子, 関戸好孝, 田中靖人, 安藤朝章, 野尻俊輔, 神谷武, 片岡洋望, 中沢貴宏, 城卓史, 近藤豊: ヒト肝細胞キメラマウスを用いた肝細胞癌におけるDNAメチル化異常の解析. 第28回サイトプロテクション研究会, 2010, (京都), [シンポジウム]

遺伝子医療研究部

- 001 *Asano N, Tamaru J, Ishida F, Yoshino T, Suzuki R, Kagami Y, Morishima Y, Kinoshita T, Seto M, Nakamura S.*: Cytotoxic molecule (CM)-positive classical Hodgkin lymphoma: a clinicopathologic study in comparison with nodal peripheral T-cell lymphoma of not otherwise specified type possessing CM expression. 51st ASH Annual Meeting and Exposition, 2009, (New Orleans), [ポスター]
- 002 *Nakagawa M, Umino A, Nakagawa-Oshiro A, Utsunomiya A, Nakamura S, Takeuchi I, Ohshima K, Seto M.*: Distinct genome profiles of acute and lymphoma type ATLL: an indication for two subtypes in acute type ATLL. 14th International Conference on Human Retrovirology, 2009, (ブラジル), [口演]
- 003 *Seto M.*: Molecular biology in Asia: Significance of genome profiles for T-cell lymphoma. T-cell Lymphoma Forum. 2010, (米国), [招請講演]
- 004 宮田 友子, 中村 栄男, 瀬戸 加大: アポトーシス関連遺伝子の発現パターンによるマンツル細胞リンパ腫の予後不良群の同定. 第49回日本リンパ網内系学会総会, 2009, (兵庫), [口演]
- 005 都築 忍, 瀬戸 加大: 急性リンパ性白血病の前白血病期におけるTEL-AML1の役割. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 006 中川 雅夫, 海野 啓, 竹内 一郎, 中川 綾, 宇都宮 興, 塚崎 邦弘, 瀬戸 加大: 急性型成人T細胞性白血病/リンパ腫症例はリンパ腫型に特徴的な遺伝子発現プロファイルを用いると複数のグループに分類できる. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 007 加留部 謙之輔, 中川 雅夫, 都築 忍, 清水 則夫, 中村 栄男, 高田 尚良, 瀬戸 加大: NK/T細胞性腫瘍の遺伝子発現プロフ

- ファイル.第68回日本癌学会学術総会, 2009 (横浜), [ポスター]
- 008 本間 圭一郎, 瀬戸 加大, 都築 忍: 悪性リンパ腫におけるTNFAIP3/A20. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 009 海野 啓, 中川 雅夫, 塚崎 邦弘, 宇都宮 興, 瀬戸 加大: アレイCGHにより明らかになった急性型ATLの多クローン性. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 010 鏡味 良豊, シバスダラム カルナン, 加藤 春美, 大城 一都, 中川 綾, 森島 泰雄, 瀬戸 加大: IL-4存在下で樹立したATL腫瘍細胞株の性状, 第71回日本血液学会学術集会, 2009, (京都), [ポスター]
- 011 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫のゲノム異常と腫瘍化機構. 第3回大分がんカンファレンス. 2009, (由布市), [招請講演]
- 012 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫の分子機構と臨床的意義. 第59回神奈川血液研究会. 2009, (横浜市), [招請講演]
- 013 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫の分子機構とその臨床的意義. 第28回岡山免疫懇話会. 2009, (岡山市), [招請講演]
- 014 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫の多様なゲノム異常とその臨床的意義. 第9回血液腎膠原病研究会. 2009, (秋田市), [招請講演]
- 015 加留部 謙之輔: NK/T細胞リンパ腫の遺伝子発現プロファイル: 疾患分類への応用. グローバルCOE第2回国内シンポジウム 「がんの病態解明と新たな治療戦略」 2009, (名古屋), [招請講演]
- 016 中川 雅夫: アレイCGH法を用いたT細胞性リンパ腫の病態と病型分類の考察: グローバルCOE第3回プログレスレポート会議 「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」 2009, (名古屋), [招請講演]
- 017 瀬戸 加大: Molecular characterization of T-cell lymphoma. The 9th lymphoma colloquium. 2009, (東京), [招請講演]
- 018 瀬戸 加大: 造血器腫瘍におけるBCL2とMYC転座の意味. 第2回腫瘍内科セミナー. 2009, (川崎), [招請講演]
- 019 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫のゲノム異常と分子病態. 北陸Lymphoma Conference 2010. 2010, (金沢), [招請講演]
- 020 瀬戸 加大: Integrating Biomarkers and Drug Development (総合バイオマーカーと創薬の開発). The 25th Nagoya International Cancer Treatment Symposium. 2010, (名古屋), [招請講演]
- 021 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫のゲノム異常の多様性とその意義. 弘前造血器腫瘍セミナー. 2010, (弘前), [招請講演]
- 022 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫のゲノム異常と分子病態. 第9回大分血液講演会. 2010, (大分), [招請講演]
- 023 瀬戸 加大: 悪性リンパ腫の分子病態. 日本臨床検査医学会東海・北陸支部総会シンポジウム. 2010, (名古屋), [招請講演]
- 024 瀬戸 加大: Overview of chromosomal aberrations in cancer and cutting-edge research findings. 名古屋大学大学院医学系研究科講演 (英語講演). 2009, (名古屋), [教育講演]
- 025 都築 忍: 転写因子RUNX1/AML1の短いアイソフォームによる造血幹・前駆細胞の増幅. 第8回グローバルCOEレポート会議 「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」 2009, (名古屋), [招請講演]

腫瘍免疫学部

- 001 Kato M, Sanada M, Kato I, Sato Y, Takita J, Kawahata R, Takeuchi K, Niwa N, Chen Y, Nakazaki K, Nomoto J, Asakura Y, Akatsuka Y, Hayashi Y, Igarashi T, Kurokawa M, Chiba S, Mori S, Ishikawa Y, Okamoto K, Tobinai K, Nakagama H, *Nakahata T, Yoshino T, Kobayashi Y, Ogawa S*: Aberrations of Genes Regulating NF Kappa B Pathway in B-Cell Malignant Lymphoma. 第51回米国血液学会総会, 2009, (ニューオーリンズ), [口演]
- 002 *Takahashi Y, Bustos I, Akatsuka Y, Muramatsu H, Nishio N, Hama A, Yagasaki H, Saji H, Kato M, Ogawa S, Kojima S*: Relapse of leukemia with loss of mismatched HLA due to uniparental disomy following haploidentical hematopoietic transplantation. 第51回米国血液学会総会, 2009, (ニューオーリンズ), [示説]
- 003 赤塚美樹, 藤井伸治, *Warren Edus*, 森島泰雄, 高橋利忠, 小川誠司, 葛島清隆, *Riddell Stanley*: 移植後再発白血病に対するマイナー抗原特異的CTL養子免疫療法後に重症肺GVHDの合併を来した標的抗原の同定. 第13回日本がん免疫学会, 2009, (北九州市), [口演]
- 004 岡村(出町)文子, 森島聡子, 渡邊友紀子, 鳥飼宏基, 赤塚美樹, 葛島清隆: 人工抗原提示細胞を使った新規腫瘍抗原の同定. 第13回日本がん免疫学会, 2009, (北九州市), [口演]
- 005 越智俊元, 藤原弘, 永井功造, 葛島清隆, 小澤秀俊, 石川文彦, 安川正貴: WT1特異的CTL由来T細胞レセプター遺伝子を用いた免疫遺伝子療法の開発. 第1回造血器腫瘍免疫療法研究会学術集会, 2009, (大阪), [口演]
- 006 永井功造, 藤原弘, 越智俊元, 白方俊章, 峰野純一, 葛島清隆, 安川正貴: Aurora-A kinase特異的T細胞受容体遺伝子を用いたがん免疫遺伝子療法の開発. 第1回造血器腫瘍免疫療法研究会学術集会, 2009, (大阪), [口演]
- 007 赤塚美樹, 鳥飼宏基, 岡村(出町)文子, 葛島清隆: HLAクラスII不適合骨髄移植患者より樹立した不一致クラスII拘束性アロCD8+CTLクローンの解析. 第1回造血器腫瘍免疫療法研究会学術集会, 2009, (大阪), [口演]
- 008 葛島清隆, 岡村(出町)文子, 鳥飼宏基, 赤塚美樹: 新規腫瘍抗原探索を目的とした人工抗原提示細胞システムの検討. 第1回造血器腫瘍免疫療法研究会学術集会, 2009, (大阪), [口演]
- 009 岡村(出町)文子, 森島聡子, 渡邊友紀子, 鳥飼宏基, 赤塚美樹, 葛島清隆: 人工抗原提示細胞を使った新規腫瘍抗原の同定. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [示説]
- 010 鳥飼宏基, 渡邊友紀子, 岡村文子, 高橋利忠, 森島泰雄, 葛島清隆, 赤塚美樹: HLAクラスII不適合骨髄移植患者より樹立した不一致クラスII拘束性アロCD8+CTLクローンの解析. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [示説]
- 011 藤原弘, 越智俊元, 永井功造, 白方俊章, 峰野純一, 葛島清隆, 安川正貴: Aurora-A kinase特異的T細胞受容体(TCR)遺伝子を用いた免疫遺伝子療法の検討. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]

- 012 越智俊元, 藤原弘, 白方俊章, 葛島清隆, 峰野純一, 小澤秀俊, 石川文彦, 安川正貴: 造血幹細胞へのWT1特異的T細胞レセプター遺伝子導入による新たな免疫遺伝子療法の開発. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 013 鳥飼宏基, 柳澤真弓, 今橋伸彦, 渡邊友紀子, 岡村(出町)文子, 高橋利忠, 宮村耕一, 森島泰雄, 小寺良尚, 葛島清隆, 赤塚美樹: HLAクラスII不適合骨髄移植患者より樹立した不一致クラスII拘束性アロCD8+CTLクローンの解析. 第71回日本血液学会学術集会, 2009, (京都), [口演]
- 014 *Demachi-Okamura A*: Identification of tumor antigens using artificial antigen presenting cells expressing HLA-A*2402, CD86 and 4-1BBL. 第2回NAGOYAグローバルリトリート, 2010, (大府市), [示説]
- 015 *Hirosawa T, Akatsuka Y, Shibata K, Demachi-Okamura A, Umezu T, Kajiyama H, Nawa A, Kuzushima K, Kikkawa F*: HLA-A*2402-restricted GPC3-specific CTLs kill clear cell carcinoma of the ovary. 第2回NAGOYAグローバルリトリート, 2010, (大府市), [示説]

腫瘍ウイルス学部

- 001 *Ali AK, Kanda T*: Distinctive effects of the Epstein-Barr virus family of repeats on viral latent gene promoter activity and B-lymphocyte transformation. 4th International Symposium on Nasopharyngeal Carcinoma, 2009, (Marrakech, Morocco), [口演]
- 002 *Murata T, Tsurumi T*: TORC2 promotes EBV reactivation from latency through interaction with viral BZLF1 protein. 4th International Symposium on Nasopharyngeal Carcinoma, 2009, (Marrakech, Morocco), [ポスター]
- 003 *Ali AK, Saito S, Shibata S, Takada K, Kanda T*: Distinctive effects of the Epstein-Barr virus family of repeats on viral latent gene promoter activity and B-lymphocyte transformation. 14th International Conference on Immunobiology and Prophylaxis of Human Herpesvirus Infections, 2009, (Kobe), [ポスター]
- 004 *Isomura H, Stinski MF, Murata T, Nakayama S, Chiba S, Akatsuka Y, Kanda T, Tsurumi T*: Human cytomegalovirus UL76 gene regulates the level of expression of the UL77 gene. 14th International Conference on Immunobiology and Prophylaxis of Human Herpesvirus Infections, 2009, (Kobe), [ポスター]
- 005 *Murata T, Tsurumi T*: Sumoylation of Epstein-Barr virus BZLF1 viral protein dramatically inhibits its transcriptional activity. 14th International Conference on Immunobiology and Prophylaxis of Human Herpesvirus Infections, 2009, (Kobe), [ポスター]
- 006 *Tsurumi T, Iwahori S, Murata T*: phosphorylation of p27Kip1 by Epstein-Barr Virus Protein Kinase Induces its Degradation through SCFskp2 Ubiquitin Ligase Actions during Viral Lytic Replication. 9th Awaji International Forum on Infection and Immunity, 2009, (Awaji), [ポスター]

- 007 **Tsurumi T:** Epstein-Barr virus replication and host cell interactions. International symposium Infection-associated Cancers, 2010, (Sapporo), [招請講演]
- 008 **Isomura H, Stinski MF, Murata T, Chiba S, Kanda T, Tsurumi T:** Human Cytomegalovirus Late Transactivators Recruited to the Replication Compartments. 35th Annual International Herpes Virus Workshop, 2010, (Salt Lake City, Utah), [ポスター]
- 009 **村田貴之、鶴見達也:** EBウイルスの再活性化: TORC2はBZLF1蛋白質と共同してEBウイルスの再活性化を促進する. 第6回EBウイルス研究会, 2009, (東京), [口演]
- 010 **磯村寛樹、鶴見達也:** ヒトサイトメガロウイルスの増殖に必須なUL79遺伝子はウイルス後期遺伝子を特異的に活性化する. 第24回ヘルペスウイルス研究会, 2009, (静岡), [口演]
- 011 **岩堀聡子、村田貴之、藤田雅俊、清野透、鶴見達也:** Phosphorylation of p27Kip1 by Epstein-Barr virus protein kinase induces its degradation through SCF/Skp2 ubiquitin ligase. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 012 **Kanda T, Tsurumi T:** Single-step conversion of peripheral B-lymphocytes into B-lymphoblastoid cell lines expressing WT1 tumor antigen (末梢血Bリンパ球を材料としたWT1蛋白質高発現Bリンパ芽球様細胞株ワンステップ樹立法). 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 013 **中山早苗、鶴見達也:** Epstein-Barr Virus Polymerase Processivity Factor Enhances BALF2 Promoter Transcription as a Coactivator for the BZLF1 Immediate-Early Protein. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 014 **村田貴之、鶴見達也:** Sumoylation of Epstein-Barr virus BZLF1 viral protein dramatically inhibits its transcriptional activity. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 015 **磯村寛樹、鶴見達也:** Human cytomegalovirus UL76 contains an internal ribosome entry site to facilitate UL77 translation. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 016 **村田貴之、鶴見達也:** EBウイルスの再活性化-TORC2はBZLF1蛋白質と共同してEBウイルスの再活性化を促進する. 第57回日本ウイルス学会学術集会, 2009, (東京), [口演]
- 017 **村田貴之、鶴見達也:** EBウイルスの再活性化-EBウイルスBZLF1遺伝子産物はSUMO化によりその転写活性を抑制される. 第57回日本ウイルス学会学術集会, 2009, (東京), [口演]
- 018 **岩堀聡子、村田貴之、藤田雅俊、清野透、鶴見達也:** EBウイルス産生感染に伴うp27Kip1分解の分子機構. 第57回日本ウイルス学会学術集会, 2009, (東京), [口演]
- 019 **神田輝、鶴見達也:** 純粋な組換えEBVを用いたエピトープタグ付加EBNA1蛋白質発現リンパ芽球様細胞株の樹立. 第57回日本ウイルス学会学術集会, 2009, (東京), [口演]
- 020 **磯村寛樹、鶴見達也:** ヒトサイトメガロウイルスUL76ORF内に存在するinternal entry ribosome site. 第57回日本ウイルス学会学術集会, 2009, (東京), [ポスター]
- 021 **中山早苗、鶴見達也:** 変異EBV BMRF1蛋白質のウイルス産生感染に与える影響. 第57回日本ウイルス学会学術集会, 2009, (東京), [ポスター]
- 022 **神田輝:** 潜伏感染EBウイルスエピゾームの宿主染色体付着に必要なシス塩基配列の解析. 第27回染色体ワークショップ, 2010, (御殿場), [口演]
- 023 **磯村寛樹、鶴見達也:** ウイルスDNA複製の場に集合するヒトサイトメガロウイルスの後期遺伝子特異的転写活性化因子. 第25回ヘルペスウイルス研究会, 2010, (浜松), [口演]
- 024 **神田輝、鶴見達也:** 潜伏感染EBウイルスエピゾームの宿主染色体付着機構の解析. 第25回ヘルペスウイルス研究会, 2010, (浜松), [口演]
- 025 **神田輝、鶴見達也:** 潜伏感染細胞中でEBNA1蛋白質と相互作用する細胞性因子の解析. 第7回EBウイルス研究会, 2010, (札幌), [口演]
- 026 **村田貴之、鶴見達也:** EBウイルスBZLF1はSUMO化によりその転写活性を強く抑制される. 第7回EBウイルス研究会, 2010, (札幌), [口演]

分子病態学部

- 001 **Kannagi R, Sakuma K, Miyazaki K, Kimura N, Ohmori K:** Carbohydrate-mediated cell adhesion involved in pathogenic homing behaviors of T- and B-lymphocytes. GLYCO XX (20th International Symposium on Glycoconjugates), 2009, (San Juan, Puerto Rico), [シンポジウム]
- 002 **Fujii M, Yusa A, Yokoyama Y, Kokuryo T, Nagino M, Iwata H, Utsunomiya H, Ishimaru T, Kyogashima M, Kannagi R:** Cytoplasmic expression of GlcA-GlcNH₃⁺ on heparan sulfate closely correlates with malignancy of breast cancer. GLYCO XX (20th International Symposium on Glycoconjugates), 2009, (San Juan, Puerto Rico), [ポスター]
- 003 **Tanaka K, Yamada M, Yamazaki Y, Eaton A, Aoyama T, Hara A, Kannagi R, Kyogashima M:** A novel method for analysis of diversities in ceramides and glycosphingolipids by MALDI-TOFMS and MS2 equipped with high-energy CID. 58th ASMS Conference on Mass Spectrometry and Allied Topics, 2010, (Salt Lake City, Utah), [ポスター]
- 004 **神奈木玲児:** 糖鎖修飾と細胞認識. 日本生化学会中部支部例会・シンポジウム, 2009, (名古屋), [シンポジウム]
- 005 **宮崎敬子、佐久間圭一朗、木村尚子、大森勝之、神奈木玲児:** CD22とその高親和性リガンド α 2-6シアリル6-スルホ糖鎖を介したBリンパ球系悪性細胞の血管内皮への接着. 第18回日本がん転移学会総会, 2009, (旭川), [口演]
- 006 **林 啓智、近藤幸子、矢木宏和、宮崎敬子、高橋禮子、加藤晃一、神奈木玲児:** Strict branch specificity of *N*-glycans carrying disialyl Lewis a as ascertained by introduction of GnT-IVb shRNA (ジシアリルルイス a を発現する*N*-グリカンの厳密な枝特異性—shRNAを用いた証明). 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 007 **遊佐亜希子、宮崎敬子、木村尚子、井澤峯子、神奈木玲児:** Epigenetic silencing of sulfate transporter gene *DTDST* in colon

- cancer cells leads to decreased sulfated glycan expression (大腸癌細胞における硫酸トランスporter遺伝子*DTDST*のエピジェネティック・サイレンシング). 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 008 宮崎敬子, 木村尚子, 佐久間圭一郎, 井澤峯子, 神奈木玲児: Loss of endogenous sulfated ligands unmasks CD22 in malignant lymphoma and enhances cell adhesion to endothelial glycans (悪性リンパ腫細胞では内因性の硫酸化リガンドの欠失により活性化されたCD22が血管内皮との接着を促進する). 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 009 河村由紀, 豊田 実, 川島 麗, Vongsavanh Phongsisay, 河村 裕, 小西文雄, 斎藤幸夫, 鈴木拓, 松本蒼之, 神奈木玲児, 今井浩三, 土肥多恵子: Interleukin-6 induces epigenetic gene silencing-mediated aberrant glycosylation in ulcerative colitis and colitic cancer (IL-6はエピジェネティックな遺伝子発現抑制を介して潰瘍性大腸炎および大腸癌における糖鎖発現異常を誘導する). 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 010 金森審子, 卓麗聖, 木全弘治, 神奈木玲児: Characterization of influence of glycans on CD44 variant form for cell adhesion mediated by selectin (CD44バリエーションフォーム上の糖鎖がセレクトリンを介した細胞接着に及ぼす影響の解析). 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 011 佐久間圭一郎, 神奈木玲児: Hypoxia-induced glycans in acute myeloid leukemic stem cells (低酸素によって誘導される急性骨髄性白血病幹細胞の糖鎖構造). 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 012 京ヶ島守, 藤井正宏, 遊佐亜希子, 横山幸浩, 國料俊男, 角田伸行, 棚野正人, 宮浦修一, 宇都宮洋才, 岩田広治, 小田高司, 神奈木玲児: Cytoplasmic expression of GlcA-GlcNH₃⁺ on heparan sulfate closely correlates with malignancy of breast cancer (へパラン硫酸糖鎖GlcA-GlcNH₃⁺の細胞質内発現は乳癌の悪性度に密接に相関する). 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 013 田中広治, 京ヶ島守, 小泉恵子, 萩原和美, 村上真史, 村手隆, 神奈木玲児: "Specific ceramide species, elevated with independence of sphingomyelin cycle, causes apoptosis in SH-SY5Y cells by ATRA (スフィンゴミエリン分解によらず生じたセラミド分子種がATRAによる神経芽細胞腫SH-SY5Yのアポトーシスを誘導する)". 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [口演]
- 014 田中広治, 山田真希, 京ヶ島守, 小泉恵子, 神奈木玲児: Comprehensive analysis of ceramides and glycosphingolipids with MALDI-TOF MS equipped with high-energy CID (MALDI-TOF MSを用いた高エネルギーCIDによるセラミド及びスフィンゴ糖脂質の包括的解析). 第82回日本生化学会大会, 2009, (神戸), [ポスター]
- 015 金森審子, 卓麗聖, 木全弘治, 神奈木玲児: Investigation of influence of glycans on CD44 variant forms for cell adhesion mediated by selectin (CD44バリエーションフォーム上の糖鎖とセレクトリンの結合が細胞接着に及ぼす影響の解析). 第82回日本生化学会大会, 2009, (神戸), [口演]
- 016 竹松弘, 内藤裕子, 京ヶ島守, 神奈木玲児, 小堤保則: Genetic understanding of branching point on biosynthetic pathway (生合成経路分岐点における制御機構のトランスクリプトームを用いた解析). 第82回日本生化学会大会, 2009, (神戸), [口演]
- 017 河村由紀, 豊田 実, 川島 麗, 萩原輝記, 河村 裕, 小西文雄, 斎藤幸夫, 松本蒼之, 神奈木玲児, 今井浩三, 土肥多恵子: Interleukin-6-induced DNA hypermethylation causes aberrant glycosylation in ulcerative colitis and colitic cancer (IL-6誘導性DNA高メチル化がもたらす潰瘍性大腸炎およびcolitic cancerの糖鎖発現異常). 第82回日本生化学会大会, 2009, (神戸), [口演]
- 018 遊佐亜希子, 宮崎敬子, 木村尚子, 井澤峯子, 神奈木玲児: Epigenetic silencing of sulfate transporter gene *DTDST* in colon cancer cells leads to decreased sulfated glycan (大腸がんにおける硫酸トランスporter遺伝子*DTDST*のエピジェネティックサイレンシングは硫酸化糖鎖の発現を減少させる). 第82回日本生化学会大会, 2009, (神戸), [口演]
- 019 佐久間圭一郎, 大森勝之, 神奈木玲児: Th2疾患における6-硫酸化糖鎖の異常発現に対するGATA-3関与の可能性/Possible roles of GATA-3 in abnormal expression of 6-O-sulfated glycans in Th2-related diseases. 第9回日本免疫学会総会・学術集会, 2009, (大阪), [口演]
- 020 神奈木玲児: がん細胞に特有の糖鎖とそのはたらき. 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業「糖鎖の生物機能とそのはたらき」最終公開シンポジウム, 2010, (東京), [シンポジウム]

発がん制御研究部

- 001 *Kasahara K, Goto, H, Enomoto M, Tomono Y, Kiyono T, Inagaki M.*: The association between autophosphorylated Chk1 and 14-3-3gamma is required for Chk1 function in DNA damage checkpoint. 第61回日本細胞生物学会, 2009, (名古屋), [ポスター]
- 002 *Inagaki M.*: Cell cycle and architecture. Regulation and Manipulation of Information Flow within Dynamic Protein and Lipid Environments (SFB 645 Workshop Cell Architecture and Cell Signalling), 2009, (Bonn), [ワークショップ]
- 003 *Ibi M.*: Trichoplein, a keratin-binding protein, maker of microtubule-organization and breaker of cilia assembly. Regulation and Manipulation of Information Flow within Dynamic Protein and Lipid Environments(SFB 645 Workshop Cell Architecture and Cell Signalling), 2009, (Bonn), [ワークショップ]
- 004 *Inoko A.*: The keratin-binding protein Albatross regulates polarization of epithelial cells. Regulation and Manipulation of Information Flow within Dynamic Protein and Lipid Environments(SFB 645 Workshop Cell Architecture and Cell Signalling), 2009, (Bonn), [ワークショップ]
- 005 *Inagaki M.*: Signaling and cell architecture. Receptor Program

- Ad Hoc Seminar, 2009, (Turku), [招待講演]
- 006 **Ibi M:** Trichoplein, a keratin-binding protein, maker of microtubule-organization and breaker of cilia assembly. Receptor Program Ad Hoc Seminar, 2009, (Turku), [招待講演]
- 007 **Inoko A:** The keratin-binding protein Albatross regulates polarization of epithelial cells. Receptor Program Ad Hoc Seminar, 2009, (Turku), [招待講演]008 **Inoko A, Sugimoto M, Shiromizu T, Nakayama M, Zou P, Yonemura S, Hayashi Y, Izawa I, Sasoh M, Uji Y, Kaibuchi K, Kiyono T, Inagaki M:** The keratin-binding protein Albatross regulates polarization of epithelial cells. the 6th European Conference on Intermediate Filaments (Nanofilaments) in Health and Disease, 2009, (Sweden), [ポスター]
- 009 **Ibi M, Zou P, Inoko A, Ohmuro-Matsuyama Y, Matsuyama M, Shiromizu T, Hayashi Y, Mori D, Hirotsune S, Yonemura S, Tsukita S, Inagaki M:** Trichoplein, a keratin-binding protein, maker of microtubule-organization and breaker of cilia assembly. the 6th European Conference on Intermediate Filaments (Nanofilaments) in Health and Disease, 2009, (Sweden), [ポスター]
- 010 **Inagaki M:** Anti-phospho peptide antibodies - a tool to address the regulatory function of intermediate filaments and cell cycle progression in astrocytes. the 6th European Conference on Intermediate Filaments (Nanofilaments) in Health and Disease, 2009, (Sweden), [シンポジウム]
- 011 **Kasahara K, Goto H, Inagaki M:** Multi-site phosphorylations by different kinases lead to entire Chk1 function. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [シンポジウム]
- 012 **Izawa I, Hayashi Y, Inagaki M:** Possible involvement of ERBIN in the regulation of PI3K-Akt signaling pathway. 第68回日本癌学会学術総会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 013 **Goto H, Kasahara K, Tomono Y, Enomoto M, Kiyono T, Inagaki M:** 14-3-3 γ mediates Cdc25A proteolysis to induce S and G2 arrest after DNA damage. The 49th Annual Meeting of the American Society for Cell Biology, 2009, (San Diego), [ポスター]
- 014 **Matsuyama M, Zou P, Inoko A, Ibi M, Ohmuro-Matsuyama Y, Inagaki M:** Trichoplein regulates cilia assembly and microtubule organization. The 49th Annual Meeting of the American Society for Cell Biology, 2009, (San Diego), [ポスター]
- 015 **Enomoto M, Goto H, Tomono Y, Kasahara K, Tsujimura K, Kiyono T, Inagaki M:** Chk1 phosphorylation by Cdk1 is required for the adequate activation. The 49th Annual Meeting of the American Society for Cell Biology, 2009, (San Diego), [ポスター]
- 016 **Kasahara K, Goto H, Tomono Y, Enomoto M, Kiyono T, Inagaki M:** 14-3-3 γ participates in DNA damage checkpoint through bridging Chk1 signal to Cdc25A. 第32回日本分子生物学会年会, 2009, (横浜), [ポスター]
- 017 **Kasahara K:** 14-3-3 γ controls Cdc25A proteolysis to induce cell cycle arrest after DNA damage. 第2回NAGOYAグローバルトリート, 2010, (大府), [口演]
- 018 **Matsuyama M:** Essential function of Chk1 localization in human cells. 第2回NAGOYAグローバルトリート, 2010, (大府), [ポスター]
- 019 **Goto H, Enomoto M, Kasahara K, Inagaki M:** Regulation of Chk1 by novel phosphorylations; Perspective of Chk1 as a therapeutic target for cancer. The 15th Aichi International Cancer Symposium, 2010, (Nagoya), [シンポジウム]
- 020 **榎本将人:** G2/M期におけるCdk1によるChk1の制御機構の解析. グローバルCOE第6回プログレスレポート, 2009, (名古屋), [シンポジウム]
- 021 **李萍, 小池晃彦, 姜海英, 王忠華, 川田裕樹, 押田芳治:** ARBの急性投与により、高果糖誘発インスリン抵抗性が改善する. 第52回日本糖尿病学会年次学術集会, 2009, (大阪), [口演]
- 022 **猪子誠人, 杉本昌彦, 白水崇, 中山雅敬, 鄒鵬, 米村重信, 林裕子, 井澤一郎, 佐宗幹夫, 宇治幸隆, 貝淵弘三, 清野透, 稲垣昌樹:** ケラチン結合蛋白質アルバトロスは上皮細胞極性を制御する. 第61回日本細胞生物学会大会, 2009, (名古屋) [ワークショップ]
- 023 **猪子誠人, 杉本昌彦, 白水崇, 中山雅敬, 鄒鵬, 米村重信, 林裕子, 井澤一郎, 佐宗幹夫, 宇治幸隆, 貝淵弘三, 清野透, 稲垣昌樹:** ケラチン結合蛋白質アルバトロスは上皮細胞極性を制御する. 第61回日本細胞生物学会大会, 2009, (名古屋), [ポスター]
- 024 **衣斐美歩, 鄒鵬, 猪子誠人, 大室(松山)有紀, 松山誠, 白水崇, 林裕子, 森大輔, 広常真治, 米村重信, 月田早智子, 稲垣昌樹:** ケラチン結合蛋白質Trichopleinは微小管のanchoringを制御し、Primary cilia形成を抑制する. 第61回日本細胞生物学会大会, 2009, (名古屋), [ポスター]
- 025 **井澤一郎, 林裕子, 稲垣昌樹:** ERBINの形質膜局在にはパルミトイル化が必要である. 第61回日本細胞生物学会大会, 2009, (名古屋), [ポスター]
- 026 **白水崇, 猪子誠人, 米村重信, 清野透, 稲垣昌樹:** 新規ケラチン結合蛋白質Trichopleinの細胞間接着部位における機能解析. 第61回日本細胞生物学会大会, 2009, (名古屋), [ポスター]
- 027 **榎本将人, 後藤英仁, 友野靖子, 笠原広介, 池上要介, 辻村邦夫, 清野透, 稲垣昌樹:** G2/M期におけるCdk1によるChk1の制御機構の解析. 第61回日本細胞生物学会大会, 2009, (名古屋), [ポスター]
- 028 **笠原広介, 後藤英仁, 榎本将人, 友野靖子, 清野透, 稲垣昌樹:** The association between autophosphorylated Chk1 and 14-3-3 γ is required for Chk1 function in DNA damage checkpoint. 第61回日本細胞生物学会大会, 2009, (名古屋), [ポスター]
- 029 **榎本将人, 後藤英仁, 友野靖子, 笠原広介, 辻村邦夫, 清野透, 稲垣昌樹:** G2/M期におけるCdk1によるChk1の制御機構の解析. 第82回日本生化学大会, 2009, (神戸), [ポスター]
- 030 **榎本将人, 後藤英仁, 友野靖子, 笠原広介, 辻村邦夫, 清野透, 稲垣昌樹:** G2/M期におけるCdk1によるChk1の制御機構の解析. 第82回日本生化学大会, 2009, (神戸), [ワークショップ]

4. 学会誌・その他誌上発表テーマ調べ (総長)

総長

- 001 **Sano T, Nimura Y:** Aggressive surgery for hepatocellular carcinoma with vascular and/or biliary involvement. In: Recent Advances in Liver Surgery. Ed. Dionigi R, Landes Bioscience, Texas, USA, 166-186, 2009.
- 002 **Sano T, Nimura Y:** Surgical strategies and technique for hilar cholangiocarcinoma. In: Recent Advances in Liver Surgery. Ed. Dionigi R, Landes Bioscience, Texas, USA, 187-213, 2009.
- 003 **二村雄次:** その「道」の究め方 ～消化器病に挑み続ける先駆者たち～. 胆と膵, 30:503-510, 2009.
- 004 **二村雄次:** 肝門部胆管癌に対する肝右葉切除・尾状葉切除・肝外胆管切除術. 写真で学ぶ日本の癌手術 Volume 2, 監修 出月康夫, インターメディアカ東京, 451-468, 2009

5. 学会誌・その他誌上発表テーマ調べ (病院)

病院長

- 001 篠田雅幸、清水淳市：がん診療up date 各論2.患者支援と地域医療連携 がん診療における地域医療連携の現状と問題点。日本医師会雑誌 138(1)：S325-S326,2009

消化器内科部

[分担執筆]

- 001 原 和生、山雄健次、後藤秀実：EUS-FNAを用いた胆管ドレナージ。胆膵内視鏡診療の実際,254-258,2009。
002 重川稔、山雄健次：超音波／超音波内視鏡検査。見て学ぶ膵腫瘍の画像診断,31-38,2009。
003 山雄健次：胆・膵の疾患 膵管内乳頭粘液性腫瘍。内科学症例図説,292-293,2009。
004 松本和也、山雄健次：内科からみたIPMNの診断。Knack & Pitfalls 膵脾外科の要点と盲点 第2版,74-77,2009。
005 松本和也、山雄健次：膵癌。消化器研修ノート,552-557,2009。
006 水野伸匡、山雄健次：超音波内視鏡下穿刺法。新版 自己免疫性膵炎,83-86,2009。
007 松本和也、山雄健次：EUS下生検 (endoscopic ultrasound-guided-fine needle aspiration ; EUS-FNA)。膵癌診療ポケットガイド,88-92,2010。
008 山雄健次、原 和生：超音波内視鏡ガイド下穿刺吸引法。今日の消化器疾患治療指針 第3版,137-140,2010。

[原著]

- 009 Yamao K, Bhatia V, Mizuno N, Sawaki A, Shimizu Y, Irisawa A: Interventional endoscopic ultrasonography. J Gastroenterol Hepatol,24(4):509-519,2009。
010 Nakahara O, Yamao K, Bahatia V, Sawaki A, Mizuno N, Takagi T, Shimizu Y, Koshikawa T, Yatabe Y, Baba H: Usefulness of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration (EUS-FNA) for undiagnosed intra-abdominal lymphadenopathy. J Gastroenterol,44(6):562-567,2009。
011 Mizuno N, Bhatia V, Hosoda W, Sawaki A, Hoki N, Hara K, Takagi T, B.H.Ko S, Yatabe Y, Goto H, Yamao K: Histological diagnosis of autoimmune pancreatitis using EUS-guided trucut biopsy: a comparison study with EUS-FNA. J Gastroenterol,44(7):742-750,2009。
012 Tajika M, Nakamura T, Tsuboi J, Bhatia V, Kawai H, Yamao K: Syndrome of inappropriate secretion of antidiuretic hormone after endoscopic submucosal dissection for early gastric cancer. Clin J Gastroenterol,2(4):262-265,2009。
013 Ashida R, Nakata B, Shigekawa M, Mizuno N, Sawaki A, Hirakawa K, Arakawa T, Yamao K: Gemcitabine sensitivity-related mRNA expression in endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration biopsy of unresectable pancreatic cancer. J

Exp Clin Cancer Res,28(1):83,2009。

- 014 Tajika M, Nakamura T, Nakahara O, Kawai H, Komori K, Hirai T, Kato T, Bhatia V, Baba H, Yamao K: Prevalence of adenomas and carcinomas in the ileal pouch after proctocolectomy in patients with familial adenomatous polyposis. J Gastrointest Surg.,13(7):1266-1273,2009。
015 Tajika M, Nakamura T, Bhatia V, Komori K, Kato T, Yamao K: Ileal pouch adenocarcinoma after proctocolectomy for familial adenomatous polyposis. Int J Colorectal Dis,24(12):1487-1489,2009。
016 Sawaki A, Hoki N, Ito S, Matsumoto K, Mizuno N, Hara K, Takagi T, Kobayashi Y, Sawai Y, Kawai H, Tajika M, Nakamura T, Yamao K: Clinical impact of radiotherapy for locally advanced pancreatic cancer. J Gastroenterol, 44(12):1209-1214,2009。
017 Sawaki A, Yamada Y, Komatsu Y, Kanda T, Doi T, Koseki M, Baba H, Sun YN, Murakami K, Nishida T: Phase II study of motesanib in Japanese patients with advanced gastrointestinal stromal tumors with prior exposure to imatinib mesylate. Cancer Chemother Pharmacol,65(5):961-967,2010。
018 Sigekawa M, Yamao K, Sawaki A, Hara K, Takagi T, Bhatia V, Nishio M, Tamaki T, El-Amin H, El-Abdeen Z, Mizuno N: Is 18F-Fluorodeoxyglucose Positron emission tomography meaningful for estimating the efficacy of corticosteroid therapy in patients with autoimmune pancreatitis?. J Hepatobiliary Pancreat Sci,17(3):269-274,2010。
019 Takayama R, Nakagawa H, Sawaki A, Mizuno N, Kawai H, Tajika M, Yatabe Y, Matsuo K, Uehara R, Ono KI, Nakamura Y, Yamao K: Serum tumor antigen REG4 as a diagnostic biomarker in pancreatic ductal adenocarcinoma. J Gastroenterol, 45(1):52-59,2009。
020 Matsuo K, Tajima K, Suzuki T, Kawase T, Watanabe M, Shitara K, Misawa K, Ito S, Sawaki A, Muro K, Nakamura T, Yamao K, Yamamura Y, Hamajima N, Hiraki A, Tanaka H: Association of prostate stem cell antigen gene polymorphisms with the risk of stomach cancer in Japanese. Int J Cancer,125(8):1961-1964,2009。
021 Boku N, Yamamoto S, Fukuda H, Shirao K, Doi T, Sawaki A, Koizumi W, Saito H, Yamaguchi K, Takiuchi H, Nasu J, Ohtsu A: Fluorouracil versus combination of irinotecan plus cisplatin versus S-1 in metastatic gastric cancer: a randomised phase 3 study. Lancet Oncol.,10(11):1063-1069,2009。
022 Furuse J, Okusaka T, Ohkawa S, Nagase M, Funakoshi A, Boku N, Yamao K, Yamaguchi T, Sato T: A phase II study of uracil-tegafur plus doxorubicin and prognostic factors in patients with unresectable biliary tract cancer. Cancer Chemother Pharmacol,65(1):113-120,2009。
023 Ko SB, Mizuno N, Yatabe Y, Yoshikawa T, Ishiguro H, Yamamoto A, Azuma S, Naruse S, Yamao K, Muallem S, Goto

- H: Corticosteroids Correct aberrant Cystic Fibrosis Transmembrane Conductance Regulator Localization in the Duct and Regenerate Acinar Cells in Autoimmune Pancreatitis. *Gastroenterology*, 138(5):1988-1996,2010.
- 024 **An B, Kondo Y, Okamoto Y, Shinjo K, Kanemitsu Y, Komori K, Hirai T, Sawaki A, Tajika M, Nakamura T, Yamao K, Yatabe Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Tani T, Matsuo K, Shen L, Issa JP, Sekido Y**: A characteristic methylation profile in CpG island methylator phenotype-negative distal colorectal cancers. *Int J Cancer*, 2010.
- 025 **Mekky MA, Yamao K, Sawaki A, Mizuno N, Hara K, Nafeh MA, Osman AM, Koshikawa T, Yatabe Y, Bhatia V**: Diagnostic utility of EUS-guided FNA in patients with gastric submucosal tumors. *Gastrointest Endosc*, 71(6):913-919, 2010.

[症例報告]

- 001 **Yoshinaga S, Yamao K, Vhatia V, Mizuno N, Sawaki A, Tajika M, Ishii N, Abbas W, Shimizu Y**: Endoscopic ultrasound-guided choledochoduodenostomy for treatment of ampullary cancer. *Clin J Gastroenterol*, 2(4):55-58, 2009.
- 002 **Tajika M, Nakamura T, Tsuboi J, Bhatia V, Kawai H, Sawaki A, Mizuno N, Takagi T, Hara K, Sawai Y, Kobayashi Y, Matsumoto K, Sugimori S, Yamakita K, Yamao K**: A case of syndrome of inappropriate secretion of antidiuretic hormone following endoscopic treatment. *Endoscopy*, 41(Suppl2):E101, 2009.
- 003 **Ota Y, Kikuyama M, Sasada Y, Matsuhashi T, Nakahodo J, Yamao K, Shirafuji T**: Endoscopic management of stenotic anastomosis using a rendezvous technique after pancreatogastrostomy. *Digestive Endoscopy*, 21(3):201-204, 2009.
- 004 **Matsumoto K, Hara K, Sawaki A, Mizuno N, Hijioka S, Imamura H, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Inaba Y, Yamao K**: Ruptured pseudoaneurysm of the splenic artery complicating endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration biopsy for pancreatic cancer. *Endoscopy*, 42(Suppl2):E27-28, 2010.
- 005 **Tsuboi J, Tajika M, Nakamura T, Kawai H, Bhatia V, Takayama R, Kitamura J, Yatabe Y, Hatooka S, Shinoda M, Yamao K, Ogura Y**: Endoscopic features of short-term progression of esophageal intramural pseudodiverticulosis. *Endoscopy*, 42(Suppl2):E92-93, 2010.
- 006 **武藤俊博, 清水泰博, 細田和貴, 佐野力, 水野伸匡, 谷田部恭, 山雄健次, 柳澤昭夫**: IPMN由来浸潤癌とIPMNに併存した通常型膵癌との鑑別に苦慮した1切除例. *膵臓*, 24(2):147-154, 2009.
- 007 **安藤公隆, 清水泰博, 佐野力, 千田嘉毅, 二村雄次, 水野伸匡, 高木忠之, 原和生, 山雄健次**: 血清CA19-9異常高値が診断の契機となった膵IPMN由来浸潤癌の1例. *肝胆膵治療研究会誌*, 7(1):49-56, 2009.
- 008 **清水泰博, 安藤公隆, 佐野力, 千田嘉毅, 二村雄次, 水野伸匡, 高木忠之, 原和生, 谷田部恭, 細田和貴, 山雄健次**: 卵巣様間質のない嚢胞を伴う浸潤性膵管癌の1例. *膵臓*, 24(4):507-512, 2009.

- 009 **脇岡 範, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 今村秀道, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 松本和也, 小林佑次, 佐伯 哲, 鈴木晴久, 赤羽麻奈, 細田和貴, 谷田部恭, 清水泰博, 丹羽康正, 山雄健次**: ステロイド治療後早期にFDGの集積が低下した自己免疫性膵炎の1例. *膵臓*, 24(6):709-716, 2010.

[総説、その他]

- 001 **Catalano M, Sahai A, Levy M, Romagnuolo J, Wiersema M, Brugge W, Freeman M, Yamao K, Canto M, Hernandez L**: EUS-based criteria for the diagnosis of chronic pancreatitis: the rosemont classification. *Gastrointest Endosc*, 69(7):1251-1261, 2009.
- 002 **山北圭介, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 高木忠之, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 澤井勇悟, 小林佑次, 杉森聖司, 松本和也, 坪井順哉, 山雄健次**: 各種疾病のガイドラインにおける栄養治療の位置づけ-慢性膵炎ガイドラインにおける栄養治療の位置づけと実際. *栄養-評価と治療*, 26(2):116-119, 2009.
- 003 **高木忠之, 入沢篤志, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博, 山雄健次**: ミリ単位の小膵癌の診断は可能か-10mm以下の小膵癌の診断におけるEUS-FNAの有用性. *胆と膵*, 30(4):361-367, 2009.
- 004 **松本和也, 山雄健次, 室 圭**: 臨床現場で期待される分子標的治療? 診療科で注目される分子標的治療 消化器領域. *現代医学*, 57(1):13-16, 2009.
- 005 **山雄健次**: 胆・膵 解説. *日本消化器内視鏡学会専門医学術試験問題 解答と解説 第3版*, 274-275, 2009.
- 006 **山雄健次**: 序説・「SPNのすべて-典型例から非典型例まで」を企画して. *肝胆膵画像*, 11(4):369-372, 2009.
- 007 **原 和生, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 高木忠之, 脇岡 範, 今村秀道, 小林佑次, 松本和也**: 胆膵疾患におけるUS/EUS診断・治療の最前線-EUSガイド下胆管ドレナージ. *胆と膵*, 30(7):765-769, 2009.
- 008 **高木忠之, 水野伸匡, 原 和生, 澤木 明, 北野雅之, 山雄健次**: Sonazoidを用いた膵疾患に対する造影EUSの試み. 第94回日本消化器病学会総会記念誌別冊「消化器病学の進歩-原点から未来への情報発信」, 153-156, 2009.
- 009 **今岡 大, 木下芳一, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 高木忠之, 山雄健次**: SPNのすべて 典型例から非典型例まで-SPNに対する組織生検. *肝胆膵画像*, 11(4):387-394, 2009.
- 010 **高山玲子, 山雄健次, 小林一彦, 直田浩明, 今井奈緒子, 藤原雅也, 金子昌史, 浦出伸治, 澤木 明, 水野伸匡, 高木忠之, 原 和生, 清水泰博, 矢田部恭**: 胆膵疾患におけるUS/EUS診断・治療の最前線-EUS-FNAによる膵癌の遺伝子診断. *胆と膵*, 30(7):739-742, 2009.
- 011 **水野伸匡, 清水泰博, 澤井勇悟, 山雄健次**: 膵癌のリスクファクターと前駆病変 膵癌のリスクファクターとしての膵管内乳頭粘液性腫瘍の意義. *日本消化器病学会雑誌*, 106(8):1163-1167, 2009.
- 012 **杉森聖司, 山雄健次, 原 和生, 高木忠之, 水野伸匡, 澤**

- 木 明:膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)-IPMN/MCNの疾患概念の歴史の変遷.臨床消化器内科,24(9):1195-1202,2009.
- 013 松本和也, 中村常哉, 田辺正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 瀬戸加太, 横井太紀雄, 谷田部恭, 中村栄男:胃MALTリンパ腫に対するHelicobacter Pylori除菌治療後の長期予後.ヘリコバクターリサーチ,13(4):268-275,2009.
- 014 山雄健次, 原 和生, 水野伸匡, 澤木 明, 脇岡 範, 今村秀道, 近藤真也, 田近正洋, 河合宏紀, 小林佑次, 松本和也, 鈴木晴久, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 丹羽康正:胆膵治療内視鏡のエキスパートテクニック-EUS関連手技EUSガイド下胆道・膵管ドレナージ.胆と膵,30(10):1245-1250,2009.
- 015 今村秀道, 入澤篤志, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博, 山雄健次:Pancreatic Cancer:膵癌対策最前線 膵癌の内視鏡診断—早期膵癌診断への挑戦—.Frontiers in Gastroenterology,14(4):316-321,2009.
- 016 小林佑次, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 丹羽康正, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 松本和也, 佐伯 哲, 鈴木晴久, 赤羽麻奈, 山雄健次:胃癌のスクリーニング検査としての新規血清マーカーREG4の臨床的有用性.消化器科,49(4):332-335,2009.
- 017 鈴木晴久, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 丹羽康正, 田近正洋, 清水泰博, 谷田部恭, 細田和貴, 吉永繁高, 後藤田卓志:知っておきたい最新のIVR適応と手際の実践 胆・肝・膵におけるIVR EUS-FNAによる膵腫瘍の診断-EUS-FNAの適応と手技-.消化器外科,32(12):1865-1872,2009.
- 018 水野伸匡, 原 和生, 澤木 明, 脇岡 範, 今村秀道, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 山雄健次:自己免疫性膵炎の最前線 自己免疫性膵炎の診断:膵癌との鑑別を中心に③ EUS・EUS-FNA.肝胆膵画像,11(6):647-653,2009.
- 019 佐伯 哲, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 山雄健次:難治がんに挑む-分子標的治療時代の到来 膵臓分野:内科学的アプローチ、膵癌のジェムザール療法 Gemcitabineの問題点(副作用).肝胆膵,59(5):993-997,2009.
- 020 佐伯 哲, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 知念健司, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 山雄健次:膵臓病 最近の進歩-膵癌の化学療法.成人病と生活習慣病,40(1):97-100,2010.
- 021 水野伸匡, 重川 稔, 脇岡 範, 澤木 明, 原 和生, 今村秀道, 近藤真也, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 松本和也, 小林佑次, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 知念健司, 清水泰博, 細田和貴, 谷田部恭, 山雄健次:自己免疫性膵炎・長期予後-ステロイド治療をめぐって 自己免疫性膵炎の画像診断による治療効果判定.肝・胆・膵,60(1):15-21,2010.
- 022 脇岡 範, 澤木 明, 山雄健次:がん薬物療法のガイドライン-GIST.腫瘍内科,5(1):51-57,2010.
- 内視鏡部
- [原著]
- 001 Tajika M, Nakamura T, Tsuboi J, Bhatia V, Kawai H, Yamao K:Syndrome of inappropriate secretion of antidiuretic hormone after endoscopic submucosal dissection for early gastric cancer. Clin J Gastroenterol,2(4):262-265,2009.
- 002 Tajika M, Nakamura T, Nakahara O, Kawai H, Komori K, Hirai T, Kato T, Bhatia V, Baba H, Yamao K:Prevalence of adenomas and carcinomas in the ileal pouch after proctocolectomy in patients with familial adenomatous polyposis. J Gastrointest Surg.,13(7):1266-1273,2009.
- 003 Tajika M, Nakamura T, Bhatia V, Komori K, Kato T, Yamao K:Ileal pouch adenocarcinoma after proctocolectomy for familial adenomatous polyposis. Int J Colorectal Dis,24(12):1487-1489,2009.
- 004 Sawaki A, Hoki N, Ito S, Matsumoto K, Mizuno N, Hara K, Takagi T, Kobayashi Y, Sawai Y, Kawai H, Tajika M, Nakamura T, Yamao K:Clinical impact of radiotherapy for locally advanced pancreatic cancer. J Gastroenterol ,44(12):1209-1214,2009.
- 005 Takayama R, Nakagawa H, Sawaki A, Mizuno N, Kawai H, Tajika M, Yatabe Y, Matsuo K, Uehara R, Ono KI, Nakamura Y, Yamao K:Serum tumor antigen REG4 as a diagnostic biomarker in pancreatic ductal adenocarcinoma. J Gastroenterol,45(1):52-59,2009.
- 006 Niwa Y, Nakamura M, Miyahara R, Ohmiya N, Watanabe O, Ando T, Kawashima H, Itoh A, Hirooka Y, Goto H:Geranylgeranylacetone protects against diclofenac-induced gastric and small intestinal mucosal injuries in healthy subjects: a prospective randomized placebo-controlled double-blind cross-over study.Digestion,80(4):260-266,2009.
- 007 Matsuo K, Tajima K, Suzuki T, Kawase T, Watanabe M, Shitara K, Misawa K, Ito S, Sawaki A, Muro K, Nakamura T, Yamao K, Yamamura Y, Hamajima N, Hiraki A, Tanaka H:Association of prostate stem cell antigen gene polymorphisms with the risk of stomach cancer in Japanese.Int J Cancer,125(8):1961-1964,2009.
- 008 Iguchi Y, Niwa Y, Miyahara R, Nakamura M, Banno K, Nagaya T, Nagasaka T, Watanabe O, Ando T, Kawashima H, Ohmiya N, Itoh A, Hirooka Y, Goto H:Pilot study on confocal endomicroscopy for determination of the depth of squamous cell esophageal cancer in vivo.J Gastroenterol Hepatol,24(11):1733-1739,2009.
- 009 An B, Kondo Y, Okamoto Y, Shinjo K, Kanemitsu Y, Komori K, Hirai T, Sawaki A, Tajika M, Nakamura T, Yamao K, Yatabe Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Tani T, Matsuo K, Shen L, Issa JP, Sekido Y:A characteristic methylation profile in CpG island methylator phenotype-negative distal colorectal

cancers.Int J Cancer, 127(9):145-51, 2010.

[症例報告]

- 001 *Yoshinaga S, Yamao K, Vhatia V, Mizuno N, Sawaki A, Tajika M, Ishii N, Abbas W, Shimizu Y*:Endoscopic ultrasound-guided choledochoduodenostomy for treatment of ampullary cancer.Clin J Gastroenterol,2(4):55-58,2009.
- 002 *Tajika M, Nakamura T, Tsuboi J, Bhatia V, Kawai H, Sawaki A, Mizuno N, Takagi T, Hara K, Sawai Y, Kobayashi Y, Matsumoto K, Sugimori S, Yamakita K, Yamao K*:A case of syndrome of inappropriate secretion of antidiuretic hormone following endoscopic treatment.Endoscopy,41(suppl2):E101(Epub May 2009),2009.
- 003 *Matsumoto K, Hara K, Sawaki A, Mizuno N, Hijioka S, Imamura H, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Inaba Y, Yamao K*:Ruptured pseudoaneurysm of the splenic artery complicating endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration biopsy for pancreatic cancer.Endoscopy,42(Suppl2):E27-28,2010.
- 004 脇岡 範, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 今村秀道, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 松本和也, 小林佑次, 佐伯哲, 鈴木晴久, 赤羽麻奈, 細田和貴, 谷田部恭, 清水泰博, 丹羽康正, 山雄健次:ステロイド治療後早期にFDGの集積が低下した自己免疫性膵炎の1例.膵臓,24(6):709-716,2010.
- 005 *Tsuboi J, Tajika M, Nakamura T, Kawai H, Bhatia V, Takayama R, Kitamura J, Yatabe Y, Hatooka S, Shinoda M, Yamao K, Ogura Y*:Endoscopic features of short-term progression of esophageal intramural pseudodiverticulosis.Endoscopy,42(Suppl2):E92-93,2010.

[分担執筆]

- 001 *Niwa Y, Miyahara R, Goto H*:Endoscopic submucosal dissection of early gastric cancer and gastric tumors.Interventional and Therapeutic Gastrointestinal Endoscopy.Front Gastrointest Res,27156-168,2010.
- 002 田近正洋, 河合宏紀:4.大腸がんに関連する疾患、7.大腸がんの診断、8.治療.あなたを守る大腸がんベスト治療,36-46,78-80,106-108,2009.
- 003 田近正洋:悪性腫瘍(癌)の臨床栄養学.日本臨床栄養医学,432-443,2009.

[総説、その他]

- 001 山北圭介, 水野伸匡, 澤木 明, 原 和生, 高木忠之, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 澤井勇悟, 小林佑次, 杉森聖司, 松本和也, 坪井順哉, 山雄健次:各種疾病のガイドラインにおける栄養治療の位置づけ-慢性膵炎ガイドラインにおける栄養治療の位置づけと実際.栄養-評価と治療,26(2):116-119,2009.
- 002 高木忠之, 入沢篤志, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博, 山雄健次:ミリ単位の膵癌の診断は可能か-10mm以下の膵癌の診断に

おけるEUS-FNAの有用性.胆と膵,30(4):361-367,2009.

- 003 田近正洋, 中村常哉:第77回消化器内視鏡学会総会 学会印象記.胃と腸,44(10):1631-1632,2009.
- 004 山雄健次, 原 和生, 水野伸匡, 澤木 明, 脇岡 範, 今村秀道, 近藤真也, 田近正洋, 河合宏紀, 小林佑次, 松本和也, 鈴木晴久, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 丹羽康正:胆膵治療内視鏡のエキスパートテクニック-EUS関連手技EUSガイド下胆道・膵管ドレナージ.胆と膵,30(10):1245-1250,2009.
- 005 今村秀道, 入沢篤志, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 脇岡 範, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博, 山雄健次:Pancreatic Cancer:膵癌対策最前線 膵癌の内視鏡診断—早期膵癌診断への挑戦—.Frontiers in Gastroenterology,14(4):316-321,2009.
- 006 小林佑次, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 丹羽康正, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 松本和也, 佐伯 哲, 鈴木晴久, 赤羽麻奈, 山雄健次:胃癌のスクリーニング検査としての新規血清マーカーREG4の臨床的有用性.消化器科,49(4):332-335,2009.
- 007 鈴木晴久, 山雄健次, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 丹羽康正, 田近正洋, 清水泰博, 谷田部恭, 細田和貴, 吉永繁高, 後藤田卓志:知っておきたい最新のIVR適応と手際の実態 胆・肝・膵におけるIVR EUS-FNAによる膵腫瘍の診断?EUS-FNAの適応と手技-.消化器外科,32(12):1865-1872,2009.
- 008 水野伸匡, 原 和生, 澤木 明, 脇岡 範, 今村秀道, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 山雄健次:自己免疫性膵炎の最前線 自己免疫性膵炎の診断:膵癌との鑑別を中心に③ EUS・EUS-FNA.肝胆膵画像,11(6):647-653,2009.
- 009 佐伯 哲, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 山雄健次:難治がんに挑む-分子標的治療時代の到来 膵臓分野:内科学的アプローチ、膵癌のジェムザール療法 Gemcitabineの問題点(副作用).肝胆膵,59(5):993-997,2009.
- 010 佐伯 哲, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 今村秀道, 脇岡 範, 近藤真也, 小林佑次, 松本和也, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 知念健司, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 山雄健次:膵臓病 最近の進歩-膵癌の化学療法.成人病と生活習慣病,40(1):97-100,2010.
- 011 水野伸匡, 重川 稔, 脇岡 範, 澤木 明, 原 和生, 今村秀道, 近藤真也, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 松本和也, 小林佑次, 佐伯 哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 知念健司, 清水泰博, 細田和貴, 谷田部恭, 山雄健次:自己免疫性膵炎・長期予後-ステロイド治療をめぐって 自己免疫性膵炎の画像診断による治療効果判定.肝・胆・膵,60(1):15-21,2010.

[原著]

- 001 *Yoshida K, Yatabe Y, Park J, Ogawa S, Park J, Shimizu J, Horio Y, Matsuo K, Mitsudomi T, Hida T* :Clinical outcomes of advanced non-small cell lung cancer patients screened for epidermal growth factor receptor gene mutations. *J Cancer Res Clin Oncol*, 136:527-535, 2010.
- 002 *Goto Y, Shinjo K, Kondo Y, Shen L, Toyota M, Suzuki H, Gao W, An B, Fujii M, Murakami H, Osada H, Taniguchi T, Usami N, Kondo M, Hasegawa Y, Shimokata K, Matsuo K, Hida T, Fujimoto N, Kishimoto T, Issa JP, Sekido Y* :Epigenetic profiles distinguish malignant pleural mesothelioma from lung adenocarcinoma. *Cancer Res*, 69:9073-9082, 2009.
- 003 *Okasaka T, Matsuo K, Suzuki T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Yatabe Y, Hida T, Mitsudomi T, Tanaka H, Yokoi K, Tajima K* :h0GG1 Ser326Cys polymorphism and risk of lung cancer by histological type. *J Hum Genet*, 54:739-745, 2009.
- 004 *Maemondo M, Masuda N, Sekine I, Kubota K, Segawa Y, Shibuya M, Imamura F, Katakami N, Hida T, Takeo S* :A phase II study of palonosetron combined with dexamethasone to prevent nausea and vomiting induced by highly emetogenic chemotherapy. *Ann Oncol*, 20:1860-1866, 2009.
- 005 *Morita S, Okamoto I, Kobayashi K, Yamazaki K, Asahina H, Inoue A, Hagiwara K, Sunaga N, Yanagitani N, Hida T, Yoshida K, Hirashima T, Yasumoto K, Sugio K, Mitsudomi T, Fukuoka M, Nukiwa T* :Combined survival analysis of prospective clinical trials of gefitinib for non-small cell lung cancer with EGFR mutations. *Clin Cancer Res*, 15:4493-4498, 2009.
- 006 *Katayama T, Shimizu J, Suda K, Onozato R, Fukui T, Ito S, Hatooka S, Sueda T, Hida T, Yatabe Y, Mitsudomi T* :Efficacy of erlotinib for brain and leptomeningeal metastases in patients with Lung adenocarcinoma who showed initial good response to gefitinib. *J Thorac Oncol*, 4:1415-1419, 2009.
- 007 *Kawaguchi K, Murakami H, Taniguchi T, Fujii M, Kawata S, Fukui T, Kondo Y, Osada H, Usami N, Yokoi K, Ueda Y, Yatabe Y, Ito M, Horio Y, Hida T, Sekido Y* :Combined inhibition of MET and EGFR suppresses proliferation of malignant mesothelioma cells. *Carcinogenesis*, 30:1097-1105, 2009.
- 008 *Horio Y, Osada H, Shimizu J, Ogawa S, Hida T, Sekido Y* :Relationship of mRNA expressions of RanBP2 and topoisomerase II isoforms to cytotoxicity of amrubicin in human lung cancer cell lines. *Cancer Chemother Pharmacol*. 66 :237-243, 2010.
- 009 *Takeda K, Hida T, Sato T, Ando M, Seto T, Satouchi M, Ichinose Y, Katakami N, Yamamoto N, Kudoh S, Sasaki J, Matsui K, Takayama K, Kashii T, Iwamoto Y, Sawa T, Okamoto I, Kurata T, Nakagawa K, Fukuoka M* :Randomized phase III trial of platinum-doublet chemotherapy followed by gefitinib versus continued platinum-doublet chemotherapy in

Japanese patients with advanced non-small cell lung cancer: results of a West Japan Thoracic Oncology Group trial (WJTOGO203). *J Clin Oncol*, 28:753-760, 2010.

- 010 *Tomita N, Kodaira T, Hida T, Tachibana H, Nakamura T, Nakahara R, Inokuchi H* :The impact of radiation dose and fractionation on outcomes for limited-stage small-cell lung cancer. *Int J Radiat Oncol Biol Phys*, 76 :1121-1126, 2010.
- 011 朴 智栄, 清水淳市, 堀尾芳嗣, 吉田公秀, 小川紫都, 朴 将哲, 不和信和, 樋田豊明 :放射線治療に著効し長期寛解の得られている進行非小細胞肺癌の2例. *日本胸部臨床*, 68 (8) : 773-779, 2009.
- 012 朴 智栄, 小川紫都, 朴 将哲, 清水淳市, 堀尾芳嗣, 吉田公秀, 谷田部恭, 関戸好孝, 樋田豊明 :悪性胸膜中皮腫に対する薬剤感受性の解析と治療戦略. *肺癌*, 49(4) : 386 - 391, 2009.
- 013 平島智徳, 福岡和也, 樋田豊明, 河原邦光, 岸本卓巳, 松村晃秀, 中野喜久雄, 岡田守人, 中野孝司 :可溶性メソテリン関連蛋白 (SMRP : Soluble mesothelin-related peptides) の悪性胸膜中皮腫におけるバイオマーカーとしての意義. *肺癌*, 49 : 380 - 385, 2009.
- 014 福岡和也, 木村文宏, 国頭英夫, 樋田豊明, 中川和彦, 玄馬顕一, 新海 哲, 一瀬幸人, 南部静洋, 中野孝司 :悪性胸膜中皮腫を対象としたLY231514 (ベメトレキセド) とシスプラチン併用療法の安全性情報収集のための臨床試験. *肺癌*, 49 : 988 - 993, 2009.

[総説、その他]

- 001 樋田豊明 :初回化学療法後の維持療法は有効ですか. 肺がん薬物療法Q and A-臨床現場での考えかた-, 67 - 70, 2009.
- 002 清水淳市, 光富徹哉 :【非選択的治療から選択的治療へのパラダイムシフト】抗がん剤の作用機序そのものを腫瘍特異的なものとする方法EGFR作用薬 EGFR-TKI reversible について. *Mebio Oncology*, 6 (1) ; 12 - 22, 2009.
- 003 篠田雅幸, 清水淳市 :【がん診療update】患者支援と地域医療連携 がん診療における地域医療連携の現状と問題点. *日本医師会雑誌*, 138 :S325 - S326, 2009.
- 004 森 正一, 小林 零, 奥田勝裕, 小川紫都, 石黒太志, 福井高幸, 波戸岡俊三, 篠田雅幸, 光富徹哉 :非小細胞肺癌の術後再発例に対するGemcitabine+Carboplatin 併用療法 (Bi-Weekly投与) の検討. *癌と化学療法*, 36(1) : 57-61, 2009.

血液・細胞療法部

- 001 *Yamamoto K, Utsunomiya A, Tobinai K, Tsukasaki K, Uike N, Uozumi K, Yamaguchi K, Yamada Y, Hanada S, Tamura K, Nakamura S, Inagaki H, Ohshima K, Kiyoi H, Ishida T, Matsushima K, Akinaga S, Ogura M, Tomonaga M, Ueda R* :Phase I study of KW-0761, a defucosylated humanized anti-CCR4 antibody, in relapsed patients with adult T-cell leukemia-

- lymphoma and peripheral T-cell lymphoma. *J Clin Oncol*. 2010 Mar 20;28(9):1591-8.
- 002 **Kato H, Taji H, Ogura M, Kagami Y, Oki Y, Tsujimura A, Fuwa N, Kodaira T, Seto M, Yamamoto K, Morishima Y.**:Favorable consolidative effect of high-dose melphalan and total-body irradiation followed by autologous peripheral blood stem cell transplantation after rituximab-containing induction chemotherapy with in vivo purging in relapsed or refractory follicular lymphoma. *Clin Lymphoma Myeloma*.2009 Dec;9(6):443-8.
- 003 **Chihara D, Oki Y, Ine S, Yamamoto K, Kato H, Taji H, Kagami Y, Yatabe Y, Nakamura S, Morishima Y.** :Analysis of prognostic factors in peripheral T-cell lymphoma: prognostic value of serum albumin and mediastinal lymphadenopathy. *Leuk Lymphoma*. 2009 Dec;50(12):1999-2004.
- 004 **Chihara D, Kagami Y, Oki Y, Kato H, Onoda H, Ine S, Taji H, Yamamoto K, Morishima Y.** : R-CHOP therapy for MALT lymphoma of the rectum. *Eur J Haematol*. 2010 Jan 1;84(1):84-6.
- 005 **Uchiyama S, Suzuki Y, Otake K, Yokoyama M, Ohta M, Aikawa S, Komatsu M, Sawada T, Kagami Y, Morishima Y, Fukui K.**: Development of novel humanized anti-CD20 antibodies based on affinity constant and epitope. *Cancer Sci*. 2010 Jan;101(1):201-9.
- 006 **Yagasaki H, Kojima S, Yabe H, Kato K, Kigasawa H, Sakamaki H, Tsuchida M, Kato S, Kawase T, Muramatsu H, Morishima Y, Kadera Y.**: Tacrolimus/Methotrexate versus cyclosporine/methotrexate as graft-versus-host disease prophylaxis in patients with severe aplastic anemia who received bone marrow transplantation from unrelated donors: results of matched pair analysis. *Biol Blood Marrow Transplant*.2009 Dec;15(12):1603-8.
- 007 **Kanda J, Matsuo K, Suzuki T, Hosono S, Ito H, Ichinohe T, Seto M, Morishima Y, Tajima K, Tanaka H.**: Association between obesity and the risk of malignant lymphoma in Japanese: a case-control study. *Int J Cancer*. 2010 May 15;126(10):2416-25.
- 008 **Espinoza JL, Takami A, Onizuka M, Sao H, Akiyama H, Miyamura K, Okamoto S, Inoue M, Kanda Y, Ohtake S, Fukuda T, Morishima Y, Kadera Y, Nakao S;** Japan Marrow Donor Program. NKG2D gene polymorphism has a significant impact on transplant outcomes after HLA-fully-matched unrelated bone marrow transplantation for standard risk hematologic malignancies. *Haematologica*. 2009 Oct;94(10):1427-34.
- 009 **Kanda J, Matsuo K, Kawase T, Suzuki T, Ichinohe T, Seto M, Morishima Y, Tajima K, Tanaka H.**: Association of alcohol intake and smoking with malignant lymphoma risk in Japanese: a hospital-based case-control study at Aichi Cancer Center. *Cancer Epidemiol Biomarkers Prev*. 2009 Sep;18(9):2436-41.
- 010 **Honma K, Tsuzuki S, Nakagawa M, Tagawa H, Nakamura S, Morishima Y, Seto M.** TNFAIP3/A20 functions as a novel tumor suppressor gene in several subtypes of non-Hodgkin lymphomas. *Blood*. 2009 Sep 17;114(12):2467-75.
- 011 **Tobinai K, Ishizawa K, Ogura M, Itoh K, Morishima Y, Ando K, Taniwaki M, Watanabe T, Yamamoto J, Uchida T, Nakata M, Terauchi T, Nawano S, Matsusako M, Hayashi M, Hotta T.**: Phase II study of oral fludarabine in combination with rituximab for relapsed indolent B-cell non-Hodgkin lymphoma. *Cancer Sci*. 2009 Oct;100(10):1951-6.
- 012 **Tobinai K, Watanabe T, Tanimoto K, Maruyama D, Nakata M, Itoh K, Morishima Y, Ogura M, Usui N, Kasai M, Terauchi T, Nawano S, Matsusako M, Matsuno Y, Nakamura S, Mori S, Ohashi Y.** : Phase I/II and pharmacokinetic study of cladribine with 2-h infusion in Japanese patients with relapsed indolent B-cell lymphoma mostly pretreated with rituximab. *Cancer Sci*. 2009 Jul;100(7):1344-50.
- 013 **Kobayashi Y, Tobinai K, Takeshita A, Naito K, Asai O, Dobashi N, Furusawa S, Saito K, Mitani K, Morishima Y, Ogura M, Yoshida F, Hotta T, Bessho M, Matsuda S, Takeuchi J, Miyawaki S, Naoe T, Usui N, Ohno R.**: Phase I/II study of humanized anti-CD33 antibody conjugated with calicheamicin, gemtuzumab ozogamicin, in relapsed or refractory acute myeloid leukemia: final results of Japanese multicenter cooperative study. *Int J Hematol*. 2009 May;89(4):460-9.
- 014 **Sakamaki H, Ishizawa K, Taniwaki M, Fujisawa S, Morishima Y, Tobinai K, Okada M, Ando K, Usui N, Miyawaki S, Utsunomiya A, Uoshima N, Nagai T, Naoe T, Motoji T, Jinnai I, Tanimoto M, Miyazaki Y, Ohnishi K, Iida S, Okamoto S, Seriu T, Ohno R.** Phase 1/2 clinical study of dasatinib in Japanese patients with chronic myeloid leukemia or Philadelphia chromosome-positive acute lymphoblastic leukemia. *Int J Hematol*. 2009 Apr;89(3):332-41.
- 015 **Shimoyama Y, Asano N, Kojima M, Morishima S, Yamamoto K, Oyama T, Kinoshita T, Nakamura S.**: Age-related EBV-associated B-cell lymphoproliferative disorders: diagnostic approach to a newly recognized clinicopathological entity. *Pathol Int*. 2009 Dec;59(12):835-43.
- 016 **Suzuki M, Abe A, Imagama S, Nomura Y, Tanizaki R, Minami Y, Hayakawa F, Ito Y, Katsumi A, Yamamoto K, Emi N, Kiyoi H, Naoe T.**: BCR-ABL-independent and RAS / MAPK pathway-dependent form of imatinib resistance in Ph-positive acute lymphoblastic leukemia cell line with activation of EphB4. *Eur J Haematol*. 2010 Mar;84(3):229-38.

薬物療法部

[原著]

- 001 **Shitara K, Matsuo K, Takahari D, Yokota T, Inaba Y, Yamaura H, Sato Y, Najima M, Ura T, Muro K.** Neutropaenia as a prognostic factor in metastatic colorectal cancer patients undergoing chemotherapy with first-line FOLFOX. *Eur J Cancer*, 45(10): 1757-1763, 2009.

- 002 **Shirao K, Nishida T, Doi Y, Komatsu Y, Muro K, Li Y, Ueda E, Ohtsu A**: Phase I/II Study of sunitinib malate in Japanese patients with gastrointestinal stromal tumor after failure of prior treatment with imatinib mesylate. *Invest New Drugs*, 2009.003
- Takahari D, Yamada Y, Okita NT, Honda T, Hirashima Y, Matsubara J, Takashima A, Kato K, Hamaguchi T, Shirao K, Shimada Y, Shimoda T**: Relationships of Insulin-like growth factor-1 receptor and epidermal growth factor receptor expression to clinical outcomes in patients with colorectal cancer. *Oncology*, 76: 42-48, 2009.
- 004 **Shitara K, Hara K, Sato Y**: Pancreatic pseudocyst owing to a lymph node metastasis: a case report. *Gastroenterology Insights*, 1:e5:15-16, 2009.
- 005 **Shitara K, Wada R**: Gastrointestinal bleeding after aortic surgery: a case report. *Cases Journal*, 2: 9074, 2009.
- 006 **Matsuo K, Tajima K, Suzuki T, Kawase T, Shitara K, Misawa K, Ito S, Sawaki A, Muro K, Nakamura T, Yamao K, Yamamura Y, Hamajima N, Hiraki A, Tanaka H**: Association of prostate stem cell antigen gene polymorphisms with the risk of stomach cancer in Japan. *Int. J Cancer*, 125(8): 1961-1964, 2009.
- 007 **Koizumi W, Takiuchi H, Yamada Y, Boku N, Fuse N, Kuro K, Komatsu Y, Tsuburaya A**: Phase II study of oxaliplatin plus S-1 as first-line treatment for advanced gastric cancer (G-SOX study). *Ann Oncol*, 20(19), 2009.
- 008 **Muro K, Udagawa H, Aoyama N**: Cases that were clinically burdened during the course of preoperative chemotherapy or chemoradiotherapy followed by surgery. *Esophagus*, 6: 279-283, 2009.
- 009 **Fukushima-Uesaka H, Saito Y, Maekawa K, Kurose K, Sugiyama E, Katori N, Kaniwa N, Hasegawa R, Hamaguchi T, Eguchi-Nakajima T, Kato K, Yamada Y, Shimada Y, Yoshida T, Yamamoto N, Nokihara H, Kunitoh H, Ohe Y, Tamura T, Ura T, Saito M, Muro K, Doi T, Fuse N, Yoshino T, Ohtsu A, Saijo N, Matsumura Y, Okuda H, Sawada J**: Genetic polymorphisms of copper- and platinum drug-efflux transporters ATP7A and ATP7B in Japanese cancer patients. *Drug Metab Pharmacokin*, 24(6): 565-74, 2009.
- 010 **Shitara K, Muro K, Matsuo K, Ura T, Takahari D, Yokota T, Sawaki A, Kawai H, Ito S, Munakata M, Sakata Y**: Chemotherapy for patients with advanced gastric cancer with performance status 2. *Gastrointest Cancer Res*, 3: 220-224, 2009.
- 011 **Muro K, Udagawa H, Aoyama N**: Cases that were clinically burdened during the course of preoperative chemotherapy or chemoradiotherapy followed by surgery. *Esophagus*, 6: 279-283, 2009.
- 012 **Fukushima-Uesaka H, Saito Y, Maekawa K, Kurose K, Sugiyama E, Katori N, Kaniwa N, Hasegawa R, Hamaguchi T, Eguchi-Nakajima T, Kato K, Yamada Y, Shimada Y, Yoshida T, Yamamoto N, Nokihara H, Kunitoh H, Ohe Y, Tamura T, Ura T, Saito M, Muro K, Doi T, Fuse N, Yoshino T, Ohtsu A, Saijo N, Matsumura Y, Okuda H, Sawada J**: Genetic polymorphisms of copper- and platinum drug-efflux transporters ATP7A and ATP7B in Japanese cancer patients. *Drug Metab Pharmacokin*, 24(6): 565-74, 2009.
- 013 **Shitara K, Muro K, Matsuo K, Ura T, Takahari D, Yokota T, Sawaki A, Kawai H, Ito S, Munakata M, Sakata Y**: Chemotherapy for patients with advanced gastric cancer with performance status 2. *Gastrointest Cancer Res* 3: 220-224, 2009.
- 014 **Shitara K**: Case Series of Cetuximab monotherapy for patients with pre-treated colorectal cancer complicated with hyperbilirubinemia due to severe liver metastasis. *Jpn J Clin Oncol*, 40(3): 275-277, 2009.
- 015 **Shitara K, Matsuo K, Hatooka S, Ura T, Takahari D, Yokota T, Abe T, Kawai H, Tajika M, Kodaira T, Shinoda M, Tajima K, Muro K, Tanaka H**: Heavy smoking history interacts with chemoradiotherapy for esophageal cancer prognosis: A retrospective study. *Cancer Sci*, 2010.
- 016 **Shitara K, Yokota T, Takahari D, Shibata T, Ura T, Utsunomiya S, Inaba Y, Yamaura H, Sato Y, Najima M, Kawai H, Tajika M, Sawaki A, Yataba Y, Muro K**: Phase II study of combination chemotherapy with irinotecan and cetuximab for pretreated metastatic colorectal cancer harboring wild-type KRAS. *Invest New Drugs*: published online, 2010.
- 017 **Shitara K, Yokota T, Takahari D, Shibata T, Ura T, Komatsu Y, Yuki S, Yoshida M, Takiuchi H, Utsunomiya S, Yatabe Y, Muro K**: Phase II study of combination chemotherapy with biweekly Cetuximab and Irinotecan for pre-treated metastatic colorectal cancer harboring wild-type KRAS. *Jan J Clin Oncol*, 40: 699-701, 2010.
- 018 **設楽絃平、室 圭**: 胃癌-HER2. カレントセラピー, 27 (12)ライフメディコム: 8-13, 2009.

[総説]

- 019 **Shitara K, Muro K**: Chemoradiotherapy for treatment of esophageal cancer in Japan: Current status and perspectives. *Gastrointest Cancer Res*, 3: 66-77, 2009.
- 020 **設楽絃平、室 圭**: 大腸がんにおける薬剤耐性とその克服. 癌と化学療法, 36(4): 557-566, 2009.
- 021 **宇良 敬**: 転移再発の治療 化学療法. あなたを守る大腸がんベスト治療, 昭和堂: 163-168, 2009.
- 022 **高張大亮、室 圭**: 化学放射線療法. 日本消化器病学会雑誌, 106: 771-778, 2009.
- 023 **横田知哉、室 圭**: 癌治療の現状と展望 1 標準治療の連携と分子標的薬剤のバイオマーカー セツキシマブ. カレントセラピー, 27 (11), ライフメディコム: 83-91, 2009.
- 024 **室 圭**: 転移性大腸癌に対する私の逐次治療-Stop & Go strategy. *INTESTINE*, 13(6), 日本メディカルセンター: 599-603, 2009.
- 025 **高張大亮、室 圭**: 消化管癌の化学・放射線療法の現状と展望. 胃と腸, 44(12) 医学書院: 1805-1815, 2009.
- 026 **高張大亮**: 血管新生を標的とした胃癌薬物療法. 細胞, 41

(12), ニュー・サイエンス社: 16-19, 2009.

027 宇良 敬: 嚥下障害. がん診療のサポートイブケアガイド, 文光堂: 160-162, 2010.

[執筆]

028 *Shitara K, Muro K*: Was the unexpected result a response to reintroduction of effective chemotherapy?. *Gastrointest Cancer Res*, 3(5): 217-218, 2009.

029 *Shitara K, Muro K*: Histological subtype of gastric cancer in Japan. *Lancet Oncol*, 11: 115-116, 2010.

030 室 圭: 大腸癌. 外来がん化学療法マニュアル, 文光堂: 176-189, 2009.

031 柴田剛志、室 圭: アルキル化剤. がん化学療法・分子標的治療update, 中外医学社: 240-244, 2009.

032 室 圭 他、杉原健一編: 切除不能進行・再発大腸癌に対する化学療法. インフォームドコンセントのための図説シリーズ 抗悪性腫瘍薬 大腸癌, 医薬ジャーナル社: 46-58, 2009.

033 室 圭 他、杉原健一編: 2) 切除不能進行・再発大腸癌に対する化学療法. 大腸癌治療ガイドライン2009年度版, 医薬ジャーナル社: 139-143, 2009.

臨床検査部・遺伝子病理診断部

001 越川 卓、所 嘉朗: EUS下穿刺術のすべて～基礎から応用まで～ 第II章 各論一4. 診断的穿刺術 J. 検体処理の方法―細胞診の立場から、2009

002 柴田典子: 分子病理学的診断と標的治療. 染色体遺伝子検査の基礎と応用(日臨技), p85-93, 2010

003 柴田典子, 所 嘉朗, 石田廣次, 谷田部 恭: 生検検体、胸水、リンパ節穿刺液等微量検体からのRNA抽出の検討. 医学検査, 57(968-974), 2008.

004 佐々木英一, 谷田部恭.: EGFR遺伝子異常と肺癌組織像. 病理と臨床(0287-3745)28巻2号 Page132-138(2010.02)

005 水野伸匡, 重川稔, 脇岡範, 澤木明, 原和生, 今村秀道, 近藤真也, 丹羽康正, 田近正洋, 河合宏紀, 松本和也, 小林佑次, 佐伯哲, 赤羽麻奈, 鈴木晴久, 知念健司, 清水泰博, 細田和貴, 谷田部恭, 山雄健次.: ステロイド治療をめぐる自己免疫性膵炎の画像診断による治療効果判定. 肝・胆・膵(0389-4991)60巻1号 Page15-21(2010.01)

006 脇岡範, 水野伸匡, 澤木明, 原和生, 今村秀道, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 松本和也, 小林佑次, 佐伯哲, 鈴木晴久, 赤羽麻奈, 細田和貴, 谷田部恭, 清水泰博, 丹羽康正, 山雄健次.: ステロイド治療後早期にFDGの集積が低下した自己免疫性膵炎の1例. 膵臓 24巻6号 Page709-716(2009.12)

007 藤田崇史, 岩田広治, 谷田部恭.: 乳癌術後患者における孤立性肺腫瘍に対する鑑別診断. 乳癌の臨床(0911-2251)24巻5号 Page571-578(2009.10)

008 鈴木晴久, 山雄健次, 澤木明, 水野伸匡, 原和生, 今村秀道, 脇岡範, 丹羽康正, 田近正洋, 清水泰博, 谷田部恭, 細田和貴, 吉永繁高, 後藤田卓志.: 肝・胆・膵におけるIVR EUS-

FNAによる膵腫瘍の診断 EUS-FNAの適応と手技. 消化器外科(0387-2645)32巻12号 Page1865-1872(2009.11)

009 豊岡伸一, 高野利実, 高坂貴行, 堀田勝幸, 松原恵太郎, 市原周治, 藤原義朗, 宗淳一, 大谷弘樹, 木浦勝行, 青江啓介, 谷田部恭, 大江裕一郎, 光富徹哉, 伊達洋至.: 上皮成長因子受容体遺伝子変異は喫煙・性別とは独立に肺腺癌患者のゲフィニブ治療における予後に関係する. 肺癌(0386-9628)49巻4号 Page409-415(2009.08)

010 朴智栄, 小川繁都, 朴将哲, 清水淳市, 堀尾芳嗣, 吉田公秀, 谷田部恭, 関戸好孝.: 樋田豊明悪性胸膜中皮腫に対する薬剤感受性の解析と治療戦略. 肺癌(0386-9628)49巻4号 Page386-391(2009.08)

011 岡田恭孝, 菅原綾子, 濱嶋浩, 森佐代美, 田中里枝, 矢神幸子, 桑原正喜, 谷田部恭.: カラーフローサイトメーターFACSCanto IIを用いた全血法と分離法の比較 悪性リンパ腫検出を目的とした効果と費用からみた比較. 医学検査(0915-8669)58巻7号 Page841-846(2009.07)

012 光富徹哉, 谷田部恭, 萩原弘一, 弦間昭彦, 西尾和人, 秋田弘俊, 中川和彦.: 日本肺癌学会EGFR解説作成委員. 肺癌患者におけるEGFR遺伝子変異検査の解説. 肺癌(0386-9628)49巻3号Pagei-xix(2009.06)

013 清水泰博, 安藤公隆, 佐野力, 千田嘉毅, 二村雄次, 水野伸匡, 高木忠之, 原和生, 谷田部恭, 細田和貴, 山雄健次.: 卵巣様間質のない嚢胞を伴う浸潤性膵管癌の1例. 膵臓(0913-0071)24巻4号 Page507-512(2009.08)

014 松本和也, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 近藤真也, 瀬戸大, 横井太紀雄, 谷田部恭, 中村栄男.: 胃MALTリンパ腫に対するHelicobacter pylori除菌治療後の長期予後 除菌反応性および遺伝子転座との関連を中心に. Helicobacter Research(1342-4319)13巻4号 Page268-275(2009.08)

015 谷田部恭.: いま、病理診断に求められるもの. 現代医学(0433-3047)56巻3号 Page563-570(2009.03)

016 武藤俊博, 清水泰博, 細田和貴, 佐野力, 水野伸匡, 谷田部恭, 山雄健次, 柳澤昭夫.: IPMN由来浸潤癌とIPMNに併存した通常型膵癌との鑑別に苦慮した1切除例遺伝子学的検索の導入. 膵臓(0913-0071)24巻2号 Page147-154(2009.04)

017 小林零, 森正一, 福井高幸, 立松明子, 谷田部恭, 光富徹哉.: 術後19年目に粘表皮癌の再発が疑われた肺癌合糸肉芽腫の1例. 日本呼吸器外科学会雑誌(0919-0945)23巻2号 Page165-168(2009.03)

018 横田知哉(愛知県がんセンター中央病院薬物療法部), 谷田部恭.: セツキシマブの効果予測因子としてのKRAS遺伝子測定における検体の取扱い. 医学のあゆみ(0039-2359)228巻13号 Page1237-1241(2009.03)

019 谷田部恭.: 腫瘍の進展過程で最も進んだ成分とは? 病理と臨床(0287-3745)27巻3号 Page300-302(2009.03)

020 齊藤卓也(愛知県がんセンター中央病院消化器外科部), 佐野力, 清水泰博, 安藤公隆, 千田嘉毅, 佐々木英一, 谷田部恭, 二村雄次.: 門脈内腫瘍栓と胆管内腫瘍栓を伴った大腸癌肝転移に傍胆管リンパ節転移を認めた1切除例. 日本消化器外科学会雑誌(0386-9768)42巻3号 Page293-298(2009.03)

021 谷田部恭.: Pharmacogenomics For Cancer Therapy SNPアレ

- イによる大規模遺伝子解析がもたらすもの. がん分子標的治療(1347-6955)7巻1号 Page46-52(2009.01)
- 022 **An B, Kondo Y, Okamoto Y;** et al. A characteristic methylation profile in CpG island methylator phenotype-negative distal colorectal cancers. *Int J Cancer* 2010.
- 023 **Chihara D, Oki Y;** Ine S, et al. Analysis of prognostic factors in peripheral T-cell lymphoma: prognostic value of serum albumin and mediastinal lymphadenopathy. *Leukemia & lymphoma* 2009; 50:1999-2004.
- 024 **Ebi H, Sato T, Sugito N;** et al. Counterbalance between RB inactivation and miR-17-92 overexpression in reactive oxygen species and DNA damage induction in lung cancers. *Oncogene* 2009; 28:3371-9.
- 025 **Ebi H, Tomida S, Takeuchi T;** et al. Relationship of deregulated signaling converging onto mTOR with prognosis and classification of lung adenocarcinoma shown by two independent in silico analyses. *Cancer Res* 2009; 69:4027-35.
- 026 **Fujiwara S, Nawa A, Nakanishi T;** et al. Thyroid transcription factor 1 expression in ovarian carcinomas is an independent prognostic factor. *Hum Pathol* 2010; 41:560-5.
- 027 **Girard N, Lou E, Azzoli CG, et al.** *Analysis of genetic variants in never-smokers with lung cancer facilitated by an Internet-based blood collection protocol:* a preliminary report. *Clin Cancer Res* 2010; 16:755-63.
- 028 **Hashimoto M, Yatabe Y, Kaneda K, Honda K, Ikeda M.** Impact of donepezil hydrochloride on the care burden of family caregivers of patients with Alzheimer's disease. *Psychogeriatrics* 2009; 9:196-203.
- 029 **Hosoda W, Takagi T, Mizuno N;** et al. Diagnostic approach to pancreatic tumors with the specimens of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration. *Pathology international* 2010; 60:358-64.
- 030 **Hosono S, Kawase T, Matsuo K;** et al. HLA-A alleles and the risk of cervical squamous cell carcinoma in Japanese women. *J Epidemiol* 2010; 20:295-301.
- 031 **Imaoka H, Yamao K, Bhatia V;** et al. Rare pancreatic neoplasms: the utility of endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration-a large single center study. *Journal of gastroenterology* 2009; 44:146-53.
- 032 **Jida M, Toyooka S, Mitsudomi T;** et al. Usefulness of cumulative smoking dose for identifying the EGFR mutation and patients with non-small-cell lung cancer for gefitinib treatment. *Cancer Sci* 2009; 100:1931-4.
- 033 **Katayama T, Shimizu J, Suda K;** et al. Efficacy of erlotinib for brain and leptomeningeal metastases in patients with lung adenocarcinoma who showed initial good response to gefitinib. *J Thorac Oncol* 2009; 4:1415-9.
- 034 **Kawaguchi K, Murakami H, Taniguchi T;** et al. Combined inhibition of MET and EGFR suppresses proliferation of malignant mesothelioma cells. *Carcinogenesis* 2009; 30:1097-105.
- 035 **Kitamura A, Hosoda W, Sasaki E, Mitsudomi T, Yatabe Y.** Immunohistochemical detection of EGFR mutation using mutation-specific antibodies in lung cancer. *Clin Cancer Res* 2010; 16:3349-55.
- 036 **Ko SB, Mizuno N, Yatabe Y;** et al. Aquaporin 1 water channel is overexpressed in the plasma membranes of pancreatic ducts in patients with autoimmune pancreatitis. *J Med Invest* 2009; 56 Suppl:318-21.
- 037 **Ko SB, Mizuno N, Yatabe Y;** et al. Corticosteroids correct aberrant CFTR localization in the duct and regenerate acinar cells in autoimmune pancreatitis. *Gastroenterology* 2010; 138:1988-96.
- 038 **Koike S, Kodera Y, Nakao A, Iwata H, Yatabe Y.** Absence of the Caveolin-1 P132L Mutation in Cancers of the Breast and Other Organs. *J Mol Diagn* 2010.
- 039 **Kosaka T, Yatabe Y, Onozato R, Kuwano H, Mitsudomi T.** Prognostic implication of EGFR, KRAS, and TP53 gene mutations in a large cohort of Japanese patients with surgically treated lung adenocarcinoma. *J Thorac Oncol* 2009; 4:22-9.
- 040 **Matsuo K, Suzuki T, Ito H;** et al. Association between an 8q24 locus and the risk of colorectal cancer in Japanese. *BMC Cancer* 2009; 9:379.
- 041 **Mekky MA, Yamao K, Sawaki A;** et al. Diagnostic utility of EUS-guided FNA in patients with gastric submucosal tumors. *Gastrointestinal endoscopy* 2010; 71:913-9.
- 042 **Mitsudomi T, Morita S, Yatabe Y;** et al. Gefitinib versus cisplatin plus docetaxel in patients with non-small-cell lung cancer harbouring mutations of the epidermal growth factor receptor (WJTOG3405): an open label, randomised phase 3 trial. *Lancet Oncol* 2010; 11:121-8.
- 043 **Mitsudomi T, Morita S, Yatabe Y;** et al. Gefitinib versus cisplatin plus docetaxel in patients with non-small-cell lung cancer harbouring mutations of the epidermal growth factor receptor (WJTOG3405): an open label, randomised phase 3 trial. *Lancet Oncol* 2010; 11:121-8.
- 044 **Mitsudomi T, Yatabe Y.** Epidermal growth factor receptor in relation to tumor development: EGFR gene and cancer. *FEBS J* 2010; 277:301-8.
- 045 **Mitsudomi T, Yatabe Y.** Epidermal growth factor receptor in relation to tumor development: EGFR gene and cancer. *FEBS J* 2010; 277:301-8.
- 046 **Mizuno N, Bhatia V, Hosoda W;** et al. Histological diagnosis of autoimmune pancreatitis using EUS-guided trucut biopsy: a comparison study with EUS-FNA. *Journal of gastroenterology* 2009; 44:742-50.
- 047 **Nakahara O, Yamao K, Bhatia V;** et al. Usefulness of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration (EUS-FNA) for undiagnosed intra-abdominal lymphadenopathy. *Journal of gastroenterology* 2009; 44:562-7.
- 048 **Oka K, Nagayama R, Yatabe Y, Iijima S, Mori N.** Angioimmunoblastic T-cell lymphoma with autoimmune thrombocytopenia: a report of two cases. *Pathol Res Pract* 2010; 206:270-5.

- 049 *Oka K, Nagayama R, Yatabe Y, Iijima S, Mori N.* Angioimmunoblastic T-cell lymphoma with autoimmune thrombocytopenia: a report of two cases. *Pathol Res Pract* 2010; 206:270-5.050 *Oka K, Shinonaga M, Nagayama R,* et al. Coexistence of primary pulmonary Hodgkin lymphoma and gastric MALT lymphoma associated with Epstein-Barr virus infection: a case report. *Pathology international* 2010; 60:520-3.
- 051 *Okasaka T, Matsuo K, Suzuki T,* et al. hOGG1 Ser326Cys polymorphism and risk of lung cancer by histological type. *J Hum Genet* 2009; 54:739-45.
- 052 *Onozato R, Kosaka T, Kuwano H, Sekido Y, Yatabe Y, Mitsudomi T.* Activation of MET by gene amplification or by splice mutations deleting the juxtamembrane domain in primary resected lung cancers. *J Thorac Oncol* 2009; 4:5-11.
- 053 *Oze I, Matsuo K, Hosono S,* et al. Comparison between self-reported facial flushing after alcohol consumption and ALDH2 Glu504Lys polymorphism for risk of upper aerodigestive tract cancer in a Japanese population. *Cancer Sci* 2010.
- 054 *Oze I, Matsuo K, Suzuki T,* et al. Impact of multiple alcohol dehydrogenase gene polymorphisms on risk of upper aerodigestive tract cancers in a Japanese population. *Cancer Epidemiol Biomarkers Prev* 2009; 18:3097-102.
- 055 *Park JY, Matsuo K, Suzuki T,* et al. Impact of smoking on lung cancer risk is stronger in those with the homozygous aldehyde dehydrogenase 2 null allele in a Japanese population. *Carcinogenesis* 2010; 31:660-5.
- 056 *Sawaki M, Iwata H, Sato Y,* et al. Phase II study of preoperative systemic treatment with the combination of docetaxel and trastuzumab in patients with locally advanced HER-2-overexpressing breast cancer. *Breast* 2010.
- 057 *Shitara K, Muro K, Ito S,* et al. Folate intake along with genetic polymorphisms in methylenetetrahydrofolate reductase and thymidylate synthase in patients with advanced gastric cancer. *Cancer Epidemiol Biomarkers Prev* 2010; 19:1311-9.
- 058 *Shitara K, Yokota T, Takahari D,* et al. Phase II study of combination chemotherapy with biweekly cetuximab and irinotecan for pre-treated metastatic colorectal cancer harboring wild-type KRAS. *Jpn J Clin Oncol* 2010; 40:699-701.
- 059 *Shitara K, Yokota T, Takahari D,* et al. Phase II study of combination chemotherapy with irinotecan and cetuximab for pretreated metastatic colorectal cancer harboring wild-type KRAS. *Invest New Drugs* 2010.
- 060 *Suda K, Onozato R, Yatabe Y, Mitsudomi T.* EGFR T790M mutation: a double role in lung cancer cell survival? *J Thorac Oncol* 2009; 4:1-4.
- 061 *Takayama R, Nakagawa H, Sawaki A,* et al. Serum tumor antigen REG4 as a diagnostic biomarker in pancreatic ductal adenocarcinoma. *Journal of gastroenterology* 2010; 45:52-9.
- 062 *Tanahashi C, Nagae H, Nukaya T, Hasegawa M, Yatabe Y.* Combined hepatocellular carcinoma and osteoclast-like giant cell tumor of the liver: possible clue to histogenesis. *Pathology international* 2009; 59:813-6.
- 063 *Tatebe S, Oka K, Kuraoka S, Yatabe Y.* Benign metastasizing leiomyoma of the lung: potential role of low-grade malignancy. *Thorac Cardiovasc Surg* 2009; 57:180-3.
- 064 *Tomida S, Takeuchi T, Shimada Y,* et al. Relapse-related molecular signature in lung adenocarcinomas identifies patients with dismal prognosis. *J Clin Oncol* 2009; 27:2793-9.
- 065 *Travis WD, Rekhtman N, Riley GJ,* et al. Pathologic diagnosis of advanced lung cancer based on small biopsies and cytology: a paradigm shift. *J Thorac Oncol* 2010; 5:411-4.
- 066 *Tsuboi J, Tajika M, Nakamura T,* et al. Endoscopic features of short-term progression of esophageal intramural pseudodiverticulosis. *Endoscopy* 2010; 42 Suppl 2:E92-3.
- 067 *Varella-Garcia M, Mitsudomi T, Yatabe Y,* et al. EGFR and HER2 genomic gain in recurrent non-small cell lung cancer after surgery: impact on outcome to treatment with gefitinib and association with EGFR and KRAS mutations in a Japanese cohort. *J Thorac Oncol* 2009; 4:318-25.
- 068 *Yatabe Y.* EGFR mutations and the terminal respiratory unit. *Cancer Metastasis Rev* 2010; 29:23-36.
- 069 *Yatabe Y, Miyakawa S, Ohmori H, Mishima H, Adachi T.* Effects of taurine administration on exercise. *AdvExp Med Biol* 2009; 643:245-52.
- 070 *Yatabe Y, Tsutsumi C, Hirayama Y, Mori K, Murakami N, Kato M.* Genetic population structure of *Osmunda japonica*, rheophilous *Osmundalanea* and their hybrids. *J Plant Res* 2009; 122:585-95.
- 071 *Yoshida K, Yatabe Y;* Park J, et al. Clinical outcomes of advanced non-small cell lung cancer patients screened for epidermal growth factor receptor gene mutations. *J Cancer Res Clin Oncol* 2010; 136:527-35.
- 072 *Yoshida K, Yatabe Y;* Park J, et al. Clinical outcomes of advanced non-small cell lung cancer patients screened for epidermal growth factor receptor gene mutations. *J Cancer Res Clin Oncol* 2010; 136:527-35.
- 073 *Sawaki M, Iwata H, Sato Y, Wada M, Toyama T, Sasaki E, Yatabe Y, Imai T, Ohashi Y.* Phase II study of preoperative systemic treatment with the combination of docetaxel and trastuzumab in patients with locally advanced HER-2-overexpressing breast cancer. *Breast*. 2010 May 15. [Epub ahead of print]

頭頸部外科部

- 001 *Zhang S, Hayashi R, Fujii M, Hasegawa Y, Yoshino K, Fukayama M and Ochiai A.* Total microvessel perimeter per tumor area is a predictor of radiosensitivity in early-stage glottic carcinoma. *Int. J. Radiation Oncology Biol. Phys.* 73(4): 1104-9, 2009.
- 002 *Suzuki H, Hasegawa Y, Terada A, Hyodo I, Nakashima T, Nishio M, Tamaki T.* FDG-PET predicts survival and distant metastasis in oral squamous cell carcinoma. *Oral Oncology,*

45(7): 569-73, 2009.

- 003 *Suzuki H, Fukuyama R, Hasegawa Y, Tamaki T, Nishio M, Nakashima T, Tatematsu M*: Tumor thickness, depth of invasion, and Bcl-2 expression are correlated with FDG-uptake in oral Squamous cell carcinomas. *Oral Oncology*, 45:891-897, 2009.
- 004 *Fujii M, Tomita K, Nishijima W, Tsukuda M, Hasegawa Y, Ishitota J, Yamane H, Homma A, Tomita T*, Phase I/II study of S-1 plus cisplatin combination chemotherapy in patients with advanced/recurrent head and neck cancer. *Jpn J Clin Oncol*, 40(3): 214-21, 2009.
- 005 *Adachi M, Ijichi K, Hasegawa Y, Nakamura H, Ogawa T, Kanematsu N*: Human MLH1 status can potentially predict cisplatin sensitivity but not micrsatellite instability in head and neck squamous cell varcinoma cells. *Experimental and Therapeutic Medicine*, 1:93-96, 2010.
- 006 *Hasegawa Y, Saikawa M*: Update on the classification and nomenclature system for neck dissection: revisions proposed by the Japan Neck Dissection Study Group. *Int J Clin Oncol*, 15: 5-12, 2010.
- 007 花井信広, 長谷川泰久: 頭頸部がんに対する化学放射線治療. *腫瘍内科*, 3(4): 423-429, 2009.
- 008 寺田聡広, 花井信広, 小澤泰次郎, 平川仁, 川北大介, 丸尾貴志, 三上慎司, 長谷川泰久: 頸部郭清の基本手技 - 全頸部郭清術 -. *頭頸部外科*, 19(1): 33-37, 2009.
- 009 上嶋伸知, 坂井謙介, 長縄弥生, 渡戸岡俊三, 長谷川泰久, 上田実, 篠田雅幸: 食道癌手術患者に対する専門的口腔ケア施行の効果. *日本外科感染症学会雑誌*, 6(3): 183-188, 2009.
- 010 花井信広, 寺田聡広, 小澤泰次郎, 平川仁, 横井久, 長谷川泰久: 頭頸部扁平上皮癌に対するDocetaxelとCisplatin併用化学療法の第II相試験. *癌と化学療法*, 36(8): 1281-1285, 2009.
- 011 花井信広, 長谷川泰久: 中咽頭癌T3-4症例に対する治療法の選択は? . *JOHNS*, 25(10): 1542-1544, 2009.
- 012 朝蔭隆宏, 岸本誠司, 斉川雅久, 林隆一, 川端一高, 林崎勝武, 土井勝之, 吉積隆, 丹生健一, 白根誠, 中谷弘章, 菅澤正, 浅井昌大, 長谷川泰久, 富田吉信, 鬼塚哲郎, 古川まどか, 甲能直幸, 門田伸也, 西蔭渡, 西條茂, 松浦一登, 北村守正, 藤井隆, 中島格: 舌癌T2N0症例の頸部リンパ節の取り扱いについて. *耳鼻と臨床*, 55(補1): S45-S54, 2009.
- 013 小澤泰次郎, 長谷川泰久: 耳下腺悪性腫瘍の手術. *JHONS*, 26(2): 179-182, 2010.
- 014 花井信広, 長谷川泰久: 頸部リンパ節転移. *JHONS*, 26(3): 500-504, 2010.

形成外科部

- 001 兵藤伊久夫, 長谷川泰久: 再建部位による再建材料の選択と再建方法 上顎の再建. *耳鼻咽喉科・頭頸部外科*, 81(5), 79-85, 2009
- 002 神山圭史, 亀井謙, 鳥山和宏, 鳥居修平: 骨肉腫に合併した特発性血小板減少性紫斑病患者に遊離腹直筋皮弁を行った

1例, 日本形成外科学会誌, 29(8), 476-480, 2009

胸部外科

- 001 *Yamamoto H, Toyooka S, Mitsudomi T*. Impact of EGFR mutation analysis in non-small cell lung cancer. *Lung Cancer*, 63: 315-21, 2009
- 002 *Varella-Garcia M, Mitsudomi T, Yatabe Y, Kosaka T, Nakajima E, Xavier AC, Skokan M, Zeng C, Franklin WA, Bunn PA, Jr., Hirsch FR*. EGFR and HER2 genomic gain in recurrent non-small cell lung cancer after surgery: impact on outcome to treatment with gefitinib and association with EGFR and KRAS mutations in a Japanese cohort. *J Thorac Oncol*, 4: 318-25, 2009
- 003 *Tomida S, Takeuchi T, Shimada Y, Arima C, Matsuo K, Mitsudomi T, Yatabe Y, Takahashi T*. Relapse-related molecular signature in lung adenocarcinomas identifies patients with dismal prognosis. *J Clin Oncol*, 27: 2793-9, 2009
- 004 *Suda K, Onozato R, Yatabe Y, Mitsudomi T*. EGFR T790M mutation: a double role in lung cancer cell survival? *J Thorac Oncol*, 4: 1-4, 2009
- 005 *Sakakura N, Fukui T, Mori S, Hatoooka S, Yokoi K, Mitsudomi T*. Fluid drainage and air evacuation characteristics of Blake and conventional drains used after pulmonary resection. *The Annals of thoracic surgery*, 87: 1539-45, 2009
- 006 *Onozato R, Kosaka T, Kuwano H, Sekido Y, Yatabe Y, Mitsudomi T*. Activation of MET by gene amplification or by splice mutations deleting the juxtamembrane domain in primary resected lung cancers. *J Thorac Oncol*, 4: 5-11, 2009
- 007 *Okasaka T, Matsuo K, Suzuki T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Yatabe Y, Hida T, Mitsudomi T, Tanaka H, Yokoi K, Tajima K*. hOGG1 Ser326Cys polymorphism and risk of lung cancer by histological type. *J Hum Genet*, 54: 739-45, 2009
- 008 *Morita S, Okamoto I, Kobayashi K, Yamazaki K, Asahina H, Inoue A, Hagiwara K, Sunaga N, Yanagitani N, Hida T, Yoshida K, Hirashima T, Yasumoto K, Sugio K, Mitsudomi T, Fukuoka M, Nukiwa T*. Combined survival analysis of prospective clinical trials of gefitinib for non-small cell lung cancer with EGFR mutations. *Clin Cancer Res*, 15: 4493-8, 2009
- 009 *Kosaka T, Yatabe Y, Onozato R, Kuwano H, Mitsudomi T*. Prognostic implication of EGFR, KRAS, and TP53 gene mutations in a large cohort of Japanese patients with surgically treated lung adenocarcinoma. *J Thorac Oncol*, 4: 22-9, 2009
- 010 *Kawaguchi K, Mori S, Usami N, Fukui T, Mitsudomi T, Yokoi K*. Preoperative evaluation of the depth of chest wall invasion and the extent of combined resections in lung cancer patients. *Lung Cancer*, 64: 41-4, 2009
- 011 *Katayama T, Shimizu J, Suda K, Onozato R, Fukui T, Ito S, Hatoooka S, Sueda T, Hida T, Yatabe Y, Mitsudomi T*. Efficacy of erlotinib for brain and leptomeningeal metastases in patients with lung adenocarcinoma who showed initial good response to

- gefitinib. *J Thorac Oncol*, 4: 1415-9, 2009
- 012 *Jida M, Toyooka S, Mitsudomi T, Takano T, Matsuo K, Hotta K, Tsukuda K, Kubo T, Yamamoto H, Yamane M, Oto T, Sano Y, Kiura K, Yatabe Y, Ohe Y, Date H, Miyoshi S.* Usefulness of cumulative smoking dose for identifying the EGFR mutation and patients with non-small-cell lung cancer for gefitinib treatment. *Cancer Sci*, 100: 1931-4, 2009
- 013 *Fukui T, Sakakura N, Kobayashi R, Katayama T, Ito S, Hatooka S, Mitsudomi T.* Comparison of methods for placing and managing a silastic drain after pulmonary resection. *Interact Cardiovasc Thorac Surg*, 9: 645-8, 2009
- 014 *Fukui T, Katayama T, Ito S, Abe T, Hatooka S, Mitsudomi T.* Clinicopathological features of small-sized non-small cell lung cancer with mediastinal lymph node metastasis. *Lung Cancer*, 66: 309-13, 2009
- 015 *Endoh H, Ishibashi Y, Yamaki E, Yoshida T, Yajima T, Kimura H, Kosaka T, Onozato R, Tanaka S, Mitsudomi T, Kuwano H.* Immunohistochemical analysis of phosphorylated epidermal growth factor receptor might provide a surrogate marker of EGFR mutation. *Lung Cancer*, 63: 241-6, 2009
- 016 *Ebi H, Tomida S, Takeuchi T, Arima C, Sato T, Mitsudomi T, Yatabe Y, Osada H, Takahashi T.* Relationship of deregulated signaling converging onto mTOR with prognosis and classification of lung adenocarcinoma shown by two independent in silico analyses. *Cancer research*, 69: 4027-35, 2009
- 017 *Ishiguro F, Matsuo K, Fukui T, Mori S, Hatooka S, Mitsudomi T.* Effect of selective lymph node dissection based on patterns of lobe-specific lymph node metastases on patient outcome in patients with resectable non-small cell lung cancer: a large-scale retrospective cohort study applying a propensity score. *J Thorac Cardiovasc Surg*, 139: 1001-6, 2009
- 018 *Ito S, Goto Y, Suzuki K, Kawai S, Naito M, Ito Y, Hamajima N.* Significant association between methylenetetrahydrofolate reductase 677T allele and hyperuricemia among adult Japanese subjects. *Nutr Res*, 29: 710-5, 2009
- 019 須田健一, 小野里良一, 高坂貴行, 光富徹哉. EGFR受容体遺伝子変異を有する肺癌. 別冊日本臨床, 10: 5-8, 2009
- 020 須田健一, 小野里良一, 光富徹哉. 肺癌の原因－喫煙と環境因子. 臨床と研究 86: 818-23, 2009
- 021 須田健一, 光富徹哉. 臨床的予測因子とPGx因子. In: 西條長宏, 西尾和人, editors. *がん化学療法・分子標的薬 update*. 東京: 中外医学社; 2009. p. 351-8.
- 022 清水淳市, 光富徹哉. EGFR作用薬 EGFR-TKI reversibleについて. *Mebio Oncology*, 6: 12-22, 2009
- 023 森正一, 小林零, 奥田勝裕, 小川紫都, 石黒太志, 福井高幸, 波戸岡俊三, 篠田雅幸, 光富徹哉. 非小細胞肺癌の術後再発例に対するgemcitabine+carboplatin併用療法(bi-weekly投与)の検討. *癌と化学療法*, 336: 57-61, 2009
- 024 小野里良一, 須田健一, 高坂貴行, 光富徹哉. METの増幅、変異、多型. *がん分子標的治療*, 7: 117-23, 2009
- 025 小林零, 森正一, 福井高幸, 立松明子, 谷田部恭, 光富徹哉. 術後19年目に粘表皮癌の再発が疑われた肺縫合糸肉芽腫の一例. *日本呼吸器外科学会雑誌*, 23: 53-6, 2009
- 026 小林零, 光富徹哉. 縦隔腫瘍. *日本医師会雑誌*, 138: S190-S1, 2009
- 027 小林国彦, 弦間昭彦, 光富徹哉, 山本信之. 座談会 進行非小細胞肺癌に対する個別化治療. *呼吸*, 28: 1171-81, 2009
- 028 光富徹哉, 片上信之, 中川和彦. EGFR-TKIの臨床試験を実地診療にどうかすか. *がん分子標的治療*, 7: 10-7, 2009
- 029 光富徹哉. バイオマーカーで何が変わるのか EGFR遺伝子変異とEGFRチロシンキナーゼ阻害剤. *医薬品研究*, 40: 866-70, 2009
- 030 光富徹哉. 肺癌－EGFR標的治療のバイオマーカーとしてのEGFRとKRAS遺伝子. *カレントセラピー*, 27: 1112-7, 2009
- 031 光富徹哉. 4TH IASLC/ASCO/ESMO international conference on targeted therapies in lung cancer. *がん分子標的治療*, 7: 273-6, 2009
- 032 光富徹哉. EGFR遺伝子変異とEGFRチロシンキナーゼ阻害剤. *医薬品研究*, 40: 866-70, 2009
- 033 光富徹哉. 肺癌. コンセンサス 癌治療, 8: 81-5, 2009
- 034 光富徹哉. 分子標的治療薬の作用機序. In: 中西洋一, editor. *肺がん薬物療法 Q & A*. 東京: 南江堂; 2009. p. 13-21.
- 035 光富徹哉. EGFRに対する小分子阻害剤. *癌と化学療法*, 36: 1058-62, 2009

乳腺科部

- 001 *Watanabe T, Sano M, Takashima S, Kitaya T, Tokuda Y, Yoshimoto M, Kohno N, Nakagami K, Iwata H:* Oral uracil and tegafur compared with classic cyclophosphamide, methotrexate, fluorouracil as postoperative chemotherapy in patients with node-negative, high-risk breast cancer: national surgical adjuvant study for breast cancer 01 trial. *Journal of Clinical Oncology* 27, ASCO:(1368-1374), (2009).
- 002 *Hayashi H, Kimura M, Yoshimoto N, Tsuzuki N, Tsunoda N, Fujita T, Yamashita T, Iwata H:* A case of HER2-positive male breast cancer with lung metastases showing a good response to trastuzumab and paclitaxel treatment. *Breast cancer* 16(2), informa :(136-140),(2009).
- 003 *Iwata H:* Neo(ajuvant) trastuzumab treatment; current perspectives. *Breast cancer* 16(2), informa :(288-294),(2009).
- 004 岩田広治, 林裕倫: ホルモン治療の現状と展望. *Pharma Medical*, vol27 ,(41-45),(2009).
- 005 中村清吾, 津川浩一郎, 岩田広治, 大野真司, 秋山太, 元村和由, 徳田安春, 芳賀駿介: センチネルリンパ節生検に対する多施設共同臨床確認試験における安全性と同定率に関する報告. *乳癌の臨床*, 24(2), 篠原出版新社: (271-277), (2009) .
- 006 林裕倫, 堀尾章代, 波戸ゆかり, 藤田崇史, 安藤由明, 山田年成, 岩田広治: 乳癌術後leukoerythroblastosisを契機に骨髄癌の診断に至った2症例. *乳癌の臨床*, 24(2), 篠

原出版新社：(245-249),(2009)。

- 007 山下年成、岩田広治：抗HER2治療薬-特集 新しい乳癌治療薬。乳癌の臨床，24(3)，篠原出版新社：(309-317)，(2009)。008 山田健志、杉浦英志、岩田広治：乳癌患者にみられたSAPHO症候群の3例。乳癌の臨床，24(3)，篠原出版新社：(381-385)，(2009)。
- 009 岩田広治：トラスツズマブ耐性とその対策。医学のあゆみ，230(1)，医師薬出版株式会社：(67-70)，(2009)。
- 010 藤田崇史、岩田広治、谷田部恭：乳癌術後患者における孤立性肺腫瘍に対する鑑別診断。乳癌の臨床，24(5)，篠原出版新社：(571-578)，(2009)。
- 011 藤田崇史：乳腺超音波ガイド下インターベンション手技マニュアル超音波ガイド下マンモトーム生検 実際の手技。手技解説2，アトムス：(50-51)，(2009)。
- 012 藤田崇史、岩田広治：化学療法に関する臨床研究の最近の動向と開発中の新しい乳癌治療薬。Mamma，62，リノ・メディカル：(1-7)，(2009)。

消化器外科部

【原著】

- 001 Nakahara O, Yamao K, Bhatia V, Sawaki A, Mizuno N, Takagi T, Shimizu Y, Koshikawa T, Yatabe Y, Baba H : Usefulness of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration (EUS-FNA) for undiagnosed intra-abdominal lymphadenopathy. Journal of Gastroenterology,44,6-, 2009.
- 002 Yamao K, Bhatia V, Mizuno N, Sawaki A, Shimizu Y, Irisawa A : Interventional endoscopic ultrasonography. Journal of Gastroenterology and Hepatology,24 ,509-519, 2009.
- 003 Kanemitsu Y, Kato T, Shimizu Y, Inaba Y, Shimada Y, Nakamura K, Sato A, Moriya Y : A Randomized Phase II/III Trial Comparing Hepatectomy Followed by mFOLFOX6 with Hepatectomy Alone as Treatment for Liver Metastasis from Colorectal Cancer: Japan Clinical Oncology Group Study JCOG0603. Jpn Journal of Clinical Oncogy,39(6),406-409, 2009.
- 004 Imaoka H, Yamao K, Bhatia V, Shimizu Y, Yatabe Y, Koshikawa T, Kinoshita Y : Rare pancreatic neoplasms: the utility of endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration (EUS-FNA) -A large single center study.Journal of Gastroenterology,44,146-153, 2009.
- 005 Hoki N, Mizuno N, Sawaki A, Tajika M, Takayama R, Shimizu Y, Bhatia V, Yamao K : Diagnosis of autoimmune pancreatitis using endoscopic ultrasonography. Journal of Gastroenterology,44,154-159, 2009.
- 006 Yoshinaga S, Yamao K, Vhatia V, Mizuno N, Sawaki A, Tajika M, Ishii N, Abbas W, Shimizu Y : Endoscopic ultrasound-guided choledochoduodenostomy for treatment of ampullary cancer. Clinical Journal of Gastroenterology,2,55-58, 2009.
- 007 Nara S, Onaya H, Hiraoka N, Shimada K, Sano T, Sakamoto Y, Esaki M, Kosuge T : Preoperative evaluation of invasive and

non-invasive intraductal papillary-mucinous neoplasms of the pancreas: clinical, radiological, and pathological analysis of 123 cases.. Pancreas,38(),8-16,2009.

- 008 Shimada K, Sano T, Sakamoto Y, Esaki M, Nara S, Kosuge T : Therapeutic value of lymph node dissection during hepatectomy in patients with intrahepatic cholangiocellular carcinoma with negative lymph node involvement. Surgery,145 ,411-416, 2009.
- 009 Kodera Y, Nakanishi H, Ito S, Misawa K, Ito Y, Nakayama G, Koike M, Fujiwara M, Yamamura Y, Nakao A : Expression of L1 cell adhesion molecule is a significant prognostic factor in pT3-stage gastric cancer . Anticancer Res.,29(10),4033-4039, 2009.
- 010 Matsuo K, Tajima K, Suzuki T, Kawase T, Watanabe M, Shitara K, Misawa K, Ito S, Sawaki A, Muro K, Nakamura T, Yamao K, Yamamura Y, Hamajima N, Hiraki A, Tanaka H : Association of prostate stem cell antigen gene polymorphisms with the risk of stomach cancer in Japanese. Int J Cancer,15(125),1961-4, 2009.
- 011 Takashima A, Shimada Y, Masaki T, Hamaguchi T, Ito Y, Yamaguchi S, Kondo Y, Saito N, Kato T, Oue M, Higashino M, Moriya Y : Current therapeutic strategies for squamous cell carcinoma in Japan. Int J Clin Oncol,14,416-420, 2009.
- 012 Tajika M, Nakamura T, Bhatia V, Komori K, Kato T, Yamao K : I leal pouch adenocarcinoma after proctocolectomy for familial adenomatous polyposis. . Int J Colorectal Dis ,24,1487-1489, 2009.
- 013 Tajika M, Nakamura T, Nakahara O, Kawai H, Komori K, Hirai T, Kato T, Bhatia V, Baba H, Yamao K : Prevalence of adenomatous and carcinomas in the ileal pouch after proctocolectomy in patients with familial adenomatous polyposis. J Gastrointest Surg ,13,1266-1273, 2009.
- 014 Kobayashi H, Mochizuki H, Kato T, Mori T, Kameoka S, Shirouzu K, Sugihara K : Outcomes of surgery alone for lower rectal cancer with or without pelvic side wall dissection. Dis Colon Rectum,52,567-576, 2009.
- 015 Matsuo K, Suzuki T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Shitara K, Komori K, Kanemitsu Y, Hirai T, Yatabe Y, Tanaka H, Tajika K : Asssocation between an 8q24 locus and the risk of colorectal cancer in Japanese. BMC Cancer ,26(9),379-,2009.
- 016 高木忠之, 入澤篤志, 澤木 明, 水野伸匡, 原 和生, 中村常哉, 田近正洋, 河合宏紀, 清水泰博, 山雄健次 : 10mm以下の小膵癌の診断におけるEUS-FNAの有用性。胆と膵,30,361-367, 2009.
- 017 水野伸匡, 清水泰博, 澤井勇悟, 山雄健次 : 膵癌のリスクファクターとしての膵管内乳頭粘液性腫瘍の意義。日本消化器病学会雑誌,106,1163-1167,2009.
- 018 久保正二, 高橋慶一, 石川 達, 清水泰博, 佐藤 温, 堀田正啓 : 多様化する転移性肝癌の治療選択。日本消化器病学会雑誌,106,1447-1465,2009.
- 019 小寺泰弘, 円谷 彰, 吉川貴己, 小林道也, 伊藤誠二, 滝口伸浩, 神垣 隆, 坂本純一, 中尾昭公 : 胃癌におけるPaclitaxel

- の感受性試験の多施設共同研究. 癌の臨床, 55(5), 323-330, 2009.
- 020 江種友彦, 小田昌宏, 北坂孝幸, 森 健策, 末永康仁, 三澤一成, 藤原道隆: 血管分岐情報を利用した腹部動脈に対する血管名自動対応付け手法. MEDICAL IMAGING TECHNOLOGY, 27(Suppl.), 1-6, 2009.
- 021 森 浩起, 小田昌宏, 北坂孝幸, 森 健策, 末永康仁, 三澤一成, 藤原道隆: 腹部3次元CT像データベースからの類似画像検索に基づく臓器自動抽出手法. MEDICAL IMAGING TECHNOLOGY, 27(Suppl.), 1-5, 2009.
- 022 三澤一成, 伊藤誠二, 伊藤友一, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公: 消化器外科用CADにおける現状と問題点 臨床医の立場から. MEDICAL IMAGING TECHNOLOGY, 27(Suppl.), 1-2, 2009.
- 023 小島泰樹, 松井隆則, 上村孝法, 藤光康信, 吳 成浩, 小島宏, 三澤一成, 木下敬史, 藤原道隆: 腹腔鏡補助下幽門即位切除術におけるbody mass indexおよびCT計測による内臓脂肪量の影響. 日本消化器外科学会雑誌, 42(4), 442-447, 2009.
- 024 武藤俊博, 小池聖彦, 伊藤友一, 中山吾郎, 藤原道隆, 小寺泰弘, 中尾昭公: 食道癌標準術前化学療法による有害事象と関連する要因の検討. 日本臨床外科学会雑誌, 71(2), 335-343, 2010.
- 【分担執筆】**
- 001 Sano T, Nimura Y: Aggressive surgery for hepatocellular carcinoma with vascular and/or biliary involvement. Recent Advances in Liver Surgery, Renzo Dionigi, Landes Bioscience/Eurekah, Texas, 166-186, 2009.
- 002 Sano T, Nimura Y: Surgical strategies and technique for hilar cholangiocarcinoma. Recent Advances in Liver Surgery, Renzo Dionigi, Landes Bioscience/Eurekah, Texas, 187-213, 2009.
- 003 清水泰博, 二村雄次: 門脈枝結紮と肝ミトコンドリア機能. 胆道外科の要点と盲点 第2版. 二村雄次, 文光堂, 東京, -, 2009.
- 004 清水泰博, 二村雄次: PPPDにおける右胃動脈温存の術式と意義. 胆道外科の要点と盲点 第2版. 二村雄次, 文光堂, 東京, -, 2009.
- 005 佐野 力, 末松 誠: 胆汁分泌のメカニズム: CO (一酸化炭素) の役割. 胆道外科の要点と盲点 第2版. 二村雄次, 文光堂, 東京, 224-225, 2009.
- 006 佐野 力, 二村雄次: 胆汁ドレーナージカテーテルの術中管理. 胆道外科の要点と盲点 第2版. 二村雄次, 文光堂, 東京, 297-, 2009.
- 007 佐野 力, 二村雄次: 肝切除術におけるドレーナージのポイント. 胆道外科の要点と盲点 第2版. 二村雄次, 文光堂, 東京, 346-347, 2009.
- 008 佐野 力, 二村雄次: 胆汁ドレーナージカテーテル管理のポイント. 胆道外科の要点と盲点 第2版. 二村雄次, 文光堂, 東京, 406-407, 2009.
- 009 佐野 力, 二村雄次: 胆汁ドレーナージカテーテルの管理. 胆道外科の要点と盲点 第2版. 二村雄次, 文光堂, 東京, 415-, 2009.
- 010 佐野 力, 二村雄次: 胆汁漏. 胆道外科の要点と盲点 第2版. 二村雄次, 文光堂, 東京, 422-424, 2009.
- 011 佐野 力, 二村雄次: 腹腔内膿瘍. 胆道外科の要点と盲点 第2版. 二村雄次, 文光堂, 東京, 425-427, 2009.
- 012 小森康司, 平井 孝, 金光幸秀: 連載: 画像Q&A. 臨床雑誌「外科」71小立鉦彦, 南江堂, 東京都, 762-755, 2009.
- 013 小森康司: あなたを守る大腸がんベスト治療. 加藤知行, 昭和堂, 京都市, -, 2009.
- 014 伊藤誠二: レジデントからのQ&A大動脈周囲リンパ節転移を伴う胃癌の治療は?. 胃がんperspective, 2(4)吉田和弘, メディカルレビュー社, 大阪, 274-275, 2009.
- 015 伊藤友一: 【まずはここから! 新人ナースに必要な基礎知識はやわかりノート治療と術前後ケア】主な手術 食道切除術 (食道亜全摘, 3領域リンパ節郭清術). 消化器外科 Nursing, 14(5), メディカ出版, 大阪, 432-433, 2009.
- 016 伊藤友一: 【まずはここから! 新人ナースに必要な基礎知識はやわかりノート治療と術前後ケア】主な手術 噴門側胃切除術. 消化器外科 Nursing, 14(5), メディカ出版, 大阪, 434-, 2009.
- 017 平井 孝: 骨盤内臓器全摘術. 直腸・肛門外科手術, 渡邊昌彦, メジカルビュー, 東京, 166-181, .
- 018 金光幸秀, 平井 孝, 小森康司, 加藤知行: 大腸癌局所再発に対する治療—直腸癌. 大腸疾患NOW, 武藤徹一郎, 日本メディカルセンター, 東京, 105-115, 2009.
- 019 金光幸秀: 【まずはここから! 新人ナースに必要な基礎知識はやわかりノート 治療と術前後ケア】主な手術 結腸切除術. 消化器外科 Nursing, 14(5), メディカ出版, 大阪, 446-, 2009.
- 020 金光幸秀: 【まずはここから! 新人ナースに必要な基礎知識はやわかりノート 治療と術前後ケア】主な手術 直腸低位前方切除術. 消化器外科 Nursing, 14(5), メディカ出版, 447-, 2009.
- 021 小池聖彦, 伊藤友一, 小寺泰弘, 亀井 譲, 中尾昭公: 【食道切除後再建法の工夫】有茎小腸による食道再建 結腸再建を付加するRoux-Y空腸再建. 手術, 63(4), 金原出版, 東京, 439-445, 2009.
- 022 金光幸秀: ガイドラインサポートハンドブック大腸癌: 切除不能な遠隔転移例における原発巣切除【大腸癌治療ガイドライン2009年版】. 大腸癌治療ガイドライン2009年版, 医薬ジャーナル社, 82-83, 2009.
- 023 金光幸秀: ガイドラインサポートハンドブック大腸癌: 肝転移根治切除後の補助療法【大腸癌治療ガイドライン2009年版】. 医薬ジャーナル社, 123-125, 2009.
- 024 加藤知行, 安井久晃, 島田安博, 清水泰博, 金光幸秀, 稲葉吉隆: 大腸癌肝転移切除成績の現状: 切除可能肝転移に対する術後補助化学療法. 大腸癌Frontier, 13(1)杉原健一, メジカルレビュー社, 東京, 40-46, 2010.
- 【症例検討】**
- 001 清水泰博, 安藤公隆, 佐野 力, 千田嘉毅, 二村雄次, 水野伸匡, 高木忠之, 原 和生, 谷田部 恭, 細田和貴, 山雄健次: 卵巣様間質のない嚢胞を伴う浸潤性膵管癌の1例. 膵

臓,24,507-512, 2009.

- 002 安藤公隆, 清水泰博, 佐野 力, 千田高毅, 二村雄次, 水野伸匡, 高木忠之, 原 和生, 山雄健次: 血清CA19-9異常高値が診断の契機となった膵IPMN由来浸潤癌の1例. 肝胆膵治療研究会誌,7,49-56, 2009.
- 003 武藤俊博, 清水泰博, 細田和貴, 佐野 力, 水野伸匡, 谷田部 恭, 山雄健次, 柳澤昭夫: IPMN由来浸潤癌とIPMNに併存した通常型膵癌との鑑別に苦慮した1切除例—遺伝子学的検索の導入—. 膵臓,24,147-154, 2009.
- 004 斎藤卓也, 佐野 力, 清水泰博, 安藤公隆, 千田高毅, 佐々木英一, 谷田部 恭, 二村雄次: I 門脈内腫瘍栓と胆管内腫瘍栓を伴った大腸癌肝転移に傍胆管リンパ節転移を認めた1切除例. 日本消化器外科学会誌,42,293-298, 2009.

整形外科

- 001 Nishida Y, Isu K, Ueda T, Nishimoto Y, Tsuchiya H, Wada T, Sato K, Tsukushi S, Sugiura H: Osteosarcoma in the Elderly Over 60 Years: A Multicenter Study by the Japanese Musculoskeletal Oncology Group. Journal of Surgical Oncology, 100: 48-54, 2009.
- 002 杉浦英志, 山田健志, 小澤英史, 西田佳弘, 米山正洋, 中島浩敦: 再発性軟部肉腫に対する再発広範切除術の成績と予後因子について. 日整会誌, 83: 28-32, 2009.
- 003 杉浦英志: 骨軟骨腫瘍の臨床における現状 (医学). アンテックス, 21(2): 13-15, 2009.
- 004 山田健志, 杉浦英志, 岩田広治: 乳癌患者にみられたSAPHO症候群の3例. Jpn J Breast Cancer, 24: 381-38, 2009.
- 005 吉田雅博, 中島浩敦, 高桑康成, 二村尚久, 杉浦英志, 西田佳弘: 胸膜外発生solitary fibrous tumor 9例の臨床病理学的検討. 整形外科, 60: 1349-1355, 2009.
- 006 山田健志, 小澤英史, 杉浦英志, 北村敦子, 谷田部恭: 右前胸部皮下腫瘍の1例. 東海骨軟部腫瘍, 21: 1-2, 2009.
- 007 杉浦英志, 山田健志, 小澤英史, 立松明子, 谷田部恭, 大友克之: 右脛骨骨腫瘍の1例. 東海骨軟部腫瘍, 21: 5-6, 2009.
- 008 山田健志, 杉浦英志, 神山圭史, 谷田部恭: 縦郭腫瘍の1例. 東海骨軟部腫瘍, 21: 17-18, 2009.
- 009 山田健志, 杉浦英志, 神山圭史, 兵藤伊久夫, 細田和貴, 谷田部恭: 右肩部腫瘍の1例. 東海骨軟部腫瘍, 21: 35-36, 2009.
- 010 濱田俊介, 佐藤公治, 安藤智洋, 中村博司, 片山良仁: 多発外傷に伴う腰椎破裂骨折に対する低侵襲前方後方合併手術. 東海脊椎外科, 23: 94-96, 2009.
- 011 濱田俊介, 深谷泰士, 北村伸二, 安藤智洋, 佐藤公治: 整形外科的治療を要する多発外傷症例の検討. 中部日本整形外科災害外科, 52: 665-666, 2009.

泌尿器科部

[原著]

- 001 Tomita N, Kodaira T, Tachibana H, Nakamura T, Tomoda T, Nakahara R, Inokuchi H, Hayashi N. and Fuwa N.: Dynamic conformal arc radiotherapy with rectum hollow-out technique for localized prostate cancer. Radiother Oncol 90 (3): 346-352, 2009.
- 002 Tomita N, Kodaira T, Furutani K, Tachibana H, Nakahara R, Mizoguchi N. and Hayashi N.: Early salvage radiotherapy for patients with PSA relapse after radical prostatectomy. J Cancer Res Clin Oncol 135 (11): 1561-1567, 2009.
- 003 西川昇平, 曾我倫久人, 長谷川嘉弘, 山田泰司, 木瀬英明, 有馬公伸, 杉村芳樹, 小倉友二, 脇田利明, 林 宣男, 川村壽一: 根治的前立腺全摘278症例の臨床的検討. 泌尿器紀要, 2009: 55(9): 531-537.

婦人科部

- 001 Kodaira T, Fuwa N, Nakanishi T, Tachibana H, Nakamura T, Tomita N, Nakahara R, Inokuchi H: Prospective study of alternating chemoradiotherapy consisting of extended-field dynamic conformational radiotherapy and systemic chemotherapy using 5-FU and nedaplatin for patients in high-risk group with cervical carcinoma. Int J Radiat Oncol Biol Phys, 73(1): 251-8, 2009.
- 002 Onda T, Kobayashi H, Nakanishi T, Hatae M, Iwasaka T, Konishi I, Shibata T, Fukuda H, Kamura T, Yoshikawa H: Feasibility study of neoadjuvant chemotherapy followed by interval debulking surgery for stage III/IV ovarian, tubal, and peritoneal cancers: Japan Clinical Oncology Group Study JCOG206. Gynecol Oncol, 113(1): 57-62, 2009.
- 003 中西透: 【産婦人科専攻医の研修 何を教える?何を学ぶ? (婦人科腫瘍編)】子宮頸がんの診断?治療. 産科と婦人科, 76(8): 983-986, 2009.
- 004 中西透: ワクチンによる子宮頸癌の予防戦略 子宮頸癌の現状. 癌と化学療法, 37(2): 222-226, 2009.
- 005 中西透, 牧野弘, 吉田憲生, 水野美香, 伊藤則雄: 卵巣癌治療後の経過観察に関する考察. 東海産科婦人科学会雑誌, 46: 75-79, 2009.

麻酔科部

- 001 Jyunya N, Masao N, Renko H, Kazumi F, Shyunsaku T, Tatsuya M, Yoshimi I: Priming with rocuronium or vecuronium prevents remifentanyl-mediated muscle rigidity and difficult ventilation. Journal of Anesthesia. 23:323-328,2009.

- 001 *Kanemitsu Y, Kato T, Shimazu Y, Inaba Y, Shimada Y, Nakamura K, Sato A, Moriya Y* : A Randomized Phase II / III Trial Comparing Hepatectomy Followed by mFOLFOX6 with Hepatectomy Alone as Treatment for Liver Metastasis from Colorectal Cancer : Japan Clinical Oncology Group Study JCOG0603. *Jpn J Clin Oncol*.2009 Jun;39(6):406-9
- 002 *Shitara K, Matsuo K, Takahari D, Yokota T, Inaba Y, Yamaura H, Sato Y, Najima M, Ura T, Muro K* : Neutropenia as a prognostic factor in metastatic colorectal cancer patients undergoing chemotherapy with first-line FOLFOX . *Eur J Cancer*.2009 Jul;45(10):1757-63
- 003 *Shitara K, Takahari D, Yokota T, Shibata T, Ura T, Muro K, Inaba Y, Yamaura H, Sato Y, Najima M, Utsunomiya S* : Case Series Cetuximab Monotherapy for Patients with Pre-treated Colorectal Cancer Complicated with Hyperbilirubinemia due to Severe Liver Metastasis. *Jpn J Clin Oncol*.2009 Nov 28
- 004 *Kobayashi T, Arai Y, Takeuchi Y, Nakajima Y, Shioyama Y, Sone M, Matsui O, Kadoya M, Inaba Y* Japan Interventional Radiology in Oncology Study Group(JIVROSG) : Phase I / II clinical study of percutaneous vertebroplasty(PVP) as palliation for painful malignant vertebral compression fractures(PMVCF) : JOVROSG-0202 . *Ann Oncol*.2009 Dec;20(12):1943-7
- 005 *Matsumoto K, Hara K, Sawaki A, Mizuno N, Hijioka S, Imamura H, Niwa Y, Tajika M, Kawai H, Kondo S, Inaba Y, Yamao K* : Ruptured pseudoaneurysm of the splenic artery complicating endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration biopsy for pancreatic cancer. *Endoscopy*. 2010 Jan;42(S 02):E27-E28
- 006 *Shitara K, Yokota T, Takahari D, Shibata T, Ura T, Utsunomiya S, Inaba Y, Yamaura H, Sato Y, Najima M, Kawai H, Tajika M, Sawaki A, Yatabe Y, Muro K* : Phase II study of combination chemotherapy with irinotecan and cetuximab for pretreated metastatic colorectal cancer harboring wild-type KRAS. *Invest New Drugs*.2010 Jan 14
- 007 *Inaba Y, Arai Y, Yamaura H, Sato Y, Aramaki T, Najima M, Sone M, Kumada T, Tanigawa N, Anai H, Yoshioka T, Ikeda M* : Phase I / II study of hepatic arterial infusion chemotherapy with gemcitabine in patients with unresectable intrahepatic cholangiocarcinoma(JIVROSG-0301). *Am J Clin Oncol*.2010
- 008 名嶋弥菜, 稲葉吉隆, 山浦秀和, 佐藤洋造, 金本高明, 友澤裕樹, 坂根誠, 北角淳, 寺倉梨津子 : 肝動脈化学塞栓療法のエビデンス. *腫瘍内科, 科学評論社, Vol.4 No.4* 307-312 2009
- 009 佐藤洋造 : 基本に立ち戻って 親カテーテル/ガイディングシステムを考える けっこう便利なLLUPカテーテル. *ラドファン, メディカルアイ, Vol.7 No.13* 54-56 2009
- 010 稲葉吉隆 : 抗がん薬の投与方法 ポートの留置・管理. *新臨床腫瘍学改訂第2版, 南江堂* 404-407 2009
- 011 山浦秀和, 稲葉吉隆, 佐藤洋造, 加藤弥菜, 金本高明 : 集学的治療における肝動脈化学療法的位置づけ. *臨床雑誌外*

科, 南江堂, Vol.72 No.2 153-157 2010

- 012 稲葉吉隆 : 肝動注療法の有用性、その適応. *ガイドライン サポートハンドブック大腸癌 大腸癌治療ガイドライン* 2009年版, 医薬ジャーナル社, 238 2010

放射線治療部

[原著]

- 001 *Kodaira T, Fuwa N, Nakanishi T, Tachibana H, Nakamura T, Tomita N, Nakahara R, Inokuchi H* : Prospective study of alternating chemoradiotherapy consisted of extended-field dynamic conformal radiotherapy and systemic chemotherapy using 5FU and Nedaplatin for patients with high-risk group of cervical carcinoma. *International Journal of Radiation Oncology, Biology, Physics*, 73 (1):251-258, 2009
- 002 *Kodaira T, Tomita N, Tachibana H, Nakamura T, Nakahara R, Inokuchi H, Fuwa N* : Aichi Cancer Center initial experience of intensity modulated radiation therapy for nasopharyngeal cancer using helical tomotherapy. *International Journal of Radiation Oncology, Biology, Physics*, 73 (4):1135-1140, 2009
- 003 *Ariji Y, Fuwa N, Kodaira T, Tachibana H, Nakamura T, Satoh Y, Ariji E* : False-positive positron emission tomography appearance with 18F-fluorodeoxyglucose after definitive radiotherapy for cancer of the mobile tongue. *Br J Radiol*, 82 (973); e3-7, 2009
- 004 *Tomita N, Kodaira T, Tachibana H, Nakamura T, Mizoguchi N, Takada A* : Favorable outcomes of radiotherapy for early-stage mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma. *Radiother Oncol*, 90(2); 231-235, 2009
- 005 *Nakamura T, Hatooka S, Kodaira T, Tachibana H, Tomita N, Nakahara R, Inokuchi H, Mizoguchi N, Takada A, Shinoda M, Fuwa N* : Determination of the Irradiation Field for Clinical T1-T3N0M0 Thoracic/Abdominal Esophageal Cancer Based on the Postoperative Pathological Results. *Jpn J of Clin Oncol*, 39(2);86-91, 2009
- 006 *Tomita N, Kodaira T, Tachibana H, Nakamura T, Tomoda T, Nakahara R, Inokuchi H, Hayashi N, Fuwa N* : Dynamic conformal arc radiotherapy with rectum hollow-out technique for localized prostate cancer. *Radiother Oncol*, 90(3);346-352, 2009
- 007 *Tomita N, Kodaira T, Tachibana H, Nakamura T, Nakahara R, Inokuchi H, Mizoguchi N, Takada A* : A comparison of radiation treatment plans using IMRT with helical tomotherapy and 3D conformal radiotherapy for nasal natural killer/T-cell lymphoma. *Br J Radiol*, 82(981); 756-63, 2009
- 008 *Nakamura T, Kodaira T, Tachibana H, Tomita N, Yokouchi JI, Fuwa N* : Clinical outcome of oropharyngeal carcinoma treated with platinum-based chemoradiotherapy. *Oral Oncol*, 45(9); 830-4, 2009
- 009 *Tomita N, Kodaira T, Furutani K, Tachibana H, Nakahara R, Mizoguchi N, Hayashi N* : Early salvage radiotherapy for patients with PSA relapse after radical prostatectomy. *J Cancer*

Res Clin Oncol,135(11); 1561-7, 2009

- 010 *Toita T, Oguchi M, Ohno T, Kato S, Niibe Y, Kodaira T, Kazumoto T, Kataoka M, Shikama N, Kenjo M, Teshima T, Kagami Y*: Quality Assurance in the Prospective Multi-institutional Trial on Definitive Radiotherapy Using High-dose-rate Intracavitary Brachytherapy for Uterine Cervical Cancer: The Individual Case Review. *Jpn J of Clin Oncol* ,39(12);813-19,2009
- 011 *Kato H, Taji H, Ogura M, Kagami Y, Oki Y, Tsujimura A, Fuwa N, Kodaira T, Seto M, Yamamoto K, Morishima Y*: Favorable Consolidative Effect of High-Dose Melphalan and Total-Body Irradiation Followed by Autologous Peripheral Blood Stem Cell Transplantation After Rituximab-Containing Induction Chemotherapy With In Vivo Purging in Relapsed or Refractory Follicular Lymphoma. *Clinical Lymphoma & Myeloma*,(6); 443-448, 2009
- 012 *Kodaira T, Fuwa N, Nakanishi T, Tachibana H, Nakamura T, Tomita N, Nakahara R, Inokuchi H, Mizoguchi N, Takada A*: Retrospective analysis of definitive radiotherapy for patients with superficial esophageal carcinoma: Consideration of the optimal treatment method with a focus on late morbidity. *Radiotherapy and Oncology*, 95 : 234-9, 2010
- 013 *Tomita N, Kodaira T, Hida T, Tachibana H, Nakamura T, Nakahara R, Inokuchi H*: The Impact of Radiation Dose and Fractionation on Outcomes for Limited-Stage Small-Cell Lung Cancer. *Int J Radiat Oncol Biol Phys*, 76(4);1121-6,2010
- 014 *Tomita N, Kodaira T, Furutani K, Tachibana H, Hasegawa Y, Terada A, Hanai K, Ozawa T, Nakamura T, Fuwa N*: Long-term follow-up and a detailed prognostic analysis of patients with oropharyngeal cancer treated with radiotherapy. *J Cancer Res Clin Oncol*,136(4);617-23, 2010
- 015 *Asakura H, Hashimoto T, Zenda S, Harada H, Hirakawa K, Mizumoto M, Furutani K, Hironaka S, Fuji H, Murayama S, Boku N, Nishimura T*: Analysis of dose-volume histogram parameters for radiation pneumonitis after definitive concurrent chemoradiotherapy for esophageal cancer. *Radiother Oncol*, 95(2):240-4,2010
- 016 *Harada H, Katagiri H, Kamata M, Yoshioka Y, Asakura H, Hashimoto T, Furutani K, Takahashi M, Sakahara H, Nishimura T*: Radiological response and clinical outcome in patients with femoral bone metastases after radiotherapy. *J Radiat Res*, 25;51(2):131-6,2010
- 017 加藤知行監修: 大腸がんに対する放射線治療.あなたを守る大腸癌ベスト治療 第1版 昭和堂,X章 転移 2転移・再発の治療 168-171, 2009
- 018 古平 毅: 「進化する放射線療法最新事情」 トモセラピーによるIMRT(強度変調放射線治療)の実際.隔月刊誌がん患者ケア,2(3); 20-25 2009
- 019 古平 毅、立花 弘之、中村 達也、富田 夏夫、中原 理絵、井口 治男、溝口 信貴、高田 彰憲 :21回 JASTROシンポジウム特集 「IMRTの標準化に向けて」 Tomotherapyを用いた強度変調放射線治療の実際.臨床放射

線,54 (5) ; 595-602,2009

- 020 古平 毅: がん放射線療法の進歩と展望 各論 頭頸部癌治療精度の向上とQOLの改善をめざして.最新医学, 64 (6) ; 1163-1170, 2009
- 021 古平 毅、富田 夏夫、立花 弘之、古谷 和久:臨床 Topics IMRT専用機Tomotherapyの臨床的評価.*Cancer Frontier*, 11;180-187,2009
- 022 古平 毅、古谷 和久、立花 弘之、中原 理絵:シンポジウム強度変調放射線治療(IMRT)の中長期成績-TomoTherapyを用いた強度変調放射線治療の治療成績と展望-頭頸部癌,35(3); 240-244, 2009
- 023 古平 毅 古谷和久 立花弘之 富田夏夫 中原理絵 溝口信貴 野村基雄 後藤容子: 総説 喉頭癌・副鼻腔癌の放射線治療.臨床放射線,54(10); 1217-1226, 2009
- 024 古平 毅:最新放射線治療機器の適応 トモセラピー.JASTRO NEWSLETTER, 91(1); 17-18.2009
- 025 古平 毅:研究課題報告 トモセラピーの適応と最適線量分割法に関する指針の作成.JASTRO NEWSLETTER, 93(7); 7-11、2009

外来部

- 001 *Kawaguchi K, Murakami H, Taniguchi T, Fujii M, Kawata S, Fukui T, Kondo Y, Osada H, Usami N, Yokoi K, Ueda Y, Yatabe Y, Ito M, Horio Y, Hida T, Sekido Y*. Combined inhibition of MET and EGFR suppresses proliferation of malignant mesothelioma cells. *Carcinogenesis*. 30:1097-1105, 2009
- 002 *Hida T, Ogawa S, Park JC, Park JY, Shimizu J, Horio Y, Yoshida K*. Gefitinib for the treatment of non-small-cell lung cancer. *Expert Rev Anticancer Ther*. 9:17-35, 2009
- 003 *Katayama T, Shimizu J, Suda K, Onozato R, Fukui T, Ito S, Hatooka S, Sueda T, Hida T, Yatabe Y, Mitsudomi T*. Efficacy of erlotinib for brain and leptomeningeal metastases in patients with lung adenocarcinoma who showed initial good response to gefitinib. *J Thorac Oncol*. 4:1415-1419, 2009
- 004 *Horio Y, Osada H, Shimizu J, Ogawa S, Hida T, Sekido Y*. Relationship of mRNA expressions of RanBP2 and topoisomerase II isoforms to cytotoxicity of amrubicin in human lung cancer cell lines. *Cancer Chemother Pharmacol*. Epub 2009
- 005 朴智榮, 小川紫都, 朴将哲, 清水淳市, 堀尾芳嗣, 吉田公秀, 谷田部恭, 関戸好孝, 樋田豊明. 悪性胸膜中皮腫に対する薬剤感受性の解析と治療戦略.肺癌.49巻4号:386-391, 2009
- 006 朴智榮, 清水淳市, 堀尾芳嗣, 吉田公秀, 小川紫都, 朴将哲, 不破信和, 樋田豊明. 放射線治療に著効し長期寛解の得られている進行非小細胞肺癌の2例.日本胸部臨床. 68巻8号:773-779, 2009

緩和ケア部

[論文/総説]など

- 001 小森康永：ナラティブの拡がりって何？.家族療法研究,26(2):102-105, 2009.
- 002 小森康永：座談会「ナラティブ・アプローチの現在」.家族療法研究,26(2):117-145, 2009.
- 003 小森康永：18ナラティブ・セラピー.精神科治療学,24:72-73,2009.
- 004 小森康永：書評『死生学5』.JPOSニューズレター, No57, 2009
- 005 小森康永：グループ療法で連帯感深める.読売新聞 がん最前線,70, 2009.
- 006 小森康永：患者さん経験談 研究対象に.読売新聞 がん最前線,71, 2009.
- 007 小森康永：末期患者さんの人生を記録.読売新聞 がん最前線,72, 2009.

[著作/翻訳]

- 008 小森康永：医療におけるナラティブ・アプローチ.野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』頸草書房、2009所収.
- 009 小森康永訳：ホワイト『ナラティブ・実践地図』.金剛出版,2009.

看護部

- 001 新貝夫弥子：がん患者の倦怠感のケアとアセスメント. 日本がん看護学会誌23 (2) : 78～84頁, 2009
- 002 笹川良子：CVポート使用時のトラブルの実際と対応. がん患者ケア, 第3巻第2号, 日経研出版：87～90頁, 2009
- 003 青山寿昭：下咽頭癌術後の“食べたい”を支えた看護. 臨床看護増刊号, 第35巻4号, ヘルス出版：658～661頁, 2009
- 004 新田都子：特集 Q&A でわかる！痛みの緩和 ナースだからこそできるポイント. ExpertNurse, Vol26 No1, 照林社：36～63頁, 2010
藤田 恵：特集 Q&A でわかる！痛みの緩和 ナースだからこそできるポイント. ExpertNurse, Vol26 No1, 照林社：52～57頁, 2010
- 005 愛知県がんセンター中央病院看護部編者（青山寿昭、臼井夢、久保知、小島瞳、新貝夫弥子、榊原由美子、阪本由美、瀬古志桜、高木礼子、籠昌美、段浩美、土屋大樹、鶴田美佐、戸崎加奈江、新田都子、美濃屋亜矢子、宮谷美智子、向井未年子）：ジェネラリストナースのためのがん看護ポケットマニュアル, メディカ出版, 2010
- 006 戸崎加奈江・宮武 美智代：がん化学療法時のセルフケア支援の実際. 臨床看護, 第35巻第8号, へるす出版：1149～1155頁, 2009
- 007 高橋朋子、余郷素直：消化器がん化学療法看護 完全マスターBOOK, 消化器外科NURSING, 2010臨時増刊, メディカ出版：164～169頁, 2010

6. 学会誌・その他誌上発表テーマ調べ (研究所)

所長室

- 001 **Gao CM, Tang JH, Cao HX, Ding JH, Wu JZ, Wang J, Liu YH, Li SP, Su P, Matsuo K, Takezaki T, Tajima K:** MTHFR polymorphisms, dietary folate intake and breast cancer risk in Chinese woman. *J Hum Genet*, 54: 414-418, 2009.
- 002 **Yang H, Zhou Y, Zhou Z, Liu J, Yuan X, Matsuo K, Takezaki T, Tajima K, Cao J:** A novel polymorphism rs1329149 of CYP2E1 and a known polymorphism rs671 of ALDH2 of alcohol metabolizing enzymes are associated with colorectal cancer in a southwestern Chinese population. *Cancer Epidemiol Biomarkers Prev*, 18: 2522-2527, 2009.
- 003 **Gao CM, Tajima K, Ding JH, Wu JZ, Li SP, Cao HX, Liu YT, Su P, Qian Y, Chang J, Takezaki T:** Body size, physical activity and risk of breast cancer - A case control study in Jiangsu Province of China. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 1-6, 2009.
- 004 **Kawase T, Matsuo K, Hiraki A, Suzuki T, Watanabe M, Iwata H, Tanaka H, Tajima K:** Interaction of the effects of alcohol drinking and polymorphisms in alcohol-metabolizing enzymes on the risk of female breast cancer in Japan. *J Epidemiol*, 19(5): 244-250, 2009.
- 005 **Matsuo K, Suzuki T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Shitara K, Komori K, Kanemitsu Y, Hirai T, Yatabe Y, Tanaka H, Tajima K:** Association between an 8q24 locus and the risk of colorectal cancer in Japanese. *BMC Cancer*, 9: 379, 2009.
- 006 **Tamakoshi A, Suzuki K, Ito Y, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Nakachi K, Ohno Y; for the JACC Study Group:** Selection of cases and controls for the nested case-control study within the Japan Collaborative Cohort study; the First-wave. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 1-5, 2009.
- 007 **Maruyama K, Iso H, Ito Y, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Nakachi K, Tamakoshi A; for the JACC Study Group:** Associations of food and nutrient intakes with serum IGF-I, IGF-II, IGFBP-3, TGF- β 1, total SOD activity and sFas levels among middle-aged Japanese: the Japan Collaborative Cohort study. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 7-22, 2009.
- 008 **Wakai K, Suzuki K, Ito Y, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Nakachi K, Tamakoshi A; for the JACC Study Group:** Time spent walking or exercising and blood levels of insulin-like growth factor-I(IGF-I) and IGF-binding protein-3 (IGFBP-3): A large-scale cross-sectional study in the Japan Collaborative Cohort study. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 23-27, 2009.
- 009 **Suzuki K, Ito Y, Hashimoto S, Kawado M, Inoue T, Ando M, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Nakachi K, Tamakoshi A; for the JACC Study Group:** Association of serum retinol and carotenoids with insulin-like growth factors and insulin-like growth factor binding protein-3 among control subjects of a nested case-control study in the Japan Collaborative Cohort study. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 29-35, 2009.
- 010 **Nojima M, Sakauchi F, Mori M, Tamakoshi A, Ito Y, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Nakachi K; for the JACC Study Group:** Relationship of serum superoxide dismutase activity and lifestyle in healthy Japanese adults. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 37-40, 2009.
- 011 **Tamakoshi A, Suzuki K, Lin Y, Ito Y, Yagyu K, Kikuchi S, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Nakachi K; for the JACC Study Group:** Relationship of soluble fas with body mass index in healthy Japanese adults. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 41-44, 2009.
- 012 **Suzuki S, Kojima M, Tokudome S, Suzuki K, Ozasa K, Ito Y, Inaba Y, Tajima K, Nakachi K, Watanabe Y, Tamakoshi A; for the JACC Study Group:** Insulin-like growth factor (IGF)-I, IGF-II, IGF binding protein-3, and risk of colorectal cancer: a nested case-control study in the Japan Collaborative Cohort study. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 45-49, 2009.
- 013 **Sakauchi F, Nojima M, Mori M, Wakai K, Suzuki S, Tamakoshi A, Ito Y, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Nakachi K:** Serum insulin-like growth factors I and II, insulin-like growth factor binding protein-3 and risk of breast cancer in the Japan Collaborative Cohort study. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 51-55, 2009.
- 014 **Mikami K, Ozasa K, Nakao M, Miki T, Hayashi K, Watanabe Y, Mori M, Sakauchi F, Washio M, Kubo T, Suzuki K, Wakai K, Nakachi K, Tajima K, Ito Y, Inaba Y, Tamakoshi A; for the JACC Study Group:** Prostate cancer risk in relation to insulin-like growth factor (IGF)-I and IGF-binding protein-3: A nested case-control study in large scale cohort study in Japan. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 57-61, 2009.
- 015 **Yagyu K, Kikuchi S, Lin Y, Ishibashi T, Obata Y, Kurosawa M, Ito Y, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Nakachi K, Tamakoshi A; for the JACC Study Group:** Lack of association between risk of biliary tract cancer and circulating IGF (Insulin-like growth factor)- I, IGF-II or IGFB-3 (IGF-binding protein-3): A nested case-control study in a large scale cohort study in Japan. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 63-67, 2009.
- 016 **Pham TM, Fujino Y, Nakachi K, Suzuki K, Ito Y, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Tamakoshi A, Yoshimura T; for the JACC Study Group:** Relationship between serum levels of superoxide dismutase activity and subsequent risk of cancer mortality: Findings from a nested case-control study within the Japan Collaborative Cohort study. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 69-73, 2009.
- 017 **Pham TM, Fujino Y, Ando M, Suzuki K, Nakachi K, Ito Y, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Tamakoshi A, Yoshimura T; for the JACC Study Group:** Relationship between serum levels of superoxide dismutase activity and subsequent risk of lung cancer mortality; Findings from a nested case-control study within the Japan Collaborative Cohort study. *Asian Pacific J*

- Cancer Prev, 10: 75-79, 2009.
- 018 **Lin Y, Kikuchi S, Yagyu K, Ishibashi T, Kurosawa M, Ito Y, Watanabe Y, Inaba Y, Tajima K, Nakachi K, Tamakoshi A; for the JACC Study Group:** Serum soluble fas levels and superoxide dismutase activity and the risk of death from pancreatic cancer: a nested case-control study within the Japanese Collaborative Cohort study. *Asian Pacific J Cancer Prev*, 10: 81-85, 2009.
- 019 **Honjo K, Iso H, Tsugane S, Tamakoshi A, Satoh, H, Tajima K, Suzuki T, Sobue T:** The effects of smoking and smoking cessation on mortality from cardiovascular disease among Japanese: pooled analysis of three large-scale cohort studies in Japan. *Tobacco Control*: 19: 50-57, 2010.
- 020 **Ito H, Matsuo K, Hosono S, Watanabe M, Kawase T, Suzuki T, Hirai T, Yatabe Y, Tanaka H, Tajima K:** Association between CYP7A1 loci and the risk of proximal colon cancer. *Int J Mol Epi Genet*, 1: 35-46, 2010.
- 021 **片岡誠、田島和雄、小椋美知則、安藤雄一、矢野智紀、戸澤啓一、深尾俊一:** 痛の治療はどれだけ向上したか。現代医学, 56(3): 495-515, 2009.
- 022 **田島和雄:** 抗がん鉄女「韓玉亭」 「6臓器のがんを克服し、生活改善努力による健康獲得」。名公医ニュースレター *Active Life*, 38: 5, 2009.
- 023 **田島和雄、森山紀之、上田龍三:** がん研究の最前線 予防・診断・治療の現状と課題。ヒューマンサイエンス, 20: 4-14, 2009.
- 疫学・予防部**
- 001 **Kanda J, Ichinohe T, Matsuo K, Benjamin RJ, Klumpp TR, Rozman P, Blumberg N, Mehta J, Sohn SK, Uchiyama T:** Impact of ABO mismatching on the outcomes of allogeneic related and unrelated blood and marrow stem cell transplantations for hematologic malignancies: Individual patient data-based meta-analysis of cohort studies. *Transfusion*, 49: 624-635, 2009.
- 002 **Tomida S, Takeuchi T, Shimada Y, Arima C, Matsuo K, Mitsudomi T, Yatabe Y, Takahashi T:** Relapse-related molecular signature in lung adenocarcinomas identifies patients with dismal prognosis. *J Clin Oncol*, 27: 2793-2799, 2009.
- 003 **Nishimori H, Fujii N, Maeda Y, Matsuoka KI, Takenaka K, Shinagawa K, Ikeda K, Matsuo K, Harada M, Tanimoto M.:** Efficacy and feasibility of idea therapy for refractory or relapsed non-hodgkin' s lymphoma. *Anticancer Res*, 29: 1749-1754, 2009.
- 004 **Shitara, Matsuo K, Takahari D, Yokota T, Ura T, Muro K.:** Neutropenia during chemotherapy as a prognostic factor in patients with metastatic colorectal cancer treated with first-line FOLFOX. *Eur J Cancer*, 45: 1757-1763, 2009.
- 005 **Nishimori H, Matsuo K, Maeda Y, Nawa Y, Sunami K, Toqitani K, Takimoto H, hiramatsu Y, Kiquchi T, Yano T, Yamane H, Tabatashi T, Takeuchi M, Makita M, sezaki N, Yamasuji Y, Suqiyama H, Tabuchi T, Kataoka I, Fujii N, Ishimaru F, Shinagawa K, Ikeda K, Hara M, Yoshino T, Tanimoto M.:** The effect of adding rituximab to CHOP-based therapy on clinical outcomes for Japanese patients with diffuse large B-cell lymphoma: a propensity score matching analysis. *Int J Hematol*, 89: 326-331, 2009.
- 006 **Gao CM, Tang JH, Cao HX, Ding JH, Wu JZ, Wang J, Liu YH, Li SP, Su P, Matsuo K, Takezaki T, Tajima K.:** MTHFR polymorphisms, dietary folate intake and breast cancer risk in Chinese woman. *J Hum Genet*, 54: 414-418, 2009.
- 007 **Inoue M, Sasazuki S, Wakai K, Suzuki T, Matsuo K, Shimazu T, Tsuji I, Tanaka K, Mizoue T, Nagata C, Tamakoshi A, Sawada N, Tsugane S.:** Green tea consumption and gastric cancer in Japanese: A pooled analysis of six cohort studies. *Gut*, 58: 1323-1332, 2009.
- 008 **Matsue K, Matsuo K, Fujiwara H, Iwama K, Hayama BY, Kimura S, Yamakura M, Takeuchi M.:** Diminished alpha2-plasmin inhibitor activity associated with the use of imatinib mesylate in patients with Philadelphia chromosome-positive haematologic cancer. *Thromb Haemostasis*, 101: 1170-1171, 2009.
- 009 **Jida M, Toyooka S, Mitsudomi T, Takano T, Matsuo K, Hotta K, Tsukuda K, Kubo K, Yamamoto H, Yamane M, Oto T, Sano Y, Kiura K, Yatabe Y, Ohe Y, Date H, Miyoshi S.:** Usefulness of cumulative smoking dose for identifying the EGFR mutation and patients with non-small-cell lung cancer for gefitinib treatment. *Cancer Sci*, 100: 1931-1934, 2009.
- 010 **Kanda J, Mizumoto C, Kawabata H, Ichinohe T, Tsuchida H, Tomosugi N, Matsuo K, Yamashita K, Kondo T, Ishikawa T, Uchiyama T.:** Clinical significance of serum hepcidin levels on early infectious complications in allogeneic hematopoietic stem cell transplantation. *Biol Blood Marrow Tr*, 15: 956-962, 2009.
- 011 **Hishida A, Matsuo K, Goto Y, Naito M, Wakai K, Tajima K, Hamajima N.:** Associations of a PTPN11 G/A polymorphism at intron 3 with *Helicobacter pylori* seropositivity, gastric atrophy and gastric cancer in Japanese. *BMC Gastroenterol*, 9: 51, 2009.
- 012 **Matsuo K, Tajima K, Suzuki T, Kawase T, Watanabe M, Shitara K, Misawa K, Ito S, Sawaki A, Muro K, Nakamura T, Yamao K, Yamamura Y, Hamajima N, Hiraki A, Tanaka H.:** Association of prostate stem cell antigen gene polymorphisms with the risk of stomach cancer in Japanese. *Int J Cancer*, 125: 1961-1964, 2009.
- 013 **Sugiura S, Yagyu K, Obata Y, Lin Y, Tamakoshi A, Ito H, Matsuo K, Tajima K, Aoki K, Kikuchi S.:** Cancer deaths in a cohort of Japanese barbers in Aichi Prefecture. *Asian Pac J Cancer Prev*, 10: 307-310, 2009.
- 014 **Kawase T, Matsuo K, Hiraki A, Suzuki T, Watanabe M, Iwata H, Tanaka H, Tajima K.:** Interaction of the effects of alcohol drinking and polymorphisms in alcohol-metabolizing enzymes on the risk of female breast cancer in Japan. *J Epidemiol*, 19:

- 015 **Kanda J, Matsuo K, Kawase T, Suzuki T, Ichinohe T, Seto M, Morishima Y, Tajima K, Tanaka H.**: Association of alcohol intake and smoking with malignant lymphoma risk in Japanese: A hospital-based case-control study at Aichi Cancer Center. *Cancer Epidemiol Biomarker Prev*, 18: 2436-2441, 2009.
- 016 **Nakanishi H, Yamada R, Gotoh N, Hayashi H, Yamashiro K, Shimada N, Ohno-Matsui K, Michizuki M, Saito M, Iida T, Matsuo K, Tajima K, Matsuda F, Yoshimura N.**: Genome-wide association analysis identified 11q24.1 as new susceptible locus for pathological myopia. *Plos Genet*, 5: e1000660, 2009.
- 017 **Yang H, Zhou Y, Zhou Z, Liu J, Yuan XY, Matsuo K, Takezaki T, Tajima K, Cao J.**: A Novel Polymorphism rs1329149 of CYP2E1 and a Known Polymorphism rs671 of ALDH2 of alcohol metabolizing enzymes, are Associated with Colorectal Cancer in a Southwestern Chinese Population. *Cancer Epidemiol Biomarker Prev*, 18: 2522-2527, 2009.
- 018 **Hiyama T, Matsuo K, Urabe Y, Tanaka S, Yoshihara M, Haruma K, Chyayama K.**: Meta-analysis used to identify factors associated with the effectiveness of proton pump inhibitors against non-erosive reflux disease. *J Gastroen Hepatol*, 24: 1326-1332, 2009.
- 019 **Namba N, Matsuo K, Kubonishi S, Kikuchi T, Maeda Y, Niida M, Shinagawa K, Koide N, Ikeda K, Tanimoto M.**: Prediction of number of apheresis procedures necessary in healthy donors to attain minimally required peripheral blood CD34+cells. *Transfusion*, 49: 2384-2389, 2009.
- 020 **Kawase T, Matsuo K, Suzuki T, Hiraki A, Watanabe M, Iwata H, Tanaka H, Tajima K.** FGFR2 intronic polymorphisms interact with reproductive risk factors of breast cancer: Results of a case control study in Japan. *Int J Cancer*, 12: 1946-1952, 2009.
- 021 **Taioli E, Garza MA, Ahn YO, Bishop DT, Bost J, Budai B, Chen K, Gemignani F, Keku T, Lima CS, Le Marchand L, Matsuo K, Moreno V, Plaschke JH, Pufulete M, Thomas SB, Toffoli G, Wolf CR, Moore CG, Little J.**: Meta- and pooled-analysis of MTHFR C677T polymorphism and colorectal cancer: a HuGE-GSEC Minireview. *Am J Epidemiol*, 170: 1207-1221, 2009.
- 022 **Hirakawa S, Detmar M, Nagamatsu S, Matsuo K, Tanemura A, Murakami S, Okazaki H, Mori H, Hanakawa Y, Miyawaki S, Sayama K, Shirakata Y, Tohyama M, Tokumaru S, Katayama I, Hashimoto K.**: Nodal Lymphangiogenesis and Metastasis: Role of Tumor-induced Lymphatic Vessel Activation in Extramammary Paget's Disease. *Am J Pathol*, 175: 2235-2248, 2009.
- 023 **Oze I, Matsuo K, Suzuki T, Kawase T, Watanabe M, Hiraki A, Ito H, Hosono S, Ozawa T, Hatooka S, Yatabe Y, Hasegawa Y, Shinoda M, Kiura K, Tajima K, Tanimoto M, Tanaka H.**: Impact of multiple alcohol dehydrogenase (ADH) gene polymorphisms on risk of upper aerodigestive tract cancers in a Japanese Population. *Cancer Epidemiol Biomarker Prev*, 18: 3097-3102, 2009.
- 024 **Matsuo K, Suzuki T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Shitara K, Komori K, Kanemitsu Y, Hirai T, Yatabe Y, Tanaka H, Tajima K.**: Association between an 8q24 locus and the risk of colorectal cancer in Japanese. *BMC Cancer*, 9: 379, 2009.
- 025 **Segawa Y, Takata S, Fujii M, Oze I, Fujiwara Y, Kato Y, Ogino A, Komori E, Sawada S, Yamashita M, Nishimura R, Teramoto N, Takashima S.**: Immunohistochemical detection of neuroendocrine differentiation in non-small-cell lung cancer and its clinical implications. *J Cancer Res Clin Oncol*, 135: 1055-1059, 2009.
- 026 **Oze I, Hotta K, Kiura K, Ochi N, Takigawa N, Fujiwara Y, Tabata M, Tanimoto M.**: Twenty-seven years of phase III trials for patients with extensive disease small-cell lung cancer: disappointing results. *PLoS One*, 4: e7835, 2009.
- 027 **Hattori N, Hayashi T, Nakachi K, Ichikawa H, Goto C, Tokudome Y, Kuriki K, Hoshino H, Shibata K, Yamada N, Tokudome M, Suzuki S, Nagaya T, Kobayashi M, Tokudome S.**: Changes of ROS during a two-day ultra-marathon race. *Int J Sports Med*, 30: 426-429, 2009.
- 028 **Okasaka T, Matsuo K, Suzuki T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Yatabe Y, Hida T, Mitsudomi T, Tanaka H, Yokoi K, Tajima K.**: hOGG1 Ser326Cys polymorphism and risk of lung cancer by histological type. *J Hum Genet*, 54: 739-745, 2009.
- 029 **Imai Y, Tamura S, Tanaka H, Hiramatsu N, Kiso S, Doi Y, Inada M, Nagase T, Kitada T, Imanaka K, Fukuda K, Takehara T, Kasahara A, Hayashi N.**: Reduced risk of hepatocellular carcinoma after interferon therapy in aged patients with chronic hepatitis C is limited to sustained virological responders. *J Viral Hepat*, 17: 185-191, 2009.
- 030 **Ishiguro F, Matsuo K, Fukui T, Mori S, Hatooka S, Mitsudomi T.**: Effect of selective lymph node dissection on patient outcome based on patterns of lobe specific lymph node metastases in patients with resectable non-small cell lung cancer: a large-scale retrospective cohort study applying a propensity score. *J Thorac Cardiovasc Surg*, 139: 1001-1006, 2009.
- 031 **Takayama R, Nakagawa H, Sawaki A, Mizuno N, Kawai H, Tajika M, Yatabe Y, Matsuo K, Uehara R, Ono KI, Nakamura Y, Yamao K.**: Serum tumor antigen reg4 as a diagnostic biomarker in pancreatic ductal adenocarcinoma. *J Gastroenterol*, 45: 52-59, 2009.
- 032 **Hishida A, Matsuo K, Goto Y, Mitsuda Y, Naito M, Wakai K, Tajima K, Hamajima N.**: Significant association of RUNX3 T/A polymorphism at intron 3 (rs760805) with the risk of gastric atrophy in Helicobacter pylori seropositive Japanese. *J Gastroenterol*, 44: 1165-1171, 2009.
- 033 **Kanda J, Matsuo K, Suzuki T, Hosono S, Ito H, Ichinohe T, Seto M, Morishima Y, Tajima K, Tanaka H.**: Association between obesity and the risk of malignant lymphoma in Japanese: A case-control study. *Int J Cancer*, 126: 2416-2425, 2009.
- 034 **Okasaka T, Matsuo K, Suzuki T, Ito H, Hosono S, Kawase T, Watanabe M, Yatabe Y, Hida T, Mitsudomi T, Tanaka H,**

- Tajima K.:** hOGG1 Ser326Cys polymorphism and risk of lung cancer by histological type. *J Hum Genet*, 54: 739-745, 2009.
- 035 **Shitara K, Matsuo K, Hatoooka S, Ura T, Takahari D, Yokota T, Abe T, Kawai H, Tajika M, Kodaira T, Shinoda M, Tajima K, Muro K, Tanaka H.:** Heavy smoking history interacts with chemoradiotherapy for esophageal cancer prognosis: a retrospective study. *Cancer Sci*, 101: 1001-1006, 2009.
- 036 **Hosono S, Matsuo K, Kajiyama H, Hirose K, Suzuki T, Kawase T, Kidokoro K, Nakanishi T, Hamajima N, Kikkawa F, Tajima K, Tanaka H.:** Association between dietary calcium and vitamin D intake and cervical carcinogenesis among Japanese women. *Eur J Clin Nutr*, 64: 400-409, 2009.
- 037 **Tanaka H, Tanaka M, Chen W, Park S, Jung KW, Chiang CJ, Lai MS, M-Lumague MR, Sinuraya ES, Nishino Y, Shibata A, Fujita M, Soda M, Naito M, Tsukama H, Moore MA, Ajiki W.:** Proposal for a cooperative study on population-based cancer survival in selected registries in East Asia. *Asian pacific J Cancer Prev*, 10: 1191-1198, 2009.
- 038 **Hosono S, Kawase T, Matsuo K, Watanabe M, Kajiyama H, Hirose K, Suzuki T, Kidokoro K, Ito H, Nakanishi T, Yatabe Y, Hamajima N, Kikkawa F, Tajima K, Tanaka H.:** HLA-A alleles and cervical squamous cell carcinoma risk in Japanese women. *J Epidemiol*, 20(4):295-301, 2010.
- 039 **Girard N, Lou E, Zzzoli CG, Reddy R, Robson M, Harlan M, Orlov I, Yatabe Y, Nafa K, Landanyi M, Miale A, Kris MG, Riely G, Miller V, Kleing R, Matsuo K, Pao W.:** Analysis of genetic variants in never smokers with lung cancer facilitated by an Internet-based blood collection protocol: a preliminary report. *Clin Cancer Res*, 16: 755-763, 2010.
- 040 **Hanioka T, Ojima M, Tanaka H, Naito M, Hamajima N, Matsuse R.:** Intensive Smoking-cessation Intervention in the Dental Setting. *Journal of Dental Research*, 89(1):66-70, 2010.
- 041 **Tanaka M, Tanaka H, Tsukuma H, Ioka A, Oshima A, Nakahara T.:** Risk factors for intrahepatic cholangiocarcinoma: a possible role of hepatitis B virus. *J Viral Hepat*, in press, 2010.
- 042 **Tamura U, Tanaka T, Okamura T, Kadowaki T, Yamato H, Tanaka H, Nakamura M, Okayama A, Ueshima H, Yamagata Z, for the HIPOP-OHP research group.:** Changes in weight, cardiovascular risk factors and estimated risk for coronary heart disease following smoking cessation in Japanese male workers: HIPOP-OHP Study. *Journal of Atherosclerosis and Thrombosis*, 17(1):12-20, 2010.
- 043 **Truong T, Sauter W, McKay JD, Hosgood HD, Gallagher C, Amos CI, Spitz M, Muscat J, Lazarus P, Illig T, Wichmann E, Bickeboller H, Risch A, Dienemann H, Zhang ZF, Naeim BP, Yang P, Zienoldiny S, Haugen A, Le Marchand L, Hong YC, Kim JH, Duell EJ, Andrew AS, Kiyohara C, Shen H, Matsuo K, Suzuki T, Seow A, Ng DP, Lan Q, Zaridze D, Szeszenia-dabrowska N, Lissowska J, Rudnai P, Fabianova E, Constantinescu V, Bencko V, Foretova L, Janout V, Caporaso NE, Albanes D, Thun M, Landi MT, Trubicka J, Lener M, Lubinski J, EPIC-lung, Wang Y, Chabrier A, Boffetta P, Brenann P, Hung RJ.:** International Lung Cancer Consortium: Coordinated genotyping of 10 potential lung cancer susceptibility variants. *Carcinogenesis*, 31(4):625-633, 2010.
- 044 **Hishida A, Terazawa T, Mamiya T, Ito H, Matsuo K, Tajima K, Hamajima N.:** Efficacy of genotype notification to Japanese smokers on smoking cessation - an intervention study at workplace. *Cancer Epidemiol*, 34(1):96-100, 2010.
- 045 **Kanda J, Matsuo K, Inoue M, Iwasak M, Sawada N, Shimazu T, Yamaji T, Sasazuki S, Tsugane S.:** Association of alcohol intake with the risk of malignant lymphoma and plasma-cell myeloma in Japanese: A population-based cohort study (JPHC study). *Cancer Epidemiol Biomarker Prev*, 19(2):429-34, 2010.
- 046 **Muramatsu H, Kojima S, Yoshimi A, Atsuta Y, Kato K, Nagatoshi Y, Inoue M, Koike K, Kawase T, Ito M, Kurosawa H, Tanizawa A, Tono C, Hamamoto K, Hotta N, Watanabe A, Morishima Y, Kawa K, Shimada H.:** Outcome of 125 children with CML who received transplants from unrelated donors: the Japan Marrow Donor Program (JMDP). *Biol Blood Marrow Transplant*, 16(2):231-238, 2010.
- 047 **Kato H, Yamamoto K, Matsuo K, Oki Y, Taji H, Kuwatsuka Y, Seto M, Kagami Y, Morishima Y.:** Clinical impact and predisposing factors of delayed-onset neutropenia after autologous haematopoietic stem cell transplantation for B-cell non-Hodgkin lymphoma: association with an incremental risk of infectious events. *Ann Oncol*, in press, 2010
- 048 **Gao CM, Gong JP, Wu JZ, Cao HX, Ding JH, Zhou J, Liu YT, Li SP, Cao J, Matsuo K, Takezaki T, Tajima K.:** Relationship between growth hormone 1 genetic polymorphism and susceptibility to colorectal cancer. *J Hum Genet*, 55:163-166, 2010.
- 049 **Hosono S, Kawase T, Matsuo K, Watanabe M, Kajiyama H, Hirose K, Suzuki T, Kidokoro K, Ito H, Nakanishi T, Yatabe Y, Hamajima N, Kikkawa F, Tajima K, Tanaka H.:** HLA-A alleles and cervical squamous cell carcinoma risk in Japanese women. *J Epidemiol*, 20(4):295-301, 2010.
- 050 **Hosono S, Matsuo K, Kajiyama H, Hirose K, Suzuki T, Kawase T, Kidokoro K, Nakanishi T, Hamajima N, Kikkawa F, Tajima K, Tanaka H. Hosono S, Matsuo K, Kajiyama H, Hirose K, Suzuki T, Kawase T, Kidokoro K, Nakanishi T, Hamajima N, Kikkawa F, Tajima K, Tanaka H.:** Association between dietary calcium and vitamin D intake and cervical carcinogenesis among Japanese women. *Eur J Clin Nutr*, 64(4):400-409, 2010.
- 051 **田中英夫.:** 我が国における肝細胞癌の疫学動向. *日本臨牀*, 67:263-267. 2009.
- 052 **川瀬孝和.:** 急性GVHDの発症・重症度に関与する遺伝子的因子. *医学のあゆみ*, 229(9):761-766. 2009.
- 053 **谷口千枝/編 田中英夫.:** 事例で学ぶ禁煙治療のためのカウンセリングテクニック. *看護の科学者*. 東京. 2009.
- 054 **川瀬孝和.:** HLA適合度と移植後再発. *血液・腫瘍科*, 59(2):222-227. 2009.
- 055 **谷口千枝, 日比野福代, 南美知子, 坂 英雄, 田中英夫.:** がん専門病院における看護師の禁煙支援の現状と意識に関

腫瘍病理学部

- 001 *Iwatsuki M, Fukagawa T, Mimori K, Nakanishi H, Ito S, Ishii H, Yokobori T, Sasako M, Baba H, Mori M.*: Bone marrow and peripheral blood expression of id1 in human gastric carcinoma patients is a bona fide indicator of lymph node and peritoneal metastasis. *Brit J cancer*, 100: 1937-1942, 2009.
- 002 *Kodera Y, Nakanishi H, Ito S, Mochizuki Y, Nakayama G, Koike M, Fujiwara M, Yamamura Y, Nakao A.*: Expression of L1 Cell Adhesion Molecule is a Significant Prognostic Factor in pT3-stage Gastric Cancer. *AntiCancer Res*, 29: 4033-4039, 2009.
- 003 *Toyoda T, Tsukamoto T, Takasu S, Hirano N, Ban H, Shi L, Kumagai T, Tanaka T, Tatematsu M.*: Pitavastatin fails to lower serum lipid levels or inhibit gastric carcinogenesis in *Helicobacter pylori*-infected rodent models. *Cancer Prev Res*, 2: 751-758, 2009.
- 004 *Toyoda T, Tsukamoto T, Takasu S, Shi L, Hirano N, Ban H, Kumagai T, Tatematsu M.*: Anti-inflammatory effects of caffeic acid phenethyl ester (CAPE), a nuclear factor- κ B inhibitor, on *Helicobacter pylori*-induced gastritis in Mongolian gerbils: *Int J Cancer*, 125: 1786-1795, 2009.
- 005 *Toyoda T, Cao X, Takasu S, Mizoshita T, Shi L, Tatematsu M, Tsukamoto T.*: Chemoprevention of gastric cancer: lessons from an animal model. In: *Current Research in Cancer 3*. Research Media, India, pp.89-97, 2009.
- 006 *Zhang X, Tsukamoto T, Mizoshita T, Ban H, Suzuki H, Toyoda T, Tatematsu M.*: Expression of osteopontin and CDX2: Indications of phenotypes and prognosis in advanced gastric cancer. *Oncol Rep*, 21: 609-613, 2009.
- 007 *Kondo S, Toyoda T, Maruyama A, Morita S, Sato H, Komachi Y, Kanai G, Ando T, Goto H, Tatematsu M, Tsukamoto T.*: Endoscopic observation of *N*-methyl-*N*'-nitro-*N*-nitrosoguanidine-induced gastric carcinogenesis in rat using a newly-developed flexible endoscope. *Asian Pac J Cancer Prev*, 10: 883-886, 2009.
- 008 豊田武士, 高須伸二, 塚本徹哉, 立松正衛: *H. pylori*除菌後の胃癌再発予防動物モデル. *Helicobacter Research*, 13: 374-378, 2009.
- 009 豊田武士, 塚本徹哉, 立松正衛: 動物実験の立場からみた *Helicobacter pylori*感染と胃癌. 胃と腸, 44: 1441-1445, 2009.
- 010 高須伸二, 塚本徹哉, 豊田武士, 立松正衛: ヘリコバクター感染と胃発がん. 分子細胞治療, 8: 171-174, 2009.
- 011 高須伸二, 塚本徹哉, 豊田武士, 立松正衛: 食塩と胃発癌(2)食塩と *H. pylori*胃発癌. 臨牀消化器内科, 24: 418-422, 2009.

分子腫瘍学部

[原著論文]

- 001 *An B, Kondo Y, Okamoto Y, Shinjo K, Kanemitsu Y, Komori K, Hirai T, Sawaki A, Tajika M, Nakamura T, Yamao K, Yatabe Y, Fujii M, Murakami H, Osada H, Tani T, Matsuo K, Shen L, Issa JP, Sekido Y.*: A characteristic methylation profile in CpG island methylator phenotype-negative distal colorectal cancers. *Int J Cancer*. 2010 (in press).
- 002 *Ebi H, Sato T, Sugito N, Hosono Y, Yatabe Y, Matsuyama Y, Yamaguchi T, Osada H, Suzuki M, Takahashi T.*: Counterbalance between RB inactivation and miR-17-92 overexpression in reactive oxygen species and DNA damage induction in lung cancers. *Oncogene*, 28: 3371-3379, 2009.
- 003 *Ebi H, Tomida S, Takeuchi T, Arima C, Sato T, Mitsudomi T, Yatabe Y, Osada H, Takahashi T.*: Relationship of deregulated signaling converging onto mTOR with prognosis and classification of lung adenocarcinoma shown by two independent in silico analyses. *Cancer Res*, 69: 4027-4035, 2009.
- 004 *Goto Y, Shinjo K, Kondo Y, Shen L, Toyota M, Suzuki H, Gao W, An B, Fujii M, Murakami H, Osada H, Taniguchi T, Usami N, Kondo M, Hasegawa Y, Shimokata K, Matsuo K, Hida T, Fujimoto N, Kishimoto T, Issa JP, Sekido Y.*: Epigenetic profiles distinguish malignant pleural mesothelioma from lung adenocarcinoma. *Cancer Res*, 69: 9073-9082, 2009.
- 005 *Horio Y, Osada H, Shimizu J, Ogawa S, Hida T, Sekido Y.*: Relationship of mRNA expressions of RanBP2 and topoisomerase II isoforms to cytotoxicity of amrubicin in human lung cancer cell lines. *Cancer Chemother Pharmacol*, 66:237-43, 2010.
- 006 *Ikuta K, Yano S, Thrung VT, Hanibuchi M, Goto H, Li Q, Wang W, Yamada T, Ogino H, Kakibuchi S, Uehara H, Sekido Y, Uenaka T, Nishioka Y, Sone S.*: E7080, a multi-tyrosine kinase inhibitor, suppresses the progression of malignant pleural mesothelioma with different proangiogenic cytokine production profiles. *Clin Cancer Res*, 15: 7229-7237, 2009.
- 007 *Kawaguchi K, Murakami H, Taniguchi T, Fujii M, Kawata S, Fukui T, Kondo Y, Osada H, Usami N, Yokoi K, Ueda Y, Yatabe Y, Ito M, Horio Y, Hida T, Sekido Y.*: Combined inhibition of MET and EGFR suppresses proliferation of malignant mesothelioma cells. *Carcinogenesis*, 30: 1097-1105, 2009.
- 008 *Kondo Y.*: Epigenetic cross-talk between DNA methylation and histone modifications in human cancers. *Yonsei Med J*, 50: 455-463, 2009.
- 009 *Ohno M, Natsume A, Kondo Y, Iwamizu H, Motomura K, Toda H, Ito M, Kato T, Wakabayashi T.*: The modulation of microRNAs by Type I Interferon through the activation of STAT3 in human glioma. *Mol Cancer Res*, 7: 2022-2030, 2009.
- 010 *Oi S, Natsume A, Ito M, Kondo Y, Shimato S, Maeda Y, Saito K, Wakabayashi T.*: Synergistic induction of NY-ESO-1 antigen expression by a novel histone deacetylase inhibitor, valproic

- acid, with 5-aza-2'-deoxycytidine in glioma cells. *J Neuro-oncol*, 92:15-22, 2009.
- 011 **Onozato R, Kosaka T, Kuwano H, Sekido Y, Yatabe Y, Mitsudomi T**: Activation of MET by gene amplification or by splice mutations deleting the juxtamembrane domain in primary resected lung cancers. *J Thorac Oncol*, 4: 5-11, 2009.
- 012 **Motohashi K, Hwang JH, Sekido Y, Takagi M, Shin-Ya K**: JBIR-23 and -24, Novel Anticancer Agents from *Streptomyces* sp. AK-AB27. *Org Lett*, 11: 285-288, 2009.
- 013 **Shen L, Kantarjian H, Guo Y, Lin E, Shan J, Huang X, Berry D, Ahmed S, Zhu W, Pierce S, Kondo Y, Oki Y, Jelinek J, Hussain S, Estey E**, Issa JPJ. DNA methylation predicts survival and response to therapy in patients with myelodysplastic syndromes. *J Clin Oncol*, 28: 605-13, 2010.
- 014 **Suzuki Y, Murakami H, Kawaguchi K, Taniguchi T, Fujii M, Shinjo K, Kondo Y, Osada H, Shimokata K, Horio Y, Hasegawa Y, Hida T, Sekido Y**: Activation of PI3K-AKT pathway in human malignant mesothelioma. *Mol Med Reports*, 2: 181-188, 2009.
- 015 **Tajima K, Ohashi R, Sekido Y, Hida T, Nara T, Hashimoto M, Iwakami S, Minakata K, Yae T, Takahashi F, Saya H, Takahashi K**: Osteopontin-mediated enhanced hyaluronan binding induces multidrug resistance in mesothelioma cells. *Oncogene*, 2010 (in press).
- 016 **Takemura Y, Satoh M, Satoh K, Hamada H, Sekido Y, Kubota S**: High dose of ascorbic acid induces cell death in mesothelioma cells. *Biochem Biophys Res Commun*, 2010 (in press).
- 017 **Takeyama Y, Sato M, Horio M, Hase T, Yoshida K, Yokoyama T, Nakashima H, Hashimoto N, Sekido Y, Gazdar AF, Minna JD, Kondo M, Hasegawa Y**: Knockdown of ZEB1, a master epithelial-to-mesenchymal transition (EMT) gene, suppresses anchorage-independent cell growth of lung cancer cells. *Cancer Lett*. 2010 (in press).
- 018 **Tsukahara T, Nakashima E, Watarai A, Hamada Y, Naruse K, Kamiya H, Nakamura N, Kato N, Hamajima N, Sekido Y, Niwa T, Tomita M, Oiso Y, Nakamura J**: Polymorphism in resistin promoter region at -420 determines the serum resistin levels and may be a risk marker of stroke in Japanese type 2 diabetic patients. *Diabetes Res Clin Pract*, 84: 179-186, 2009.
- 019 **Yamada T, Matsumoto K, Wang W, Li Q, Nishioka Y, Sekido Y, Sone S, Yano S**: Hepatocyte growth factor reduces susceptibility to an irreversible epidermal growth factor receptor inhibitor in EGFR-T790M mutant lung cancer. *Clin Cancer Res*, 16:174-83, 2010.
- 020 **Yuki K, Natsume A, Yokoyama H, Kondo Y, Ohno M, Kato T, Chansakul P, Ito M, Kim S, Wakabayashi T**: Induction of oligodendrogenesis in glioblastoma-initiating cells by IFN-mediated activation of STAT3 signaling. *Cancer Lett*, 284: 71-79, 2009.

[総説および単行本]

- 001 **Sekido Y**: Genomic abnormalities and signal transduction dysregulation in malignant mesothelioma cells. *Cancer Sci*. 2010. 101:1-6.
- 002 **Kondo Y**: Chromatin Remodeling. Schwab M. *Encyclopedia in Cancer*. Springer, 662-665, 2009.
- 003 **Suzuki H, Toyota M, Kondo Y, Shinomura Y**: Chapter 5: Inflammation-related aberrant patterns of DNA methylation: detection and role in epigenetic deregulation of cancer cell transcriptome. Kozlov SV ed. *Methods in Molecular Medicine*. Humana Press, 55-69, 2009.
- 004 **関戸好孝** “肺がんはなぜできるか” インフォームドコンセントのための図説シリーズ 肺がん 改訂3版 14-17 医薬ジャーナル社 2009年
- 005 **関戸好孝** “遺伝カウンセリング” 現代医学 第57巻 p86 平成21年

遺伝子医療研究部

[原著]

- 001 **Nakagawa M., Nakagawa-Oshiro A, Karnan S, Tagawa H, Utsunomiya A, Nakamura S, Takeuchi I, Ohshima K, Seto, M.** Array CGH analysis of PTCL-U reveals a distinct subgroup with genetic alterations similar to lymphoma-type ATLL. *Clin Cancer Res.*, 15: 30-38, 2009.
- 002 **Takeuchi I, Tagawa H, Tsujikawa A, Nakagawa M, Katayama-Suguro M., Guo Y, Seto M.** The potential of copy number gains and losses, detected by array-based comparative genomic hybridization, for computational differential diagnosis of B-cell lymphomas and genetic regions involved in lymphomagenesis. *Haematologica*, 94: 61-69, 2009.
- 003 **Lee S-Y, Kumano K, Nakazaki K, Sanada M, Matsumoto A, Yamamoto G, Nannya Y, Suzuki R, Ota Satoshi, Ota Y, Izutsu K, Sakata-Yanagimoto M, Hangaishi A, Yagita H, Fukayama M, Seto M, Kurokawa M, Ogawa S, Chiba S.** Gain-of-function mutations and copy number increases of Notch2 in diffuse large B-cell lymphoma. *Cancer Science*, 100: 920-926, 2009.
- 004 **Honma K, Tsuzuki S, Nakagawa M, Tagawa H, Nakamura S, Morishima Y, Seto M.** TNFAIP3/A20 functions as a novel tumor suppressor gene in several subtypes of non-Hodgkin lymphomas. *Blood*, 114: 2467-2475, 2009.
- 005 **Nomura Y, Kimura H, Karube K, Yoshida S, Sugita Y, Niino D, Shimizu K, Kimura Y, Aoki R, Kiyasu J, Takeuchi M, Hashikawa K, Hirose S, Ohshima K.** Hepatocellular apoptosis associated with cytotoxic/natural killer-cell infiltration in chronic active EBV infection. *Pathol Int*, 59: 438-442, 2009.
- 006 **Suzumiya J, Ohshima K, Tamura K, Karube K, Uike N, Tobinai K, Gascoyne RD, Vose JM, Armitage JO, Weisenburger DD; International Peripheral T-Cell Lymphoma Project.** The International Prognostic Index predicts outcome in aggressive adult T cell leukemia/lymphoma: analysis of 126 patients from

the International peripheral T-cell lymphoma project. *Ann Oncol*, 20: 715-721, 2009.

- 007 **Koyama M, Hashimoto D, Aoyama K, Matsuoka K, Karube K, Niuro H, Harada M, Tanimoto M, Akashi K, Teshima T.**: Plasmacytoid dendritic cells prime alloreactive T cells to mediate graft-versus-host disease as antigen presenting cells. *Blood*, 113: 2088-2095, 2009.
- 008 **Kato H, Taji H, Ogura M, Kagami Y, Oki Y, Tsujimura A, Fuwa N, Kodaira T, Seto M, Yamamoto K, Morishima Y.**: Favorable consolidative effect of high-dose melphalan and total-body irradiation followed by autologous peripheral blood stem cell transplantation after rituximab-containing induction chemotherapy with in vivo purging in relapsed or refractory follicular lymphoma. *Clin Lymphoma Myeloma*. 9: 443-118, 2009.
- 009 **Miyata T, Yonekura K, Utsunomiya A, Kanekura T, Nakamura S, Seto M.**: Cutaneous type adult T-cell leukemia/lymphoma is a characteristic subtype and includes erythema/papule and nodule/tumor subgroups. *Int J Cancer*, 126: 1521-1528, 2010.
- 010 **Tsukamoto Y, Nakada C, Noguchi T, Tanigawa M, Nguyen L T, Uchida T, Hijiya N, Matsuura K, Fujioka T, Seto M, Moriyama M.**: MicroRNA-375 is downregulated in gastric carcinomas and regulates cell survival by targeting PDK1 and 14-3-3zeta. *Cancer Res.*, 70: 2339-2349, 2010.
- 011 **Uchida M, Tsukamoto Y, Uchida T, Ishikawa Y, Nagai T, Hijiya N, Nguyen L T, Nakada C, Kuroda A, Okimoto T, Kodama M, Murakami K, Noguchi T, Matsuura K, Tanigawa M, Seto M, Ito H, Fujioka T, Takeuchi I, Moriyama M.**: Genomic profiling of gastric carcinoma in situ and adenomas by array-based comparative genomic hybridization. *Journal of Pathology*, in press
- 012 **Kato H, Yamamoto K, Matsuo K, Oki Y, Taji H, Kuwatsuka Y, Seto M, Kagami Y, Morishima Y.**: Clinical impact and predisposing factors of delayed-onset neutropenia after autologous hematopoietic stem-cell transplantation for B-cell non-Hodgkin lymphoma: association with an incremental risk of infectious events. *Ann Oncol.*, in press

[総説および単行本]

- 001 **中川 雅夫, 本間 圭一郎, 瀬戸 加太:** (11;18)転座型MALTリンパ腫の分子病態. *Hematology & Oncology Jan.* (血液・腫瘍科), 58: 49-56, 2009.
- 002 **加留部 謙之輔, 瀬戸 加太:** WHO分類第4版改訂のポイント. *血液・腫瘍科*.58: 531-536,2009.
- 003 **本間 圭一郎, 中川 雅夫, 瀬戸 加太:** びまん性大細胞型B細胞リンパ腫におけるNF- κ BとJAK-STAT経路のクロストーク. *血液・腫瘍科* (科学評論社) 58: 182-188, 2009.
- 004 **瀬戸加太:** API2-MALT1キメラ蛋白質の機能と胃MALTリンパ腫の発症. *Helicobacter Research*(先端医学社),13:46-51,2009.
- 005 **瀬戸加太:** 胃MALTリンパ腫発症の分子機構:ピロリ菌の役割とその意義. *細胞工学(学研メデイカル秀潤社)*, 29:

581-586,2010.

腫瘍免疫学部

[原著]

- 001 **Isobe M, Eikawa S, Uenaka A, Nakamura Y, Kanda T, Kohno S, Kuzushima K, Nakayama E.** Correlation of high and decreased NY-ESO-1 immunity to spontaneous regression and subsequent recurrence in a lung cancer patient. *Cancer Immune*, 9:8, 2009.
- 002 **Yasukawa M, Fujiwara H, Ochi T, Suemori K, Narumi H, Azuma T, Kuzushima K.** Clinical efficacy of WT1 peptide vaccination in patients with acute myelogenous leukemia and myelodysplastic syndrome. *Am J Hematol*, 84: 314-315, 2009.
- 003 **Ochi T, Fujiwara H, Suemori K, Azuma T, Yakushijin Y, Hato T, Kuzushima K, Yasukawa M.** Aurora-A kinase: a novel target of cellular immunotherapy for leukemia. *Blood*, 113: 66-74, 2009.
- 004 **Kamei M, Nannya Y, Torikai H, Kawase T, Taura K, Inamoto Y, Takahashi T, Yazaki M, Morishima S, Tsujimura K, Miyamura K, Ito T, Togari H, Riddell SR, Kodera Y, Morishima Y, Takahashi T, Kuzushima K, Ogawa S, Akatsuka Y.** HapMap scanning of novel human minor histocompatibility antigens. *Blood*, 113: 5041-5048, 2009.
- 005 **Kato M, Sanada M, Kato I, Sato Y, Takita J, Takeuchi K, Niwa A, Chen Y, Nakazaki K, Nomoto J, Asakura Y, Muto S, Tamura A, Iio M, Akatsuka Y, Hayashi Y, Mori H, Igarashi T, Kurokawa M, Chiba S, Mori S, Ishikawa Y, Okamoto K, Tobinai K, Nakagama H, Nakahata T, Yoshino T, Kobayashi Y, Ogawa S.** Frequent inactivation of A20 in B-cell lymphomas. *Nature*, 459: 712-716, 2009.
- 006 **Ogawa S, Matsubara A, Onizuka M, Kashiwase K, Sanada M, Kato M, Nannya Y, Akatsuka Y, Satake M, Takita J, Chiba S, Saji H, Maruya E, Inoko H, Morishima Y, Kodera Y, Takehiko S.** Japan Marrow Donation Program (JM DP): Exploration of the genetic basis of GVHD by genetic association studies. *Biol Blood Marrow Tr*, (1 Suppl):39-41, 2009.
- 007 **Iwata S, Wada K, Tobita S, Gotoh K, Ito Y, Demachi-Okamura A, Shimizu N, Nishiyama Y, Kimura H.** Quantitative analysis of Epstein-Barr virus (EBV)-related gene expression in patients with chronic active EBV infection. *J Gen Virol*, 91: 42-50, 2010.

腫瘍ウイルス学部

- 001 **Isomura H, Stinski MF, Murata T, Nakayama S, Chiba S, Akatsuka Y, Kanda T, Tsurumi T.**: The human cytomegalovirus UL76 gene regulates the level of expression of the UL77 gene. *PLoS One*, in press.
- 002 **Murata T, Hotta N, Toyama S, Nakayama S, Chiba S, Isomura H, Ohshima T, Kanda T, Tsurumi T.**: Transcriptional repression

- by sumoylation of Epstein-Barr virus BZLF1 protein correlates with association of histone deacetylase. *J Biol Chem*, in press.
- 003 **Sato Y, Shirata N, Murata T, Nakasu S, Kudoh A, Iwahori S, Nakayama S, Chiba S, Isomura H, Kanda T, Tsurumi T.:** Transient increases in p53-responsive gene expression at early stages of Epstein-Barr virus productive replication. *Cell Cycle*, 9: 807-814, 2010.
- 004 **Ishida D, Nawa A, Tanino T, Goshima F, Luo CH, Iwaki M, Kajiyama H, Shibata K, Yamamoto E, Ino K, Tsurumi T, Nishiyama Y, Kikkawa F.:** Enhanced cytotoxicity with a novel system combining the paclitaxel-2' -ethylcarbonate prodrug and an HSV amplicon with an attenuated replication competent virus, HF10 as a helper virus. *Cancer Lett.* 288: 17-27, 2010
- 005 **Lashmit P, Wang S, Li H, Isomura H, Stinski MF.:** The CREB Site in the Proximal Enhancer is Critical for Cooperative Interaction with the Other Transcription Factor Binding Sites to Enhance Transcription of the MIE Early Genes in Human Cytomegalovirus Infected Cells. *J Virol*, 83: 8893-8904, 2009.
- 006 **Murata T, Sato Y, Nakayama S, Kudoh A, Iwahori S, Isomura H, Tajima M, Hishiki T, Ohshima T, Hijikata M, Shimotohno K, Tsurumi T.:** TORC2, a coactivator of cAMP-response element-binding protein, promotes Epstein-Barr virus reactivation from latency through interaction with viral BZLF1 protein. *J Biol Chem*, 284: 8033-8041, 2009.
- 007 **Nakayama S, Murata T, Murayama K, Yasui Y, Sato Y, Kudoh A, Iwahori S, Isomura H, Kanda T, Tsurumi T.:** Epstein-Barr virus polymerase processivity factor enhances BALF2 promoter transcription as a coactivator for the BZLF1 immediate-early protein. *J Biol Chem*, 284: 21557-21568, 2009.
- 008 **Iwahori S, Murata T, Kudoh A, Sato Y, Nakayama S, Isomura H, Kanda T, Tsurumi T.:** Phosphorylation of p27Kip1 by Epstein-Barr virus protein kinase induces its degradation through SCFSkp2 ubiquitin ligase actions during viral lytic replication. *J Biol Chem*, 284: 18923-18931, 2009.
- 009 **Murata T, Isomura H, Yamashita Y, Toyama S, Sato Y, Nakayama S, Kudoh A, Iwahori S, Kanda T, Tsurumi T.:** Efficient production of infectious viruses requires enzymatic activity of Epstein-Barr virus protein kinase. *Virology*, 389: 75-81, 2009.
- 010 **Kudoh A, Iwahori S, Sato Y, Nakayama S, Isomura H, Murata T, Tsurumi T.:** Homologous recombinational repair factors are recruited and loaded onto the viral DNA genome in Epstein-Barr virus replication compartments. *J Virol*, 83: 6641-6651, 2009.
- 011 **Sato Y, Shirata N, Kudoh A, Iwahori S, Nakayama S, Murata T, Isomura H, Nishiyama Y, Tsurumi T.:** Expression of Epstein-Barr virus BZLF1 immediate-early protein induces p53 degradation independent of MDM2, leading to repression of p53-mediated transcription. *Virology*, 388: 204-211, 2009.
- 012 **Ali AK, Saito S, Shibata S, Takada K, and Kanda T.:** Distinctive effects of the Epstein-Barr virus family of repeats on viral latent gene promoter activity and B-lymphocyte transformation. *J Virol*, 83: 9163-9174, 2009.
- 013 **Katsumura KR, Maruo S, Wu Y, Kanda T, Takada K.:** Quantitative evaluation of the role of Epstein-Barr virus immediate-early protein BZLF1 in B-cell transformation. *J Gen Virol*, 90: 2331-2341, 2009.
- 014 **Maruo S, Wu Y, Ito T, Kanda T, Kieff ED, Takada K.:** Epstein-Barr virus nuclear protein EBNA3C residues critical for maintaining lymphoblastoid cell growth. *Proc Natl Acad Sci USA*, 106: 4419-4424, 2009.
- 015 **Murayama K, Nakayama S, Kato-Murayama M, Akasaka R, Ohbayashi N, Kamewari-Hayami Y, Terada T, Shirouzu M, Tsurumi T, Yokoyama S.:** Crystal structure of Epstein-Barr virus DNA polymerase processivity factor BMRF1. *J Biol Chem*, 284: 35896-35905, 2009.
- 016 **Sato Y, Kamura T, Shirata N, Murata T, Kudoh A, Iwahori S, Nakayama S, Isomura H, Nishiyama Y, Tsurumi T.:** Degradation of phosphorylated p53 by viral protein-ECS E3 ligase complex. *PLoS Pathog*, 5(7):e1000530, 2009.

分子病態学部

【原著】

- 001 **Ito H, Murakami M, Furuhashi A, Gao S, Yoshida K, Sobue S, Hagiwara K, Takagi A, Kojima T, Suzuki M, Banno Y, Tanaka K, Tamiya-Koizumi K, Kyogashima M, Nozawa Y, Murate T.:** Transcriptional regulation of neutral sphingomyelinase 2 gene expression of a human breast cancer cell line, MCF-7, induced by the anti-cancer drug, daunorubicin. *Biochim Biophys Acta*, 1789: 681-690, 2009.
- 002 **Li G, Hu R, Kamijo Y, Nakajima T, Aoyama T, Ehara T, Shigematsu H, Kannagi R, Kyogashima M, Hara A.:** Kidney dysfunction induced by protein overload nephropathy reduces serum sulfatide levels in mice. *Nephrology (Carlton)*, 14: 658-662, 2009.
- 003 **Murakami M, Ito H, Hagiwara K, Yoshida K, Sobue S, Ichihara M, Takagi A, Kojima T, Tanaka K, Koizumi T, Kyogashima M, Suzuki M, Banno Y, Nozawa Y, Murate T.:** ATRA inhibits ceramide kinase transcription in a human neuroblastoma cell line, SH-SY5Y cells: the role of COUP-TFI. *J Neurochem*, 2009.
- 004 **Yang Z, Wu JH, Kuo HW, Kannagi R, Wu AM.:** Expression of sialyl Lex, sialyl Lea, Lex and Ley glycotopes in secreted human ovarian cyst glycoproteins. *Biochimie*, 91: 423-433, 2009.
- 005 **Zhang X, Nakajima T, Kamijo Y, Li G, Hu R, Kannagi R, Kyogashima M, Aoyama T, Hara A.:** Acute kidney injury induced by protein-overload nephropathy down-regulates gene expression of hepatic cerebroside sulfotransferase in mice, resulting in reduction of liver and serum sulfatides. *Biochem Biophys Res Commun*, 390: 1382-1388, 2009.
- 006 **Sumi T, Ishida W, Mittler RS, Yagita H, Taguchi O, Fukushima A.:** Regulatory T cells participate in 4-1BB-

- mediated suppression of experimental allergic conjunctivitis. *Int Arch Allergy Immunol*, 148: 305-310, 2009
- 007 **Igarashi Y, Kannagi R:** Glycosphingolipids as mediators of phenotypic changes associated with development and cancer progression. *J Biochem*, 147: 3-8, 2010.
- 008 **Yin J, Miyazaki K, Shaner RL, Merrill AH, Jr., Kannagi R:** Altered sphingolipid metabolism induced by tumor hypoxia - new vistas of glycolipid tumor markers. *FEBS Lett*, 584: 1872-1878, 2010.
- 009 **Yusa A, Miyazaki K, Kimura N, Izawa M, Kannagi R:** Epigenetic silencing of the sulfate transporter gene *DTDST* induces sialyl Lewis^x expression and accelerates proliferation of colon cancer cells. *Cancer Res*, 70: 4064-4073, 2010.
- 010 **Ebisuno T, Katagiri K, Kataki T, Ueda Y, Nemoto T, Inada H, Nabekura J, Okada T, Kannagi R, Tanaka T, Miyasaka M, Hogg N, Kinashi T:** Rap1 controls lymphocyte adhesion cascades and interstitial migration within lymph nodes in a RAPL-dependent and independent manner. *Blood*, 115: 804-814, 2010.
- [総説および単行本]**
- 011 **Kannagi R, Ohmori K, Kimura N:** Anti-oligosaccharide antibodies as tools for studying sulfated sialoglycoconjugate ligands for siglecs and selectins. *Glycoconj J*, 26: 923-928, 2009.
- 012 **Kannagi R, Sakuma K, Miyazaki K, Lim K-T, Yusa A, Yin J, Izawa M:** Altered expression of glycan genes in cancers induced by epigenetic silencing and tumor hypoxia: Clues in the ongoing search for new tumor markers. *Cancer Sci*, 101: 586-593, 2010.
- 013 **Onaya J, Kyogashima M, Sakai T, Arai M, Miyauchi S, Sakamoto T, Takada A:** Dermatan sulfate as a bifunctional antithrombotic. *Cardiovasc Drug Rev*, 17: 225-236, 2010.
- 014 **神奈木玲児:** がんの進展における糖鎖のはたらき. 古川綱一編 "第3の生命鎖、糖鎖の謎が今、解る" クバプロ社, 東京, pp. 63-71, 2009.
- 015 **神奈木玲児:** シアリルLewis A/X系統の糖鎖抗原 (CA19-9, SPan-1, CA50, KMO1, DU-PAN-2, SLX, NCC-ST-439, CSLEX) . 診断と治療, 97: 1935-1941, 2009.
- 016 **神奈木玲児:** S L X (C S L E X) . 石井 勝 編 "改訂版 腫瘍マーカーハンドブック" . 医薬ジャーナル社, 東京, pp. 121-123, 2009.
- 017 **神奈木玲児:** S T N (シアリル T n 抗原) . 石井 勝 編 "改訂版 腫瘍マーカーハンドブック" . 医薬ジャーナル社, 東京, pp. 124-126, 2009.
- 018 **神奈木玲児:** がん細胞に特有な糖鎖とそのはたらき. 谷口直之編 "糖鎖を知る - その素顔と病気への挑戦" 科学技術振興機構, 東京, pp. 88-97, 2010.
- Fukumoto Y, Yamaguchi N:** Requirement of the SH4 and tyrosine-kinase domains but not the kinase activity of Lyn for its biosynthetic targeting to caveolin-positive Golgi membranes. *Biochim Biophys Acta*, 1790: 1345-1352, 2009.
- 002 **Sato I, Obata Y, Kasahara K, Nakayama Y, Fukumoto Y, Yamasaki T, Yokoyama K.K, Yamaguchi N:** Differential trafficking of c-Src, Lyn, c-Yes, and Fyn is specified by the state of palmitoylation in the SH4 domain. *J Cell Sci*, 122: 965-975, 2009.
- 003 **Takahashi A, Obata Y, Fukumoto Y, Nakayama Y, Kasahara K, Kuga T, Higashiyama Y, Saito T, Yokoyama K.K, Yamaguchi N:** Nuclear localization of Src-family tyrosine kinase is required for growth factor-induced euchromatinization. *Exp Cell Res*, 315: 1117-1141, 2009.
- 004 **Enomoto M, Goto H, Tomono Y, Kasahara K, Tsujimura K, Kiyono T, Inagaki M:** Novel positive feedback loop between Cdk1 and Chk1 in the nucleus during the G2/M transition. *J Biol Chem*, 284: 34223-34230, 2009.
- 005 **Ichijima, Y, Yoshioka, K., Yoshioka, Y., Shinohe, K., Fujimori, H., Unno, J., Takagi, M., Goto, H., Inagaki, M., Mizutani, S. and Teraoka, H.** DNA lesions induced by replication stress trigger mitotic aberration and tetraploidy development. *PLoS ONE* 5: e8821, 2010
- 006 **Bargagna-Mohan, P., Paranthan, R.R., Hamza, A., Dimova, N., Trucchi, B., Srinivasan, C., Elliott, G.I., Zhan, C.G., Lau, D.L., Zhu, H., Kasahara, K., Inagaki, M., Cambi, F. and Mohan, R.** Withaferin a targets intermediate filaments glial fibrillary acidic protein and vimentin in a model of retinal gliosis. *J. Biol. Chem.* 285:7657-7669, 2010
- 007 **Kawase, T., Matsuo, K., Suzuki, T., Hirose, K., Hosono, S., Watanabe, M., Inagaki, M., Iwata, H., Tanaka, H. and Tajima, K.** Association between vitamin D and calcium intake and breast cancer risk according to menopausal status and receptor status in Japan. *Cancer Sci*. 101: 1234-1240, 2010
- 008 **Kasahara, K., Goto, H., Enomoto, M., Tomono, Y., Kiyono, T. and Inagaki, M.** 14-3-3 γ mediates Cdc25A proteolysis to block premature mitotic entry after DNA damage. *EMBO J.* (2010) in press.
- 009 **大室(松山)有紀、稲垣昌樹:** リン酸化抗体と細胞周期細胞工学Vol.28 No.1 50-51 (2009) 秀潤社
- 010 **笠原広介、後藤英仁:** 「リン酸化によるM期制御」染色体サイクル 蛋白質核酸酵素増刊号 (54巻、4号) 441-446 (2009) 共立出版

発がん制御研究部

- 001 **Ikeda K, Nakayama Y, Ishii M, Obata Y, Kasahara K,**

第1部 事業会計関係

第1表 比較損益計算書

科 目	21年度 (A)	20年度 (B)	増 減 (△) (A) - (B)	収益費用構成対比		前年度比 (A / B × 100)	部 別		内 訳	
				21年度 %	20年度 %		運 用 部	門 別		
								病 院		研 究 所
	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円
病院事業収益	14,899,594,521	14,223,220,382	676,374,139	100.0	100.0	104.8	293,673,928	13,529,730,966	100.0	1,076,189,628
医療収益	13,422,350,973	12,665,131,090	757,219,883	90.1	89.0	106.0	242,286,000	12,205,937,973	90.2	974,127,000
入院収益	7,138,036,494	6,666,217,139	471,819,355	47.9	46.9	107.1	0	7,138,036,494	52.8	0
外来収益	4,205,726,461	3,840,227,744	365,498,717	28.2	27.0	109.5	0	4,205,726,461	31.1	0
一般会計負担金	1,230,942,000	1,306,908,000	△ 75,966,000	8.3	9.2	94.2	242,286,000	14,529,000	0.1	974,127,000
その他医療収益	847,646,018	851,778,207	△ 4,132,189	5.7	5.9	99.5	0	847,646,018	6.3	0
医療外収益	1,477,243,548	1,558,089,292	△ 80,845,744	9.9	11.0	94.8	51,387,928	1,323,792,993	9.8	102,062,628
受取利息配当金	571,376	2,900,590	△ 2,329,214	0.0	0.0	19.7	571,376	0	0.0	0
一般会計負担金	1,291,682,000	1,372,826,000	△ 81,144,000	8.7	9.7	94.1	34,274,000	1,257,408,000	9.3	0
一般会計補助金	0	0	0	0.0	0.0	—	0	0	0.0	0
国庫補助金	17,970,000	16,924,000	1,046,000	0.1	0.1	106.2	0	17,970,000	0.1	0
その他医療外収益	167,020,172	165,438,702	1,581,470	1.1	1.2	101.0	16,542,552	48,414,993	0.4	102,062,628
特別収益	0	0	0	0.0	0.0	—	0	0	0	0
固定資産売却益	0	0	0	0.0	0.0	—	0	0	0	0
病院事業費用	14,348,314,461	14,010,290,704	338,023,757	96.5	98.5	102.4	792,951,756	12,416,033,169	91.8	1,139,329,536
医療費用	13,767,121,694	13,363,272,357	403,849,337	92.7	93.9	103.0	775,633,524	11,898,391,600	87.9	1,093,096,570
給与費用	6,570,233,576	6,359,683,355	210,550,221	44.2	44.7	103.3	735,222,462	5,238,670,934	38.7	596,340,180
給料	2,481,616,804	2,472,775,173	8,841,631	16.7	17.4	100.4	262,805,785	1,990,554,457	14.7	228,256,562
手当	2,317,162,527	2,234,886,327	82,276,200	15.6	15.7	103.7	207,913,331	1,921,629,311	14.2	187,619,885
賃金	120,720,846	103,473,537	17,247,309	0.8	0.7	116.7	16,487,759	104,233,087	0.8	0
報酬	443,101,210	352,305,292	90,795,918	3.0	2.5	125.8	26,459,210	353,656,890	2.6	62,985,110
法定福利費	884,463,752	885,091,027	△ 627,275	5.9	6.2	99.9	88,281,380	715,134,234	5.3	81,048,138
退職給与金	323,168,437	311,151,999	12,016,438	2.2	2.2	103.9	133,274,997	153,462,955	1.1	36,430,485

科 目	21年度 (A)	20年度 (B)	増 減 (△) (A) - (B)	収益費用構成対比		前年度比 (A/B× 100)	部 門 別 内 訳			
				21年度 %	20年度 %		運 用 部	病 院		
								金 額	構 成 対 比	
研究 所										
材 料 費	4,537,446,616	4,280,889,035	256,557,581	30.4	30.1	106.0	円	円	円	円
薬 品 費	3,563,160,966	3,311,788,832	251,372,134	23.9	23.3	107.6	0	4,537,446,616	33.5	0
診療材料費	883,278,539	867,641,249	15,637,290	5.9	6.1	101.8	0	3,563,160,966	26.3	0
給食材料費	79,790,111	81,704,884	△ 1,914,773	0.5	0.6	97.7	0	883,278,539	6.5	0
医療消耗品費	11,217,000	19,754,070	△ 8,537,070	0.1	0.1	56.8	0	79,790,111	0.6	0
経 費	1,525,902,564	1,560,769,406	△ 34,866,842	10.5	10.9	97.8	32,970,599	1,317,891,708	9.7	175,040,257
旅費交通費	5,397,187	6,640,174	△ 1,242,987	0.0	0.0	81.3	1,415,166	3,826,436	0.0	155,585
修繕費	92,674,440	97,547,169	△ 4,872,729	0.6	0.7	95.0	12,828,785	77,872,855	0.6	1,972,800
需用費	401,105,065	435,158,309	△ 34,053,244	2.7	3.1	92.2	2,878,125	310,823,085	2.3	87,403,855
(消耗品費)	61,036,964	57,321,009	57,321,009				2,499,889	49,910,248		8,626,827
(光熱水費)	305,858,014	334,123,130	334,123,130				0	233,928,724		71,929,290
(燃料費)	21,403,800	30,675,940	30,675,940				0	16,370,222		5,033,578
(食糧費)	118,122	223,199	223,199				0	118,122		0
(印刷製本費)	12,688,165	12,815,031	12,815,031				378,236	10,495,769		1,814,160
役 務 費	33,770,469	33,479,032	291,437	0.2	0.2	100.9	10,271,180	19,320,955	0.1	4,178,334
(保険料)	14,975,050	15,107,631	15,107,631				4,318	14,695,065		275,667
(通信運搬費)	18,795,419	18,371,401	18,371,401				10,266,862	4,625,890		3,902,667
そ の 他 経 費	992,955,403	987,944,722	5,010,681	7.0	6.9	100.5	5,577,343	906,048,377	6.7	81,329,683
(厚生福利費)	3,249,013	5,613,678	5,613,678				176,767	2,930,831		141,415
(報償費)	2,590,238	1,415,756	1,415,756				80,739	2,252,759		256,740
(職員被服費)	5,553,990	9,463,020	9,463,020				246,600	5,227,250		80,140
(消耗品費)	10,124,700	11,307,747	11,307,747				170,136	8,487,523		1,467,041
(賃借料)	63,689,722	50,804,512	50,804,512				1,142,080	62,446,112		101,530
(委託費)	887,328,718	888,215,688	888,215,688				2,667,082	810,083,852		74,577,784
(交際費)	8,682	8,578	8,578				8,682	0		0

科 目	21年度 (A)	20年度 (B)	増 減 (△) (A) - (B)	収益費用構成対比		前年度比 (A / B × 100)	部 門 別 内 訳			
				21年度 %	20年度 %		運 用 部	病 院		研 究 所
								金 額	構 成 対 比	
(諸会費)	1,775,675	1,761,676	13,999				255,000	1,520,675		0
(雑費)	18,634,665	19,354,067	(719,402)				830,257	13,099,375		4,705,033
減価償却費	802,613,043	800,000,513	2,612,530	5.4	5.6	100.3	7,031,073	561,797,485	4.2	233,784,485
資産減耗費	6,616,711	10,197,753	(3,581,042)	0.0	0.1	64.9	0	4,764,708	0.0	1,852,003
研究修費	324,309,184	351,732,295	(27,423,111)	2.2	2.5	92.2	409,390	237,820,149	1.8	86,079,645
医業外費用	581,192,767	647,018,347	(65,825,580)	3.8	4.6	89.8	17,318,232	517,641,569	3.8	46,232,966
支払利息及び 企業債取扱諸費	235,865,925	313,128,753	(77,262,828)	1.6	2.2	75.3	0	235,865,925	1.7	0
繰延勘定償却	33,640,318	41,774,096	(8,133,778)	0.2	0.3	80.5	424,973	18,546,275	0.1	14,669,070
雑損失	311,686,524	292,115,498	19,571,026	2.0	2.1	106.7	16,893,259	263,229,369	1.9	31,563,896
経常利益 (△損失)	551,280,060	212,929,678	338,350,382	3.7	1.5	258.9	△499,277,828	1,113,697,796	8.2	△63,139,908
特別損失	0	0	0	0.0	0.0	-	0	0	0.0	0
固定資産除却損	0	0	0	0.0	0.0	-	0	0	0.0	0
当年度純利益 (△純損失)	551,280,060	212,929,678	338,350,382	3.7	1.5	258.9	△499,277,828	1,113,697,796	8.2	△63,139,908

第2表 比較貸借対照表

科 目	21 年 度 末		20 年 度 末		対 前 年 度 比 較		門 別 内 記	
	金 額 (A)	構 成 比	金 額 (B)	構 成 比	(A) - (B)	(A/B×100)	運 用 部	病 院 研 究 所
	円	%	円	%	円	%	円	円
(資 産 の 部)								
土 地	328,607,824	1.7	328,607,824	1.6	0	100.0	315,888,471	9,552,511
建 物	28,760,405,027	63.6	28,760,405,027	63.3	0	95.8	56,784,347	21,611,521,405
建 物 減 価 償 却 累 計 額	16,485,681,164		16,485,681,164		531,894,302		13,117,312,121	
構 築 物	459,265,804	0.9	459,265,804	0.9	0	94.6	96,192,320	343,879,219
構 築 物 減 価 償 却 累 計 額	286,888,269		286,888,269		9,896,160		214,847,967	
器 械	10,723,924,694	16.6	10,507,304,522	15.4	216,620,172	102.6	133,006,547	8,877,256,452
器 械 備 品	7,529,950,230		7,394,845,105		135,105,125		6,393,635,011	
器 械 備 品 減 価 償 却 累 計 額	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0
車 両	0		0		0		0	
車 両 減 価 償 却 累 計 額	0	0.0	0	0.0	0	100.0	0	0
放 射 性 同 位 素	28,766,000		28,766,000		0		28,766,000	
放 射 性 同 位 素 減 価 償 却 累 計 額	27,327,700	0.0	27,327,700	0.0	0	-	0	27,327,700
建 設 仮 勤 定 資 産	6,000,000		6,000,000		0		6,000,000	
そ の 他 有 形 固 定 資 産	14,280,000	0.1	14,280,000	0.1	0	-	14,280,000	0
そ の 他 有 形 固 定 資 産 減 価 償 却 累 計 額	0		0		0		0	
有 形 固 定 資 産 合 計	15,991,401,986	82.9	16,445,677,401	81.3	△ 454,275,415	97.2	414,948,115	11,123,852,788
電 話 加 入 権	172,700	0.0	172,700	0.0	0	100.0	172,700	0
そ の 他 無 形 固 定 資 産	107,025,319	0.6	107,025,319	0.5	0	100.0	0	95,946,319
無 形 固 定 資 産 合 計	107,198,019	0.6	107,198,019	0.5	0	100.0	172,700	95,946,319
固 定 資 産 合 計	16,098,600,005	83.5	16,552,875,420	81.8	△ 454,275,415	97.3	415,120,815	11,219,799,107
現 金 ・ 預 金	1,155,664,943	6.0	1,661,253,602	8.2	△ 505,588,659	69.6	1,155,664,943	0
未 収 金	1,760,549,382	9.1	1,727,849,879	8.5	32,699,503	101.9	417,992	1,760,131,390
貯 蔵 品	58,885,012	0.3	71,278,935	0.4	△ 12,393,923	82.6	0	58,885,012
そ の 他 流 動 資 産	0	0.0	2,000,000	0.0	△ 2,000,000	0.0	0	0
流 動 資 産 合 計	2,975,099,337	15.4	3,462,382,416	17.1	△ 487,283,079	85.9	1,156,082,935	1,819,016,402
控 除 対 象 外 消 費 税	216,813,273	1.1	231,793,849	1.1	△ 14,980,576	93.5	4,085,128	100,628,152
開 発 費	0	0.0	0	0.0	0	-	0	0
繰 延 勘 定 合 計	216,813,273	1.1	231,793,849	1.1	△ 14,980,576	93.5	4,085,128	100,628,152
資 産 合 計	19,290,512,615	100.0	20,247,051,685	100.0	△ 956,539,070	95.3	1,575,288,878	13,139,443,661
								4,452,601,083
								4,463,680,083
								11,079,000
								11,079,000
								11,079,000
								112,099,993
								112,099,993
								4,575,780,076

科 目	21 年 度 末		20 年 度 末		対 前 年 度 比 較		門 別 内 訳		
	金 額 (A)	構 成 比	金 額 (B)	構 成 比	(A) - (B)	(A/B×100)	運 用 部	病 院	研 究 所
	円	%	円	%	円	%	円	円	円
(負 債 の 部)									
固 定 負 債 合 計	0	0.0	0	0.0	0	-	0	0	0
未 払 金	1,125,859,007	5.8	1,438,937,435	7.1	△ 313,078,428	78.2	122,914,127	917,050,492	85,894,388
そ の 他 流 動 負 債	100,378,086	0.5	102,337,895	0.5	△ 1,959,809	98.1	347,056	99,545,886	485,144
流 動 負 債 合 計	1,226,237,093	6.3	1,541,275,330	7.6	△ 315,038,237	79.6	123,261,183	1,016,596,378	86,379,532
負 債 合 計	1,226,237,093	6.3	1,541,275,330	7.6	△ 315,038,237	79.6	123,261,183	1,016,596,378	86,379,532
(資 本 の 部)									
自 己 資 本 金	24,284,359,565	125.9	24,284,359,565	119.9	0	100.0	1,820,334,748	20,568,470,963	1,895,553,854
借 入 資 本 金	6,066,369,541	31.4	6,288,225,393	31.1	△ 221,855,852	96.5	0	6,066,369,541	0
企 業 債	6,066,369,541	31.4	6,288,225,393	31.1	△ 221,855,852	96.5	0	6,066,369,541	0
資 本 金 合 計	30,350,729,106	157.3	30,572,584,958	151.0	△ 221,855,852	99.3	1,820,334,748	26,634,840,504	1,895,553,854
資 本 剰 余 金	7,841,384,809	40.7	7,662,309,850	37.8	179,074,959	102.3	16,155,720	5,298,290,093	2,526,938,996
受 贈 財 産 評 価 額	804,122,008	4.2	784,800,902	3.9	19,321,106	102.5	16,155,720	314,583,292	473,382,996
国 庫 補 助 金	958,881,500	5.0	958,881,500	4.7	0	100.0	0	909,956,500	48,925,000
他 会 社 計 負 担 金	5,915,764,250	30.7	5,760,267,677	28.4	155,496,573	102.7	0	3,911,133,250	2,004,631,000
そ の 他 資 本 剰 余 金	162,617,051	0.8	158,359,771	0.8	4,257,280	102.7	0	162,617,051	0
剰 余 金 合 計	7,841,384,809	40.7	7,662,309,850	37.8	179,074,959	102.3	16,155,720	5,298,290,093	2,526,938,996
当 年 度 未 処 理 欠 損 金	△ 9,777,838,393	△ 50.6	△ 10,329,118,453	△ 51.0	551,280,060	94.7	△ 10,149,214,434	733,683,935	△ 362,307,894
前 年 度 繰 越 欠 損 金	△ 10,329,118,453	△ 53.5	△ 10,542,048,131	△ 52.1	212,929,678	98.0	△ 9,649,936,606	△ 380,013,861	△ 299,167,986
当 年 度 純 利 益 (△ 純 損 失)	551,280,060	2.9	212,929,678	1.1	338,350,382	258.9	△ 499,277,828	1,113,697,796	△ 63,139,908
欠 損 金 合 計	△ 9,777,838,393	△ 50.6	△ 10,329,118,453	△ 51.0	551,280,060	94.7	△ 10,149,214,434	733,683,935	△ 362,307,894
病 院 間 調 整 勘 定	△ 10,350,000,000	△ 53.7	△ 9,200,000,000	△ 45.4	△ 1,150,000,000	112.5	0	△ 10,350,000,000	0
資 本 合 計	18,064,275,522	93.7	18,705,776,355	92.4	△ 641,500,833	96.6	△ 8,312,723,966	22,316,814,532	4,060,184,956
負 債 資 本 合 計	19,290,512,615	100.0	20,247,051,685	100.0	△ 956,539,070	95.3	△ 8,189,462,783	23,333,410,910	4,146,564,488

第3表 予算の執行状況（病院事業庁分を除く）

1 収入状況調

(単位：円)

科 目	予算配分額	決 算 額	差 引	科 目	予算配分額	決 算 額	差 引
病院事業収益	12,028,964,000	12,401,921,192	△ 372,957,192	医業外収益	200,078,000	163,914,698	36,163,302
入院収益	11,828,886,000	12,238,006,494	△ 409,120,494	受取利息配当金	0	0	0
一人1日平均単価	7,235,030,000	7,140,081,797	94,948,203	預金利息	0	0	0
延患者数(人)	45,050	46,100	△ 1,050	その他医業外収益	200,078,000	163,914,698	36,163,302
1日平均患者数(人)	160,600	154,884	5,716	不用品売却収益	50,000	5,000	45,000
利用率(%)	440.0	424.3	15.7	その他医業外収益	200,028,000	163,909,698	36,118,302
外来収益	88.0	84.9	3.1	資本的収入	15,000,000	4,470,144	10,529,856
一人1日平均単価	3,685,950,000	4,211,067,015	△ 525,117,015	雑収入	15,000,000	4,470,144	10,529,856
延患者数(人)	24,100	27,344	△ 3,244	雑収入	15,000,000	4,470,144	10,529,856
1日平均患者数(人)	152,944	154,001	△ 1,057	合計	12,043,964,000	12,406,391,386	△ 362,427,386
その他医業収益	632.0	636.4	△ 4.4				
室料差額収益	907,906,000	886,857,682	21,048,318				
公衆衛生活動収益	352,590,000	316,004,000	36,586,000				
医療相談収益	1,439,000	3,029,990	△ 1,590,990				
受託検査施設利用収益	1,000	0	1,000				
その他医業収益	5,698,000	7,049,500	△ 1,351,500				
	548,178,000	560,774,192	△ 12,596,192				

2 支出状況調

(単位：円)

科	科目	予算配分額	決算額	差引	科目	予算配分額	決算額	差引
病院	事業費	8,357,091,000	8,111,868,843	245,222,157	減価償却費	820,452,000	802,562,534	17,889,466
		8,357,089,000	8,100,023,143	257,065,857	建物減価償却費	531,905,000	531,894,302	10,698
給手	当等	658,628,000	626,565,080	32,062,920	構築物減価償却費	10,048,000	9,896,160	151,840
		8,070,000	8,070,000	0	器械備品減価償却費	278,499,000	260,772,072	17,726,928
賃報	福利	120,342,000	120,323,533	18,467	車両減価償却費	0	0	0
		465,371,000	440,708,570	24,662,430	放射性同位元素減価償却費	0	0	0
材	料	64,845,000	57,462,977	7,382,023	資産減価償却費	18,339,000	6,616,711	11,722,289
		4,769,569,000	4,760,777,020	8,791,980	たな卸資産減価償却費	1,000	0	1,000
薬	材	3,737,834,000	3,737,806,685	27,315	固定資産除却費	18,338,000	6,616,711	11,721,289
		927,490,000	927,440,631	49,369	研究研修料	468,295,000	336,070,538	132,224,462
診給	材	84,478,000	83,751,854	726,146	研究材料	95,512,000	63,259,329	32,252,671
		19,767,000	11,777,850	7,989,150	謝金	33,251,000	30,497,000	2,754,000
医療	消耗品	1,621,806,000	1,567,431,260	54,374,740	図書	24,887,000	15,899,537	8,987,463
		2,643,000	1,357,413	1,285,587	旅費	78,217,000	37,153,163	41,063,837
厚報	福利	3,545,000	2,364,500	1,180,500	研究雑費	236,428,000	189,261,509	47,166,491
		5,575,000	5,184,630	390,370	医療外費用	2,000	11,845,700	△11,843,700
旅職	被服	11,178,000	5,831,686	5,346,314	雑損	2,000	11,845,700	△11,843,700
		63,425,000	62,461,690	963,310	不用品売却原価	1,000	0	1,000
消耗	品	11,899,000	10,621,995	1,277,005	その他の雑損	1,000	11,845,700	△11,844,700
		339,011,000	321,150,883	17,860,117	資本的支出	150,335,000	146,791,743	3,543,257
光燃	料	25,880,000	22,473,989	3,406,011	建設改良費	6,300,000	6,300,000	0
		209,000	124,021	84,979	建設改良費	6,300,000	6,300,000	0
食印	製本	13,195,000	13,135,286	59,714	改良費	0	0	0
		100,748,000	97,308,150	3,439,850	資産購入費	144,035,000	140,491,743	3,543,257
修保	険借	0	0	0	医療器械購入費	144,035,000	140,491,743	3,543,257
		73,417,000	66,353,362	7,063,638	備品購入費	0	0	0
賃通	運託	11,143,000	10,558,779	584,221	合計	8,507,426,000	8,258,660,586	248,765,414
		938,107,000	931,302,217	6,804,783	たな卸資産購入限度額	4,675,257,000	4,675,179,009	77,991
委託	会	2,083,000	1,680,900	402,100				
		19,748,000	15,521,759	4,226,241				

(単位：円)

第4表 固定資産(有形固定資産)

資産の種類	平成21年度 年度当初現在高	年度中の増減		平成21年度 年度末現在高	減価償却累計額	価値増加額		累計額		平成21年度 年度末償却未済額	備考
		増額	減少額			当年度増加額	当年度減少額	累計額	累計額		
土地	328,607,824	0	0	328,607,824	-	-	-	-	-	328,607,824	
建物	28,760,405,027	0	0	28,760,405,027	15,953,786,862	531,894,302	-	16,485,681,164	0	12,274,723,863	
鉄筋コンクリート造	14,808,626,021	0	0	14,808,626,021	4,745,182,538	319,787,860	0	5,064,970,398	0	9,743,655,623	
コンクリートブロック造	106,122	0	0	106,122	87,268	2,578	0	89,846	0	16,276	
鉄骨造	286,427,597	0	0	286,427,597	92,523,768	6,875,407	0	99,399,175	0	187,028,422	
付帯設備	13,665,245,287	0	0	13,665,245,287	11,115,993,288	205,228,457	0	11,321,221,745	0	2,344,023,542	
構築物	459,265,804	0	0	459,265,804	276,992,109	9,896,160	0	286,888,269	0	172,377,535	
器械	10,507,304,522	392,892,766	176,272,594	10,723,924,694	7,394,845,105	260,822,581	125,717,456	7,529,950,230	0	3,193,974,464	
医療用器械器具	10,312,904,950	392,892,766	176,272,594	10,529,525,122	7,224,285,014	260,822,581	125,717,456	7,359,390,139	0	3,170,134,983	
一般備品	64,622,572	0	0	64,622,572	60,933,844	0	0	60,933,844	0	3,688,728	
炊事用品	129,777,000	0	0	129,777,000	109,626,247	0	0	109,626,247	0	20,150,753	
車両	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
放射線同位元素	28,766,000	0	0	28,766,000	27,327,700	0	0	27,327,700	0	1,438,300	
その他有形固定資産	14,280,000	0	0	14,280,000	0	0	0	0	0	14,280,000	
建設仮勘定	0	6,000,000	0	6,000,000	-	-	-	-	-	6,000,000	
合計	40,098,629,177	398,892,766	176,272,594	40,321,249,349	23,652,951,776	802,613,043	125,717,456	24,329,847,363	15,991,401,986	15,991,401,986	
病棟	5,899,978,088	0	0	5,899,978,088	2,119,492,078	138,059,487	0	2,257,551,565	0	3,642,426,523	
特放棟・診療棟	2,484,698,192	0	0	2,484,698,192	894,491,339	58,141,937	0	952,633,276	0	1,532,064,916	
国際医学交流センター・外来棟	2,377,351,003	0	0	2,377,351,003	764,486,161	55,505,514	0	819,991,675	0	1,557,359,328	
立体駐車場	949,887,367	0	0	949,887,367	246,523,463	19,634,612	0	266,158,075	0	683,729,292	
研究所棟本館	1,833,598,327	0	0	1,833,598,327	154,086,380	22,012,340	0	176,098,720	0	1,657,499,607	
生物工学総合実験棟	381,566,830	0	0	381,566,830	127,061,740	6,868,202	0	133,929,942	0	247,636,888	
研究所棟北館	570,518,075	0	0	570,518,075	266,041,391	13,115,116	0	279,156,507	0	291,361,568	
その他の	597,561,858	0	0	597,561,858	265,611,022	13,328,637	0	278,939,659	0	318,622,199	
付帯設備	13,665,245,287	0	0	13,665,245,287	11,115,993,288	205,228,457	0	11,321,221,745	0	2,344,023,542	
合計	28,760,405,027	0	0	28,760,405,027	15,953,786,862	531,894,302	0	16,485,681,164	0	12,274,723,863	

(単位：円)

第5表 固定資産（無形固定資産）

資産の種類	年度当初 現在高	21年度中の増減		当年度 減価償却費	年度末 現在高	備考
		増加額	減少額			
電話加入権	172,700	0	0	0	172,700	
その他無形固定資産	107,025,319	0	0	0	107,025,319	
合計	107,198,019	0	0	0	107,198,019	

(単位：円)

第6表 企業債

種類	発行年月日	発行総額	償還高		未償還残高	発行価額	利率	償還終期	備考
			当年度償還高	償還高累計					
資金運用部資金	平成 1.3.27	260,000,000	11,319,890	129,544,108	130,455,892	260,000,000	年 4.85%	平成 31.3.25	がんセンター施設整備費
"	平成 4.3.25	4,320,000,000	2,944,669,592	4,320,000,000	0	4,320,000,000	5.50%	平成 34.3.25	がんセンター施設整備費
"	平成 5.5.7	180,000,000	6,565,215	62,713,477	117,286,523	180,000,000	4.40%	平成 35.3.25	がんセンター施設整備費
"	平成 6.4.20	740,000,000	25,947,155	232,820,874	507,179,126	740,000,000	4.30%	平成 36.3.25	がんセンター施設整備費
縁故資金	平成 17.3.31	90,000,000	22,500,000	90,000,000	0	90,000,000	0.45%	平成 22.3.31	がんセンター備品整備費
"	平成 18.4.14	440,000,000	110,000,000	330,000,000	110,000,000	440,000,000	1.68%	平成 23.3.31	がんセンター中央病院備品整備費
"	平成 19.3.30	150,000,000	37,500,000	75,000,000	75,000,000	150,000,000	1.44%	平成 24.3.31	がんセンター中央病院備品整備費
"	平成 20.3.31	354,000,000	88,500,000	88,500,000	265,500,000	354,000,000	1.30%	平成 25.3.31	がんセンター中央病院備品整備費
"	平成 20.3.31	40,400,000	8,358,000	15,326,000	25,074,000	40,400,000	1.35%	平成 25.3.31	がんセンター整備事業(借換債)
"	平成 20.3.31	131,000,000	22,534,000	40,864,000	90,136,000	131,000,000	1.38%	平成 26.3.31	がんセンター整備事業(借換債)
"	平成 21.3.25	393,700,000	35,790,000	35,790,000	357,910,000	393,700,000	1.84%	平成 32.3.25	がんセンター施設整備費(借換債)
"	平成 21.3.25	991,000,000	82,582,000	82,582,000	908,418,000	991,000,000	1.88%	平成 32.3.25	がんセンター施設整備費(借換債)
"	平成 21.3.30	305,000,000	0	0	305,000,000	305,000,000	1.58%	平成 26.3.28	がんセンター中央病院備品整備費
"	平成 22.3.25	390,000,000	0	0	390,000,000	390,000,000	1.05%	平成 27.3.25	がんセンター中央病院備品整備費
"	平成 22.3.25	2,784,410,000	0	0	2,784,410,000	2,784,410,000	1.89%	平成 34.3.25	がんセンター施設整備費(借換債)
合計		11,569,510,000	3,396,265,852	5,503,140,459	6,066,369,541	11,569,510,000			

(単位：%)

第7表 医業収益(100)対要素別比率

区分	給与	給費	薬品等医療材料費	給食材料費	減価償却費	その他経費	医業費用
事業全体	52.0	29.6	0.9	11.9	16.1	110.6	110.6
16年度	50.0	29.0	0.9	10.7	15.2	105.8	105.8
17年度	49.4	30.8	0.7	9.3	15.4	105.6	105.6
18年度	50.3	32.3	0.7	8.6	14.9	106.8	106.8
19年度	50.2	33.2	0.6	6.3	15.2	105.5	105.5
20年度	48.9	33.2	0.6	6.0	13.8	102.6	102.6
21年度	44.1	33.7	1.0	10.5	15.6	105.1	105.1
要素別比率	42.6	33.1	1.0	9.6	14.8	101.1	101.1
16年度	42.8	34.8	0.8	7.9	15.0	101.3	101.3
17年度	43.7	36.2	0.8	7.3	14.4	102.4	102.4
18年度	44.5	36.3	0.7	5.0	18.5	105.0	105.0
19年度	42.3	36.0	0.6	4.6	18.4	101.8	101.8
20年度							
21年度							

第2部 病院業務関係

第1表 外来患者数(初診患者数)

区分	平成19年度				平成20年度				平成21年度				内											
	数	総	数	総	数	総	数	総	数	総	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
初診患者数	7,723		6,253		6,193		493		432		561		618		570		528		499		465		546	
外来患者数	152,820		141,298		154,001		13,173		11,778		13,554		13,532		12,441		13,497		12,474		12,147		14,170	
1日平均患者数	623.8		526.3		636.4		627.3		654.3		616.1		615.1		592.4		642.7		656.5		639.3		644.1	
平均通院患者数	19.8		22.6		24.9		26.7		27.3		24.2		21.9		21.8		23.6		25.0		26.1		26.0	

第2表 外来患者数(診療別患者延数)

区分	平成19年度				平成20年度				平成21年度				内											
	数	総	数	総	数	総	数	総	数	総	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
総数	214,982		214,797		211,939		18,217		16,112		19,105		18,962		17,323		18,965		16,978		16,620		18,922	
消化器内科	21,351		22,225		21,500		1,828		1,541		2,058		2,062		1,823		1,955		1,647		1,546		2,005	
呼吸器内科	9,097		8,863		8,751		759		609		755		854		787		742		685		673		785	
循環器科	3,245		3,255		3,137		296		220		271		279		188		281		316		247		309	
血液・細胞療法科	6,833		7,143		7,367		666		590		689		656		577		651		588		546		593	
薬物療法科	6,415		7,988		10,380		884		838		939		967		878		849		820		787		947	
頭頸部外科	13,913		13,785		14,069		1,182		1,110		1,207		1,240		1,176		1,246		1,189		1,093		1,265	
形成外科	-		870		1,224		94		76		70		82		94		107		103		111		136	
胸部外科	8,750		9,007		9,152		760		708		777		825		713		799		738		755		793	
乳腺科	25,550		25,140		23,621		2,154		1,910		2,169		2,101		1,972		2,160		1,768		1,841		2,022	
消化器外科	16,679		16,258		15,594		1,351		1,161		1,385		1,265		1,208		1,415		1,286		1,215		1,436	
整形外科	3,391		3,159		3,299		251		232		278		272		266		310		274		237		319	
脳神経外科	1,208		932		683		65		55		63		58		47		63		55		62		59	
泌尿器科	8,506		9,105		8,887		746		804		768		767		796		746		721		707		774	
泌尿器科	13,059		12,374		11,164		990		849		998		1,033		912		1,079		903		850		934	
婦人科	549		647		479		32		32		29		60		39		54		44		30		41	
皮膚科	179		150		127		10		13		8		10		7		9		5		10		12	
眼科	3,732		3,895		3,764		351		305		343		371		317		355		280		301		314	
放射線診断科	17,815		16,666		15,253		1,344		1,237		1,305		1,238		1,162		1,314		1,196		1,245		1,545	
放射線治療科	14		15		12		3		3		2		0		0		0		2		0		1	
麻酔科	44,880		43,609		43,650		3,604		3,144		4,026		3,905		3,595		3,979		3,571		3,642		3,737	
放射線科	7,148		6,975		6,956		595		445		681		634		532		535		571		541		664	
内視鏡科	2,668		2,736		2,870		252		230		284		283		234		257		216		223		231	

第3表 入院患者数(入院・退院患者数)

区分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		年内											
	総数	数	総数	数	総数	数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
患者実数	9,723	9,936	10,175	1,213	1,256	1,266	1,209	1,206	1,222	1,161	1,145	1,171	1,171	1,145	1,171	1,131	1,207	
繰越患者数	404	375	375	375	384	407	398	396	431	383	393	255	255	383	393	386	345	
新入院患者数	9,319	9,561	9,800	838	872	859	811	810	791	778	752	916	916	752	916	745	862	
退院患者数	9,348	9,511	9,789	829	849	868	813	775	839	768	890	785	785	890	786	821		
死亡	428	429	442	38	41	32	28	30	29	45	40	40	40	45	33	47		
その他	8,920	9,082	9,347	791	808	836	785	745	810	723	850	745	745	850	753	774		
患者数	375	375	386	384	407	398	396	431	383	393	255	386	386	255	345	386		
患者延数	159,642	152,710	154,884	12,429	13,107	13,460	13,045	13,080	13,704	12,825	13,037	13,211	13,211	13,037	11,799	12,618		
1日平均患者数	436.2	418.4	424.0	414	437	434	421	436	442	428	421	426	426	421	421	407		
病床利用率	93.0	89.2	89.7	87.6	92.4	91.8	89.0	92.2	93.5	90.4	88.9	90.1	90.1	88.9	89.1	86.1		

第4表 外来(初診)患者数(性・年齢階級・住所地別)

区分	総数	%	男												女											
			0~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~	総数	%	0~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~						
総数	6,193	100.0	4	16	39	125	217	476	1,007	774	3,535	100	4	14	154	480	687	767	841	588						
%	0	・	0.2	0.6	1.5	4.7	8.2	17.9	37.9	29.1	100	・	0.1	0.4	4.4	13.6	19.4	21.7	23.8	16.6						
数	4,774	77.1	3	11	30	92	174	331	731	577	2,825	79.9	3	11	120	399	555	613	657	467						
名古屋市	2,441	39.4	1	6	15	54	100	160	330	312	1,463	41.4	2	4	66	198	296	293	327	277						
その他	2,333	37.7	2	5	15	38	74	171	401	265	1,362	38.5	1	7	54	201	259	320	330	190						
岐阜県	621	10.0	0	1	3	11	14	59	115	85	333	9.4	0	1	15	40	60	71	98	48						
三重県	542	8.8	1	2	1	10	18	52	117	86	255	7.2	0	1	12	21	54	59	60	48						
静岡県	38	0.6	0	0	0	2	2	4	7	5	18	0.5	0	0	1	3	3	3	4	4						
兵庫県	6	0.1	0	0	0	1	0	0	2	1	2	0.1	0	0	0	0	0	1	1	0						
長野県	66	1.1	0	1	0	2	3	12	14	9	25	0.7	0	1	1	4	5	7	5	2						
石川県	4	0.1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0						
滋賀県	25	0.4	0	0	0	1	0	5	2	4	13	0.4	0	0	0	1	5	3	4	4						
その他	117	1.9	0	1	3	6	6	12	18	7	64	1.8	1	0	5	13	9	8	13	15						

第5表 外来（初診）患者数（性・年齢階級・住所別）（昭和39年12月～平成22年3月）

区 分	総数	%	男										女									
			0～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～	総数	%	0～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～		
総 数	397,068	100.0	1,467	2,784	10,045	22,239	29,984	32,927	31,355	17,663	248,604	100.0	1,359	3,703	22,405	55,193	68,572	51,435	31,536	14,401		
%	0	・	1.0	1.9	6.8	15.0	20.2	22.2	21.1	11.9	・	0.5	1.5	9.0	22.2	27.6	20.7	12.7	5.8			
愛知 県	321,953	81.1	1,193	2,303	8,504	18,847	24,471	25,593	23,755	13,388	203,899	82.0	1,146	3,158	19,119	46,721	56,659	40,822	24,808	11,466		
{ 名古屋 市	173,956	43.8	704	1,362	4,881	10,226	13,092	13,253	12,656	7,883	109,899	44.2	640	1,912	11,221	24,904	29,457	20,896	13,683	7,186		
{ そ の 他	147,997	37.3	489	941	3,623	8,621	11,379	12,340	11,099	5,505	94,000	37.8	506	1,246	7,898	21,817	27,202	19,926	11,125	4,280		
岐 阜 県	36,262	9.1	136	217	641	1,567	2,603	3,498	3,648	2,090	21,862	8.8	87	254	1,516	4,108	5,926	5,257	3,319	1,395		
三 重 県	25,026	6.3	10,019	6.7	70	162	1,848	2,420	2,547	1,392	15,007	6.0	73	182	973	2,867	4,266	3,617	2,137	892		
岡 崎 県	3,913	1.0	1,774	1.2	25	87	207	346	427	218	2,139	0.9	12	31	198	401	537	480	336	144		
山 梨 県	301	0.1	136	0.1	1	8	15	27	37	20	165	0.1	1	3	14	23	40	46	27	11		
井 野 県	650	0.2	293	0.2	3	15	26	63	69	40	357	0.1	2	7	24	48	90	99	55	32		
長 野 県	1,979	0.5	919	0.6	7	35	69	162	231	147	1,060	0.4	6	14	50	156	248	290	202	94		
石 川 県	239	0.1	118	0.1	0	3	13	18	36	21	121	0.0	0	2	9	18	26	27	22	17		
滋 賀 県	1,068	0.3	433	0.3	0	5	28	70	110	54	635	0.3	5	11	40	114	172	149	93	51		
そ の 他	5,677	1.4	2,318	1.6	32	43	267	314	376	287	3,359	1.4	27	41	462	737	608	648	537	299		

第6表 新入院患者数（性・年齢階級・住所別）（平成21年度）

区 分	総数	%	男										女									
			0～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～	総数	%	0～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～		
総 数	9,800	100	0	25	47	172	343	984	2,396	1,659	4,174	100	0	7	102	315	594	904	1,311	941		
%	100	・	0.0	0.4	0.8	3.1	6.1	17.5	42.6	29.5	100	・	0.0	0.2	2.4	7.5	14.2	21.7	31.4	22.5		
愛知 県	7,312	74.6	4,196	74.6	38	128	268	700	1,775	1,272	3,116	74.7	0	7	63	236	450	660	961	739		
{ 名古屋 市	3,278	33.4	1,829	32.5	0	18	51	125	294	623	1,449	34.7	0	2	25	71	255	257	421	418		
{ そ の 他	4,034	41.2	2,367	42.1	0	15	20	77	143	406	1,667	39.9	0	5	38	165	195	403	540	321		
岐 阜 県	1,096	11.2	589	10.5	0	7	19	30	121	146	507	12.1	0	0	14	44	73	116	169	91		
三 重 県	990	10.1	622	11.1	0	3	0	18	26	247	368	8.8	0	0	10	17	50	102	125	64		
岡 崎 県	46	0.5	26	0.5	0	0	4	3	5	10	4	0.5	0	0	2	2	5	3	4	4		
井 野 県	2	0.0	1	0.0	0	0	0	0	1	0	1	0.0	0	0	0	0	0	0	1	0		
長 野 県	142	1.4	89	1.6	0	0	1	5	15	18	53	1.3	0	0	2	2	6	13	14	16		
石 川 県	2	0.0	2	0.0	1	0	0	0	0	0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0		
滋 賀 県	30	0.3	20	0.4	0	0	0	1	9	5	10	0.2	0	0	0	0	1	3	3	3		
そ の 他	180	1.8	81	1.4	6	2	10	8	43	12	99	2.4	0	0	11	14	9	7	34	24		

第9表 放射線照射回数（診断—撮影枚数）

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		左											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	108,338	442.2	103,174	424.6	101,336	418.7	8,338	7,837	9,154	9,006	8,227	8,553	9,161	8,006	8,341	8,010	7,628	9,075
呼吸器	52,335	213.6	50,906	209.5	56,378	233.0	4,271	3,936	4,599	4,864	4,430	4,987	5,335	4,662	4,764	4,732	4,425	5,373
消化器	20,647	84.3	18,756	77.2	17,506	72.3	1,440	1,235	1,676	1,658	1,388	1,366	1,690	1,450	1,413	1,349	1,419	1,422
泌尿・性器	594	2.4	602	2.5	394	1.6	36	36	49	31	6	36	42	24	32	42	18	42
心臓・血管	4,569	18.6	4,662	19.2	4,486	18.5	421	408	355	454	384	399	384	314	352	384	251	380
骨	7,177	29.3	6,729	27.7	6,196	25.6	492	564	598	520	474	518	447	500	577	435	479	592
その他	23,016	93.9	21,519	88.6	16,376	67.7	1,678	1,658	1,877	1,479	1,545	1,247	1,263	1,056	1,203	1,068	1,036	1,266
単造	78,242	319.4	74,962	308.5	74,699	308.7	6,069	5,758	6,572	6,453	6,096	6,403	6,688	5,931	6,208	5,931	5,684	6,906
影	29,633	121.0	27,701	114.0	26,111	107.9	2,219	2,033	2,518	2,498	2,086	2,114	2,439	2,034	2,094	2,050	1,906	2,120
特殊	463	1.9	511	2.1	526	2.2	50	46	64	55	45	36	34	41	39	29	38	49

第10表 コンピュータ断層撮影件数

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		左											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	40,061	163.5	44,214	182.0	46,548	192.3	3,815	3,462	4,292	4,259	3,910	3,748	4,291	3,834	3,632	3,630	3,649	4,026
頭部	3,881	15.8	5,133	21.1	4,655	19.2	400	361	436	423	408	400	448	392	336	334	316	401
胸部	9,497	38.8	10,326	42.5	11,439	47.3	921	844	1,024	1,087	963	928	1,026	953	909	934	873	977
腹部	26,605	108.6	28,702	118.1	30,405	125.6	2,490	2,252	2,828	2,743	2,539	2,417	2,808	2,483	2,383	2,354	2,460	2,648
その他	78	0.3	53	0.2	49	0.2	4	5	4	6	0	3	9	6	4	8	0	0
単造	11,238	45.9	12,257	50.4	13,512	55.8	1,128	922	1,238	1,176	1,133	1,066	1,283	1,090	1,144	1,077	969	1,286
影	28,823	117.6	31,957	131.5	33,036	136.5	2,687	2,540	3,054	3,083	2,777	2,682	3,008	2,744	2,488	2,553	2,680	2,740
総スライス数(断層枚数)	933,386	3809.7	1,042,329	4289.4	1,128,375	4662.7	91,980	85,425	107,630	107,405	94,915	90,080	104,835	90,870	87,455	88,665	81,515	97,600

第11表 超音波断層撮影件数

区 分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		左											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	7,556	30.8	5,933	24.4	5,009	20.7	488	394	503	461	396	409	431	390	391	364	368	414
甲狀腺	914	3.7	806	3.3	948	3.9	96	72	76	88	92	86	82	72	61	56	92	75
乳房	2,174	8.9	1,375	5.7	836	3.5	75	86	83	75	81	80	75	66	63	52	44	56
腹部	2,255	9.2	1,674	6.9	1,721	7.1	155	116	162	140	113	143	150	143	150	137	146	166
その他	2,213	9.0	2,078	8.6	1,504	6.2	162	120	182	158	110	100	124	109	117	119	86	117

第12表 アイソトープ検査件数

区分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		内											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	1,687	6.9	1,329	5.5	1,234	5.1	86	105	118	108	98	103	116	99	96	113	91	101
脳	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
液	14	0.1	56	0.2	34	0.1	4	4	3	3	5	2	2	3	0	1	4	3
状	8	0.0	6	0.0	8	0.0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	2	0
腺	0	0.0	4	0.0	6	0.0	0	0	0	0	4	2	0	0	0	0	0	0
肺	1	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
腎	20	0.1	14	0.0	26	0.1	2	4	0	0	4	2	2	4	2	4	2	0
副	1,337	5.5	933	3.8	853	3.5	59	77	86	72	62	68	79	67	70	81	61	71
骨	2	0.0	4	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
探	1	0.0	3	0.0	6	0.0	0	0	1	0	0	2	0	0	2	0	1	0
腫	302	1.2	292	1.2	285	1.2	21	16	27	23	23	26	30	24	22	27	21	25
リンパ	1	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ノ	0	0.0	16	0.1	15	0.1	0	4	1	3	0	1	3	1	0	0	0	2
グ	0	0.0	1	0.0	1	0.0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
ラム	1	0.0	1	0.0	1	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
の	1	0.0	1	0.0	1	0.0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
他	1	0.0	1	0.0	1	0.0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

第13表 放射線照射回数 (治療—取扱件数)

区分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		内											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	59,470	242.7	56,815	233.8	62,784	259.4	4,854	4,863	5,491	5,524	5,576	4,458	5,079	4,687	5,811	5,773	5,522	5,146
コバルト遠隔大量照射	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
放射性	81	0.3	79	0.3	85	0.4	7	7	7	14	5	3	2	4	10	9	12	11
物質	37	0.2	25	0.1	23	0.1	2	2	2	2	2	3	1	2	2	2	1	2
線	54,245	221.4	52,454	215.9	58,039	239.8	4,512	4,487	5,094	5,083	5,176	4,088	4,662	4,316	5,430	5,354	5,131	4,706
ク	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
療	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
治	1,116	4.6	1,083	4.5	1,067	4.4	88	84	94	104	87	76	88	80	83	106	80	97
T	3,675	15.0	2,948	12.1	3,377	14.0	235	267	278	307	288	274	313	268	267	287	280	313
R	316	1.3	226	0.9	193	0.8	10	16	22	14	18	14	13	17	19	15	18	17
I	54,245	221.4	52,454	215.9	58,039	239.8	4,512	4,487	5,094	5,083	5,176	4,088	4,662	4,316	5,430	5,354	5,131	4,706
メ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
レ	1,116	4.6	1,083	4.5	1,067	4.4	88	84	94	104	87	76	88	80	83	106	80	97
ータ	316	1.3	226	0.9	193	0.8	10	16	22	14	18	14	13	17	19	15	18	17

第14表 臨床検査状況 (一般検査件数)

区分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		内											
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	2,680,799	10,942.0	2,812,427	11,573.8	2,923,804	12,081.8	243,329	232,176	259,201	259,186	242,509	248,275	253,930	239,172	232,896	237,710	220,172	255,248
尿	26,262	107.2	29,086	119.7	27,821	115.0	2,489	2,316	2,558	2,509	2,452	2,388	2,469	2,415	2,121	2,443	1,385	2,276
便	1,454	5.9	1,227	5.0	720	3.0	58	50	65	80	51	63	50	60	54	59	64	66
検査	864,467	3,528.4	900,392	3,705.3	1,021,237	4,220.0	78,734	81,492	90,645	91,164	85,308	86,862	89,045	83,550	81,874	83,746	78,287	90,530
血液	1,406,034	5,738.9	1,480,405	6,092.2	1,470,775	6,077.6	127,857	116,915	130,074	129,645	121,583	125,112	127,505	120,305	116,876	118,802	109,830	126,771
化学	11,978	48.9	15,077	62.0	15,065	62.3	1,212	1,186	1,459	1,452	1,213	1,309	1,402	1,338	1,426	1,034	891	1,143
菌学	536	2.2	708	2.9	792	3.3	66	61	78	76	65	57	69	72	52	66	58	72
(再掲：監視培養検査)	168,121	686.2	181,853	748.4	190,445	787.0	15,859	14,988	16,981	16,707	15,644	16,205	16,413	15,476	15,040	15,613	14,493	17,026
血清	1,643	6.7	1,688	6.9	1,745	7.2	162	142	150	144	135	127	147	138	131	138	160	171
(再掲：アイソトープ使用)	8,424	34.4	8,384	34.5	7,897	32.6	662	564	716	755	661	657	682	618	630	649	607	696
病理学的	440	1.8	461	1.9	482	2.0	37	28	43	60	26	41	53	44	33	36	50	31
検査	1,193	4.9	1,324	5.4	1,547	6.4	126	105	136	144	130	124	137	140	124	118	134	129
癌	9,682	39.5	8,619	35.5	7,568	31.3	629	541	680	709	633	627	761	631	550	574	592	641
細胞	178,967	730.5	181,894	748.5	176,977	731.3	15,871	13,765	15,525	15,653	14,563	14,610	15,179	14,321	13,896	14,334	13,537	15,723
その他	3,777	15.4	3,705	15.2	3,270	13.5	295	226	319	308	245	277	234	274	272	302	302	216

第15表 臨床検査状況（機能検査件数）

区分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		同												内			記		
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	内			記		
																			1日平均	1日平均	1日平均	1日平均	1日平均	1日平均
総数	19,531	79.7	20,598	84.8	22,089	91.3	1,765	1,688	1,979	2,063	1,776	1,949	2,041	1,801	1,722	1,679	1,575	2,051						
電荷心電図検査	3,512	14.3	5,498	22.6	5,593	23.1	418	406	490	546	451	517	519	477	465	370	412	522						
ホルター心電図検査	806	3.3	691	2.8	696	2.9	66	51	69	66	39	56	70	49	54	56	48	72						
心臓超音波検査	1,958	8.0	2,062	8.5	1,951	8.1	164	165	193	207	144	165	196	157	65	37	23	32						
肺機能検査	6,443	26.3	6,611	27.2	6,645	27.5	529	478	584	573	591	543	635	555	537	537	490	593						
ヒロリ菌呼吸気試験	78	0.3	67	0.3	84	0.3	9	4	4	6	4	16	8	6	3	11	6	7						
聴力純音検査	35	0.1	79	0.3	119	0.5	17	9	9	14	16	13	11	5	8	7	4	6						
眼科検査	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
乳腺超音波検査	1,950	8.0	1,272	5.2	796	3.3	74	78	83	66	71	79	72	65	61	41	51	55						
骨塩定量検査	2	0.0	3	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
その他検査	0	0.0	1	0.0	5	0.0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0						
血液検査	2,341	9.6	1,912	7.9	3,933	16.3	302	338	349	380	295	358	318	301	346	305	259	382						

(注) その他の検査：ペクトル心電図検査、心音図検査、心拍出量検査、脳波検査を含む

第16表 臨床検査状況（内視鏡検査件数）

区分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		同												内			記		
	総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	内			記		
																			1日平均	1日平均	1日平均	1日平均	1日平均	1日平均
総数	9,212	37.6	8,834	36.4	8,740	36.1	759	568	842	806	684	706	754	709	749	682	676	805						
上部消化管	5,188	21.2	5,012	20.6	4,779	19.7	437	312	451	436	350	386	413	401	387	380	364	462						
下部消化管	2,617	10.7	2,537	10.4	2,717	11.2	222	163	284	245	231	221	224	211	252	216	211	237						
気管支	228	0.9	165	0.7	151	0.6	7	24	11	23	15	17	11	4	13	8	4	14						
膀胱管造影 (ERCP)	202	0.8	148	0.6	157	0.6	14	12	13	21	19	18	11	10	12	10	9	8						
超音波内視鏡 (EUS)	734	3.0	687	2.8	664	2.7	62	42	60	57	52	51	66	61	62	41	57	53						
超音波内視鏡下穿刺生検 (EUS-FBNAB)	243	1.0	285	1.2	272	1.1	17	15	23	24	17	13	29	22	23	27	31	31						

第17表 薬剤業務状況

区	分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		内												記		
		総数	1日平均	総数	1日平均	総数	1日平均	左												1月	2月	3月
								4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月						
処	総数	76,446	312.0	77,728	319.9	75,118	310.4	6,104	5,430	6,314	6,616	6,469	6,220	6,763	6,205	6,571	5,798	5,735	6,893			
	外来	10,638	43.4	11,213	46.1	9,211	38.1	805	666	760	810	800	794	855	790	743	735	689	764			
	入院	65,808	268.6	66,515	273.7	65,907	272.3	5,299	4,764	5,554	5,806	5,669	5,426	5,908	5,415	5,828	5,063	5,046	6,129			
方	総数	139,363	568.8	138,711	570.8	135,593	560.3	11,253	9,638	11,411	12,026	11,440	11,248	12,366	11,169	11,831	10,621	10,484	12,106			
	外来	23,692	96.7	24,442	100.6	21,882	90.4	1,805	1,642	1,775	1,888	1,797	1,831	2,105	1,932	1,816	1,748	1,660	1,883			
	入院	115,671	472.1	114,269	470.2	113,711	469.9	9,448	7,996	9,636	10,138	9,643	9,417	10,261	9,237	10,015	8,873	8,824	10,223			
注	総数	1,440,644	5,880.2	1,435,099	5,905.8	1,374,632	5,680.3	118,363	104,379	116,045	125,345	119,883	119,380	134,045	115,106	131,219	110,701	85,145	95,021			
	外来	454,361	1,854.5	466,497	1,919.7	399,375	1,650.3	35,065	33,141	31,923	37,655	33,706	34,766	40,130	35,541	35,636	32,748	23,395	25,669			
	入院	986,283	4,025.6	968,602	3,986.0	975,257	4,030.0	83,298	71,238	84,122	87,690	86,177	84,614	93,915	79,565	95,583	77,953	61,750	69,352			
射	総数	868	3.5	954	3.9	836	3.5	62	55	87	65	68	73	65	84	76	50	78	73			
	外来	796	3.2	816	3.4	779	3.2	60	53	86	61	65	66	61	78	71	45	67	66			
	入院	72	0.3	138	0.6	57	0.2	2	2	1	4	3	7	4	6	5	5	11	7			
射	総数	101,718	415.2	104,148	428.6	110,407	456.2	9,123	9,132	9,496	9,655	9,019	8,960	9,434	8,837	9,102	9,249	8,893	9,507			
	外来	20,008	81.7	21,485	88.4	22,239	91.9	1,989	1,794	1,951	2,019	1,857	1,814	1,823	1,744	1,804	1,738	1,753	1,953			
	入院	81,710	333.5	82,663	340.2	88,168	364.3	7,134	7,338	7,545	7,636	7,162	7,146	7,611	7,093	7,298	7,511	7,140	7,554			
射	総数	153,290	625.7	159,655	657.0	166,128	686.5	14,027	13,805	14,438	14,791	13,243	13,530	14,176	12,993	14,003	13,434	12,804	14,884			
	外来	493,797	2,015.5	494,874	2,036.5	519,211	2,145.5	41,913	42,998	44,744	44,880	43,226	41,759	42,558	41,917	44,681	44,000	40,658	45,877			
	入院	437,417	1,785.4	430,537	1,771.8	451,188	1,864.4	35,806	37,421	38,803	38,566	37,520	36,159	36,921	36,568	39,321	38,905	35,590	39,608			
射	総数	843,306	3,442.1	817,846	3,365.6	865,118	3,574.9	71,995	74,271	75,645	76,977	75,070	72,196	68,903	66,709	69,493	69,674	68,088	76,097			
	外来	176,773	721.5	183,996	757.2	194,264	802.7	17,253	16,068	16,960	18,092	16,340	16,153	16,087	15,618	15,029	14,287	14,188	18,189			
	入院	666,533	2,720.5	633,850	2,608.4	670,854	2,772.1	54,742	58,203	58,685	58,885	58,730	56,043	52,816	51,091	54,464	55,387	53,900	57,908			
射	総数	3,710	15.1	2,605	10.7	1,912	7.9	212	160	185	215	169	201	170	180	142	150	62	66			
	算定件数	5,102	20.8	3,002	12.4	2,018	8.3	241	168	203	226	183	213	176	187	146	147	62	66			
	調製件数(患者数)	9,967	40.7	11,034	45.4	14,475	59.8	1,338	1,201	1,271	1,330	1,227	1,178	1,202	1,133	1,130	1,105	1,104	1,256			
射	総数	15,339	62.6	17,262	71.0	22,766	94.1	2,065	1,900	2,068	2,106	1,963	1,894	1,937	1,820	1,727	1,695	1,686	1,905			
	調製件数(患者数)	418	1.7	712	2.9	1,315	5.4	116	93	125	143	143	140	132	110	106	91	58	58			
	調製数*4	551	2.2	1,123	4.6	1,706	7.0	179	129	171	183	182	173	164	139	135	111	76	64			
射	総数	5,702	23.3	5,884	24.2	6,916	28.6	588	479	579	670	588	564	606	559	609	487	533	654			
	調製件数(患者数)	11,676	47.7	12,345	50.8	13,232	54.7	931	881	1,232	1,180	1,135	1,027	1,065	1,130	1,229	1,138	979	1,305			
	TDM実施件数*6			93	0.4	59	0.2	7	6	6	6	3	3	7	4	6	9	1	1			

* 1 治療の処方せん枚数は、平成19年度から集計 * 2 実枚数は、修正・削除分を加えた枚数(平成16年度から集計)
 * 3 外来抗がん剤調製数は、薬剤師が調製した分のみを計上 * 4 外来抗がん剤調製数は、薬剤師が調製した分のみを計上(平成19年度から集計)
 * 5 入院抗がん剤調製数(治療を含む)は、薬剤師が調製した分のみを計上(平成20年度から集計) * 6 TDM実施件数は平成20年度から集計

第18表 輸血状況

1 血液使用量

区分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		左											
	総数	月平均	総数	月平均	総数	月平均	同						内					
							4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
自己血液	372	31.0	431	35.9	385	32.1	46	26	28	40	31	20	34	30	34	28	26	42
全血	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
赤血球製剤	-	-	16	0.17	2	0.17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
赤血球濃厚液	3,564	297.0	4,908	409.0	5,578	464.8	508	478	574	420	476	514	450	490	436	354	440	438
凍結血漿	995	82.9	754	62.8	934	77.8	99	103	46	42	225	76	34	128	26	20	100	35
血小板	12,995	1,082.9	15,995	1,332.9	16,565	1,380.4	1,300	1,205	1,660	1,195	1,700	1,610	1,350	1,565	1,835	1,290	970	885

2 検査件数

区分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		左											
	総数	月平均	総数	月平均	総数	月平均	同						内					
							4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
クロスマッチ	2,250	187.5	2,903	241.9	3,425	285.4	321	279	337	265	303	299	271	310	271	266	220	283
血液型	3,151	262.6	3,309	275.8	3,314	276.2	257	248	299	275	282	279	259	273	276	252	254	360
RH因子	3,151	262.6	3,309	275.8	3,314	276.2	257	248	299	275	282	279	259	273	276	252	254	360
間接クームス検査	7,677	639.8	8,827	735.6	9,616	801.3	838	740	918	782	804	827	792	843	778	752	665	877
抗体スクリーニング	5,420	451.7	5,913	492.8	6,181	515.1	517	461	581	517	501	528	521	533	507	486	435	594
直接クームス試験	9	0.8	12	1.0	17	1.4	-	-	4	2	2	4	-	-	2	1	1	1

第19表 患者給食数 (配膳延人数)

区	分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		内											
		%		%		%		左						内					
		総数	%	総数	%	総数	%	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総	数	125,075	100.0	121,399	100.0	115,668	100.0	9,774	9,633	10,174	10,544	10,190	10,265	10,923	9,957	10,127	4,727	9,559	
一般食	常食	73,340	58.7	70,909	58.5	67,065	58.1	5,675	5,745	5,916	6,160	5,792	5,934	6,406	5,690	5,993	2,597	5,568	
	全粥	17,631	14.1	17,604	14.5	16,455	14.2	1,515	1,396	1,434	730	1,540	1,380	1,577	1,461	1,639	842	1,423	
	軟食	2,432	1.9	1,615	1.3	2,779	2.4	184	110	230	889	185	161	207	248	136	43	242	
	7分粥	1,699	1.4	1,438	1.2	2,946	2.5	164	96	144	1,480	138	171	170	136	122	138	59	128
	5分粥	3,514	2.8	4,179	3.4	3,659	3.2	213	269	350	208	347	382	413	256	458	195	283	
	3分粥	3,559	2.8	4,223	3.5	3,810	3.3	331	328	382	227	385	365	403	267	326	175	270	
	流動食	2,240	1.8	2,307	1.9	1,907	1.6	159	166	146	359	121	147	144	145	158	80	130	
特別食	加算食	10,435	8.3	9,138	7.5	7,335	6.3	738	724	698	348	705	632	578	780	529	315	589	
	非加算食	10,225	8.2	9,986	8.2	9,712	8.4	795	799	874	143	977	1,093	1,025	974	756	421	926	

第20表 患者給食1人1日平均栄養量 (常食)

区	分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		内											
		%		%		%		左						内					
		平均	%	平均	%	平均	%	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
熱量 (Kcal)	総	1,789	100.0	1,838	100.0	1,856	100.0	1,814	1,834	1,848	1,848	1,850	1,843	1,831	1,830	1,834	1,852	2,073	
	穀類	898	50.2	913	49.6	922	49.7	917	907	910	910	921	910	912	915	909	914	1,032	
	動物性食品	439	24.5	467	25.4	472	25.4	460	467	478	472	464	462	464	468	467	477	526	
	その他	452	25.3	459	24.9	462	24.9	437	461	459	465	465	471	455	446	444	461	515	
蛋白質量 (g)	総	70.8	100.0	72.6	100.0	73.4	100.0	71.1	72.4	74.0	73.1	73.2	72.6	72.5	72.0	72.4	73.8	82.0	
	穀類	17.5	24.7	17.9	24.6	18.0	24.6	17.9	17.7	17.8	17.8	18.0	17.8	17.9	17.9	17.8	17.7	20.2	
	動物性食品	36.8	52.0	39.8	54.8	40.2	54.8	39.2	39.7	40.8	40.3	39.9	39.1	39.5	39.8	39.7	40.6	44.8	
	その他	16.5	23.3	15.0	20.6	15.2	20.6	14.0	15.0	15.4	15.1	15.3	15.7	15.2	14.4	15.0	15.3	16.9	

第21表 患者給食1人1日平均材料費 (常食)

区	分	平成19年度		平成20年度		平成21年度		内											
		%		%		%		左						内					
		平均	%	平均	%	平均	%	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
材料費 (円)	総	750.64	100.0	752.35	100.0	747.66	100.0	749.88	750.89	752.83	748.89	751.65	756.13	747.20	758.26	746.26	618.39	843.67	
	穀類	93.36	12.4	93.58	12.4	94.47	12.6	93.08	93.60	93.77	93.12	94.04	94.05	94.30	91.70	93.53	93.26	105.58	
	動物性食品	267.90	35.7	268.48	35.7	270.52	36.2	265.16	263.51	269.90	269.59	269.60	266.78	267.74	272.09	265.22	263.51	302.62	
	その他	389.38	51.9	390.29	51.9	382.68	51.2	391.64	393.78	389.16	386.18	388.01	395.30	385.16	394.47	389.17	389.15	254.62	
1円当たり熱量 (Kcal)	2	-	2	-	2	-	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	

第1表 解剖件数

第3部 研究所業務関係

区分	平成19年度	平成20年度	平成21年度	内訳											
				4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
死亡者数	428	429	442	38	39	41	32	28	30	29	45	40	40	33	47
解剖数	20	9	11	3	0	3	0	0	0	0	1	0	0	1	2
解剖率	4.7	2.1	2.5	7.9	0.0	7.3	0.0	0.0	0.0	3.4	2.2	0.0	0.0	3.0	4.3

第2表 放射性同位元素 (RI) 使用状況 (単位 MBq)

区分	平成19年度	平成20年度	平成21年度	内訳											
				4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	1,006.35	995.56	733.34	52.44	51.25	50.13	24.22	174.22	73.85	37.36	51.62	17.76	46.78	74.36	
3H (水素)	11.79	4.39	47.29	0.00	0.00	0.00	0.00	3.70	6.59	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
14C (炭素)	1.15	0.07	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
32P (リン)	187.59	170.54	174.23	23.38	5.88	18.13	0.00	79.83	0.00	0.00	7.88	17.76	1.86	19.51	
33P (リン)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
35S (硫黄)	18.04	0.00	33.53	0.00	0.00	0.00	0.00	33.53	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
51Cr (クロム)	787.78	820.56	478.29	29.06	45.37	32.00	24.22	57.16	67.26	37.36	43.74	0.00	44.92	45.60	
125I (ヨウ素)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
90Y (イットリウム)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
111In (インジウム)	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	

第3表 共同利用機器使用件数

機器名	平成19年度	平成20年度	平成21年度	同左内訳											
				4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
蛍光顕微鏡	25	38	27	0	0	1	1	1	3	0	2	0	4	4	
共焦点レーザー顕微鏡	291	432	412	32	24	21	21	26	43	31	30	31	44	48	
細胞解析装置 FACS Calibur	809	1,057	1,079	104	88	116	82	82	104	102	87	78	67	74	
遺伝子発現定量装置 ライトサイクラー	318	361	312	22	20	35	20	37	16	35	31	26	18	26	
CCD写真撮影装置	2,495	2,178	2,163	223	226	262	262	242	137	160	138	170	158	151	
超遠心機	85	101	156	14	11	16	17	17	11	9	9	5	17	21	
超遠心機 (卓上型)	13	0	23	3	8	0	0	0	0	0	6	2	1	0	
X線フィルム自動現像機	1,681	1,929	1,602	126	189	164	170	170	109	118	114	117	123	108	
DNAシーケンサ	13,773	15,179	13,748	1,702	1,430	2,005	1,454	827	681	599	1,073	744	1,189	911	
RI画像解析装置 BAS-2500	228	95	61	7	10	3	3	3	8	4	4	3	4	3	
液体シンチレーションカウンタ	74	35	57	3	4	18	9	9	3	1	0	2	0	17	
オートガンマー	109	85	101	7	11	10	11	11	4	5	10	5	11	12	
実験用X線照射装置	802	640	523	52	57	60	56	56	55	40	30	43	27	34	
化学発光画像解析装置 ImageMaster-CL	9	10	21	2	1	1	1	2	1	1	1	2	2	4	
蛍光画像解析装置 Fluor Imager 595	33	7	26	2	1	1	1	5	2	1	1	3	2	4	
旋回培養器	271	384	265	17	23	29	24	24	21	9	14	17	24	24	
走査電子顕微鏡	8	12	12	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
Biacor X (H17年度から)	10	13	23	2	1	1	1	2	2	1	2	2	2	3	
大型プリンター	60	70	105	6	10	12	5	5	4	20	8	12	8	7	
スライド作成装置	77	12	40	3	3	3	6	6	3	0	2	2	4	8	

第4表 実験動物管理状況（月別動物飼育数）（各月第1週における動物数）（平成21年度）

種別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総数	1,221	1,234	1,509	1,307	1,351	1,358	1,281	1,622	1,670	1,672	1,499	1,457	1,221	1,234	1,509
マウス	1,221	1,216	1,507	1,307	1,351	1,357	1,280	1,392	1,440	1,442	1,353	1,311	1,221	1,216	1,507
ラット	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ネズミ	0	0	0	0	0	0	0	229	229	229	145	145	0	0	0
ウサギ	0	18	2	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0	18	2

第5表 実験動物管理状況（系統保存動物）

マウス：CHST-2, 4-DKO, FUT4, 7-DKO, Cmah-KO (分子病態学部)
 C57BL/6トランスジェニックmiR-146a, C57BL/6トランスジェニックmiR-19b (腫瘍病理学部)
 B6-Lyt5.2, C57/BL6, CH3, ノックアウトマウス(NOD-scid, IL-2Rg^{-/-}),
 ノックアウトH-2D^b × β2M^{-/-}トランスジェニックHLA-A2-1D^b β2ハイブリッドマウス (腫瘍免疫学部)
 C57/BL6, ICR (発がん制御研究部)
 B6-Ly5.1 (遺伝子医療研究部)

第 4 部 がん患者登録・追跡調査関係

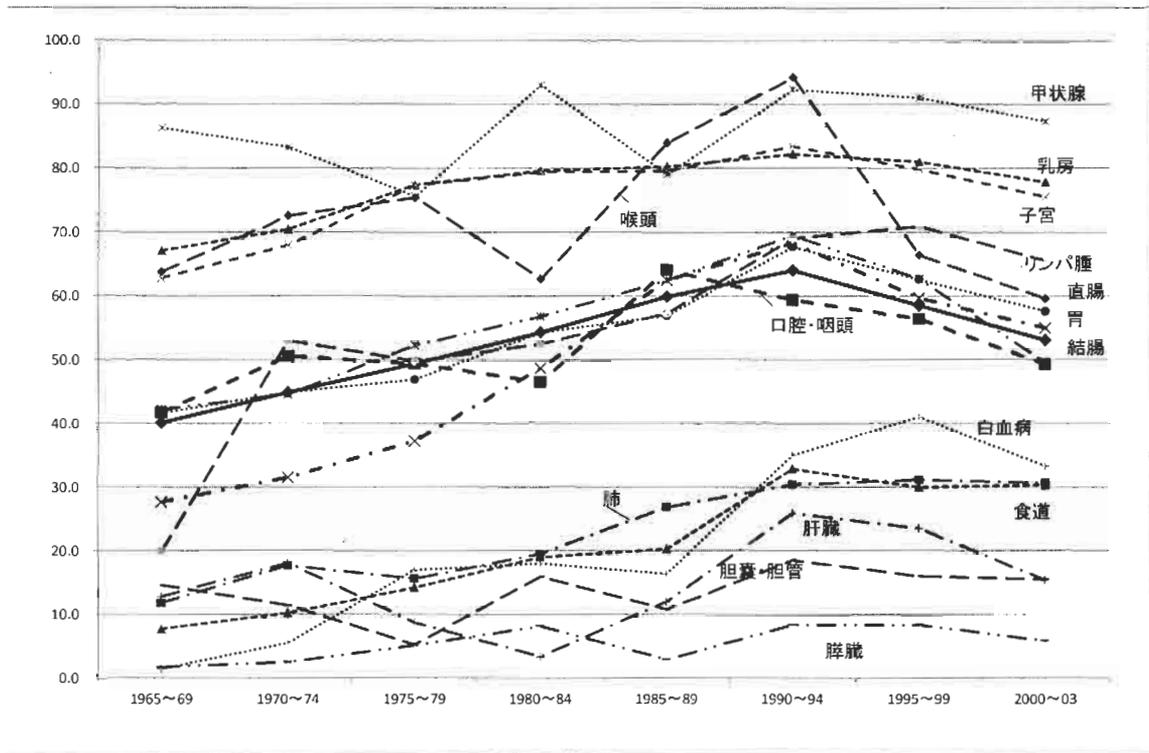
主要部位別・性別 がん患者相対生存率

診断年		5 年 生 存 率							
		1965～69	1970～74	1975～79	1980～84	1985～89	1990～94	1995～99	2000～03
症例数		7,624	7,726	6,788	6,839	6,944	6,819	8,017	8,188
全部位	男	29.5	32.6	34.8	39.8	47.3	52.1	47.5	43.1
	女	49.3	54.5	60.6	65.1	68.9	73.2	69.0	62.9
	計	40.1	44.9	49.4	54.3	59.9	64.0	58.5	53.1
症例数		288	290	224	207	285	340	535	647
口腔・咽頭	男	38.3	48.0	44.5	42.5	60.4	52.7	55.3	47.6
	女	49.1	54.4	58.8	56.0	70.8	76.8	59.1	53.6
	計	41.8	50.6	49.4	46.5	64.1	59.4	56.4	49.3
症例数		212	234	203	212	177	234	290	411
食道	男	6.4	8.6	14.0	18.4	20.0	30.7	27.0	31.2
	女	12.6	16.9	15.2	21.2	22.9	47.7	50.0	25.8
	計	7.7	10.2	14.2	19.0	20.3	32.9	30.0	30.4
症例数		2,516	2,040	1,735	1,558	1,423	1,212	1,260	1,032
胃	男	29.7	33.7	38.2	51.0	64.1	67.5	59.4	56.0
	女	23.7	27.6	35.9	44.9	59.6	70.0	60.4	53.1
	計	27.7	31.6	37.3	48.7	62.5	68.3	59.7	55.0
症例数		125	176	218	300	368	490	574	578
結腸	男	44.4	43.5	51.3	56.1	62.5	71.1	63.1	49.8
	女	38.7	45.9	53.6	57.7	62.5	67.6	62.2	49.1
	計	42.2	44.6	52.3	56.8	62.5	69.5	62.7	49.5
症例数		305	325	365	365	336	362	377	387
直腸	男	41.3	43.0	45.2	50.2	55.5	68.8	58.3	53.6
	女	42.1	47.0	50.0	60.5	59.3	65.8	69.1	64.2
	計	41.6	44.9	46.9	54.3	56.9	67.7	62.6	57.6
症例数		105	131	95	133	174	220	311	240
肝臓	男	10.1	16.6	7.3	4.0	12.0	25.1	21.3	16.6
	女	21.5	24.4	13.3	0.0	12.2	28.3	30.6	11.3
	計	12.8	18.1	8.7	3.3	12.0	25.9	23.5	15.4
症例数		45	74	41	76	76	68	25	84
胆嚢・胆管	男	5.4	11.4	7.2	21.9	16.5	23.6	33.3	12.8
	女	22.5	11.5	4.1	11.8	7.0	12.9	6.3	18.9
	計	14.6	11.4	5.2	15.9	10.8	18.5	16.0	15.5
症例数		59	90	97	93	92	105	157	225
膵臓	男	0.0	4.0	5.4	7.6	2.7	10.0	8.6	5.6
	女	4.5	0.0	4.8	9.7	3.1	5.6	7.7	6.0
	計	1.7	2.5	5.1	8.1	2.9	8.3	8.3	5.8
症例数		198	210	117	92	87	91	116	104
喉頭	男	63.6	71.4	78.9	65.1	83.6	93.8	67.0	60.2
	女	64.9	88.1	28.1	20.8	91.3	100.0	50.0	50.0
	計	63.8	72.6	75.4	62.7	84.0	94.2	66.4	59.6
症例数		549	654	628	723	765	792	1,164	1,256
肺	男	10.6	18.2	13.4	19.9	24.5	28.7	27.4	24.9
	女	15.1	16.0	21.2	18.3	33.7	35.1	40.7	42.8
	計	11.8	17.7	15.6	19.5	26.9	30.4	31.2	30.7
症例数		924	1,107	1,089	1,538	1,644	1,392	1,616	1,309
乳房	男	94.6	90.1	100.0	72.8	96.6	99.8	50.0	100.0
	女	67.0	70.4	77.3	79.6	80.3	82.1	81.0	77.8
	計	67.1	70.5	77.4	79.6	80.3	82.2	81.0	77.8
症例数		1,342	1,393	1,103	791	716	789	615	593
子宮	男	-	-	-	-	-	-	-	-
	女	62.8	68.0	77.3	79.4	79.6	83.4	79.8	75.5
	計	62.8	68.0	77.3	79.4	79.6	83.4	79.8	75.5
症例数		88	120	111	96	107	139	145	165
甲状腺	男	92.3	71.1	62.3	80.9	63.3	92.4	83.3	75.0
	女	84.2	87.0	80.4	96.4	84.2	92.3	93.6	90.2
	計	86.3	83.3	75.6	93.0	79.0	92.3	91.0	87.3
症例数		32	43	65	150	212	187	289	377
リンパ腫	男	16.7	52.6	51.1	56.2	55.9	63.4	66.1	58.3
	女	25.4	53.8	47.6	46.0	55.9	76.8	78.3	74.0
	計	19.9	53.0	49.8	52.5	57.3	69.0	70.9	65.5
症例数		78	74	54	68	40	33	61	51
白血病	男	2.2	4.9	13.5	21.4	19.1	36.9	37.1	29.2
	女	0.0	6.2	21.4	13.6	12.7	32.2	46.2	37.0
	計	1.4	5.5	17.0	18.0	16.4	35.0	41.0	33.3

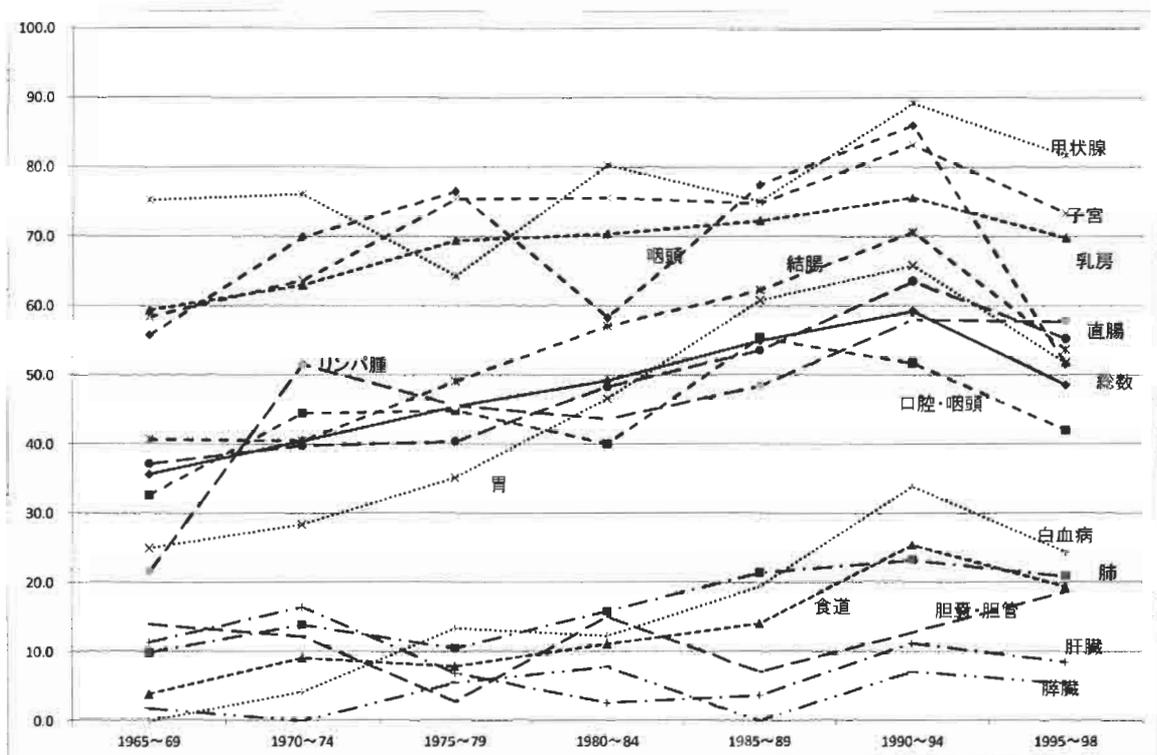
		10 年 生 存 率						
診断年		1965~69	1970~74	1975~79	1980~84	1985~89	1990~94	1995~98
症例数		7,624	7,726	6,788	6,839	6,944	6,819	6,381
全部位	男	25.8	28.7	31.2	36.4	43.7	46.5	37.0
	女	44.3	49.7	56.4	58.8	63.1	69.0	59.6
	計	35.7	40.5	45.5	49.2	55.0	59.2	48.6
症例数		288	290	224	207	285	340	430
口腔・咽頭	男	28.0	39.8	39.4	40.1	51.5	47.3	39.9
	女	42.2	51.3	55.2	40.6	62.6	63.3	46.8
	計	32.7	44.5	44.9	40.1	55.4	51.7	42.1
症例数		212	234	203	212	177	234	206
食道	男	3.3	8.2	7.2	11.1	12.5	22.5	16.6
	女	6.3	12.9	12.2	11.4	24.5	43.7	40.0
	計	3.9	9.1	7.9	11.1	14.1	25.4	19.4
症例数		2,516	2,040	1,735	1,558	1,423	1,212	962
胃	男	27.3	30.2	36.5	48.9	63.4	64.9	49.2
	女	20.6	25.1	33.0	42.7	56.4	67.4	57.4
	計	25.0	28.4	35.2	46.6	60.8	65.8	51.8
症例数		125	176	218	300	368	490	464
結腸	男	41.9	39.1	46.1	57.3	62.9	73.3	52.7
	女	38.9	42.4	53.2	56.9	61.4	67.3	55.1
	計	40.7	40.5	49.1	57.1	62.3	70.6	53.7
症例数		305	325	365	365	336	362	284
直腸	男	37.2	39.1	38.6	45.2	54.7	63.5	53.7
	女	37.1	40.6	43.6	53.0	52.1	63.0	57.9
	計	37.2	39.8	40.4	48.3	53.6	63.5	55.3
症例数		105	131	95	133	174	220	235
肝臓	男	7.2	13.9	6.1	3.2	3.6	9.8	7.3
	女	24.1	26.7	9.2	0.0	4.5	15.4	12.3
	計	11.4	16.5	6.9	2.6	3.7	11.2	8.5
症例数		45	74	41	76	76	68	75
胆嚢・胆管	男	6.5	11.9	0.0	22.9	5.2	18.4	27.5
	女	20.6	12.6	4.4	9.9	7.2	6.6	8.6
	計	14.0	12.2	2.8	15.1	7.1	12.8	18.7
症例数		59	90	97	93	92	105	111
膵臓	男	0.0	0.0	4.3	6.6	0.0	7.8	5.4
	女	4.6	0.0	10.6	11.7	0.0	5.9	5.4
	計	1.8	0.0	5.5	7.8	0.0	7.1	5.4
症例数		198	210	117	92	87	91	93
喉頭	男	56.0	69.0	80.8	60.4	78.0	84.9	52.2
	女	54.6	82.9	15.6	21.7	64.2	100.0	33.3
	計	55.8	69.9	76.5	58.3	77.5	86.0	51.6
症例数		549	654	628	723	765	792	872
肺	男	8.9	14.5	8.1	16.5	19.3	21.4	17.8
	女	12.9	12.1	16.8	14.2	27.3	28.1	28.4
	計	9.9	13.9	10.5	15.9	21.4	23.2	20.9
症例数		924	1,107	1,089	1,538	1,644	1,392	1,214
乳房	男	87.4	100.0	74.4	57.6	95.2	99.8	0.0
	女	59.4	62.8	69.4	70.4	72.2	75.5	69.8
	計	59.4	63.0	69.4	70.4	72.3	75.6	69.8
症例数		1,342	1,393	1,103	791	716	789	492
子宮	男	-	-	-	-	-	-	-
	女	58.4	63.7	75.4	75.6	74.8	83.2	73.4
	計	58.4	63.7	75.4	75.6	74.8	83.2	73.4
症例数		88	120	111	96	107	139	109
甲状腺	男	73.9	54.1	47.5	54.1	51.0	79.4	71.4
	女	75.7	82.8	70.3	87.3	82.8	91.1	85.2
	計	75.3	76.1	64.3	80.3	75.1	89.2	81.7
症例数		32	43	65	150	212	187	239
リンパ腫	男	19.2	51.0	46.3	48.3	45.9	51.3	51.7
	女	25.8	52.3	44.3	35.5	52.3	67.5	68.2
	計	21.5	51.5	45.6	43.7	48.4	58.0	57.7
症例数		78	74	54	68	40	33	41
白血病	男	0.0	5.0	10.1	11.0	23.4	33.0	20.0
	女	0.0	3.2	17.5	14.1	12.7	35.2	28.6
	計	0.0	4.2	13.4	12.3	19.4	33.9	24.4

※このグラフは、172・173ページのデータをもとに作成しています。

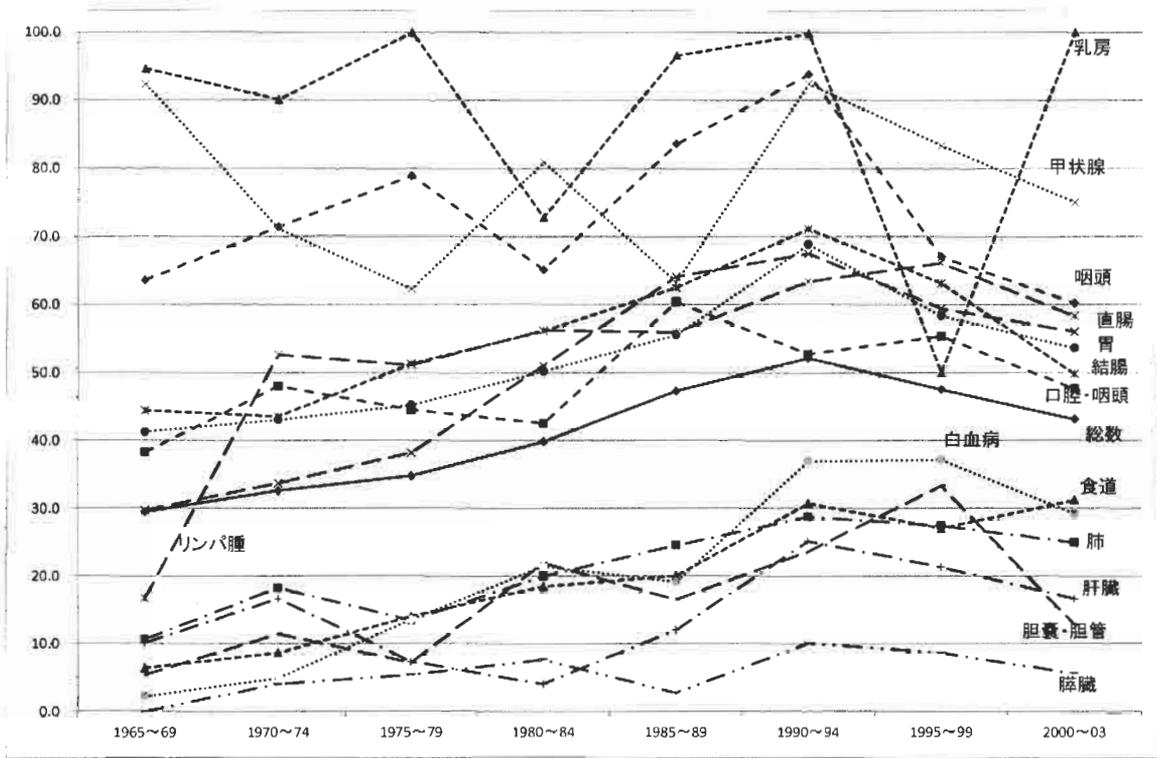
主要部位別 5年生存率（総計）



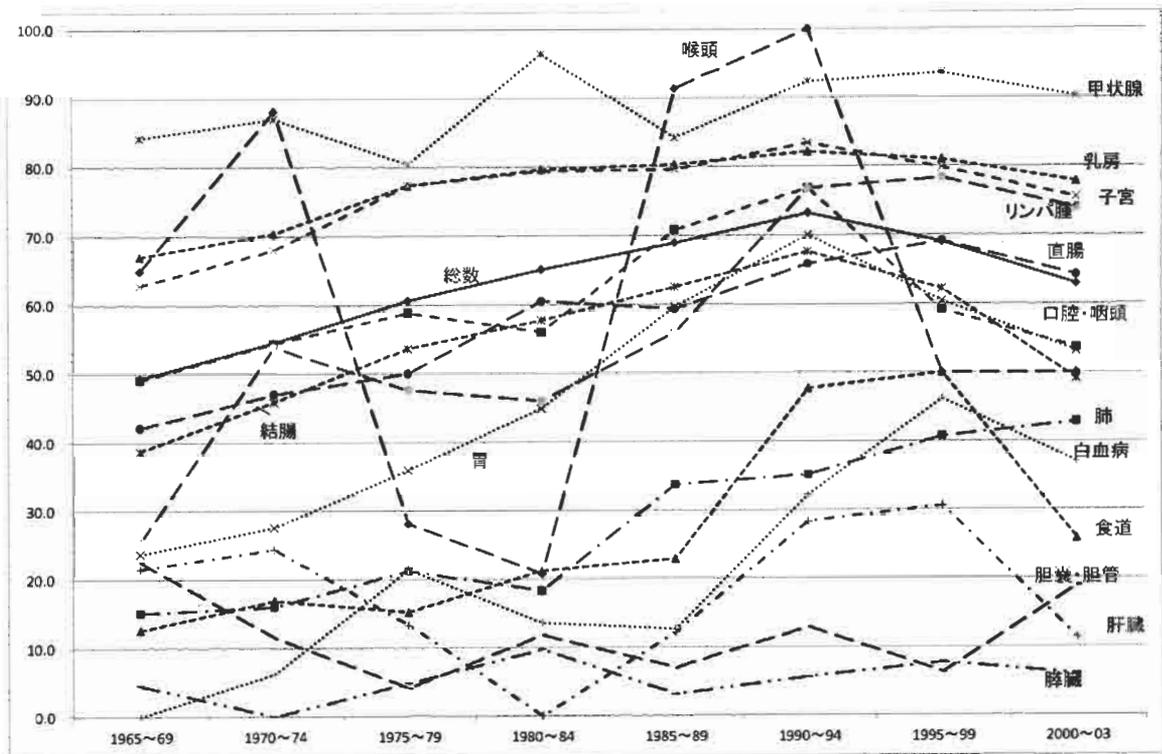
主要部位別 10年生存率（総計）



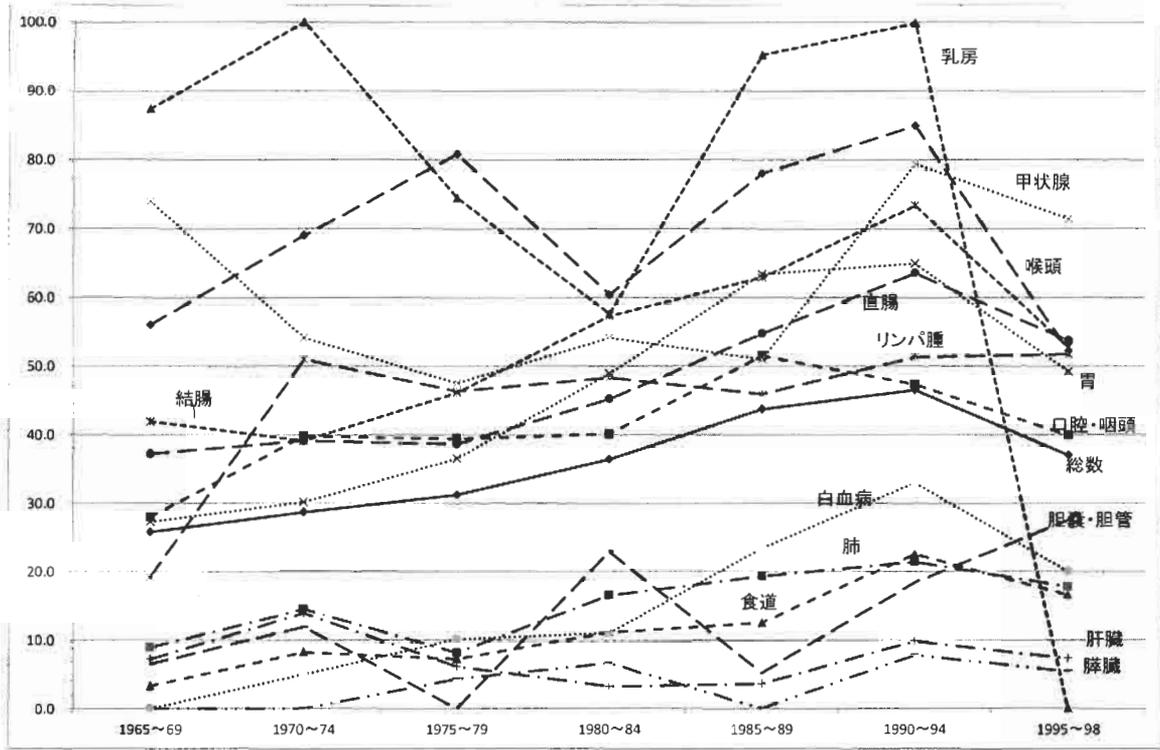
主要部位別 5年生存率（男計）



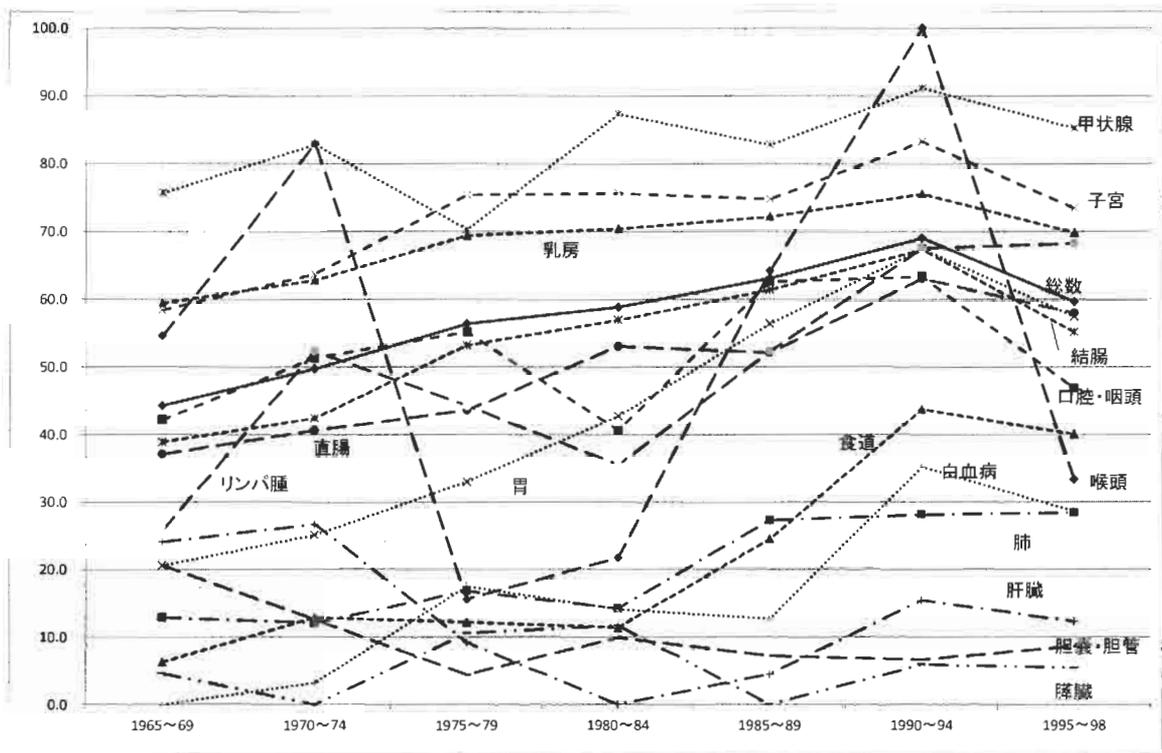
主要部位別 5年生存率（女計）



主要部位別 10年生存率（男計）



主要部位別 10年生存率（女計）



愛知県がんセンター年報第45号

愛知県がんセンター

名古屋市千種区鹿子殿1番1号
電話〈052〉762-6111番(〒464-8681)

Home Page: <http://www.pref.aichi.jp/cancer-center/>
